

大紛争
キリストとサタンの間
キリスト教の神権時代

エレン・ゴールド・ホワイト

『族長と預言者』、『時代の欲望』、『キリストへの道』、『イエスのたとえ』などの
著作の著者。

この作品の原語での聖書の引用はすべて、特に断りのない限り、聖書、新共同訳から引用しています。

序文

親愛なる読者の皆さん、この本は、罪や不幸や罪が存在することを伝えるために出版されたものではありません。この世の悲惨さ。

この本は、光と闇、罪と義、生と死、善悪の間に和解できない論争があることを伝えるために出版されたものではありません。私たちは心の奥底でこのことを知っており、自分たちがこの紛争の参加者、当事者であることを知っています。

しかし、私たち一人一人は、この途方もない戦争についてもっと知りたいという燃えるような欲求を抱くことがあります。どのようにして始まりましたか？または、彼女はいつもここにいましたか？その複雑な側面にはどのような要素が含まれているのでしょうか？私と彼女の関係は？

私の責任は何でしょうか？私は自分の選択でこの世界に生きているわけではありません。私にとって悪や善とは何を意味するのでしょうか？

関係する主な原則は何ですか？この紛争はいつまで続くのでしょうか？あなたの結末はどうなるのでしょうか？一部の科学者が言うように、地球は濃密で冷たく永遠の夜の深みに陥る可能性があるのだろうか？それとも、光で輝き、神の永遠の愛で温かくなる、より良い未来があるのでしょうか？

疑問はさらに深いです。私の心の中では、この対立、流入する利己主義と流出する愛の間の闘争は、どうすれば善の勝利によって永遠に解決されるのでしょうか？聖書には何と書いてありますか？それぞれの魂にとって永遠で重要なこの問題について、神は私たちに何を教えておられるのでしょうか？

このような疑問はあらゆる側面から私たちに突きつけられます。それらは私たちの心の奥底からしつこく湧き出てきます。そして彼らは決定的な答えを求めます。

確かに、私たちの内に、より良いものへの渴望、真理への欲求を創造された神は、この知識の必要性すべてに対する答えを私たちに差し控えることはありません。預言者たちよ。」

親愛なる読者の皆さん、この作品の目的は、悩める魂がこれらすべての問題に対する正しい解決策を見つけるのを助けることです。この本は、主が善い方であることを味わって発見し、神との交わりと御言葉の研究から、主の秘密は主を畏れる者たちにあり、主はそれを明らかにされることを学んだ人によって書かれました。彼の契約。

宇宙の生命が関係するこの非常に重要な紛争の内容を私たちがよりよく理解できるように、著者は過去20世紀の歴史から抽出した具体的かつ客観的な教訓を通じてそれを私たちに提示しました。

この本は、救いに来たカルバリの人を拒絶した後、神に選ばれた都市エルサレムの物語の悲しい最後の場面から始まります。その時以来、この本は国家の偉大な経過とともに、最初の数世紀に神の民が受けた迫害を指摘しています。その後起こった使徒教会の大背教。宗教改革によってもたらされた覚醒。そこでは紛争の主要な本質のいくつかが明確に明らかになっている。ひどい

フランスが正義の原則を拒否したことから得た教訓。聖書の復活と高揚、そしてその有益で命を与える影響力。終わりの日の宗教的な目覚め。それは、あらゆる闇の欺瞞の邪悪な反乱に対抗するための、光と知識の驚くべき啓示を伴う、神の言葉の輝かしい源の暴露です。

差し迫った現在の紛争は、重要な戒律が関係しており、誰も中立を選ぶことができないが、単純明快かつ精力的に暴露されている。

何よりも、私たちは善が悪に対する栄光ある永遠の勝利を示されています。

悪を乗り越え、闇を超えて光を、悲しみを超えて喜びを、死を超えて生を、絶望を超えて希望を、屈辱を超えて栄光を、そして復讐に満ちた憎しみを超えて永遠の忍耐強い愛を。

この本の以前の版は、多くの魂を真の羊飼いに導きました。この版が永遠の品としてさらに実りあるものとなるよう、編集者の祈りです。

編集者

導入

罪が始まる前、アダムは創造者との率直な交わりを楽しんでいたが、人間が罪を犯して神から離れて以来、人類はこの崇高な特権を剥奪された。しかし、救いの計画を通して、地球の住民が依然として天とのつながりを持つことができる道が開かれました。

神は御霊を通して人々と交わり、選ばれた僕たちになされた啓示を通して神の光が世界に当てられました。「人々は聖霊に駆り立てられて、神から語った」。(ペテロ第二 1:21)。

人類の歴史の最初の25世紀の間、文書による啓示はありませんでした。神から教えを受けた人々は自分の知識を他の人に伝え、それが父から子へと代々受け継がれてきました。書かれた言葉の準備はモーセの時代に始まりました。その後、神の靈感を受けた啓示は神聖な本に組み込まれました。この働きは、創造と律法の歴史家モーセから福音の崇高な真理の記録者ヨハネに至るまで、1600年という長い期間にわたって続けられました。

聖書はその著者として神を示していますが、それは人間の手によって書かれたものであり、さまざまな本のさまざまなスタイルで、多くの著者の特徴が表れています。啓示された真理はすべて神の靈感によるものですが(IIテモテ3:16)、それらは人間の言葉で表現されています。無限は、聖霊を通して、その僕たちの心と心に光を当てます。神は夢や幻、象徴や人物を通してご自身を現され、そのようにして真実が明らかにされた人々は人間の言語で思考を具体化しました。

十戒は神ご自身によって語られ、神の手によって書かれました。それらは神の作品であり、人間が作ったものではありません。しかし、聖書は神の靈感を受けた真理を人間の言葉で表現し、神と人間とのつながりを示しています。そのような結合は神の子であり人の子であるキリストの性質の中に存在していました。これは聖書にも当てはまりますし、キリストにも当てはまります。「言葉である方が肉となって私たちの中に生きられた」のです。(ヨハネ 1:14)。

立場や職業、知的・霊的素養が大きく異なる人々によって、さまざまな時期に書かれた聖書は、その文体や説明される主題の性質の多様性において顕著な対照を示しています。作家によって表現方法が異なります。

多くの場合、同じ真実が、別の著者よりもある著者によってより印象的に提示されます。さまざまな作家が主題をさまざまな側面や関係で提示しているため、表面的で不注意な読者には矛盾または矛盾しているように見えるかもしれませんが、注意深く敬虔な学生は彼らの文章の中に最も明確な洞察を見出し、その根底にある調和を識別するでしょう。

さまざまな人物を通して提示される真実は、その多様な側面で示されます。作家は主題のある側面に最も強く印象に残ります。彼は、自分の経験や認識と評価の能力と調和する点をピックアップします。別の側面に焦点を当てている人もいます。そして、それぞれが聖霊の導きの下で、最も説得力を持って心に印象を与えるものを提示します。それぞれの真実の異なる特徴ですが、それらすべての間の完璧な調和です。そして、このようにして明らかにされた真実は結合して完璧な全体を形成し、人生のあらゆる状況や経験における人間のニーズを満たすように適応されます。

神は人間の代理を通して喜んでご自身の真理を世界に伝え、また神ご自身が聖霊を通して人間に資格を与え、この働きができるようにしてくださいました。彼は人間の心を、何を話し、何を書かかを選択するよう導きました。宝は地上の器に預けられていますが、依然として天にあり、その証しは人間の言葉の不完全な表現によって与えられていますが、それは神の証しであり、従順で信頼する神の子はその中に力の栄光を見るのです。神聖で、恵みと真実に満ちています。

神は御言葉の中で、救いに必要な知識を人間に託されました。聖書は、権威ある、間違いのない神の意志の啓示として受け入れられなければなりません。それらは人格の基準であり、教義を明らかにし、経験を試すものです。「聖書はすべて神の靈感によるものであり、神の人があらゆる良い業に備え、十分に備えることができるように、教え、戒め、矯正し、義を訓練するのに有益です。」（IIテモテ 3:16 と 17）。

しかし、神が御言葉を通して人間に御心を明らかにされたという事実は、聖霊の継続的な臨在と導きを不必要にするものではありません。それどころか、聖霊は、その教えを明確にし、適用するために、御言葉をその僕たちに明らかにすることを救い主によって約束されました。そして、聖書に靈感を与えたのは聖霊であるため、聖霊の教えが御言葉の教えに反するということはありません。

聖書は、神の言葉がすべての教えと経験が試されるべき基準であると明確に宣言しているため、聖霊は聖書に代わるものとして与えられたわけではありませんし、また与えることもできませんでした。使徒ヨハネはこう述べています。「愛する人たち、すべての霊を信じるのではなく、霊が神から出たものであるかどうかを試してみてください。多くの偽預言者が世に出てきているからです」。（ヨハネ第一 4:1）。

そしてイザヤはこう宣言します。この言葉に従って語らなければ、彼らは決して光を見ることができませんでしょう。」（イザヤ 8:20）。

啓蒙を主張し、神の言葉の導きはもう必要ないと主張する階級の誤りによって、聖霊の働きには大きな非難が向けられている。それに属する人々は、魂の中で神の声であると考えられる印象によって支配されます。しかし、彼らを支配する霊は神の霊ではありません。聖書の印象にこのように不用意に従うことは、混乱、欺瞞、そして破滅につながるだけです。それは邪悪な者の計画を有利にするだけです。聖霊の働きはキリストの教会にとって非常に重要であるため、これは聖霊の働きを軽蔑し、神の民がその働きを無視するように導くために、過激派や狂信者の誤りを通して行われたサタンの欺瞞の一つである。主ご自身が備えてくださった力の源。

神の言葉と調和して、神の霊は福音主義の神権時代の全時代を通じて働きを続けた。両約聖書の聖書が与えられている間、聖典に組み込まれる啓示に関係なく、聖霊は個人の心に光を伝えることをやめませんでした。聖書自体は、聖書の伝達とは関係のない事柄について、人々がどのようにして聖霊を通して警告、戒め、助言、指示を受けたかを報告しています。さまざまな時代の預言者が言及されていますが、その発言は記録されていません。同様に、聖典が閉じられた後も、聖霊は神の子たちを啓発し、戒め、慰める働きを続けました。

イエスは弟子たちに次のように約束されました。「しかし、父がわたしの名によって遣わされる相談者、聖霊は、あなたたちにすべてのことを教え、わたしがあなたたちに話したすべてのことを思い出させてくれるでしょう。」（ヨハネ 14:26）。「しかし、真理の御霊が来るとき、彼はそうするでしょう。」

あなたをすべての真実へと導き、これから何が起こるかを教えてくれるでしょう。」（ヨハネ 16:13）。聖書は、これらの約束は使徒時代に限定されるものではなく、あらゆる時代のキリストの教会に及ぶことを明確に教えています。救い主は追隨者たちに、「わたしは世の終わりまで、いつもあなた方とともにいます」と約束されました。（マタイ 28:20）。そしてパウロは、聖霊の賜物と現れが教会で「聖徒たちを宣教の働きに備えさせるため、そして、わたしたち全員が信仰と知識の一致に達するまで、キリストの体が建てられるようにするために」なされたと宣言しています。神の子として生まれ、成熟し、キリストの満ち足りた程度に達するのです。」（エペソ4:12,13）。

使徒はエペソの信者のために次のように祈りました。また、あなたがたの心の目が啓発され、神が私たちに招いてくださった希望と、信じる私たちに対する神の計り知れない偉大な力を知ることができるように祈ります...」（エフェソス 1:17）-19）。神の御言葉の奥深い事柄への理解に光を与え、心に開かれる神聖な御霊の働きは、パウロがエフェソス教会のために祈った祝福でした。

ペンテコステの日の聖霊の素晴らしい現れの後、ペテロは人々に悔い改めと罪の赦しのためにキリストの名においてバプテスマを受けるよう勧めました。そして彼はこう言いました。「...そして彼らは聖霊の賜物を受けるでしょう。その約束は、あなたとあなたの子供たち、そして遠く離れたすべての人たち、そして私たちの神、主が召されるすべての人たちに与えられているからです」（使徒2:38,39）。

神の大いなる日の場面に直接関連して、主は預言者ヨエルを通して、御霊の特別な現れを約束されました(ヨエル2:28)。この預言はペンテコステの日の聖霊の注ぎによって部分的に成就したが、福音の働きが完了する神の恵みの現れによって完全に実現されるだろう。

善と悪の間の大きな対立は、終末まで激しさを増していきます。あらゆる時代において、サタンの怒りはキリストの教会に対して明らかにされてきました。神は人々が悪の力に立ち向かえるように強めるために、人々に恵みと御霊を与えられました。キリストの使徒たちが福音を世界に伝え、将来の世代のためにそれを記録しようとしたとき、彼らには特に御霊の輝きを与えられました。しかし、教会が最終的な救出に近づくにつれ、サタンが大きな力で活動します。彼は「自分に残された時間がほとんどないことを知り、大きな怒りに満たされて」下っていきます。（黙示録 12:12）。彼は「全力を尽くして、しるしと人を欺く奇跡をもって」働きます(IIテサロニケ2:9)。かつて天使の中で最高位にあったこの特権的な精神は、六千年にわたり、欺瞞と破滅の働きに専念してきた。そして悪魔のような能力と繊細さのすべての深みを獲得し、

世俗の戦いで培われた残虐行為はすべて、最後の紛争において神の民に対して実行されるでしょう。この危機の時代に、キリストに従う者たちは主の再臨の警告を世界に宣言しなければなりません。そして民は、神の再臨の際に「傷もなく、とがめもなく」神の前に立つ備えをしておかなければなりません。

（ペテロ第二 3:14）。その時、神の恵みと力という特別な賜物が、使徒時代と同様に教会にとって必要となるでしょう。

聖霊の照らしによって、善と悪の間の長い争いの現場がこれらのページの著者に開かれました。時折、私は、命の君であり、私たちの救いの創造主であるキリストと、最初の罪の創造者である悪の君であるサタンとの間の大論争が、さまざまな時代で展開していることを熟考することを許されてきました。神の聖なる律法の違反者。神の律法の原則に対する同じ憎しみ、間違いを引き起こす同じ欺瞞の戦略

が真実であるかのように思われること、人間の法律が神の法律に優先すること、人間が創造主ではなく被造物を崇拜するように導かれていることは、過去の歴史を通して描写することができます。神の性質を誤って伝え、人々に創造主についての誤った概念を抱かせ、それによって神を愛ではなく恐れと憎しみの目で見られるように仕向けようとする悪魔のような取り組み。神の律法を疎外し、人々にその主張から自由だと思わせるよう導き、その欺瞞に敢えて抵抗する人々を迫害しようとする彼らの努力は、あらゆる時代において着実に続いている。それらは族長、預言者、使徒、殉教者、改革者の歴史の中に見ることができます。

最後の大きな争いにおいて、サタンはこれまでのすべての時代と同様に、同じ政策を採用し、同じ精神を示し、同じ目的に向かって働くであろう。かつてあったものは、これからもそうなるだろうが、これからの闘争は、世界がこれまでに見たことのないほどの恐ろしい激しさを特徴とするだろう。サタンの欺瞞はより巧妙になり、攻撃はより断固としたものとなるでしょう。可能であれば、彼はまさに選ばれた人々を欺くでしょう(マルコ13:22)。

神の御霊が御言葉の偉大な真理と過去と未来の情景を私の心に明らかにしてください。くださったとき、私はそのようにして私に明らかにされたことを他の人に知らせよう、つまり過去数世紀にわたる論争の歴史を概説するよう命じられました。そして、差し迫った将来の闘争に光を当てるために、特にそれを提示する。この目的を念頭に置いて、私は、さまざまな時期に世界に宣言され、教会の怒りを引き起こした偉大で試練の真理の展開を追跡するために、教会の歴史の中で起こった出来事を選択しグループ化することに努めてきました。サタンは世を愛する教会の敵意を引き起こしましたが、その反感は「死に直面しても自分の命を愛さなかった」(黙示録 12:11)人々の証言によって支えられてきました。

これらの記録には、目の前の紛争の予兆を見ることができます。それらを神の御言葉の光と御霊の照らしに照らして分析することによって、私たちは邪悪な者の計画と、主の御前に「必ず」見出される人々が避けるべき危険を明らかにすることができます。到来。

過去数世紀における宗教改革の進歩を特徴づけた偉大な出来事は、プロテスタント世界ではよく知られており、広く認識されている歴史的な事柄です。これらは誰も否定できない事実です。私は、本の長さや必然的に守らなければならない簡潔さに従って、この話を簡潔に提示しました。事実は、その応用の適切な理解と一致していると思われるため、短いスペースに凝縮されました。歴史家が出来事をグループ化して主題の広範な見解を要約したり、詳細を適切に要約したりする場合には、彼の言葉が引用されています。しかし、いくつかのケースを除いて、特定のクレジットは与えられませんでした。なぜなら、それらは、この著者を権威として引用する目的で引用されたのではなく、彼の声明がこの主題について迅速かつ説得力のあるプレゼンテーションを提供しているためです。宗教改革の働きを私たちの時代に引き継いだ人々の経験と見解を記録する際に、彼らの出版された著作が時折同様に利用されてきました。

この作品の目的は、原始時代の戦いに関する新しい真実を提示することではなく、将来の出来事に影響を与える事実や原則を明らかにすることです。しかし、光と闇の勢力間の争いの一部として見られると、これらすべての過去の記録は新たな意味を帯びるように思えます。そして彼らを通して光は未来に当てられ、過去の改革者たちと同じように、たとえ失う危険を冒してでも「神の言葉とイエス・キリストの証し」を証しするよう求められる人々の道を照らします。すべての地上の品物。

この本の目的は、真実と誤りの間の大論争の現場に光を当てることです。それはサタンの策略と、サタンにうまく抵抗するための手段を明らかにすることです。それは、悪という大きな問題に満足のいく解決策を提示し、罪の起源と最終的な性質に光を当てるとともに、被造物に対するあらゆる取り扱いにおいて神の正義と慈悲を完全に明らかにすることである。そして神の律法の神聖で不変の性質を示します。それは、その影響によって魂が闇の力から解放され、「光の聖徒たちの相続にあずかる者」となり、私たちを愛し、私たちのためにご自身を捧げた神を讃えるためです。これが作者の切なる願いです。

エレン・グールド・ホワイト

第1章

エルサレムの破壊

「ああ！あなたも、少なくともあなたの今日のこの日に、何があなたの平和に属するかを知っていれば！しかし今、それはあなたの目から隠されています。なぜなら、あなたの敵があなたを塹壕で取り囲む日があなたを襲うからです。「彼らはあなたを包囲し、四方八方からあなたを打ち倒すでしょう。そして彼らはあなたとあなたの中にいるあなたの子供たちを打ち倒します。そして彼らはあなたの中に石を次々と残さないでしょう。なぜならあなたはあなたの訪問の時間を知らなかったからです。」（ルカ 19:42-44）。

イエスはオリーブ山の頂上からエルサレムを見つめました。彼の前に広がっていたのは美しく平和な光景でした。それは過越の祭りの時期であり、ヤコブの息子たちはあらゆる国からそこに集まり、偉大な国民の祭りを祝いました。庭園、ブドウ畑、巡礼者のテントで占められた緑の斜面の真ん中に、堤防で囲まれた丘、堂々とした宮殿、そしてイスラエルの首都の巨大な要塞が立っていた。シオンの娘は、「私は女王として座っているので、泣くのは見られない」と誇りを持って言ったようで、当時と同じように美しく、何世紀も前に王室の吟遊詩人だったときのように、天の恵みを確信していると思っていました。彼はこう歌っていた。「この場所としては美しく、全地球の喜びはシオンの山…偉大な王の都市である。」（詩 48:2）。壮大な寺院の建物が全景にそびえ立ちました。夕日の光が大理石の壁の雪のような白さを照らし、黄金の門、塔、尖塔から輝いていました。彼が立っていた「完璧な美」とは、ユダヤ民族の誇りだった。イスラエルの息子がこの光景を見て、喜びと驚きのスリルを感じることができたでしょうか？しかしイエスの心は別の考えで占められていました。「彼は来て、都を見て、そのことで泣いた。」（ルカ 19:41）勝利の入場を世界中が歓喜する中、ヤシの枝が揺れ、喜びに満ちたホサナの声が丘に響き渡り、何千もの声が響き渡りました。「王、世界の救い主であると宣言された彼は、突然の不可解な悲しみで抑圧されているように感じました。神の御子、イスラエルの約束された方、その力が死を克服し、墓の中から捕虜を呼び戻された彼は、涙を流していました。それは共通の悲しみの結果ですが、強烈で抑えられない苦痛の結果でもあります。

彼の涙は彼自身のためではありませんでした。なぜなら、彼は自分の歩みがどこに向かうのかをよく知っていたからです。イエスの目の前にはゲッセマネがあり、そこはイエスの来るべき苦しみの現場でした。羊の門も視界にあり、何世紀にもわたって犠牲者たちがそこを導かれてきました。この門は、イエスが「屠殺に導かれた子羊のように」（イザヤ書53:7）おられたときに、主に開かれることになっていました。それほど遠くないところに、十字架の現場であるカルバリがありました。キリストが間もなく歩もうとしている道には、キリストが自らの魂を罪のいけにえとして捧げられたため、大きな暗闇の恐怖が襲いかかることになる。しかし、この喜びの時にイエスに影を落としたのは、これらの情景の熟考ではありませんでした。イエスの超人的な苦悩を微塵も感じず、その無私な精神は曇りませんでした。イエスは、エルサレムで数千人の有罪判決を受けた人々の運命を思い、涙を流されました。それは、イエスが祝福し救うために来た人々の盲目と悔い改めのせいでした。

千年以上にわたる神の選ばれた民に対する特別な恵みと保護の物語がイエスの目に開かれました。そこには約束の子が従順な犠牲者として祭壇に縛り付けられていたモリヤ山があり、それは神の御子の捧げ物の象徴であった(創世記22:9)。そこでは祝福の契約と輝かしい救世主の約束が信者の父に確認されました。

(創世記 22:16-18)。そこでは、オルナンの脱穀場から天に昇る犠牲の炎が、破壊する天使の剣を跳ね返していました(歴代誌21章)。これは、救い主の犠牲と罪ある人々の調停の象徴としてふさわしいものでした。エルサレムは全地よりも神によって崇められていました。主は「ご自分の住まいとして望んだシオンを選ばれました(詩132:13)。そこでは何世紀にもわたって、聖預言者たちが警告のメッセージを伝えてきました。その祭司たちは香炉を振り、参拝者の祈りとともに香の雲が神の前に立ち上った。そこでは毎日、神の小羊を指し示す屠られた子羊の血が捧げられました。そこでエホバは憐れみの座の上の栄光の雲の中でご自身の臨在を明らかにされました。そこには地球と天を結ぶ神秘的なはしごの基礎があり(創世記28:12、ヨハネ1:51)、それによって神の天使たちが下りたり上り、世界に至聖所への道を開いたのです。もしイスラエルが国家として天との契約を守っていたら、エルサレムは永遠に神の選民として残っただろう(エレ17:21-)

25)。しかし、恩恵を受けた人々の歴史は背教と反逆の記録でした。彼らは天の恵みに抵抗し、特権を乱用し、機会を軽蔑していました。

イスラエルは神の使者たちを嘲笑し、神の言葉を軽蔑し、預言者たちを虐待していましたが(歴代36:16)、神はなおご自身を「主、憐れみ深く慈しみ深く、怒りに遅く、愛と愛に満ち溢れた神」として彼らに現されました。真実です。」(出エジプト記 34:6)。度重なる拒絶にもかかわらず、彼の慈悲は嘆願することなく続けられました。神は、自分の世話をする子供に対する父親の愛よりも敬虔な愛を持って彼らに「御言葉は、御自分の使者たちによって、早起きして彼らを送りました。神はご自分の民とご自分の住まいを憐れんでくださったからです」。

(歴代誌36:15)。戒め、嘆願、叱責がうまくいかなかったとき、神は彼らに天からの最も貴重な贈り物を送りました。さらに、彼はその一つの贈り物に天のすべてを注ぎました。

神の御子ご自身が、悔い改めない都に嘆願するために遣わされました。イスラエルを良いぶどうの木のようにエジプトから導き出したのはキリストでした(詩80:8)。彼自身の手で異邦人を彼らの前から追い出しました。彼はそれを「肥沃な丘の上」に植えました。彼の父親の世話により、その周りに柵が作られていました。彼は彼女の世話をするために召使いたちを送りました。「私のブドウ畑に対して、私がしていないこと以上に何ができるでしょうか？」と彼は叫びます。神がブドウが実ると予想したとき、山ブドウが実っていたので(イザヤ書 5:1-4)、まだ実を結ぶことを望みながら、イエスは自らブドウ園に来られました。彼はその周りを掘り、剪定し、丁寧に扱い、ご自身が植えたこのブドウ畑を救うためにたゆまぬ努力を続けられました。

三年間、光と栄光の主はご自分の民の間を歩き来しました。彼は「善を行ない、悪魔に抑圧されているすべての人をいやし」(使徒10:38)、心の傷ついた人を慰め、投獄されている人を解放し、目の見えない人の視力を回復し、足の不自由な人を歩かせ、人の言うことを聞きました。耳の聞こえない人、らい病人を清め、死者を蘇らせ、貧しい人たちに福音を宣べ伝えました(ルカ4:18、マタイ11:5)。これらすべての階級に同様に、「すべて働き、重荷を負っている者よ、わたしのもとに来なさい。わたしはあなたたちを休ませてあげよう。」という慈悲深い招きが与えられた。(マタイ 11:28)。

イエスの善には悪が報われ、愛には憎しみが報われたにもかかわらず(詩109:5)、イエスは憐れみの使命を断固として続けました。神の恵みを求めた人々は決して反発されませんでした。ホームレスの旅人であった私たちの主は、屈辱と貧乏を日々の糧として、人間の必要に応え、人間の苦悩を軽減し、命の賜物を受け入れるよう人々に訴えるために生きられました。頑なな心にはね返される慈悲の波

彼らは、より強い敬虔で言葉では言い表せない愛の波となって戻ってきました。しかし、イスラエルは彼女の親友であり唯一の助け手である彼女から背を向けていました。神の愛の嘆願は軽蔑され、彼の勧告は無視され、彼の警告は嘲笑されました。

希望と許しの時間はあっという間に過ぎ去りました。長い間差し控えられていた神の怒りの杯は、ほぼ満杯になった。何世紀にもわたる背教と反逆によって積み積もった雲は、いまや不幸を抱えて、罪を犯した民に襲い掛かろうとしていました。そして、差し迫った破滅から彼らを救うことができる唯一の人は、軽蔑され、侮辱され、拒絶され、そして十字架につけられました。

キリストがカルバリの十字架に吊り下げられたとき、神に好意され祝福された国家としてのイスラエルの時代は終わりました。たった一人の魂の喪失だけでも、全世界の利益や富よりも無限に大きな災難です。しかし、キリストがエルサレムをご覧になったとき、かつては神に選ばれたものであり、神の私有財産であった都市全体、国家全体の廃墟が彼の前に横たわっていました。

預言者たちはイスラエルの背教と、彼らの罪がもたらした恐ろしい荒廃を嘆いていた。エレミヤは、自分の目が涙の源となることを望みました。そうすれば、亡くなった民の娘のため、捕らえられた主の群れのために、昼も夜も泣くことができます（エレ9:1,13:17）。それでは、何年ではなく何世紀にもわたって預言的な視線を向けられた方の苦しみは何だったのでしょうか！彼は、長い間エホバの住まいであった都市に対して剣を振りかざす破壊の天使を見つめました。後にタイタスとその軍隊が占領したのと同じ地点であるオリブ山の頂上から、彼は谷の向こう側にある神聖な中庭と柱廊玄関を眺め、涙で曇った目で恐ろしい視点で、城壁が取り囲んでいるのを見た。外国のホストによる。彼は戦争に向けて動き出す軍隊の足音を聞いた。そして包囲された街の中でパンを求めて叫ぶ母親と子どもたちの声も。キリストは神聖で美しい神殿、宮殿、塔がすべて炎に焼かれ、そこには煙を吐き出す廃墟の山だけが立っているのをご覧になりました。

イエスは時代を見下ろしながら、荒れ果てた海岸に難破した船の残骸のように、契約の民が各地に散らばっているのを見ました。エルサレムの子供たちに降りかかろうとしているこの世の報復の中で、キリストは、最後の審判の際に人々が沈殿物に注ぎ出さなければならない怒りの杯の最初の一口をご覧になりました。神の憐れみと優しい愛は、次の悲しい言葉の中に表現されています。「エルサレム、エルサレム、預言者を殺し、あなたに遣わされた者たちを石で打ち殺す！雌鶏が翼の下に雛を集めるように、私は何度あなたの子供たちを集めただろうか？そしてあなたはそれを望まなかったのです！」（マタイ 23:37）。おお！もしあなたが、他の何よりも恵まれた国民として、あなたの訪問の時期とあなたの平和に属する事柄を知っていたら！私は正義の天使を拘束し、あなたに悔い改めるよう勧めましたが、無駄でした。あなたが反発し拒絶したのは、単なる召使い、使者、預言者ではなく、イスラエルの聖者、あなたの救い主です。あなたが破壊されたら、あなただけが責任を負います。「そして、あなたがたは、命を得るためにわたしのもとに来ないのです。」（ヨハネ 5:40）。

キリストはエルサレムに、不信仰と反逆でかたくなになり、神の報復的な裁きに向かって急いで向かう世の象徴を見ました。墮落した種族の不幸が彼の魂を圧迫し、彼の口からこの苦々しい叫びが溢れ出た。彼は人間の悲惨さ、涙、血の中にたどられる罪の記録を見ました。彼の心は地球の苦しみと苦しみに対する限りない慈悲の念に動かされ、それらすべてを軽減したいと切望していました。しかし、神の手でさえ人類の不幸の流れを逆転させることはできず、唯一の支えを求める人はほとんどいなかった。彼は救いを手の届くところにもたらすために、死の中で自らの魂を注ぎ出すことをいとわなかった。

しかし、命を得るために主のもとに行く人はほとんどいません。

涙を流す天国の陛下！無限の神の御子は霊的に悩み、苦しみの中でひれ伏しました！この光景は天国全体を驚きで満たしました。それは私たちに罪の途方もない悪性を明らかにします。たとえ無限の力があっても、神の律法違反の結果から罪を犯した人を救うことがいかに難しいかを示しています。

イエスは最後の世代を見て、世界がエルサレムの破壊を引き起こしたのと同じような欺瞞に包まれているのを見ました。ユダヤ人の大きな罪はキリストを拒絶したことでした。キリスト教世界の大きな罪は、天と地における神の統治の基礎である神の律法を否定することでしょう。エホバの戒めは軽蔑され、無意味なものとなされるでしょう。罪の束縛にさらされ、第二の死に苦しむ運命にあるサタンに隷属する何百万人もの人々は、彼の訪問の日に真理の言葉を聞くことを拒否するでしょう。ひどい失明！奇妙なナンセンス！

復活祭の2日前、キリストが最後に神殿を出たとき、ユダヤ人の指導者たちの偽善を非難した後、再び弟子たちとともにオリーブ山に行き、そこから草が生い茂った斜面に彼らと一緒に座りました。街のパノラマビュー。もう一度彼はその城壁、塔、宮殿を観察した。

もう一度、神殿の魅惑的な素晴らしさ、神聖な山の頂を飾る美しさの王冠をじっくりと眺めてみましょう。

1000年前、詩編作者は聖家をご自身の住まいとすることで、イスラエルに対する神の恵みをさらに強調し、「サレムに神の幕屋があり、シオンに神の住まいがある」と述べました。（詩 76:2）。彼は「ユダの部族、つまり彼が愛したシオンの山を選びました。そして彼は自分の聖所を高さ所として建てました。」（詩 78:68と69）。最初の神殿はイスラエルの歴史の中で最も繁栄した時代に建てられました。

この目的を達成するために、ダビデ王は膨大な宝を蓄え、その建設計画は神の靈感によって立てられました（歴代誌28:12、19）。イスラエルの君主の中で最も賢明なソロモンがその仕事を完成させた。この寺院は、世界がこれまで見た中で最も壮麗な建物でした。しかし、主は預言者ハガイを通して、第二の神殿に関して、「この最後の家の栄光は最初の家の栄光よりも大きくなるであろう」と宣言されました。「わたしはすべての国民を震え上がらせ、すべての国民の願いが来て、わたしはこの家を栄光で満たす、と万軍の主は言われる。」

（ハガイ 2:9 および 7）。

ネブカドネザルによって神殿が破壊された後、キリストの誕生の約 500 年前に、長い捕虜から破壊され、ほとんど無人となった国に戻ってきた人々によって再建されました。そのとき、彼らの中には、ソロモンの神殿の栄光を見た老人たちがいて、新しい建物の基礎が築かれているときに、それが最初のものよりはるかに劣っていると考えて泣いた人もいました。この支配的な感情は預言者によって効果的に説明されています：「あなたたちの中に、この家に残って最初の栄光を見た人はいるのでしょうか。そして、あなたは今それをどう見えていますか？」

あなたがたの目には、これに比べれば何のこともないではないか」（ハガイ 2 : 3、エズル 3 : 12）。

そして、この最後の家の栄光は最初の神殿の栄光よりも大きくなるという約束が与えられました。

しかし、2 番目の神殿は、壮麗さにおいて最初の神殿に匹敵することはできませんでした。また、ソロモンの神殿で起こった神の臨在の目に見える兆候によって神聖化されたわけでもありませんでした。彼の献身を示すような超自然的な力の発現はありませんでした。新しく建てられた聖域を満たす栄光の雲は見られませんでした。祭壇上の犠牲を焼き尽くすために天から火が降ってくることはありませんでした。「シェキナ」はもはや至聖所のケルビムの間に住んでいませんでした。箱舟も、救世主の座も、証言の石板も、もはやそこにはありませんでした。尋ねる祭司にエホバのご意志を知らせる声は天から聞こえませんでした。

何世紀にもわたって、ユダヤ人はハガイを通してなされた神の約束が果たされたことを証明しようと努めてきましたが、無駄でした。しかし、プライドと

不信仰のために彼らの心が見えなくなり、預言者の言葉の本当の意味が見えなくなりました。第二の神殿はエホバの栄光の雲によってではなく、神性の満ち足りた肉体が宿る神の生きた臨在によって讃えられました。神ご自身が肉において現されたのです。実際、ナザレの人が神聖な法廷で教え、癒しを行ったとき、「すべての国民の願い」が彼の神殿にやって来ました。キリストの臨在によって、そしてそれだけで、第二の神殿は栄光において第一の神殿を上回りました。しかしイスラエルは、捧げられた天の賜物を自分たちから取り上げ、その日黄金の門を去った謙虚な主とともに、栄光は永遠に神殿から去ってしまいました。その時、救い主の言葉が成就した。「見よ、あなたの家は荒れ果てたままにされるであろう。」（マタイ 23:38）。

弟子たちは、予告されたキリストに対して恐れと驚きでいっぱいでした。神殿の崩壊を知り、神の言葉の意味をもっと完全に理解したいと望みました。その素晴らしさをさらに高めるために、40年以上にわたって富、労働、建築技術が惜しみなく費やされました。ヘロデ大王はローマとユダヤ人の両方の富を彼に惜しみなく注ぎ込み、世界の皇帝さえも彼の賜物で彼を富ませました。この目的のためにローマから直接持ち込まれた、ほとんど素晴らしい寸法の白い大理石の巨大なブロックがその構造の一部を形成しました。弟子たちはあるじの注意を自分たちに向けて、「石と建物を見てください！」と言った。（マルコ 13:1）。

これらの言葉に対して、イエスは厳かで印象的な答えを与えられました。「真実に言いますが、ここには、投げ落とされない石の上に石が積み重なることはありません。」（マタイ 24:2）。

エルサレムの崩壊に弟子たちは、宇宙帝国の王位に就き、悔い改めないユダヤ人を罰し、国民をローマのくびきから解放するために、キリストがこの世の栄光のうちに個人的に來臨した出来事を連想させました。主は彼らに、二度目に來ると告げられました。したがって、エルサレムに対する裁きのことを聞くと、彼らの心は來るべき裁きのことに向かい、オリーブ山に救い主とともに集まったとき、こう尋ねた。世界の終わりが來るのですか？」（マタイ 24:3）。

弟子たちには容赦なく将来がベールに包まれていました。もし当時彼らが二つの恐ろしい出来事、すなわち救い主の苦しみと死、そして彼の都市と神殿の破壊を十分に理解していれば、彼らは恐怖に圧倒されただろう。キリストは彼らの前に、時の終わりまでに行われる重要な動きの概要を提示されました。したがって、彼の言葉は完全には理解されませんでした。しかし、その意味は、神の民が彼らに与えられた教えを必要とするときに明らかにされることになっていました。イエスが発表された預言は、その意味において2つの意味を持っていました。それはエルサレムの破壊を予告するものであった一方で、エルサレムの恐怖を予告するものでもありました。

最後の大事な日。

イエスは、自分の話を聞いていた弟子たちに、背教したイスラエルに降りかかるであろう裁き、特にメシアの拒絶と十字架に対する彼らに降りかかるであろう報復について宣言されました。恐るべきクライマックスの前に、紛れもない兆候が現れるだろう。恐ろしい時は突然、そして急速に訪れるだろう。そして救い主はご自分の追隨者たちに次のように警告されました。「預言者ダニエルが語った、忌まわしい荒廃が聖所に立っているのを見たとき（読む人には理解してもらいましょう）、ユダヤにいる者たちは山に逃げなさい。」（マタイ 24:15 と 16、ルカ 21:20）。偶像崇拜のローマの基準が、市壁を越えて数百ヤードに広がった聖地で高められたとき、キリストの追隨者たちは安全な飛行を見つけなければなりません。警告の兆候が見えたとき、逃げようとする人々は長居することはできませんでした。エルサレムだけでなくユダヤでも、逃亡の合図には直ちに従わなければなりませんでした。結局そうなった人は

たとえ自分の最も貴重な宝物を守るためであっても、家の屋根に降りるべきではありません。畑やブドウ園で働いている人は、日中の暑い中で働いている間に脱ぎ捨てられる上着を取りに戻るのに時間を取るべきではありません。全体的な破壊に巻き込まれないように、一瞬でもためらってはなりません。

ヘロデの治世下、エルサレムは大きく美化されただけでなく、塔、城壁、要塞の建設により、その地理的位置の自然な強さが加わり、都市は征服不可能であるように見えました。当時、その破壊を公に予言していた者は、当時のノアのように、狂った警戒主義者と呼ばれただろう。しかしキリストは、「天と地は滅びるが、わたしの言葉は滅びない」と言われました。（マタイ 24:35）。彼らの罪と頑固な不信仰のゆえに、彼らの運命は確実となり、怒りがエルサレムに対して告げられました。

主は預言者ミカを通して次のように宣言されました。「ヤコブの家の指導者たちよ、そしてイスラエルの家の支配者たちよ、今これを聞きなさい。彼らは裁きを憎み、すべての正しいことを曲げ、血によってシオンを築き、不正によってエルサレムを建てています。「その支配者たちは贈り物のために判決を下し、祭司たちは利息のために教え、預言者たちはお金のために神を授けます。それでも彼らは主にすがって、『主は私たちの中におられるのではないか』と言いました。」（ミカエル 3:9-

11)。

これらの言葉は、独善に満ちた腐敗したエルサレムの住民を正確に描写しています。彼らは神の律法の戒めを厳格に遵守するつもりでしたが、その原則をすべて違反していました。

彼らはキリストを憎みました。なぜなら、キリストの純粋さと神聖さが自分たちの不法行為を明らかにしたからです。また、自分たちの罪の結果として自分たちに降りかかったすべての問題の原因はキリストであると非難しました。彼らはイエスに罪がないことを知っていたにもかかわらず、国家としての安全のためにイエスの死が必要であると宣言しました。ユダヤ人の指導者たちは、「もし私たちがこのまま彼を放っておけば、誰もが彼を信じるでしょう。そしてローマ人が来て、私たちの場所と私たちの国を奪うでしょう。」と言いました。（ヨハネ 11:48）。もしキリストが犠牲になれば、彼らは再び強く団結した民となることができると言いました。こうして彼らは、国全体が滅びるよりは一人が死ぬほうが良いという大祭司の決定に論理的に同意したのです。

こうしてユダヤ人の指導者たちは「血によってシオンを、不正によってエルサレムを」建設した。さらに、彼らは救い主が自分たちの罪を叱責したために救い主を殺害したにもかかわらず、彼らの独善性の高さから、依然として自分たちを神の恵みの民であると考え、主が自分たちを敵から救い出してくださることを期待していました。

「それゆえ、」預言者は続けて言った、「あなたのせいで、シオンは畑のように耕され、エルサレムは石の山となり、この家の山は森の高い場所になるでしょう。」（ミカ 3:12）。

エルサレムの有罪判決がキリストによって宣告されてから40年間、主はエルサレムと国家に対する裁きを延長されました。驚くべきことに、神の福音を拒否する者たちと御子を殺害した者たちに対する神の辛抱強さはありません。実のない木のたとえは、ユダヤ国民に対する神の扱いを表していました。「伐採せよ。なぜまだ無駄に土地を占拠しているのだ？」という命令が出された。（ルカ 13:7）。しかし、神の慈悲がまだしばらくの間彼女を救ったのです。ユダヤ人の中にはキリストのご性格や働きについて無知な者が多くいました。そして、子供たちは親が拒否した機会を享受したり、光を受けたりすることができなかつた。神は使徒とその仲間たちの説教を通して、彼らに光を照らします。彼らは、キリストの誕生と生涯だけでなく、キリストの生涯においても、預言がどのように成就したかを見るのが許されるでしょう。

彼の死と復活において。子供たちは親の罪のために有罪判決を受けませんでした。しかし、子供たちが両親に与えられたすべての光を知りながら、さらに与えられた光を拒否したとき、彼らは父親の罪にあずかり、自分たちの咎の量を埋めることになりました。

エルサレムに対する神の辛抱強さは、ユダヤ人の頑固な悔い改めを裏付けるだけでした。彼らはイエスの弟子たちに対する憎しみと残酷さのあまり、最後の憐れみの申し出を拒否しました。それから神は彼らからの保護を撤回し、サタンとその天使たちから彼らを抑制する力を取り除き、国は神が選んだ指導者のなすがままに残されました。彼の子供たちは、邪悪な衝動を抑えることができるはずのキリストの恵みを拒否し、今や征服者となったのです。サタンは魂の最も低く、最も激しい情熱を刺激しました。男性は考えなかった。彼らは理性を超えており、衝動と盲目的な怒りに支配されていました。彼らはその残酷さにおいて悪魔のようなものになってしまいました。家族や国家の中で、上流階級だけでなく下層階級の間でも、疑惑、羨望、憎しみ、争い、反乱、そして殺人がありました。どこにもセキュリティはありませんでした。友人や親戚が互いに裏切りました。親は子供を殺し、子供は親を殺しました。人民の指導者には自らを統治する力がなかった。制御不能な情熱が私たちに暴君にしました。ユダヤ人たちは、無実の神の御子を有罪とするために偽の証言を受け入れたのです。現在、冤罪により彼自身の人生が不確実になった。彼らは自分たちの行動によって、長い間、「イスラエルの聖者が我々の前に居なくなるようにせよ」と言い続けていた。(イザヤ 30:11)。これであなたの願いは叶いました。神への畏れが彼らを悩ませることはもうありません。サタンは国の指導者であり、民間および宗教の最高権威はサタンの支配下にありました。

対立する派閥の指導者たちは、時には協力して不運な犠牲者を略奪したり拷問したりすることもあったが、再び互いに襲いかかり、容赦なく殺害した。神殿の神聖さでさえ、彼らの恐ろしい凶暴性を制限することはできませんでした。礼拝者たちは祭壇の前で殺害され、聖域は殺害された人々の死体で汚染された。しかし、この地獄の業を扇動した者たちは、盲目的で冒瀆的な思い込みの中で、エルサレムはまさに神の都であったため、破壊されることを恐れていないと公に宣言した。自分たちの権力をより強固に確立するために、彼らは偽預言者に賄賂を贈って、ローマ軍団が神殿を包囲しているときでさえ、人々は神の介入による救出を待たなければならないと宣言させた。群衆は最後まで、至高者が敵を倒すために介入してくださるという信念を堅持した。しかし、イスラエルは神の保護を無視し、もはや防御手段を持たなかった。不幸なエルサレム！国内の対立によって分裂し、息子たちの血が互いの手で殺され街路は赤くなり、一方外国軍は要塞を破壊し、兵士を殺害した。

エルサレムの滅びに関してキリストがなされた預言はすべて文字通り成就しました。ユダヤ人は、「あなたが測った尺度で、それはあなたにも測られるでしょう」という神の警告の言葉が真実であることを経験しました。

(マタイ 7:2)。

災害と破滅を告げる兆候と不思議が現れました。真夜中、超自然的な光が神殿と祭壇を照らしました。雲の上、夕暮れ時、戦車と兵士たちが戦いのために集まった。

聖所で夜間奉仕をしていた司祭たちは、不思議な音に怯えていました。大地が揺れ、「ここから行こう！」というたくさんの声が聞こえた。東側の大きな扉は非常に重く、20人がかりで閉めるのは困難で、巨大な鉄格子でしっかりと固定されていた。

堅固な石畳に深く固定されていたこの建物は、目に見える何の作用もなく真夜中に開きました。

7年間、ある男がエルサレムの街を行ったり来たりし続け、この街に降りかかるであろう不幸を告げ知らせた。彼は昼も夜も驚くべき嘆きの歌を歌いました：「東からの声、西からの声、四方の風からの声！エルサレムと神殿に反対する声だ！」

新郎と新婦に反対の声！この奇妙な存在は逮捕され、鞭打たれたが、彼の口からは嘆きの声は漏れなかった。侮辱と虐待に対して、彼はただこう答えただけだった。「ああ！」エルサレムは災いだ！」「災いだ！その住民は災いだ！」と警告する叫び声は、彼が予測していた包囲戦で殺されるまで鳴り止まなかった。

エルサレムの破壊で死んだクリスチャンは一人もいませんでした。キリストは弟子たちに警告しており、キリストの言葉を信じたすべての人は約束のしるしを待っていました。イエスは、「エルサレムが軍隊に囲まれているのを見たら、その荒廃が来たことを知りなさい。そのとき、ユダヤにいる者は山に逃げなさい。町の真ん中にいる者は去れ」と言われました。（ルカ21:20,21）。ケスティウスの指揮下にあるローマ軍が都市を包囲した後、すべてが即時攻撃に有利であると思われたとき、彼らは不可解にも包囲を解除しました。包囲された人々は、もはや抵抗が成功する望みを失い、降伏しようとしていたとき、ローマの将軍は、これといった明白な理由もなく軍隊を撤退させた。しかし、神の慈悲深い摂理は、ご自身の民の利益のために出来事を導きました。約束のしるしは期待しているクリスチャンたちに与えられており、今度は彼らに救い主の警告に耳を傾ける機会が与えられました。ユダヤ人もローマ人もキリスト教徒の逃亡を妨げないように事態は導かれた。ケスティウスの撤退により、ユダヤ人はエルサレムを離れ、退却する軍隊を追跡し、こうして両軍が全面的に戦闘に従事する一方で、キリスト教徒はエルサレムを放棄する機会を得た。このとき、国は彼らを迎え撃とうとしたかもしれない敵から解放されました。包囲戦の時、ユダヤ人は仮庵の祭りに参加するためにエルサレムに集められていました。このようにして、国中のクリスチャンは妨害を受けずに逃げることができました。彼らは遅滞なく安全な場所、ヨルダン川の向こうのペレアの地のペラ市に逃げました。

ケスティウスとその軍隊を追撃していたユダヤ軍はあまりにも野蛮なやり方で背後に倒れ、完全な破壊の脅威にさらされた。ローマ軍が撤退を完了するのは非常に困難であった。ユダヤ人たちはほとんど死傷者を出すことなく逃げ出し、戦利品を持ってエルサレムに凱旋した。

しかし、この一見成功は彼らに害をもたらすだけででした。彼はローマ人に対する頑固な抵抗を奨励したが、それはすぐに運命の都市に言い表せない不幸をもたらした。

ティトゥス・ウェスパシアヌスによって包囲が再開されたとき、エルサレムに降りかかった災難はひどかった。この都市は過越の祭りの時期に攻撃され、数百万人のユダヤ人が城壁内に集められました。注意深く保存していれば何年にもわたって住民に供給できたであろう彼らの食料貯蔵庫は、以前、対立する派閥間の妬みと復讐によって破壊され、今や飢餓のあらゆる恐怖に見舞われている。小麦一秤は一タラントで売られていました。飢えの苦しみがあまりにも激しかったため、男性はベルトやサンダル、盾の裏地の革をかじってしまいました。大勢の人が夜にこっそり抜け出して城壁の外に生える野生植物を採集したが、多くは捕らえられ残酷な拷問を受けて殺された。多くの場合、無事に帰還した人々は、大きな危険を冒して集めたものを奪われました。最も非人道的な拷問

それらは、困っている人々に、彼らが隠していたかもしれない最後のわずかな物資を明らかにするよう強制するために、権力者によって課されたものでした。そしてそのような残虐行為は、十分に食事を与えられ、単に将来に備えて食料を蓄えたいだけの人々によって行われることが多かった。

飢餓と疫病で何千人もが亡くなりました。自然な愛情が破壊されたようでした。夫は妻から盗み、妻は夫から盗みました。子どもたちは年老いた親の口から食べ物を摂取しました。預言者の質問：「女性は自分が育てた子供のことをそんなに忘れることができるのでしょうか？」（イザヤ書 49:15）非難された都市の城壁の中で、「敬虔な婦人たちの手が自分の子供たちを茹で、わが民の娘を滅ぼす食糧として提供した」という答えが得られた。（ラムさん。

4:10）再び、14世紀前に与えられた警告の預言が成就しました。「そして、あなたたちの中で最も優しく繊細な女性は、一度も足の裏を地に着けようとしたことがないが、彼女の目は彼の中の男性に対して邪悪になるでしょう」胸に対して、息子に対して、娘に対して…そして自分の子供たちのために、敵が迫りくる包囲と窮地の中、何もかも不足しているため、彼はひそかに子供たちを食べるからである。あなたは門の中にいます。」（申命記 28:56 および 57）。

ローマの指導者たちはユダヤ人を恐怖に陥れ、降伏を強要しようと努めた。抵抗した囚人は投獄されると、鞭打たれ、拷問を受け、市壁の前で十字架につけられた。毎日何百人もがこの方法で殺され、この恐ろしい作業は、ヨシャファトの谷沿いとカルバリに、あまりにも多くの十字架が建てられ、その間を行き来する余地がほとんどなくなるまで続けました。ピラトの法廷が報復する前に、「彼の血が私たちと私たちの子供たちに降り注ぐように」と宣告されたその恐ろしい呪いは、あまりにもひどい方法でした。（マタイ 27:25）。

ティトゥスなら喜んで恐ろしい光景を終わらせ、エルサレムを破滅から完全に免れただろう。彼は谷間に死体が山となって横たわっているのを見て恐怖を感じた。彼はまるで魅了された人のように、オリーブ山の頂上から壮大な神殿を眺め、そこにある石には決して触れないようにと命令を出しました。要塞を占領しようとする前に、彼はユダヤ人の指導者たちに、聖地を血で汚すことを強制しないよう強く訴えた。もし彼らが出て行って他の場所で戦ったとしても、ローマ人は神殿の神聖さを侵すことはないだろう。

ヨセフ自身、非常に雄弁な訴えを通して、同胞たちに降伏し、自分自身と自分たちの街と礼拝の場を救うように懇願しました。しかし、彼の言葉は激しい呪いで返されました。彼が彼らを促し続けると、彼らの最後の人間の調停者である彼に矢が放たれた。ユダヤ人たちは神の子の懇願を拒否していましたが、今度はその戒めと懇願によって、彼らは最後まで抵抗する決意がさらに強まっただけです。神殿を救おうとしたタイタスの努力は無駄でした。自分より偉い人が、あらゆる手段を講じないと宣言したのだ。

他の。

ユダヤ人指導者の盲目的な頑固さと、包囲された都市内で行われた忌まわしい犯罪はローマ人の間に恐怖と憤りを生み、ついにティトゥスは神殿を暴力で攻撃することを決意した。しかし、可能であれば破壊は避けるべきだと彼は判断した。しかし彼の命令は従われませんでした。

彼が夜テントにこもった後、ユダヤ人たちが神殿から出てきて外の兵士たちを攻撃した。闘争の中で、ポーチの開口部からたいまつが投げ込まれ、すぐに神聖な建物を囲む杉で覆われた部屋が炎に包まれました。

ティトスは將軍や軍団を率いて現場に急行し、兵士たちに消火を命じた。彼の言葉は聞き入れられなかった。あなたの中で

激怒した兵士たちは寺院に隣接する部屋にたいまつを投げ込み、そこに避難していた大勢の人々を剣で排除した。血が水のように神殿の階段を流れ落ちた。何千人ものユダヤ人が命を落としました。戦いの音の上で、「イカボッド！」と叫ぶ声が聞こえました。――栄光は消え去った。

ティトは兵士の怒りを抑えることが不可能であると感じた。彼は役人たちとともに神聖な建物に入り、内部を調べた。彼らはその素晴らしさを見て驚きました。そして、炎はまだ聖地に到達していなかったので、彼はそれを救うために最後の努力をしました。彼は兵士たちの真ん中に飛び込み、戦闘を終わらせるようにもう一度彼らに勧めた。百人隊長リベリスは部下とともに服従を強制しようと努めた。しかし、たとえ皇帝への敬意があっても、ユダヤ人に対する猛烈な敵意、戦闘の激化、そして略奪への飽くなき期待を防ぐことはできなかった。兵士たちは、周囲のすべてが金色に輝き、炎の激しい光の中でまばゆく輝いているのを目にしました。彼らは、聖域には計り知れない宝が蓄積されていると考えていました。

気づかれずに、兵士がドアのヒンジの間に燃えるトーチを投げました。一瞬にして建物全体が炎に包まれた。目のくらむような煙と炎のために士官たちは撤退を余儀なくされ、高貴な建物は運命に委ねられた。

「それはローマ人にとって恐ろしい光景でした。そしてユダヤ人にとってはどうだったでしょうか？街を見下ろす丘の頂上全体が火山のように燃え上がりました。すさまじい音を立てて建物が次々と崩壊し、海に飲み込まれました。火の深淵 屋根 杉の塔は火の刃のように見えた；金色の尖塔は赤い光のスパイクのように輝いた；門の塔は火柱と煙を吐き出した；近隣の丘は照らされ、そして匿名の人々のグループが見えた破壊が進むのをひどい不安で見守っており、街の上部の壁や高台には、絶望の苦しみで青ざめる顔もあれば、無益な復讐の怒りが残る顔もあった。

ある場所から別の場所へ移動するローマ兵の叫び声と、炎の中で死んでいく反乱軍の叫び声が、火災の騒音と木材が崩れる轟音と混ざり合った。山からのこだまが高所の人々の騒音に反応したり、呼び戻したりしました。悲鳴と嘆きの声が壁に響き渡った。飢えで死にかけた男たちは最後の力を振り絞って苦悩と絶望の叫びを上げた。

市内での虐殺は、外で見られた光景よりもさらにひどいものだった。

男性も女性も、老若男女も、反政府勢力も聖職者も、戦った者も慈悲を乞う者も、無差別に虐殺された。死者の数は殺人者の数を上回った。軍団兵たちは殲滅作業を行うために死体の山をよじ登らなければならなかった。」

神殿の破壊後、すぐに都市全体がローマ人の手に落ちました。ユダヤ人の指導者たちは、征服できなかった塔を放棄しましたが、ティトウスはそこが空であることに気づきました。彼は驚いて彼らを観察し、神が彼らを彼の手に与えたと宣言した。なぜなら、どんなに強力な戦闘機械であっても、その巨大な壁に打ち勝つことはできなかったからです。都市も神殿も土台まで破壊され、聖なる家が建てられた地面は「畑のように耕され」ました（エレミヤ26:18）。その後の包囲と虐殺で100万人以上が死亡した。生き残った人々は捕らえられて奴隷として売られ、勝利者の勝利を飾るためにローマに引きずり込まれ、円形闘技場で野獣に投げ捨てられ、あるいはホームレスの放浪者として地球中に散り散りになった。

ユダヤ人たちは自分たちで足かせを作った。彼らは復讐の杯を満たしたのだ。国家として、そしてすべてにおいて彼らに降りかかった完全な破壊において、

散り散りに続いた不幸も、彼らは自らの手で蒔いた種を刈り取っているに過ぎなかった。預言者はこう言います。「イスラエルよ、あなたは損失を被りました。あなたはわたしに反逆しました。」「あなたの罪によってあなたは墮落しました。」（オセ 13:9; 14:1）。彼らの苦しみは、しばしば神からの直接の命令によって与えられる罰として表されます。これが、偉大な詐欺師が自分の仕事を隠そうとする方法です。ユダヤ人は神の愛と憐れみを頑なに拒否したため、神の保護が彼らから剥奪され、サタンが自分の意志に従ってユダヤ人を支配することが許されました。エルサレムの破壊で行われた恐ろしい残虐行為は、サタンの支配に服従する人々に対するサタンの復讐の力を示しています。

私たちが享受している平和と保護のおかげで、キリストにどれほどの恩義があるのか、私たちは知ることができません。人類が完全にサタンの支配下に置かれるのを防ぐのは、神の抑制力です。不従順で恩知らずな人々は、邪悪な者の残酷でひねくれた力を抑制してくださる神の憐れみと忍耐に感謝する大きな理由があります。しかし、人間が神の寛容の限界を超えると、その制限は取り除かれます。罪人に関して、神は罪に対する判決を執行する者としては行動しません。しかし神は、神の憐れみを拒否する者たちに、自分たちが蒔いたものを刈り取るように放っておかれます。拒否されるあらゆる光線、軽蔑または無視されるあらゆる警告、耽溺するあらゆる情熱、神の律法へのあらゆる違反は、避けられない収穫を生み出すために蒔かれた種です。神の霊は、執拗に抵抗され、最終的に罪人から引き離され、そのとき、魂の邪悪な情熱を制御する力は残らず、サタンの邪悪さと敵意に対する保護もなくなります。エルサレムの破壊は、神の恵みの申し出を軽視し、神の憐れみの嘆願に抵抗しているすべての人々に対する、途方もない厳粛な警告となります。神の罪に対する憎しみと、罪を犯した者に課せられる確実な罰について、これほど決定的な証言がなされたことはありません。

エルサレムに下される裁きに関する救い主の預言は別の成就を迎えるが、その恐ろしい悲劇はかすかな影に過ぎなかった。選ばれた都市の運命において、私たちは神の憐れみを拒否し、神の律法をうぬぼれた世界が非難されるのを観察することができます。地球が何世紀にもわたる犯罪の中で目撃してきた人類の悲惨な記録は暗いものです。それらを熟考していると、心は気を失い、精神は衰弱します。天の権威を無視した影響は甚大ですが、未来の啓示ではさらに暗いシナリオが示されています。過去の記録、つまり騒乱、紛争、革命の長いページェント、「騒音と戦った彼らの鎧、そして血で転がった衣服」（イザヤ書 9:5）などは、当時の記録と比較するものではありません。その日の恐怖は、神の御霊が邪悪な者たちから完全に退き、人間の情熱と悪魔の怒りの発生をほぼ抑制できないという点です。そのとき世界は、これまでにないほどサタンの支配の結果を目の当たりにすることになります。

しかしその日、またエルサレムの滅びの際にも、神の民、「生きている者の中に書き記されているすべての者」（イザヤ書4:3）が救出されるでしょう。キリストは、ご自分の忠実な者たちを集めるために二度目に来ると述べられました。天使たちがラッパを吹き鳴らして、天の端から端まで、四方から選ばれた者たちを集めます。」（マタイ 24:30 と 31）。そのとき、福音に耳を傾けない人々は主の口の霊に蝕まれ、主の来臨の輝きによって滅ぼされます（IIテサロニケ2:8）。

昔のイスラエルのように、悪者は自らを滅ぼします。彼らは自らの咎によって破滅するのです。生涯にわたる罪の結果、彼らは迷い込んだ

神との調和からはほど遠く、彼らの本性は悪によって墮落しており、神の栄光の現れは彼らにとって焼き尽くす火となるだろう。

キリストの言葉によって伝えられる教訓を軽視しないように、人々は細心の注意を払いましょう。イエスがエルサレムの滅びについて弟子たちに警告し、迫りくるヘカトゥームからの脱出のしるしを与えたのと同じように、イエスは最終的な滅びの日の世界に警告し、希望するすべての人が逃げられるようにその到来の兆候を与えた。来る怒り。イエスは「太陽や月や星にはしるしがあり、地上では諸国民の苦難が起こるであろう。」と宣言されました。（ルカ 21:25; マタイ 24:29; マルコ 13:24-26; 黙示録 6:12-17）。主の到来のこうした前兆を観察する人は、それが「近づいている、戸口にある」ことを知らなければなりません。

（マタイ 24:33）。「だから気をつけなさい」（マルコ13:35）というのが神の警告の言葉です。この勧告に従う者は、その日が気づかぬうちに闇に見捨てられることはないでしょう。しかし、見守っていない者たちには、「主の日は夜の盗人のように来る」（1テサロニケ5:2）。

ユダヤ人がエルサレムに関する救い主の警告を受け取ろうとしたのと同じように、世界は今回のメッセージを称賛する用意ができていない。何が起ころうとも、主の日は突然悪人に襲いかかります。変わらないルーチンに従ってください。快楽、ビジネス、商業、利益への貪欲に関わっている男性を見つけろ。宗教界の指導者たちが世界の進歩と文化を称賛し、人々が偽りの安全に騙されていることに気づき、真夜中に泥棒が警備されていない家を略奪するように、不用意で邪悪な者たちに突然の滅びが訪れるだろう。そして「彼らは逃げない」(1テサロニケ5:3-5)。

第2章

数世紀初頭の迫害

イエスはエルサレムの運命と再臨の場面を弟子たちに明らかにしたとき、イエスが弟子たちから離れてから、力と栄光を手にしてご自分の解放に戻るまでの民の経験についても予告されました。救い主はオリーブ山から、使徒教会に降りかかる嵐について熟考されました。そして、より深く未来を見つめる彼の目は、来たるべき暗闇と迫害の時代に彼の追隨者たちに降りかかるであろう激しく壊滅的な嵐を識別しました。恐ろしい意味を持ついくつかの簡潔な発言の中で、彼はこの世の支配者たちが神の教会に課すであろう部分を予言しました(マタイ24:9,21,22)。キリストの追隨者たちは、主が歩んだのと同じ屈辱、非難、苦しみの道を歩まなければなりません。世の救い主に降りかかった敵意は、彼の名を信じるすべての人に対して現れるでしょう。

初代教会の歴史は、救い主の言葉の成就を目撃してきました。地上と地獄の力が団結して、キリストに従う者としてキリストに対して対抗しました。異教は、もし福音が勝利した場合、その神殿と祭壇は破壊されるだろうと予測しました。したがって、彼はキリスト教を破壊するために軍隊を集めました。迫害の火が灯されました。クリスチャンは財産を剥奪され、家から追放されました。彼らは「苦難の大いなる闘い」に耐えました(ヘブル10:32)。「彼らは嘲笑や鞭打ち、さらには刑務所や投獄も経験しました。」(ヘブル11:36)。彼らの多くは自らの血で証言を封印した。貴族も奴隷も、金持ちも貧乏人も、教育を受けた人も受けていない人も、平等に容赦なく殺された。

ネロ政権下でパウロの殉教時に始まったこれらの迫害は、多かれ少なかれ激しい怒りを伴いながら何世紀にもわたって続きました。キリスト教徒は最も恐ろしい犯罪で無実の罪で告発され、飢餓、疫病、地震などの大災害を引き起こした罪で有罪となった。彼らが民衆の憎悪と疑惑の対象となるにつれ、利益を求めるあまり罪のない人々を裏切ることもしばしば中傷者が現れた。彼らは帝国に対する反逆者、宗教の敵、社会の害虫として非難された。それらの多くは野獣に投げつけられたり、円形闘技場で生きのまま焼かれたりした。十字架につけられた者もいれば、猛獣の皮をかぶせられ、闘技場に投げ込まれて犬に引き裂かれた者もいた。彼の処罰はしばしば公の主要な見世物となった。大勢の観衆がショーを楽しむために集まり、犠牲者の悲惨な苦しみを笑いと拍手で迎えた。

キリストの追隨者たちはどこに避難しても、野生動物のように狩られました。彼らは荒涼とした寂しい場所に避難することを余儀なくされました。

「困窮し、苦しみ、虐待され(この世に相応しくない者)、砂漠や山、地の穴や洞窟をさまよっている。」(ヘブライ人への手紙11:37と38)。カタコンベは何千人もの人々に避難所を提供しました。丘の下、ローマの境界の外側に、長い回廊が土と岩を掘って掘られていました。暗く複雑な通路網が城壁を越えて何マイルも伸びていた。これらの地下隔離空間に、キリストの追隨者たちは死者を埋葬しました。そしてそこでも、疑われて非合法化されたとき、彼らは居場所を見つけた。命の与え主が目覚めるとき

善戦した人々、キリストのために殉教した多くの人々が、この暗い洞窟から出てくるでしょう。

最も野蛮な迫害の下で、これらのイエスの証人たちは汚れのない信仰を保ちました。快適さと日光をまったく奪われていたにもかかわらず、彼らは暗くても優しい地球の中心を故郷としていたため、何の不満も言いませんでした。彼らは信仰、忍耐、希望の言葉で、剥奪と苦難に耐えるよう互いに励まし合いました。地上のすべての快適さを失ったからといって、彼らにキリストへの信仰を放棄させることはできませんでした。試練と迫害は、彼らを安息と報いに近づけるための一歩にすぎませんでした。

過去の神の僕たちに起こったように、多くの人は「よりよい復活を得るため、自分たちの解放を受け入れずに拷問を受けました」(ヘブル11:35)。
彼らは、キリストのゆえに迫害されるとき、天国での報いは大きいから喜ぶべきだという主の言葉を思い出した。なぜなら、預言者たちも彼らの前に迫害されていたからである。彼らは真実のために苦しむに値すると認められたことを喜び、炎のパチパチ音の中で勝利の旋律が響き渡った。信仰によって上を見上げると、彼らはキリストと天使たちが天の胸壁にもたれかかり、深い関心をもって彼らを見つめ、彼らの堅固さを承認をもって観察していました。神の御座から声がして、「死に至るまで忠実であれ。そうすれば命の冠を与えよう」と言いました。(黙示録 2:10)。

暴力によってキリストの教会を破壊しようとするサタンの努力は無駄でした。
イエスの弟子たちが命を投げ出した大論争は、これらの忠実な旗手たちがその地位から失脚したときでも中断されませんでした。彼らは敗北を乗り越えて勝利した。神の働き人たちは亡くなったが、神の働きは決意をもって進められた。福音は広がり続け、信者の数は増え続けました。彼はローマの驚ですら近づけない地域に侵入した。

あるクリスチャンは、迫害を奨励していた異教の総督たちを戒めながらこう言いました。彼の邪悪さは私たちの弱さを試みますが、そのような残酷さは役に立ちません。

それは、他の人たちを同じ信念に導くための力強い誘いにほかなりません。あなたに収穫されれば収穫されるほど、私たちは成長します。クリスチャンの血は種です。」

数千人が逮捕され殺害されたが、代わりに現れた者もいた。そして、信仰のために殉教した人々はキリストによって保証され、キリストによって勝者とみなされました。彼らは善戦し、キリストが来られたときに栄光の冠を受け取ることになるのです。彼らが耐えた苦しみは、クリスチャンたちをお互いに、そして救い主に近づけました。彼らの生きた模範と彼らの死の際に行った証言は、真実を支持する永久的な証拠となりました。そして、予想外だったことに、サタンの臣下たちは彼の奉仕を辞め、キリストの旗の下に入隊しつつあった。

そこでサタンは、キリスト教会に自らの旗を立てることで、神の政府ともっとうまく戦おうという計画を立てました。もしキリストに従う者たちが騙され、神の不興を買うように導かれるとしたら、彼らの力、忍耐、堅固さは失われ、格好の餌食になってしまうだろう。

この偉大な敵は、力づくで獲得できなかったものを、狡猾な手段によって獲得しようと努めた。迫害は終わり、その場所は世の繁栄と名誉という危険な誘惑によって満たされました。偶像崇拜者は部分的にキリスト教の信仰を受け入れるように導かれたましたが、他の重要な真理は拒否しました。

彼らはイエスを神の子として受け入れ、イエスの死と復活を信じると告白しました。しかし、彼らには罪の自覚はなく、悔い改めや心変わりの必要性も感じていませんでした。彼らは、ある程度の譲歩をした上で、キリストへの信仰の綱領のもとで全員が団結できるよう、クリスチャンが他の点で妥協することを提案した。

今、教会は大きな危険にさらされていました。これに比べれば、刑務所、拷問、火事、剣は祝福でした。クリスチャンの中には毅然とした態度をとり、妥協はしないと宣言した人もいた。他の人々は、自分たちの信仰の特徴の一部を譲渡したり変更したりすることに賛成し、キリスト教の一部を受け入れた人々に加わり、これが完全な回心への手段になる可能性があるかと主張した。それはキリストの忠実な追隨者にとって深い苦しみの時代でした。いわゆるキリスト教を装って、サタンが教会の中に忍び込み、彼らの信仰を腐敗させ、真理の言葉から心をそらそうとしていました。

ほとんどのキリスト教徒は最終的に基準を下げることに同意し、キリスト教と異教の間に連合が形成されました。偶像崇拝者たちは改心して教会と団結すると公言したにもかかわらず、依然として偶像崇拝に固執し、崇拝の対象をイエス、さらにはマリアや聖人の像に変えただけでした。教会に持ち込まれた偶像崇拝の憎しみに満ちた発酵は、その有害な働きを続けました。誤った教義、迷信的な儀式、偶像崇拝の儀式が彼らの信仰と崇拝に組み込まれました。キリストの追隨者が偶像崇拝者と手を組んだとき、キリスト教は腐敗し、教会はその純粋さと力を失いました。しかし、こうした欺瞞に惑わされなかった人々もいた。彼らは依然として真理の創造者への忠誠を保ち、神のみを崇拝しました。

キリストの追隨者であると公言する人々の中には、常に2つの階級がありました。一人は救い主の生涯を研究し、その欠陥を正して模範に従おうと熱心に努める一方で、もう一人は彼の間違いを暴露する明確で実際的な真実を避けます。最高の状態であっても、教会は完全に純粋で、真実で、誠実な人々で構成されていたわけではありません。私たちの救い主は、故意に罪を犯す者は教会に受け入れられるべきではないと教えられました。しかし、神は性格に欠陥のある人々をご自分と団結させ、彼らに神の教えと模範の恩恵を与え、彼らが自分たちの間違いに気づき、それを正す機会を得られるようにしました。十二使徒の中に裏切り者がいた。ユダは性格に欠陥があるからではなく、それにもかかわらず受け入れられました。彼が弟子たちと団結したのは、キリストの指導と模範を通して、キリスト教徒の性格とは何かを学び、自らの誤りを認識し、悔い改め、神の恵みの助けによって魂を清めるよう導かれるためであった。「真実に従ってください。」しかしユダは、慈しみ深く自分を照らすことを許された光の中を歩むことはできませんでした。彼は罪にふけることによってサタンの誘惑を招きました。彼の悪い性格特性が顕著になりました。彼は自分の心を闇の力の支配に委ねた。彼は自分の欠点を批判されると激怒し、主を裏切るという恐ろしい罪を犯すことになりました。このように、敬虔さを名乗って悪を大切に人は皆、自分たちの罪の道を非難して自分たちの平和を乱す人々を憎んでいます。有利な機会が訪れると、彼らはユダのように、自分たちの利益のために自分たちを非難しようとした人々を裏切ります。

使徒たちは教会の中で、敬虔を公言する一方で密かに不法行為を大切に人々を見つけました。アナニアとサフィラは、貪欲に自分の分を差し控えたにもかかわらず、神に全額を犠牲にするつもりで、欺瞞者として行動しました。真理の御霊はこれらの欺瞞者の本当の性格を使徒たちに明らかにし、神の裁きは教会をその純粋さに対する憎むべき汚点から解放しました。教会の中にキリストの識別力があることを示すこの顕著な証拠は、偽善者や悪行者にとって恐怖でした。彼らは、習慣的にも性質的にも常にキリストを代表していた人々とのつながりを保つことができなくなりました。そして、試練や迫害が神の追隨者たちに襲い掛かったとき、真理のためにすべてを放棄する意志のある者だけが神の弟子になれるのです。こうして迫害が続いても教会は存続した

比較的純粋。しかし、嫌がらせが止むと、それほど誠実で献身的ではなかった改宗者が教会に加わり、サタンが侵入する道が開かれました。

しかし、光の王子と闇の王子の間には結びつきはなく、彼らの信奉者の間には絆などあり得ない。キリスト教徒が異教からの半ば改宗者にすぎない人々と団結することに同意したとき、彼らは真理からますます遠ざかる道に迷い込んでしまいました。サタンは、非常に多くのキリストの追随者を騙すことに成功したことを喜びました。それから彼は自分の権力を集中して彼らに対してさらに大きな支配を及ぼし、神に忠実であり続ける人々を迫害するよう彼らに鼓舞しました。かつて真のキリスト教信仰を擁護した人々ほど、真のキリスト教信仰に反対する方法をよく理解している人はいませんでした。そしてこれらの背教者たちは、半異教の仲間たちと団結して、キリストの教義の最も本質的な特徴に攻撃を集中させた。

忠実であり、教会に持ち込まれた欺瞞や忌まわしい行為に対して断固として立ち、司祭のローブで身を隠した人々には、絶望的な闘争が要求された。聖書は信仰の基準として受け入れられませんでした。信教の自由の教義は異端とみなされ、その擁護者は憎まれ、非合法化された。

長く厳しい紛争の後、少数の忠実な信者たちは、背教した教会がそれでも偽りと偶像崇拜を放棄しないのであれば、その教会とのすべての結合を解消することを決定した。

彼らは、神の言葉に従うためには分離が絶対に必要であることを理解していました。彼らは自らの魂にとって致命的な過ちをあえて許さず、模範を示した

それは彼らの子供たちや彼らの子供たちの信仰に危険をもたらすことになるでしょう。平和と統一を確保するために、彼らは神への忠誠と矛盾しない限りいかなる譲歩もする用意があったが、原則を犠牲にすることによっては、たとえ平和であっても多大な犠牲を払って達成されるだろうと感じていた。真実と正義を犠牲にすることによってのみ統一が達成できるのであれば、違いはあってもいいし、闘争さえしてもよいのです。

これらの忠実な魂の中で働いていた原則が、神の民を自称する人々の心の中に復活すれば、教会にとっても世界にとっても良いことでしょう。キリスト教の信仰の柱である教義に対して、驚くべき無関心が見られます。結局のところ、それらは極めて重要ではないという意見が有力になりつつある。この墮落はサタンの手先の手を強化しており、過去の時代の信者たちが暴露し、自らの命の危険を冒して戦った誤った理論や致命的な幻想が、今日ではキリストの追随者であると公言する何千もの人々によって好意的に見なされています。

古代のキリスト教徒は確かに特異な民族でした。彼の非難のない歩みと揺るぎない信仰は、罪人たちの平和を乱す絶え間ない戒めでした。彼らは数が少なく、富も地位も名誉称号も持たなかったが、その性格や教義が知られる限り、悪行者にとっては恐怖の対象となった。その結果、アベルが冒瀆的なカインに嫌われたのと同じように、彼らも悪人に嫌われました。カインがアベルを殺したのと同じ理由で、聖霊の制止を振り切ろうとした者たちは神の民を殺しました。ユダヤ人が救い主を拒絶し十字架につけたのも同じ理由でした。イエスの性格の純粋さと聖さが彼らの利己主義と墮落に対する絶え間ない叱責だったからです。キリストの時代から現在に至るまで、忠実な弟子たちは罪の道を愛し、従う人々からの憎しみと反対を引き起こしてきました。

では、どうして福音が平和のメッセージと言えるのでしょうか？イザヤはメシアの誕生を予言したとき、彼に「平和の君」という称号を与えました。天使たちが羊飼いたちにキリストの誕生を告げたとき、彼らはベツレヘムの平原に向かって「いと高きところには神に栄光あれ、地には平和、人間には善意」と歌いました。（ルカ 2:14）。これらの預言的な記述と、

キリストの言葉「私が来たのは、平和ではなく、剣を送るためです。」（マタイ 10:34）。しかし、正しく理解すれば、この2つは完全に調和しています。福音は平和のメッセージです。キリスト教は、もし受け入れて従えば、地球全体に平和、調和、幸福が広がるシステムです。キリストの宗教は、その教えを受け入れるすべての人を親密な兄弟愛の中で団結させます。イエスの使命は、人間を神と和解させ、ひいては人間同士を和解させることでした。しかし、世界は一般に、キリストの最も激しい敵であるサタン（悪魔）の支配下にあります。福音は彼らに、彼らの習慣や欲望とは全く相反する生活原則を提示し、彼らはそれに反抗して立ち上がります。彼らは自分たちの罪を明らかにし、非難する純粋さを憎み、自分たちの義と神聖な主張を自分たちに提示しようとする人々を迫害し、滅ぼします。福音が剣と呼ばれるのは、この意味で、福音が提示する崇高な真理が憎しみと争いを引き起こすためです。

義人が悪人の手による迫害に遭うことを許す神秘的な摂理は、信仰の弱い多くの人々を大いに困惑させてきました。神への信頼を拒否しようとする人さえいます。なぜなら、神は最も卑劣な人間の繁栄を許す一方で、最も善良で最も純粋な人間が神の残酷な力によって苦しめられるからです。公正で慈悲深く、また無限の力を持つ神が、どのようにしてそのような不正義と抑圧を容認できるのか、と問われます。これは私たちとは何の関係もない質問です。神は私たちに神の愛の十分な証拠を与えてくださったので、神の摂理の動きが理解できないからといって神の善性を疑うべきではありません。試練と暗闇の日々の中で彼らの魂を圧迫する疑いを予見して、救い主は弟子たちにこう言われました。あなたは迫害されるでしょう。」（ヨハネ 15:20）。イエスは、私たちのために、彼の追従者たちが邪悪な人々の残虐な行為で苦しむ以上に苦しみました。

拷問と殉教に耐えるよう召されている人々は、愛する神の御子の足跡に従うことにほかなりません。

「主は約束を遅らせません。」（ペテロ第二 3:9）。神は子供たちを忘れてたり、軽視したりしません。しかし神は、神のご意志を行ないたいと願う者が誰も彼らに騙されないように、邪悪な者たちがその本当の性質を明らかにすることを許しておられます。義人が再び苦しみの炉に投げ込まれるのは、彼ら自身が清められるためであり、彼らの模範によって信仰と敬虔の現実を他の人に納得させるためであり、また彼らの一貫した行為が邪悪な者や不信者を非難するためでもある。

神は邪悪な者たちが繁栄し、神に対する敵意を明らかにすることを許しておられます。それは、彼らとその咎の量を満たしたとき、すべての人が彼らの完全な滅びの中に神の正義と憐れみを見ることができるようになるためです。復讐の日が近づいており、神の法に違反し、神の民を抑圧したすべての者が、その行為に対して正当な報いを受けることになる。神の信者に対するあらゆる残虐行為と不当行為が、あたかもキリストご自身に対して行われたかのように罰せられるとき。

今日の教会の注目を集めるべき、もっと重要な問題がもう一つあります。使徒パウロは、「キリスト・イエスにあって敬虔に生きようとする者は皆、迫害を受けるであろう」と宣言しています（II テモテ3:12）。では、なぜ迫害はほとんど休止状態にあるように見えるのでしょうか？唯一の理由は、教会が世俗の基準に準拠しているため、反対を引き起こさないということです。私たちの時代の現在の宗教は、キリストとその使徒たちの時代にキリスト教の信仰を特徴づけていたような純粋で神聖な性格を持っていません。神の言葉の偉大な真理がそれほど無関心に考慮されるのは、ひとえに罪との妥協の精神のためです。なぜなら、教会には極めて重要な敬虔さが欠けているため、キリスト教は明らかに世界中で非常に人気があるからです。

初代教会の信仰と力が復活すれば、迫害の精神が復活し、迫害の火が再燃するでしょう。

第3章

背教

使徒パウロはテサロニケ人への第二の手紙の中で、教皇権力の確立につながる大規模な背教を予言しました。彼は、「まず背教が来て、神と呼ばれるものや崇拝されるものすべてに対して反対し自分を高揚する罪の人、滅びの子が明らかにされない限り、キリストの日は来ない」と宣言しました。それは、彼が神の神殿で神のように座り、神のように現れたいと願うためである」（IIテサロニケ 2：3、4）。さらに使徒は兄弟たちに、「不法の奥義が働いている」と警告しています（IIテサロニケ 2：7）。当時でさえ、彼は教会に忍び込み、教皇制度の発展への道を準備するであろう間違いを見ました。

最初はひそかに、そして静かに、そして力を増し、人々の心を支配するようになると、少しずつ公然と、不法行為の謎は冒瀆的で欺瞞的な働きを続けました。ほとんど気づかれないうちに、異教の習慣がキリスト教会に浸透しました。妥協と順応の精神は、教会が異教の下で耐えた激しい迫害によって一時的に制限されました。しかし、迫害が止み、キリスト教が王の宮廷や宮殿に浸透すると、キリスト教はキリストとその使徒たちの謙虚な素朴さを脇に置き、異教の司祭や支配者の威厳と誇りと引き換えにしました。教会は神の主張の代わりに人間の理論と伝統を置きました。4世紀初頭のコンスタンティヌス帝の名目上の回心は大きな喜びを生み、義の形を身に着けた世界が教会に入りました。現在、汚職行為は急速に進行していた。異教は敗北したように見えたが、勝利を収めました。彼の霊は教会を支配していました。彼らの教義、儀式、迷信は、キリストの追隨者を公言する人々の信仰と崇拝に組み込まれました。

異教とキリスト教の間のこの妥協は、預言の中で預言されている、神に敵対し神よりも自分を高く評価する「罪の人」の発達をもたらしました。この偽りの宗教の巨大な体系はサタンの力の傑作であり、王座に座り、自分の意志に従って地球を支配しようとするサタンの努力の記念碑です。

サタンはかつてキリストとの約束を果たそうと苦労しました。彼は誘惑の荒野で神の御子のもとに来て、世界のすべての王国とその栄光を見せながら、もしイエスが闇の君主の優位性を認めていただければ、それらすべてを御自分の手に渡すと提案されました。キリストはその傲慢な誘惑者を叱責し、強制的に立ち去らせました。しかし、サタンは人間に対して同じ誘惑を与えることに成功しています。世俗的な名誉と利益を確保するために、教会は地上の偉人たちの支持と支持を求め、そのようにしてキリストを拒否したため、キリストはサタンの代表者であるローマ司教に従順になるよう仕向けられた。

ローマ主義の主な教義の1つは、教皇は世界各地の司教や牧師に対する最高の権威を与えられた普遍的キリスト教会の目に見える首長であるということです。それ以上に、教皇は神性の称号を誇張しています。彼は自らを「教皇なる主なる神」と呼び、無謬の存在であると主張し、すべての人が彼に敬意を払うよう要求しています。このように、誘惑の荒野でサタンが行った同じ主張が、今でもローマ教会を通じてサタンによって主張されており、膨大な数の人々がサタンに敬意を表する用意ができています。

しかし、神を畏れ敬う者は、ちょうどキリストが狡猾な敵の要求に直面したのと同じように、「あなたはあなたの神である主を崇拝しなければならない。そして彼だけに仕えるべきである」というこの大胆な思い込みで直面します。(ルカ 4:8)。神は御言葉の中で、人を教会のかしらに任命したということを決してほめかしていません。教皇至上主義の教義は、聖書の教えに真っ向から反対します。教皇は、篡奪による場合を除いて、キリストの教会に対していかなる権力も持たない。

ローマ主義者たちはプロテスタントを異端であり真の教会から意図的に分離しているとして非難することを主張してきた。しかし、これらの非難はむしろ彼ら自身に当てはまります。彼らはキリストの旗を捨て、「かつて聖徒たちに永遠に与えられた信仰」(ユダ3章)から背を向けた人々です。

サタンは、聖書によって人間がその欺瞞を見抜き、その力に抵抗できるようになるということをよく知っていました。世界の救い主ご自身がその攻撃に立ち向かったのは御言葉を通してでした。悪魔の攻撃のたびに、キリストは永遠の真理の盾を上げ、「それは書かれている」と言われました。敵対者のあらゆる提案に対して、彼は御言葉の知恵と力に反対しました。サタンが人間に対する支配を維持し、教皇の篡奪者の権威を確立するためには、人間を聖書に知られないようにする必要がありました。聖書は神を称賛し、有限な人間をその真の立場に置くでしょう。したがって、その神聖な真実は隠蔽され、抑圧される必要がありました。この論理はローマ教会によって採用されました。何百年もの間、聖書の配布は禁止されていました。人々はこの本を読んだり、家に置いたりすることを禁じられ、不謹慎な司祭や高位聖職者が自分たちの主張を擁護するためにその教えを解釈した。このようにして、教皇は教会と国家に対する権威を与えられた地上における神の代表者としてほぼ広く認識されるようになった。

エラー検出器が取り外された後、サタンは自分の意志に従って働きました。この預言は、教皇庁が「時代と法律を変える」ことを検討すると宣言しました(ダニエル7:25)。これを達成するのにそれほど時間はかかりません。異教からの改宗者に偶像崇拝の代替を許可し、名目上のキリスト教受容を促進するために、像や遺物の崇拝が徐々にキリスト教の礼拝に導入されていきました。総評議会の布告1により、最終的に偶像崇拝制度が確立されました。ローマはこの冒流的な行為を完了するために、像の崇拝を禁じる第二戒を神の律法から削除できると考え、十の数を維持するために第十戒を分割した。

異教に対する寛容の精神は、天の権威に対するさらなる軽蔑への道を開きました。サタンはまた、第4戒を台無しにすることを決意し、神が祝福し神聖化された日である数百万ドルの安息日を脇に置こうとしました2

、そしてその代わりに、異教徒が「太陽の崇敬すべき日」として祝う祭りを称賛しました。この変更は当初、公然と試みられたものではありませんでした。最初の数世紀、真の安息日はすべてのクリスチャンによって守られました。彼らは神の名誉に嫉妬し、神の律法は不変であると信じて、その戒律の神聖さを熱心に守りました。しかし、サタンは非常に巧妙に、自分の目的を達成するために手先たちを使って働きました。人々の注目を日曜日に集めるために、キリストの復活を祝う祭りが設立されました。その日は宗教的な礼拝が行われましたが、それでもレクリエーションの日として観察されました。同時に、安息日は依然として熱心に守られていました。

サタンは、自分が達成しようとしていた働きへの道を準備するために、キリストの出現以前にユダヤ人を率いて、安息日に最も厳しい要求を課し、安息日の遵守を重荷とした。さて、彼は安息日に投げかけた偽りの光を利用して、安息日をユダヤ人の制度として軽蔑した。キリスト教徒がそれを守り続ける限り、

サタンは日曜日を余暇の日として、ユダヤ教への憎しみを表し、土曜日を悲しみ、断食、憂鬱の日にするよう彼らに指示しました。

4世紀前半、コンスタンティヌス帝はローマ帝国全土で日曜日を公の祭典とする法令を颁布しました。3太陽の日は異教の臣民によって尊敬され、キリスト教によって尊重されました。異教とキリスト教の相反する利益を統合するのが皇帝の政策であった。彼は、野心と権力への渴望に突き動かされて、もしキリスト教徒と異教徒の両方が同じ日を祝えば、異教徒による名目上のキリスト教の受容が促進されることに気づいた教会の司教たちにそうするように説得された。教会の力と栄光を繁栄させます。しかし、クリスチャンは徐々に日曜日のある程度の聖さを持つものとして守るように導かれましたが、依然として真の安息日を主の聖日とみなし、第四戒に従ってそれを守りました。

大詐欺師はまだ仕事を終えていなかった。彼は自らの旗の下にキリスト教世界を団結させ、キリストの代表者であると主張する誇り高き教皇である副長官を通じて自らの権力を行使する決意を抱いていた。

半ば改宗した異教徒、野心的な高位聖職者、世界を愛する聖職者たちを通じて、彼はその目的を達成した。世界中から教会の高官が集まる大会議が時々開催されました。ほとんどすべての公会議では、神が定めた安息日もう少し強調される一方で、日曜日も同様に高く評価されました。このようにして、異教の祭りはついに神の制度として尊重されるようになりましたが、聖書の安息日はユダヤ教の遺物であると宣言され、その遵守は呪いであると宣言されました。

この偉大な背教者は、「神と呼ばれるもの、あるいは崇拜されるものすべてに対して」自分を高めることに成功しました（IIテサロニケ2：4）。彼は、全人類に対して生ける真の神を明確に示す神の法の唯一の戒めをあえて変更しました。

第四戒では、神は天と地の創造者として明らかにされ、次のとおりです。

したがって、偽りの神とは区別されます。7日目は創造の働きの記念として神聖視され、人間の休息の日として与えられました。それは、すべての存在の根源であり、尊敬と崇拜の対象として、神を常に人々の心の中に生き続けるために制定されました。サタンは人間を神への忠誠から遠ざけ、神の律法に従順から遠ざけようと努めています。したがって、彼は特に神が創造者であることを示す戒めに対抗することに焦点を当てています。

プロテスタントは現在、日曜日のキリストの復活がキリスト教の安息日となったと主張している。しかし、この主張を裏付ける聖書的な証拠は不足しています。キリストやその使徒たちはその日を何の栄誉も与えませんでした。キリスト教の制度として日曜日を守ることは、「不法行為の奥義」(IIテサロニケ2:7)に起源を持ち、パウロの時代には既にその働きが始まっていた。主はいつどこでこの教皇の息子を養子にしたのでしょうか？聖書が認めていない変更について、どのような正当な理由が挙げられるのでしょうか？

6世紀には教皇制がしっかりと確立されました。彼らの権力の座は帝都に確立され、ローマ司教がすべての教会の長であると宣言されました。異教主義は教皇制に取って代わられた。ドラゴンは獣に「その力と王座と大いなる力」を与えました（黙示録13:2）1。

こうして、ダニエル書と黙示録の預言で予告された1,260年にわたる教皇弾圧が始まった。2キリスト教徒は、誠実を維持して教皇の礼拝と儀式を受け入れるか、残りの人生を地下牢で過ごすか、地獄で死を迎えるかの選択を迫られた。拷問台、火刑、または死刑執行人の斧の下で。このようにして、イエスの言葉が成就した。「そして、あなたは両親、兄弟、親戚、友人にさえ裏切られ、彼らはあなたたちの何人かを殺すでしょう。あなたはわたしの名のせいで皆に憎まれるでしょう。」（ルカ21:16と

17) 。かつてないほどの激しい迫害が信者たちに襲いかかり、世界は広大な戦場と化した。何百年もの間、キリスト教会は人里離れた無名な場所に避難所を見つけました。預言者は、「しかし、その女性は荒野に逃げました。そこで神は彼女のために場所を用意し、そこで千二百六十日間彼女を養えるようにしてくださいました。」と述べました。（黙示録 12:6）。

ローマ教会の台頭は暗黒時代の始まりを示しました。

彼の力が拡大するほど、闇は深まった。信仰は真の基盤であるキリストからローマ教皇に移されました。人々は神の御子による罪の赦しと永遠の救いを信頼する代わりに、教皇が権威を委任した教皇、司祭、高位聖職者に目を向けました。彼らは、教皇が地上の仲介者であり、教皇を通してでなければ誰も神のもとに来ることができず、さらに教皇は神の代わりであり、暗黙のうちに従わなければならないと教えられた。

これらの要件からの逸脱は、犯罪者の身体と魂に対する最も厳しい刑罰を与えるのに十分な理由でした。こうして人々の心は、神から、間違いを犯し、誤りを犯し、残酷な人間たちへと、そしてさらに悪いことには、彼らを通して権力を行使する闇の君主自身へとそれていきました。罪は聖性を装っていました。

聖書が抑圧され、人間が自分が至高であると感じ始めると、私たちが期待できるのは詐欺、欺瞞、そして途方もない邪悪だけです。人間の法律や伝統が高度化するにつれて、神の律法を無視することから常に生じる腐敗が明らかになりました。

これらはキリスト教会にとって危険な日々でした。忠実な旗手は実際には少数でした。真実が証人なしで残されたわけではありませんが、誤謬と迷信が完全に蔓延し、真の宗教が地球から追放されるかのように時々思われました。福音は見失われましたが、宗教の形態は増加し、人々は厳しい要求にさらされました。

彼は教皇を仲介者として期待するだけでなく、罪の償いにふさわしい行いを信頼するように教えられました。長い巡礼、悔い改めの行為、聖遺物崇拜、教会、聖所と祭壇の建設、教会への多額の支払い、これらおよび多くの同様の行為は、あたかも神が同等であるかのように、神の怒りを鎮めるため、あるいは神の好意を確保するために命令された。人々よ、神は些細なことで怒るか、あるいは供物や悔い改めの行為で心を落ち着かせるべきである。

ローマ教会の指導者たちの間でも悪徳が蔓延していたにもかかわらず、その影響力は着実に増大しているように見えました。8世紀の終わり頃、教皇派は、教会の初期にはローマの司教たちも現在主張しているのと同じ霊的な力を持っていたと主張した。この主張を確立するには、彼に権威の顔を与えるためにいくつかの手段を採用する必要があり、これらは嘘の父によってすぐに提案されました。古代の文書は修道士によって偽造されました。これまで聞いたこともなかった公会議の布告が発見され、早い時期から教皇の普遍的優位性が確立されました。

そして、真実を拒否していた教会は、これらの欺瞞を熱心に受け入れました。

真の基礎 (I コリント 3:10 と 11) の少数の忠実な建設者たちは、偽りの教義の瓦礫が作業を妨げたときに当惑し、妨げられました。ネヘミヤの時代にエルサレムの城壁を建てた人々のように、「担ぐ者の力が衰え、瓦礫が多すぎて城壁を建てることはできない」と言おうとする人もいました。（ネヘミヤ 4:10）。迫害、詐欺、不法行為、そしてサタンが彼らの進歩を妨げようと企むあらゆる障害との絶え間ない闘いに疲れて、忠実な建設者だった人たちの中には落胆する者もいた。そしてあなたの平和と安全のために

財産と生命を真の基盤から変えます。敵の反対にもひるむことなく、恐れずにこう宣言した者たちもいた。そして彼らはそれぞれ剣を脇に担いで仕事を続けた(エペソ6:17)。

真理に対する同じ憎しみと反対の精神がどの時代でも神の敵を鼓舞しており、神の僕たちにも同じ用心深さと忠実さが求められてきました。最初の弟子たちに語られたキリストの言葉は、終わりの時にキリストに従う者たちにも当てはまります。「そして、わたしがあなたたちに言うことは、すべての人に言います。気をつけなさい。」

(マルコス 13:37)。

闇がさらに濃くなっていくような気がした。像崇拜はさらに広まりました。ろうそくは像と祈りが捧げられる前に燃やされました。非常に不条理な習慣や迷信が蔓延していました。人間の心は完全に迷信に支配されていたため、理性自体がその影響力を失ったかに思われた。司祭や司教は快楽を好み、官能的で墮落した人々だったため、彼らに指導を求めた人々が無知と悪徳に溺れることは予想できたほかありません。

11世紀に教皇グレゴリウス7世がローマ教会の完成を宣言したとき、教皇即位の新たな一歩が踏み出されました。彼が行った提案の中には、聖書によれば、教会はこれまで一度も誤ったことがないし、今後も誤ることはない、と宣言するものが含まれていました。しかし、聖書の証拠はこれらの主張を裏付けるものではありませんでした。教皇の誇りは皇帝を退位させる権限を主張し、自分が下したいかなる判決も誰にも覆すことはできないが、他のすべての決定を取り消すのは彼の特権であると宣言した。

この無謬性の擁護者の横暴な性格の異常な例は、ドイツ皇帝ハインリヒ4世の扱いに現れています。彼は教皇の権威を軽視したと考えられたため、この君主は破門され、廃位された。教皇の命令によって反乱を奨励された自分の王子たちの脱走と脅威に恐れを抱いたヘンリーは、ローマと和平を結ぶ必要性を感じた。彼は妻と忠実な従者とともに、教皇の前で謙虚になるために冬の間、アルプスを越えました。グレゴリウスが隠居していた城に到着すると、彼は衛兵の付き添いもなく外庭に連れて行かれ、そこで厳しい冬の寒さの中で、頭を覆わず、裸足で、みじめな服を着て許可を待った。教皇が彼の前に行くようにと。

ヘンリーが三日間断食して告白するまで、教皇は彼に恩赦を与えるよう恩着せがましく思いました。そしてその場合でも、これは皇帝が威厳を回復したり王権を行使したりする前に教皇の認可を待つという条件で与えられた。そしてグレゴリウスはこの勝利を誇りに思い、「王の誇りを和らげる」のが自分の義務であると豪語した。

この傲慢な教皇の圧倒的なプライドと、赦しと平和をもたらすために、心の扉で自身を受け入れてくださるよう懇願しているキリストの従順さと柔和との対比は、何と驚くべきことでしょう。弟子たち：「そして、あなたたちの中で一番になりたい人は、あなたの僕になりなさい。」(マタイ 20:27)。

その後何世紀にもわたって、ローマが教えた教義の誤りが着実に増加するのを目撃しました。教皇制が確立される前から、異教の哲学者の教えは教会に注目を集め、影響力を及ぼしていました。改宗したと主張する人々の多くは依然として異教哲学の教義に固執しており、研究を続けるだけでなく、異教徒の間で影響力を拡大する手段として他の人を説得していました。このようにして、キリスト教信仰に重大な誤りが持ち込まれたのです。人間の自然不死への信仰と死の認識は、人々の間で顕著でした。

彼らは、この教義はローマが聖人招請と聖母マリア崇拜を確立する基礎を築きました。そこからまた、悔い改めない者に対する永遠の責め苦という異端も生まれ、それは直ちに教皇の信仰に組み込まれた。

その後、ローマが煉獄と呼んだ別の異教の発明を導入するための道が用意され、それは信心深い迷信深い群衆を怖がらせるために使用されました。この異端を通して、彼女は永遠の滅びに値しない魂が罪の罰を受け、不純物から解放された後に天国に入れられる苦しみの場所の存在を肯定した。

ローマが信奉者の恐怖と悪徳を利用できるようにするには、さらに別の欺瞞が必要でした。それは免罪符の教義です。過去、現在、未来の罪の完全な赦しと、あらゆる付随的な苦痛と刑罰からの自由は、この世の支配を拡大し、敵を罰し、あるいは霊的優位性をあえて否定しようとする者たちを絶滅させるために教皇庁の戦争に参加したすべての人々に約束された。人々はまた、教会にお金を支払うことで罪から解放され、苦しみの炎の中に閉じ込められていた亡くなった友人の魂も解放できると教えられました。これらの手段によって、ローマは金庫を満たし、頭を置く場所のない主の代表者とされる人々の豪華さ、贅沢さ、そして悪徳を支援しました。

主の晩餐の聖書の儀式は、ミサの偶像崇拜の犠牲に取って代わられました。教皇の司祭たちは、無意味なパントマイムによって、単純なパンとワインをキリストの本当の体と血に変えることを意図していました。彼らは冒瀆的な僭越ながら、「万物の創造者である神を創造する」力を公然と主張した。すべてのキリスト教徒は死刑を覚悟の上で、天に反するこの恐ろしい異端への信仰を表明するよう求められ、それに屈することを拒否した群衆は火刑に処せられた。

13世紀には、教皇庁が創設したものの中で最も恐ろしい、異端審問が設立されました。闇の王子は教皇階層の指導者たちと協力していた。彼らの秘密会議では、サタンとその天使たちが邪悪な人々の心を支配していましたが、その一方で、彼らの真っ只中には神の天使が見えませんでした。その邪悪な布告の恐ろしい記録を作成し、誰にも見ることができないほど恐ろしい行為の歴史を書き残してしまいました。人間の目。「大いなるバビロン」は「聖徒たちの血に酔っていた」のです。何百万もの殉教者の切断された姿は、この背教的な権力に対する復讐を神に叫びました。

教皇制は世界の専制君主となった。王と皇帝はローマ教皇の布告に従った。人間の運命は、現在と永遠の両方で、彼のコントロール下にあるように見えました。何世紀にもわたって、ローマの教義は広範囲かつ明確に受け入れられ、その儀式は敬虔に行われ、その祝祭は一般的に観察されました。その聖職者は名誉があり、寛大に維持されていました。

ローマ教会がこれほど威厳、威厳、権力を獲得したことはかつてありませんでした。

教皇庁の正午は世界の道徳的な真夜中でした。聖書は人々だけでなく祭司たちにもほとんど知られていませんでした。

昔のパリサイ人たちと同じように、教皇派の指導者たちは自分たちの罪を明らかにする光を嫌いました。義の基準である神の律法が取り去られたことで、彼らは無制限の権力を行使し、制限なく悪徳を実践しました。詐欺、強欲、放蕩が横行した。男性は富や地位をもたらず可能性のあるいかなる犯罪からも手を下さなかった。教皇や高位聖職者の宮殿は最も卑劣な放蕩の現場であった。君臨する教皇の中には、あまりにも反抗的な罪を犯した者もいたため、世俗の総督たちはこれらの教会の高官を追放しようと努めた。

あまりにも卑劣な怪物として、容認できない。何世紀にもわたって、ヨーロッパでは知識、芸術、文明が進歩しませんでした。キリスト教は道徳的、知的麻痺に陥っていた。

教皇の統治下にある世界の状況は、預言者ホセアの次の言葉の恐ろしく衝撃的な成就を示していました。「私の民は知識がないために滅ぼされます。司祭であるあなたが知識を拒否したのですから、私もあなたを拒否します...あなたはあなたの神の律法を忘れました、私もあなたの子供たちを忘れます。」（ホセア書 4:6）。「そこには真実も愛も神についての知識もないからです。蔓延しているのは偽証、嘘、殺人、窃盗、姦淫だけであり、侵入と殺人に次ぐ殺人が存在します。」（ホセア書 4:1 と 2）。

これが神の言葉の追放の結果でした。

第4章

ワルドー派

教皇の覇権の長い時代に地球に降り注いだ暗闇の中でも、真実の光は完全に消えることはできませんでした。あらゆる時代に、神と人との間の唯一の仲介者としてのキリストへの信仰を大切に、聖書を人生の唯一の規則とし、真の安息日を聖く守った人々といった神の証人が存在しました。世界がこれらの人々にどれほどの借りがあるかは、後世には決して分からないでしょう。彼らは異端者として非難され、動機が問われ、人格が中傷され、著作が禁止され、歪められ、切断された。

しかし、彼らは確固たる信念を持ち、その純粋さを神聖な遺産として何世代にもわたって信仰し続けました。

ローマの覇権確立後の何世紀にもわたる暗闇の中での神の民の歴史は天に書かれていますが、人間の記録にはほとんどスペースがありません。彼の存在の痕跡は、迫害者の告発以外にはほとんど見つかりません。ローマの教義や法令から反対意見の痕跡をすべて取り除くのがローマの政策でした。彼が異端と考えたものは、人であれ文書であれ、すべて破壊されました。単純な疑いの表明、教皇の教義の権威に対する疑問は、富める者も貧しい者も、身分の高い者も低い者も命を奪うのに十分でした。ローマはまた、反体制派に対する残虐行為のあらゆる記録を破棄するよう努めた。教皇評議会は、そのような記録を含む書籍や著作物は火に投げ込まれるべきであると布告した。印刷機が発明されるまで、本の冊数は少なく、保存が難しい素材で作られていました。したがって、ローマ主義者たちの目的遂行を阻止するためにできることはほとんどありませんでした。

ローマの管轄範囲内にある教会は、長い間安心して良心の自由を享受できませんでした。教皇庁が権力を手に入れるとすぐに、その権威を認めることを拒否するすべての人々を打ち砕くためにその腕を伸ばしました。そして諸教会は次々と彼の統治に服従した。

原始キリスト教はイギリスに非常に早くから根付きました。最初の数世紀にイギリス人が受け取った福音には、ローマ人の背教による腐敗がありませんでした。この遠い海岸にまで及んだ異教の皇帝に対する迫害は、英国の最初の教会がローマから受け取った唯一の贈り物でした。

多くのキリスト教徒はイングランドでの迫害から逃れてスコットランドに避難しました。そこから真理はアイルランドに伝わり、これらすべての国でそれは喜んで受け入れられました。

サクソン人がイギリスに侵攻すると、異教が支配権を獲得しました。征服者たちは奴隷から指導を受けることを軽蔑し、キリスト教徒は荒野の山や沼地への撤退を余儀なくされた。しかし、しばらく隠れていた光は輝き続けました。1世紀後のスコットランドでは、その輝きは遠く離れた地まで広がりました。アイルランドから敬虔なコロンバとその協力者たちがやって来て、アイオナ島の孤島に散り散りになった信者を集め、その場所を宣教活動の中心とした。これらの伝道者の中には聖書の安息日を守る者もいたため、この真理は人々に伝えられました。アイオナ島に学校が設立され、そこから宣教師たちがスコットランドやイングランドだけでなく、ドイツ、スイス、さらにはイタリアに向けて出発しました。

しかしローマはイギリスに目を付け、これを自国の統治下に置くことを決意していた。6世紀に、その宣教師は異教のサクソン人の改宗を引き受けました。彼らは誇り高き野蛮人たちに好意的に受け入れられ、数千人にローマ信仰を告白するよう誘導した。活動が進むにつれ、教皇派の指導者とその改宗者たちは初期キリスト教徒に遭遇した。見事なコントラストを見せた。後者は性格、教義、マナーにおいて素朴で謙虚で聖書的でしたが、前者は教皇の迷信、尊大さ、傲慢さを表していました。

ローマの特使は、これらのキリスト教会が主権者である教皇の優位性を認めるように要求した。英国人たちは、自分たちはすべての人を愛したいと思っているが、教皇には教会内で優位に立つ権利はなく、キリストに従うすべての人に課せられる服従を教皇に委ねることしかできないと、おとなしく答えた。ローマへの服従を得ようと何度も試みがなされましたが、謙虚なキリスト教徒たちは、使者たちが示した誇りに驚き、自分たちはキリスト以外の主人を知りませんときっぱりと答えました。その時、教皇制の真の精神が明らかになりました。ローマ主義者の指導者はこう言いました。「平和をもたらしてくれる兄弟たちを受け入れなければ、戦争をもたらす敵を受け入れることになるでしょう。もし彼らが私たちと団結してサクソン人に生き方を示さなければ、彼らは彼らから致命的な打撃を受けるでしょう。」これらは無駄な脅しではありませんでした。これらの聖書信仰の証人に対して戦争、陰謀、欺瞞が利用され、ついには英国の教会が破壊されるか教皇の権威に服従せざるを得なくなりました。

ローマの管轄外の土地には、教皇の腐敗からほぼ完全に免れたキリスト教徒のグループが何世紀にもわたって存在していた。彼らは異教に囲まれており、時間が経つにつれてその誤りの影響を受けました。しかし、彼らは信仰の唯一の規則として聖書を守り続け、その真理の多くに従いました。これらのキリスト教徒は神の律法の永続を信じ、第四戒の安息日を守りました。この信仰と実践を維持する教会は中央アフリカとアジアのアルメニア人の間に存在しました。

しかし、教皇の権力の濫用に抵抗した人々の中で、ワルドー派が最初の者であり続けた。教皇庁がその王位を固定したまさにこの地で、その虚偽と腐敗は最も断固として抵抗された。何世紀にもわたって、ピエモンテの教会は独立性を維持しました。しかしローマが彼の服従を要求する時が来た。彼の圧制に対する効果のない闘争の後、これらの教会の指導者たちは、地球全体が敬意を表しているように見える権力の優位性をしぶしぶ認めました。しかし、教皇や高位聖職者の権威に屈することを拒否した人もいました。彼らは神への忠実さを維持し、信仰の純粋さと単純さを維持しようと決意していました。それから別れがありました。古い信仰にしがみついている人たちは離れていきました。ある者は故郷のアルプスを捨て、異国の地で真実の旗を掲げた。他の人たちは狭い孤立した谷や岩だらけの山の隠れ家に撤退し、そこで神を崇拝する自由を守りました。

何世紀にもわたってワルドー派のキリスト教徒によって維持され教えられてきた信仰は、ローマによって広められた偽の教義とは著しく対照的でした。彼の宗教的信念は神の言葉、つまりキリスト教の正当な体系に基づいていました。しかし、世間から隔離され、群れやブドウ畑で日々の労苦に追われ、人里離れた隠遁生活を送っているこれらの謙虚な農民たちは、背教した教会の教義や異端に対抗する真理に自分たちだけで到達したわけではなかった。彼の信仰は最近受け入れられていませんでした。彼の宗教的信念は両親から受け継がれました。彼らは使徒教会の信仰、つまり「かつて聖徒たちに伝えられた信仰」（ユダ3章）を求めて争った。「砂漠の教会」であり、大首都に鎮座する誇り高き階級ではありません。

世界はキリストの真の教会であり、神が世界に与えるためにその民に与えられた真理の宝の守護者でした。

真の教会をローマから分離させた主な原因の一つは、聖書の安息日に対する憎しみでした。預言で予言されたとおり、教皇の権力は真実を地面に投げ捨てました。神の律法は踏みにじられ、人間の伝統と習慣は高揚されました。教皇庁の影響下にあった教会はすぐに日曜日を聖日として尊重することを余儀なくされました。蔓延する誤謬と迷信の間で、神の真の民の中でも多くの人が非常に当惑し、安息日を守りながら日曜日にも仕事を休んだ。しかし、これは教皇指導者らを満足させるものではなかった。彼らは日曜日を聖く守ることだけでなく、安息日を冒瀆することも要求した。そして彼らは、あえて彼の名誉を守ろうとする者たちを、より厳しい言葉で非難した。ローマの権力から逃れることによるのみ、平和のうちに神の律法に従うことができた人もいました。

ワルド派は、ヨーロッパのすべての民族の中で、初めて聖書の翻訳を入手した人々でした。宗教改革の数百年前、彼らは母国語で書かれた手書きの聖書を持っていました。彼らは汚れない真実を力に持っており、それが彼らを憎悪と迫害の特別な対象にした。彼らは、ローマ教会は黙示録から背教されたバビロンであると宣言し、命の危険を冒してその腐敗に抵抗するために立ち上がった。長期にわたる迫害の継続的な圧力の下で、多くの人が信仰を曲げ、独自の原則を少しずつ放棄する一方で、真理に堅く立つ人もいた。何世紀にもわたる暗闇と背教を通して、ローマの優位性を否定し、像崇拝を偶像崇拝として拒否し、真の安息日を守ったワルド一派の人たちがいました。最も激しい反対の嵐の中でも、彼らは信仰を守り続けました。サヴォイア人の槍で刺され、ローマの火で焦げても、彼らは神の言葉と神の名誉によって揺るぎませんでした。

何世紀にもわたって、迫害され抑圧されてきた人々の避難所であった山のそびえ立つ城壁の後ろに、ワルド一派の人々は隠れ場所を見つけました。そこには中世の暗闇の中でも真実の光が灯され続けた。そこでは千年にわたり、真理の証人たちが古代の信仰を守り続けました。

神はご自分の民に、彼らに託された力強い真理にふさわしい、印象的な壮大な聖域を備えてくださいました。忠実な流刑者たちにとって、山々はエホバの不変の義の象徴でした。彼らは子供たちに、不変の威厳で頭上にそびえ立つ高みを指さし、変化も変化の影もなく、その言葉が神の言葉として永遠に続く神のことを話しました。

永遠の山々。神は山々を築き、力を与えてくださった。無限の力を持つ腕以外に彼らをその場所から動かすことはできません。同様に、神は天と地における神の統治の基礎である法を確立されました。人間の腕は同胞たちに届き、彼らの命を絶つことはできるが、その腕は、山々を根元から引き抜いて海に投げ込むことは、エホバの律法の戒律を変えたり、神の律法の一つを破壊したりするのと同じくらい無力だろう。御心を行う者たちに与えられた約束。神の律法に忠実であるために、神の僕たちは不変の山のようにしっかりしていなければなりません。

眼下の谷を取り囲む山々は、神の創造力の絶えざる証人であり、神の保護の確かな保証でした。これらの巡礼者たちは、エホバの臨在の静かな象徴を愛することを学びました。彼らは、運命の困難のために嘆きに屈しませんでした。彼らは山の中で孤独を感じることはありませんでした。彼らは人間の怒りと残虐行為から身を守る場所を与えてくださった神に感謝しました。彼らは神を崇拝する自由を喜びました。

多くの場合、敵に追われると、高山の要塞が

彼らに安全な防御を提供しました。巨大な崖の上から彼らは神への賛美を歌い、ローマの軍隊も彼らの感謝の歌を黙らせることができなかった。

これらキリストに従う人々の敬虔さは、純粋で、単純で、熱心でした。彼らは、家や土地、友人、親戚、さらには人生そのものよりも、真理の原則を大切にしました。彼らはこれらの原則を若者の心に注意深く刻み込もうとしました。若者たちは幼い頃から聖書を教えられ、神の律法の要求を神聖に守るように教えられました。聖書のコピーは稀でした。このため、その貴重な真実は記憶に残されました。多くの人は、旧約聖書と新約聖書の両方の大部分を繰り返すことができました。神の思いは、このように崇高な自然の風景や日常生活のささやかな祝福と結びついていました。幼い子供たちは、あらゆる恩恵とあらゆる慰めを与えてくださる神を感謝の気持ちを持って見つめることを学びました。

思いやりがあり愛情深い両親は、子供たちを非常に賢明に愛し、子供たちが自己満足に慣れることを許しませんでした。彼らの前には苦しみと苦難の人生、そしておそらくは殉教者の死が横たわっていた。彼らは子供の頃から、困難に耐え、支配に服従し、しかも自分で考えて行動するように教育されてきました。彼らは幼い頃から、責任を持つこと、スピーチで評価されること、そして沈黙の知恵を理解することを教えられてきました。不用意な言葉が敵の耳に入ると、それを発した人の命だけでなく、何百人もの同胞の命も危険にさらす可能性がある。なぜなら、獲物を狩る狼のように、真実の敵は自らの自由を主張しようとする人々を迫害するからである。酒、宗教的信仰。

ワルドー派の人々は真理のために長年の繁栄を犠牲にし、忍耐強く日々の糧を得るために戦いました。山間の耕作可能な土地はすべて注意深く開発されました。谷や不毛な斜面は、生産できるように加工されました。経済と厳しい自己否定は、子供たちが唯一の遺産として受けた教育の一部でした。

彼らは、神が人生を規律あるものとして設計したこと、そして彼らの必要は個人的な努力、先見の明、配慮、信仰によってのみ満たされることを教えられました。このプロセスは骨の折れる面倒なものでしたが、有益であり、人間が墮落した状態で必要とするものでした。神があなただけの訓練と成長のために用意した学校です。

若者は困難の中で苦勞することに慣れていましたが、知性の文化は無視されなかった。若者たちは、自分たちの能力はすべて神のものであり、神への奉仕のためにすべてが改善され、発展しなければならないと教えられました。

ワルドー派の教会は、その純粋さと簡素さにおいて、使徒時代の教会に似ていました。彼らは教皇と高位聖職者の優位性を拒否し、聖書を唯一、最高、絶対の権威として支持した。彼らの牧師たちは、ローマの傲慢な司祭とは異なり、「奉仕されるためではなく、奉仕するために来た」主の模範に従いました。（マタイ 20:28）。彼らは神の群れに餌を与え、神の聖なる御言葉の緑の牧草地と生きた泉へと導きました。人間の尊大さと誇りのランドマークから遠く離れた人々は、壮大な教会や大聖堂ではなく、山の陰やアルプスの渓谷、あるいは危険な時には岩だらけの要塞に集まり、話を聞きました。キリストの僕、真理の言葉。牧師たちは福音を説くだけでなく、病気の子供たちを訪問し、要理問答をし、道を誤った子供たちを戒め、紛争を解決して調和と兄弟愛を促進するよう努めました。平和な時代には、人々からの自発的な寄付によって彼らは支えられました。しかし、ポールのように、

テント職人は、それぞれが何らかの商売に従事したり、必要に応じて自分の生活を支えるための職業を学んだりしていました。

若者たちは牧師から指示を受けました。一般学習の分野にも注意が払われましたが、聖書が主な学習でした。マタイとヨハネの福音書は記憶に残り、また多くの書簡も記憶に残りました。彼らは聖書を写すのにも忙しかったです。いくつかの写本には聖書全体が含まれており、他の写本には短い抜粋のみが含まれており、聖書を説明できる人によって本文の簡単な説明が加えられていました。このようにして、神よりも自分を高めようとする人々によって長い間隠されていた真理の宝が暴露されたのです。

時には地球の深くて暗い洞窟の中で、たいまつのみかりの下で、辛抱強くたゆまぬ労働を経て、聖書は一節一節、章ごとに書き写されました。このようにして働きは続き、明らかにされた神の意志は純金のように輝きました。そして、彼らの愛が経験した試練のおかげで、それがどれほど明るく、より明確で、より強力になったかは、同様の仕事に従事している人だけがそれを理解することができます。天から来た天使たちがこれらの忠実な働き手を取り囲みました。

サタンは教皇の司祭と高位聖職者に、真理の言葉を誤謬、異端、迷信のゴミの下に葬るようそそのかしましたが、それは暗黒時代を通して最も素晴らしい方法で朽ちることなく保存されました。それは人間の刻印ではなく、神の刻印を帯びていました。人間は聖書の単純で純粋な意味を曖昧にし、聖書を自分の証言と矛盾させようと不屈の努力を続けてきましたが、嵐の海の箱舟のように、神の言葉は破壊の危機に瀕する嵐を克服します。鉱山には地表の下に豊富な金銀の鉱脈が隠されており、その貴重な鉱脈を発見するには誰もが掘らなければならないのと同じように、聖書には真剣で謙虚で敬虔な探求者にのみ明らかにされる真理の宝が含まれています。神は聖書を、幼少期、青年期、成人期に至るまで、全人類の教科書として、あらゆる年齢層で研究できるように設計されました。神はご自身の啓示として人々に御言葉を与えられました。新たに発見された真実はそれぞれ、その作者の性格を新たに明らかにするものです。聖書の研究は、人間を創造者との親密なつながりに導き、神の意志についてのより明確な知識を与えるために神が定めた手段です。それらは神と人間の間のコミュニケーション手段です。

ワルドー派の人々は、主への畏れを知恵の原理と考えていましたが、心を広げ、知覚を目覚めさせる上で、世界との接触、人間の知識と活動的な生活の重要性を盲目的にしていたわけではありません。山岳学校からフランスやイタリアの都市の教育機関に進学した若者もいたが、そこでは故郷のアルプスよりも研究、思想、観察のためのより広範な分野があった。こうして派遣された若者たちは誘惑にさらされ、悪徳を目の当たりにし、最も巧妙な異端と最も危険な欺瞞を持ち込んだサタンの狡猾な手先に直面しました。しかし、子供時代からの彼らの教育は、これらすべてに備えるものでした。

彼らが通っていた学校では、誰も自分の腹心になってはいけなさとされていました。彼らの衣服は、彼らの最大の宝物である貴重な聖書写本を隠すようにデザインされていました。彼らは、何か月、何年にもわたる懸命な努力の成果を持ち歩き、疑惑を抱かずにそれができると、真実を受け入れるために心を開いているように見える人々の手に慎重に一部を渡しました。

ヴォードワの若者たちは母親の膝からこの目的を念頭に置いて訓練を受けてきました。彼らは自分たちの仕事を理解し、忠実に実行しました。真の信仰への改宗者はこれらの教育機関で得られ、多くの場合、

原則が学校全体に浸透していることがわかりました。しかし、教皇派の指導者たちは、最も厳格な調査にもかかわらず、腐敗した異端とされるものの根源を発見できなかった。

キリストの霊は宣教者です。新しくされた心の最初の衝動は、他の人を救い主に導くことです。それがワルドー派キリスト教徒の精神でした。彼らは、神が彼らに求めているのは、単に教会内で真理を純粋に保つことだけではない、と感じていました。暗闇の中にいる人々に光を当てる義務が彼らに課せられていたのです。彼らは力強い神の御言葉を通して、ローマが課した捕囚を打破しようと努めました。ワルドー派の牧師は宣教師として訓練を受けました。宣教者としての奉仕を希望する人は皆、まず伝道者としての経験を積むことが求められました。彼らは故郷の町の教会を担当する前に、どこかの宣教地で3年間奉仕しなければなりません。この奉仕は、最初は自己否定と犠牲を要求するものでしたが、人々の魂にとって試練の時代に司牧生活への適切な導入でした。神聖な職への叙階を受けた若者たちは、地上の富や栄光の見通しではなく、厳しい労苦と危険に満ちた人生、そしておそらくは殉教者の運命を目の前にしていました。

宣教師たちは、イエスが弟子たちを遣わしたのと同じように、二人ずつ去って行きました。一般に、若者はそれぞれ、より年齢と経験のある男性と結びつき、仲間の指導の下にあり、その仲間が訓練の責任者であり、若者はその指示に耳を傾けるべきでした。これらの同僚はいつも一緒にいたわけではありませんが、祈りやカウンセリングのために頻りに集まり、信仰においてお互いを強めました。

彼らの任務の目的を公にすれば、彼らは敗北を確信するだろう。したがって、彼らは慎重に自分たちの本当の性格を隠しました。各牧師は商業や専門分野の知識を有しており、宣教師たちは世俗的な職業を装って活動を続けた。彼らは通常、商人または販売者になることを選択します。彼らは、シルク、レース、宝石など、当時では簡単には見つからなかった厳選された貴重な品物を取引し、そうでなければ撃退されていたであろう場所に参入することができました。同時に、彼らは神に心を上げ、金や宝石よりも貴重な宝物を差し出す知恵を求めました。彼らは聖書の完全版または部分版を持ち歩き、機会があるたびにそれを提示し、顧客の注意をこれらの写本に集めました。神の言葉を読むことによって関心が引き起こされることも多く、その一部はそれを受け取りたいと願う人々に喜んで残されました。

これらの宣教者の働きは自分たちの山のふもとや平原や溪谷で始まりましたが、その限界をはるかに超えて広がりました。彼らは、主人と同じように、裸足で、旅の痕跡が残る素朴な服を着て、大都市を通り抜け、遠い土地に入った。彼らは貴重な種をあちこちにまき散らしました。彼らの行く手には教会が現れ、殉教者の血が真実を証明しました。神の日には、これら忠実な人々の働きから生じる魂の豊かな収穫が明らかにされるでしょう。神の言葉はベールに包まれ、静かにキリスト教世界に伝わり、人々の家庭や心に幸せな受け入れを見出しました。

ワルドー派の人々にとって、聖書は単に過去の人間に対する神の扱いの記録や現在の責任と義務の啓示ではなく、将来の危険と栄光を明らかにするものでした。彼らは万物の終わりはそう遠くないと信じており、祈りと涙を流しながら聖書を研究するうちに、聖書の貴重な記述と、救いの真理を他の人に知らせるという自分たちの義務にさらに感銘を受けるようになりました。彼らは神聖なページに明確に明らかにされた救いの計画を見て、信仰の中に慰め、希望、平安を見いだしました。

イエスにおいて。光が彼らの理解を照らし、彼らの心を喜ばせたように、彼らは教皇の過ちという闇に巻き込まれた人々に光を当てることを切望した。

彼らは、教皇と司祭たちの指示のもと、大勢の人々が魂の罪による肉体の苦しみの赦しを得ようと無駄に努力しているのを目にしました。自分たちを救うための善行を信頼するように教えられた彼らは、常に自分自身を見つめ、自分の罪深い状態について考え、神の怒りにさらされ、魂と体を苦しめているのに、何の救いも見つけれないのを目の当たりにしていた。このようにして、良心的な魂はローマの教義によって束縛されました。何千人もの人々が友人や親戚を捨て、修道院の独房で生涯を過ごしました。頻繁な断食と残酷な鞭打ち、真夜中の通夜、薄暗い部屋の冷たく湿った石の上に長時間ひれ伏すこと、長い巡礼、屈辱的な苦行と忌まわしい拷問によって、何百万もの人々が良心の平安を無駄に求めた。多くの人は罪の意識に抑圧され、神の報復の怒りの恐怖に悩まされ、疲れきった本性が衰えるまで苦しみ続け、一筋の光も希望もなく墓に沈みました。

ワルドー派の人々は、これらの魂たちに命のパンを分かち合い、神の約束にある平和のメッセージを明らかにし、救いの唯一の希望としてキリストを指し示したいと願いました。彼らは、善行によって神の律法の違反を償うことができるという教義は誤りであると述べた。人間の功績を信頼すると、キリストの無限の愛のビジョンが妨げられます。墮落した人類は神に勧めることができないため、イエスは人間の犠牲として死なれました。十字架につけられ復活した救い主の功德はキリスト教の信仰の基礎です。魂のキリストへの依存は現実のものであり、キリストとのつながりは、手足と体、または枝とブドウの木の関係と同じくらい親密なものでなければなりません。

教皇や司祭の教えにより、人々は神の性格、さらにはキリストの性格さえも厳しく、暗く、敵対的なものとして見るようになりました。救い主は、墮落した状態にある人間に対してあまりにも同情心を欠いているとして描かれているため、司祭や聖人の仲介が求められるべきである。神の御言葉によって心を啓発された人々は、これらの魂たちに慈悲深く愛に満ちた救い主としてイエスを指し示し、罪、配慮、疲労の重荷を抱えてすべての人をイエスのもとに来るよう両手を広げて招くことを切望していました。彼らは、人々が約束を見て直接神のもとに来て罪を告白し、許しと平安を得られないようサタンが築いた障害を取り除くことを目的としていました。

ワルドー派の宣教師は熱心に、探究心に福音の貴重な真理を明らかにしました。彼は細心の注意を払って聖書の書かれた部分を提示しました。復讐心に燃えて裁きの執行を待っている神を垣間見ることしかできなかった良心的で罪に打ちひしがれた魂に希望をもたらすことが彼の最大の喜びでした。彼は震える唇と涙目で、しばしば膝を曲げながら、罪人の唯一の希望を明らかにする貴重な約束を兄弟たちに発見しました。このようにして、真実の光が多くの暗い心に浸透し、暗雲をはねのけ、正義の太陽が心に輝き、その光線に癒しをもたらすまでになりました。聖書のある部分が何度も読まれることがよくあり、聞き手は正しく聞いたかを確認するように繰り返して読みたいと思っていました。「御子イエス・キリストの血は、すべての罪から私たちを清めてくださいます。」という言葉の繰り返しが切に望まれていました。(ヨハネ第一 1:7)。「そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。それは、彼を信じる者が永遠の命を得るためです。」(ヨハネ 3:14 および 15)。

多くの人はローマの要求に騙されることができなかった。彼らは、罪人に代わって人間や天使が仲介することがいかに無駄であるかを知っていました。

真の光が彼らの心に現れると、彼らは喜びの声を上げました。「キリストは私の祭司であり、彼の血は私の犠牲です。あなたの祭壇は私の告白です。」彼らはイエスの功績に全面的に信頼し、「確かに、信仰がなければ神を喜ばせることは不可能です」という言葉を繰り返しました。（ヘブル11:6）。

「そして、他の誰にも救いはありません。なぜなら、私たちが救われなければならない、天の下で人間の間に与えられた名前は他にないからです。」（使徒 4:12）。

嵐に翻弄された哀れな魂の中には、救い主の愛の確信を理解するのが難しいように思われた人もいました。それがもたらした安堵感あまりにも大きく、彼らに注がれた光の洪水はあまりにも大きかったので、彼らは天国に連れて行かれたように見えました。

彼の手は自信を持ってイエスの手に置かれました。彼の足は時代の岩の上に置かれました。死の恐怖はすべて追放されました。今、彼らは、このようにして自分たちの救い主の御名を敬うことができれば、刑務所と火刑を切望するかもしれません。

神の言葉は隠れた場所に運ばれ、時には一人の魂に、時には光と真実を求めるグループに読み上げられました。多くの場合、一晩中このようにして過ごしました。聴衆の驚きと賞賛があまりにも大きかったので、慈悲の使者は、救いの知らせを理解できるようになるまで、読むのをやめざるを得なくなることがよくありました。次のような言葉が繰り返し発せられました。「神は本当に私の捧げ物を受け入れてくださるでしょうか。彼は私に微笑んでくれるでしょうか？許してくれますか？」すると答えが読み上げられました。「すべて苦労している人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。そうすれば休ませてあげます。」

（マタイ 11:28）。

信仰は約束をしっかり守りました、そして、次のような喜びの反応が聞こえました。神聖な聖遺物箱までの苦痛な旅はもう必要ありません。私は罪深く、聖くないありのままの姿でイエスのもとに来ることができます。そしてイエスは悔い改めの祈りを軽蔑されません。「あなたの罪は赦されます。」私の、そう、私の罪は許されるのです！」

聖なる喜びの流れが心を満たし、イエスの御名は賛美と感謝によって高められました。これらの幸せな魂たちは、光を広めるために家に帰り、自分たちの新しい経験を可能な限り最善の方法で他の人たちに繰り返しました。彼らが真の生きた道を見つけたという経験。聖書の言葉には、真理を求める人々の心に直接語りかける、不思議で厳粛な力がありました。彼女は神の声であり、それを聞いた人々に確信をもたらしました。

真理の使者は自らの道を歩みましたが、彼の謙虚な様子、誠実さ、真剣さ、そして深い熱意はしばしば観察の対象でした。多くの場合、聴衆は彼にどこから来たのか、どこへ行くのか尋ねませんでした。最初、彼らはとても驚き、驚き、そして感謝と喜びのあまり、彼に質問することさえ考えませんでした。彼らが家まで一緒に連れて行って欲しいと主張すると、彼は、群れの迷子の羊を訪ねなければならないと答えた。「彼は天国から来た天使なのではないでしょうか？」と彼らは尋ねました。

多くの場合、真実の使者はもはや姿を消しました。彼は他の土地に旅し、未知のダンジョンで残りの人生を過ごしたか、あるいは真実を目撃した場所で骨が白くなっていたのかもしれませんが。しかし、彼が残した言葉を消すことはできなかった。

彼らは人々の心の中で仕事をしていました。祝福された結果は裁きの中でのみ完全に明らかになりません。

ワルド一派の宣教師がサタンの王国に侵入し、闇の勢力がさらなる警戒を呼び起こしました。真実を前進させようとするすべての努力は悪の王子によって監視され、彼は彼のエージェントの恐怖を興奮させました。

教皇派の指導者たちは、これらの謙虚な人々の労働が自分たちの大義にとって大きな危険であると認識した。

遍歴者。もし真実の光が妨げられることなく輝くことができれば、人々を覆っていた誤謬の厚い雲は払拭されるでしょう。それは人々の心を神だけに向けさせ、最終的にはローマの優位性を破壊するでしょう。

古代教会の信仰の維持者であるこの人々の真の存在は、ローマの背教の絶え間ない証拠であり、したがって最も激しい憎悪と迫害を引き起こしました。彼らが聖書に従うことを拒否することは頻繁に行われた違反であり、ローマは容認できませんでした。彼女は彼らを地球上から一掃することに決めました。今、山の故郷で神の民に対する最も恐ろしい十字軍が始まりました。異端審問官たちは彼を追いかけ、無実のアベルが残忍なカインの前に倒れる場面が何度も繰り返された。

彼らの肥沃な土地は何度も何度も荒廃し、家や礼拝堂は流され、かつては豊かな畑と勤勉な人々の家があった場所には、今では砂漠だけが残されました。猛獣が血の味にさらに激怒するにつれ、犠牲者の苦しみに対する教皇派の怒りもさらに激しくなった。これらの純粋な信仰の証人の多くは山中で迫害され、深い森や岩の尖塔に囲まれた谷で隠れて追われました。

この禁止された階級の道徳的性格に対して告発することはできませんでした。敵でさえ彼らを平和で静かで敬虔な人々だと宣言しました。彼らの大きな罪は、教皇の意志に従って神を崇拜しなかったことです。

この罪のために、人間や悪霊が考えられるあらゆる屈辱、侮辱、拷問が彼らに課せられました。

かつてローマがこの憎むべき宗派の根絶を決意したとき、ローマ教皇（インノケンティウス 8 世、西暦 1487 年）から彼らを異端者として非難する勅令が発布されました。彼らを屠殺場に引き渡すのです。彼らは浮浪者、不正者、無秩序者として非難されなかったが、「真の群れの羊」を誘惑する敬虔さと神聖さの外観を持っていたと宣言された。したがって、教皇は、「邪悪で忌まわしい一派の邪悪な者たち」が棄権を拒否するのであれば、「毒蛇のように打ち碎かれるべきである」と命じた。この傲慢な権力者は再びこうした言葉に直面しなければならないと予想していたのだろうか。裁きの際に自分と対峙するために、それらが天の書に記録されていることを彼は知っていたのだろうか。「あなたがわたしの兄弟たちの中で最も小さい者の一人にしたのと同じくらい、わたしにも同じことをしたのです。」（マタイ 25:40）。

この雄牛は教会員全員に異端者に対する十字軍への参加を呼びかけた。この残酷な仕事に参加する動機として、その人は「教會的、一般的、個人的な苦しみと罰をすべて免除された。雄牛は、十字軍に参加したすべての人を、誓ったであろうあらゆる誓いから解放しました。それは、彼らが不法に取得した可能性のあるあらゆる財産に対する彼らの権利を正当化し、異端者の殺害などのすべての罪の赦免を約束した。

それはヴォードワ家のために結ばれたすべての契約を無効にし、使用人たちにヴォードワ家を放棄するよう命令し、すべての人々にヴォードワ家への援助を禁じ、すべての人々に彼らの財産を所有する権限を与えた。」この文書は舞台裏の支配魂を明らかにします。ここで聞こえるのはキリストの声ではなく、竜の咆哮です。

教皇の指導者たちは自分たちの性格を神の法の偉大な基準に合わせたくなかったが、従うべき独自の基準を作り、ローマがそれを望んでいたため、すべての人にそれに従うよう強制することにした。最も恐ろしい悲劇が行われました。腐敗した冒瀆的な司祭や教皇たちは、サタンが彼らに指示した仕事を行っていました。彼の本性の中に慈悲の余地はありませんでした。キリストを十字架につけ、使徒たちを殺した同じ霊。同じ

血に飢えたネコを動かして当時の信徒たちに敵対させた人物は、神に愛された者たちを地上から排除するために働いていた。

神を畏れる民に対して何世紀にもわたって行われた迫害に、イエスは救い主を敬う忍耐と不屈の精神で耐えられました。彼らに対する十字軍と残酷な虐殺にもかかわらず、彼らは貴重な真実を広めるために宣教師を派遣し続けました。彼らは狩られて死にましたが、彼らの血は蒔かれた種に水を与え、実を結ぶことを止めませんでした。このようにして、ワルド派の人々はルター誕生の何世紀も前に神を証言しました。彼らは多くの土地に種をまき、ウィクリフの時代に始まり、ルターの時代には非常に広く深く成長した宗教改革の種を蒔いたが、それはまた「すべてのことを苦しむことを厭わない人々」によって、世の終わりまで進められなければならない。神の言葉とイエスのあかしがあるからである」（黙示録 1:9）。

第5章

ジョン・ウィクリフ

宗教改革以前には聖書は数部しかありませんでしたが、神は御言葉が完全に消滅することを許しませんでした。その真実は永遠に隠されたままになるわけではありません。彼は、刑務所の扉を開け、鉄の門のボルトを外して召使たちを解放することができたように、命の言葉の束縛を簡単に外すことができました。ヨーロッパのさまざまな国で、神の御霊は人々を動かして、隠された宝としての真理を探求させました。彼らは聖書の摂理に導かれて、熱心に聖なるページを研究しました。彼らは、たとえ自分自身を犠牲にしても、光を喜んで受け入れました。彼らはすべてのものをはっきりと見ることはできませんでしたが、長い間隠されていた真実を認識することはできました。天から遣わされた使者のように、彼らは誤りと迷信の鎖を断ち切り、長い間奴隷にされていた人々に立ち上がり、自由を宣言するよう呼びかけ続けた。

ワルドー派の人たちを除いて、神の言葉は何世紀にもわたって、学者だけが知っている言語に閉じ込められてきましたが、聖書が翻訳され、それぞれの国の人々の手に渡されるべき時が来ました。母語。世界は真夜中を過ぎた。暗闇の時間が消え、多くの場所で夜明けの前兆が現れました。

14世紀、イギリスに「宗教改革の明けの明星」が現れました。ジョン・ウィクリフは、イギリスだけでなくキリスト教世界全体の改革の先駆者でした。彼が表明することを許されたローマに対する大規模な抗議活動は決して沈黙させられるべきではない。この抗議活動は個人、教会、国家の解放をもたらす闘争を引き起こしました。

ウィクリフは寛大な教育を受けましたが、彼にとって主を恐れることは知恵の始まりでした。彼は大学内でその熱烈な信心深さだけでなく、卓越した才能と豊富な知恵でも知られていました。彼は知識への渴望のあまり、あらゆる分野の知識に精通しようと努めました。ウィクリフはスコラ哲学、教会規範、民法、特に自国の民法について教育を受けました。彼の後の作品では、彼の教育の価値が非常に明らかになりました。当時の思弁的な哲学をよく知っていたため、その誤りを明らかにすることができ、国家法と教会法を研究することで、市民的および宗教的自由のための途方もない闘争に取り組む準備ができていました。彼は神の言葉から得た武器を振るいましたが、学校で学んだ知的訓練により、哲学的神学者の戦術を理解することができました。彼の天才的な強さ、知識の範囲と有効性は、友人と敵の両方から尊敬を集めました。ウィクリフの信奉者たちは、自分たちの擁護者がこの国で最も特権的な頭脳の第一人者であり、彼の党派の無知や弱さを暴露することで、彼の敵が宗教改革の大義を軽蔑するのを防いだことを満足そうに見ていた。

ウィクリフはまだ大学に在学していたとき、聖書を勉強し始めました。聖書が古代言語でのみ存在していた当時、学者たちは文盲階級には閉ざされていた真実の源への道を見つけることができました。このようにして、改革者としてのウィクリフの将来の仕事への道はすでに準備されていました。学者たちは神の言葉を研究し、そこに明らかにされた神の無償の恵みの偉大な真実を発見しました。彼の教えを通して

彼らはこの真実の知識を広め、他の人たちを生ける神託者に頼るように導きました。

ウィクリフの注意が聖書に向けられたとき、彼は学校の教えを習得することを可能にしたのと同じスキルで研究に専念しました。それまで彼は、学業も教会の教えも満たすことができない大きな必要性を感じていました。ウィクリフは神の御言葉の中で、これまで探し求めていたものが無駄であることを発見しました。その中で彼は救いの計画が明らかにされ、キリストが人間の唯一の擁護者として示されるのを見ました。彼はキリストへの奉仕に身を捧げ、自分が発見した真理を宣言することを決意しました。

将来の改革者と同様に、ウィクリフも仕事を始めた時点では、それがどこに向かうのか予測できませんでした。彼は意図的にローマに敵対したわけではありません。しかし、真実への献身は彼を虚偽と衝突させずにはいられませんでした。彼は教皇制度の誤りをより明確に認識するほど、聖書の教えをより断固として提示しました。彼は、ローマが神の言葉を人間の伝統と交換していることに気づきました。ウィクリフは恐れることなく、聖書を禁止したとして神権を非難し、聖書を人々に回復し、教会にその権威を確立するよう要求した。彼は有能で熱心な教師であり、雄弁な説教者でした。彼の日常生活は、彼が宣言した真実を明確に示していました。彼の聖書の知識、推論の力、純粋な人生、そして不屈の勇気は、彼に一般的な尊敬と自信を勝ち取りました。多くの人々は、ローマ教会にはびこる不正を見て、以前の信仰に不満を抱き、ウィクリフが提示した真理を隠し切れない喜びで称賛しました。しかし、教皇派の指導者たちは、この改革者が自分たちよりも大きな影響力を獲得していることに気づき、激怒した。

ウィクリフは間違いを鋭敏に発見し、ローマ当局によって認められた多くの不正行為を恐れることなく攻撃しました。彼が国王の従軍牧師を務めていたとき、教皇がイングランドの君主に要求した貢物の支払いに勇敢に反対し、世俗の統治者に対する教皇の権威の主張は理性にも啓示にも反していることを示した。教皇の要求は大きな憤りを呼び起こし、ウィクリフの教えは国の指導者たちに影響を与えた。国王と貴族たちは団結して教皇のこの世の権威に対する主張を否定し、貢物の支払いを拒否した。

このようにして、イングランドにおける教皇の優位性に有効な打撃が与えられた。

改革者が長く断固とした戦いを繰り広げたもう一つの悪は、托鉢修道士団の設立であった。これらの修道士たちはイングランドに群がり、国の偉大さと繁栄を妨げた。産業、教育、道徳、あらゆるものに悪影響が及んでいました。僧侶たちの怠惰な生活と物乞いは、人々の資源を貪欲に浪費するだけでなく、生産的な労働に対する軽蔑をもたらした。若者は意気消沈し、墮落した。修道士たちの影響で、多くの人々が修道院に入り修道生活に専念するよう誘導されたが、これは両親の同意がないだけでなく、両親の知らないうちに、また命令に反して行われた。ローマ教会の初期の教父の一人は、親孝行の愛や義務よりも修道院生活の主張を強調し、次のように宣言しました。あなたを養った乳房をあなたの足の下に置き、まっすぐにキリストのもとに行きなさい。」ルターが後にこの題名を付けたように、「キリスト教徒と人間というより狼と圧制の匂いがするこの恐ろしい非人道的行為によって、子供たちの心は親に対してかたくなになってしまいました。」このようにして、教皇の指導者たちは、昔のパリサイ人たちと同じように、自分たちの罪のために神の戒めを脇に置いたのです。

伝統。そのため、家は荒廃し、親は息子や娘との付き合いを奪われました。

大学の学生さえも僧侶たちの虚偽の表現にだまされ、彼らの教団への参加を誘導された。多くの人は後に、自分たちの人生を台無しにし、両親に悲しみをもたらしたことを知り、自分のとった行動を後悔しました。しかし、一度罷にはまってしまうと、自由を手に入れることは不可能でした。多くの親は僧侶の影響を恐れ、子供を大学に行かせることを拒否した。大規模な教育センターに通う学生の数は減少した。学校は閉鎖され、無知が蔓延しました。

教皇はこれらの修道士たちに懺悔を聞いて許しを与える権限を与えた。これが巨悪の根源となった。修道士たちは収入を増やす傾向にあったため、赦免を与える用意ができていたため、あらゆる種類の犯罪者が彼らに頼るようになり、この状況が最悪の悪徳の急速な増加をもたらしました。病人や貧しい人々は苦しむまま放置され、彼らの必要を軽減するはずだった寄付金は僧侶たちに渡され、僧侶たちは命令から施しを差し控えた人々の不敬虔を非難して、脅迫して人々に寄付金を要求した。貧しい職業にもかかわらず、修道士たちの富は絶えず増加し、彼らの壮麗な建物と豪華な食卓は、国の貧困の増大をさらに明らかにしました。そして、彼らは贅沢と快楽に時間を費やしていた一方で、彼らは人々を楽しませ、僧侶たちをさらに信頼させるために、魅力的な物語や伝説を語り、ジョークを言うことしかできない無知な人々を彼らの代わりに送り込んだのです。しかし、修道士たちは引き続き迷信深い群衆を統制し続け、すべての宗教上の義務が法に含まれていると信じ込ませた。

聖人崇拜と修道士への寄付において教皇の優位性が認められ、これは彼らに天国への居場所を保証するのに十分だった。

賢明で敬虔な人々はこれらの修道会に改革をもたらすために努力を無駄にしましたが、ウィクリフはより明確なビジョンを持って、この制度自体が誤りであり廃止されなければならないと宣言し、悪の根源を突き刺しました。議論と調査が始まりました。修道士たちが教皇の許しを売りに国中を旅する中、多くの人が金銭で許しを得られる可能性に疑問を抱き、神とローマ法王のどちらに許しを求めべきか尋ねた。少なからぬ者が、際限のない貪欲な修道士たちの能力に驚いた。「ローマの修道士や高位聖職者たちは、癌のように私たちをむさぼり食っている」と彼らは言いました。神が私たちを救い出さなければ、人々は滅びてしまいます。」自分たちの強欲を隠すために、これらの托鉢修道士たちは救い主の模範に従うと主張し、イエスと弟子たちは人々の慈善によって支えられてきたと宣言した。このふりは、多くの人が自分自身で真理を学ぶために聖書に導かれたので、彼らの大義を傷つける結果となりましたが、これは何よりもローマにとって最も望ましくない結果でした。人々の心は真実の源へと向けられ、それを隠すのがローマの目的でした。

ウィクリフは修道士たちに反対する論文を書いて出版し始めたが、修道士たちと論争するためではなく、聖書とその著者の教えに人々の心を惹きつけるためであった。彼は、赦免や破門の権限は一般の司祭と同等に教皇が持っており、神からの有罪判決を自らに課さない限り、いかなる人も真に破門されることはできないと主張した。これ以上効果的な方法はなく、教皇が建て、何百万もの魂と肉体が囚われていたあの巨大な物質的・霊的支配構造の破壊に着手することはできなかったであろう。

ウィクリフはローマの干渉から英国王室の権利を守るために再び召喚され、王室大使に任命されて2年間を過ごした。

オランダで数年間、教皇の代表者らと会談した際のこと。そこで彼はフランス、イタリア、スペインの聖職者たちと連絡を取り合い、状況を再検討し、イギリスでは隠されていた多くの事柄についての知識を得る機会を得た。彼は多くのことを学び、それが後の仕事の基礎となりました。

これらの教皇法廷の代表者の中に、彼は階級の本当の性格と目的を読み取った。その後、彼はイギリスに戻り、以前の教えをより公然と、より熱心に繰り返し、貪欲、高慢、欺瞞こそがローマの神であると宣言しました。

論文の中で、教皇とその収集家について次のように述べています。彼らは私たちの土地から貧しい人々の支援と毎年何千マルク、そして秘跡や霊的なもののために国王のお金を取り上げていますが、これは呪われた異端であるシモニーであり、キリスト教世界全体が彼らの異端を支持し、維持させています。実際、たとえ私たちの王国が莫大な金の山を所有して、この誇り高く世俗的な司祭の収集家以外に誰もそれを手に入れなかったとしても、彼は私たちの国からすべてのお金を奪っているのです。時間が経つにつれて、この地位は枯渇するでしょう。土地を与え、彼はそのシモニーに対する神の呪い以外には何も見返りを与えません。」

イングランドに戻ってすぐに、ウィクリフは国王からラターワースの牧師館への任命を受けました。これは、少なくとも君主が彼の明晰な演説に動揺していないことを確信するものであった。ウィクリフの影響は、国民の信念だけでなく裁判所の行動の形成にも感じられました。

教皇の雷が即座に彼に投げつけられた。3頭の雄牛がイングランドに派遣され、1頭は大学、1頭は国王、1頭は高位聖職者に派遣され、異端教師を黙らせるための即時かつ断固とした措置を命じた。しかし、雄牛が到着する前に、司教たちは熱意を持ってウィクリフを召喚し、裁判のために彼らの前に出廷させた。しかし、王国で最も権力のある二人の王子が法廷に同行し、人々が建物を取り囲み、急速に襲撃したため裁判官を威圧したため、訴訟は一時的に中止され、ウィクリフは平和に釈放されることが許された。

その直後、高位聖職者らが高齢であることを利用して改革者に対して影響力を及ぼそうとしたエドワード3世が亡くなり、ウィクリフの元保護者が摂政となった。

しかし、教皇勅書の到着により、イングランド全土で異端者を投獄するという強制命令が出された。これらの測定値は、たき火を直接示していました。ウィクリフが間もなくローマの復讐の餌食になるのは確実であるように思われた。

しかし、過去に「恐れることはありません…私はあなたの盾です」(創世記15:1)と宣言された神は、再び御手を差し伸べてご自分のしもべを守られました。死は改革者ではなく、破滅を布告した教皇に訪れた。グレゴリウス11世が亡くなり、ウィクリフの裁判に集まっていた聖職者たちは散り散りになった。

神の摂理はまた、宗教改革の成長の機会を与える出来事を促進しました。グレゴリウスの死後、対立する二人の教皇が選出された。それぞれ無謬を公言する二つの相反する勢力が今や服従を要求した。それぞれが信者たちに、自分が相手と戦争をするのを助けるよう呼びかけ、敵対者に対するひどい非難と、自分を支持した者たちへの天国での報いの約束で要求を強化した。これらの出来事は教皇権の力を大きく弱めた。対立する派閥は互いに攻撃するためにあらゆる手を尽くし、ウィクリフにはしばらく休息が与えられた。教皇から教皇へと非難と非難が飛び交い、相反する主張を支持するために血の奔流が流された。犯罪とスキャンダルが教会に押し寄せた。

一方、改革者はラターワースの教区の静かな隠れ家で、

争う教皇たちから平和の君であるイエスへと人々の注意をそらすよう熱心に取り組んでいる。

それが引き起こしたすべての対立と腐敗を伴う分裂は、宗教改革への道を準備し、人々が教皇権が実際に誰であるかを知ることが可能にしました。ウィクリフは、出版した論文「教皇の分裂」の中で、この二人の司祭が互いを反キリストとして非難することにおいて真実を語っていないかどうかを考えるよう人々に呼びかけた。「悪魔はもはや一人ではなく、二人の祭司を支配しているのです」と彼は言った。キリストの御名において、人々がその両方に打ち勝てますように。」

ウィクリフは師と同じように貧しい人々に福音を説きました。ラッターワースにある教区の質素な家々に光を広めるだけでは飽き足らず、彼はイングランド全土に光を届けようと始めました。この意図を果たすために、彼は真理を愛し、それを広めることだけを望んでいた素朴で敬虔な説教者のグループを組織しました。彼らはどこへでも行き、市場、大都市の路上、田舎の路地で教えました。彼らは高齢者、病人、貧しい人を探しに行き、神の恵みの良い知らせを彼らに伝えました。

オックスフォード大学の神学の教授として、ウィクリフは大学のホールで神の言葉を説きました。こうして彼は、自分の世話を受けている生徒たちに真実を非常に忠実に明らかにしたため、「福音の博士」という称号を得ました。しかし、彼の生涯の偉大な仕事は、聖書を英語に翻訳することでした。『聖書の真実と意味』と題された著書の中で、彼は英国のすべての人が素晴らしい聖書を母国語で読めるよう、聖書を翻訳する意向を表明しました。

神の作品。

しかし突然、彼らの仕事は中断されました。彼はまだ60歳に達していなかったが、絶え間ない労苦と勉強、そして敵の攻撃によって体力が奪われ、早老となった。ウィクリフは危険な病気に侵されました。その知らせは修道士たちの間で大きな歓喜を引き起こした。

今、彼は自分が教会に与えた害を激しく悔い改めるだろうと彼らは考えた。彼らは彼の自白を聞くためにすぐに彼の宿舎に行きました。4つの宗教教団の代表者と6人の公務員が、瀕死と思われる男性の周りに集まった。「あなたの唇には死が待っている」と彼らは言いました。

「あなたの非を認め、私たちの前であなたが私たちに不利益をもたらす発言をすべて撤回してください。」改革者は黙って耳を傾け、それから助手にベッドから持ち上げるように命じた。辞任を待つ彼らをじっと見つめながら、彼は、何度も彼らを震え上がらせてきたことを、毅然とした強い声で言った。「私は死ぬことはありませんが、生きて修道士たちの悪行を宣言します。」僧侶たちは驚き、当惑し、足早に部屋を出ていきました。

ウィクリフの言葉は現実になりました。彼は、ローマに対するあらゆる武器の中で最も強力な武器を同胞たちの手に渡し、人々を解放し、啓蒙し、福音を伝えるために天が定めた手段である聖書を彼らに与えるために生きました。この仕事を遂行するには、克服しなければならない大きな障害がたくさんありました。ウィクリフは病弱に悩まされており、この仕事をするのにあと数年しか残っていないことを知っていました。彼は直面しなければならない反対に気づきましたが、神の言葉の約束に励まされて、何も恐れることなく前進しました。豊富な経験と知的能力の最大限の活力で、彼は特別な神の摂理によって最大限の努力をするために保存され、準備されていました。キリスト教世界全体が混乱に巻き込まれている間、改革者はラッターワースの牧師館で、外で吹き荒れている嵐には注意を払わず、任命された任務に全力を尽くした。

ついにその仕事が完成しました。これは史上初の聖書翻訳です。神の言葉はイギリスに開かれていました。改革者は今や刑務所も火刑も恐れなかった。

彼は英国国民の手に決して消えることのない光を与えたのです。同胞に聖書を与えたウィクリフは、戦場で最も輝かしい勝利を収めること以上に、無知と悪徳の鎖を断ち切り、祖国を解放し高揚させるために多くのことを行った。

印刷技術がまだ知られていなかったので、時間と労力を要する作業によってのみ聖書の部数を増やすことができました。この本の入手に対する関心が非常に高かったため、多くの人が自発的にこの本を書き写す作業に従事しましたが、写本作成者がその需要に応えるのは困難でした。最も裕福なバイヤーの中には、聖書全体を欲しが人もいました。他の人は一部だけ購入しました。多くの場合、数家族が集まって購入しました。それでウィクリフの聖書はすぐに人々の家庭に入りました。

人間の理性への訴えは、彼らを教皇の教義への受動的服従から目覚めさせた。ウィクリフは現在、プロテスタントの独特の教義、つまりキリストへの信仰による救いと聖書の唯一無謬性を教えています。彼が派遣した説教者たちは改革者の著作とともに聖書を配布し、その新しい信仰がイングランドの人口のほぼ半数に受け入れられるほどの成功を収めた。

聖書の出現は教会当局に恐怖をもたらしました。今、彼らはウィクリフよりもはるかに強力な手段、つまり彼らの武器がほとんど役に立たないエージェントと対峙しなければなりません。当時、聖書は英語で出版されたことがなかったため、イギリスには聖書を禁止する法律はありませんでした。人気のある。その後、そのような法律が制定され、厳格に施行されました。一方、祭司たちの努力にも関わらず、しばらくの間、神の言葉が広まる機会があった。

ここでも教皇派の指導者たちは改革者の声を沈黙させようと共謀した。彼は続けて3つの法廷に出廷するよう呼び出されたが、無駄だった。まず、司教会議は彼の著作を異端と宣言し、若き国王リチャード二世を味方に付けて、非難される教義を信じる者全員を投獄する勅令を獲得した。

ウィクリフは教会会議から議会に上訴した。彼は恐れることなく国家評議会で階級制度を非難し、教会が認めた甚大な虐待に対する改革を求めた。彼は説得力を持って教皇庁の篡奪と腐敗を描いた。彼の敵は混乱した。ウィクリフの友人や支持者は服従を余儀なくされ、改革者自身も高齢で孤独で友人もいなかったため、国王と留め継ぎの権威を合わせたものの前に自信を持って屈服することが期待されていた。しかしその代わりに、法王派は敗北したことに気づいた。ウィクリフの心を揺さぶる訴えに目覚めた議会は迫害令を廃止し、改革者は再び解放された。

彼は3度目の裁判にかけられ、今度は王国の最高の教会法廷で裁判にかけられた。彼は異端に対して好意を示さなかった。結局のところ、その中でローマは勝利し、改革者の働きは停止されるでしょう。法王派はそう考えた。もし彼らが目的を達成することができれば、ウィクリフは彼の教義を放棄するか、法廷を直接炎にさらすことを余儀なくされるだろう。

しかしウィクリフは撤回しなかった。彼はディシミュレーションを使うことができなかった。彼は恐れることなく自分の教えを守り、迫害者の非難に反論しました。自分自身と自分の立場を見失った彼は、聴衆を神の法廷に召喚し、彼らの詭弁と欺瞞を永遠の真実の天秤で秤にかけた。その議会ホールでは聖霊の力が感じられました。天上の魅惑が彼の聴衆を支配した。彼らにはその場を離れる力がないようだった。主の矢筒から射出された矢のように、改革者の言葉は彼らの心に突き刺さりました。彼らが彼に対して課した異端の非難は、自分たち自身に投げかけられた。当たり

誰が自分たちの間違いをあえて広めたのか、と彼は尋ねた。利益を得るために、神の恵みを売り込むためです。

最後に彼はこう言った。「誰と争っていると思う？墓の端にいる老人と一緒に？いいえ！「真実を、あなたよりも強く、あなたを打ち破る真実を。」 そう言って彼は集会から撤退したが、敵対者は誰も彼を止めようとしなかった。

ウィクリフの仕事はほぼ完成していた。彼が長い間持ち続けてきた真実の旗が彼の手から落ちそうになった。しかしもう一度、彼は福音について証ししなければなりません。真実は、まさに誤謬の王国の本拠地から宣言されることになっていた。ウィクリフは、聖徒たちの血を頻繁に流したローマの教皇法廷に出廷するよう呼び出された。彼は自分を脅かす危険に気づいていなかったわけではありませんが、もし麻痺の発作で旅行が不可能になっていなければ、召喚に従ったでしょう。しかし、ローマでは彼の声は聞こえませんでした。手紙では話すことができました。そして彼はそうしました。

宗教改革者は牧師館から教皇に宛てた手紙を書いたが、その手紙はイントネーションにおいて敬意を表し、精神的にはキリスト教的であったものの、教皇庁の尊大さと誇りに対する鋭い叱責であった。「本当に、私は自分が抱いている信仰をすべての人々に明らかにして宣言できることをうれしく思います。特にローマ司教には、私が正しくて真実であると思っているので、私のいわゆる信仰を喜んで確認してくれるでしょう。」、間違っていたら修正します。第一に、私はキリストの福音が神の律法の全体であると信じています...ローマ司教は、この地球上でキリストの代理人であるため、すべての人間以上にローマ司教と結びついていると主張し、主張します。福音の律法。なぜなら、キリストの弟子たちの中での偉大さは、尊厳や世俗的な名誉にあるのではなく、キリストの生涯と態度において、正確に、そして非常に忠実に従うことであつたからである...キリストは、ここへの巡礼の時、最も貧しい人であり、軽蔑し、拒絶していた。すべては世俗的な名誉と支配だ。」

「いかなる忠実な人間も、主イエス・キリストに従った点を除いて、教皇自身や他の聖なる人に従うべきではない。ペテロとゼベダイの子らは、キリストの足跡に従うことに反して、世の名誉を望んで罪を犯したので、これらの過ちに従うべきではないからである。」

「教皇は、すべてのこの世の支配と統治を世俗権力に委ねなければならず、そのためには、キリストが、特に使徒たちがそうされたように、教皇はすべての聖職者を効果的に説得し、勧告しなければならない。」

「これらの点のいずれかで私が誤りを犯した場合、私は謙虚に矯正し、必要であれば死にさえ従うつもりです。もし私が自分の意志と欲望に従って働くことができれば、私は間違いなくローマ司教の前に出るでしょう。しかし主はそうではなく、人ではなく神に従うように私に教えられました。」

最後にウィクリフはこう述べた。「私たちの神、主に祈りましょう。神が私たちの教皇ウルバヌス6世を、すでになさっているように動かして、聖職者たちとともに生活や態度において主イエス・キリストに従うことができるようにしてくださいませよう。そして彼らは人々に効果的に教えることができ、彼らもまた彼らに忠実に従うことができるのです。」

こうしてウィクリフは教皇と枢機卿たちにキリストの柔和さと謙虚さを示し、彼らだけでなくキリスト教世界全体に、彼らと彼らがその代表者であると公言する主との対照を示した。

ウィクリフは確かに、自分の命が忠誠の代償になるだろうと予想していた。国王、教皇、司教たちは彼の破滅を促進するために団結しており、彼と火刑との間にはせいぜい数カ月しかないのは確実であるように思われた。しかし、彼の勇気は揺るぎませんでした。「なぜあなたは遠く離れた殉教の栄冠を求めることについて話すのですか？」と彼は言いました。「誇り高き高位聖職者たちにキリストの福音を宣べ伝えよ、そうすれば殉教することはない」

行方不明になります。何！黙って生きるべきでしょうか...絶対にだめです！打撃を与えましょう。

あなたのお越しをお待ちしております。」

しかし、神の摂理は依然として神の僕を守っていました。生涯を通して、日々命の危険にさらされながらも真実を守るために勇敢に立ち上がったこの男は、敵の憎しみの犠牲になることはなかった。ウィクリフは自分を守ろうとしたことは一度もありませんでしたが、主が彼の守護者でした。そして今、敵が獲物を確信したとき、神の手は彼を彼らの手の届かないところから遠ざけました。ラッターワースの教会で聖体拝領をしようとしていたとき、彼は麻痺に陥り、間もなく命を断ちました。

神はウィクリフに彼の仕事を割り当てました。彼は真理の言葉を口に置き、その言葉が人々に届くように周りに警備員を置きました。彼の命は守られ、宗教改革の偉大な事業の基礎が築かれるまで彼の労働は続きました。

ウィクリフは暗黒時代の暗黒時代から現れました。彼の前には、その働きによって改革の体系を形作ることができた人は誰もいなかった。洗礼者ヨハネのように、特別な使命を遂行するために動かされた彼は、新しい時代の先駆者でした。しかし、彼が提示した真理体系には、彼に続いた改革者たちが超えることができず、100年経っても達成できなかった統一性と完全性があった。基礎は非常に広くて深く築かれ、その構造は非常に堅固で真実であったため、彼の後に来た人々によってそれを再構築する必要はありませんでした。

ウィクリフが始めた偉大な運動は、良心と知性を解放し、長い間ローマの勝利の戦車にくびきをされていた国々を解放することであり、その源は聖書にありました。14世紀以来、命の水のように流れ続ける祝福の流れの源がここにありました。ウィクリフは、神の意志の靈感による啓示、信仰と実践の十分な規則として暗黙の信仰を持って聖書を受け入れました。彼はローマ教会を神聖で間違いのない権威として尊重し、千年前に確立された教えと習慣を疑いの余地のない敬意をもって受け入れるように教育を受けていました。しかし、彼は神の聖なる御言葉を聞くためにこれらすべてから向きを変えました。これが彼が人々に認識するよう求めた権威でした。

教会が教皇を通して語るのではなく、唯一の真の権威は御言葉を通して語る神の声でなければならないと彼は宣言しました。そして彼は、聖書は神の御心を完全に啓示したものであるだけでなく、聖霊がその唯一の解釈者であり、すべての人はその教えを研究することによって自分自身の義務を学ぶべきであると教えました。このようにして、ウィクリフは人々の心を教皇やローマ教会から神の言葉へと向けさせました。

彼は最も偉大な改革者の一人でした。知的な幅の広さ、思考の明晰さ、真実を堅持する堅固さ、そしてそれを擁護する勇敢さにおいて、彼に匹敵する者はほとんどいなかった。人生の純粹さ、勉強と仕事へのたゆまぬ勤勉さ、朽ちない誠実さ、そして宣教活動におけるクリスチャンの愛と忠実さが、最初の改革者たちの特徴でした。そしてそれは、彼が生きた時代の知的な無名性と道徳的腐敗にもかかわらずです。

ウィクリフの性格は、聖書の教育力と変革力を証明しています。彼を今の人間たらしめたのは聖書でした。啓示の偉大な真理を理解しようとする努力は、すべての能力に新鮮さと活力を与えます。心を広げ、知覚を研ぎ澄まし、判断力を成熟させます。聖書の研究は、他の研究ではできないほど、あらゆる考え、感情、願望を高貴なものにします。彼は目的の安定、忍耐、勇気、そして不屈の精神を与えます。それは人格を磨き、魂を聖化します。注意深く聖書を敬虔に研究する —

心を無限の心と直接接触させることで、世界の人々に

人類哲学の資源によってもたらされた最も有能な訓練によって、これまで以上に強力な知性と崇高な原則がもたらされました。「あなたの御言葉の説明は光を与えます」と詩編作者は言います、「それは単純な人に理解を与えます」(サルモ 119:130)。

ウィクリフが教えた教義はしばらくの間広がり続けました。「ウィクリフアイトまたはロラード」として知られる彼の信奉者は、イングランドを越えただけでなく、他の土地に広がり、福音の知識をもたらしました。指導者がいなくなった今、説教者たちは以前よりさらに熱心に働き、群衆は彼らの教えを聞くために群がりました。

改宗者の中には貴族の者や国王の妻も含まれていた。

多くの場所で人々のマナーに顕著な改革が起こり、ローマ主義の偶像崇拝の象徴が教会から取り除かれました。しかし間もなく、聖書をガイドとして受け入れようとした人々に対して残酷な迫害の嵐が起こりました。イングランドの君主たちはローマの好意によって自らの権力を強化することに熱心で、改革者たちを犠牲にすることをためらわなかった。イングランドの歴史上初めて、福音の弟子たちに対して焚き火が命じられた。殉教が続いた。

真実の擁護者たちは、非合法化され拷問を受けながらも、自分の考えを吐き出すことしかできなかった。

万軍の主の耳元で叫びます。教会の敵、王国への反逆者として追われた彼らは、貧しい人々の貧しい家にできる限り避難所を求め、穴や洞窟にさえ隠れながら、秘密の場所で説教を続けました。

迫害の怒りにもかかわらず、蔓延する宗教的信仰の腐敗に対する冷静で敬虔で熱烈で忍耐強い抗議活動が何世紀にもわたって続いた。初期の時代のクリスチャンは真理について部分的な知識しか持っていませんでしたが、神の言葉を愛し、従うことを学び、神のために辛抱強く苦しみました。使徒時代の弟子たちと同様に、多くの人々がキリストのために世俗の財産を犠牲にしました。自分の家に住むことを許された人々は、追放された同胞を喜んで保護し、自分たちも追放されたとき、破門された者の運命を喜んで受け入れた。

何千人もの人々が、迫害者の激怒に怯えて、信仰の犠牲によって自由を獲得し、悔い改める服を着て刑務所を出て、自分たちの放棄を公にしたのは事実です。しかし、高貴な生まれの男性や貧しい境遇の男性も含め、ダンジョンや「ロラードの塔」、そして拷問と炎の真っ只中で、恐れることなく真実を証言し、自分が存在することに喜びを感じた人も少なくありませんでした。「神の苦難への参加」を知る価値があると考えられています。

法王派はウィクリフの生前に自分たちの遺言を課すことができず、ウィクリフの遺体が墓に安らかに眠っている間、彼らの憎しみは満たされなかった。改革者の死後 40 年以上が経過したコンスタンス公会議の布告により、彼の骨は掘り起こされて公開で焼かれ、灰は近くの川に捨てられました。「小川は彼の遺灰をエイボン川に運び、エイボン川はセバーン川に、セバーン川は小さな海に、そして灰は大海に運んだ」と古代の作家は述べています。したがって、ウィクリフの遺灰は彼の教義の象徴であり、その教義は現在世界中に広められています。敵は自分たちの悪意のある行為の意味をほとんど理解していませんでした。

ボヘミアのジョン・ハスは、ウィクリフの著作を通じて、ローマ主義の多くの誤りを放棄し、宗教改革の活動に参加するように導かれました。このようにして、遠く離れたこの二国に真実の種が蒔かれました。作品はボヘミアから他の土地に広がりました。人々の心は次のようなものに向けられました。

長い間忘れられていた神の言葉。神の御手は大宗教改革への道を準備していました。

第6章

ハスとジェローム

福音は新世紀にはすでにボヘミアで確立されました。聖書は翻訳され、公の礼拝は人々の言語で行われました。しかし、教皇の権力が増大するにつれて、神の言葉は曖昧になっていきました。「王の誇りを打ち砕く」と豪語したグレゴリウス7世も同様に民衆を奴隷化する意図を持っており、その結果、ボヘミア語で公の礼拝を禁止する勅令を配布しました。教皇は、「神は未知の言語で礼拝が祝われたことを喜ばれ、この規則を守らなかった結果、多くの悪と異端が生じたことを喜んだ。」と宣言し、ローマは神の言葉の光を消し、人々を閉じ込めることを命じた。暗闇の中で。しかし、天は教会を保存するための別の手段を備えていました。

迫害によってフランスとイタリアの家を離れることを余儀なくされたワルドー派とアルビジョワ派の多くはボヘミアに行きました。彼らは公に教える勇氣はなかったものの、隠れて熱心に働きました。このようにして、真の信仰は世紀から世紀へと保たれてきました。

フスの時代より前、ボヘミアには教会の腐敗と民衆の放蕩行為を公然と非難するために立ち上がった人々がいた。彼の作品は幅広い関心を引き起こしました。階層構造への恐怖が目覚め、福音の弟子たちに対する迫害。彼らは森や山での崇拝を強制され、兵士に追われ、多くが殺されました。しばらくして、ローマのカルトから離れた者には火あぶりになると脅す法令が発令されました。しかし、クリスチャンたちは自らの命を捨てながらも、自分たちの大義の勝利を待ち望んでいました。「救いは十字架につけられた救い主への信仰によってのみ見出されると教えた」人の一人は、亡くなる際に次のように宣言した。剣も権威も持たない一般の人々の中から立ち上がった者たちは、彼に対して勝つことはできないだろう。」ルター時代はまだ遠いものでした。しかし、誰かがすでに立ち上がっていて、ローマに対する証言をして諸国を揺るがす人物がいた。

ジョアン・フスは貧しい出自を持ち、幼い頃に父親の死により孤児となりました。彼の敬虔な母親は、教育と神への畏れを最も貴重な財産として尊重しており、息子のためにそのような相続財産を確保しようと努めました。フスは州立学校で学び、その後プラハ大学に進学しましたが、そこで貧しい学生として入学しました。彼は母親も旅行に同行した。未亡人で貧しい彼女には、息子に与える相続財産も世の富もありませんでした。しかし、彼らが大都市に近づくと、彼女は父親のいない若者の隣にひざまずき、彼に天の父の祝福を祈りました。自分の祈りがどのように聞き届けられるか、彼女はほとんど想像していませんでした。

大学では、ハスはその不屈の努力と急速な進歩によってすぐに頭角を現し、その非の打ちどころのない人生と穏やかで愛想の良い態度は彼に一般の尊敬を勝ち取りました。彼はローマ教会の誠実な信奉者であり、ローマ教会が与えると公言する霊的祝福の熱心な探求者でした。聖年に際し、彼は告解に行き、なげなしの貯金の最後の数枚の硬貨を持ち出しました。

彼は約束された赦免に参加するために行列に参加した。高校卒業後、出家した。彼は急速に名声を博し、すぐに宮廷に召されました。彼は教授にもなり、後には学長にもなりました。

彼が教育を受けた大学。数年のうちに、その貧しい学生は国の誇りとなり、彼の名前はヨーロッパ中で有名になりました。

しかし、ハスが改革活動を始めたのは別の分野でした。司祭の命令を受けて数年後、ベツレヘム礼拝堂の説教者に任命されたこの礼拝堂の創設者は、一般言語による聖書の説教を非常に重要なテーマとして擁護していました。ローマはこの慣行に反対したが、ボヘミアでは完全に阻止されなかった。しかし、聖書に関しては大きな無知があり、あらゆる社会階級の人々の間に最悪の悪徳が蔓延していました。フスはそのような悪を公然と非難し、人々の心に植え付けようとしていた真理と純粋さの原則を強化するために神の言葉に訴えました。

プラハ市民のヒエロニムスは、その後ハスと親密な関係になるが、イギリスから帰国する際にウィクリフの著書を持参していた。ウィクリフの教えによって改宗したイギリス女王はボヘミアの王女であり、彼女の影響力によって改革者の作品は母国でも広く流通しました。フスはこれらの作品を興味深く読み、その作者が誠実なクリスチャンであると信じていました。彼は自分が支持した改革を検討する傾向にあった。フスは気づいていませんでしたが、ローマから遠く離れた道を歩んでいたのです。

その時、イギリスから二人の外国人がプラハに到着しました。彼らは自分たちが光を受け、その遠い地にそれを広めるために来たことを知っていました。教皇の優位性に対する公然とした攻撃から始まったが、彼らはすぐに当局によって沈黙させられた。しかし彼らは目的を放棄するつもりはなく、他の手段に頼った。彼らは芸術家であると同時に説教者でもあり、自らの技術を磨き続けました。一般に公開された場所で、彼らは2枚の絵を描きました。一つは、「柔和でロバに座っていた」(マタイ21:5)キリストのエルサレム入城を表しており、その後に裸足で旅着の衣服を着た弟子たちが続いた。もう一つは、豪華なローブと三冠を身にまとった教皇が華麗に装飾された馬に乗り、トランペット奏者が先導し、まばゆい装飾品を身に着けた枢機卿と高位聖職者が続く教皇の行列を示した。

これは全クラスの注目を集めた説教でした。群衆が絵を鑑賞するためにやって来た。この道徳を理解できない人は誰もいなかったし、多くの人は、主であるキリストの柔和さと謙虚さと、そのしもべであると公言する教皇の誇りと傲慢さとの対比に深く感銘を受けた。プラハでは大騒ぎが起こり、外国人たちはしばらくして、自分たちの安全のために国外に出る必要があると判断した。しかし、彼らが教えた教訓は忘れられませんでした。それらの絵画はハスの心に深い印象を与え、彼を聖書とウィクリフの著作をより注意深く研究するようになりました。彼はまだウィクリフが提唱したすべての改革を受け入れる準備ができていませんでしたが、教皇庁の真の性格をより明確に理解し、より熱心に教皇庁の誇り、野心、腐敗を非難し始めました。

プラハ大学での騒動で数百人のドイツ人学生が退学になったため、光はボヘミアからドイツに広がった。彼らの多くはハスから初めて聖書の知識を得て、帰国後故郷で福音を広めました。

プラハでの働きの知らせはローマにも伝わり、フスはすぐに教皇への出頭命令を受けた。従うということは、自らを確実な死にさらすことを意味する。ボヘミア国王と王妃、大学、貴族、政府関係者らが団結して、フスがプラハに留まり、ローマに代表して応じることを許可するよう教皇に訴えた。この要求を認める代わりに、教皇はフスを訴追して有罪とし、プラハ市を禁止することを宣言した。

このような文は、当時、どこで発表されたとしても、広く警戒を呼び起こしました。それに伴う儀式は、教皇を神ご自身の代表者であり、天国と地獄への鍵を持ち、物質的および霊的両方の裁きを呼び起こす力を持っていると考えていた人々に恐怖を引き起こすような方法で祝われた。禁止の影響を受けた地域では天のポータルが閉鎖されていると考えられていた。そして、教皇が喜んで破門を解除するまで、死者は祝福の住居に入ることができなかった。この恐ろしい災難の兆候として、すべての宗教行事が中止され、教会も閉鎖されました。

結婚式は教会の中庭で行われました。死者は聖別された土地に埋葬されることを拒否され、葬儀も行われずに溝や野原に放置された。このように、ローマは想像力に訴えかける手段を通じて、人々の良心を導こうとしたのである。

プラハの街は混乱に陥った。多くの階級が、すべての災難の原因はフスであると非難し、彼をローマの復讐に見捨てるべきだと要求した。嵐を静めるために、改革者はしばらく故郷の村に隠居した。彼はプラハに残した友人たちに宛てた手紙で次のように書いている：「もし私がある人々の中から身を引くとしたら、それはイエス・キリストの教訓と模範に留意し、邪悪な意図を持った人々が自らに永遠の破滅をもたらす余地を与えないようにするためだった」また、邪悪な司祭たちがあなたがたの間で神の言葉を説教することをこれ以上禁止し続けるのではないかと恐れ、私も撤退しました。しかし、私は彼らを見捨てて神聖なるものを否定したわけではありませんでした。真実、それによって神の助けがあれば、私は喜んで死にます。」フスは労働を中断せず、周囲の領土を旅して熱心な群衆に説教した。このように、教皇が福音を抑圧するためにとった措置により、福音はより広範囲に広まったのです。「真実を通して以外、私たちは真実に対して何もできません。」

(IIコリント13:8)。

「彼のキャリアのこの時点で、フスの心は痛みを伴う葛藤の現場だったようだ。教会は落雷で彼を絶滅させようとしていたが、フスは自分の権威を放棄していなかった。彼にとってローマ教会は依然として妻であった」「ハスが闘っていたのは権威の濫用であり、原則そのものではない。これが彼の理解と良心の原則との間に恐ろしい矛盾を引き起こした。もし権威が公正であり、代理人であるならば、彼はそれが間違いのないものであると理解していましたが、どうして彼はそれに従わざるを得ないと感じることができたのでしょうか？

従うことは罪を犯すことだと彼は考えた。しかし、なぜ間違いのない教会に従うことがそのような状況を生み出すのでしょうか？これはハスには解決できなかった問題でした。それが彼を毎時間苦しめる疑惑だった。彼にとって最も適切と思われる解決策は、救い主の時代にすでに起こっていたこと、つまり教会の司祭たちが不敬虔な人々となり、正当な権限を違法な目的に利用しているということでした。これにより、彼は、自分自身と自分が説教した人々の指導のために、理解を通じて伝えられる聖書の教訓が良心を支配すべきであるという格言を採用するようになりました。言い換えれば、教会が神権を通して語るのではなく、聖書の中で語る神こそが、唯一の間違いのない導き手であるということです。」

しばらくしてプラハの興奮が静まると、フスは神の言葉の説教をさらに熱心に続けるためにベツレヘムの礼拝堂に戻った。彼の敵は活発で強力でしたが、女王と多くの貴族は彼の友人であり、国民の大部分が彼を支持しました。彼の純粹で崇高な教えと聖なる生活を、ローマ主義者たちが説いた品位を傷つける教義や彼らが実践した強欲と放蕩行為と比較して、多くの人が彼の側にいることが光栄だと考えた。

これまでフスは一人で仕事に取り組んできた。しかし今度は、イギリス滞在中にウィクリフの教えを受け入れたジェロームが宗教改革の働きに加わった。それ以来、彼らの人生はつながっており、たとえ死んだとしても、彼らは分断されるべきではありませんでした。卓越した天才、雄弁、博学——大衆の支持を集めた才能——は、ジェロームによって顕著に備わっていた。しかし、本当の性格の強さを構成する資質においては、ハスの方が優れていました。彼の冷静な認識は、ジェロニモの衝動的な精神にブレーキとして働き、ジェロニモは真の謙虚さをもって自分の価値を認識し、彼のアドバイスに従ったのです。彼らの共同の努力の下で、宗教改革はより急速に広まりました。

神はこれら選ばれた人々の心に大きな光を照らし、ローマの多くの誤りを明らかにされました。しかし、彼らは世界に与えられるべき光をすべて受け取ったわけではありません。神はこれらの神の僕たちを通して人々をローマ主義の暗闇から導き出されました。しかし、彼らが直面しなければならぬ大きな障害は数多くありましたが、神は彼らが耐えられることに応じて、一歩ずつ彼らを導かれました。彼らは一度にすべての光を受け取る準備ができていませんでした。長い間暗闇の中にいた人々にとって真昼の太陽の完全な栄光のように、もしこの光が提示されていれば、それは人々を迷わせたであろう。そこでイエスは、人々が受け入れられるように、指導者たちにそれを少しずつ明らかにしました。世紀から世紀にかけて、他の忠実な働き手が続き、宗教改革の道に沿って人々をさらに先導することになりました。

そして教会内の分裂は続いた。現在、3人の教皇が覇権を争っており、彼らの争いによりキリスト教世界は犯罪と無秩序で満たされました。彼らは非難を發するだけでは満足せず、一時的な兵器に頼った。それぞれが武器を入手して兵士を徴兵することを提案した。彼らには論理的にお金が必要でした。そしてこれを達成するために、教会のすべての賜物、役職、祝福が売りに出されました。僧侶たちも真似して彼らの上司たちは、ライバルたちに屈辱を与え、自分たちの権力を強化するために、シモニー[免罪符や秘跡などの霊的な品物、または教会の恩恵など霊的なものに関連する物質的なものの違法な売買]や戦争に訴えました。ハスは宗教の名の下に容認される忌まわしい行為に対して叫びました。そして人々はキリスト教を抑圧する悲惨さの原因としてローマ主義者の指導者たちを公然と非難した。

ブラハ市は再び血なまぐさい紛争の瀬戸際にあるように見えた。昔と同じように、神の僕は「イスラエルを悩ませる者」として非難されました。(列王上 18:17)。市は再び禁止令下に置かれ、ハスは故郷の村に隠居した。ベレンの愛する礼拝堂から忠実に語られた証言は終わりを迎えた。彼は、真理の証人として命を捧げる前に、キリスト教世界全体に向けて、より広いシナリオについて語るべきである。

ヨーロッパを悩ませている悪を治すために、ボーデンで総会が招集されました。この評議会は、ジギスムント皇帝の要請に基づき、対立する3人の教皇のうちの1人、ヨハネ 23世によって召集されました。この評議会の要請は、教皇ヨハネには決して歓迎されず、その性格と政策は、当時の高位聖職者と同じくらい道徳にルーズな教会当局者であっても、ほとんど調査に耐えられなかった。しかし教皇はジギスムントの意向に逆らう勇氣はなかった。

評議会が達成すべき主な目標は、教会の分裂を解決し、異端を根絶することでした。その結果、二人の対立教皇と、新しい意見の主要な宣伝者であるジョン・ハスが集会に出席するよう呼び出された。前者は自身の安全を考慮して直接出席せず、代表者が出席した。教皇ヨハネは、表向きは公会議の招集者であったが、警察に呼び出されるのではないかと恐れ、自分を追放するという皇帝の秘密の目的を疑い、多くの心配を抱えて出席した。

あなたは、ティアラを汚した悪徳と、それを確保した犯罪を代弁しています。しかし、彼は最高位の高位聖職者を伴い、廷臣の従者に付き添われて、非常に威風堂々とコンスタンツ市に入った。市のすべての聖職者と高官が、大勢の市民を引き連れて彼らを歓迎するために出てきました。彼の頭上には黄金の天蓋があり、最高判事の4人が担いでいた。ホストが彼の前に運ばれ、枢機卿や貴族の豪華なカーブが堂々と披露されました。

その間、別の旅人がコンスタンスに近づいてきました。ハスは自分を脅かす危険に気づいていました。彼はまるで二度と会わないかのように友人たちと別れ、自分が火に直接足を向けているのではないかと疑いながら旅を続けた。旅の途中でボヘミア王とジギスムント皇帝から安全な行動をとったにもかかわらず、彼は死の可能性を念頭に置いてあらゆる手配を行った。

プラハの友人たちに宛てた手紙の中で、彼は次のように述べた。「兄弟たち、私は王からの安全な行動を受けて、数多の不倶戴天の敵と会うために出発します…私は全能の神と私の救い主に完全に信頼しています。私は…」主はあなたの熱烈な祈りを聞いてくださること、私が祈りに抵抗できるように、主の思慮深さと知恵を私の口に注ぎ込んでくださること、そして、私が勇気をもって立ち向かうことができるように、主の真理において私を強めるために聖霊を与えてくださることを確信しています。誘惑、投獄、そして必要であれば残酷な死。

イエス・キリストは愛する人たちのために苦しみました。神が私たちに模範を残してくださり、私たち自身も自分の救いのためにすべてのことを忍耐強く耐えられることに、私たちは驚くべきでしょうか。神は神であり、私たちは神の被造物です。主は主であり、私たちは主の召使です。彼は世界の主であり、私たちは卑劣な定命の者です。しかし、彼は苦しんだのです！それでは、特に苦しみが私たちにとって浄化である場合、なぜ私たちも苦しんではいけなんでしょうか？したがって、愛する人よ、もし私の死が主の栄光に貢献するものであるならば、それが早く来ますように、そして主が私がすべての災難に絶えず耐えることができるように祈ってください。

しかし、もし私があなたのもとに戻ったほうがよいのであれば、神が傷一つなくそうしてくださるようになり、つまり、兄弟たちに素晴らしい模範を残すために、福音の真理を一片も抑圧しないようにと神に祈りましょう。従うこと。このため、おそらくプラハで私の顔を二度と見ることはないだろう。しかし、全能の神の御心が私をあなたのもとに回復させようとなさるなら、私たちは神の律法の知識と愛において、より堅固な心を持って前進しましょう。」

福音の弟子となった司祭に宛てた別の手紙の中で、フスは自身の過ちについて深く謙虚に語り、「豪華な服装をすることに喜びを感じ、価値のない職業に何時間も費やしてきた」と自分を非難した。

さらに彼は、次のような感動的なアドバイスを付け加えた：「恩恵や品物を所有することではなく、神の栄光と魂の救いがあなたの心を占めますように。魂よりも家を飾ることに気をつけてください。そして何よりも自分のケアに気を配ってください。」精神的な建物へ。

貧しい人に対しては敬虔で謙虚でありなさい。そして快樂に自分のリソースを消費しないでください。

もしあなたが自分の生活を改め、余分なものを控えないなら、私も私であるように、あなたは厳しい罰を受けることになるのではないかと心配しています... あなたは子供の頃から私の指導を受けてきたので、私の教義を知っています。したがって、私がこれ以上書く必要はありません。しかし、私たちの主の憐れみにより、私が陥った虚栄心にあなたが見てきたいかなる虚栄心においても、私を真似しないようにお願いします。」と彼は手紙の表面で付け加えた。きっと私は死んでいる、と受け取る前にこの手紙を開いてください。」

旅の途中、フスは彼の教義が広まり、彼の正義が好意的に見られている兆候をあらゆる場所で観察することができた。人々は彼を見るために集まり、いくつかの都市では治安判事が街路を同行した。

コンスタンツに到着すると、フスには完全な自由が与えられました。皇帝の安全な行動には、教皇からの保護という個人的な保証が付け加えられた。しかし、これらの厳粛かつ度重なる宣言に違反して、改革者は間もなく教皇と枢機卿の命令により逮捕され、忌まわしい地下牢に投げ込まれた。

しかし、教皇はその裏切りからほとんど利益を得ることができず、すぐに同じ刑務所に閉じ込められました。彼は殺人、不倫、姦淫に加えて最も卑劣な犯罪、つまり「言及する価値のない罪」を犯していることが評議会で証明されていた。このように同評議会は次のように述べた。そしてついに彼はティアラを剥奪され、刑務所に入れられました。対立教皇たちも追放され、新しい教皇が選ばれた。

教皇自身がフスが聖職者らを告発し改革を要求した罪よりも重大な罪で起訴されていたにもかかわらず、教皇を解任した同じ評議会も改革者を潰そうとした。フスの投獄はボヘミアで大きな憤りを引き起こした。有力貴族たちはこの暴挙に対して評議会に激しい抗議を行った。安全な行為の違反を認めることに反対していた皇帝は、フスの訴追に反対した。しかし、改革者の敵は悪意があり、決意が強かった。彼らは皇帝の偏見、恐れ、そして教会に対する彼の熱意に訴えました。

彼らは、皇帝には「異端者への忠誠を維持しない完全な自由」があり、評議会は皇帝の上であり「その言葉から自由である」ことを証明するために非常に重要な議論を考案し、勝利した。

病気と投獄で衰弱し、刑務所の汚染された湿った空気が高熱を出し、危うく命を落としそうになったハスは、ついに評議会の前に連行された。彼は鎖を背負い、皇帝の名誉と誠意を尽くして彼を守るために尽力した皇帝の前に立った。長い裁判の間、彼は真実を堅持し、集まった教会と国家の高官たちの前で、階級の腐敗に対して厳粛かつ忠実な抗議を行った。

教義を放棄するか死ぬかの選択を求められたとき、彼は殉教者の運命を受け入れた。

神の恵みが彼を支えました。最後の宣告を受けるまでの数週間の苦しみの間、天国の平安が彼の魂を満たした。彼は友人にこう語った。「私は刑務所で、手に手錠をかけられ、明日の死刑判決を待ちながらこの手紙を書いています…イエス・キリストの支えによって、私たちが再び将来の人生のおいしい平和に身を置くことができるとき、神が私にどれほど憐れみを示してくださったのか、そして誘惑と試練の真っ只中に私をどれほど効果的に支えてくださったのかをあなたは知ることになるでしょう。」

地下牢の暗闇の中で、彼は真の信仰の勝利を予言した。夢の中で、福音を説いたプラハの礼拝堂に戻ると、教皇と司教たちが、自分が壁に描いたキリストの絵を消しているのを見ました。ハスはこの幻視にひどく動揺した。しかし翌日、多くの芸術家がより多くのより明るい色の人物を置き換えるためにやって来るのを見たとき、彼の悲しみは喜びに変わりました。作品が完成すると、画家たちは周囲にいた群衆に向かって「さあ、教皇と司教たちに来てもらいましょう。彼らは二度と彼らを消し去ることはできないでしょう！」と叫びました。この夢を報告した際、宗教改革者は次のように述べた。「私は、キリストの像が決して消されないという確信があると受け止めています。彼らはそれを破壊したかったのですが、それは私よりもはるかに優れた説教者たちによって再びすべての心の中に描かれるでしょう。」

最後に、フスは評議会の前に引き出された。評議会は、皇帝、帝国の王子、王室の代表者、枢機卿、司教、司祭、そして傍聴に来た膨大な群衆からなる広大で輝かしい会議であった。その日の出来事。良心の自由を確保するための長い戦いにおけるこの最初の大きな犠牲の証人は、キリスト教世界のあらゆる地域から集まりました。

最終的な決定を表明するよう求められたフスは、退位は拒否すると宣言し、妥協した言葉があまりにも恥ずべきことに侵害された君主を鋭い視線で見つめながら、自分の自由意志で評議会に出廷したと宣言した。そこに存在する国民の信頼と皇帝の保護。」

集会に出席していた全員の目がジギスメントに注がれる中、ジギスメントの顔は真っ赤になりました。

判決が言い渡されると、退任式が始まった。司教たちは囚人に司祭の服を着せ、司祭のローブを受け取ると、「私たちの主イエス・キリストは、ヘロデがピラトの前に連れて行った時、侮辱のために白い衣を着せられました。」と言いました。再び撤回を促されて、彼は人々に向き直って答えた、「それでは、私はどんな顔をして天を見つめるだろうか？」

私が純粋な福音を宣べ伝えた大勢の人たちをどう見るでしょうか。いいえ！

「私は、今死を運命づけられたこの哀れな体よりも、あなたの救いの方が大切です。」 祭服は一枚ずつ脱がされ、各司教は式典で自分の役割を果たしながら呪いを宣言した。恐ろしい悪魔の姿と「大異端者」の碑文が彼の頭に置かれ、フスはこう言った、「私のために冠をかぶってくださったイエスよ、私はあなたのためにこの悪名を表す冠を喜んで頭にかぶります」いばらの。」

このような服を着て、高位聖職者たちはサタンに魂を捧げることを誓いました。フスは天を見上げて、「主イエスよ、私は私の魂をあなたの御手に委ねます。あなたは私を贖ってくださったのです。」と叫びました。

その後、彼は世俗当局に引き渡され、処刑場所に連行されました。数百人の武装した男たち、高価な祭服を着た司祭や司教、そしてコンスタンツの住民など、膨大な数の行列が彼に同行した。すでに火刑に縛り付けられ、すべてに火が放たれる準備が整ったとき、殉教者は再び自分の過ちを放棄して自分を救うよう強く勧められた。「私はどのような誤りを放棄するのでしょうか？私は自分が何の罪を犯したとは認めません。私が書き、説教したことすべてが正しいことを証明してくださいよう神に求めます。」

それは魂を罪と滅びから救うという目的がありました。したがって、私は、私が書き、説教してきたこの真実を、喜んで自分の血をもって確認します。」

炎が彼を包み込み始めると、彼は歌い始めました。「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください」そして、その声が永遠に沈黙するまで歌い続けました。

彼の敵さえも彼の英雄的な手順に感銘を受けました。

熱心な教皇主義者は、すぐに亡くなったフスとヒエロニムスの殉教について次のように述べた、「彼らは最後の時が近づく中、揺るぎない毅然とした態度で行動した。彼らはまるで結婚の祝宴のように火の準備をした。」

彼らは苦痛の叫び声の一つも上げませんでした。炎が上がるにつれ、彼らは賛美歌を歌い始めましたが、火の強さのために彼らの歌声はほとんど止まりませんでした。」

フスの遺体は完全に火葬された後、遺灰はその上に置かれていた土とともに集められてライン川に投げ込まれ、海に運ばれた。彼の迫害者たちは、彼らが彼が説いた真理を根絶したのではないかと空想した。その日海に運ばれた灰が、地球上のすべての国々に散らばった種のようなものとは、彼らは夢にも思わなかったでしょう。まだ知られていない土地で、彼らは真理の証しとして豊かな実を結ぶだろう。コンスタンツの議会ホールで上がった声は、今後すべての時代に聞こえることになる反響を呼び起こしました。フスはもう生きていませんでしたが、彼が死んだ真実は決して消えることはありません。彼の信仰と不動の模範は、多くの人々に拷問と死に直面しても真理のために毅然と立ち上がるよう促すだろう。

彼の処刑はローマの卑劣な残虐性を全世界に示した。の敵

実際、たとえ彼らがそれを知らなかったとしても、彼らは無駄に破壊しようとした大義を推進していました。

しかし、コンスタンツでは別の火が焚かれなければなりません。別の証人の血が真実を証明するはずだ。ジェロームは評議会へ出発する際にハスに別れを告げる際、毅然とした勇気を持つよう激励し、もし危険に陥った場合には自らが救援に駆け付けると宣言した。改革者の逮捕を聞くと、忠実な弟子はすぐに約束を果たす準備をしました。彼は安全な行動をとらず、ただ一人の仲間だけを連れてコンスタンサに向けて出発した。そこに着いたとき、彼は自分が危険にさらされているだけで、ハスを解放するために何かをする可能性はないと確信しました。ジェロニモさんは市から逃亡したが、帰宅途中で逮捕され、足かせを付けられて兵士のグループに拘留された。初めて議会に出席した際、自分に向けられた非難に答えようとした彼の試みは、「彼とともに炎上へ！炎上へ！」という叫び声で迎えられた。ジェロニモは地下牢に投げ込まれ、パンと水を与えられ、鎖でつながれて大変な苦しみを味わいました。

数カ月後、投獄の残酷さにより彼は命を脅かす病気を患った。敵は彼が手から逃れることを恐れ、彼が1年間刑務所にいたにもかかわらず、彼をそれほど厳しく扱いませんでした。フスの死は法王派が期待していた結果をもたらさなかった。安全な行動の違反は憤りの嵐を引き起こしたため、評議会はより安全な手段として、ジェロームを火刑にする代わりに、可能であれば強制的に撤回させることを決定した。彼は議会に連行され、辞任するか火刑で死ぬかの選択肢を提示された。彼が耐えてきたひどい苦しみに比べれば、投獄当初の死は同情の行為だったろう。しかし今、病気、ダンジョンの厳しさ、不安と不安の拷問によって衰弱し、友人たちと離れ、ハスの死に落胆したため、ジェロームの勇気は衰え、評議会に服従することに同意した。彼はカトリックの信仰を堅持することを約束し、彼らが教えた「聖なる真理」を除いて、ウィクリフとハスの教義を非難する評議会の行動を受け入れた。

この方便を通して、ジェロニモは良心の声を沈黙させ、死から逃れようと努めた。しかし、孤独なダンジョンの中で、彼は自分が何をしたのかをより明確に理解しました。彼はフスの勇気と忠実さを思い、対照的に自分自身の真実の否定について熟考した。彼は、自分が仕えることに専念し、彼のために十字架の死に耐えた神の主のことを思いました。撤回する前、彼はあらゆる苦しみのただ中に、神の恵みの確信の中に慰めを見出していた。しかし今、後悔と疑いが彼の魂を苦しめた。彼は、ローマと和平を結ぶ前に、さらに撤回する必要があることを知っていた。彼がたどった道は完全な背教で終わるだけだった。それから彼は、短期間の苦しみから逃れるために、主を否定しないと決意しました。

それから彼は再び評議会の前に連れて行かれました。彼の提出物は審査員を満足させなかった。ハスの死によって刺激された彼らの殺意は、新たな犠牲者を求めて叫んだ。真実を遠慮なく放棄することによってのみ、ジェロニモは命を守ることができました。しかし、彼は自分の信仰を宣言し、殉教した兄弟を追って炎の中に入る決意をしました。

彼は以前の辞任を撤回し、瀕死の男のように厳粛に弁護の機会を要求した。彼の言葉の影響を恐れた高位聖職者たちは、彼に対して提起された告発の真実を肯定または否定するだけでありと主張した。ジェロームはそのような残虐さと不正義に対して抗議しました。

「あなたは私を恐ろしい牢獄に三百四十日間閉じ込めました。汚物と悪臭、そして何よりも欠乏の中で。それからあなたは私をあなたの前に連れ出し、そして私の不倶戴天の敵の言うことを聞きながら」と彼は言った。「あなたは私を拒否します。私の言うことを聞いたら。もしあなたが本当に賢者であり、世界の著名人であるなら、正義に反して罪を犯さないように気をつけてください。私に関して言えば、私はただの弱い人間にすぎません。私の命はほとんど重要ではありません。私はただの弱い人間です。私の命はほとんど重要ではありません。」そして私があなたに不当な判決を下さないように勧める時、私はあなた自身のためというよりもむしろあなたのためについて話します。」

彼の要求は最終的に認められました。裁判官たちの前で、ヒエロニムスはひざまずいて、真理に反することや主にふさわしくないことを何も話せないように、聖霊が自分の考えと言葉を導いてくださるよう祈りました。その日、最初の弟子たちに対する神の約束が彼のために成就した。「あなたはわたしのせいで総督や王たちの前にさえ引き出されるだろう…しかし、彼らがあなたを引き渡すとき、どのように、何を話すかについて心配する必要はない」「なぜなら、その同じ時間に、あなたが何を言うかがあなたに教えらるからです。話すのはあなたではなく、あなたの父の御霊があなたの内で話すからです。」（マタイ 10:18-20）。ヒエロニムスの言葉は、彼の敵の間でさえ驚きと賞賛を呼び起こしました。丸一年間、彼は地下牢に閉じ込められ、文字を読むことはおろか見ることもできず、大きな身体的苦痛と精神的不安を抱えていました。しかし、彼の議論は、あたかも勉強に専念するための平穏な機会を与えられたかのように、明晰かつ力強く表現されました。彼は不当な裁判官によって有罪判決を受けた聖なる人々の長蛇の列を聴衆に指摘した。ほぼすべての世代に、当時の人々を高めようとしたにもかかわらず、告発され追放されたものの、後の時代になって自分たちが名誉に値することを証明した人たちがいました。キリストご自身も不当な法廷で悪行者として有罪判決を受けました。

ジェロームは撤回の中で、ハスを有罪とした判決の正当性に同意していた。しかし今、彼は悔い改めを宣言し、殉教者の無実と神聖さを証言した。「私はジョアン・フスを少年の頃から知っていました」と彼は語った。

「彼は優秀で、正義で、神聖な人でした。無実にもかかわらず有罪判決を受けました...私も、死ぬ覚悟はできています。私は、敵や偽証人たちが私のために用意した苦痛の前には退くつもりはない。彼らはいつか、何もかも欺くことのできない偉大な神の前で、自分たちの詐欺行為について説明しなければならないだろう。」

ジェロームは、自分自身が真理を否定したことを自責し、次のように続けた。「私が若い頃から犯してきたあらゆる罪の中で、この罪ほど私の精神に重くのしかかり、痛ましい後悔を引き起こすものはありません。ウィクリフと聖なる殉教者ジョン・ハス、私の主人に対して下された不当な判決を私が承認したとき、致命的な場所でした。はい、私は心から告白し、死の恐怖から私が非難したとき、恥ずべき道を譲ったことを恐怖とともに宣言します彼らの教義。

したがって、私は全能の神に、私の罪、特にすべての罪の中で最も凶悪なこの罪を寛大に赦してくださるよう懇願します。」裁判官たちを指差し、彼はきっぱりとこう言った、「あなたがウィクリフとジョン・ハスを有罪にしたのは、彼らが教義を揺るがしたからではありません。教会の批判者だったが、それは単に彼らが聖職者のスキャンダルに不支持の烙印を押したからにすぎない。彼らの尊大さ、誇り、そして高位聖職者と司祭たちのあらゆる悪徳。彼らが述べた反論の余地のない事柄については、私も同じように考え、彼らと同じように宣言します。」

彼の言葉は遮られた。怒りに震えた高位聖職者たちはこう叫んだ。

「これ以上の証拠が必要ですか？ 最も頑固な異端者を排除してください！」

嵐にも動じず、ジェロームは叫んだ。「何だ！私が死ぬのが怖いと思う？あなたは私を一年間、死そのものよりも恐ろしい恐ろしい地下牢に閉じ込めた。あなたは私を死よりも残酷に扱った。」トルコ系ユダヤ人か異教徒か、そして私の肉は文字通り骨の上で腐った

充実した人生。それでも、私は不平を言いません。なぜなら、嘆くことは人を心と精神において強くすることはほとんどないからです。しかし、キリスト教徒に対するこれほどの蛮行には驚きを表さずにはいられません。」

再び怒りの嵐が起こり、ジェロームは刑務所に送られました。しかし、集会の中にはヒエロニムスの言葉に深い感銘を与え、彼の命を救いたいと願う人もいた。彼は教会の高官らの訪問を受け、評議会に服従するよう主張した。ローマへの反対を放棄した報酬として、最も明るい展望が彼に与えられた。しかし、世界の栄光が主に捧げられたときの主のように、ヒエロニムスは毅然とした態度を保ちました。

「私が間違っていることを聖書によって証明してください。そうすれば私はそれを放棄します。」と彼は言った。

「聖書だ！誘惑者の一人が叫んだ。「すべてはそうでなければならない
彼らが判断したのか？教会が解釈するまで誰がそれらを理解できるでしょうか？」

「人類の伝統は、救い主の福音よりも信仰に値するものなのではないでしょうか？」とヒエロニムスは答えました。「パウロは手紙を書いた人たちに人間の伝統に耳を傾けるよう勧めなかったが、『聖書を調べなさい』とは言った。」

「異端者だ！」との返事が返ってきた。「あなたとたくさん議論したことを後悔しています
時間。あなたが悪魔に動かされているのがわかります。」

すぐに彼に対して死刑判決が言い渡された。彼はハスが命を捧げたのと同じ場所に連れて行かれた。彼は歌いながら旅を続け、その顔は喜びと平安で輝いていました。彼の視線はキリストに注がれており、彼によって死の恐怖は消えていた。死刑執行人が火をつけようとしたとき、殉教者の後ろを通り過ぎたが、彼は叫んだ、「大胆に前に出て、私の前で火をつけてください。恐れているなら、私はここにいるべきではありません。」

周囲に炎が立ち上る中、彼が最後に口にした言葉は祈りだった。「全能の父なる主よ、私を憐れみ、私の罪をお赦しください。私が常にあなたの真実を愛してきたことをあなたは知っているからです。」と彼は叫びました。彼の声は沈黙したが、唇は祈りの中で動き続けた。

火がその働きを終えると、殉教者の遺灰は彼らが休んだ土とともに集められ、フスの遺灰と同様にライン川に投げ込まれた。このようにして、神の光の忠実な担い手たちは滅びました。しかし、彼らが宣言した真実の光、つまり彼らの英雄的な模範の光を消すことはできませんでした。人間は太陽の軌道を逸らし、世界に夜明けが訪れるその日の夜明けを阻止しようとすることもできた。

フスの処刑はボヘミアに憤りと恐怖の炎を引き起こした。国民全体が、彼が聖職者の悪意と皇帝の裏切りの餌食になったと感じた。彼は真理の忠実な教師であると宣言され、彼の死を決定した評議会は殺人罪で告発された。彼の教義は今、かつてないほど大きな注目を集めています。教皇の布告により、ウィクリフの著作は炎上することになった。しかし、滅びを免れた人々は隠れ場所から連れ出され、人々が入手できる聖書または聖書の一部に関連して研究されました。こうして多くの人が改革派の信仰を受け入れるように導かれました。

フスの暗殺者たちは、自分たちの大義の勝利を目撃して黙っていなかった。教皇と皇帝はこの運動を鎮圧するために団結し、ジギスムントの軍隊はボヘミアに対して投入された。

しかし、解放者が立ち上がった。ジスカは戦争開始直後に全盲となった。しかし、彼は当時最も有能な将軍の一人であり、ボヘミアンの指導者でした。それらの人々は、神の助けと自分たちの大義の正義を信頼して、攻撃してくる可能性のある最も強力な軍隊に抵抗しました。何度か、

皇帝は新たな軍隊を組織してボヘミアに侵攻したが、屈辱的に撃退された。フス派は死の恐怖を乗り越えて立ち上がり、彼らに抵抗できるものは何もありませんでした。戦争開始から数年後、勇敢なジスカが亡くなりましたが、彼の後を継いだのは、同様に勇敢で有能な将軍であり、ある意味ではより有能な指導者であったプロコピウスでした。

盲目の戦士が死んだことを知っていたボヘミアンの敵たちは、失ったものをすべて取り戻す機会が得られると考えた。その後教皇はフス派に対する十字軍を開始し、再び大軍勢がボヘミアに突入したが、惨敗を喫しただけだった。別の十字軍が続いた。ヨーロッパのすべての教皇国で、人員、資金、軍需品が集まりました。

群衆は教皇の基準のもとに集まり、結局フス派の異端者は終わらせられるだろうと確信していた。勝利を確信して、大軍勢がボヘミアに入った。それを撃退しようと人々が集まった。両軍は川だけが間に存在するまで互いに接近した。連合軍は数でははるかに勝っていたが、積極的にフス派を攻撃する代わりに、まるで魔法にかかったかのように沈黙を保ち、フス派を熟考した。その後、突然、謎の恐怖がホストに降りかかりました。その強大な力は、一撃も与えられずに、まるで目に見えない力によって四散したかのように砕け散った。逃亡者を追跡したフス派軍により、膨大な数の連合軍兵士が殺害された。膨大な

戦利品は勝者の手に渡ったので、この戦争は彼らを貧困にするどころか、ボヘミア人を富ませた。

数年後、新しい教皇の下で、別の十字軍が開始されました。以前と同様に、ヨーロッパのすべての教皇領諸国から人員と手段が連れて来られました。この危険な事業に従事すべき人々に与えられた励ましは大きかった。最も凶悪な犯罪に対する完全な恩赦が各十字軍兵士に保証された。戦争で亡くなった者は皆、天国で豊かな報いを約束され、生き残った者は戦場で名誉と富を得るだろう。再び大軍が集結し、国境を越えてボヘミアに侵攻した。フス派軍は彼らの前から後退し、こうして侵略者をどんどん奥へと引き込んだ。

国の内陸部に侵入し、勝利を期待できるように彼らを導きました。ついにプロコピオの軍隊は立ち止まり、敵に背を向けて戦いに進んだ。十字軍は自分たちの間違いに気づき、陣営に残り攻撃を待った。フス派が姿を現す前に軍隊の接近音が聞こえると、十字軍は再びパニックに陥った。王子も将軍も一般兵も鎧を脱ぎ捨てて四方八方に逃げた。

侵略の指導者であった教皇特使は、恐怖と混乱に陥った軍隊を結集させようと努力したが無駄だった。多大な努力にもかかわらず、彼自身も逃亡者の波に飲み込まれてしまった。敗北は完全に終わり、再び莫大な戦利品が勝者の手に渡った。

こうして二度目に、ヨーロッパの最も強力な国々から派遣された大軍、戦いのために訓練され装備された勇敢な戦士の多数が、打撃を与えることなく、小さくて弱い国の守備陣の前から逃げました。そこには神の力が現れていました。侵略者たちは超自然的な恐怖に襲われた。紅海でファラオの軍隊を打ち破り、ギデオンとその配下300人の前でミディアン人の軍隊を敗走させ、傲慢なアッシリアの軍勢を一夜で打倒した彼は、抑圧者の力を弱めるために再び手を差し伸べたのだ。「見よ、彼らは恐れなどなかったのに、非常に恐れていた。神があなたの周りの人々の骨を散らし、あなたが彼らを混乱させたからだ。

教皇指導者たちは武力による征服の希望を失い、外交に頼ることに決めた。妥協案が締結され、それはボヘミア人に良心の自由を与えるというものであったが、実際にはボヘミア人を裏切ってローマ権力に引き渡した。ボヘミア人はローマとの和平条件として次の4点を明記していた。教会全体が聖体拝領の際にパンとワインの両方を得る権利、および神の礼拝において母語を使用する権利。あらゆる世俗の職や権威から聖職者を排除すること。そして、犯罪の場合には、民事裁判所の管轄権が聖職者と一般信徒の両方に与えられます。教皇当局は最終的に4つの条項を受け入れることに同意したが、それらを説明し、その正確な意味を決定する権利は教会に属すると規定した。これに基づいて条約が締結され、ローマは紛争では得られなかったものを偽装と詐欺によって獲得した。なぜなら、フス派の記事や聖書に独自の解釈を与えることで、彼女はその意味を自分の利益に合わせて歪曲することができたからである。

ボヘミアの大多数の階級は、これが自分たちの自由を裏切るものであると見て、この条約に同意しなかった。不和と分裂が生じ、彼らの間で争いと流血が起こった。高貴なプロコピウスはこの戦いで命を落とし、ボヘミアの自由も失われました。

フスとヒエロニムスの裏切り者であるジギスメントは今やボヘミア王となり、ボヘミア人の権利を支持するという彼の誓いを無視して教皇庁の設立を進めた。しかし、ローマへの服従から得たものはほとんどありませんでした。20年間、彼の人生は仕事と危険に満ちていた。彼の軍隊は弱体化し、長く不毛な闘争によって帝国の財務は枯渇し、そして今、1年統治した後、彼は内戦の瀬戸際で王国を放棄し、悪名を着せられた名前を後世に遺して死去した。

暴動、戦闘、流血が続いた。再び外国軍がボヘミアに侵攻し、国内の不和が国を悩ませ続けた。福音に忠実であった人々は血なまぐさい迫害にさらされました。

古代の同胞たちがローマと和解し、その誤りを吸収するにつれて、古い信仰にしがみついている人々は最終的に独自の教会を形成し、「統一同胞団」という名前を採用しました。この行為は彼らにあらゆる階級からの呪いをもたらした。しかし、彼の固さは揺るぎませんでした。森や洞窟に避難を強いられた彼らは、それでも神の御言葉を読み、神の礼拝に集まるために集まりました。

密かに各国に派遣された使者を通して、彼らは真実を告白する孤立した人々があちこちにいることを知った——この街にも少し、あの街にも少し、自分たちと同じような迫害の対象であり、そしてアルプスの真ん中で彼らは聖書に基づいて設立された古代の教会がありました。この知らせは大喜びで受け入れられ、ワルドー派のキリスト教徒たちと文通が始まった。

福音を固く信じたボヘミア人たちは、朝を待つ人間のように、最も暗い時間に地平線に目を向け、迫害の夜を待ち続けた。「彼らの運命は悪の時代に定められたが、ヒエロニムスが繰り返したフスの言葉を思い出した、その日が明けるまでには一世紀が経過しなければならぬというものだった。フス派にとってこれらは、奴隷の家の部族に対するヨセフの言葉と同じだった。「私は死にます。しかし、神は必ずあなたを訪れ、あなたをこの地から引き上げてくださいます。」1470年頃、迫害は終わり、比較的繁栄した時代が続きました。「世紀の終わりまでに、ボヘミアとモラヴィアには『統一同胞団』の教会が200あった。」「大惨事から逃れてきた残りの人々は非常に裕福でした。」

火と剣の破壊的な猛威に恵まれ、ハスが予言していたその日の夜明けを見ることができた。」

第7章

ルターがローマから分離

まず第一に、教会を教皇の暗闇から最も純粋な信仰の光に導くよう召された人々の中にマルティン・ルターがいます。熱心で、熱意があり、献身的で、神以外の恐れを知らず、聖書以外に宗教的信仰の基盤を認めなかったルターは、当時の人物でした。神は彼を通して教会の改革と世界の啓蒙のための偉大な業を成し遂げました。

福音を最初に伝えた人々と同じように、ルターは最も貧しい階級の出身でした。彼の幼少期はドイツの農民の質素な家で過ごしました。鉱山労働者としての日々の労働の中で、父親は彼の教育手段を提供してくれました。彼は息子を弁護士になってほしかったが、神の計画は息子を何世紀にもわたってゆっくりと建設されていた偉大な神殿の建設者にすることであった。

必需品、剥奪、そして厳しい規律がこの学校に送られ、そこで無限の知恵がルーサーに人生の重要な使命を準備させました。

ルターの父親は、強く積極的な意志を持ち、非常に強い人格を持ち、正直で毅然とした公正な人でした。彼は結果がどうなるก็ตาม、自分の義務に対する信念に忠実でした。彼の正当な常識により、彼は修道院生活を嫌悪感を持って見ていました。ルターが同意なしに修道院に入ったとき、彼は非常に動揺しました。父親が息子と和解するまでに2年かかりましたが、その時でも意見は変わりませんでした。

ルターの両親は、子供たちの教育と準備に細心の注意を払いました。彼らは神の知識とキリスト教の美德の実践を教えるよう努めました。息子が目撃した父親の祈りはしばしば天に届き、息子が主の御名を思い出し、いつか主の真理を前進させる助けとなることができました。彼らが勤勉な人生で享受できる道徳的および文化的利点はすべて、両親が熱心に与えてくれたものでした。彼の努力は、子供たちを敬虔で役に立つ人生に備えさせるための誠実で粘り強いものでした。彼らは毅然とした性格と活発な性格により、時には非常に厳しい態度をとりました。しかし改革者は、いくつかの点で彼らが誤りを犯したことを認識していながらも、彼らの規律においては非難するよりも承認すべき点を見出しました。

ルターは幼い頃に通われた学校で、厳しく、さらには暴力的な扱いを受けました。彼の両親の貧しさは非常に大きかったため、別の都市にある自宅から学校に通う際、しばらくの間、家から家へと歌いながら食べ物を調達することを余儀なくされ、お腹が空くことが何度もあった。当時、宗教に関する暗く迷信的な考えが蔓延しており、彼は恐怖でいっぱいでした。彼は重い心で夜横たわり、暗い未来を震えながら見つめ、神が親切な天の父としてではなく、厳格で容赦のない裁判官、残酷な暴君としての考えに絶えず恐怖を感じていました。非常に多くの大きな落胆にもかかわらず、ルターは彼の魂に訴えかける高い道徳と知的卓越性の高い基準を目指して断固として歩み続けました。

彼は知識に飢えており、その精力的で実践的な性格により、派手で表面的なものではなく、堅実で役立つものを求めるようになりました。18歳でエアフルト大学に入学したとき、彼の状況は以前よりも良好で、彼の将来は以前よりも明るくなりました。彼の両親は、儉約と献身的な努力により、生活を賄うのに十分な収入を得ることができました。

必要なすべての支援を提供することができました。知的な友人の影響により、彼の以前の教育による暗い影響はある程度軽減されました。彼は最高の作家の研究に熱心に取り組み、彼らの最も重要な考えを熱心に大切に、賢者の知恵を自分のものにしました。最初の教育者たちの厳しい規律の下でも、彼女はすでに優れた兆候を示していました。そして、良い影響を受けて、彼の精神は急速に発達しました。持続的な記憶力、鮮やかな想像力、強力な推論力、そしてたゆまぬ応用力により、彼はすぐに同僚よりも先を行く地位に就きました。知的規律は彼の理解を成熟させ、彼の精神活動と知覚の鋭さを目覚めさせ、それらが彼に人生の葛藤への備えをさせました。

ルターの中には主への畏れが宿っていたので、ルターは目的を堅持し続けることができ、神の前に深い謙虚さを保つことができました。彼は神の助けに依存しているという永続的な感覚を持ち、毎日を祈りから始めることを欠かさず、同時に彼の心は導きと支援を求めて絶えず嘆願していました。「よく祈ることは、勉強の半分です」と彼はよく言いました。

ある日、ルターは大学の図書館で本を調べていたときに、ラテン語の聖書を発見しました。彼はそのような本をこれまで見たことがありませんでした。彼はその存在すら無視した。彼は公の礼拝中に人々に読み上げられる福音書や書簡の一部を聞いており、それらが聖書全体であると考えていました。今、彼は初めて完全な神の言葉を見ました。恐怖と好奇心が入り混じった気持ちで、彼は神聖なページをじっくりと眺めた。鼓動が高鳴り、心臓がドキドキしながら、彼は命の言葉を自分で読み、立ち止まって叫んだ。「ああ、神がこんな本を私にくれたら！」天の天使たちが彼の側に立ち、神の御座からの光線が真理の宝を彼の理解に明らかにしました。彼は神を怒らせることを常に恐れていましたが、今では自分の罪深い状態に対する深い確信がこれまでにないほど彼を捉えました。

罪から解放され、神との平和を見出したいという真摯な願いにより、彼は修道院に入り、修道生活に専念することになりました。そこで彼は最も困難な仕事をし、家から家へと物乞いをするを要求されました。彼は尊敬と感謝を最も切望する年齢にあり、それらの屈辱的な任務は彼の自然な感情にとって深く屈辱的でした。しかし、彼は自分の罪のためにこの屈辱が必要であると信じて、この屈辱に辛抱強く耐えました。

彼は日々の職務の合間に利用できるすべての時間を勉強に費やし、休息を避け、わずかな食事に費やす時間をさえ節約しました。何よりも彼は神の言葉を学ぶことに喜びを感じました。彼は修道院の壁に聖書が鎖でつながれているのを発見し、頻繁にそこへ行きました。彼自身の罪の確信が深まるにつれて、彼は自分の行いを通して許しと平安を得ようと努めました。彼は非常に厳格な生活を送り、修道生活では軽減されなかった本性の悪を鎮めるために、断食、通夜、むち打ちに励んだ。彼は、神の前に認められることを可能にする心の純粋さを得るために、どんな犠牲も惜しみませんでした。「私は確かに敬虔な修道士でした」と彼は後に語った。もし修道士がその修行によって天国に到達できるとしたら、私には確かにその権利があるでしょう。もし続けていたら、死ぬところまで悔しさを引きずっていただろう。」この苦痛を伴う訓練の結果、彼は活力を失い、完全に回復することのなかった失神の発作に苦しみ始めました。しかし、あらゆる努力にもかかわらず、彼の重荷を負った魂は救われませんでした。結局、彼は絶望の淵に追い込まれたのです。

ルターにとってはすべてが失われたように思えたとき、神は友人であり助け手である一人を起こされました。敬虔なシュタウピッツはルターの心に神の言葉を聞き、ルターが自分自身から目をそらし、神の律法を犯したことに対する永遠の罰について考えるのをやめ、罪を赦してくださる救い主であるイエスに目を向けるようにさせました。「罪のせいで自分を苦しめる代わりに、救い主の腕の中に身を投げ込みなさい。主を信頼し、主の生涯の義を信頼し、主の死によってなされた償いを信頼してください。神の御子に耳を傾けてください。彼はあなたに神の恵みの保証を与えるために人間となられたのです。」「彼を愛してください。彼が最初にあなたを愛したからです。」あの慈悲の使者はこう言いました。彼の言葉はルターの心に深い印象を残しました。長年大切にしてきた誤りに対する壮絶な闘いの後、彼は真実にしがみつき、彼の悩める魂に平安が訪れました。

ルターは司祭に叙階され、修道院からヴィッテンベルク大学で教えるよう召されました。そこで彼は原語で聖書を研究することに専念しました。彼は聖書についての話を始めました。詩篇、福音書、書簡は、多くの喜びの聴衆の理解に開かれました。

彼の友人であり上司であるシュタウピッツは、説教壇に立って神の言葉を説教するよう彼に勧めた。ルターは、キリストの代わりに人々に話す資格がないと感じ、躊躇しました。彼が友人の要求に応じるまでには長い苦労があった。ルターは聖書の中ですでに力を持っており、神の恵みは彼の上にあります。彼の雄弁さは聴衆を魅了し、彼が真実を提示する明快さと力強さは聴衆に浸透し、理解を説得しました。修道士の熱意が彼らの心を動かしました。

ルターは依然として教皇教会の真の息子であり、それが他のものになるとは考えていませんでした。神の摂理により、彼はローマを訪れるように導かれました。彼はこの旅を徒歩で行い、途中の修道院に滞在しました。イタリアの修道院で彼は目の当たりにした富、壮麗さ、贅沢に驚嘆しました。莫大な収入に恵まれた修道士たちは、豪華なアパートに住み、最も豪華で高価な衣服で身を飾り、豪華なテーブルで食事をしていました。ルターは、痛ましい懸念を抱きながら、この場面を自分の人生の無私さと厳しさと対比させました。彼の心は当惑した。

最後に、彼は遠くに七つの丘からなる都市を眺めました。彼は感極まって地面にひれ伏し、「聖なるローマよ、あなたに敬意を表します！」と叫んだ。彼は街に入り、教会を訪れ、司祭や修道士が繰り返し語る素晴らしい物語に耳を傾け、必要な儀式をすべて執り行いました。至る所で彼は驚きと恐怖で満たされる光景を目にした。彼は、不正行為が聖職者のあらゆる階級に存在することに気づいた。彼は高位聖職者たちの下品なジョークを聞き、ミサ中であっても彼らの恐ろしい冒涇に恐怖を感じた。修道士や市民と交わる中で、ルターは散逸と官能を目の当たりにした。彼がどこに目を向けても、神聖さの代わりに冒涇を見つけました。「ローマではどれほどの罪と残虐行為が行われているのか、信じられないほどだ」と彼は書いた。信じてもらうためには、見たり聞いたりする必要があります。「地獄があるなら、ローマはその上に築かれる」とよく言われるのはそのためです。彼女はあらゆる罪が生まれる深淵である。」

最近の法令により、教皇は「ピラトの階段」をひざまずいて登るすべての人に免罪符を約束した。この階段は、私たちの救い主がローマ宮廷を出る際に下り、奇跡的にエルサレムからエルサレムに運ばれたと言われている。ローマ。ルターは、ある日、この階段を熱心に登っていたとき、突然雷のような声を聞きました。「義人は信仰によって生きる。」

彼は飛び起きて、恥ずかしくて恐怖を感じて急いでその場を立ち去りました。この聖書の文章は、ドイツの修道士の魂に与える力を決して失わなかった。それ以来、彼は、救いのために人間の働きを信頼することの誤りと、キリストの功績に対する絶え間ない信仰の必要性を、以前よりもはっきりと理解するようになりました。彼の目は教皇庁の欺瞞に対して開かれており、二度と閉じることはなかった。彼が背を向けたとき

ローマに対しても、心の中でそうし、その時から、教皇教会とのあらゆる関係が断ち切られるまで、分離はさらに大きくなった。

ローマから帰国したルターは、ヴィッテンベルク大学で博士号を取得しました。今では彼は、かつてないほど自由に、大好きだった聖書に献身できるようになりました。彼は生涯を通じて、教皇たちの言葉や教義ではなく、神の言葉を注意深く研究し、忠実に説教するという厳粛な誓いを立てていました。彼はもはや単なる修道士や教師ではなく、公認された聖書の伝道者でした。彼は真理に飢え、渇いた神の群れを養う羊飼いとて召されました。彼は、クリスチャンは聖書の権威に基づく教義以外の教義を受け入れるべきではないと強く宣言しました。これらの言葉は教皇の優位性の基盤そのものを破壊しました。そこには宗教改革の重要な原則が含まれていました。

ルターは、人間の理論を神の言葉よりも高く評価することの危険性を認識していました。そして彼はスコラ学者[中世の大学教授]の思弁的不貞行為を恐れることなく攻撃し、長い間人々に支配的な影響を及ぼしてきた哲学と神学に反対した。彼はそのような知識は無価値であるだけでなく有害であると非難し、彼の話を書く者の心を哲学者や神学者の詭弁から預言者や使徒によって示された永遠の真理に向けさせようと努めました。

彼の言葉に夢中になった空腹の群衆に彼がもたらしたメッセージは貴重でした。彼らはそのような教えを聞いたことはありませんでした。救い主の愛の喜ばしい知らせ、救い主の贖いの血による赦しと平和の確かさは、彼らの心を喜ばせ、永遠の希望を与えました。ヴィッテンベルクに光が灯り、その光は地球の最も遠い場所にまで届き、その明るさは終末まで増大することになる。

しかし、光と闇は調和しません。真実と誤りの間には避けられない対立が存在します。一方を支援し、防御することは、他方を攻撃し、破壊することになります。私たちの救い主は、「私が来たのは平和ではなく、剣を送るためです」と宣言されました。（マタ 10:34）宗教改革が始まってから数年後、ルターは次のように宣言しました。私は自分の行動の主人ではありません。平穩に幸せに暮らせるはずだったのに、混乱と革命の真っ只中に放り込まれてしまうのです。」彼は今まさに戦いに駆り立てられようとしていた。

ローマ教会は神の恵みを商品化していました。両替商のテーブル（マタイ 21:12）は祭壇の横に置かれ、売り手と買い手の叫び声が空気に響き渡っていました。ローマの聖ペテロ教会建設のための資金集めを口実に、教皇の権威のもとに罪の免罪符が公に売りに出されていた。犯罪の代償として、神を崇拝するための神殿が建設されることになっていました。その礎石は不法行為の代償として据えられました。しかし、ローマを拡大するために採用された手段そのものが、その力と偉大さに致命的な打撃を与えました。これこそが教皇庁の敵の中で最も決意と成功を収めた者たちを生み出し、教皇の王位を揺るがす戦争を促進し、教皇の頭上で三冠を揺るがせたのである。

英国で免罪符の販売を管理するよう任命されたテツツェルという役人は、社会と神の法に対する最も卑劣な犯罪で告発された。しかし、自らの犯罪に対する正当な処罰を免れた彼は、教皇の傭兵的で不謹慎な計画を促進するために雇われた。彼は非常に傲慢にも、だまされやすい、迷信深い、無知な人々を欺くために、最も悪名高い虚偽や、それに関連する空想的な話を繰り返しました。もし人々が神の言葉を手にしていれば、騙されることはないだろう。教皇庁の管理下に置き、野心的な指導者の権力と富を増大させるために、聖書は教皇庁から取り上げられました。

テツェルが街に入ると、使者が彼の前に来て、「神と聖なる父の恵みがあなたの戸口にあります」と告げました。そして人々は、あたかも神ご自身が天から彼らのところに降りて来たかのように、この大げさな冒涇者を歓迎した。悪名高い交通渋滞が教会に浸透し、テツェルは説教壇に上り、神の最も貴重な贈り物として免罪符を宣伝した。これらの許しの証明書のおかげで、購入者が後で犯そうとしたすべての罪が許されること、そして「悔い改めは不要である」と宣言しました。それ以上に彼は、免罪符には生者だけでなく死者も救う力があると聴衆に保証した。まさにその瞬間、お金がその胸の底でジャラジャラと音を立て、その恩恵を受けた魂は煉獄を出て天国へ向かいました。

魔術師シモンが使徒たちから奇跡を起こす力を手に入れようとしたとき、ペテロは彼にこう答えました。「あなたのお金は滅びるまであなたのもとにあります。あなたは神の賜物がお金で得られると思っているからです」（使徒8:20）。しかし、テツェル氏の申し出は何千人もの人々が熱心に受け入れた。金銀が国庫に流入した。お金で買える救いは、悔い改め、信仰、そして罪に抵抗して克服するための勤勉な努力を必要とする救いよりも容易に達成できました。

免罪符の教義は、ローマ教会の学識と敬虔な人々によって直面されており、理性にも啓示にもそれほど反する主張を信じない人が多くいました。この不法な取引に対して敢えて声を上げようとする高位聖職者はいなかったが、人々の心は動揺し当惑し始めており、多くの人は神が教会の浄化のために何らかの手段を講じて働かないのではないかと心配そうに尋ねた。

ルターは、依然として最も厳格な教皇主義者であったにもかかわらず、免罪符商人の冒涇的な見せかけに恐怖でいっぱいでした。恩赦証明書を取得した同氏の信徒の多くはすぐに牧師に訴え、さまざまな罪を告白し、赦免を望んでいたが、それは彼らが悔い改め、改革を望んでいたからではなく、免罪符に基づいていた。ルターは彼らに赦しを与えることを拒否し、彼らが悔い改めて生活を改めない限り、彼らは罪の中で滅びることになると警告しました。彼らは非常に当惑しながら、聴罪司祭が証明書を拒否したという苦情を持ってテツェルのところへ行きました。そして中には、お金を返せと大胆に要求する人もいました。修道士は非常に怒っていました。彼は最も恐ろしい呪いを吐き、公共の広場に焚き火を立てるよう命じ、教皇から「最も神聖な免罪符に敢えて反対する異端者を焼き払う」よう命令を受けたと宣言した。

ルターは今、真理の擁護者として大胆にその活動に取り組んでいます。彼の声は説教壇から激しく厳粛な警告として聞こえました。彼は罪の不快な性質を人々の前に暴露し、人間が自らの行いによって違反の罪を軽減したり、その刑罰を逃れたりすることは不可能であると教えました。神に対する悔い改めとキリストへの信仰以外に罪人を救うことはできません。キリストの恵みを獲得することはできません。無料プレゼントです。ルターは人々に、免罪符を手に入れるのではなく、十字架につけられた救い主を信仰をもって見るよう勧めました。彼は、屈辱と自罰を通して確実な救いを求めた自身のつらい経験を語り、自分の外側に目を向け、キリストを信じることによって平和と喜びを見つけたと聴衆に保証した。

テツェルが事業と不敬なふりを続けていた一方で、ルターはこれらの目に余る虐待に対してより効果的な抗議を行うことに決めました。これに適した機会がすぐに訪れました。ヴィッテンベルク城の教会には多くの遺物があり、特定の聖なる日に一般に公開されました。教会を訪れて告白したすべての人に、罪の完全な赦しが与えられました。によると

当時はそれが慣例であり、人々は大勢で出席した。これらの行事の中で最も重要な行事の一つである「諸聖人」の祝日が近づいていた。前日、ルターは教会に向かう群衆に加わり、免罪符の教理に反する95の命題を含む文書を教会のドアに貼り出した。彼は翌日、大学で彼らを攻撃しようとする者から彼らを守るつもりだと宣言した。

彼の提案は広く注目を集めました。それらは何度も読まれ、どこでも繰り返されました。大学や街中に大きな興奮が巻き起こりました。を通してこれらの論文は、罪の赦しとその刑罰の免除を与える権限が教皇にも他のいかなる人にも決して与えられていないことを示した。免罪符計画はすべてでっちあげであり、人々の迷信を利用して金を巻き上げる装置であり、サタンの嘘を信じたすべての人々の魂を滅ぼすためのサタンのトリックでした。また、キリストの福音が教会の最も貴重な宝であり、その中で明らかにされた神の恵みが、悔い改めと信仰によってそれを求めるすべての人に無償で与えられることも明確に示されました。

ルターの論文は議論を引き起こした。しかし、誰もその挑戦を敢えて受け入れようとはしませんでした。彼が提案した質問は数日でドイツ全土に広がり、数週間後にはキリスト教世界全体に響き渡りました。教会に蔓延する恐ろしい不法行為を目撃し嘆きながらも、その進行を止める方法を知らなかった多くの献身的なローマ主義者たちは、その中に神の声を認めて、大喜びでこの論文を読みました。彼らは、ローマ教区から来る急速に増大する腐敗の波を食い止めるために、主が慈しみ深く御手を差し伸べられたと感じました。王子や治安判事たちは、決定に対して上訴する権利を否定した傲慢な権力が弾圧されようとしていることを密かに喜んでいました。

しかし、迷信深く罪を愛する群衆は、恐怖を和らげる詭弁が押し流されたとき、恐怖を感じた。犯罪を追認する活動中に逮捕され、収入が危険にさらされると見た狡猾な聖職者たちは激怒し、自分たちの見栄を守るために団結した。改革者は今度は痛烈な告発者たちと対峙しなければならなくなった。彼が性急で衝動的に行動したと非難する人もいた。他の人たちは彼を傲慢だと非難し、彼は神の指示ではなく、誇りと傲慢さをもって行動していると宣言した。ルターはこう答えた、「誇りを持って、争いを煽ったと非難されずに、新しい考えを推進する人はめったにいないということを知らない人はいないだろうか？...なぜキリストとすべての殉教者が殺されたのか？彼らが大げさで社会を軽蔑しているように見えたからである。彼らは当時の知恵に基づいており、古い意見の神託に謙虚に従うことなく新しいアイデアを提示したためです。」

改革者は再び宣言した、「私のしていることは、人間の考えによってではなく、神の助言によって行われます。その働きが神のものであるなら、誰がそれを止めることができますか？そうでない場合、誰がそれを前進させることができますか？私の意志は彼らのものでも私たちのものでもなく、天におられる聖なる父よ、あなたの意志です。」

ルターは神の御霊に動かされて働きを始めましたが、深刻な葛藤なしにそれを進めることはできませんでした。彼の敵の告発、彼の目的の歪曲、そして彼の性格と動機に対する不当で悪意のある言及は、壊滅的な洪水のように彼に襲いかかり、影響を与えずにはいられていませんでした。彼は、教会と学校の両方の人々の指導者たちが彼の改革の取り組みに喜んで参加してくれるだろうと考えていた。高い地位にある人々からの励ましの言葉は、彼に喜びと希望を与えました。彼はすでに教会に明るい日が訪れることを予見していました。しかし、この熱意は非難と非難に変わりました。多くの高官、双方とも

教会と国家の支持者たちは、自分たちの主張の真実性を確信していました。しかし、彼らはすぐに、これらの真実を受け入れるには大きな変化が伴うことに気づきました。人々を啓蒙し改革することは、事実上ローマの権威を弱体化させ、今や国庫に流れ込んでいる何千もの激流を堰き止め、こうして教皇指導者の贅沢と贅沢を断つことであった。さらに、救いを得るためにキリストだけに目を向け、責任ある存在として考え、行動するように人々に教えることは、教皇の座を覆し、その結果、彼ら自身の権威を破壊することになります。このため、当局は神が提供した知識を拒否し、自分たちを啓蒙するために遣わされた人に反対することで、キリストと真理に敵対したのです。

ルーサーは、地球上で最も強力な権力者たちに反対しているだけの自分自身を見つめて震えました。彼は時々、自分が本当に教会の権威に対抗するように神に導かれているのかと疑うこともあった。「地上と全世界の王たちがその前で震え上がった教皇の威光に、私は誰で反対するだろうか。絶望して私はよく飛び込みました。」しかし、彼は落胆することはありませんでした。人間のサポートが失敗したとき、彼はただ神に目を向け、その全能の腕に完全な安心感を持って寄りかかることができることを学びました。

ルターは宗教改革の友人に次のように書いています。「私たちは勉強や知力によって聖書を理解することはできません。ですから、あなたの第一の義務は祈りから始めることです。主があなたにその願いをかなえてくださるよう祈りなさい。」神の豊かな憐れみは、御言葉の理解につながります。神の御言葉の解釈者は、その御言葉の作者ご自身のほかにありません。御自身が言うように、「そして、彼らは皆、神によって教えられるでしょう。」自分の研究や知性の力には何も期待せず、ただ神とその御霊の導きを信頼してください。その分野で経験のある人を信じてください。」ここに、神が今回の厳粛な真理を他の人に示す目的で召されたと感じている人にとって、非常に重要な教訓があります。これらの真実はサタンと、サタンがでっち上げた寓話を愛する人々の敵意を引き起こすでしょう。悪の力と戦うには、知力と人間の知恵以上のものがが必要です。

敵が慣習や伝統、あるいは教皇の宣言や権威に訴えたとき、ルターは聖書と聖書だけを持って敵に立ち向かいました。彼らが答えられない議論がここにありました。このため、形式主義と迷信の奴隷たちは、ユダヤ人がキリストの血を求めたように、彼の血を求めて叫びました。「彼は異端者だ」ローマの狂信者たちは怒鳴った。「彼をあと一時間生きさせるのは罪だ！すぐに彼を絞首台に連れて行ってください！」しかし、ルターは彼の怒りの餌食にはなりません。神は彼のために働きをしており、彼を守るために天使たちが天から遣わされました。しかし、ルターから貴重な光を受け取った多くの人々がサタンの怒りの対象となり、真実のために勇敢にも拷問と死を経験しました。

ルターの教えはドイツ中の思慮深い人々の注目を集めました。彼の説教や著作からは、何千人もの人々を目覚めさせ、啓蒙する光線が発せられました。生きた信仰が、教会が長い間維持されてきた死んだ形式主義に取って代わりつつありました。人々はローマ主義の迷信に対して日々自信を失っていました。偏見の壁は崩れ去りました。ルターがあらゆる教義と声明を証明した神の言葉は、人々の心に侵入する両刃の剣のようでした。あらゆる場所で、霊的な進歩への欲求が呼び覚まされました。何世紀にもわたって経験したことの無いほどの正義への飢えと渇きがどこにでもありました。したがって、人々の目は、

人間の儀式や地上の仲介者に時間を向けられていた彼らは、今度はキリストと十字架につけられたキリストに対する悔い改めと信仰に目を向けました。

この広範な関心は教皇当局の懸念をさらに呼び起こしました。ルターは異端の告発に答えるためにローマに出廷するよう召喚状を受けた。その命令は彼の友人たちを恐怖で満たした。彼らはすでにイエスの殉教者の血に酔っていた、あの腐敗した都市でイエスを脅かす危険をよく知っていました。彼らは彼のローマ行きに抗議し、ドイツで尋問を受けるよう要求した。

この取り決めは最終的に有効となり、この事件を審理するために教皇特使が任命された。教皇が役人に伝えた指示には、ルターはすでに異端者として認定されていると記載されていた。したがって、特使は「彼を訴追し、遅滞なく服従を強制した」罪で起訴され、もし彼が釈放されず、特使が彼の身柄を確保できなかった場合、彼には「ドイツ全土で彼を有罪とし、追放し、呪う」権限が与えられた。また教皇は、有害な異端を完全に根絶する目的で、教会や国家において皇帝を除くすべての者と、その尊厳に関わらず破門するよう特使に命じた。ルターとその追隨者を逮捕し、ローマの復讐に引き渡す。

ここに教皇の真の精神が示されています。この文書全体を通して、キリスト教の原則や共通の正義のヒントさえも見られません。ルターはローマから遠く離れていたため、自分の立場を説明したり擁護したりする機会がありませんでした。しかし、彼の事件が調査される前に、彼は即座に異端者であると宣言され、同じ日に警告され、告発され、裁判を受け、有罪判決を受けた。そしてこれらすべては、教会または国家における唯一の最高かつ絶対の権威である聖なる父と呼ばれた人物によって行われたのです！

ルターが真の友人の同情とアドバイスを非常に必要としていた当時、神の摂理によりフィリップ・メランヒオンはヴィッテンベルクに送られました。若く、控えめで礼儀正しく内気なメランヒオンの健全な判断力、広範な知識、そして説得力のある雄弁さは、性格の純粋さと誠実さと相まって、一般の賞賛と尊敬を勝ち取りました。彼の才能の輝きは、彼の性質の優しさに比べて驚くべきものではありませんでした。彼はすぐに福音の熱心な弟子となり、ルターの最も忠実な友人であり、最も貴重な支援者となりました。彼の優しさ、用心深さ、正確さは、ドイツの改革者の勇気とエネルギーを補う役割を果たしました。彼のこの活動への執着は宗教改革に力を与え、ルターにとって大きな興奮の源となった。

アウグスブルクが裁判の開催地として指定されており、改革者はその街へ徒歩で向かうことにした。彼には深刻な懸念があった。途中で誘拐されて殺害されると公然と脅迫され、友人たちは危険を冒さないように懇願した。彼らは彼に、しばらくヴィッテンベルクを離れ、喜んで守ってくれる人々の元で安全を探すよう懇願した。しかし、彼は神が自分に置かれた立場を離れることを望まなかった。彼は嵐に見舞われても、忠実に真理を守り続けなければなりません。彼の言葉はこうだった：「私はエレミヤのようで、戦いと争いの男です。しかし、彼らの脅威が増すほど、彼らは私の喜びを倍増させます...彼らはすでに私の名誉と私の良い名を破壊しました。残っているのは私だけです」

ルターがアウグスブルクに到着したという知らせは、教皇特使に大きな満足をもたらした。全世界の注目を集めた扇動的な異端者

今やそれはローマの権限にあるように見え、特使はルターが逃亡すべきではないと決定した。改革者は安全な行動を自分自身に提供していませんでした。彼の友人たちは、この安全策なしでは特使の前に出ないよう彼に強く勧め、彼ら自身も皇帝からそれを入手しようと努めた。ローマの教会代表は、可能であればルターに撤回を強制するか、それができなければローマに連れて行き、フスとヒエロニムスの運命を共にさせるつもりだった。このようにして、彼は代理人を通じて、ルターが安全な行動をとらず、自分の敬虔さに自信を持って現れるよう誘導するためにあらゆる手を尽くした。改革者はこれを断固として拒否した。ルターは皇帝の保護を約束する文書を受け取るまで、教皇大使の前に現れなかった。

政治的理由から、ローマ主義者たちは礼儀正しい態度でルターを説得しようと決めていました。特使はルターとのインタビューの中で、ルターに素晴らしい友情を持っていると宣言したが、暗黙のうちに教会の権威に服従し、議論も質問もせずにすべての点で譲歩するよう要求した。教皇公使は、対応しなければならない人物の性格を適切に評価していなかった。これに応じて、ルターは教会への敬意、真理への願望、自分の教えに対するすべての反対意見に答える用意があり、最も悪名高い大学のいくつかの試験に自分の教義を提出する用意があることを示しました。しかし同時に、彼は枢機卿の行為に対して抗議し、枢機卿は自分の誤りを証明することすらせずに撤回を要求した。

返答は「撤回、撤回！」だけだった。改革者は自分の態度が聖書によって裏付けられていることを示し、真理を放棄することはできないと強く宣言した。ルターの主張に応えることができなかった遺産は、伝統からの引用や教父たちの宣言を散りばめながら、彼に対する非難、軽蔑、お世辞の嵐を巻き起こし、改革者に発言の機会を与えなかった。このように会議を続けてもまったく無駄になると見て、ルターは最終的に、自分の答えを書面で提示することを渋々許可を得ました。

彼は友人に宛てた手紙で、「そうすることで、抑圧されている人々は二重の利益を享受できる。第一に、書かれた内容が他人の判断にさらされる可能性があること、第二に、恐怖に対処できない場合でも、対処する可能性が高くなるということだ」と述べた。傲慢で饒舌な専制君主の良心、そうでなければ強制的な言葉遣いで支配されていただろう。」次のインタビューで、ルターは、聖書からの多くの引用によって完全に裏付けられた、自分の見解を明確かつ簡潔かつ効果的に説明しました。この文書は読み上げられた後、ルターによって枢機卿に届けられたが、枢機卿はそれを無駄な言葉と無関係な引用の塊であると軽蔑して脇に捨てた。ルターは完全に挑戦されたと感じ、傲慢な高位聖職者に自分の立場、つまり教会の伝統と教えに基づいて対峙し、彼の思い込みに完全に異議を唱えます。

この高位聖職者は、ルターの推論に答えようがないのを見ると、自制心をすっかり失い、怒りで叫びました。「撤回しなさい、さもなければ、あなたをローマに送り、あなたの訴訟を聞くよう命じられた裁判官の前に出廷させます。彼と彼の支持者たちも全員も破門してください」あらゆる機会に彼を支持し、教会から追い出す人々。」そして最後に、彼は傲慢で怒りに満ちたイントネーションでこう言いました。「撤回するか、戻るな！」

改革者は友人たちとともに直ちに引退し、自らの側での撤回は期待できないと完全に宣言した。これは枢機卿が達成しようとしていた目的ではなかった。彼はルターを暴力によって服従させたと自慢していた。今、信奉者たちと二人きりになった彼は、自分のやり方が予想外に失敗したことに完全に失望しながら、片っ端から見て回った。

この際のルターへの努力は良い結果をもたらした。出席した大規模な集会は、二人を比較し、彼らが表現した精神、そして彼らの立場の強さと真実性を自分自身で判断する機会がありました。そのコントラストは何と印象的でしたか！改革者は素朴で、謙虚で、毅然としていて、真理をそばに置いて神の力の中に留まり続けました。教皇の代理人は、傲慢で、権威主義的で、傲慢で非合理的で、聖書から引き出された議論を何一つ持たなかったにもかかわらず、「撤回しなさい、さもなければ、あなたは罰を受けるためにローマに送られるでしょう！」と激しく叫びました。

ルターが安全な行動をとったにもかかわらず、ローマ主義者たちは彼を捕まえて投獄しようと共謀した。彼の友人たちは、彼の滞在を延長するのは無駄であり、遅滞なくヴィッテンベルクに戻らなければならず、彼の意図を隠すために細心の注意を払わなければならないと主張した。

友人たちの考慮に同意した彼は、治安判事が任命したガイドのみを同行させ、夜明け前に馬に乗ってアウグスブルクを出発した。多くの予感を感じながら、彼は暗くて静かな街の通りを進んだ。用心深い残忍な敵が彼の破壊を計画していました。彼は自分に仕掛けられた罠から逃れられるだろうか？不安と熱心な祈りの時代でした。ルターは城壁の小さな扉に到着しました。

彼はそれを開け、ガイドと一緒に問題なく通過しました。安全に外に出た逃亡者たちは急いで逃亡を図ったが、特使がルターの出発を知る前に、彼は追手の手が届かなくなった。サタンとその使者たちは敗北しました。彼らが力を持っていると思っていた男は、狩人の罠から鳥のように逃げ出した。

ルター逃亡の知らせを聞いた特使は驚きと怒りに満ちた。彼は教会の問題者に対処する際の知恵と毅然とした態度で大きな栄誉を受けることを期待していましたが、その期待は裏切られました。彼はザクセン選帝侯フリードリヒに宛てた手紙で怒りをぶつけ、ルターを痛烈に非難し、フリードリヒに対し改革者をローマに送るかザクセンから追放するよう要求した。

ルターは弁護の際、教皇特使に対し聖書の誤りを示すよう主張し、もし神の言葉と矛盾することが判明した場合には教義を放棄すると厳粛に約束した。そして彼は、そのような神聖な目的のために苦しむに値するとみなされたことに対して神に感謝の意を表した。

投票者はまだ改革派の教義についてほとんど知識がなかったが、ルターへの言葉の誠実さ、力強さ、明快さに深く感銘を受けた。そして改革者が誤りであることが証明されるまで、フレデリックは彼の保護者であり続けることに決めた。特使の要請に応じて、彼は次のように書いている：「マルティニ博士があなたの前でアウグスブルクに現れたのだから、あなたは満足するはずだ。私たちはあなたが自分の間違いを納得させずに彼を撤回させる努力をするとは期待していなかった。誰もいない。」 「我が国の学識ある人々は、マルティンの教義は不敬虔、反キリスト教、あるいは異端であると主張している。したがって、我々はルターをローマに送ることも、我が国から彼を追放することも拒否しなければならない。」

有権者は社会の道徳的障壁が全般的に崩壊していることに気づいていた。大規模な改修プロジェクトが必要でした。人間が神の戒めと啓発された良心の命令を認識しそれに従うだけであれば、犯罪を制限し処罰するための複雑で費用のかかる措置は不必要であろう。

彼はルターがこの目標に向かって努力していることに気づき、教会内でより良い影響が感じられつつあることを密かに喜んでいました。

彼はまた、ルターが大学の教授として顕著な成功を収めていることにも気づきました。改革者が論文を発表してからわずか1年しか経っていなかった

城の教会ではすでに「オールセインツ」祭りに教会を訪れる巡礼者の数が大幅に減少していた。ローマには礼拝者も捧げ物もなくなっていたが、その地位を埋めたのは、聖遺物を崇める巡礼者ではなく、教室を埋める学生たちで、今度はヴィッテンベルクにやって来た別の階級だった。ルターは著作はあらゆる場所で聖書への新たな関心を呼び起こし、ドイツ全土だけでなく他の国からも学生が大学に集まりました。初めてヴィッテンベルクに到着した若者たちは、「天に手を上げ、昔のシオンの山から真理の光が輝いたように、ヴィッテンベルクからも真理の光が輝き、そこから光が最も多くの人々に浸透するようになった神を賛美しました」遠い土地。」

ルターはローマ主義の誤りからまだ部分的にしか改宗していませんでした。しかし、彼は聖書と教皇令や憲法を比較して驚いた。改革者は次のように書いている。「私は教皇令を読んでいて、その中でキリストが非常に誤って表現され、十字架につけられている様子を考えると、教皇が反キリストそのものなのか、それともその使徒なのか分からない。」しかし、この時点ではルターはまだローマ教会の支持者であり、聖体拝領から離れることはないと考えていました。

宗教改革者の著作と教義はキリスト教世界の国々に広まりました。取り組みはスイスとオランダにも及んだ。彼の著作のコピーはフランスとスペインに届きました。イギリスでは、彼の教えは命の言葉として受け入れられました。真実はベルギーとイタリアにも届いた。何千人もの人々が死の淵から目覚め、信仰生活の喜びと希望を抱き始めました。

ローマはルターの攻撃にますます激怒し、彼の最も熱狂的な敵対者の中にはカトリック大学の医師さえも、反抗的な修道士を殺害した者には罪がないと宣言した。ある日、マントの下に銃器を隠した見知らぬ男が改革者に近づき、なぜ一人で歩いているのかと尋ねました。「私は神の手の中にあります」とルターは答えました。

「彼は私の助けであり、私の盾です。人間は私に何ができるのでしょうか？」これらの言葉を聞くと、見知らぬ人は青ざめて、まるで天の天使の前から逃げたかのように逃げました。

ローマはルターを破壊することを決めましたが、神が彼を守ってくれました。彼の教義は、修道院、農民の家、貴族の城、大学、王宮など、あらゆる場所で聞かれました。そして貴族たちは彼らの努力を維持するために四方八方から立ち上がりました。

ルターがフスの著作を読んで、彼自身が支持し、教えようと努めていた信仰による義認という偉大な真理が、ボヘミアの改革者によって説教されたものであることに気づいたのはこの時であった。ルターはこう宣言しました。「パウロもアウグスティヌスも私も、私たち全員が、知らず知らずのうちにフス派だったのです！」さらに、こう続けました。「神は間違いなく、この責任を世界に求めるでしょう。なぜなら、真理は一世紀前に説教され、焼き払われたのですから！」

ルターは、キリスト教の宗教改革を支持するドイツ皇帝と貴族への訴えの中で、教皇について次のように書いている：「キリストの代理者と呼ばれる彼が、いかなる皇帝も匹敵することのできないほどの威厳を誇っているのを見るのは恐ろしいことだ。これは貧しく謙虚なイエスを表しているのか、それとも謙虚なペテロを表しているのでしょうか？教皇は世界の主であると彼らは言います！しかし、その代理者であるキリストは、「私の王国はこの世のものではない」と言いました。牧師はあなたの上司の範囲を超えているのですか？」

大学について彼は次のように書いている、「聖書を熱心に説明し、若者の心に刻まない限り、大学が地獄に通じる大きな門になってしまうのではないかと非常に危惧している。私は誰にも自分の大学を置くよう勧めない」

この訴えはすぐにドイツ全土に伝わり、国民に大きな影響を与えました。国全体が興奮し、多くの人々が宗教改革の旗の周りに集まりました。ルターの敵対者たちは復讐を熱望しており、教皇に対し彼に対して断固とした行動を取るよう促した。彼らの教義は直ちに非難されることが布告された。

改革者とその追隨者には60日間の猶予が与えられ、その後撤回しなければ全員破門されることになっていた。

それは宗教改革にとって恐ろしい危機でした。何世紀にもわたって、ローマの破門宣告は強力な君主たちを恐怖させ、強大な帝国を不幸と荒廃で満たしてきた。彼の破滅に陥った人々は、広く恐怖と恐怖の目で見られました。仲間との関係も断絶され、追われるべき無法者として扱われた。ルターは、自分に押し寄せようとしている嵐を知らなかったわけではありませんが、キリストが自分の支えとなり盾となってくださると信じて、しっかりと立っていたのです。殉教者の信仰と勇気をもって、彼は次のように書いた。「これから何が起こるか私は知りませんし、知る気もありません...嵐がどこに到達しても私は恐れません。意志がなければ葉一枚も落ちません。」私達の父。

神はさらに私たちが気遣ってくださることでしょう。私たちのために肉となった御言葉が死んだので、御言葉のために死ぬのは簡単です。私たちが神とともに死ぬなら、私たちは神とともに生きるでしょう。そして、神が私たちの前に行ったことを経て、私たちは神のいるところにおいて、永遠に神とともに住むでしょう。」

教皇の勅書がルターの手に入ったとき、彼はこう言った、「私はこれを不敬で偽りのものとして軽蔑し、抵抗します...その中で非難されるのはキリストご自身です...私は最善の理由で苦しむ可能性を誇りに思います。教皇が反キリストであり、彼の王位がサタン自身のものであることを知っているので、私はすでに大きな自由を感じています。」

しかし、ローマの決議には効果がないわけではなかった。刑務所、拷問、剣は服従を強制するための強力な武器でした。弱く迷信深い人々は教皇の布告の前に震えた。ルターに対する一般的な同情はあったが、宗教改革のために命を危険にさらすにはあまりにも高価すぎると多くの人が感じた。すべてが改革者の仕事が終わりに近づいていることを示しているように見えました。

しかしルターはそれでも勇気を持ち続けました。ローマは彼に非難の言葉を投げつけ、世界は彼の状況を見て、彼が死ぬか降伏を強いられるだろうと何の疑いも持たなかった。しかし、恐ろしい力で彼は有罪判決を取り消し、ローマ教会から永久に離れるという決意を公に宣言しました。学生、医師、あらゆる階級の市民の群衆の前で、ルターは教会法、法令、教皇の権力を擁護するいくつかの文書を盛り込んだ教皇勅書を焼き捨てた。

「私の敵は、私の本を燃やすことによって、一部の人々の心の中の真実の大義を傷つけ、彼らの魂を破壊することができました。このため、私は報復として彼らの本に終止符を打ちました。深刻な闘争はまだ始まったばかりです。」 「ここまで私は教皇を翻弄してただけだ。私はこの仕事を神の名の下に始めた。それは私なしでも神の力によって終わるだろう。」

ルターは、彼の大義の弱さであると彼を嘲笑した敵の非難に対して、次のように答えた。「私が神ご自身を軽蔑しているのですか？彼らは私が一人だと言います。それは真実ではありません。エホバが私と共におられるからです。彼らの理解では、モーセはエジプトを出発する際に一人でした。エリヤはアハブ王の王国で一人でした。イザヤも一人でした。」エルサレムではエゼキエルのみ、バビロンではエゼキエルのみ...ローマよ、聞いてください。神は預言者として大祭司や他の偉大な人物を決して選ばなかったのですが、謙虚で軽蔑されていた人々を優先し、かつては牧師アモスさえも選びました。聖人たちは、危険を伴う王、君主、裏切りの司祭、賢者を戒めざるを得なかった時代

彼らの人生について...私は自分が預言者だとは言いません。しかし、抑圧者の側には社会的地位が高く、裕福で、嘲笑さえする手紙がたくさんある一方で、私が一人であるという理由だけで彼らは恐れなければならないのです。はい、私は一人ですが、神の言葉がそばにあるので穏やかです。そして、彼らの多数の支持者全員にとって、あらゆる権力の中で最大のものは彼らとともにありません。」

しかし、ルターが教会から決定的に分離することを決意したのは、自分自身とのひどい葛藤がなかったわけではありません。この頃、彼は次のように書いている。「私たちが幼い頃から吸収してきた遠慮を脇に置くことがどれほど難しいかを日ごとに感じています。ああ！私はあえて単独で教皇に立ち向かい、教皇を反キリストと見なすべきであると自分を正当化する聖書を味方につけていたにもかかわらず、このことが私にどれほどの苦痛を与えたことでしょうか。私の心の苦難は何だったのでしょうか！教皇派の口から頻りに聞かれた質問、『あなただけが賢いのですか？他の人も間違っている可能性がありますか？もし最終的に間違っているのはあなたであり、あなたの間違いに非常に多くの魂を巻き込んだとしたら、誰が永遠に罪に定められることになるのでしょうか？』それで私は自分自身と、そしてサタンと戦いました。

キリストは、その間違いのない御言葉によって、これらの疑いに対して私の心を強めてくださいました。」

教皇はルターに対し、撤回しない場合は破門すると脅迫したが、その脅迫は果たされた。この宗教改革者をローマ教会から最終的に分離することを宣言する新たな勅令が発布され、彼を天から呪われた者として非難し、彼の教義を受け入れたすべての人々を同様の非難の対象に含めた。偉大な戦いが始まった。

神がご自分の時代に特に当てはまる真理を提示するために用いられるすべての人々には反対が多い。ルターの時代には、当時としては特に重要な真理が存在していました。今日の教会には現在の真理があります。御意志の勧告に従ってすべてのことを行う神は、人々をさまざまな状況に置き、彼らが生きている時代と彼らが置かれている状況に応じた義務を命じるのが適切であるとみなされました。もし彼らが自分たちに与えられた光を大切にすれば、真実についての最も広範な展望が彼らの前に開かれるでしょう。しかし、これはルターに反対したローマ主義者たちと同様、今日の大多数にとっても望まれていない。昔と同じように、神の言葉の代わりに人間の理論や伝統を喜んで受け入れる傾向があります。今回真実を伝える人たちは、初期の改革者たちよりも好意的に受け入れられることを期待すべきではありません。真実と誤り、キリストとサタンの間の大きな対立は、この世界の歴史が終わるまで激しさを増していくでしょう。

イエスは弟子たちにこう言われました。「もしあなたが世のものであれば、世も世のものを愛するでしょう。しかし、あなたが世のものではなく、わたしがあなたを世から選んだのです。それが、世があなたを憎む理由です。この言葉を覚えておいてください。」 「しもべはその主人より偉いわけではない。彼らがわたしを迫害するなら、あなたたちも迫害するだろう。彼らがわたしの言葉を守ったのなら、あなたの言葉も守るだろう。」と私はあなたに言いました。（ヨハネ 15:19 と 20）。そしてその一方で、私たちの主ははっきりとこう言われました。「あなたがたの中の人々がみな良いことを言うのは、あなたにとって不幸なことです。彼らの先祖が偽預言者たちにそうしたからです。」（ルカ 6:26）。今日、世界の精神は、昔ほどキリストの精神と調和していません。そして、神の言葉を純粋に宣べ伝える人々が、当時よりも好意的に受け入れられることは今はないでしょう。真実に対する反対の形は変化するかもしれないし、敵意はより微妙なものであるため、あまり公然としないかもしれない。しかし、同じ敵対関係は依然として存在しており、それは終末まで現れるでしょう。

第8章

虫食いに直面するルーサー

カール 5 世皇帝がドイツの王位に就くと、ローマからの使者たちが急いで彼に祝意を表し、宗教改革に対して権力を行使するよう君主を説得しました。一方、シャルルが王冠の恩義の多くを負っていたザクセン選帝侯フリードリヒは、謁見を認める前にルターに対していかなる手段も講じないよう懇願した。こうして皇帝は非常に当惑し当惑する立場に置かれた。教皇派はルターに死刑を宣告する勅令以上のものでは満足しないだろう。選帝侯は「皇帝陛下も他の誰も、ルターの著作が反駁されたことをまだ証明していない」ときっぱりと宣言していた。したがって、彼は「博士に」と要求しました。

ルターには、賢明で敬虔で公平な裁判官たちの法廷で自ら答えることができるよう、安全な行動が与えられていた。」

現在、すべての関係者の注目は、カールが帝位に就いた直後にヴォルムスで開かれるゲルマン諸州の会議に集中していた。この国家評議会では検討すべき重要な政治的問題と利益がありました。ドイツの王子たちは初めて、熟議会議で若き君主と対面することになった。祖国のあらゆる場所から教会と国家の高官がやって来ました。高貴な生まれで、権力を持ち、世襲の権利を嫉妬する領主。意識的な階層的優位性と権力に思い上がった高貴な聖職者。高貴な騎士とその武装した従者、そして海外や遠い国からの大使が皆、ヴォルムスに集まりました。しかし、その広大な集会で最も深い関心を集めた議題は、サクソン人の改革者の大義であった。

チャールズは以前、選挙人にルターを国会に連れて行くよう命じ、ルターの保護を保証し、係争中の問題について有能な人々と自由に議論することを約束していた。ルターは皇帝の前に出たいと熱望していました。当時、彼の健康状態は非常に弱っていました。それにも関わらず、彼は選帝侯にこう書いている、「もし私が健康でヴォルムスへの旅ができないなら、私は病気のままそこへ連れて行かれることになるだろう。なぜなら、もし皇帝が私を呼び出したのなら、これが神の呼びかけであることを疑うことはできないからだ」もし彼らが私に対して暴力を振るいたいのなら、おそらくそうするだろうが、それは彼らが私に彼らの前に出頭を要求するという情報を私から得るためではないのだから、私はその問題を主の御手に委ねる。炉の中で三人のイスラエル人がまだ生きており、燃えて統治している。

私を救おうという神のご意志がなければ、私の命はほとんど重要ではありません。福音が悪者の軽蔑にさらされないように注意しましょう。そして私たちが彼らの勝利を許すのではなく、彼らを守るために血を流せますように。私の生と死のどちらが兄弟たちの救いにもっと貢献するか、誰が言えるでしょうか？逃げるか撤回すること以外は、私にすべてを期待してください。逃げることもできないし、撤回することもできない。」

ルターが国会に出廷するというニュースがワームズ紙に流れたとき、全体的な興奮が生まれました。この事件を特別に任されていた教皇特使アレハンドロは警戒し、激怒した。彼は、その結果が教皇の大義にとって悲惨なものになるだろうと悟った。教皇がすでに死刑判決を言い渡した事件の捜査を開始することは、主権者である教皇の権威を軽蔑することになるだろう。さらに、アレハンドロは次のことを懸念していました。

その男の雄弁で強力な議論は、多くの王子たちの目を教皇の大義からそらす可能性がある。彼は最も激しい態度で、ルターがヴォルムスに来ることに對して皇帝に警告した。その間に、ルターの破門を宣言する雄弁が出版された。この事実が特使の表明に加わり、皇帝は撤退することになった。カール5世は選挙人に、ルターが撤回しないのであればヴィッテンベルクに留まるべきであるとの手紙を書いた。

アレアンドロはこの勝利に満足せず、力と洞察力の限りを尽くしてルターの有罪判決を得るために努力した。大義にふさわしい粘り強さで、彼はこの問題を王子、高位聖職者、その他の議會議員の注意を引くためにあらゆる手を尽くし、改革者を扇動、反逆、冒涇の罪で非難した。しかし、この遺産によって明らかにされた激しさと情熱は、それを推進する精神を非常に明確に明らかにしました。ある教皇派の作家は、「宗教に対する真の熱意よりも、憎しみと復讐への渴望が彼の動機である」と述べた。ほとんどの國會議員はルターの大義を好意的に見る傾向がありました。

アレアンドロは熱意を倍増させて、教皇の布告を執行する義務を皇帝に主張した。しかし、ドイツの法律により、これは諸侯の協力なしには実現できず、最終的には特使の軽率な態度に打ち勝ったカールは、自分の主張を国会に提出するよう命じた。「今日は公使館にとって素晴らしい日だった。集会は印象的だった。大義はさらに大きかった。アレアンダーはすべての教会の母であり愛人であるローマを守るようになっていた。』彼はキリスト教世界の集まった公国の前でペテロの優位性を証明すべきである。彼は雄弁な才能を持っており、その場の栄華を極めた。「神の摂理は、ローマは有罪判決を受ける前に、最も権威ある法廷の面前で、最も熟練した弁論者たちによって出廷し弁護されるべきであると定めていた。』改革者を支持した人々は、若干の懸念を抱きながらも、アレアンドロ演説の影響を予見していた。ザクセン選帝侯は出席していなかったが、彼の指導の下、彼の顧問の何人かが公使の演説をメモを取るためにそこにいた。

アレアンドロは学識と雄弁の力を駆使して真実の破壊に乗り出した。彼は、教会と国家、生者と死者、聖職者と信徒、議会と特にキリスト教徒の敵として、ルターに對して告発に告発を重ねた。「ルターの誤りには、10万人の異端者を処刑するに足る十分な材料がある」と彼は宣言した。

結論として、彼は改革派信仰のパルチザンを軽蔑するよう努めた。「このルーテル派とは何者なのか？横柄な文法学者、墮落した司祭、自墮落な修道士、無知な弁護士、墮落した貴族の雑多な群衆と、彼らが騙した庶民たちだ」そして変態。

カトリック党は、数、知力、権力の点で、何とほかに優れていることでしょう。この輝かしい議会からの全会一致の布告は、素朴な人々の目を開き、不注意な人々に危険を示し、揺れ動く人々を確立し、弱い人々に力を与えるでしょう。」

このような武器を使って、真実の擁護者はどの時代でも攻撃されてきました。既成の誤りに反対して、神の言葉の単純かつ直接的な教えをあえて提示しようとするすべての人に対して、同じ議論が今でも提起されています。「新しい教義の説教者たちは何者だ？」と大衆宗教を望む人々は叫ぶ。「彼らは無知で、数も少なく、貧しい階級の出身です。

しかし、彼らは真理を持っており、神に選ばれた民であると主張します。彼らは無能であり、間違っています。私たちの教会は数と影響力においてなんと優れていることでしょう。私たちの中には何と偉大で著名な人々がいるのでしょうか！私たちの側には、どれほど多くの力があることでしょう！」これらは世界に顕著な影響を与えた議論ですが、今日では宗教改革者の時代ほど決定的なものではありません。

多くの人が想定しているように、宗教改革はルターで終わったわけではありません。それはこの世界の歴史が終わるまで続くだろう。ルターには、神が自分に照らして下さった光を他の人に反映させるという素晴らしい仕事がありました。しかし、彼は世界に与えられるべき光をすべて受け取ったわけではありません。その時から今日に至るまで、聖書には常に新しい光が当てられ、新しい真理が明らかにされ続けています。

同議員の講演は国会に深い印象を残した。神の言葉の明確で説得力のある真理を持ち、教皇の擁護者を打ち破るルターは存在しませんでした。改革者を擁護しようとする試みはなかった。ルターとその教えを非難するだけでなく、可能であれば異端を根絶したいという一般的な気質が現れました。ローマは自分の大義を守る最も有利な機会を手に入っていた。彼女が自分を弁護するために言えることはすべて表現されました。しかし、見かけ上の勝利は敗北の兆しだった。その瞬間から、候補者同士がオープンな戦いに突入するにつれて、真実と誤りの間のコントラストがより明確に見られるようになりました。その日以来、ローマは以前のように安全だと感じることは二度とありませんでした。

ほとんどの国会議員はルターをローマの復讐に引き渡すことをためらわなかったであろうが、彼らの多くは教会に存在する腐敗を見て嘆き、その結果としてドイツ国民が受けた虐待の根絶を切望していた。階層構造の腐敗と野心。特使は教皇の規範を最も好意的な観点から提示した。その後、主は国会議員に影響を与えて、教皇の専制の影響を正確に描写させました。ザクセン公ジョージは気高い毅然とした態度でその高貴な集會に立ち、教皇制度の欺瞞と忌まわしい行為、そしてその恐ろしい結果を恐ろしいほど正確に述べた。

彼は演説の最後にこう述べた：「これらは、ローマに対して救済を求める虐待行為のほんの一部に過ぎない。恥はすべて脇に置き、彼らが追求する唯一の目的は…金、常に金だ！このように男たちは、真実を教えるのが義務であるにもかかわらず、彼らは虚偽しか言わず、大目に見られるだけでなく報われるのです、なぜなら、嘘が大きければ大きいほど、彼らの利益も大きくなるからです。これが、非常に多くの腐敗した水が流れる污染源なのです。「彼らは手を繋いでいます…ああ！これは聖職者によって引き起こされたスキャンダルであり、非常に多くの哀れな魂を永遠の滅びに投げ込みます。完全な改革が実行されなければなりません。」

ルター自身、教皇の虐待に対するこれほど効果的で説得力のある非難を提示することはできなかった。そしてホルヘ公爵が改革者の宣言された敵であるという事実は、彼の言葉に大きな影響を与えた。

もしその瞬間、議員全員が目が開いていたら、神の天使たちがその真っ只中に間違いの暗闇に光を放ち、真理を受け入れるために心と心を開いているのが見えただろう。宗教改革の敵対者たちを導き、これから起ころうとしている偉大な業への道を整えたのは、真理と知恵の神の力でした。マルティン・ルターは出席していませんでした。しかし、その集會ではルターよりもはるかに偉大な方の声が聞こえました。

間もなく、ドイツ国民に非常に重くのしかかっていた教皇による抑圧のリストを提出する委員会が国会によって任命された。111の仕様を含むこのリストは、これらの濫用を正すために直ちに措置を講じるよう要請するとともに、皇帝に提出されました。「何というキリスト教徒の魂の無駄遣いだ」と請願者らは言った、「キリスト教世界の精神的指導者が承認しているスキャンダラスな行為の日々の成果が何という不正義で、何という強奪だろう！我が国の破滅と不名誉は避けられなければならない。したがって、私たちは、大変謙虚に、しかし非常に急いで、全体的な改革を命令し、その取り組みを進めてくださるようお願いいたします。」

その後評議会は改革者に出頭するよう要求した。アレクサンダーの嘆願、抗議、脅迫にもかかわらず、皇帝は最終的に同意し、ルターは国会に出席するよう呼び出された。この出状により、安全な行動がとられ、安全な場所への帰還が保証された。ルターはヴォルムスへ導くよう特別に命じられた伝令によってヴィッテンベルクへ連れて行かれた。

ルターの友人たちは恐怖と苦しみを感しました。彼に対する偏見と敵意を知っていた彼らは、彼の安全な行動が尊重されないのではないかとさえ恐れ、危険にさらさないでくれと懇願した。彼はこれに反論した、「教皇派はヴォルムスで私に会うことをほとんど望んでいないが、彼らは私の非難と死を切望している。それは問題ではない。

私のためにではなく、神の言葉を祈ってください...キリストは私に御霊を与えて、これらのサタンの奉仕者たちに打ち勝ってください。私は生きています限り彼らを軽蔑するだろう。私は死によってそれらを克服します。彼らはワームで私に撤回を強制する方法を考えるのに忙しい。そして、私の撤回はこうなります。以前、私は教皇はキリストの代理者であると言いました。今日私は彼が私たちの主の敵であり悪魔の使徒であると言います。」

ルターは危険な旅を一人で行ったわけではありません。帝国の使者に加えて、彼の親友のうち3人が彼に同行することにしました。メランヒトンは彼らに加わりたくて熱望した。彼の心はルターの心と結びついており、必要であれば投獄され、死に至るまで彼に従いたいと切望していました。しかし、彼らの上訴は却下された。もしルターが滅びたとしたら、宗教改革の希望はこの若い協力者に集中することになるでしょう。メランヒトンに別れを告げる際、ルターはこう言った、「もし私が戻らず、敵に殺されても、教え続け、真理にしっかりと立ちなさい。私の代わりに働いてください...あなたの命が助かれば、私の死は大した問題ではありません。」」ルターの出発を見届けるために集まった学生や市民は深い感動を覚えた。福音に心を打たれた群衆は涙ながらに彼に別れを告げた。そこで改革者とその仲間たちはヴィッテンベルクを出発しました。

旅の途中、彼らは人々の心が暗い予感に抑圧されていることに気づきました。彼らが通過したいくつかの都市では、彼らに名誉が支払われなかった。夜、彼らが休憩のために立ち止まったとき、友人の司祭は殉教したイタリアの改革者の肖像画をルターの前にかざして不安を表明した。翌日、彼らはルターの著作がヴォルムス紙で非難されたという情報を受け取った。帝国の使者は皇帝の布告を宣言し、禁止された著作物を治安判事に届けるよう国民に呼び掛けていた。使者は、評議会でのルターの安全を懸念し、改革者の決定が揺らいでいるかもしれないと判断し、それでも続行する意思があるかどうか尋ねた。彼は「すべての都市で出入り禁止になるが、私は前進する」と答えた。

エアフルトでは、ルターは栄誉ある歓迎を受けました。感嘆する群衆に囲まれながら、彼は物乞いの袋を抱えてよくさまよっていた通りを歩いた。彼は修道院の独房を訪れ、今ドイツに溢れている光が自分の魂に注がれた苦勞について思いを馳せた。ルターは説教に執拗に誘われました。彼は講義をすることを禁じられていたが、帝国の使者が許可を与え、かつて修道院で奉仕していた修道士が説教壇に上がった。

ルターは集まった群衆に向けて、「あなたがたに平和があるように」というキリストの言葉について語りました。「哲学者、医師、作家たちは人間に永遠の命を得る方法を教えようとしましたが、成功しませんでした。今から言いますが、神は人間を死者の中からよみがえらせた、主イエス・キリストです。死を滅ぼし、罪を償い、地獄の門を閉じてください。これが救いの業です。キリストは勝利されました。これは喜ばしい知らせです。そして私たちは自分の力ではなく、キリストの働きによって救われます...私たちの主イエス・キリスト「あなたたちに平安あれ。」

私の手を見てください。」これは、「見てください、おい！」という意味です。あなたの罪を取り除き、あなたを救ったのは私、私だけです。今、あなたには平安がある、と主は言われる。」

ルターは続けて、真の信仰は聖なる生活の中で表れることを示しました。「神が私たちを救ってくださったのですから、私たちは神に喜ばれるように自分の仕事を命じましょう。あなたは金持ちですか？あなたの富が貧しい人々のニーズを満たしますように。あなたは貧乏だ？あなたのサービスが富裕層を助けますように。もしあなたの仕事が自分のためだけであれば、あなたが神に捧げる奉仕は単なる思い上がりすぎません。」

人々はうっとり聞き入っていました。命のパンは飢えた魂たちに配られました。キリストは彼らの前で教皇、特使、皇帝、王の上に掲げられました。ルターは自分の危険な立場については言及しなかった。彼は自分自身を思考や同情の対象にしようとはしませんでした。キリストを観想するうちに、彼は自分自身を見失ってしまったのです。彼はカルバリの男の後ろに隠れ、イエスを罪人の救い主として提示することだけを求めました。

改革者が旅を続ける中、彼はどこにいても大きな関心をもって見守られていました。熱心な群衆が彼の周りに集まり、友好的な声が彼にローマ主義者の意図を警告した。「彼らは彼を生きたまま燃やし、ジョン・ハスのときと同じように遺体は灰になるだろう」と一部の人は言った。ルターは答えた、「たとえ彼らがヴォルムスからヴィッテンベルクまでずっと火をつけ、その炎が天に昇るかもしれないが、私は主の御名において彼らを横切り、彼らの前に立つだろう。私はあのカバの顎を突き破って入って砕くだろう」その齒は主イエス・キリストを告白しています。」

彼がワームズに到着したというニュースはかなりの騒ぎを引き起こした。友人たちは彼の安全を心配した。自分たちの大義の成功を恐れる敵。彼が市内に入るのを思いとどまらせるために粘り強い努力が払われた。法王派の扇動により、彼は友好的な紳士の城に行くよう主張され、そこではあらゆる困難が友好的に解決されると言われていた。彼の友人たちは、彼を脅かす危険について説明することで、彼の恐怖を目覚めさせようとした。

彼の努力はすべて失敗に終わりました。ルーサーはまだ揺るがず、「たとえヴォルムスの屋根のタイルと同じくらい多くの悪魔がいたとしても、私はそこに入るだろう。」と宣言した。

彼がヴォルムスに到着すると、大勢の群衆が彼を出迎えようと市門に集まりました。これほど大規模な集会はこれまでに行われたことがなく、天皇自身に挨拶することすらなかった。興奮は激しく、群衆の真ん中から、彼を待っている運命についてルターへの警告として、突き刺すような哀れな声が葬儀の聖歌を歌いました。「神がわたしを守ってくださるでしょう」と彼は馬車から降りながら言った。

教皇派はルターが実際にヴォルムスに現れようとしたとは信じておらず、彼の到着に彼らは驚愕した。皇帝は直ちに相談役を呼び、どのような方針をとるべきかを検討させた。司教の一人、熱心なローマ主義者はこう宣言した、「私たちはこの問題について長い間議論してきました。陛下がこの男をきつぱりと排除してくださいますように。ジョン・ハスを火刑に処したのはジギスムントのせいではありませんか？私たちは」と宣言した。異端者の安全な行動を守る義務すらない。「いいえ」と皇帝は言いました。「私たちは約束を守らなければなりません。」したがって、改革者の意見を聞くことが決定されました。

市全体がこの素晴らしい男に会いたいと熱望し、すぐに大勢の訪問者で彼の宿はいっぱいになりました。ルターは最近の病気からかろうじて回復したばかりで、丸二週間続いた旅で疲れていました。彼は翌日の重大な出来事に備える必要があり、静寂と休息が必要でした。しかし、彼に会いたいという願望が非常に強かったため、貴族、騎士、司祭、市民が彼に会おうと集まったとき、彼が楽しんだのはほんの数時間の休息だけでした。その中には、勇敢にも虐待に対する改革を皇帝に求めた多くの貴族もいた。

ルター自身、「彼らは皆、私の福音によって解放された」と述べています。友人だけでなく敵も恐れ知らずの僧侶に会いに来ました。彼は常に冷静に彼らを迎え、誰に対しても威厳と知恵を持って対応した。彼の行動は毅然としていて勇気がありました。重労働と病気の痕跡が残る青白くやつれた顔には、優しく朗らかな表情さえ浮かんでいた。彼の言葉の厳粛さと深い真剣さは、敵ですら完全には対抗できない力を彼に与えました。敵も味方も同じように驚いた。神の影響力が彼を助けていると確信する人もいました。パリサイ人たちがキリストに関して言ったように、「彼には悪魔がいる」と宣言した人たちもいた。

翌日、ルターは国会に出廷するよう呼び出された。帝国の士官が彼を謁見の間まで案内するよう命じられた。しかし、彼がその場所に到着するのは困難でした。どの通りも、教皇の権威に果敢に抵抗した修道士に会おうとする観衆で混雑していた。

彼が裁判官の前に入ろうとしたとき、多くの戦いの英雄である老将軍が親切に彼にこう言いました。「私たちは、最も血なまぐさい戦いで知っています！しかし、あなたの大義が正当であり、あなたがそれに確信しているのであれば、神の名の下に前進し、何も恐れません。神はあなたを見捨てません。」

結局、ルターは評議会の前に現れます。皇帝は玉座に就き、帝国の最も著名な人物たちに囲まれました。マルティン・ルターが信仰について答えることになった集会ほど堂々とした集会の前に現れた人はいなかった。「この出席自体、教皇制に対する驚くべき勝利でした。教皇はその男を有罪とし、彼は今法廷に立っているが、その行為によって法王よりも自分自身が上位に置かれることになった。」

彼は彼を禁制下に置き、あらゆる人間関係から切り離していましたが、それでも彼は敬意を持った言葉で呼び出され、世界で最も厳粛な集会の前に迎えられました。教皇は彼に永久沈黙を宣告したが、彼は今、キリスト教世界の最果てから集まった何千人もの熱心な聴衆の前で話をしようとしていた。このようにして、ルターの力により、巨大な革命がもたらされたのです。ローマはすでに王位から降りようとしていたが、この屈辱を引き起こしたのは修道士の声だった。」

その強力かつひどい議会の前で、貧しい生まれの改革者は怖気づいて当惑しているように見えました。王子の多くは彼の感情を観察して彼に近づき、ある王子は「体を殺しても魂を殺せない者たちを恐れるな」とささやきました。別の者は、「わたしのためにあなたが総督や王たちの前に引き出されるとき、あなたは父の御霊によって何を言うべきかを教えられよう。」と言いました。このように、キリストの言葉は、試練の時にキリストの僕を強めるために、世界の偉人たちによって用いられました。

ルターは皇帝の玉座のすぐ隣の地位に就きました。集まった集会は深い沈黙に包まれた。それから帝国の役人が立ち上がり、ルターの著作集を指しながら、宗教改革者に2つの質問に答えるように求めた。それは、それらを自分のものだと認識しているかどうか、そして、そこに表明されている意見を撤回する意思があるかどうかである。本のタイトルを読んだルターは、最初の質問に関して、その本が自分のものであると認識すると答えました。

「二番目については」と彼は言った、「これは信仰、魂の救い、そして天においても地上においても最大かつ最も貴重な宝である神の言葉に関わる問題であるため、それは軽率であり、反省せずに答えるのは私にとって危険です。私は状況が必要としているよりも少ないと主張することも、真実が必要としている以上を主張することもできます。そして、いずれにせよ、

キリストの有罪判決に含まれる事例については、「人々の前でわたしを否認する者は、わたしも天におられる父の前でも否認するであろう。」（マタイ 10:33）。このため、私は陛下に謹んでお時間をいただきますようお願い申し上げます。

神の言葉を傷つけることなく応答できるように。」

この請願を行うにあたって、ルターは賢明な行動をとりました。彼の手順は、彼が情熱や衝動から行動したのではないことを議会に納得させた。このような冷静さと自制心は、恐れ知らずで融通が利かないことを示していた者には予想外だったが、彼に力を与え、後に慎重さ、決断力、知恵、威厳を持って対応できるようになり、それが敵を驚かせ失望させ、彼の傲慢さとプライドを咎めたのである。

翌日、彼は最終的な答えを出したようだった。真実に対して力が結集することを考えながら、しばらくの間、彼の心は失神した。彼の信仰は揺らぎました。恐怖と震えが彼を襲い、彼は恐怖の餌食となった。彼の前では危険が増大した。彼らの敵はまさに勝利を収めようとしており、闇の力が優勢であるように見えました。雲がルターの上に集まり、彼を神から引き離しているように見えました。彼は万軍の主が共にいてくださるという確信を切望していました。彼は精神の苦痛で顔を伏せ、涙を流し、神以外の誰も完全に理解することのできない、打ちひしがれた心で叫びました。そして、あなたへの私の信仰はなんと小さいことでしょう... この世の力に頼ったら、すべてが終わってしまいます... 死の鐘はすでに聞こえています... 宣告はすでに出ています... ああ、神よ、世界のすべての知恵に対抗して私を助けてください。これをあなた自身の力で行ってください... 仕事は私のものではなく、あなたのもです。私には世界の偉人と戦うものは何もありません... しかし、大義はあなたのもです... そしてそれは正義で永遠の大義です。おお忠実で不変の神よ！私は誰にも依存しません... 人間から来るものはすべて揺らぎます、彼から来るものはすべて失敗する傾向があります... あなたはこの仕事のために私を選んでくださいました... ですから、神よ、あなたの御心は成就します、あなたの最愛の御子イエス・キリスト、私の擁護者、私の盾、砦のために私を忘れないでください。」

賢明な摂理のおかげで、ルターは危険を理解し、自分の力を信じずに生意気でも危険にさらされることがなくなりました。

しかし、彼をその恐怖で打ちのめしたのは、差し迫ったように見える拷問や死の恐怖ではなかった。彼は危機に直面し、それに直面する自分の無能さを痛感した。彼の弱さのせいで、真実の大義は危害を被る可能性があります。ルターは自分の安全のためではなく、福音の勝利のために神と格闘しました。

ヤコブと同じように、その夜の孤独な小川のほとりでの闘いには、彼の魂の苦悩と葛藤があった。ヤコブと同じように、ルターも神に勝利しました。彼の全くの無力さの中で、彼の信仰は力強い救い主であるキリストにしがみつきました。彼は評議会の前で自分が一人になることはないという確信によって強くなった。彼の魂に平安が戻り、国家権力者の中で神の言葉を讃美することが許されたことを彼は喜びました。

ルターは心を神に向けて、目の前の戦いに備えました。

彼は答えを計画することを考え、自分の著作の一節を調べ、自分の立場を裏付ける十分な証拠を聖書から取り出しました。

それから、目の前に開かれていた聖なる巻の上に左手を置き、右手を天に上げ、「たとえ自分の証言を自分の証で封印することになるかもしれないが、常に福音を握り、自由に信仰を告白する」と誓った。血。"

ルターが国会の前に再び紹介されたとき、彼の顔には恐怖や当惑の痕跡は見られませんでした。穏やかで平和的でありながら、勇敢で高貴な彼は、地球上の偉大な人たちの中で神の証人であり続けました。公式

インペリアルはその後、その教義を撤回するかどうかの決定を求めた。ルターは、暴力や情熱を持たずに、従順で謙虚な口調で答えました。彼の態度は内気で礼儀正しいものでした。しかし、彼は自信と喜びを表明し、集会を驚かせた。

「最も穏やかな皇帝、高名な君主たち、そして最も温厚な貴族たち」とルターは言った、「私は今日、あなたの命令に従ってあなたの前に姿を現し、陛下と威厳に満ちた殿下に、神の慈悲によって、好意をもって耳を傾けてくださるよう懇願します。」 「大義の弁護であり、それが正当かつ真実であると私は確信しています。もし私の答えが法廷儀式に出席していないとしたら、お許しください。私はその作法に精通していません。私はただの貧しい僧侶にすぎません。修道院で働き、神の栄光のためだけに働いてきました。」

そして質問に答えて、彼は自分の出版した作品がすべて同じ性格を持っているわけではないと明言した。ある作品では、彼は信仰と善行を扱っており、敵さえもそれらは無害であるばかりでなく、有益であると宣言した。それらを公に放棄することは、すべての当事者が告白した真実を非難することになります。2番目のクラスは、教皇制度の腐敗と虐待を暴露する著作で構成されていました。これらを廃止すればローマの圧政が強化され、多くの大きな不敬虔な行為への扉がさらに開かれることになる。彼の著書の3番目のクラスは、既存の悪を擁護した個人を攻撃しました。これらに関して、ルターは必要以上に暴力的だったと率直に告白した。彼は自分に欠点がないとは主張しませんでした。しかし、そのような態度は真理の敵を助長し、その機会を利用して神の民をさらに残酷に抑圧することになるので、これらの本でさえもキャンセルすることはできませんでした。

「しかし、私は単なる人間に過ぎず、神ではありません」と彼は続けた。「『私が悪を言ったのなら、その悪を証しなさい』と言われたキリストのように、私も自分を守ります。」神の慈悲により、私は皇帝陛下または彼が誰であれ、預言者や使徒の著作から私が間違っていることを証明してくださるようお願いいたします。納得したらすぐにすべての間違いを撤回し、真っ先に本を火に投げ込むつもりです。」

「私が今述べたことは、私が自分自身にさらされた危険について熟考し、比較検討したことを示しています。しかし、このことに落胆するどころか、昔も今も福音がこれが神の言葉の性質であり、運命であるキリストは、「わたしが来たのは、地上に平和をもたらすためではなく、剣を送るためである」と言われました。神はその勧告において素晴らしく恐ろしいものである ; 不和を避けようとする私たちの努力の中で、神の聖なる御言葉と戦い、現在の災害と永遠の荒廃という逃れられない危険の恐ろしい大洪水を頭の上に引き寄せることのないように、私たちは気をつけようではないか。神の託宣から得た多くの例を引用することができますが、ファラオやバビロンとイスラエルの王について話すこともできますが、彼らは明らかにより慎重な手段によって自らの権威を確立しようと考えたときほど、自らの破滅に貢献したことはありませんでした。神は『山を取り除きますが、彼らは知りません』。」

ルターはドイツ語で話しました。彼は同じ単語をラテン語で繰り返すように言われました。前回の努力で疲れ果てていたにもかかわらず、彼は再び以前と同じ明快さとエネルギーでスピーチを繰り返した。神の摂理が議会の働きを導いた。多くの君主の心は誤謬と迷信によってあまりに盲目になっていたため、最初の学位論文ではルターの推論の力が理解できませんでした。しかし、繰り返すことで、指摘された内容を明確に認識できるようになりました。

かたくなに光に対して目を閉じ、真実に納得しないと決めていた人々は、ルターの言葉の迫力に激怒しました。彼が発言をやめると、国会報道官は明らかにイライラしてこう言った。

質問に答えました...明確かつ正確な答えが必要です...撤回するつもりですか?」

宗教改革者はこう答えた。「最も穏やかな陛下と諸侯たちが、単純明快かつ直接的な答えを求めているので、私はそれに答えます。そして、これはこうです。私は教皇にも公会議にも自分の信仰を服従させることはできません。なぜなら、それは明らかだからです。正午、彼らはしばしば誤りに陥り、自分自身と矛盾することさえあることに気づきました。それでは、聖書から引き出された証拠や、より説得力のある推論に私が納得していないのなら、私が引用した文章に満足していないのなら、そして、私の考えがこのように神の言葉に従うように設定されていないのであれば、キリスト教徒が自分の良心に反することを言うのは不公平であるため、私は撤回することはできませんし、撤回するつもりもありません。私はここで自分の立場をとります。他のことはできません。神が祈りますように。助けてください。アーメン。」

このように義人は神の言葉という確かな土台の上にしっかりと立っていたのです。天の光が彼の顔を照らした。彼の偉大さと純粋な性格、心の平和と喜びは、彼が間違いの力に対して証言し、世界を征服する信仰の優位性を証言したときに、すべての人の目に明らかでした。

集会全体は驚いてしばらく沈黙した。最初の返答で、ルターは低い声で、敬意を持って、ほとんど従順な態度で話しました。ローマ主義者たちはこれを自分たちの勇気が衰え始めている証拠だと解釈した。彼らは、さらなる時間の要求が撤回への前兆にすぎないことを理解していました。カルロス自身も、修道士の疲れた表情に軽蔑の目で気づいた。彼の控えめな服装と簡潔なスピーチは、「この男は決して私を異端者にするつもりはありません」と宣言しました。ルターが今示した勇気と毅然とした態度、そして彼の考察の力強さと明晰さは、誰もが驚きで満たされました。皇帝は感嘆の念を抱き、「この僧侶は勇敢な心と揺るぎない勇気をもって語っている」と叫んだ。ドイツの王子の多くは誇りと喜びを持って自国の代表を見つめていました。

ローマの共同宗教家たちは敗北した。彼らの大義は、今ではさらに不利な光にさらされている。彼らは、聖書に訴えることではなく、ローマの確実な主張である脅しを用いて、自らの優位性を維持しようとした。国会報道官は「もし撤回しなければ、天皇と帝国諸国は頑固な異端者にどのように対処するかを検討するだろう」と述べた。

ルターの高貴な弁護に喜んで耳を傾けた友人たちは、この言葉に震えたが、医師自身は冷静にこう言った、「神が私を助けてくれますように。私は何も撤回できないのですから」。

王子たちが談笑している間に、彼は国会から外された。大きな危機が到来したと信じられた。ルターの執拗な服従拒否は、何世紀にもわたって教会の歴史に影響を与える可能性があります。彼にはもう一度撤回の機会が与えられることが決定された。彼が集会に連れて行かれたのはこれが最後だった。もう一度、彼が自分の教義を放棄するかどうかという質問がなされた。「私には、すでに述べたこと以外に答えることはありません。」ルターは、約束や脅迫によってローマの秩序に降伏するように誘導されることができないことは明らかでした。

教皇派の首長たちは、王や貴族を震え上がらせた自分たちの統治が、このようにして謙虚な修道士によって軽蔑されたことにうんざりしていた。彼らは肉体的な拷問を通じて彼に自分たちの怒りを感じさせたいと望んでいた。しかし、ルターは自分が危険にさらされていることを理解しており、キリスト教的な冷静さと威厳を持って誰にでも話しかけました。彼の言葉にはプライドも情熱も欺瞞もありませんでした。彼は自分自身と自分を取り囲む偉人たちを見失い、教皇、高位聖職者、国王、皇帝よりも無限に優れた誰かの存在だけを感じていました。キリストはルターの証言を通して、その瞬間に友人や敵を驚かせ、恐れさせた力と偉大さをもって語られました。神の御霊は

その評議会に出席し、帝国首脳の心に感銘を与えました。王子たちの多くは勇気を持ってルターの大義の正義を認めました。彼らは真実を確信していました。しかし、他のものでは、受け取った印象が失われてしまいました。当時は自分の信念を表明していなかったが、自分で聖書を学び、後に宗教改革の熱心な支持者になった別の階級もありました。

選帝侯フリードリヒはルターの国会出席を心待ちにし、感慨深く彼の演説を聞いた。彼は医師の勇気、毅然とした態度、自制心を目の当たりにし、歓喜と誇りを持って、より断固として医師を弁護し続けようとした。彼は論争の当事者間を比較し、教皇、国王、高位聖職者らの知恵が真理の力によって無に帰したことに気づいた。教皇庁は、あらゆる国、あらゆる時代において感じられるであろう敗北を喫した。

ルターの演説がもたらした影響を認識した特使は、これまでにないほどローマ統治の安全を恐れ、宗教改革者を倒すためにあらゆる手段を講じることを決意した。彼を有名にした雄弁さと外交術を駆使して、彼は若い皇帝に、取るに足らない修道士の大義のために、強力なローマ教皇の友情と支援を犠牲にする愚かさや危険性を説いた。

彼の言葉には効果がないわけではなかった。ルターの返答の翌日、カールはカトリック宗教を維持し保護するという前任者の政策を継続する決意を表明するメッセージを国会に提出するよう命じた。ルターは自分の誤りを放棄することを拒否したので、彼と彼の教えの異端に対して最も厳しい措置が取られるべきである。「ある素朴な修道士が、自らの狂気に惑わされ、キリスト教世界の信仰に反抗した。

私はこの邪悪の進行を止めるために、自分の王国、自分の力、自分の友人、自分の宝、自分の体と血、自分の考え、そして自分の命を犠牲にします。私はアウグスティヌス派ルターを解任し、人々の間に少しでも混乱を引き起こすことを禁じようとしています。

そのとき私は、彼と彼の宗派信者たちに対して、執拗な異端者として、破門、禁止、そして彼らを滅ぼすためにあらゆる必要な手段を講じる措置を講じます。私は、州の人々に対し、忠実なキリスト教徒として行動するよう呼びかけます。」それにもかかわらず、皇帝は、ルターの安全な行動は尊重されるべきであり、彼に対して何らかの訴訟が起こされる前に、ルターが安全に帰国することを許可されるべきであると宣言した。

今、国会議員から二つの相反する意見が提出されました。教皇の特使や代表者らは、改革者の安全な行動を無視するよう改めて要求した。彼らは、「ライン川は1世紀前にジョン・ハスの遺灰を受け取ったのと同じように、彼の遺灰を受け取るべきだ」と主張した。ドイツの諸侯たちは、自分たちが教皇主義者であると確信し、ルターの敵であると宣言したにもかかわらず、このような公の信仰への違反は国家の名誉を汚すものとして抗議した。彼らはフスの死後に起こった災難を指摘し、ドイツに、そしてその若い皇帝の頭にその恐るべき悪を繰り返す勇気はないと宣言した。

チャールズ自身は、このつまらない提案に対して、たとえこの信仰が心から追放されたとしても、王子たちの中に避難所を見つけるべきだと述べた。ルターのもっと頑固な教皇主義者の敵対者たちは後に、ジギスムントがフスに対して行ったように改革者を処遇し、彼を教会の管理に委ねるよう主張した。しかし、フスが公の集会で国王に約束の言葉を思い出させるために自分の鎖を指差した場面を思い出した。カール5世は「私はジギスムントのように恥ずかしくて顔を赤らめたくない」と宣言した。

それでも、チャールズはルターが提示した真実を意図的に拒否しました。「私は先人たちの足跡を継ぐ決意を固めている」と国王は記した。彼は、真実と正義の道を歩むためにも、いつもの道を離れることはない決意をしていました。彼の両親がそうしていたので、彼は教皇制度の残虐さと腐敗を支持することになったのです。こうして彼は自分の立場を取り、両親が受けた以上の光を受け入れることも、両親が果たさなかった義務を果たすことも拒否した。

今日、親の習慣や伝統を守り続けることを選択する人がたくさんいます。主が彼らに追加の光を送っても、彼らはそれを受け入れることを拒否します。なぜなら、それは両親に与えられたものではないので、彼らはそれを受け取るべきではないからです。私たちは両親がいた場所には置かれていないため、私たちの義務と責任は彼らの義務と責任と同じではありません。自分自身で真理の言葉を探すのではなく、両親の模範に頼って自分の義務を決めるのでは、神に認められることはありません。私たちの責任は先祖の責任よりも大きいです。私たちは彼らが受けた光、そして私たちに受け継がれた光に対して責任があります。私たちには、神の言葉から今私たちを照らす追加の光にも責任があります。

イエスは不信者のユダヤ人たちに、「もしわたしが来て彼らに話しかけていなければ、彼らは罪を犯さなかつたらうが、今では彼らには罪の言い訳ができない」と言われました。（ヨハネ 15:22）。同じ神の力がルターを通してドイツの皇帝と王子たちに語りかけられました。そして、神の言葉から光が輝くと、神の御霊が集会の多くの人々に最後に懇願しました。何世紀も前、ピラトがプライドと人気のために世界の救い主に対して心を閉ざしたように。薄っぺらなフェリクスが真実の使者にこう命令したこと。誇り高きアグリッパはこう告白した、「あなたは私をクリスチャンにするよう説得するところでした！」（使徒 24:25; 26:28）しかし、彼は天から送られたメッセージから逸脱したため、カール 5 世は世の誇りと政治の提案に屈し、真理の光を拒否することに決めました。

ルターに対する計画についての噂が広く広まり、市中に大きな興奮が生じた。改革者には多くの友人ができたが、彼らはローマの腐敗を暴こうとする者すべてに対するローマの冷酷な残虐性を知っており、自分は犠牲にならないと決心した。何百人もの貴族が彼の保護に尽力しました。この国王のメッセージがローマの権力に対する不当な服従を示しているとして公然と非難する者も少なくなかった。家のドアや公共の場所に、ルターを非難するものもあれば支持するものもあるポスターが貼られた。

それらの一つには、賢者の意味深い言葉が単純に書かれていました。「おお、国よ、あなたは災いです、その王は子供です！」（伝道 10:16）。ドイツ全土でルターを支持する国民の熱狂が皇帝と国会の双方に、ルターに対するいかなる不正も帝国の平和、さらには国家の安定を危険にさらすことになると確信させた。

王位。

ザクセンのフリードリヒは、改革者に対する本当の感情を慎重に隠しながら、慎重に控えめな姿勢を保ちながら、不屈の警戒で彼のあらゆる動きとすべての敵の動きを監視した。しかし、ルターへの同情を隠そうともしない人もたくさんいました。彼は、王子、伯爵、男爵、その他信徒と教会関係者の両方の著名な人々によって訪問されました。「医師の小さな部屋には、名乗り出た訪問者全員を収容することはできなかった。人々は彼を人間以上の存在であるかのように見ていた。彼の教義を信じていない人でさえ、その崇高な誠実さを賞賛せずにはいられなかった」良心を犯すのではなく、死に直面させたのだ。

ローマと妥協するためにルターの同意を得るために熱心な努力が払われた。貴族や君主たちは、もし彼が教会や評議会の意見に対して自分の意見を主張し続ければ、すぐに帝国から追放され、もはや防御手段を持たなくなるだろうと彼に告げた。この訴えに対し、ルターはこう答えた、「罪を犯さずにキリストの福音を宣べ伝えることは不可能である...それでは、なぜ危険への恐れが私を主から、また唯一の真理である神の御言葉から引き離す必要があるのでしょうか?いいえ!

私はむしろ自分の体、血、命を放棄したいと思っています。」

再び彼は皇帝の裁きに従うよう促された。そうすれば彼はもはや恐れる必要はない。これに応じてルターはこう語った、「皇帝、諸侯、さらには最も謙虚なクリスチャンでさえも私の著作を調べ、判断するという事に心から同意します。ただし、ただ一つの条件があります。それは、彼らが神の言葉を指針とするということです。」彼に従う以外に何もする必要はありません。

私の良心はこの御言葉に依存しており、その権威に縛られています。」

別の訴えに対して、彼はこう答えた、「私は安全な行動を放棄することに同意し、私の存在と生命を皇帝の自由に委ねます。しかし、神の言葉は決して無視しません!」彼は総評議会の決定に従う用意があると宣言したが、その条件としては評議会が聖書に従って決定することを条件とした。「神の言葉と信仰に関して言えば、たとえ100万の評議会に支持されていたとしても、すべてのキリスト教徒は教皇と同じくらい優れた裁判官である。」友人も敵対者も同様に、和解に向けたいかなる努力も無駄であると最終的に確信した。

もし改革者が一点で屈服していたら、サタンとその軍勢が勝利を収めていただろう。しかし、彼の揺るぎない不動心は、教会を解放し、新しくより良い時代を導く手段となりました。宗教的な事柄について果敢に自分の頭で考え、行動したこの一人の男の影響は、彼自身の時代だけでなく、将来のすべての世代に渡って教会と世界に影響を与えることになりました。イエスの堅固さと忠実さは、同じような経験をしたすべての人々を世の終わりまで強めることになりました。神の力と威厳は人間の助言やサタンの強大な力を超えていました。

皇帝の命令により、ルターは故郷に戻るよう命じられました。彼は、この命令に続いて別の命令が自分を非難することになるだろうと知っていた。脅威の雲が彼らの道の上を覆い尽くしました。しかし、ワームズを離れると、彼の心は喜びと賞賛で満たされました。「悪魔自身が教皇の城塞を守っていたが、キリストがその城塞を大きく突破したため、悪魔はイエスの方が自分よりも強力であると告白せざるを得なくなった」と彼は言った。

ルターは去った後も、自分の堅実さが反逆によって引き継がれないことを望みながら、皇帝に次のように書き送った。悪い知らせは、生でも死でも、例外はありません。人はそれによって生きる神の言葉です。この世のすべての事柄において、私の忠実さは揺るぎません、なぜなら、それらの事柄においては、負けることも勝つことも救いとは何の関係もありません。「しかし、永遠の命に属する事柄において人間が人間に服従することは神の御心に反します。精神的な事柄において服従は真の崇拜であり、創造主のみに捧げられるべきです。」

ヴォルムスからの帰り道、ルーサーの歓迎は行きの時よりもさらに心地よかった。高貴な聖職者たちは破門された修道士を歓迎し、民間統治者たちは皇帝が非難した人物を讃えた。ルターは説教を強く求められ、帝国による禁止にもかかわらず、再び説教壇に立った。

彼は、「私は神の言葉に手錠をかけたことは一度もありませんし、今後もそうするつもりはありません。」と述べました。彼がヴォルムスを出発してから間もなく、法王派が皇帝を説得して彼に対する禁止令を布告した。この法令でルターは非難された

「人間の姿をし、修道士の衣を着たサタン自身」として。安全行動の期限が切れ次第、作業を中断する措置を講じるよう命じられた。すべての人々は、公私を問わず、言葉や行為によって彼を歓迎したり、食べ物や飲み物を与えたり、援助や支援を提供したりすることを禁じられました。彼はどこで発見されたとしても拘留され、当局に引き渡されるべきである。彼の支持者たちも逮捕され、物品や財産を没収されるべきである。彼の著作は破棄され、最終的にはこの法令にあえて反する行動をとった者全員が彼の非難の対象となることになった。ザクセン選帝侯とルターの最も友好的な王子たちはルターの出発直後にヴォルムスから撤退しており、皇帝の布告は国会の承認を受けた。ローマ主義者たちは大喜びした。彼らは宗教改革の運命は決まったと考えていた。

神はこの危険な時に、ご自分のしもべに逃げ道を備えておられました。警戒心がルターの動きを追い、真の高貴な心が彼の救出を決意した。ローマが彼の死以外に満足しないことは明らかでした。ルターをライオンの顎から守ることができるのは、隠蔽することだけです。神はザクセンのフリードリヒに知恵を与え、改革者を維持することを目的とした計画を立てました。真の友人たちの協力により、選挙人の目的は達成され、ルターは友人や敵から非常に効果的に隠蔽されました。家に帰る途中、彼は逮捕され、従者たちとは引き離され、すぐに森を通して孤立した山の要塞であるヴァルトブルクに連行されました。彼の捕らえと失踪は謎に包まれていたため、フレデリック自身さえも長い間、ルターがどこに連れて行かれたのか知りませんでした。この情報不足は不合理ではありませんでした。有権者がルターの居場所を知らない限り、何も言うことはできなかった。フレデリックは改革者が無事だったことを知って満足した。

春、夏、秋が過ぎ、冬がやって来ました。ルターは依然として囚人のままでした。アレアドロと彼の支持者たちは、福音の光が消えそうになったとき、歓喜した。しかし、その代わりに、改革者は真理の貯蔵庫からランプを満たし、彼の光はより明るく輝くことになったのです。

ヴァルトブルクの安全な場所で、ルターは戦いの暑さと喧騒から解放されたことをしばらく喜びました。しかし、彼は長い間静けさや休息に満足感を得ることができませんでした。活動的な生活と激しい紛争に慣れていた彼は、活動しないままでいることに耐えられませんでした。その孤独な日々の中で、教会の状況は彼の前で悪化し、彼は絶望して叫びました、「ああ、神の怒りのこの終わりの時代に、主の前に壁となってイスラエルを救う者は誰もいない！」再び彼の考えは自分自身に向き、戦いから撤退したことで卑怯者として非難されるのではないかと恐れた。彼は自分の怠惰と放縦を非難した。しかし同時に、彼は一人の人間には不可能と思われる量を毎日生産していました。彼のペンは決して怠けることがありませんでした。彼の敵がルターを沈黙させたとき、彼らは彼がまだ活動しているという具体的な証拠に驚き、混乱しました。彼のペンからの大量のビラがドイツ全土に流通しました。彼はまた、新約聖書をドイツ語に翻訳することで同胞に並外れた奉仕を行いました。彼は岩だらけのパトモス島から、ほぼ一年かけて福音を告げ知らせ、当時の罪と過ちを叱責し続けました。

神がご自分のしもべを公の場から退けたのは、単にルターを敵の怒りから守るためでも、重要な仕事のために静かな時期を与えるためでもありませんでした。これらよりもさらに貴重な成果が得られるはずでした。彼の山奥の隠れ家の孤独と人影の中で、

ルターは地上のあらゆる支援の対象から外され、人間の賞賛からも外されました。こうして彼は、成功を収めたときにありがちなプライドや自信を免れたのです。苦しみと屈辱によって、彼は再び、突然高揚した目もくらむような高みを安全に歩く準備ができた。

人は、真理がもたらす自由を喜ぶとき、誤謬と迷信の鎖を断ち切るために神が用いられた人々を称賛する傾向にあります。サタンは人間の考えや愛情を神から遠ざけ、人間の行為者に押し付けようとしています。神は彼らに、単なる道具を尊重し、摂理のすべての出来事を導く手を無視するように導きます。このように賞賛される宗教指導者が、神への依存を見失い、自分自身を信頼するよう導かれることがどれほど多いことでしょうか。その結果、彼らは人々の心と良心をコントロールしようとし、人々は神の言葉よりも彼らに導きを求めがちです。改革を擁護する人々がこの精神を大切にしているために、改革の取り組みはしばしば遅れます。神は宗教改革の大義がこの危険に陥るのを防ぎたかったのです。彼は、そのような作品が人間的な印象ではなく、神の印象を受けることを望みました。人々の目は真理の解説者としてルターに向けられていましたが、すべての目が永遠の真理の著者に向けられるようにするためにルターは取り除かれました。

第9章

スイスの宗教改革者

教会改革のための手段を選択する際にも、教会の形成時と同じ神の計画が見られます。天のマスターは、称号を持ち、物質的に豊かで、人々の指導者として称賛と栄誉を受けることに慣れてきた地球の偉人たちの前を通り過ぎた。彼らは自分たちが優れていることを非常に誇りに思っており、自信を持っていたため、仲間に同情し、謙虚なナザレの男の協力者になることができませんでした。ガリラヤの文盲で勤勉な漁師たちに、「わたしについて来なさい。そうすれば、あなたたちを人間をとる漁師にしてあげましょう」（マタイ 4:19）という招きが与えられました。これらの弟子たちは謙虚で受容的でした。彼らが当時の誤った教えの影響を受けていなければ少ないほど、キリストは彼らをよりうまく指導し、ご自身への奉仕のために訓練することができました。

これは大宗教改革の時代にも当てはまりました。偉大な改革者たちは質素な生活を送っていた人々であり、当時の他の人々よりも立場の誇りや聖職者の不寛容と腐敗の影響から自由でした。偉大な結果を得るために謙虚な手段を用いるのは神の計画です。そのとき、栄光は人間に与えられるのではなく、人間を通して意志を示し、喜んで行うように働く神に与えられるでしょう。

ルターがザクセン州の鉱山労働者の小屋で誕生してから数週間後、ウルリヒ・ツヴィングリはアルプスの山中の羊飼いの小屋で生まれました。ツヴィングリの子供時代を取り巻く雰囲気と彼の初期のレッスンは、将来の使命に備えるのに非常に適していました。自然の雄大さ、美しさ、そして敬虔な崇高さの場面に連れて行かれた彼の心は、神の偉大さ、力、威厳の感覚に非常に早くから感銘を受けました。彼の故郷の山で達成された勇敢な行為の物語は、彼の若い頃の願望を目覚めさせました。そして敬虔な祖母のそばで、彼は彼女が教会の伝説や伝統の中から集めた数少ない貴重な聖書の物語に耳を傾けました。彼は族長や預言者の偉業、パレスチナの山々で羊の群れを守った羊飼いのこと、そこで天使がベツレヘムの赤ん坊とカルバリの人について告げたことについて、熱心な興味を持って聞いた。

ジョン・ルーサーと同様、ツヴィングリの父親は息子に教育を受けさせたいと考え、少年は幼い頃から故郷の溪谷から学校に通わせました。彼の心は急速に発達し、すぐに彼を指導する有能な教師を見つけることが重要な問題になりました。13歳のとき、当時スイスで最も著名な学校があったベルンに入学した。しかし、そこで危険が生じ、彼の人生の有望な未来が破壊される恐れがありました。修道士たちは彼を修道院に引き付けるために断固たる努力をしました。ドミニコ会修道士とフランシスコ会修道士は人気を巡って対立していた。ライバルたちに対する優位性を確保するために、彼らは教会の装飾、典礼の豪華さ、そして有名な「奇跡を起こす」遺物や像の魅力を軽視しませんでした。ベルンのドミニコ会士たちは、この才能ある若い学生を獲得できれば、利益と名誉を確保できると考えた。彼の若さ、雄弁家および作家としての生来の能力、そして音楽と詩の天才は、彼の奉仕に人々を惹きつけ、それによって彼の修道会の収入を増やす上で、彼のあらゆる華やかさや誇示よりも効果的であった。彼らは、欺瞞と過剰なお世辞によって、ツヴィングリを自分たちの修道院に入るよう誘導しようと尽力した。ルターは学生時代、大学の独房に閉じこもっていました。

もし神が彼を解放しなかったら、彼は世界から失われていただろう。ツヴィングリがこれと同じ危険に遭遇することは許されないでしょう。

幸いなことに、彼の父親は修道士たちの計画について警告を受けていました。彼は息子に僧侶たちの怠惰で無益な生活をさせるつもりはなかった。彼は自分の将来の有用性が危険にさらされていると見て、遅滞なく帰国するよう指示した。

命令は従われた。しかし、若者は故郷の溪谷ではあまり満足できず、すぐに勉強を再開し、しばらくしてバーゼルに定住しました。ツヴィングリが初めて神の無償の恵みの福音を聞いたのはそこでした。古代言語の教師であるウィッテンバッハは、ギリシャ語とヘブライ語を勉強しながら聖書に導かれ、このようにして彼の指導の下で生徒たちの心に神の光の光が射し込まれました。彼は、学者や哲学者が教える理論よりもはるかに古い真実が存在し、無限に価値があると宣言しました。この古代の真実は、キリストの死が罪人の身代金の唯一の代償であるということでした。ツヴィングリにとって、これらの言葉は夜明けに先立つ最初の光のようなものでした。

ツヴィングリはすぐにバーゼルから召集され、奉仕活動に参加することになった。

彼の最初のフィールドワークは、故郷の谷からそれほど遠くないアルプスのコミュニティで行われました。司祭として叙階された後、彼は「神の真理の探求に全身全霊を捧げました。なぜなら、彼はキリストの群れが誰に託されているかをどれほど知っていなければならないかをよく知っていたからだ」と現代の宗教改革者は語った。

彼が聖書を調べれば調べるほど、聖書の真理とローマの異端との間の対照がより明確に現れてきました。彼は聖書を神の言葉、唯一の十分で絶対的な基準として受け入れました。彼は、彼女が自分の通訳に違いないことに気づきました。彼は、先入観のある理論や教義を支持するために聖書を説明しようとしたのではなく、聖書の直接的で明白な教えが何であるかを学ぶことが自分の義務であると主張しました。彼はその意味を完全かつ正確に理解するためにあらゆる助けを求め、聖霊の助けを求めました。聖霊は、誠実に祈り求めるすべての人にご自身を明らかにしてくださいと彼は宣言しました。

「聖書は人間からではなく神から出たものです」とツヴィングリは言いました。そして、照らしてくださる同じ神が、その言葉が神から来たものであることをあなたに理解させてくださいます。神の言葉は...失敗することはありません。彼女は光であり、自分自身を説明し、自分自身を明らかにし、あらゆる救いと恵みで魂を照らし、神によって慰め、へりくだらせるので、彼女は自分を失い、自分を否定し、神を抱きます。」ツヴィングリのこの言葉の真実性が証明されました。この時の経験について、彼は後に次のように書いています。最後に、これが私が言うことです、「あなたは欺くものをすべて捨て去り、純粋に神ご自身の単純な御言葉で説明される神の意味を学ばなければなりません。」それから私は神に光を求め始め、聖書は私にとってずっと理解しやすくなりました。」

ツヴィングリが説いた教義はルターから受け取ったものではありません。それはキリストの教義でした。「ルターがキリストを説教するなら、彼は私と同じことをするだろう」とスイスの宗教改革者は語った。彼は私よりもずっと多くの魂をキリストに導いてくれました。それでいいよ。しかし、私はキリスト以外の名前を持っていません。私はキリストの兵士であり、キリストだけが私の頭です。私がルターに、あるいはルターが私に宛てて一行も書いたことはありません。それはなぜでしょうか。……互いに意思疎通を持たなかった私たちがイエス・キリストの教義をこれほど均一に教えているのですから、神の御霊の証しがどれほど均一であるかがすべての人に明らかになるからです。」

1516年、ツヴィングリはアインジーデルンの修道院に説教者になるよう招待されました。そこで彼はローマの腐敗を間近で見ることができ、宗教改革者として故郷をはるかに超えた影響力を及ぼし始めました。

ネイティブアルプス。アインジーデルンの大きな見どころの一つに、奇跡を起こす力があると言われている聖母像がありました。修道院の門の上には、「ここで罪の完全な赦しが得られるかもしれない」という碑文がありました。巡礼者は季節を問わず聖母礼拝堂を訪れました。しかし、年に一度の聖別の盛大な祭りには、スイス全土から、さらにはフランスやドイツからも大勢の人々が集まりました。ツヴィングリはこのシナリオに非常に悩み、この機会を利用して迷信の奴隷たちに福音を通じて自由を宣言した。

「想像しないでください」と彼は言いました。「神が創造物の他のどの部分よりもこの神殿にいらっしゃるなどと。神があなたの住まいを整えたところならどこにでも、神はあなたの周りにいて、あなたの声を聞いてくださいます... 無駄な労働、退屈な巡礼、捧げ物、処女や聖人たちへの祈りに、あなたが神の好意を確保するのにどんな力があるのでしょうか？祈りの中で掛けられた言葉は何を意味するのでしょうか？磨かれた頭巾、坊主頭、長く流れるローブ、金で飾られたスリッパには、どんな効果があるのでしょうか？神は心をご覧になっていますが、私たちの心は神から遠く離れています。」 「十字架上でご自身を永遠に捧げられたキリストは、すべての信者の罪のための永遠の満足いく犠牲であり犠牲者です」と彼は言った。

多くの聴衆にとって、これらの教えは歓迎されませんでした。彼らにとって、疲れ果てた旅が無駄になったと知らされたのは、ひどい失望でした。彼らは、キリストを通して無償で与えられた許しを理解できませんでした。彼らはローマが彼らのために概説した天国への古い道に満足していました。彼らは、より良いものを探すとこの困惑から身を引いたのです。心の純粋さを求めるよりも、司祭や教皇に救いを委ねる方が簡単でした。

しかし、別のクラスはキリストによる救いの知らせを喜んで受け取りました。ローマが命じた儀式は魂に平安をもたらすことができず、彼らは信仰を通して、なだめとして救い主の血を受け入れました。彼らは自分たちが受け取った貴重な光を他の人たちに明らかにするために家に戻りました。このようにして真実は地域社会から地域社会へ、都市から都市へと伝わり、聖母修道院への巡礼者の数は大幅に減少した。オファーは減り、その結果、ツヴィングリの給料も減り、彼らによって解雇された。しかし、狂信と迷信の力が打ち砕かれたことがわかったので、これは彼にとって喜びだけでした。

教会当局はツヴィングリが行っていた仕事を見ていなかったわけではない。しかし、それまで彼らは干渉を避けていました。それでも彼を自分たちの大義に従わせたいと願って、彼らはお世辞によって彼を勝ち取ろうと努力し、その間に真実は人々の心の中に定着しつつあった。

アイジーデルンでのツヴィングリの努力により、彼はより大きな分野への準備が整い、彼は間もなくそこへ参入することになった。そこで3年間過ごした後、彼はチューリヒ大聖堂の説教師の職に召されました。当時、ここはスイス連邦で最も重要な都市であり、そこで及ぼされる影響力は広く感じられることになりました。しかし、彼が招待されてチューリッヒに来た聖職者たちは、いかなる革新も避けたいと考えており、彼に自分の義務を指導することを決意した。

「あなた方は、最小のものを無視することなく、集会からの献金を集めるために全力を尽くしてください。」と彼らは言いました。あなたは彼らに、説教壇と告解台の両方から忠実であり、すべての十分の一献金と捧げ物を納め、捧げ物によって教会への配慮を証しするよう勤めるでしょう。皆さんは病人や大衆、そして一般的にすべての教会の儀式からの寄付を増やすよう熱心に取り組んでください。」 「秘跡を執行し、説教し、個人的に群れの世話をするだけでなく、これらも司祭の義務です」と教官たちは付け加えた。

ただし、これらを実行するために、あなたの代わりに行動する代理人を雇うことができます

—特に説教において。秘跡は特別に要求された場合にのみ、著名な人々にのみ授与しなければなりません。あらゆる階級の人々に無差別に授与することは許可されていません。」

ツヴィングリはこれらの告発を黙って聞き、これに応じて、この重要な職に呼ばれた光栄に感謝の意を表した後、自分が採用しようと提案した方針について説明を始めた。「イエスの物語は、あまりにも長い間公の場から隠されてきました。私の目的は、聖マタイによる福音書全体について、聖書の情報源のみから語り、そのすべての深さから語り、本文と本文を比較し、熱心で絶え間ない祈りを捧げて教えることです。聖霊の思い。神の栄光のため、神の独り子の賛美のため、魂の救いのため、そして彼らに真の信仰を教えるために、私は自分の奉仕を聖別したいと願っています。」聖職者の中には彼の計画に反対し、**彼を思いとどまらせようとする者もいたが**、ツヴィングリは無表情を保った。彼は、新しい方法を導入するのではなく、教会がその当初、純粋だった時代に採用していた古い方法を導入しようとしていると宣言しました。

彼が教えた真理によってすでに興味が呼び起こされていました。すると人々は彼の説教を聞くために大勢集まった。彼の聴衆の中には、ずっと前に集会に出席するのをやめてしまった人もたくさんいた。彼は福音書を開き、キリストの生涯、教え、そして死に関する靈感あふれる物語を読み、聴衆に説明することからその宣教を始めました。ここでも、アインジーデルンの場合と同様に、彼は神の言葉を唯一の絶対的な権威として提示し、キリストの死を唯一の完全な犠牲として提示しました。「あなたを救いの真の源であるキリストに導きたいのはキリストです」と彼は言いました。政府指導者や教師から職人や農民に至るまで、あらゆる階級の人々が説教者の周りに集まりました。彼らは深い興味を持って彼の言葉に耳を傾けました。彼は無料の救いの提供を宣言しただけでなく、当時の欺瞞と腐敗を恐れることなく非難しました。多くの人が大聖堂から戻って神を賛美しました。「この人は真理の説教者だ」と彼らは言いました。彼は私たちのモーセとなって、私たちをこのエジプトの暗闇から導き出してくれるでしょう。」

しかし、彼の作品は最初は熱狂的に受け入れられたが、しばらくすると反対が高まった。僧侶たちは彼の仕事を妨害し、彼の教えを非難しようとしてきました。多くの人々が嘲笑と嘲笑をもって彼を攻撃した。横柄な態度や脅迫に訴える者もいた。しかし、ツヴィングリは皆を忍耐強く耐えさせ、「もし私たちがイエスに魂を勝ち取りたいのであれば、私たちの邪魔をする多くのことに目をつぶることを学ばなければなりません。」と言いました。

このとき、改革作業を進める新たな要因が加わった。あるルシアンは、バーゼルの改革派信仰の友人からルター著作の一部をチューリッヒに送られ、その友人はこれらの書籍の販売が光を広める強力な手段になるかもしれないと示唆した。「このルシアンが十分な慎重さと技術を持っているかどうかを確認してください。もしそうなら、ルター著作、特に主の祈りの解説を携えて、街から街へ、村から村へ、さらには家から家へとスイス中を運んでもらいましょ。信徒のために書かれたもの。知名度が上がれば上がるほど、より多くの買い手が見つかるでしょう。」こうして光は侵入を見つけた。

神が無知と迷信の束縛を打ち破る準備をしているそのとき、サタンはより大きな力で人間を暗闇に包み、彼らの足かせをさらにしっかりと固定しようとしているのです。人々に許しを与えるために人々がさまざまな場所で立ち上がったこと

キリストの血による義認を得て、ローマは新たなエネルギーでキリスト教世界全体に市場を開き、金銭の許しを与え始めました。

すべての罪には代償があり、教会の金庫が満杯に保たれていれば、人々は自由に犯罪を犯すことが保証されていました。このようにして、両方の運動が前進しました。一つはお金で罪の許しを与えるというものでした。そしてもう一つは、キリストによる赦しです。ローマは罪を容認し、それを収入源とした。宗教改革者たちは罪を非難し、キリストをなだめの者であり解放者であると指摘しました。

ドイツでは、免罪符の販売はドミニコ会修道士に委託され、悪名高いテツツェルによって行われていました。スイスでは、人身売買はイタリア人修道士サンサンの管理下、フランシスコ会の手で委ねられた。サンクションはすでに教会に良い奉仕を行っており、教皇の国庫を満たすためにドイツとスイスから巨額の資金を確保していた。今、彼はスイスを横断し、大勢の群衆を集め、貧しい農民からわずかな収入を奪い、富裕層に多額の寄付を要求した。しかし、宗教改革の影響はすでに人身売買を制限するよう感じられていたが、それを防ぐことはできなかった。スイス入国直後にサンクションが違法取引を携えてアインジーデルン近郊に到着したとき、ツヴィングリはまだアインジーデルンにいた。自分の使命を知らされた改革者は、すぐに彼に反対した。二人は会わなかったが、ツヴィングリは修道士の意図を暴露することに成功し、修道士は他の地区への移住を余儀なくされた。

チューリヒでは、ツヴィングリは恩赦業者に対して熱心に説教した。そしてサンクションがその場所に近づくと、評議会の使者が彼を出迎え、どこへ行くべきかという召喚状を持った。彼は最終的に策略によって入国を確保したが、一度の恩赦も得られずに拒否され、その後すぐにスイスを出国した。

1519年にスイスを襲ったペスト、または「大いなる死」の出現によって、改革への強い推進力が与えられた。こうして人類は破壊者と対峙することになり、多くの人々が自分たちがいかに虚しく無意味であるかを痛感させられた。彼らの価値は、彼らが最近獲得した許しだった。そして彼らは自分たちの信仰のためのより安全な基盤を切望していました。チューリヒのツヴィングリは病気になった。彼は重篤な状態に陥り、回復の望みは絶たれ、死亡したというニュースが広く広まった。試練のあの時間において、彼の希望と勇気は揺るぎませんでした。彼は信仰をもってカルバリの十字架を見つめ、罪に対する十分な代償を信頼しました。彼が死の門から戻ったとき、それはこれまで以上に熱心に福音を宣べ伝えることでした。そして彼の言葉には並外れた力があつた。人々は、墓の端から戻ってきた愛する羊飼いを喜んで迎えました。彼ら自身も病人の世話をすることから生まれ、

死に直面したとき、彼らはこれまでにないほど福音の価値を感じました。

ツヴィングリはその真実を明確に理解するようになり、その再生する力を自分自身でより十分に体験しました。人間の墮落と救済の計画が彼が熟考した主題でした。「アダムにおいて、私たちは皆、腐敗と非難によって完全に破滅し、死んでいるのです。」と彼は言いました。「しかし、キリストは私たちのために永遠の救いを買って取り替えてくださいました。」「彼の情熱は永遠の犠牲であり、永遠の効力を持ちます。神は、揺るぎない信仰を持って神を信頼するすべての人々のために、永遠に神の正義を満たしてくださいます。」しかし、キリストの恵みのゆえに、人間は罪を犯し続ける自由はない、と彼ははっきりと語った。「神への信仰があるところには必ず神が宿ります。そして神がおられるところには、人々を抑制し善行へと導く目覚めた熱意があります。」

ツヴィングリの説教への関心が非常に高かったため、大聖堂は彼の説教を聞きに来た群衆を収容できないほどに満員となった。彼らが耐えられるようになるにつれて、彼は少しずつ、話を聞いている人たちに真実を明らかにしていきました。彼は、最初は彼らを警戒させ、偏見を生むような点を紹介しないように注意しました。彼の最初の仕事は、キリストの教えに彼らの心を勝ち取り、キリストの愛によって彼らを和らげ、彼らの前でキリストの模範を保つことでした。そして彼らが福音の原則を受け入れたとき、彼らの迷信的な信念と習慣は必然的に放棄されるでしょう。

チューリッヒでは改革が一步步進んだ。警戒して、彼の敵たちは積極的に反対運動を起こした。1年前、ヴィッテンベルクの修道士はヴォルムスで教皇と皇帝に対して「ノー」を宣言したが、今やチューリッヒでも教皇の威張りに対する同様の抵抗をあらゆるものが示しているように見えた。ツヴィングリに対して繰り返し攻撃が行われた。教皇の兵舎では、福音の弟子たちが時々火あぶりにされましたが、それだけでは十分ではありませんでした。異端の教師は黙るべきだ。そこでコンスタンシア司教はチューリッヒ評議会に3人の代表を派遣し、ツヴィングリが人々に教会法に違反するよう教え、それによって社会の平和と秩序を脅かしていると非難した。もし教会の權威が脇に置かれれば、普遍的な無秩序が生じるだろうと彼は主張した。ツヴィングリは、チューリッヒで4年間福音を教えてきたが、「連盟内のどの都市よりも静かで平和だった」と答えた。「それでは、キリスト教が一般的な安全を守る最良の手段ではないでしょうか？」と彼は言った。

代表者たちはカウンセラーたちに教会に留まるよう促したが、教会の外には救いはない、と彼らは宣言した。ツヴィングリはこう答えた。「この告発に心を動かされなくてください。教会の基礎は同じ岩、同じキリストであり、ペテロが忠実に告白したためにその名を与えられたのです。どの国でも、主イエスを心から信じる人は神に受け入れられます。ここがまさに教会であり、その外では誰も救われません。」会議の結果、司教座の代表者の一人が改革派の信仰を受け入れた。

評議会はツヴィングリに対する行動を起こすことを拒否し、ローマは新たな攻撃の準備をした。改革者は、敵の計画について警告されたとき、こう叫びました。切り立った崖がその足元に轟く波を恐れるのと同じように、私は彼らを恐れています。」聖職者の努力は、彼らが覆そうとした大義をさらに促進するだけでした。真実は広がり続けました。ドイツでは、ルターの失踪で意気消沈していた彼の信奉者たちが、スイスでの福音の進歩を見て励まされた。

チューリッヒで宗教改革が確立されるとすぐに、その成果は悪徳の抑圧と秩序と調和の促進においてより完全に現れました。「私たちの街には平和が住んでいます」とツヴィングリは書いています。「争いも偽善も貪欲も不和もない。主からでなく、私たちが平和と敬虔の実りで満たす私たちの教義からでなければ、そのような結合はどこから来るのでしょうか？」

宗教改革によって勝ち取られた勝利は、ローマ主義者たちに彼らの転覆に向けてさらに断固とした努力をする動機を与えた。ドイツでのルターの活動を弾圧する迫害によってほとんど成果がなかったことを見て、彼らは自分たちの武器で改革に対抗することを決意した。彼らはツヴィングリとの論争を継続し、問題を解決した後、激突の場所だけでなく、候補者の間で判決を下す裁判官も自分たちで選び、勝利を確実なものにするだろう。そしてもし彼らがツヴィングリを自分たちの権力下に置くことができれば、彼が彼らから逃げ出さないように気を配るだろう。リーダーが沈黙したことで、

動きはすぐに鎮圧される可能性があります。しかし、この目的は慎重に隠蔽されました。

議論はバーデンで行われる予定だった。しかしツヴィングリはその場にいなかった。チューリッヒ評議会は教皇たちの計画に疑問を抱き、福音を告白した人々のために教皇の兵舎で火が焚かれていることを警告し、牧師がこの危険にさらされるのを阻止した。チューリッヒでは、ローマが派遣できるすべての過激派に会う準備ができていた。しかし、真実のために殉教した人々の血が最近流されたバーデンに行くことは、確実な死に行くことを意味していた。

オエコランパディウスとハラールは改革派の代表に選ばれ、一方、有名なエック博士は多くの学識ある医師や高位聖職者の支持を受けてローマの擁護者となった。

ツヴィングリは会議に出席していなかったが、彼の影響力は感じられた。書記は全員教皇派によって選ばれ、他の書記はメモを取ることを禁じられ、死刑に処された。それでも、ツヴィングリはバーデンでの発言についての忠実な報告を毎日受け取った。論争に参加していた学生は、その日に行われた議論を毎晩記録しました。他の2人の学生は、これらの記録をオエコランパディウスの毎日の手紙と一緒にチューリッヒのツヴィングリに届けました。改革者はこれに応じ、アドバイスや提案を与えた。彼の手紙は夜に書かれ、生徒たちは朝になると手紙を持ってバーデンに戻りました。

市の門に配置された衛兵の監視を逃れるために、これらの使者たちは家禽の入ったかごを頭に寄せ、何の妨げもなく通過することを許された。

このようにして、ツヴィングリは狡猾な敵対者との戦いを続けた。ミコニアスは、「敵の真っ只中で議論するよりも、黙想し、議論を手助けし、バーデンにアドバイスを伝えることで、より多くの仕事をした」と語った。

ローマ主義者たちは勝利を期待して胸を張って、豪華な衣装を着て宝石で飾ってバーデンにやって来た。彼らは贅沢に暮らし、テーブルには最高級の珍味と厳選されたワインが供されました。彼らの教会の義務の重さは、楽しみとお祝いによって軽減されました。著しく対照的に現れたのは改革者たちで、人々からは物乞いの集団と同程度とみなされ、適度な食事により食卓に着く時間はほとんどなかった。オエコランパディウスの主人は、部屋で彼を観察する機会を得て、彼が常に勉強や祈りに熱中しているのを発見し、大いに賞賛し、「異端者は少なくとも非常に信心深い」と報告した。

会議では、「エックは華麗に装飾された説教壇に傲慢にも立っていたが、謙虚で控えめな服装のオエコランパディウスは粗雑に作られた壇上で敵対者の向かい側に座っていた。」エックの力強い声と限りない自信は彼を裏切ることはありませんでした。彼の熱意は名声だけでなく金への希望によっても刺激されました。というのは、信仰の擁護者には寛大な報酬が与えられるところだったからだ。最善の議論が失敗すると、彼は侮辱、さらには呪いに訴えました。

オエコランパディウスは謙虚で自分に自信がなかったので戦闘を避け、「私は神の言葉以外に正義のルールを認めない」という厳粛な宣言をして戦闘に入った。施術は穏やかで丁寧でしたが、彼は有能で毅然とした態度を示しました。ローマの代表者たちが習慣に従って教会の習慣の権威に訴えたのに対し、改革者は聖書を堅持した。「私たちのスイスでは、憲法に従わない限り、習慣には何の強制力もありません。さて、信仰の問題に関し言えば、聖書は私たちの憲法です。」

二人の論者間の対照は効果がないわけではなかった。宗教改革者の冷静かつ明晰な論拠は、非常に優しく控えめに提示され、エックの暴力的で傲慢な発言に嫌悪感を抱いていた人々の心に訴えかけた。

議論は18日間続いた。その終わりに、法王派は大きな自信を持って勝利を宣言した。代表者の大多数はローマ側に味方し、国会は改革派の敗北を宣言し、改革派の指導者ツヴィングリとともに教会から絶縁されたと宣言した。しかし、会議の成果によって、どちらの側に優位性があることが明らかになった。この議論はプロテスタントの大義に大きな推進力をもたらし、その後すぐにベルンとバーゼルの重要都市が宗教改革への参加を宣言しました。

第10章

ドイツにおける改革の進展

ルターの謎の失踪はドイツ全土に衝撃を与えた。ルターに関する質問があちこちで聞かれました。改革者については最も矛盾した噂が広まり、多くの人々が彼が殺害されたと信じていました。彼の公言する友人だけでなく、宗教改革側の立場を公然と表明しなかった何千人もの人々にとっても、大きな嘆きの声が上がった。

多くの人々が彼の死に復讐することを厳粛に誓った。

ローマの指導者たちは、自分たちに対する感情がどれほど引き起こされているかを恐怖の目で見ました。最初、彼らはルターの死とされることに歓喜していましたが、すぐに人々の怒りから身を隠そうとしました。彼の敵は、彼が彼らの中にいた間、ルターの大膽な行動に、彼の失踪の時ほど動揺しなかった。怒りに任せてこの大膽な改革者を潰そうとした人々は、彼が無力な捕虜になってしまったので恐怖でいっぱいでした。彼らの一人は、「私たちが逃げる唯一の方法は、たいまつに火をつけて、ルターを探して国中を歩き回り、ルターを望む国に送り届けることだ。」と言いました。天皇の勅令は無力に思えた。教皇特使たちは、この布告がルターの運命ほど注目を集めていないのを見て憤慨した。

彼が囚人であったにもかかわらず無事だったという知らせは人々の恐怖を静めたが、同時に依然として彼を支持する熱意を呼び起こした。彼の著作はこれまで以上に熱心に読まれました。このような恐ろしい戦いで神の言葉を守った勇敢な男の運動に参加する人が増えました。宗教改革は絶えず勢いを増していました。ルターが蒔いた種はあちこちで芽を出しました。彼の不在は、彼の存在では達成できなかったであろう任務を遂行した。偉大なリーダーがいなくなったことで、新たな責任を感じた従業員もいた。彼らは新たな信仰と熱意を持って、このような崇高な方法で始まった仕事が妨げられないように、全力を尽くして前進しました。

しかしサタンは怠けていたわけではありません。彼は今、他のすべての改革運動で試みてきたこと、すなわち真の取り組みではなく偽物を見せて人々を欺き、破壊しようと試みた。キリスト教会の1世紀に偽キリストが存在したように、16世紀には偽預言者も現れました。

宗教界で起こっている興奮に深く影響を受けた一部の人々は、天から特別な啓示を受けることを想像し、ルターによって恐る恐る始められたにすぎないと彼らが宣言した宗教改革を最後までやり遂げるよう神からの使命を与えられていると主張した。実際、彼らは彼が行った仕事そのものを台無しにしていました。彼らは、宗教改革のまさに基礎であった偉大な原則、つまり神の言葉が信仰と実践の十分すぎる規則であるという原則を拒否しました。そして彼らは、その絶対的なガイドを、自分自身の感情や印象の変わりやすく不確実な基準に置き換えました。誤りと虚偽の偉大な検出器を脇に置くこの行為によって、サタンが思いのままに心をコントロールする道が開かれました。

これらの預言者の一人は、天使ガブリエルから指示を受けたと主張しました。彼に加わった学生は、自分は神からの賜物であると宣言して学業を辞めた

神の言葉を説明する知恵を持って。もともと狂信的な傾向があった人たちも彼らに加わりました。これらの愛好家たちの行動は少なからず興奮を引き起こしました。ルターの説教は世界中の人々の間で改革の必要性の感覚を呼び起こしましたが、今や一部の真に誠実な人々がこれらの新しい預言者の見せかけに惑わされています。

運動の指導者たちはヴィッテンベルクを訪れ、メランヒトンとその同盟者たちに要求を受け入れるよう説得しようとした。彼らは言った、「私たちは人々を教えるために神から遣わされたのです。私たちは主ご自身から特別な啓示を受けているので、何が起こるかを知っています。私たちは使徒であり預言者であり、博士に訴えます。」

ルター、そして彼の説教の真実。」

改革者たちは驚き、困惑しました。これは彼らにとってまだ経験したことのない要素であり、どのような方向に進むべきか分かりませんでした。メランヒトンは言った、「確かに、この人たちの中には異常な霊が宿っている。しかし、どんな霊だろうか？...一方では神の霊を悲しませないよう、他方では神の霊に誘惑されないように気をつけようではないか」サタン。"

新しい教えの成果はすぐに明らかになりました。人々は聖書を無視するか、まったく無視するように導かれました。学校は混乱に陥った。学生たちはあらゆる制限を拒否し、学業を放棄し、大学を去った。自分たちには宗教改革の働きを復活させ、管理する能力があると考えていた人々は、宗教改革を破滅の瀬戸際に追いやるただけでした。ローマ主義者たちは自信を取り戻し、「あと一歩頑張れば、すべては我々のものになるだろう」と大喜びした。

ルターはヴァルトブルクで何が起こったのかを聞き、深い後悔の念を込めてこう述べた。「私はいつもサタンがこの疫病を私たちに送ってくれることを望んでいた。」彼は偽預言者の本当の性格を理解し、真理の大義を脅かす危険性を認識しました。教皇と皇帝の反対は、彼が今経験しているほど大きな苦痛と当惑を引き起こしていなかった。宗教改革の友人を公言する人々から、その最悪の敵が現れた。彼に大きな喜びと慰めをもたらした同じ真理が、教会内に争いを引き起こし、混乱を引き起こすために利用されていました。

宗教改革の働きにおいて、ルターは神の御霊によって前進させられ、自分自身をはるかに超えたものになりました。彼はそのような役職に就くことを提案していなかった。それは無限の力の手による手段に過ぎませんでした。

しかし、彼は自分の仕事の結果に動揺することがよくありました。

宗教改革者はかつてこう言った、「もし私の教義が、謙虚で無名であろうと、一人の人間、一人の人間に危害を加えると知っていたら——そんなことはありえない、それが福音そのものだから——私は十回死を覚悟したほうがマシだ。撤回する。」

そして、宗教改革の真の中心であるヴィッテンベルクそのものが、急速に狂信と不法行為の支配下に置かれつつあった。このひどい状態はルターの教えの結果ではありませんでした。しかしドイツ全土で彼の敵は彼がすべての原因であると非難していた。彼は苦い魂の中で、「宗教改革のこの偉大な事業はこれで終わりになるのだろうか？」と時々尋ねた。もう一度、祈りの中で神と格闘すると、彼の心に平安が流れ込みました。「その仕事は私のものではなく、あなたのものです」と彼は言いました。「迷信や狂信によって墮落することはありません。」しかし、このような危機の中でこれ以上紛争から遠ざかることはルターにとって耐え難いものとなった。彼はヴィッテンベルクに戻ることを決意した。

彼はすぐに危険な旅を始めた。彼は自分が帝国の禁止令下にあることに気づきました。敵は彼の命を自由に奪った。彼の友人たちは彼を助けたり、避難所を与えたりすることを禁じられていました。帝国政府は信奉者に対して最も厳しい措置を講じていた。しかし改革者は、その働きが

福音が危機に瀕していたとき、彼は主の御名において真理のために勇敢に戦いに出ました。

ヴァルトブルクを離れる目的を宣言した後、ザクセン選帝侯に宛てた書簡の中で、ルターは次のように述べた：「私が選帝侯よりもはるかに強力な保護の下でヴィッテンベルクを修復していることは殿下に知られています。私はそんなことは考えていません」「殿下、私はあなたの助けを求めています。私はあなたの保護を望んでいるわけではなく、むしろあなたを守ることが私の目的です。もし殿下が私の弁護をしてくれる、あるいは引き受けてくれると知っていたら、私はヴィッテンベルクには行かないでしょう。世俗の剣は前進できません」これが原因です。神は人間の助けや協力がなしにすべてを行わなければなりません。最も信仰を持つ者が最善の防御を持っています。」

ヴィッテンベルクへ向かう途中に書いた2通目の手紙の中で、ルターはこう付け加えた：「私は殿下の不承認と全世界の怒りに耐える覚悟ができています。ヴィッテンベルクの住民は私の羊ではないでしょうか？神は彼らを私の羊に託されたではありませんか？」」

彼は細心の注意と謙虚さ、そして決断力と毅然とした態度で自分の任務に着手しました。「御言葉によって、私たちは暴力によって支配と支配を獲得したものに反駁し、元に戻さなければなりません。私は迷信深い者や不信者に対して武力を行使しません…誰も強制されなくてください。私は良心の自由のために働いてきました。自由それが信仰の本質なのです。」

ルターが戻ってきて説教をすることになっているという噂がすぐにヴィッテンベルク中に広まった。四方八方から人が集まり、教会は超満員となった。彼は偉大な知恵と優しさをもって説教壇に上がり、教え、勧め、そして叱責しました。ミサを廃止するために暴力的手段をとった一部の人々の行動について、彼は次のように語った。

「ミサは邪悪なものです。神はそれに反対しています。ミサは廃止されなければなりません。私は世界中でその代わりに福音の晩餐が確立されることを願っています。しかし、誰も力づくでミサから奪われてはなりません。私たちは去らなければなりません。結果は神と共に。行動しなければならぬのは私たちではなく、神の言葉です。「そして、なぜこのようにならなければならないのですか？」とあなたは尋ねるでしょう。なぜなら、人の心は陶芸家の手の中にある粘土のように私の手の中にあるわけではないからです。私たちには発言する権利がありますが、強制する権利はありません。説教しましょう。残り神のものであります。もし私が武力に訴えたら、私は何をされるでしょうか？顔の癖、端正な外見、けいれん的な均一性、そして偽善。しかし、そこには誠実な心も、信仰も、愛も存在しないでしょう。欠けているところはすべて欠けており、私はそのような勝利に薫も与えたくない。神は御言葉の単純な力によって、あなたや私、そして全世界があらゆる努力を合わせてできることよりもはるかに多くのことを成し遂げてくださいます。神は心を大切に、そうすることですべてが勝ち取られるのです。」

「私には説教し、討論し、執筆する準備ができています。しかし、誰にも恥をかかせるつもりはありません。信仰は自発的な行動だからです。私がすでにしたことを思い出してください。私は法王、免罪符、教皇主義者に対して立ち向かいましたが、暴力や暴動はありませんでした。私は神の言葉を提示しました。私は説教し、書きましたが、その後やめました。そして、私が横になって眠っている間に…私が説いた御言葉は、これまでどの王子も皇帝もこれほど大きな打撃を与えたことのない方法で教皇庁を打ちのめしました。私としては、ほとんど何もませんでした。御言葉の力がすべてを成し遂げました。もし私が武力に訴えていたら、おそらくドイツ全土が血の洪水に見舞われていただろう。しかし、その結果はどうなったでしょうか？魂と肉体の破滅と破壊。その結果、私はじっとして、言葉を地球の縦横に駆け巡らせました。」

来る日も来る日も、丸一週間、ルターは期待している群衆に説教を続けました。神の言葉は狂信的な興奮の呪縛を打ち破りました。福音の力は、後退した人々を真理の道に引き戻しました。

ルターは、そのコースが非常に大きな害をもたらした狂信者たちに会いたくはありませんでした。彼は、彼らが狂気の判断力と規律のない情熱を持ち、天から特別に啓発されていると主張しながら、ほんのわずかな矛盾や、最も親切な叱責やアドバイスでさえも容認しない人々であることを知っていました。彼らは自分たちに最高の権威を行使する資格があると信じて、何の疑問も持たずに各自の主張を認めることを要求した。

しかし、彼らがルターとの面会を要求したとき、ルターは彼らと会うことに同意し、彼らの権利とされるものを暴露することに非常に成功したため、詐欺師たちはすぐにヴィッテンベルクを去りました。

狂信は一時的に抑制された。しかし、数年後、より大きな暴力とよりひどい結果をもたらしました。この運動の指導者たちについて、ルターはこう述べています、「彼らにとって聖書は死文に過ぎず、皆が『御霊だ！御霊だ！』と叫び始めた。しかし、確かに私は彼らの霊が導くところには従いません。神の憐れみにより、そのような種類の聖人しかいない教会から私を守ってくださいますように。私は謙虚な人、弱い人、そして弱い人たちと一緒にいたいと願っています。自分の罪を知り、感じている病人たちは、神からの慰めと支えを得ようと心の底からため息をつき、神に叫び続けているのです。」

狂信者の中で最も活発なトーマズ・ミュンツァーはかなりの能力を持った人物で、正しく指導されていれば良いことをすることができただろう。しかし彼は真の宗教の基本原則を学んでいませんでした。彼は、自分自身が世界を改革するよう神によってあらかじめ定められていると想像し、他の多くの愛好家と同じように、改革は自分自身から始めなければならないということを忘れていた。彼は地位と影響力を獲得することを熱望し、ルターにさえ二番目になることを望まなかった。ミュンツァーは、改革派は聖書の権威を教皇の権威に置き換えて、単に異なる形式の教皇制を確立しているだけだと宣言した。彼は真の改革をもたらすよう神から命じられたと主張した。彼はかつてこう言いました。「この精神を持つ人は、生涯聖書を見たことは一度もありませんが、真の信仰を持っています。」

狂信的な達人たちは印象の統治に服従し、あらゆる思考や衝動を神の声として理解した。その結果、彼らは極端な行動をとりました。「手紙は人を殺すが、御霊は命を与える」と叫んで聖書を燃やす人もいた。ミュンツァーの教えは、人間の考えや意見を事実上神の言葉よりも優先することで人間の誇りを満足させる一方で、驚くべきものに対する人間の欲求に訴えました。彼の教義は何千人もの人々に受け入れられました。すぐに彼は公の礼拝におけるあらゆる秩序を批判し、王子たちに従うことは神とベリアル両方に仕えることだと宣言した。

すでに教皇権のくびきを拒否し始めていた人々の心は、民権の制約の下で焦り始めていた。ミュンツァーの革命的な教えは神の許可を主張し、彼らをあらゆる支配から解放し、偏見と情熱を自由に制御するように導きました。最も恐ろしい暴動と紛争の場面が続き、ドイツの野原は血に染まりました。

ルターが少し前にエアフルトで経験した魂の苦痛は、宗教改革による狂信の影響を観察したため、今や倍増の力で彼を圧迫した。教皇派の君主たちは、反乱はルターの教義の正当な成果であると宣言し、多くの人がこの宣言を信じようとしていた。この告発には何の根拠もありませんでしたが、そうせざるを得ませんでした。

改革者に多大な苦痛をもたらす。最も最低の狂信に分類される真実の大義がこのように不名誉にされるのは、彼には耐えられないほどに思えた。一方、反乱の指導者たちは、ルターが彼らの教義に反対し、神の靈感に対する彼らの主張を否定しただけでなく、彼らを公権力に対する反逆者とみなしていたため、ルターを憎んだ。報復として、彼らは彼を卑劣な銜学的者として非難した。彼は王子たちと民衆の両方の敵意を自分自身に引き寄せたようだった。

ローマ主義者たちは宗教改革の急速な衰退を目の当たりにすることを期待して歓喜した。そして彼らは、ルターが懸命に正そうとした間違いについてさえ、ルターを非難しました。この狂信的な政党は、自分たちが甚大な不当な扱いを受けていると虚偽の抗議をして、国民の大部分の同情を勝ち取ることに成功し、悪い側の側に立つ者にはいつも起こることだが、彼らは殉教者とみなされるようになった。このようにして、宗教改革に反対するために全力を尽くしていた人々は、残酷さと抑圧の犠牲者として同情され、賞賛されました。これはサタンの仕業であり、最初に天で示したのと同じ反逆の精神によって引き起こされました。

サタンは絶えず人間を欺き、罪を義と呼び、義を罪と呼ばせようとしています。彼の仕事はなんと成功したことでしょう！神の忠実な僕たちは真理を断固として擁護するため、どれほど頻繁に非難と非難にさらされることでしょう。サタンの手先に過ぎない人間が賞賛され、お世辞を受け、殉教者とさえみなされる一方、神への忠実さゆえに尊敬され支持されるべき人間は、疑惑と不信のもとに放置される。

偽りの聖性は依然として欺瞞の働きを続けています。それは多くの形でルターの時代と同じ精神を示しており、聖書から心をそらし、神の律法に従うのではなく、自分自身の感情や印象に従うように人々を導きます。これは、純粹さと真実に屈辱を与えるというサタンの最も成功した発明の一つです。

ルターは、四方八方からの攻撃から福音を親密に守りました。神の言葉はあらゆる紛争において強力な武器であることが証明されました。この御言葉によって、彼は教皇の篡奪された権威やスコラ学者の合理主義哲学と戦い、同時に宗教改革と同盟を結ぼうとする狂信に対しては岩のように毅然とした態度をとりました。

これらの対立する要素はそれぞれ、独自の方法で聖書を脇に置き、宗教的真理と知識の源として人間の知恵を称賛していました。合理主義は理性を偶像化し、それを宗教の基準とします。ローマ主義は、使徒たちから脈々と受け継がれ、いつの時代も不変である靈感を主権者である教皇に主張しており、あらゆる種類の贅沢と腐敗が使徒的任務の神聖さの下に隠れる十分な機会を与えている。ミュンツァーと彼の共同研究者たちが意図したインスピレーションは、奇想天外な想像力にはかならず、その影響力は人間や神の権威をすべて覆すものでした。

真のキリスト教は、神の言葉を靈感による真理の偉大な宝、そしてすべての靈感の証拠として受け入れます。

ヴァルトブルクに戻ったルターは新約聖書の翻訳を完成させ、福音は母国語でドイツ国民の手に渡されました。この翻訳は、真理を愛する人たちには大喜びで受け入れられましたが、人間の伝統や戒律を好む人たちには軽蔑的に拒否されました。

司祭たちは、一般の人々が神の言葉の戒律について話し合うことができるようになり、自分たちの無知がこうして暴露されたのではないかと考えて警戒しました。彼らの肉の理性の武器は、御霊の剣の前には無力でした。ローマはあらゆる権威を総動員して聖書の流通を阻止した。しかし、法令、非難、拷問も同様に無駄でした。彼女が聖書を非難し禁止すればするほど、聖書が本当に教えていることを知ることに對する人々の不安は増大した。文字を読む人は皆、神の言葉を自分で研究することに熱心でした。彼らはそれを持ち歩き、何度も読み返しましたが、聖書の大部分を暗記するまで満足しませんでした。

新約聖書が好意的に受け入れられたのを見て、ルターはすぐに旧約聖書の翻訳を開始し、完成するとすぐに部分的に出版しました。

ルターの著作は都市でも小さな町でも好評でした。「ルターとその友人たちが書いたものはすべて、他のものはどこにでも流通した。修道院での義務が違法であると認識させられた修道士たちは、怠惰な生活を活動の一つと交換したいと熱望し、宗教改革者の著作とその友人たちを売りながら州を渡った。ドイツ短期間のうちに、勇敢なコルポーターたちによって侵略されました。」

これらの著作は、金持ちも貧乏人も、知識のある人も無知な人も、深い興味を持って研究されました。夜には、村の学校の教師が暖炉のそばに集まった小グループにこの詩を朗読しました。努力するたびに、一部の魂は真実を確信し、その言葉を喜んで受け取り、今度は他の魂に良い知らせを伝えました。

「あなたの言葉の説明は光を与え、単純な人に理解を与えます。」というインスピレーションの言葉が証明されています。(詩 119:130)。聖書の研究は人々の思いと心に大きな変化をもたらしました。教皇の統治は臣民に鉄のくびきを課し、彼らを知りやたらに陥らせていた。迷信的な形式の遵守が注意深く維持されました。

しかし、彼の奉仕のすべてにおいて、心と知性はほとんど関与しませんでした。ルターの説教は、神の言葉の明確な真理を説明し、その後、神の言葉そのものが庶民の手に渡され、彼らの眠っている能力を目覚めさせ、霊的性質を浄化し高貴にするだけでなく、人々に新たな力と活力を与えました。知性。

あらゆる階級の人々が聖書を手にし、宗教改革の教義を擁護する姿が見られました。聖書の研究を司祭や修道士に任せていた教皇派は、今度は彼らに前に出て新しい教えに異議を唱えるよう求めた。しかし、聖書も神の力も無知だった司祭と修道士たちは、以前に無教育で異端者として非難していた人々に完全に敗北しました。あるカトリック作家はかつてこう述べた。「残念ながら、ルターは信者たちに、聖書の神託のみに信仰を置くよう説得した。」群衆は教育レベルの低い人々が主張する真理を聞くために集まり、さらには博学で雄弁な神学者と議論しましたが、彼らの議論が神の言葉の単純な教えによって反駁されたとき、これらの偉人たちの恥ずべき無知が暴露されました。

労働者、兵士、女性、さらには子供たちさえも、司祭や学んだ医師よりも聖書の教えに精通していました。

福音の弟子たちとローマ主義の迷信の擁護者との間の対照は、一般の人々と同様に読み書きできる階級の間でも顕著でした。「言語の研究や文学の育成を軽視していた階級制度の古い擁護者たちに対抗したのは、心の広い若者たちで、彼らのほとんどは聖書の研究と調査に専念し、聖書の知識に精通していました」

古代の文学の宝物とともに。素早い学習能力、高尚な魂、勇敢な心の才能に恵まれたこれらの若者たちは、すぐに誰も彼らに匹敵できないほどの熟練を獲得しました。」 「そこで、宗教改革の若い擁護者たちは、公の集会でローマ主義者の医師たちと対峙し、いとも簡単に自信を持って彼らを攻撃したため、敵対者の鈍感さを当惑させ、全員の前で彼らを軽蔑に値するものにさらしたのである。」

ローマの聖職者たちは会衆が減っていくのを見て、治安判事に助けを求め、あらゆる手段を使ってかつての聴衆を取り戻そうと努めた。しかし人々は、新しい教えの中に魂の必要を満たすものを発見し、迷信的な儀式や人間の伝統という無益なストーリーで長い間自分たちを養ってきた人々から背を向けた。

真理教師たちに対する迫害が再燃したとき、彼らは「この町で迫害されたら、別の町に逃げなさい」というキリストの言葉に耳を傾けました。（マタイ 10:23）。したがって、光はどこにでも浸透しました。逃亡者たちは、いくつかの場所で自分たちに開かれたもてなしの扉を見つけ、そこに住みながら、時には教会で、あるいはこの特権を拒否された場合には民家や野外でキリストを説教した。彼らにとって、聴衆を集めることができる場所はすべて、神聖な神殿でした。真実は、これほどのエネルギーと安全性を持って宣言され、抗えない力で広まりました。

教会当局と行政当局の両方が異端を撲滅するよう求められたが無駄だった。彼らは刑務所、拷問、火、剣に訴えましたが無駄でした。何千人もの信者が自らの血で信仰を証し、それでもなお活動は進められた。迫害は真実を広めるだけでした。そしてサタンがそれと団結しようとした狂信は、サタンの働きと神の働きとの対比をより明確にする結果となった。

第11章

王子たちの抗議

宗教改革によって与えられた最も崇高な証言の一つは、1529年のスピラ国会でのドイツのキリスト教徒諸君らによる抗議でした。これらの神の人々の勇気、信仰、堅固さは、来るべき時代に向けた思想と良心の自由を獲得しました。彼の抗議により、改革派教会はプロテスタントと呼ばれるようになりました。その原則は「プロテスタントの真の本質」です。

宗教改革には暗くて脅威的な時代が到来しました。ルターを無法者と宣言し、その教義を教えることやその教義を信じることを禁止するヴォルムスの布告にもかかわらず、帝国では宗教的寛容が続いていた。神の摂理により、真理に反対する勢力は抑制されていました。カール5世は宗教改革を粉砕する決意を固めていましたが、致命的な打撃を与えようと手を上げて、それを脇に置かざるを得なくなることがよくありました。多くの場合、ローマに敵対するすべてのものを即座に破壊することは避けられないと思われました。しかし、決定的な瞬間に、トルコ軍が東部辺境に現れ、あるいはフランス国王、さらには皇帝の増大する偉大さに嫉妬した教皇自身が彼に対して戦争を起こした。このようにして、諸国民の争いと混乱のさなかに、宗教改革は強化され、拡大するまま放置されたのである。

結局のところ、ローマ主義者の君主たちは改革派と戦うために領地を団結させることを強制したのである。1526年のエスピラ議会は、総会が開かれるまで各州に宗教問題に関する広範な自由を与えていた。しかし、この譲歩につながった危険が去るとすぐに、皇帝は異端を破壊する目的で、1529年にエスピラで第2回国会の開催を呼びかけた。諸侯は、可能であれば平和的手段によって、宗教改革に反対するよう圧力をかけられるべきである。しかし、もしそれが失敗した場合、チャールズは剣を取る準備ができていました。

法王派は大喜びした。彼らはエスピラに大挙して現れ、改革者と彼らを支持する者全員に対する敵意を公然と表明した。メランヒトンは、「私たちは世の憎しみと憎しみと無精ひげである。しかしキリストはご自分の貧しい人々に目を留め、彼らを守ってくださるだろう。」と述べた。国会に出席した福音派の王子たちは、公邸内であっても福音を説くことを禁じられた。しかし、エスピラの人々は神の言葉に飢えており、禁止にもかかわらず、ザクセン選帝侯の礼拝堂で行われた礼拝に数千人が集まりました。

これが危機を引き起こした。良心の自由を認める決議が大きな混乱を引き起こしたため、天皇は決議の無効を要求するという勅書が国会に発表された。この恣意的な行為は怒りを引き起こし、福音派キリスト教徒に警戒を与えた。そのうちの一人は、「キリストは再びカイアファとピラトの手に落ちた」と言いました。ローマ主義者たちはさらに暴力的になった。偏屈な教皇主義者はこう宣言した、「トルコ人はルーテル派よりも優れている。彼らは断食日を守っているのに、ルーテル派はそれに違反しているからだ。神の聖書と教会の古い誤りのどちらかを選択しなければならないとしたら、前者を拒否すべきだ。」メランヒトンは、「毎日、全員が集まる中で、ファーバーは福音派に対して新たな石を投げている」と語った。

宗教的寛容は法的に確立されており、福音主義諸国はその権利の侵害に反対することを決定した。ルーサーは依然としてヴォルムスの勅令による禁制下にあり、エスピラにいることは許されなかった。しかし、彼の地位は彼の同僚と、その緊急事態において神の大義を守るために神が立てられた君主たちによって提供された。ザクセン公フリードリヒ、元保護者

ルターの子であり後継者であるジョン公は、宗教改革を喜んで受け入れ、平和の友でありながら、信仰の利益に関するあらゆる問題において多大なエネルギーと勇気を示しました。

司祭たちは、宗教改革を受け入れた諸国に対し、暗黙のうちにローマ主義の管轄権に従うよう要求した。一方、改革派は、これまで認められていた自由を要求した。彼らは、神の言葉を非常に喜んで受け入れた国々をローマが再び支配下に置くことを許すことができませんでした。

合意として、宗教改革が定着していない地域ではヴォルムスの布告を厳格に執行することが最終的に提案された。そして福音主義国家では「反乱の危険がある場合には、新たな改革を導入すべきではなく、物議を醸す論点についての説教をすべきではない。ミサの祝賀は妨げられるべきではなく、いかなるローマ・カトリック教徒もルター派の信奉を許されるべきではない。」この措置は、司祭と教皇高位聖職者らの大きな満足を得て国会で承認された。

もしこの布告が執行されたとしても、宗教改革がまだ知られていないところには広まることはできず、すでに宗教改革が存在していたところには強固な基盤の上に確立することもできなかった。表現の自由は禁止されるでしょう。変換は許可されません。そして、これらの制限と禁止事項に対して、宗教改革の友人たちは直ちに従うことが求められました。世界の希望は消え去ろうとしていました。教皇崇拜の復活は必然的に古代の虐待の復活を生み出すだろう。そして、狂信と意見の相違によってすでに激しく揺さぶられている作品を完全に破壊する機会が即座に与えられるだろう。

福音派が相談のために集まったとき、全員が落胆しているように見えた。次から次へと質問が渡されました。「何ができるのでしょうか？」世界の大きな利益が危険にさらされています。「宗教改革の指導者たちは、この布告を提出し受け入れるべきでしょうか？改革者たちは、この途方もない危機の中で、間違った方法で自分たちと議論するなど、いとも簡単にできたでしょう！彼らは、服従を正当化するために、どれほど多くの口実ともっともらしい理由を提示できたでしょうか！ルーテル派の君主たちよ」「国民は自分たちの宗教の自由を保障されていた。同様の恩恵は、この措置が制定される前に宗教改革の概念を受け入れていたすべての臣民にも及んだ。これは彼らにとって喜ばしいことではないでしょうか？服従することでどれほど多くの危険が避けられることでしょうか！何の目的で？未知の危険と紛争 反政府勢力はそれらを開始するだろうか？

将来に起こるチャンスを誰が知るのでしょうか？平和を受け入れましょう。ローマが差し伸べたオリブの枝にしがみつき、ドイツの傷を癒しましょう。このような議論があれば、改革者たちは、確実に自分たちの大義を完全に台無しにするような行動方針の採用を正当化できたかもしれない。

「幸いなことに、彼らはこの協定の基礎となる原則を考慮し、信仰によって行動しました。その原則とは何でしょうか？良心に強制し、自由な調査を禁止するのはローマの権利でした。しかし、彼ら自身とプロテスタント臣民は宗教の自由を享受すべきではないでしょうか？」はい、その協定に特別に定められた好意としてですが、権利としてではありません。その協定が表明したすべてのもののうち、権威という偉大な原則が優先されるべきです。良心は管轄外でした。ローマは無謬の裁判官であり、従うべきです。ローマへの同意提案された協定は、宗教の自由が改革されたザクセン州に限定されるべきであることを事実上認めたものだったろう。

残りのキリスト教世界にとって、自由な調査と改革派の信仰告白は犯罪であり、牢獄と火刑によって罰せられるべきである。王子たちは信教の自由を制限することに同意できるでしょうか？彼らは、宗教改革が最後の改宗者となり、最後の土地を征服したという宣言を受け入れるだろうか？そして、当時ローマが影響力を行使した場所であればどこでも、その影響力は永続すべきであると主張した。

あなたのドメインは？改革者たちは、この協定の履行のために教皇領で命を捧げるようになった何百、何千の人々の血について無罪であると宣言できるだろうか？そうすることは、この危機的な時期に、福音の大義とキリスト教世界の自由を裏切ることになるでしょう。」そうでなければ、彼らは自分たちの領土、高貴な称号、さらには命さえも犠牲にすることになるでしょう。

王子たちは「この法令を拒否しよう。良心の問題では多数派には何の力もない。」と決意した。代表者らは、ドイツは平和を享受するために寛容法令の恩恵を受けており、寛容法令を廃止すれば帝国全体が不安と分裂で満たされるだろうと宣言した。彼らは、「理事会が開かれるまで、国会には信教の自由を守る以上の権限はない」と述べた。良心の自由を守るのは国家の義務であり、これが宗教問題における国家の権限の限界である。公権力によって宗教的行事を規制したり強制しようとする世俗政府は、福音派キリスト教徒が気高く闘って求めた原則そのものを犠牲にしていることになる。

法王派は、彼らが「抑制のない頑固さ」と分類したものに終止符を打つことを決定した。彼らはまず、宗教改革の支持者の間に分裂を引き起こし、公然と宗教改革に賛成であると宣言していないすべての人々を脅迫しようとした。自由都市の代表者は最終的に国会に召喚され、提案の条件に同意するかどうかを宣言するよう求められた。

彼らは延期を要請したが無駄だった。テストを受けると、ほぼ半数が宗教改革を支持した。このように良心の自由と個人の判断の権利を犠牲にすることを拒否した人々は、自分たちの立場が批判、迫害、非難にさらされる運命にあることをよく知っていました。代表者の一人は、「我々は神の言葉を否定するか、さもなければ火刑に処せられるかのどちらかでなければならぬ」と語った。

国会での皇帝の代理人であるフェルディナンド王は、王子たちにそれを受け入れ支持させることができない限り、この法令は深刻な分裂を引き起こすだろうと考えた。この目的のために、彼は説得の技術を試みたが、この男たちに武力を行使しても彼らの決意をさらに強めるだけであることを十分に承知していた。彼は王子たちにこの法令を受け入れるよう求め、そのような行為は皇帝を大いに喜ばせるだろうと保証した。しかし、これらの忠実な人々は地上の支配者たちを上回る権威を認識し、「私たちは神の平和と名誉を維持することに貢献するすべてにおいて皇帝に従うつもりです」と冷静に答えました。

国会の面前で、国王は最終的に、この法令が勅令として公表されようとしており、残るのは選挙人とその友人たちが多数派に従うだけであると発表した。このように述べた後、彼は議会から退席し、改革者たちに審議や返答の機会を与えなかった。「彼らはフェルディナンドに戻ってくるよう懇願する使者を送ったが無駄だった。」この請願に対して彼は、「それは決着した問題だ。残るは服従だけだ」とだけ答えた。

帝国党は、キリスト教の君主たちは聖書を人間の教義や戒律よりも優れたものとして堅持すると確信しており、また、この原則が受け入れられる限り、最終的には教皇制が敗北することも知っていた。しかし、それ以来何千人もの人々がそうしてきたように、彼らは「目に見えるもの」だけに目を向け、皇帝と教皇の大義は強力で、改革者の大義は弱いと自画自賛した。もし改革者たちが人間の援助だけに頼っていたら、彼らは教皇派が考えていたのと同じくらい無力だったでしょう。人数が少なくローマと意見が合わなかったにもかかわらず、彼らには強さがあった。彼らは「国会の決定から真理の聖書へ、そしてドイツ皇帝から天地の王へ」と訴えた。

フェルディナンドが彼の良心の信念を考慮することを拒否したため、王子たちは彼の不在には注意を払わず、ただちにフェルディナンドを受け入れることに決めました。

国家評議會の前で抗議する。次のような厳粛な宣言が作成され、国会に提出されました。

「私たちはここに、私たちの唯一の創造者であり、維持者であり、救い主であり救い主である神の前に、また、すべての人間とすべての被造物の前で、私たち自身と私たちの国民のために、同意もしないし、また同意もしないことを抗議します。私たちは、神、神の言葉、良心の権利、魂の救いに反することであっても、提案された法令を遵守しますか...全能の神が人を神の知識に呼び掛けるとき、私たちは断言することはできません。彼はこの神聖な知識をあえて受け入れようとはしません... 神の言葉に一致するもの以外に真の教義はありません。主は他の信仰を教えることを禁じています。聖書は、他のより明確なテキストによって説明されたテキストを備えており、したがって、私たちは、神の恵みによって、旧約聖書と新約聖書の經典に含まれる神の聖なる言葉の純粋な説教を、追加することなく維持することを決意しています。彼らにとっては何でも。この言葉だけが真実です。それはすべての教義と人生に対する確かなルールであり、決して失敗したり、私たちを欺いたりすることはできません。この基盤の上に築く者は、神の御前に倒れる人間のあらゆる虚栄心にもかかわらず、地獄のあらゆる力に対抗するでしょう。このような理由から、私たちは自分に課せられたくびきを拒否します。同時に私たちは、陛下が何よりも神を愛するキリスト教皇太子として私たちに接して下さることを期待しています。私たちは、あなたたちと同様に、慈悲深い貴族たちに、私たちの正当かつ正当な義務である愛情と従順のすべてを与える用意があると宣言します。」

国会に深い印象を残した。ほとんどの国会議員はプロテスタントの勇気に驚き、警戒した。彼らにとって、未来は嵐で不確かなものに見えました。不和、紛争、流血は避けられないように思えた。しかし、改革者たちは自分たちの大義が正義であることを確信し、全能の御腕を信頼し、勇気と毅然としていました。

この抗議活動は、魂と神に関係する事柄について立法する文民総督の権利に反対し、預言者や使徒とともに「私たちは人間ではなく神に従わなければならない」と宣言した。この文書はまた、教会の恣意的な権力を否定し、人間の教えはすべて神の託宣に従うべきであるという絶対的な原則を確立しました。プロテスタントは人間の優位性のくびきを脱ぎ捨て、キリストを教会の最高の者として、またその御言葉を説教壇の最高の権威として称賛しました。良心の力は国家の力よりも優先され、聖書の権威は目に見える教会よりも優先されました。キリストの冠は教皇のティアラと皇帝の王冠の上に掲げられました。さらに、プロテスタントは、真理についての信念を自由に表現する権利を主張していました。

彼らは信じて従っただけでなく、神の言葉が提示するものを教え、判事や司祭が介入する権利を否定しました。エスピラの抗議活動は、宗教的不寛容に対する厳粛な証言であり、すべての人が良心の命じるままに神を崇拝する権利を確認するものでした。

宣言がなされたのです。それは何千人もの記憶の中に書かれ、天の本に記録され、人間の努力ではそれを消すことはできませんでした。福音主義ドイツ全土が信仰の表明として抗議活動を採用した。どこでも、人々はこの宣言の中で、新しくより良い時代の約束を熟考しました。王子の一人はエスピラのプロテスタント教徒にこう言った、「精神的に、自由に、恐れることなく告白する恵みをあなたに与えた全能の神が、永遠の日までこのキリスト教徒の堅固さをあなたに守ってくださいますように。」

もし宗教改革が成功を収めた後、世の好意を得るために妥協することに同意していたら、宗教改革は神に対しても自分自身に対しても不誠実であり、自らの破滅を確実にしたのであろう。これら高貴な改革者たちの経験には、その後のすべての時代への教訓が含まれています。神と神の言葉に反してサタンが行動する方法は変わっていません。彼は16世紀のときと同じように、聖書が人生の指針として採用されることに今でも反対している。現代では、聖書の教義や戒律が公然と放棄されており、プロテスタントの偉大な原則、つまり信仰と実践の規則としての聖書、そして聖書のみに戻る必要があります。サタンは今も信教の自由を破壊するためにあらゆる手を尽くしています。エスピラのプロテスタントが拒否した反キリスト教勢力は現在、失われた覇権を再確立しようと新たな活力を持っている。宗教改革の危機の中で示された神の御言葉への揺るぎない愛着こそが、今日の改革への唯一の希望なのです。

その後、プロテスタントにとって危険の兆候が現れました。信者を守るために神の手が差し伸べられた兆候もありました。メランヒトンが急いで友人のグリネウスをスピラの通りを通過してライン川に連れて行き、遅滞なく川を渡るように促したのはこの時だった。グリネウスは驚いて、そのような突然の逃亡の理由を知りたがった。メランヒトンはこう言った。「『重々しく厳粛な風貌をした初老の男性が、私には知らなかったのですが、私の前に現れてこう言いました。『グリネウスを逮捕するために、すぐにフェルディナンドから執行吏が派遣されるでしょう。』』」メランヒトンのライン川のほとりで、川の水が彼の親愛なる友人と彼の命を奪おうとする人々の間になるまで待ち、ついに対岸にいる彼を見たとき、彼はこう言いました。」

グリネウスは著名な教皇派の医師と縁があったが、彼の説教の一つに衝撃を受け、彼のところへ行き、真理に対してこれ以上戦争をしないように懇願した。法王は怒りを隠しましたが、すぐに王のところへ行き、プロテスタントの逮捕状を王から取得しました。メランヒトンが家に戻ったとき、彼が去った後に警官がグリネウスを探しに来て、家を上から下まで荒らしたことを知らされた。そのときメランヒトンは、主が警告するために聖なる天使を送って友人を救われたのを知りました。

改革は地上の権力者たちの前でさらに重要視されることになっていた。福音派諸侯たちはフェルディナンド王の意見を聞くことはできなかったが、皇帝や集會に集まった教会と国家の高官たちの前で自らの主張を表明する機会が与えられるべきである。帝国を騒がせた不和を鎮めるため、カール5世はエスピラの抗議の翌年、アウグスブルクで国会を召集し、自ら主宰する意向を発表した。プロテスタントの王子たちが召喚されて出廷した。

大きな危険が宗教改革を脅かしました。しかし、彼らの弁護士たちは依然として自分たちの大義を神に委ね、福音の側にしっかりと立つことを誓った。ザクセン選帝侯は顧問らから国会に出席しないよう勧告されていた。彼らによれば、皇帝は王子たちを罠に陥れるために出席を要求したという。「それは全てを賭けて、強大な敵がいる城壁の中に閉じこもることではないでしょうか？」しかし、他の者たちは気高く「君主たちだけが勇気を持って行動すれば、神の大義は救われる」と高らかに宣言した。「私たちの神は忠実であり、私たちを見捨てられません」とルターは言いました。選帝侯と側近はアウグスブルクへ向けて出発した。誰もが脅威にさらされている危険を認識しており、多くの人が悲しそうな顔をし、心を痛めながら旅をしていました。しかし、コーブルクまで彼らに同行したルターは、その時に作られた賛美歌を歌うことによって、彼らの揺らめく信仰を励ましました。

旅行：「強い城は私たちの神です。」多くの悲惨な前兆は追放され、多くの重荷を負った心は感動的な響きの音で和らげられました。

改革された諸侯は、聖書から導き出された証拠に裏付けられた自らの見解を組織的に表明し、国会に提出することを決意した。そしてその精緻化はルター、メランヒトンとその仲間たちに委ねられた。

この告白はプロテスタントによって信仰の説明として受け入れられ、彼らは重要な文書に自分たちの名前を記すために集まりました。これは厳粛かつ試練の時でした。改革者たちは、自分たちの大義が政治問題と混同されないようにと心配していた。彼らは、宗教改革は神の言葉から来るもの以外の影響を及ぼしてはならないと感じていました。

キリスト教の諸侯たちが告白に署名するために集まったとき、メランヒトンは口を挟んでこう言った、「これらのことを提案するのは神学者と牧師の権限であり、地上の強大な者の権威は他の事柄のために留保されなければならない。」「神よ、私を排除することは禁じられています」とザクセンのジョンは答えた。

私は自分の栄冠を気にすることなく、自分の義務を全うする決意をしています。主に告白したいと思います。私の選挙帽や選挙服は、私にとってイエス・キリストの十字架ほど貴重なものではありません。」こう言って彼は自分の名前に署名した。別の君主たちはペンを取りながら言った、「もし私の主イエス・キリストの名誉がそれを必要とするなら」、私は自分の所有物と人生を後に残す準備ができています。」「この告白に含まれている教義以外の教義を受け取るよりも、杖を手にして父たちの国を去りたいと思います。」それが神の人々の信仰と勇気でした。

定められた時刻が皇帝の前に現れるようになった。カール5世は有権者や諸侯に囲まれて玉座に座り、プロテスタントの改革派に議席を与えた。彼の信仰告白が朗読されました。その8月の集会では、福音の真理が明確に示され、教皇教会の誤りも同様に明らかにされました。その日は、「宗教改革の最も偉大な日であり、キリスト教と世界の歴史の中で最も輝かしい日の一つ」であると正しく宣言されました。

しかし、ヴィッテンベルクの修道士がヴォルムスで国家評議会の前に一人で立ってから数年が経過していた。今、彼らの代わりに、帝国で最も高貴で強力な王子たちがいました。ルターはアウグスブルクに現れることを禁じられていたが、言葉と祈りのために出席した。「私は、このような輝かしい集会で、このような著名な聴罪者たちによってキリストが公に称賛されるこの時まで、生きる喜びに震えています。」「わたしは王たちの前であなたのあかしについて話します」という聖書の言葉が成就しました。（詩 119:46）。

パウロの時代、彼が投獄されていた福音は、帝都の王子や貴族たちの前に持ち出されていた。またその際、皇帝が説教壇で説教することを禁じていた内容が宮殿内で宣言された。多くの人が使用人が聞くのは不適切だと考えていたことは、帝国の統治者や領主たちには驚きをもって聞かれました。王や偉人たちは講堂にいました。皇太子たちは説教者であり、説教は王室の神聖な真理でした。

ある作家は、「使徒時代以来、イエス・キリストのこれほど偉大な業績や壮大な告白はなかった」と述べています。

「ルーテル派の言ったことはすべて真実であり、我々はそれを否定することはできない」と教皇派の司教は宣言した。「あなたは、選挙人とその支持者たちが行った告白を、確かな理由で反論できますか？」と別の聖職者がエック博士に尋ねた。「使徒や預言者の書いたものとは違います」が答えでした。「しかし、教会や評議会の教父たちにとっては、そうです！」質問者は、「あなたのおっしゃるとおり、ルーテル派は聖書とともにあり、私たちは聖書の外側にいると理解しています。」と答えました。ドイツの王子の中には改革派の信仰を獲得した人もいました。皇帝自身が古代人はこう宣言した

プロテスタントは真理に他なりません。この告白は多くの言語に翻訳され、ヨーロッパ全土に広まり、信仰の表現として何百万人もの人々に受け継がれてきました。

神の忠実な僕たちは一人で働いていたわけではありません。「高位の君主と権力と霊的邪悪な者たち」が彼らに対して結集しましたが、主はご自分の民を忘れられませんでした。あなたのものが開かれていたとしたら
そうすれば彼らは、神の臨在と昔の預言者たちに与えられた援助の同じ強力な証拠を見ただろう。エリシャの僕が主人に、自分たちを取り囲む敵対的な軍隊が逃げ出す可能性をすべて排除していることを示したとき、預言者はこう祈りました。「主よ、お願いです。彼が見えるように彼の目を開いてください。」（列王記下 6:17）。そして見よ、山は火の戦車と馬でいっぱいであり、神の人を守るためにそこに駐屯している天の軍隊であった。このようにして天使たちは宗教改革の大義において労働者を守ったのです。

ルターの最も堅固な原則の 1 つは、宗教改革を支援するために世俗の権力を求めるべきではなく、宗教改革を守るために武器を求めるべきではないということでした。ルターは、帝国の君主たちによって福音が告白されたことを喜びました。しかし、彼らが防衛同盟で同盟することを提案したとき、彼は「福音の教義は神のみによって擁護されるであろう...その活動に干渉する人間が少なければ少ないほど、それに代わって神の介入がより驚くべきものになるだろう」と宣言した。彼の見解では、政治的予防策は不当な恐怖と罪深い不信に起因するものであった。」

宗教改革派の信仰を崩壊させようと強力な敵対者たちが団結し、何千もの剣がそれに対して抜刀されようとしているように見えたとき、ルターは次のように書いています。信仰と祈りによって主の御座の前で勇敢に戦うよう人々に勧めてください。そうすれば、私たちの敵が神の御霊によって打ち負かされ、平和を強いられるでしょう。私たちのニーズの中で最も緊急であり、私たちが最初にしなければならないことです。」

再び、後日、改革された君主たちが提案した同盟に言及して、彼はこの戦争で使用される唯一の武器は「精霊の剣」であるべきであると宣言した。彼はザクセン州の選挙人に次のように書いた。「我々は、良心の前に提案された同盟を承認することはできません。我々の主イエス・キリストは十分に力があり、我々を危険から救い出し、邪悪な君主たちの考えを払拭する方法と手段を十分に見つけてくださいます...キリストを私たちに、神は、私たちが御言葉に従う意思があるかどうか、そして御言葉が間違いのない真実であると信じているかどうかを試しておられるのです。むしろ、私たちは辛抱強く苦しみ、詩編作者が言うように、屠殺される羊として数えられようではありませんか。そして、復讐したり自分を守る代わりに、神の怒りが働く余地を残しておきましょう。キリストの十字架は、そうでなければなりません。建立されました。殿下が恐れることはありません。敵が自慢によって行うよりも、私たちは祈りによって多くのことを行います。ただ、あなたの手を兄弟たちの血で汚さないでください。皇帝が私たちを法廷に引き渡すよう要求した場合、私たちは現れる準備ができています。信仰を擁護することはできません。誰もが自分の責任で信じる必要があります。」

祈りの秘密の場所から、偉大な宗教改革で世界を揺るがした力が生まれました。そこで、主の僕たちは聖なる静けさをもって主の約束の岩の上に足を踏み入れました。アウグスブルクでの戦闘中、ルターは少なくとも 3 時間の祈りを捧げずに一日を過ごすことはありませんでした。この時間は勉強に最も適した時間から離れていました。部屋のプライバシーの中で、彼が魂を吐き出すのが聞こえた

まるで友人に語りかけるかのように、崇拜と恐れと希望に満ちた言葉で神の御前に語りかけた。「私は、あなたが私たちの父であり、私たちの神であることを知っています。そして、あなたがあなたの子供たちを迫害する者たちを追い払ってくださることを知っています。なぜなら、あなた自身も私たちとともに危険にさらされているからです。この仕事はすべてあなたのものであり、あなたによってのみ駆り立てられています」……私たちが彼に手を置くということです。それでは私たちを守ってください、お父様！」不安と恐怖の重みに押しつぶされていたメランヒトンに、彼は次のように書いた。「キリストにおける恵みと平和！この世ではなく、キリストにおいて言います。アーメン！私は、消耗させるような極端な心配を全力で憎みます。」もし大義が不当であれば、それを放棄してください。大義が正当であるなら、なぜ私たちを恐れることなく眠りにつけてくださった神の約束に反抗する必要があるのでしょうか。キリストは正義と真理の働きに失敗することはありません。彼は生きておられ、統治されます。；それでは、私たちはどんな恐怖を抱くことができるのでしょうか？

神はご自分の僕たちの叫びを聞いてくださいました。彼は王子や大臣たちに、この世の闇の支配者たちに対して真実を守るための恵みと勇気を与えました。

主は言われた、「見よ、わたしは選ばれた貴重な礎石をシオンに置いた。それを信じる者は恥をかかされることはない。」（ペテロ第一 2:6）。プロテスタントの改革者たちはキリストを基礎にしていたので、地獄の門も彼らに打ち勝つことはできませんでした。

第12章

フランス宗教改革

ドイツにおける宗教改革の勝利を示すエスピラ抗議活動とアウグスブルク信仰告白の後は、長年にわたる紛争と暗黒が続いた。プロテスタントは信者間の分裂や強力な敵の攻撃によって弱体化し、完全に破壊される運命にあるように見えました。何千人もの人々が自らの血で証言を封印しました。内戦が勃発し、プロテスタントの大義は主要な支持者の一人によって裏切られました。改革された最も高貴な王子たちは皇帝の手に落ち、捕虜として都市から都市へと引きずり回されました。しかし、勝利したかに見えた瞬間、皇帝は敗北に見舞われた。彼は獲物が自分の手から奪われたのを見て、ついに、彼の生涯の野望であった教義の廃止を容認することを余儀なくされた。彼は異端を打ち砕くために王国、財宝、そして自分自身の命を危険にさらしていました。今、彼は軍隊が戦いで疲弊し、財宝が枯渇し、多くの王国が反乱に脅かされている一方で、彼が抑圧しようと無駄に努力してきた信仰がいたるところで広まっているのを目にした。カール5世は全全国に対して戦争を仕掛けていた。神は「光あれ」と言われましたが、皇帝は闇をそのままにしておこうと努めました。彼の目的は失敗に終わり、長きにわたる闘争によって年老して疲れ果て、王位を放棄し、修道院に埋葬された。

スイスでも、ドイツと同様、宗教改革にとって暗い日々が始まりました。多くの州が改革派の信仰を受け入れたが、他の州はローマの信条に盲目的な執念で固執した。真実を知りたいと願う人々に対する彼の迫害は、最終的に内戦につながりました。ウルリヒ・ツヴィングリと宗教改革に彼に加わった多くの人々がカッペルの血なまぐさい野原に倒れた。オエコランパディウスは、こうした恐ろしい逆転劇に打ちのめされ、その後すぐに亡くなった。ローマは勝利を収め、多くの場所で失われたものをすべて取り戻す準備ができていたように見えました。しかし、永遠からの助言を持つ神は、ご自身の大義やご自分の民を見捨てておられません。彼の手は彼らに救いをもたらすだろう。他の国々では、イエスは労働者を目覚めさせて宗教改革を実行させました。

フランスでは、ルターの名前が改革者として知られる前に、すでに夜が明け始めていました。最初に光にしがみついた一人はルフェーブル老人で、彼は幅広い学識を持ち、パリ大学の教授であり、誠実で熱心な教皇主義者であった。古代文学の研究において、彼の注意は聖書に向けられ、その研究を生徒たちに紹介しました。ルフェーブルは聖人たちの熱烈な崇拜者であり、教会の伝説に描かれている聖人や殉教者の歴史の準備に取り組んでいました。これは多大な労力を伴う作業でしたが、聖書から非常に有益な助けが得られると考え、その目的で研究を始めたとき、彼はすでにかんりの進歩を遂げていました。そこで彼は確かに聖人への言及を見つけましたが、ローマ暦に表されているものではありませんでした。神聖な光の洪水が彼の心に飛び込んできた。

驚きと嫌悪感を覚えた彼は、提案された任務を放棄し、神の言葉に身を捧げました。すぐに彼は自分が発見した貴重な真理を教え始めました。ルターやツヴィングリが宗教改革の働きを始める前の1512年、ルフェーブルは次のように書いている。「信仰によって、恵みによって永遠の命を義とする義を私たちに与えてくださるのは神である。」救いの神秘を扱って、彼はこう叫んだ：「ああ！ この置き換えは何という言いようのない偉大さだろう——無実の者は有罪に定められ、罪を犯した者は釈放される。祝福された者は呪いに苦しみ、呪われた者は祝福を受ける。生命は死に、死者は生きる。；栄光は闇に沈む、そして彼は

彼は顔の混乱以外何も知らず、内なる栄光、つまり肉の目には見えない栄光を身に着けていた。」

そして、救いの栄光はもっぱら神に属すると教えながら、従順の義務は人間に属するとも宣言しました。彼はこう言いました。「もしあなたがキリストの教会の会員であれば、あなたは神の体の一部です。もしあなたが神の体の一部であれば、あなたは神性で満たされています...ああ!もし人間がそれができたらいいのに」この特権を理解するようになり、彼らはどれほど純粋で、貞淑で、聖なる生き方をするだろうか、また内なる栄光、つまり肉の目には見えない栄光と比較したとき、この世のすべての栄光をどれほど忌まわしいものとするだろうか。」

ルフェーブルの生徒の中には、彼の言葉に熱心に耳を傾け、教師の声が静まりかえってからずっと真実を宣言し続けた者もいた。その中の一人がギリエルメ・ファレルでした。敬虔な両親の息子であり、暗黙の信仰をもって教会の教えを受け入れるように教えられていた彼は、使徒パウロのように、自分自身について「私たちの宗教の最も厳しい宗派によれば、パリサイ人として生きてきた」と宣言することもできただろう。(使徒 26:5)。忠実なローマ主義者として、彼は教会にあえて反対するすべての者を破壊するという熱意に燃えていました。「誰かが法王に敵対する発言を聞いたとき、私は激怒したオオカミのように歯ざりした」と彼はのちに人生の当時について語った。彼はルヴェーブルとともに聖人たちの不屈の崇拝者であり、パリの教会を巡回し、祭壇で礼拝し、聖遺物箱を供物で飾りました。しかし、これらの行事は魂に平安をもたらさませんでした。彼が行ったすべての悔い改めの行為は、彼の魂に重くのしかかっていた罪の確信を払拭することができませんでした。あたかも天からの声であるかのように、ルヴェーブルは改革者の言葉を聞いた。「救いは無料だ。無実の者は有罪に定められ、犯罪者は無罪となる。天国の扉を開き、地獄の扉を閉じるのはキリストの十字架だけである。」」

ファレルは真実を大喜びで受け入れました。パウロの回心の模範に従って、彼は伝統の囚われから神の子の自由へと方向転換しました。「貪欲なオオカミのような殺意を抱く代わりに、私は心優しく無害な子羊のように穏やかに戻り、心を教皇から完全に遠ざけ、イエス・キリストに捧げた」と述べた。

ルフェーブルが生徒たちに光を広め続ける一方、ファレルは教皇時代と同じようにキリストの大義に熱心で、公の場で真実を発表するために出かけた。その後すぐに、教会の高官であるモー司教が彼に加わりました。技術と学識で優れた他の教師も福音の宣教に加わり、職人や農民の家から王宮に至るまで、あらゆる階級に信者を獲得しました。当時君臨していたフランソワ1世の妹は改革派の信仰を受け入れました。国王と王妃自身もしばらくの間彼女を好意的に見ていたようで、改革者たちは大きな希望を持ってフランスが福音を勝ち取る時を心待ちにしていた。

しかし、彼らの希望は実現しませんでした。キリストの弟子たちには艱難と迫害が待ち受けていました。しかし、これは慈悲深く彼らの目から隠蔽されました。平和の時代が訪れ、彼らは嵐に立ち向かう力を得ることができました。そして宗教改革は急速に進みました。モー司教は自分の教区で聖職者と人々の両方を指導するために熱心に働きました。

無知で不道德な司祭は排除され、可能な限り学識と敬虔な司祭が置き換えられた。司教は、民が自ら神の言葉にアクセスできるようにすることを強く望んでおり、それはすぐに実現しました。ルフェーブルは新約聖書の翻訳を引き受け、ルターのドイツ語聖書がヴィッテンベルクで印刷されるのと同時に、フランス語の新約聖書がモーで出版されました。司教はそれを広めるために努力も費用も惜しまなかった

そしてすぐにモーの農民たちは聖書を手に入れるようになりました。

渇きに死にゆく旅人が生きた水の泉を喜んで呼び寄せるように、これらの魂たちは天からのメッセージを受け取り、畑で働く人や工房の職人たちは、聖書の尊い真理について話すことで日々の労苦を励ましました。夜、彼らは居酒屋に行かずにお互いの家に集まり、神の言葉を読み、祈りと賛美で団結しました。すぐに大きな変化がこれらのコミュニティに現れました。彼らは最も貧しい階級に属し、勤勉で文盲の農民でしたが、神の恵みの変容と高揚の力が彼らの生活の中に見られました。謙虚で愛情深く神聖な彼らは、福音を誠実に受け入れる人々に福音が何をもたらすかを証しし続けました。

モーに灯された光は遠くまでその光を広げた。日ごとに改宗者の数は増加しました。階級階級の激怒はしばらくの間、修道士たちの偏狭な狂信を軽蔑する王によって制御された。しかし最終的には教皇の首長たちが勝利した。火事のリスクは高まった。モー司教は賭けに出るか撤回するかを選択を迫られ、より楽な道を受け入れた。しかし、リーダーが倒れたにもかかわらず、群れは堅固でした。炎の中で多くの人々が真実を証言した。これら謙虚なクリスチャンたちは、殉教における勇気と忠実さによって、平和な日々の中で自分たちの証言を聞いたこともなかった何千人もの人々に語りかけました。

苦しみと嘲笑のただ中であえてキリストを証ししたのは、謙虚な人や貧しい人だけではありませんでした。城や宮殿の高貴な広間には、富や社会的地位、さらには命よりも真実が重視される王族の魂がいた。貴族の鎧には、司教のローブや留め金具よりも崇高で決意の強い精神が隠されていました。ルイス・デ・ベルカンは生まれながらに高貴で、勉学に専念し、洗練されたマナーと揺るぎない道徳を備えた勇敢で礼儀正しい騎士でした。ある作家はこう述べています。「彼は教皇の法令を忠実に守り、ミサや説教に熱心に出席していました。そして、ルーテル主義に対して特別な嫌悪感を抱くことで、他のすべての美德を称賛しました。」しかし、他の多くの人々と同じように、摂理によって聖書に導かれていた彼は、そこに教皇の教えではなく、ルターの教義があることに驚きました。それ以来、彼は福音の大義に全身全霊を捧げるようになりました。

「フランス貴族の中で最も教養のある人物」、彼の天才と雄弁、不屈の勇気、英雄的な熱意、そして宮廷での影響力は、国王のお気に入りだったため、多くの人々が彼を祖国の改革者になる運命にあると考えた、とベザ氏は語った。「もしベルキンがフランツ1世に第二の選挙人を見つけていたら、第二のルターになっていただろう。」「彼はルターよりも悪い」と法王派は叫んだ。彼は、フランスのローマ主義者たちによって実際に最も恐れられていました。彼らは彼を異端者として投獄しましたが、王によって釈放されました。何年もの間、彼は継続的な闘争を続けました。フランスコはローマと宗教改革の間で揺れ、修道士たちの激しい熱意を容認したり抑制したりを繰り返した。ベルカンは教皇当局によって3度投獄されたが、国王は彼の天才性と高貴な人格を称賛し、彼を階級制度の悪に犠牲にすることを拒否したことで釈放された。

ベルカンはフランスで彼を脅かす危険について繰り返し警告を受け、危険を冒した人々の足跡を追うよう促された。自主亡命で安全を見つけた。内気で気まぐれなエラスムスは、学識の素晴らしさにも関わらず、真理の奉仕において生命と名誉を保つ道徳的偉大さを欠いており、ベルカンに次のように手紙を書いた。ドイツ。ベータや彼のような人々をご存知でしょう、彼は毒を吐き出す千の頭を持つ怪物です。

どこにでも。あなたの敵は軍団です。もしあなたの大義がイエス・キリストの大義よりも優れていたなら、彼らはあなたを惨めに滅ぼすまであなたを手放さないでしょう。王の加護を過信しないでください。いずれにせよ、私を神学部任命しないでください。」

しかし、危険が大きくなるにつれて、ベルカンの熱意はさらに強まるばかりでした。したがって、彼はエラスムスの政策や従順なアドバイスを採用するどころか、さらに勇敢な措置を講じることにしました。彼は真実を守り続けるだけでなく、間違いを攻撃するでしょう。ローマ主義者たちが彼に対して提起しようとしていた異端の告発は、ローマ主義者たち自身に対して反論されることになる。彼の反対者の中で最も積極的で辛辣だったのは、市と国の両方で最高の教会権威の一つである偉大なパリ大学の神学部の学識ある医師と修道士たちだった。ベルカンはこれら医師たちの著作から12の命題を取り出し、それを「聖書に反しており、したがって異端である」と公に宣言し、この論争において国王が裁判官を務めるよう国王に訴えた。

君主は、敵対するチャンピオンの力と鋭さを対照する機会を自ら否定することを望まず、またこれら傲慢な修道士たちの誇りを謙虚にする機会を喜んで、ローマ主義者たちに聖書を通じて彼らの大義を擁護するよう勧めた。この武器が彼らにほとんど役に立たないことは彼らもよく知っていた。刑務所、拷問、火刑は彼らが最もよく知っている武器でした。さて、試合の流れは変わり、彼らはベルカンを投げ込むと予想していた穴に落ちようとしていたことに気づきました。驚いて周囲を見回し、彼らは逃げ出す手段を探しました。

まさにそのとき、街路の角に、切断された聖母マリアの像が現れました。市内では大きな憤りがあった。現場には多くの人々が集まり、嘆きと憤りの表情を浮かべた。国王も激しく動揺した。ここに僧侶たちが利用できる状況があり、彼らはすぐにそうしました。「これはベルカンの教義の成果だ」と彼らは叫んだ。「このルーテル派の陰謀によって、宗教、法律、王座そのものなど、すべてが台無しにされようとしている。」

ベルカンは再び投獄された。国王はパリを去り、修道士たちは自由に好きなことをできるようになりました。改革者は裁判にかけられ、死刑を宣告された。そしてフランシスコがまだ彼を救うために介入するのではないかと恐れ、判決は宣告のまさにその日に執行された。正午、ベルカンは処刑場に連行された。この事件を見届けるために大勢の群衆が集まり、犠牲者がフランスで最も優秀で最も価値のある高貴な家族の中から選ばれたことに驚きと懸念を抱いた人が多かった。驚き、憤り、軽蔑、そして激しい憎しみが、その落ち着いた顔のない群衆の顔に刻まれていました。しかし、一つの顔の上に影は浮かんでいませんでした。殉教者の考えは、あの騒乱の場面とは程遠いものでした。彼は主の臨在だけを意識していました。

彼が乗っていた悲惨な荷馬車、追っ手たちの不機嫌そうな視線、彼が向かっている悲惨な死、ベルカンはそれらに耳を貸さなかった。生き、殺され、そして永遠に生き、死と地獄の鍵を握る彼が、彼の側にいた。ベルカンの表情は天国の光と平安で輝いており、「ベルベットのマント、サテンとダマスク織のダブルレット、金のストッキング」を身に着け、心地よい服装をしていた。彼は王の中の王と待ち望んでいた宇宙の前で自分の信仰を証ししようとしていたが、彼の喜びを曇らせるような嘆きの兆しは見られなかった。

行列が混雑した通りをゆっくりと進んでいくと、人々はその視線と姿がもたらす穏やかな平和と喜びに満ちた勝利に感嘆の声を上げました。「彼は神殿に座って神聖なことを瞑想している人のようだ」と彼らは言いました。

炎の真っ只中、ベルカンは人々に二言三言話すのに苦労した。しかし、結果を恐れた修道士たちは叫び始め、兵士たちは武器を叩き始め、その騒音で殉教者の声はかき消された。このようにして、1529年、文化的なパリの文学的かつ教会の最高権威は、「人々がどのように絞首台のそばで死にゆく男の神聖な言葉を窒息させるかという、ひどい例を1793年の国民に与えた」のである。

ベルカンは絞め殺され、彼の体は炎に包まれた。彼の死の知らせは、フランス中の宗教改革の友人たちに悲しみをもたらしました。しかし、彼の模範は無駄ではありませんでした。真理の証人たちは、「私たちも、来るべき命に目を向けて、明るく死に直面する準備ができています」と語った。

モーでの迫害中、改革派の教師たちは説教免許を取り消され、他の分野に去った。しばらくして、ルフェーブルはドイツに旅行しました。ファレルは、幼少期の環境に光を広めることを目的として、フランス東部の故郷に戻りました。モーで何が起きているかについてのニュースはすでに受け取られており、彼が恐れることのない熱意をもって教えた真実は聴衆を集めました。すぐに当局は彼を黙らせようと動き、彼は市から追放された。彼はもはや公的に働くことはできなかったが、平原や村を渡り歩き、民家や人里離れた牧草地上で教え、森や若い頃の隠れ場所だった岩だらけの洞窟の中に避難所を見つけた。神は彼をより大きな試練に備えさせておられました。「十字架、迫害、サタン待ち伏せはよく知っています」とファレルは言った、「そしてそれらは確かに私一人の力では耐えられないほどのものですが、神は私の父です。神は私を助けてくださったし、これからも私を助けてくださるでしょう」必要な力を持って。」

使徒時代と同様に、迫害は「福音のより大きな利益」に貢献しました（フィリピ 1:12）。パリとモーから追放され、「海外に散り散りになった人々は、どこへでも行って御言葉を宣べ伝えた」（使徒 8:4）。こうして光は、フランスの最も辺鄙な地方の多くに送られました。

神は依然として、ご自身の大義を推進するために労働者を準備しておられました。パリの学校の一つに、人生の驚くべき正しさ、知的な熱意、そして宗教的献身によって際立った強力で鋭い精神の兆候を示した、瞑想的で物静かな青年がいました。彼の天才性と応用力はすぐに彼を大学の誇りとし、ジョン・カルビンが教会の最も有能で名誉ある擁護者の一人になることはすでに予想されていました。しかし、神聖な光の光線が、カルヴァンが閉じ込められていたスコラ学と迷信の壁に差し込みました。彼は新しい教義について震えながら聞いたが、異端者たちは非難されて火刑に値することを疑うことはなかった。しかし、無意識のうちに、彼は異端と直面し、プロテスタントの教えと戦うローマ神学の力を試すことを余儀なくされました。

改革派に加わったカルヴァンのいとこはパリにいました。二人の親戚は頻りに会い、キリスト教世界を悩ませている問題について一緒に話し合った。「世界には宗教が二つしかない」とプロテスタントのオリベタンは言った。「最初のタイプの宗教は人間が作り出したもので、そのすべてにおいて人間は儀式と善行によって救われる。もう一つは聖書の中で啓示され、無償の恵みのみから救いを求めるよう人間に教える宗教である。」神。"「あなたの新しい教義は一切いりません」とカルビンは叫んだ。「私がこれまでずっと間違っただけを送ってきたと思いますか？」

しかし、彼の心の中では、意志によって追い出すことのできない思考が呼び覚まされました。彼は自室で一人、いとこの言葉について深く考えた。罪の確信が彼に執着した。カルヴィンは、公正で神聖な裁判官の面前で仲介者がいないことに気づきました。聖徒たちのとりなしも、善行も、教会の儀式も、罪を償うには無力でした。彼の前には永遠の絶望の暗闇しか見えなかった。教会の医師たちは彼を救おうと努力しましたが無駄でした。

彼の不幸。魂を神と和解させることができなかつたため、告白も悔い改めも無駄でした。

これらの不毛な闘争に従事している間、カルヴィンは偶然公共の広場を訪れ、そこで異端者の火刑を目撃しました。彼は殉教者の顔にある平安の表情に驚いた。その恐ろしい死の苦しみの中で、そして教会の最も恐ろしい非難の下で、彼は教会に最も厳格に従って生きながらも、若い学生が自分自身の絶望と暗闇と痛いほど対比されるほどの信仰と勇気を示しました。彼は異端者たちが彼らの聖書への信仰を支持していることを知っていました。彼は彼女を研究し、できれば彼女の喜びの秘密を解明しようと決心した。

彼は聖書の中でキリストを発見しました。「おお父よ、あなたの犠牲があなたの怒りを和らげてくれました。あなたの血が私の不純物を洗い流してくれました。あなたの十字架が私の呪いを負いました。あなたの死が私に償いをしてくれました。私たちは自分たちのためにたくさん役に立たないナンセンスを作り出しましたが、あなたはあなたの御言葉を灯火として私の前に置き、あなたが私の心に響いたので、私はイエスの功績を除いて、他のすべての功績を忌み嫌うことができました。」

カルヴァンは神権のための教育を受けていました。彼がわずか12歳のとき、彼は小さな教会の牧師の職に任命され、教会の規範に従って地元の司教によって頭を剃られました。彼は聖別を受けず、司祭の義務も果たさなかつたが、聖職者の一員となり、その職位を維持し、それに基づく手当を受け取った。

さて、自分には司祭にはなれないと感じた彼は、しばらく律法の研究に目を向けましたが、最終的にはこの目的を放棄し、福音に生涯を捧げることを決意しました。しかし、彼は公の説教者になることに躊躇していた。彼はもともと内気な性格で、この立場の重大な責任を直感して圧迫感を感じ、勉強に専念したいと考えていました。しかし、友人たちの熱烈な訴えにより、ついに彼の同意を得ることができた。彼は、「これほど謙虚な出自を持った人がこれほどの威厳に高められるのは素晴らしいことだ」と語った。

カルヴィンは静かに仕事を始めましたが、その言葉はまるで大地に降り注ぐさわやかな露のようでした。彼はパリを離れ、現在は地方都市にいて、福音を愛していたマーガレット王女の保護下にありました。

彼の弟子たちへの保護。カルヴィーノはまだ若く、穏やかで気取らない態度をとっていました。彼の仕事は人々の家から始まりました。彼は家族に囲まれながら聖書を読み、救いの真理を聴衆に理解できるように語りました。そのメッセージを聞いた人たちは良いたよりを他の人にも伝え、すぐに先生は都市から最も辺鄙な町や村へ行きました。彼は城と小屋の両方にアクセスでき、真実を大胆に証言すべき教会の基礎を築き始めました。

数か月後、彼は再びパリへ行きました。読み書きができ、知識のある人々の輪には異常な興奮があった。古代言語の研究は人々を聖書へと導き、その真理に心を動かされなかつた多くの人が今では聖書について熱心に議論し、ローマ主義の擁護者たちとさえ戦った。

カルヴァンは、宗教論争の分野では熟練した戦闘員であるにもかかわらず、それらの騒々しい神学者よりもはるかに高い使命を達成する必要がありました。

人々の心は混乱に陥り、真実を明らかにする時が来た。

大学のホールが神学的な議論の喧騒で満たされている間、カルヴァンは家から家を訪ねて人々に聖書を開き、キリストと十字架につけられたキリストについて語りました。

神の摂理によれば、パリは福音を受け入れるよう再び招待を受けるはずですが、ルフェブルとファレルの上訴は却下されたが、再びこのメッセージはこの大首都のすべての階級に届けられることになった。影響を受けた王様

政治的利益はまだ宗教改革に反対するローマを支持していませんでした。しかし、マーガレットはプロテスタントがフランスで勝利するという希望を持ち続けました。彼女は改革派の信仰をパリで宣べ伝えるべきだと決意した。国王の不在中、彼はプロテスタントの牧師に市内の教会で説教するよう命じた。これは教皇高官によって禁止されていたため、王女は宮殿の扉を開きました。ホールは1つは礼拝堂として用意され、毎日決まった時間に説教が行われると発表され、あらゆる階級や境遇の国民が招待された。宗教儀式に参加するために群衆が集まった。礼拝堂だけでなく、前室やホールも人でいっぱいでした。毎日何千人も集まりました。

貴族、政治家、弁護士、商人、職人。国王はこれらの集会を禁止する代わりに、パリの2つの教会の開設を命じた。この都市が神の御言葉によってこれほど感動したことはかつてありませんでした。天からの命の霊が人々に祝福を吹き込んでいるかのようにでした。飲酒、放蕩、口論、怠惰に取って代わったのは、節制、純粋さ、秩序、労働でした。

しかし、階層は活動していないわけではありません。王は依然として説教を止めるための介入を拒否し、法王派は住民に頼った。無知で迷信深い群衆の恐怖、偏見、狂信を呼び覚ますためにはあらゆる手段が講じられました。偽りの教師たちに盲目的に屈服したパリスは、古代エルサレムと同じように、自分の訪問の時期も、彼女の平和に属する事柄も知りませんでした。2年間、神の言葉は首都で宣べ伝えられました。しかし、福音を受け入れた人はたくさんいましたが、ほとんどの人はそれを拒否しました。

フランスコは単に自分の目的を果たすためだけに寛容を示し、教皇派は君主に対する優位性を取り戻すことができた。教会は再び閉鎖され、かがり火が設置されました。

カルヴァンはまだパリにいて、将来の仕事に備え、光を広め続けるために勉強、瞑想、祈りを通して準備をしていました。しかし、ついに彼に対して疑惑が生じた。当局は彼を火刑に処することを決定した。

避難所では安全だと思っていた彼は、警官が彼を逮捕しようとしているという知らせを聞いて友人たちが急いで彼の部屋にやって来たとき、その危険性をまったく知りませんでした。その瞬間、外扉をノックする大きな音が聞こえた。

無駄にする時間はありませんでした。何人かの友人が玄関で警察官を呼び止め、他の友人は窓の一つから改革者を助け、彼はすぐに市の郊外に逃げた。宗教改革の友人である労働者の小屋に避難所を見つけたカルヴィンは、主人のローブを着て変装し、鋤を肩に担いで旅に出ました。南へ向かうと、彼は再びマーガレットの領域に避難所を見つけました。

数か月間、改革者は強力な友人の保護の下、安全な場所に留まり、以前と同様に研究に専念した。しかし、彼の心はフランスに福音を伝えることを決意しており、長く活動をしないわけにはいかなかった。嵐が静まるとすぐに、カルヴァンは大学があり、新しい意見がすでに好評を得ていたポワティエに新しい仕事の分野を探しました。あらゆる階級の人々が喜んで福音を聞きました。公の説教はなかったが、カルヴァンは首席判事の家や自分の部屋で、時には公共の庭で、聞きたい人たちに永遠の命の言葉を説いた。しばらくして、リスナーの数が増加したため、市の外に集まった方が安全であると考えられました。深く狭い峡谷の隣にある洞窟が集合場所として選ばれ、そこには目立つ木々や岩があり、孤立感をさらに完全なものにしていました。小さなグループが街を離れ、さまざまな道を通してその場所を目指しました。この人里離れた場所で聖書が読まれ、説明されました。そこで初めて夕食が祝われました。

フランスのプロテスタントによる主の祈り。この小さな教会から多くの忠実な伝道者が派遣されて働きました。

カルヴィンは再びパリに戻った。それでも彼は、フランスが国家として宗教改革を受け入れてくれるという希望を捨てることができなかった。しかし、ほとんどすべての作業用ドアが閉まっていた。福音を教えることは、火に直接向かう道を歩むことでした。ついに彼はドイツへ出発することを決意した。嵐がプロテスタントを襲ったとき、彼はフランスを離れる寸前で、もし彼がこの国に留まっていれば、間違いなくフランス全体を破滅に巻き込んでいたであろう。

フランスの改革者たちは、自国がドイツやスイスに追いつくことを切望し、ローマの迷信に大打撃を与え、国民全体を目覚めさせることを決意した。こうして、大衆と闘うポスターがフランス全土に配布された。宗教改革の推進を促進する代わりに、この熱心だが時期外れの運動は、宗教改革の推進者だけでなく、フランス全土の改革派信仰の友人たちにも破滅をもたらした。彼はローマ主義者たちに、彼らが長年望んでいたもの、つまり王位の安定と国家の平和にとって危険な扇動者としての異端者の完全な破壊を求める口実を与えた。

何かの隠れた手によって――それが不注意な友人によるものか、狡猾な敵によるものかは決して知られていなかった――ポスターの1枚が王の私室のドアに貼られた。君主は恐怖でいっぱいだった。その役割において、何世紀にもわたって尊敬を受けてきた迷信は厳しく攻撃されました。そして、これらの直接的で恐ろしい発言を王室の前で持ち出すという前例のない大胆さは国王の怒りを引き起こした。驚きのあまり、王はしばらく震えて言葉を失いました。

そして彼の怒りは、「彼ら全員を逮捕し、ルター派を完全に絶滅させましょう。」という恐ろしい言葉で表現されました。サイコロが投げられました。国王は完全にローマ側につくことに決めた。

パリにいるルーテル信者全員を逮捕するための措置が直ちに講じられた。改革された信仰の信奉者で、信者を秘密の会合に呼ぶことに慣れていた貧しい職人が逮捕され、即死の危険にさらされながら、教皇の特使を国内のプロテスタント全員の家まで案内することを余儀なくされた。都市。彼はその卑劣な提案に恐怖を感じたが、炎への恐怖が勝り、兄弟たちを裏切ること同意した。主催者に先導され、司祭、香炉、僧侶、兵士の行列に囲まれ、王室刑事モリンは裏切り者とともにゆっくりと静かに街の通りを歩きました。そのデモは表向き、プロテスタントによる大衆への侮辱に対する償いの行為である「聖なる秘跡」を称えるものであった。しかし、そのパレードの下には致命的な目的が隠されていました。彼らがルーテル派の家の前^に到着したとき、裏切り者は合図をしたが、言葉は発せられなかった。行列は止まり、家は侵入され、家族は逮捕されて手錠をかけられ、恐ろしい行列は新たな犠牲者を探し続けました。「規模の大小に関わらず、どの家も救われず、パリ大学の学部さえも救われなかった…モリンは街全体を震撼させた…恐怖政治が始まった。」

犠牲者は残酷な拷問で殺害され、苦痛を長引かせるために火を弱めるよう特別命令が出された。しかし、これらの信者たちは勝者として亡くなりました。彼の忠実さは揺るがず、彼の平和は揺るぎませんでした。彼らの追っ手たちは、彼らの揺るぎない不動の姿勢から彼らを動かす力がなく、敗北を感じた。「絞首台はパリの近隣全域に配られ、異端の恐怖を広めるために処刑を広めることを目的として、かがり火は連日燃え続けた。しかし、利点は福音に残った。パリ全土が何を知ることができたのか、新しい意見が生み出したような人々だった。殉教者の火刑のような説教壇はなかった。処刑場に向かう彼らの顔を照らす穏やかな喜び、残忍な炎の中での彼らの英雄的行為、彼らの柔和さ

彼らは怪我を許し、多くの人たちの怒りを憐れみに、憎しみを愛に変え、抗えない雄弁で福音を訴えました。」

司祭たちは民衆の怒りを燃やし続けたいと考え、プロテスタントに対する最も恐ろしい告発の流布を促進した。彼らはカトリック教徒の虐殺、政府崩壊の原因、国王暗殺を共謀した罪で告発された。申し立てを裏付ける証拠は何の欠片も追加されなかった。しかし、これらの悪の預言は、まったく異なる状況下で、そして反対の性格の原因によって成就することになりました。カトリック教徒によって無実のプロテスタントに加えられた残虐行為は、その報復の重さを蓄積し、何世紀も経って、彼らが予言したのと同じ破滅が国王、その政府、そして臣民に差し迫っていることをもたらした。

しかし、これは異教徒と教皇自身によって生み出されたものです。プロテスタント主義の確立ではなく、その廃止が、3世紀後にフランスにこれらの恐ろしい災難をもたらしたのです。

疑惑、不信、恐怖は今や社会のあらゆる階級に浸透しました。一般的な警戒の中で、ルーテルの教えが、教育、影響力、人格の卓越性において最も優れた人々の心をいかに深く捉えているかがわかりました。信頼と名誉の地位が突然空席になった。職人、印刷業者、学生、大学教授、作家、さらには宮廷人さえも姿を消した。何百人もの人々がパリから逃れ、祖国から自発的に亡命し、多くの場合、改革派の信仰を受け入れたことを初めて知りました。法王派は、疑いも持たない異端者が自分たちの中に容認されていたと考えて、驚いて周囲を見回した。彼の怒りは、彼の手の届く範囲にいた大勢の卑劣な犠牲者たちに向けられた。刑務所は超満員となり、福音を告白した人々のために燃え盛る火の煙で空気が曇っているように見えました。

フランシスコ 1 世は、16 世紀の初めを特徴づけた知識の復興のための偉大な運動の指導者であると自慢していました。彼は、あらゆる国から文人たちを宮廷に集めることに喜んでいました。彼の知識への愛と修道士たちの無知と迷信に対する軽蔑は、少なくとも部分的には宗教改革に与えられた寛容のレベルによるものでした。しかし、異端を抑圧したいという熱意に触発されて、この知識の**守護者**は、フランス全土で報道機関を廃止することを宣言する布告を出しました。フランシスコ 1 世は、知的文化が宗教的不寛容と迫害に対する予防策ではないことを示す多くの記録された例のうちの 1 つを示しています。

厳粛な公開式典を通じて、フランスはプロテスタントの破壊に全面的に取り組むことになった。司祭たちは、大衆の非難とともに高天に対して行われた侮辱を血で償うこと、そして国王が国民のためにこの恐ろしい行為に対して公的に制裁を与えることを要求した。

1535年1月21日、恐ろしい儀式が予定されていた。迷信的な恐怖と国民全体の熱狂的な憎しみが呼び起こされました。パリは周辺地域から集まった群衆で満たされ、通りに詰めかけました。その日は大規模で堂々とした行列で始まりました。「道沿いの家々には悲しげなカーテンがかかっていました。一定の間隔で祭壇が建てられ、各扉の前には「聖なる秘跡」を祝うたいまつが灯され、夜明け前に王の宮殿に行列が形成されました。

十字架と教区の旗が掲げられた後、たいまつを持った市民たちが二人ずつ歩いてやって来た。4つの修道士団が独特の衣装を着て続いた。その後、有名な遺物の幅広いコレクションが続きました。それから、紫と緋色のローブを着て、宝石で飾られた高貴な聖職者たちが馬に乗って、まばゆいばかりの輝きを見せました。

ホストはパリ司教によって華麗な移動空の下、4人の高位の王子によって運ばれました。彼らの後に君主がやって来たが、王冠も王室のマントも脱いで、頭を下げ、頭を覆いはず、手に細い蝋燭を持っていた。このようにして、フランス国王が公の場で屈辱にさらされたのは、彼の魂を汚した悪徳のせいでも、彼の手を汚した罪のない血のせいでもなく、あえて大衆を非難しようとした臣下たちの大罪のためであった。彼のすぐ後に女王と州の高官もやって来て、それぞれがたいまつを持って二人ずつ歩いてきた。

その日の議題の一部として、国王自らが司教宮殿のメインホールで王国の高官らに演説した。彼は悲しい表情で彼らの前に現れ、感動的な雄弁な言葉でこの国に降りかかった「犯罪、冒瀆、悲しみと屈辱の日」を嘆いた。そして彼はすべての忠実な臣下に対し、フランスを破滅の危機に陥れた邪悪な異端の除去に協力するよう呼びかけた。「閣下、私はまさにあなたの王です」と彼は言いました、「もし私自身の手足の一本がこの忌まわしい腐敗に汚染されているか汚染されていると知ったら、私はあなたにそれを切り取ってもらいます...さらに、もし私が見たら私の子供の一人がそれに感染した場合、私は彼を容赦しません...私自身が彼を引き渡し、彼を神に犠牲として捧げます。」涙が彼の声を詰まらせ、集会全体が泣き、声を合わせて叫んだ。「私たちはカトリックのために生き、死ぬものだ！」

真実の光を拒んだ国の闇は凄まじいものとなった。「救いをもたらした恵み」は現れたが、フランスはその力と神聖さを目の当たりにし、何千人もの人々がその神聖な美しさに魅了され、都市や小さな村がその輝きに照らされた後、それを拒否し、むしろ暗闇を好んだ。ライト。彼らは天からの贈り物が差し出されたとき、それを拒否しました。彼らは自らの欺瞞の犠牲になるまで、善を悪、悪を善と呼んでいました。さて、彼らは神の民を迫害することで神への奉仕をしていると心から信じていましたが、彼らの誠実さが彼らが無罪にするわけではありませんでした。血の犯罪で魂を汚すという欺瞞から彼らを救ってくれるはずの光を、彼らは自ら拒否したのだ。

異端を根絶する厳粛な誓いは大聖堂で行われ、約3世紀後、生ける神を忘れた国家によって「理性の女神」が即位することになっていた。再び行列が形成され、フランス代表は誓った仕事を始めるために出発した。行列の帰路に沿って一定の間隔で、異端者を処刑するための断頭台が建てられ、王が近づくとその恐ろしい光景をじっくりと見つめられるようかがり火が点火される予定だった。

キリストの証人たちが受けた拷問の詳細はあまりにも衝撃的で、語ることはできません。被害者側には何の躊躇もなかった。撤回を求められたとき、有罪判決を受けた者の一人は、「私は預言者や使徒が以前に説いたことと、すべての聖徒たちが信じたことだけを信じています。私の信仰は地獄のあらゆる力に耐える神への信頼です。」と答えた。

行列は何度も拷問の場所で止まりました。出発点である王宮に戻った後、群衆は解散し、国王と高位聖職者たちは自宅に戻り、その日の出来事に十分満足し、始まったばかりの仕事が異端の完全な破壊まで続くことを自画自賛した。

フランスが拒否した平和の福音は事実上根絶されることになり、その結果は恐ろしいものとなるだろう。1793年1月21日、フランスが誓約したその日から258年後。

改革派への迫害が完全に終わった後、まったく異なる目的を持った別の行列がパリの通りを横切りました。「またしても国王が主役でした。またしても暴動と大騒ぎが起きました。またしても、より多くの犠牲者を求める叫びがありました。

再び黒い絞首台が設置され、日常の光景は再び恐ろしい処刑で終わりました。ルイ16世は看守や処刑人ともみ合いながら断頭台に引きずり込まれ、斧で一撃され生首が壇上に落ちるまで力づくでそこに留め置かれていた。」犠牲者は国王だけではなく、彼の処刑後、恐怖政治の血なまぐさい日々間に、2,800人の人間が断頭台で命を落としました。

宗教改革は開かれた聖書を世界に提示し、神の律法の戒律を明らかにし、人々の良心との関係でその主張を主張しました。無限の愛が人々の前に天の法令と原則を明らかにしたのです。神はこう言われました。「だから、それらを守り、それを実行しなさい。これが、これらすべての法令を聞き、民の目の前であなたの知恵と理解となるからです。こう言う、「この偉大な人々は、ただ賢明で理解のある人々だけだ。」（申命記 4:6）。フランスが天の賜物を拒否したとき、無政府状態と破滅の種を蒔き、原因と結果の法則の確実な働きが革命と恐怖政治をもたらしました。

広告によって引き起こされた迫害のずっと前に、恐れ知らずで熱心なファレルは祖国からの逃亡を余儀なくされていました。彼はスイスに行き、ツヴィングリの活動を支援するという労苦を通じて、宗教改革に有利な方向に情勢を傾けるのに貢献した。彼の晩年はフランスで過ごすことになっていましたが、それでも彼はフランスの宗教改革に決定的な影響を与え続けました。亡命生活の最初の数年間、彼の努力は特に母国で福音を広めることに集中しました。彼は国境に近い地域に住む同胞たちの間で説教するのにかなりの時間を費やし、そこではたゆまぬ警戒をしながら紛争を監視し、励ましやアドバイスの言葉で支援を提供した。他の亡命者の援助を受けて、ドイツの宗教改革者の著作はフランス語に翻訳され、ガリア語聖書とともに大量に印刷されました。

コルポーターの活躍により、これらの作品はフランスで広く販売されました。これらはコルポーターに低価格で提供され、販売による利益で仕事を続けることができました。

ファレルさんは、小学校教師という謙虚な装いでスイスで就職した。彼は孤立した教区に赴き、子供たちの教育に専念した。一般的な教育科目に加えて、聖書の真理を慎重に導入し、子供たちを通して親たちに伝えたいと考えました。信じる者もいたが、司祭たちが介入して工事を中止させ、迷信深い田舎の人々が反抗するために立ち上がった。司祭たちは「これはキリストの福音ではありえない。その説教がもたらすのは平和ではなく、戦争であるからだ」と主張した。最初の弟子たちと同じように、ある都市で迫害されたとき、彼は別の都市に逃げました。村から村へ、都市から都市へ、ファレルは飢え、寒さ、疲労に耐えながら、どこでも命の危険にさらされながら歩いて行きました。彼は市場や教会で説教し、時には大聖堂の説教壇から説教しました。時々、教会に聴衆がいないことに気づきました。時には彼の説教が叫び声や嘲笑によって中断された。そして再び彼は暴力的に説教壇からひたたくられました。彼は群衆に掴まれて撲殺されそうになったことも一度や二度ではなかった。何度も弾かれながらも、たゆまぬ粘りで反撃に転じた。そして、教皇庁の本拠地であった町や都市が次々に福音への扉を開いていくのを彼は観察した。彼が以前働いていた小さな教区はすぐに改革派の信仰を受け入れました。モラとヌーシャテルの都市もローマの儀式を放棄し、教会から偶像崇拜の像を撤去した。

ファレルは長い間、ジュネーブでプロテスタントの生活水準を実現したいと考えていた。もしこの都市を征服できれば、フランス、スイス、イタリアにおける宗教改革の中心地となるだろう。この目的を念頭に置いて、彼は周囲の多くの都市や村が征服されるまで活動を続けた。そして、たった一人の友人を連れてジュネーブに入った。彼はたった2回の説教しか許されませんでした。司祭たちは行政当局から彼の有罪判決を得ようと努力したが無駄に、彼を教会評議会に出廷するよう召喚した。彼らは服の下に武器を隠して彼を殺そうと決意してそこへ行きました。ホールの外には、ファレルが評議会から逃げ切れたら確実に殺されると、こん棒や剣を持った怒った群衆が集まっていた。しかし、治安判事と軍隊の存在が彼を救った。翌朝早く、彼と仲間は湖を渡って安全な場所に導かれました。こうして彼のジュネーブへの福音宣教の最初の努力は終わった。

次の実験には、さらに質素な道具が選ばれた。その若者は見た目があまりにも穏健なため、宗教改革の友人を公言する人々からも冷遇された。しかし、ファレルが拒否された場合、彼に何ができるでしょうか？ 勇気も経験も乏しい人が、最も強く勇敢な者たちが逃げ出さなければならなかった嵐に、どうやって耐えることができたのでしょうか？ 「力や権力によってではなく、わたしの霊によって、と主は言われる。」（ゼカ 4:6）。「神は強者を混乱させるために、この世の弱者を選んだのです。」「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」（1コリント 1:27 および 25）。

フロマンは小学校教師として働き始めました。彼が学校で子供たちに教えた真理は、家でも子供たちに繰り返されました。すぐに両親たちは聖書の説明を聞きに行き、教室は熱心に聞く人でいっぱいになりました。新約聖書のコピーと冊子は広く配布され、新しい教義を公然と聞く勇気のない多くの人たちに届きました。しばらくして、この宣教師も逃亡を余儀なくされましたが、彼の教えた真理は人々の心を捉えていました。宗教改革は実施され、強化され、拡大され続けました。説教者たちは帰還し、彼らの努力によってついにジュネーブにプロテスタントの礼拝が確立されました。

カルヴァンがさまざまな放浪と苦難を経てその門を通過したとき、この都市はすでに宗教改革を宣言していました。故郷への最後の訪問から戻った彼はバーゼルに向かう途中、直接道路がカール5世の軍隊によって占拠されているのを発見し、ジュネーブを通る遠回りルートをとらざるを得なくなった。

ファレルはこの訪問で神の手を認めました。ジュネーブは改革派の信仰を受け入れましたが、そこではまだ大きな仕事が残されていました。人間が神に改宗するのは共同体としてではなく、個人としてです。再生の働きは、議会の布告によってではなく、聖霊の力によって心と良心の中で行われなければなりません。ジュネーブの人々はローマの権威を拒否していましたが、ローマの支配下で栄えた悪徳を放棄する準備ができていませんでした。そこで福音の純粋な原則を確立し、摂理が彼らに召したと思われる地位にふさわしくふさわしいようにこれらの人々を備えるのは、決して簡単な仕事ではありませんでした。

ファレルは、この仕事で団結できる人をカルヴィーノに見つけたと確信していた。神の名において、彼は厳粛かつ瞬時に若い伝道者にそこに留まって働くよう懇願した。カルヴィーノは怖くなって後ずさりした。内気で平和を愛する彼は、ジュネーブの大胆で独立した、さらには暴力的な精神と接触することを恐れていました。健康の良さ、学習習慣、

彼は退却を求めるようになった。自分のペンを通して改革の大義にもっと貢献できると信じていた彼は、静かな隠れ場所を見つけて、そこで報道機関を通じて教会を指導し啓発したいと考えた。しかし、ファレルの厳粛な戒めは、天からの直接の呼びかけとして彼に届いたので、彼はそれを拒否する勇気はありませんでした。「まるで神の手が天から伸びてきて彼を掴み、立ち去りがたい場所に取り返しのつかないほど彼を固定したように私には思えました。」

当時、プロテスタントの大義は大きな危険にさらされていました。教皇の罵倒がジュネーブに轟き、列強諸国がジュネーブを破壊の脅威にさらした。この小さな都市は、王や皇帝を頻繁に服従させてきた強力な階層構造にどうやって抵抗できたのでしょうか？彼女は、どうやって世界の偉大な征服者の軍隊に立ち向かうことができたのでしょうか？

キリスト教世界全体で、プロテスタントは手ごわい敵によって脅かされていました。宗教改革の最初の勝利の後、ローマはその破壊をもたらすことを望んで新たな勢力を招集しました。このとき、教皇庁のすべての擁護者の中で最も残酷で、不謹慎で、強力なイエズス会修道会が設立されました。この世のあらゆる絆や人間の利益から切り離され、自然の愛情の叫びに直面しても無表情で、理性も良心も焼き尽くされた状態で、彼らは教団自体の規則やつながり以外には何も知りませんでした。そしてその権力を拡大する以外に義務はない。キリストの福音のおかげで、キリストの追従者たちは、拷問、牢獄、火刑に直面して真理の旗を掲げるために、危険に直面し、寒さ、飢え、重労働、貧困の苦しみに果敢に耐えることができました。これらの勢力と戦うために、イエズス会は信者たちに同様の危険に耐え、真実の力やあらゆる欺瞞の武器に対抗することを可能にする狂信を鼓舞しました。彼らにとって、犯し得るほど重大な犯罪はなく、これほど卑劣な欺瞞も、これほど想定が難しい偽装もなかった。貧困と謙虚さの永遠の誓いを立て、プロテスタント主義の破壊と教皇の優位性の再確立に専念するための富と権力を獲得することが彼らの研究された目的でした。

彼らは教団の一員として現れたとき、神聖な衣を着て刑務所や病院を訪れ、病人や貧しい人々の世話をし、世を捨てたと告白し、善行を行ったイエスの神聖な御名を名乗った。しかし、この無邪気な外観の下には、最も犯罪的で致命的な目的が隠されていました。目的は手段を正当化するというのが秩序の基本原則だった。この規範により、嘘、窃盗、偽証、殺人は、教会の利益にかなう場合には許されるだけでなく、賞賛されるものとされました。彼らはさまざまな変装の下に隠れて、国家機能への道を準備し、王の顧問に上り詰め、国家の政治を形成しました。彼らは主人のスパイとして働く召使となった。彼らは王子や貴族の子女のための学校と庶民のための学校を設立しました。そして、プロテスタントの両親の子供たちは教皇の儀式に従うことを強制されました。ローマの崇拜の外見上の豪華さと虚飾はすべて、心を混乱させ、盲目にし、想像力を魅了する目的で提示されました。

こうして、親たちが血を流して闘い、手に入れた自由が、子どもたちによって裏切られたのです。イエズス会はすぐにヨーロッパ全土に広がり、彼らが行く先々で教皇制の復活が見られました。

彼らにより大きな権力を与えるために、異端審問を再開する教皇勅書が発布された。カトリック諸国ですら一般に忌まわしいとみなされていたにもかかわらず、この非道な法廷が教皇指導者らによって再び設置され、日の目を見ることもできない残虐行為がその秘密地下牢で繰り返された。多くの国では、何千人ものまさにこの国の花、最も純粋で高貴な、最も知的で高度な教育を受け、敬虔で敬虔な人々が集まっています。

献身的な牧師、勤勉で愛国的な国民、優秀な学者、才能ある芸術家、熟練した職人たちが殺されたり、他の土地への逃亡を余儀なくされたりした。

宗教改革の光を消し、人類から聖書を奪い、暗黒時代の無知と迷信を取り戻すためにローマが発動した手段はこれであった。しかし、神の祝福と、神がルターの後継者として育てた高貴な人々の努力の下で、プロテスタントは破壊されませんでした。彼が力を得たのは王子たちの好意や武器によるものではありませんでした。最も小さな国々、最も謙虚で最も力の弱い国々が彼の拠点となった。それは小さなジュネーブであり、その破壊を計画する最も強力な敵の真っ只中にありました。それは北海沿いの砂浜を持つオランダで、当時最大かつ最も裕福な国家であったスペインの圧政と戦っていた。宗教改革で勝利を収めたのは、寒くて不毛なスウェーデンだった。

約30年間、カルヴァンはジュネーブで働き、まずそこに聖書の道徳を採用した教会を設立し、次にヨーロッパ全土で宗教改革を推進しました。公の指導者としての彼の行動に罪がなかったわけではなく、彼の教義に誤りがなかったわけでもありません。

しかし、彼は当時特に重要だった真理を広め、教皇制の急速な流れに抗してプロテスタントの原則を維持し、改革派教会においてプライドと腐敗の代わりに生活の簡素さと純粋さを促進することに尽力した。ロマニストの教えによる。

ジュネーブからは、改革された教義を広めるために出版物や教師が出てきました。この時点に至るまで、あらゆる国から迫害されている人々が指示、アドバイス、励ましを求めて向かいました。カルヴァンの街は、西ヨーロッパ全土から迫害された改革者たちの避難場所となった。何世紀にもわたって続いたひどい嵐から逃れ、逃亡者たちはジュネーブの門に到着した。

飢え、負傷し、家や親戚を奪われていた彼らは、心から気持ちよく迎えられ、優しさをもって扱われました。そして、そこに家を見つけた彼らは、その技術、知恵、そして敬虔さによって養子縁組先の都市を祝福しました。そこに避難した多くの人々は、ローマの圧制に抵抗するために母国に戻りました。勇敢なスコットランドの改革者ジョン・ノックスは、少なからぬ英国清教徒、オランダとスペインのプロテスタント、そしてフランスのユグノー教徒らとともに、祖国の闇を照らす真実のともし火をジュネーブから運びました。

第13章

オランダとスカンジナビアの宗教改革

オランダでは、教皇の圧政が早い段階から断固とした抗議を引き起こした。ルターの時代の700年前、ローマの教皇は、ローマに大使館として派遣され、「教皇庁」の本当の性格を知っていた2人の司教によって恐れることなく批判されました。「神は教会をご自身の女王であり妻であり、ご自身の家族のための高貴で永遠の備えとし、朽ちたり腐敗したりしない持参金を彼女に与え、永遠の王冠と王笏を与えました。有益なものはすべて、あなたは泥棒のように横取りします。あなたは神のように神殿に座っています。あなたは羊飼いでではなく、羊にとっての狼になったのです。あなたは専制君主に過ぎないのに、私たちに自分が最高の司教であると信じさせたいのですね...あなたは召使いの召使でなければなりません、あなたは自分自身をそう呼んでいます、領主の中の領主になろうと陰謀を企てています...あなたは軽蔑をもたらします神の戒めに基づいて...聖霊は地球に広がるすべての教会の建設者です...私たちが市民である私たちの神の都市は、天上のすべての地域に広がり、呼ばれる都市よりも偉大です聖なる預言者によるバビロン。神聖で天国に等しいと主張し、その知恵は不滅であると自慢します。そして最後に、理由はありますが、彼は一度も間違いを犯したことがなく、間違いを犯すことさえできないと言います。」

この抗議活動に同調するために、何世紀にもわたって立ち上がった人もいます。そして、さまざまな名前でも知られ、さまざまな国を渡り歩いた初期の教師たちは、ワルドー派宣教師の特徴を持ち、福音の知識をあらゆる場所に広め、オランダに浸透しました。彼の教義はすぐに広まりました。彼らはワルドー派聖書をオランダ語に翻訳しました。彼らはこう言いました。ジョーク、寓話、些細な間違い、間違いは含まれていませんが、真実の言葉が含まれています。確かに、あちこちに固い皮があるが、そこにさえ、善で神聖なものの本質と甘さは容易に見ることができる」と12世紀の古代信仰の友人たちはこう書いている。

その間にローマの迫害が始まりました。しかし、炎上と拷問のさなか、信者は増え続け、聖書が宗教問題における唯一の絶対の権威であり、「いかなる人も信仰を強制されるべきではなく、むしろ説教によって勝ち取られるべきである」と固く宣言した。

ルターの教えは低地諸国に適切な根拠を見出し、熱心で忠実な人々が福音を説くために立ち上がった。オランダのある州からメノ・シモンズがやって来た。ローマ・カトリック教徒として育てられ、神権に叙階された彼は、聖書について全く無知で、異端に誘惑されるのを恐れて聖書を読みたくなかった。実体変化の教義に関する疑問が彼の心に重くのしかかると、彼はそれをサタンからの誘惑であると理解し、祈りと告白を通してそれを取り除こうとしましたが、無駄でした。散逸の場面に関わりながら、彼は非難する良心の声を沈黙させようと努めた。しかし、成功することはありませんでした。

しばらくして、彼は新約聖書を学ぶように導かれました。この検査とルターの著作により、彼は改革派の信仰を受け入れるようになりました。その後、彼は隣の村で、再洗礼を受けたとして有罪判決を受けた男の斬首を目撃した。これをきっかけに彼は幼児洗礼の問題について聖書を研究するようになりました。彼はそれを正当化する証拠を聖書には見つけられませんでした。バプテスマを受けるために必要なのは悔い改めと信仰だけであると考えました。

メノはローマの教会を去り、自分が受け取った真理を教えることに生涯を捧げました。ドイツでもオランダでも、不条理で扇動的な教義を擁護し、秩序と良識を揺るがし、暴力と反乱を引き起こす狂信的な集団が発生した。メノは、この運動が必然的にもたらす悲惨な結果を見て、狂信的な人々の誤った教えと野蛮な計画に全力で反対した。しかし、これらの狂信者に惑わされながらも、その有害な教義を放棄した人々も数多くいました。

ワルドー派の教えの成果である古代キリスト教徒の子孫がまだ多く残っていた。メノはこれらの階級の間で非常に熱心に働き、成功を収めました。

25年間、彼は妻と子供たちとともに旅をし、多大な困難と窮乏に苦しみ、しばしば命の危険にさらされました。彼はオランダとドイツ北部を横断し、主に下層階級の間で働きましたが、広範な影響力を及ぼしました。生来の雄弁な彼は、学歴は限られていたものの、変わらぬ誠実さ、謙虚な精神と穏やかな物腰、そして誠実で熱烈な敬虔さを持ち、自らの教えを自らの人生で体現し、人々の信頼を得た。彼の信奉者たちは散り散りになり、抑圧された。彼らはミュンスターの熱狂的な信奉者と混同されて非常に苦しんだ。すべてにもかかわらず、多くの人が彼の作品によって改心しました。

低地諸国ほど改革派の教義が冷酷に拒否された国はない。彼の支持者がこれほど恐ろしい迫害に耐えた国はほとんどない。ドイツではカール5世は宗教改革を非合法化し、その支持者全員を喜んで火刑に仕立てた。しかし、王子たちは彼の圧政に対する障壁として立ち上がった。低地諸国では彼の権力はさらに強大であり、次々と迫害令が発令された。聖書を読むこと、聞くこと、説教すること、さらにはそれについて話すことは、炎で死に値する罪を犯すことと同じでした。密かに神に祈ったり、像の前でお辞儀をしなかったり、詩篇を歌ったりすることも死刑に処せられた。自分たちの間違いを放棄した者さえも非難された。もし彼らが人間だったら、剣で死ぬだろう。女性だったら生き埋めになるだろう。忠誠を保ち続けた者たちも同じ罰を受けた。カール2世とフェリペ2世の治世下で数千人が命を落としました。

かつて、ミサを欠席し、自宅で礼拝を行っていたとして、家族全員が異端審問官の前に連行された。彼の秘密の習慣の調査中に、末息子は次のように答えた。「私たちはひざまずいて、神が私たちの心を啓発し、私たちの罪を赦してくださるよう祈ります。私たちは主権者のために、彼の王国が繁栄し、彼の人生が幸せになるように祈ります。私たちは主権者のために祈ります。」神が彼らを守ってくださるよう、判事たちに祈ってください。」裁判員の中には深く感動した人もいた。しかし、父親と息子の一人は火刑の判決を受けた。

迫害者の怒りは殉教者の信仰と同等でした。男性だけでなく、繊細な女性や若い女性も毅然とした勇気を示しました。「妻たちは火のそばで夫の隣に立ち、炎に焼かれながら、慰めの言葉をささやいたり、詩篇を歌ったりして夫を励ましました。若い乙女たちは、まるで夜の眠りのために自分の部屋に入っていかのように、生きている墓の中に横たわっていました」あるいは、まるで自分の結婚式に行くかのように、最高の服を着て絞首台や火刑台に向かったのです。」

異教が福音を破壊しようとした時代のように、「クリスチャンの血は種でした」。迫害は真実の証人の数を増やすのに役立った。毎年、君主は民衆の征服できない決意に狂気に苛まれ、残酷な仕事を主張したが無駄だった。貴族の下で

オラニエ公ウィリアム、革命はついにオランダに神を崇拝する自由をもたらしました。

ピエモンテの山々、フランスの平原、オランダの海岸で、福音の進歩は弟子たちの血によって特徴づけられました。しかし、北方諸国では平和的に侵入した。ヴィッテンベルクの学生たちは故郷に戻り、改革派の信仰をスカンジナビアに伝えました。ルターの著書の出版も光を広めました。北部の素朴で精力的な人々は、ローマの腐敗、尊大さ、迷信から転じて、聖書の純粋さ、単純さ、そして命を与える真理を歓迎しました。

「デンマークの改革者」タウゼンは農民の息子でした。少年は幼い頃から活発な知性の兆候を示していました。私は知識に飢えていました。しかし、両親の置かれた状況によってそれが拒否され、彼は修道院に入った。そこでは、彼の純粋な人生と勤勉さと忠実さが上司の好意を得ました。分析の結果、彼には将来教会への優れた奉仕が約束される才能があることが判明しました。彼らは彼にドイツかオランダの大学のいずれかで教育を受けさせるべきであると決定しました。この若い学生には、ヴィッテンベルクではないことを条件に、自分で学校を選ぶ許可が与えられた。学者を異端の毒にさらすのは得策ではありませんでした。修道士たちはそう言いました。

タウゼンは、当時も今日もローマ主義の要塞の一つであったケルン市に行きました。そこで彼はすぐに教師たちの神秘主義にうんざりするようになった。

この頃、彼はルターの著作のコピーを入手した。

彼は驚きと喜びを持ってそれらを読み、改革者から個人的な指導を受けることを大いに楽しみた

いと望みました。しかし、これを達成するには、修道院の上司を怒らせ、彼の支持を失う危険を冒す必要がありました。彼はすぐに決断を下し、その後すぐにヴィッテンベルク大学の学生として入学しました。

デンマークに戻った彼は修道院に戻りました。今のところ、彼がルーテル派の支持者であると疑う人は誰もいなかった。タウゼンは自分の秘密を明らかにしませんでした。仲間たちの偏見を刺激することなく、彼らをより純粋な信仰とより神聖な生活に導くよう努めました。彼は彼らに聖書を開いてその本当の意味を説明し、最後に罪人の義であり救いの唯一の希望であるキリストを説きました。恐れを知らぬローマの弁護士としてタウゼンに並外れた期待を寄せていた先任者の怒りは大きかった。すぐに彼は修道院から別の修道院に移送され、厳重な監視の下独房に監禁されました。

新しい保護者たちを恐怖させたのは、修道士の多くがすぐにプロテスタントへの改宗を宣言したことだった。タウゼンは独房の格子を通して仲間たちに真実の知識を伝えていた。もしこれらのデンマーク人司祭たちが異端に対処するための教会の計画に熟達していれば、タウゼンの声は二度と聞かれなかったでしょう。しかし、彼らは彼を地下牢に埋葬する代わりに、修道院から追放しました。今、彼らは無力だった。

最近発布された勅令は、新しい教義の教師に保護を提供しました。

タウゼンは説教を始めた。教会は彼のために開かれ、人々は彼の話を聞くために群がりました。

他の人たちも神の言葉を説教していました。新約聖書はデンマーク語に翻訳され、広く流通しました。この作品を破壊するために教皇派が行った努力はその最大の拡大をもたらし、その後すぐにデンマークは改革派の受け入れを告白した。

スウェーデンでも、ヴィッテンベルクの噴水を飲んだ若者たちが命の水を同胞にもたらしました。スウェーデンの宗教改革の指導者の二人、オレブロの鍛冶屋の息子であるオーラフとラウレンティウス・ペトリは、ルターとメランヒトンに師事しました。

そして彼らが学んだ真実を彼らは熱心に教えました。偉大な改革者として、オラフはその熱意と雄弁さで人々を目覚めさせましたが、ラウレンティウスはメランヒトンと同様に、穏やかで思慮深い気質を持つ知識人でした。二人とも熱心な敬虔さ、深い神学的才能、そして真実を広める揺るぎない勇気を持った人でした。教皇主義者の反対派がいなければならなかった。カトリックの司祭たちは無知で迷信深い人々を扇動しました。オラフ・ペトリさんは暴徒に度々強盗に遭い、命からがら逃げ出すことも何度かあった。しかし、これらの改革者たちは国王から支持され、保護されました。ローマ教会の統治下で、人々は貧困に陥り、圧制に押しつぶされていました。聖書を奪われ、心に何の光も与えない単なる形式と儀式の宗教を持っていた彼らは、異教の祖先の迷信的な異教の信念と習慣に戻りつつありました。国は対立する派閥に分かれており、その継続的な闘争により全員の不幸が増大した。王は国家と教会を改革することを決意し、ローマとの戦いで有能な補佐官を喜んで受け入れました。

君主とスウェーデンの指導的人物たちの面前で、オラフ・ペトリは優れた能力でローマの擁護者に対して改革派の教義を擁護した。彼は、教父たちの教えは聖書に従っている場合にのみ受け入れられるべきであると宣言しました。信仰の本質的な教義が聖書の中で明確かつ簡潔に示されており、すべての人が理解できるようにすること。キリストはこう言われました、「わたしの教えはわたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです」(ヨハネ7:16)。そしてパウロは、もし自分が受け取った福音以外の福音を宣べ伝えたら、自分は嫌われるだろうと宣言した(ガラテヤ1:8)。「それでは、どうやって他の人たちが自分の意志に従って、思いのままに教義を公布し、それを救いに必要なものとして押しつけるだろうか？」と改革者は言った。彼は、神の戒めに反する場合、教会の法令には何の権威もないことを示し、「聖書と聖書のみ」が信仰と実践の規則であるというプロテスタントの偉大な原則を支持しました。

この議論は、比較的目立たない舞台で行われたものの、「改革者軍の階級と隊列を形成した人々の資質を示す」役割を果たしている。ヴィッテンベルクとチューリヒの輝かしい中心人物や、ルターとメランヒトン、ツヴィングリとオエコランパディウスなどの著名な人物に注意を払うと、彼らが運動の指導者であったが、部下たちは彼らとは違っていたことがわかります。さて、スウェーデンの無名劇場と、マスターから弟子までのオラフとラウレンティウス ペトリの謙虚な名前に目を向けてみましょう。私たちは何を見つけますか？無知で宗派的で騒々しい論客ではありません。そこからは程遠い！私たちは、神の言葉を研究し、聖書の兵器庫から供給された武器の扱い方をよく知っていた人々を見ます。学派のソフィストやローマの高官に対して楽勝を収めた学者や神学者たち。」

この論争の結果、スウェーデン国王はプロテスタントの信仰を受け入れ、その後すぐに国民議会は国王に賛成することを宣言した。新約聖書はオラフ・ペトリによってスウェーデン語に翻訳されており、国王の要望に応じて二人の兄弟が聖書全体の翻訳を引き受けました。このようにして、スウェーデンの人々は初めて母国語で神の言葉を受け入れました。国会は王国中の牧師が聖書について説明し、学校の子供たちに聖書を読むように教えるよう命じた。

無知と迷信の暗闇は、福音の祝福された光によって途切れることなく確実に追い払われました。ローマの抑圧から解放されたこの国は、これまでに達成したことのない強さと偉大さを達成しました。スウェーデンはプロテスタントの拠点の一つとなった。1世紀後、深刻な危機の時代に、この小さくてこれまで弱かった国は、ヨーロッパで唯一、人々を解放するためにあえて救いの手を差し伸べた国でした。

三十年戦争の悲惨な戦いにさらされたドイツ。北ヨーロッパ全土が再びローマの圧制に陥りそうになった。ドイツが教皇主義者の成功の波に対抗し、プロテスタント（カルビン主義者やルーテル派も含む）への寛容を勝ち取り、宗教改革を受け入れた国々に良心の自由を回復させることができたのは、スウェーデンの軍隊のおかげでした。

第14章

その他のイギリスの宗教改革者

(ティンデル、ラティマー、ウィシャート、ノックス、克蘭マー、リドリー)

ルターがそれまで閉ざされていた聖書をドイツ国民に開いていたとき、ティンダルは神の御霊によってイギリスに対しても同じことをするよう駆り立てられました。ウィクリフの聖書はラテン語の原典から翻訳されたもので、多くの誤りが含まれていました。それは一度も印刷されたことがなく、写本の価格が非常に高かったため、少数の裕福な男性や貴族だけが入手できました。さらに、教会によって厳しく禁止されていたため、この聖典はあまり普及していませんでした。ルターの論文が発表される前年の1516年、エラスムスは新約聖書のギリシャラテン語版を出版しました。今、初めて神の言葉が原語で印刷されました。この作品では、以前のバージョンの多くの間違いが修正され、意味がより明確になりました。これにより、教育を受けた階級の多くが真理についてより深く知るようになり、宗教改革の働きに新たな刺激が与えられました。しかし、一般の人々は依然として神の言葉を持つことをほとんど妨げられていました。ティンダルは同胞に聖書を与えるというウィクリフの仕事を完了することになっていた。

勤勉な学生であり、真理の熱心な探求者として、彼はエラスムスのギリシャ語聖書の福音を受け入れました。彼は恐れることなく自分の信念を説き、すべての教義は聖書によって証明されていると繰り返し述べました。教会が聖書を与え、それを説明できるのは彼女だけだという教皇派の主張に対し、ティンダルはこう答えた、「ワシに獲物を見つけるように誰が教えたか知っていますか？ 同じ神が、お腹を空かせた子供たちに御言葉の中で父を見つけるように教えておられるのです。はるか」

ティンダルの説教は大きな関心を引きました。多くの人々が真実を受け入れました。しかし、司祭たちは警戒していて、彼が現場を離れるとすぐに、脅迫と中傷によって彼の仕事を破壊しようとしていました。彼らは何度も何度も仕事で成功を収めました。「ああ！」ティンダルは叫びました。「何ができるでしょうか？私が一か所に種を蒔いている間に、敵は私が去ったばかりの畑を破壊します。私はどこにでもいることはできません。ああ！キリスト教徒が自分たちの言語で聖書を持っていたら、できるでしょう。」「彼ら自身もこれらのソフィストに反対している。聖書がなければ、一般信徒を真理のうちに確立することは不可能である。」

そして、新たな目的があなたの心を占拠します。「エホバの神殿で詩篇が歌われたのはイスラエルの言語でした。そして、イギリスの言語は私たちの間で福音を伝えるのではないのでしょうか？...教会は夜明けよりも正午の光を少なくすべきでしょうか...クリスチャンは新約聖書を母国語で読むべきです。」教会の医師と教師「ある人はこの医師を信じ、ある人はあの医師を信じます...さて、これらの著者はそれぞれ、他の著者と矛盾しています。それでは、これやあれが正しいか間違っているかをどのようにして知ることができるのでしょうか?...どのようにして?...確かに神の言葉からです。」

その後間もなく、学識あるカトリック教徒の医師が彼と論争を繰り広げながら、「教皇の法律がないよりも、神の法律がないほうが我々にとっては良いだろう」と叫んだ。ティンダルはこう答えた、「私は教皇と教皇のすべての法律に反抗します。もし神が私の命を助けてくださるなら、すぐに鋤を扱う若者にあなたよりも聖書のことを知ってもらおうつもりです。」

ティンダルが育て始めた目的、つまり人々に新約聖書を彼らの言語で伝えるという目的が確認され、彼はすぐにその仕事に専念した。迫害によって家を追われた彼はロンドンに行き、そこでしばらく邪魔されることなく仕事を続けた。しかし再び教皇派の暴力により彼は逃亡を余儀なくされた。イングランド中が彼に迫っているように見えた。そこで彼はドイツに避難することに決めた。そこで彼は新約聖書を英語で印刷し始めました。作業は二度中断されました。しかし、ある都市で印刷が禁止されると、彼は別の都市に引っ越した。最後に彼はヴォルムスへ向かいました。そこでは数年前、ルターが国会で福音を擁護していました。その旧市街には宗教改革の友人が多く、ティンダルは何の障害もなく活動を続けました。新約聖書はすぐに3,000部完成し、同じ年に別の版が作成されました。

彼は強い決意と忍耐力を持って仕事を続けました。英国当局は港を厳重な監視下に置いたが、神の言葉はさまざまな方法で秘密裏にロンドンに運ばれ、そこから国中に広まった。法王派は真実を隠蔽しようとしたが無駄だった。ダラム司教はかつてティンダルの友人だった書店員から、聖書を破棄する目的で全聖書を購入し、それが仕事に大きな支障をきたしたことがある。しかし、逆に、こうして提供された資金によって、そうでなければ出版できなかった、より優れた新しい版のための資料が入手されました。その後ティンダルが逮捕されたとき、聖書の印刷費を賄うのに協力した人々の名前を明らかにすることを条件に釈放が与えられた。彼は、ダラム司教は他の誰よりも多くのことをしてくれた、なぜなら彼は自分の所有物に残された書籍に高い代価を支払うことによって、彼らが元気に進むことができるようにしてくれたからだ、と答えた。

ティンダルは裏切られて敵の手に渡され、何ヶ月も刑務所に入れられました。最後に、彼は殉教の死を遂げながらも自分の信仰を証しました。しかし、彼が準備した武器のおかげで、他の兵士たちは何世紀にもわたって、現代でも戦い続けることができました。

ラティマーは説教壇から聖書は民衆の言語で読まれるべきだと主張した。そこにはこう書かれていました。「聖書の著者は神ご自身であり、この聖書はその著者の力と永遠に関与しています。これに従うことを免除される国王、皇帝、治安判事、総督はいない。石、茨、根こそぎにされた木がいっぱいの、人間の伝統の近道に注意しましょう。みことばのまっすぐな道をたどっていきましょう。私たちは親が何をしたかではなく、親が何をすべきだったかを心配すべきです。」

ティンダルの忠実な友人であるバーンズとプリスは、真実を守るために立ち上がった。その後ろにはリドリーとクランマーが続いた。これらイギリス宗教改革の指導者たちは博学な人々であり、彼らのほとんどはローマの交わりにおける熱意と敬虔さで高く評価されていました。彼の教皇制に対する反対は、「教皇庁」の誤りを知っていたことから生じたものである。彼はバビロンの謎に精通していたため、彼女に対する証言に大きな力を与えました。

「知っていますか」とラティマーは言った、「イングランド全土で最も勤勉な司教は誰ですか？ 私が彼の名前を明かすべきだとあなたが聞いているのが見えます。私はあなたに言います、それは悪魔です。彼は教区を決して離れません。あなたは決して彼から離れないでください。」

あなたが望むときはいつでも彼を探してください。そうすれば彼はいつも家にいて、いつも鋤を持っています。彼が怠慢であるとは決して思われたい、私は保証します。悪魔が住んでいる場所は次のようなものです。外には本があり、中にはキャンドルがあります。外には聖書を持ち、中にはロザリオを持ちます。福音の光とともに出て、ろうそくの明かりの中に来てください、そうです、正午に！キリストの十字架の下に、煉獄万歳、煉獄よ。裸の人、貧しい人、そして

無効;そして、像を飾ったり、石や木を使って楽しい装飾をしたりして生きています。神とその最も神聖な御言葉を無視して、伝統、人間会議、そして無神経な教皇が登場します。おお！サタンが雑草を蒔くのと同じように、私たちの高位聖職者が熱心に良い教義のトウモロコシを蒔きますように！」

これらの改革者たちが維持した偉大な原則は、ワルド派、ウィクリフ、ジョン・ハス、ルター、ツヴィングリとその追隨者たちが擁護したのと同じであり、信仰と実践の規則としての聖書の絶対的な権威でした。彼らは、教皇、評議会、教父、国王が宗教問題において良心をコントロールする権利に異議を唱えた。聖書は彼らの権威であり、その教えによって彼らはあらゆる教義や主張を試しました。

神と神の御言葉への信仰が、命を賭して命を捧げた聖なる人々を支えました。炎が彼らの声を静めようとしたとき、ラティマーは殉教の同伴者にこう言った、「慰めてください。今日、私たちはイングランドに光を灯します。神の恵みによって、この光は決して消えることがないことを願っています。」

スコットランドでは、コロンバとその協力者たちが蒔いた真実の種は完全に破壊されることはありませんでした。イングランドの教会がローマに服従した後、何百年もの間、スコットランドの教会は自由を維持しました。しかし、12世紀に教皇制がその地に確立され、これほど絶対的な支配権を行使した国は他にありませんでした。どこよりも深い闇はありませんでした。しかし、そこに光の光が現れ、闇を突き破り、来るべき日の約束をもたらしました。ローラード家は聖書とウィクリフの教えを持ってイギリスからやって来て、福音の知識を保存することに多大な貢献をし、各世紀に証人や殉教者を出しました。

大宗教改革の始まりとともに、ルターの著作、そしてティンダルの英語新約聖書が登場しました。階級社会には気づかれずに、これらの使者たちは山や谷を静かに越え、スコットランドでほとんど消えかけていた真実の灯火を灯し、ローマが4世紀にわたる圧政の中で行った働きを消し去った。

そして、殉教者の血が運動に新たな推進力を与えた。教皇派の指導者たちは、自分たちの大義を脅かす危険に突然目覚め、スコットランドの最も高貴で名誉ある息子たちを何人か焼き殺した。彼らは説教壇を建てただけで、そこから死にゆく証人の言葉が国中に響き渡り、ローマの束縛を振り払うという確固たる目的を持って人々の魂を揺さぶったのである。

ハミルトンとウィシャートは、生まれも性格も高貴で、多くの謙虚な弟子たちとともに、自らの命を危険にさらしました。しかし、ウィシャートの燃え盛る薪の中から、炎が黙らせてはならない人物が現れた。神の下で、スコットランドにおける教皇の統治に致命的な打撃を与えようとする人物が現れた。

ジョン・ノックスは教会の伝統や神秘主義から離れ、神の言葉の真理を養っていました。そしてウィシャートの教えは、ローマとの交わりを放棄し、迫害されている改革派に加わるという彼の決意を裏付けた。

仲間たちから説教師の職に就くように説得された彼は、その責任に震えながら後ずさりし、数日間の隠遁生活と自分自身との苦しい葛藤を経て、ようやく同意した。しかし、その職を引き受けた彼は、命の限り不屈の決意と揺るぎない勇気を持って突き進みました。

この忠実で真の改革者は人の顔を恐れませんでした。彼の周りで燃え盛る殉教の炎は、彼の熱意をより激しく刺激するだけでした。死刑執行人の斧が威嚇的に彼の頭上にぶら下がっており、

彼は自らの立場を維持し、偶像崇拜を打ち砕くために左右に強力な打撃を与えました。

多くのプロテスタント指導者の熱意が弱まっていたスコットランド女王と面会したとき、ジョン・ノックスは真実について揺るぎない証言を行った。それは甘やかして勝ち取るものではありません。脅しには屈しませんでした。

女王は彼を異端者として非難した。彼は国家によって禁止されている宗教を受け入れるよう国民に教えており、臣民に君主に従うよう命じる神の戒めに違反したと彼女は宣言した。ノックスはきっぱりとこう答えた、「真の宗教は君主から発祥したのも、君主からその権威を受け取ったものでもなく、永遠の神のみから発せられたものであるから、臣民は自らの宗教を君主の好みに合わせる義務はない。他の人は皆、神の真の宗教について最も無知です...アブラハムの子孫全員がファラオの宗教に属していたとしたら、彼らは長い間その臣下でした。私はあなたに尋ねます、奥様：あなたはどの宗教を信仰しますか地球上にどんな宗教があったのでしょうか?...したがって、臣民は君主の宗教を受け入れる義務はありませんが、君主に敬意を払うことは推奨されています。」

メアリー女王は、「あなたが聖書を一方的に解釈すると、彼らは[ローマの巨匠]もう一方。誰を信じればいいのか、誰が判断するのか？」

「あなたは神の言葉で明確に語られる神を信じなければなりません」と改革者は答えた。

「そして、御言葉が教えていることを超えて、どちらか一方を信じてはなりません。神の御言葉はそれ自体明確です。そして、どこかに闇があるとしても、聖霊は決してご自身に矛盾しないので、その問題をより詳しく説明してください」明らかに他の場所にあるのです。ですから、頑固に無知な者を除いて、疑いの余地はありません。」これらは、勇敢な改革者が命の危険を冒して王族の耳に語った真実でした。彼は同じ不屈の勇気で目的を維持し、スコットランドが教皇制から解放されるまで祈り、主の戦いと戦いました。

イギリスでは、国教としてのプロテスタントの確立は遅れましたが、迫害が完全になくなったわけではありません。ローマの教義の多くは放棄されましたが、その形式の少なからずはまだ維持されていました。教皇の優位性は否定されたが、代わりに君主が教会の長として即位した。教会の礼拝では、福音の純粹さと単純さからの大きな逸脱が依然としてありました。宗教的寛容という偉大な原則はまだ理解されていませんでした。ローマが異端に対して行った恐ろしい残虐行為がプロテスタントの支配者によって行われることはめったにありませんでしたが、各人が自分の良心の命令に従って神を崇拜する権利はまだ認められていませんでした。誰もが教義を受け入れ、確立された教会によって規定された礼拝の形式を遵守することが求められました。反体制派は、多かれ少なかれ、何百年にもわたって迫害を受けてきました。

17世紀には、何千人もの牧師がその職務から解雇されました。人々は、重い罰金、投獄、追放の罰を受け、教会が許可したもの以外の宗教集会に出席することを禁じられた。神を礼拝するために集まることを避けられなかった忠実な魂たちは、暗い路地や薄暗い屋根裏部屋、そして季節によっては真夜中の森に集まることを余儀なくされました。神ご自身が建てた神殿である森の奥深くに、散らばり迫害されていた主の子らが集まり、祈りと賛美の中で魂を注ぎました。

しかし、あらゆる予防措置にもかかわらず、多くの人々が信仰のために苦しみました。刑務所は超満員だった。家族は離散した。多くの人々が異国の地に追放されました。

しかし、神はご自分の民と共におられ、迫害によって彼らの証言を黙らせることはできませんでした。多くの人は海を越えてアメリカへの移住を強いられ、そこでアメリカの防波堤と栄光となってきた市民的・宗教的自由の基礎を築きました。

使徒時代に起こったことと同様に、再び迫害が福音を支持するようになりました。放縦者と犯罪者が詰め込まれた吐き気を催すような地下牢の中で、ジョン・バニヤンは天国の真の雰囲気呼吸した。そしてそこで彼は、滅びの地から天の都への巡礼の旅についての素晴らしい寓話を書きました。ベッドフォード刑務所からのその声は、ほぼ 200 年にわたり、生き生きとした力で人々の心に語り継がれてきました。バニヤン著『巡礼者の進歩と罪人の首領への豊かな恵み』は、多くの人を人生の道に導いてきました。

バクスター、フラベル、アレイン、その他の才能、教養、深いキリスト教経験を備えた人々は、かつて聖徒たちに捧げられた信仰を勇敢に擁護するために立ち上がった。この世の支配者たちによって非難され、拒否されているこれらの人々によって行われた仕事は、決して滅びることはありません。フラベルが書いた『生命の泉と恵みの方法』は、自分の魂の世話をキリストに委ねるように何千人もの人々に教えてきました。バクスターの改革派牧師は神の働きの復活を望む多くの人にとって祝福であることが証明され、聖徒たちの永遠の安らぎは魂を「神の民にまだ残されている安息」へと導く働きを果たした。

100年後、大きな霊的暗闇の時代に、ホワイトフィールドとウェスリー兄弟は神の光を伝える者として現れました。既成教会の支配下で、イングランド国民は異教と区別がつかないほどの宗教的衰退に陥った。自然宗教は聖職者のお気に入りの研究であり、彼らの神学の多くが含まれていました。上流階級は敬虔さを軽視し、彼らが狂信と呼ぶものを超えていることを誇りに思っていました。下層階級は大部分が無知で悪徳に見捨てられ、教会にはもはや打ち砕かれた真理の大義を支持する勇気も信仰もありませんでした。

ルターによって明確に教えられた、信仰による義認という偉大な教義は、ほとんど完全に見失われていました。そして、救いのための善行を信頼するというローマの原則がそれに取って代わりました。既成の教会の会員であるホワイトフィールドとウェスリー兄弟は神の恩恵を心から祈願しており、これは徳のある生活と宗教儀式的遵守によって得られるものであると彼らは教えた。

チャールズ・ウェスリーがかつて病気になり、死が近づいていると感じたとき近づくと、彼は永遠の命への希望を支えているものは何かと尋ねられました。彼の答えは、「私は神に仕えるために最善の努力をしてきた」でした。質問をした友人は彼の答えに完全には満足していないようだったので、ウェスリーはこう思いました、「何だ！ 私の努力は希望の十分な根拠ではないのか？」彼は私の努力を奪うのでしょうか？これが教会に降り注いだ深い闇であり、贖いを隠し、キリストの栄光を奪い、唯一の救いの希望である十字架につけられた救い主の血から人々の心をそらしたのである。

ウェスリーと彼の仲間たちは、真の宗教は心の中で確立され、神の律法は言葉や行動だけでなく思考にも及ぶということを理解するように導かれました。彼らは、外面的な行動の正しさだけでなく、心の純粋さの必要性を確信し、新しい人生を送ることに熱心に取り組みました。彼らは最も勤勉かつ敬虔な努力を通じて、自然の心の悪を制御することに専念しました。彼らは、自己否定、慈善、そして屈辱の人生を送り、自分たちが最も望むもの、つまり神の好意を保証する神聖さを手に入れることができると信じていたあらゆる手段を非常に厳格かつ正確に観察しました。しかし、彼らは到達しませんでした

彼らが達成しようと設定した目標。罪の非難から解放され、その力を打ち破ろうとする彼らの努力は無駄でした。これはルターがエアフルトの独房で経験したのと同じ闘争だった。彼の魂を苦しめたのと同じ質問——「人間はどうやって神に対して自分を正当化できるだろうか？」（ヨブ記 9:2）。

プロテスタントの祭壇でほとんど消え去った神の真理の炎は、ボヘミアのキリスト教徒によって時代を超えて受け継がれてきた古代の聖火の中で再び燃え上がるようになっていました。宗教改革後、ボヘミアのプロテスタントはローマの大群によって踏みにじられました。真実を放棄することを拒否した者は全員、逃亡を余儀なくされました。その中にはザクセン州に避難し、そこで古代の信仰を維持した者もいた。ウェスリーと彼の仲間たちに光が射したのは、これらキリスト教徒の子孫からでした。

ジョンとチャールズ・ウェスリーは宣教に叙階された後、アメリカへの伝道に派遣されました。船にはモラヴィア人のグループがいました。渡河中に激しい嵐が彼らを襲い、ジョン・ウェスリーは死に直面したとき、神との平和の保証はないと感じました。一方、ドイツ人は、彼らには知られていない落ち着きと自信を示しました。

「ずっと前に」と彼は言った、「私は彼らの行動が非常に真剣であることを観察していました。彼らは謙虚であることを絶えず証明し、イギリス人なら誰も引き受けられないような単純な仕事を他の乗客のために行いました。そしてそれは望んだり受けたりすることもなく」それは彼らの誇り高い心に良いことであり、恋人の救い主は彼らにもっと多くのことをしてくださった、そして毎日が彼らにどんな侮辱にも影響されない柔和さを示す機会を与えてくれた、と言って支払いをした。

押されたり、殴られたり、打ち倒されたりしても、彼らは再び立ち上がって立ち去ります。彼の口からは何の不満も漏れなかった。そのとき、彼らが恐怖、プライド、怒り、復讐だけでなく精神からも解放されているかどうかを証明する機会がありました。彼らが礼拝を始めた詩篇の真ん中で、海は荒れ狂い、メインセイルはボロボロになり、船を覆い、甲板全体に広がり、あたかもすでに大きな深淵が私たちを飲み込んだかのようでした。英国人の間でひどい抗議が起こった。ドイツ人は静かに歌い続けた。その後、そのうちの一人に「怖くありませんか？」と尋ねました。彼は「神に感謝します、いいえ！」と答えました。「でも、あなたの女性や子供たちは怖くありませんか？」と私は尋ねました。彼は穏やかに答えた、「いいえ、私たちの女性や子供たちは死ぬことを恐れていません。」

サバンナに到着したウェスリーは、モラヴィア人たちのキリスト教的行動に深い感銘を受け、しばらくモラヴィア人たちと一緒に過ごしました。英国国教会の形式主義的な礼拝とは顕著な対照を示した彼の礼拝の一つについて、彼は次のように書いている、「そのすべての厳粛さと同様に、その非常に簡素な儀式は、過ぎ去った17世紀をほとんど忘れさせてくれた」そして、形式も装置も何もなかったが、御霊と力を示す集会の一つに自分が出席しているところを想像してみてください。」

英国に戻ったウェスリーは、モラヴィアの説教師の指導を受けて、聖書の信仰をより明確に理解するようになりました。彼は、救いのためには自分の働きに対する一切の信頼を捨て、「世の罪を取り除く神の小羊」を完全に信じる必要があると確信しました。ロンドンのモラヴィア協会の集会で、神の御霊が信者の心に働くという変化を述べたルターの声明が読み上げられた。ウェスリーは彼女の言葉を聞いて、彼の魂に信仰に火をつけました。

「不思議と心が温かくなった」と話した。「私はキリストを、そしてキリストだけを救いとして信頼していると感じました。そして、キリストが私の罪を、私の罪さえも消し去り、罪と死の法則から私を救ってください」と確信しました。」

長年にわたる疲れ果てた絶望的な努力、何年もの厳しい放棄、非難、屈辱を乗り越えながら、ウェスリーは神を求めるといふ唯一の目的に集中し続けた。今、彼は彼を見つけ、

彼は、祈りと断食、施しと自己否定を通して達成しようと努力してきた恩恵が、「お金も代償も必要としない」賜物であることに気づきました。

キリストへの信仰が確立されると、彼の魂全体は、神の無償の恵みの輝かしい福音の知識をあらゆる場所に広めたいという願望に燃え上がりました。「私は全世界を私の教区と見なしています。どの地域であっても、耳を傾けようとするすべての人に救いの福音を宣言することは正義であり、私の神聖な義務であると考えています。」

彼は厳格で無私の生活を続けましたが、今ではそれが基礎としてではなく、信仰の産物としてです。根としてではなく、聖性の実として。キリストにおける神の恵みはクリスチャンの希望の基礎であり、この恵みは従順によって現れます。ウェスリーの生涯は、彼が受け取った偉大な真理、つまりキリストの贖いの血と心の中の聖霊の新たな力への信仰による義認、そしてキリストの模範に従った人生で実を結ぶことに捧げられたものでした。

ホワイトフィールドとウェスリー兄弟は、自分たちの失われた状態に関する長く深い個人的な信念を通じて、仕事の準備を整えてきました。そして、彼らがキリストの良き兵士として困難に耐えられるようにするために、彼らは大学でも伝道を始めた頃でも、嘲笑、嘲笑、迫害という激しい試練にさらされました。彼らと彼らに同情する他の何人かの人々は、不信者の同僚たちから嘲笑的にメソジストと呼ばれたが、この名前は現在、イギリスとアメリカの最大の宗派の一つによって名誉ある名前とみなされている。

英国国教会の会員として、彼らは礼拝の形式に厳しく縛られていましたが、主は御言葉の中で彼らにより高い基準を定められました。聖霊は彼らに、キリストと十字架につけられたキリストを宣べ伝えるよう促しました。彼らの働きには至高者の力が伴っていました。何千人もの人々が確信し、真に改心しました。これらの羊はオオカミを食い荒らすことから守る必要がありました。

ウェスリーは新しい宗教宗派を設立することは考えませんでした。それらをメソジスト同盟と呼ぶ団体に組織しました。

これらの説教者たちが既成の教会から直面した反対は、神秘的で苦痛なものでした。しかし、神はその知恵によって、宗教改革が教会自体の内部で始まることのできるよう到来事を導きました。もしそれが完全に外部から進行していれば、最も必要な場所に浸透することはなかったでしょう。しかし、リバイバルの説教者たちは教会の会員であり、機会があればどこでもその枠組みの中で活動したため、真理は、そうでなければ扉が閉ざされたままだったであろう場所に浸透しました。

聖職者の中には道徳的昏迷から目覚め、自分の教区で熱心な説教者になった人もいた。形式主義によって石化した教会が復活しました。

ウェスリーの時代にも、教会史のどの時代でもそうであるように、さまざまな賜物を持った人々が、任命された働きを遂行した。彼らは教義のすべての点で一致していたわけではありませんでしたが、神の御霊によって全員が動かされ、魂をキリストに勝ち取るという徹底的な目標で団結しました。ホイットフィールドとウェスリー兄弟の間にはかつて不和があり、別離が生じる恐れがあった。しかし、彼らはキリストの学校の生徒だったので、忍耐と愛によって和解しました。彼らには議論する暇はなく、その一方で間違いと不法行為が至る所で蔓延し、罪人たちは破滅に向かって急いでいた。

神の僕たちは険しい道を歩きました。影響力と知識を持つ人々は、彼らに対してその力を行使しました。しばらくして、多くの聖職者が彼らに対して意図的な敵意を示し始め、教会の扉は閉ざされました。

純粋な信仰と、それを宣言した人々のために。説教壇から彼らを非難する聖職者の行為は、闇、無知、不正の要素をかき立てた。ジョン・ウェスリーは神の憐れみの奇跡によって何度も死を免れました。彼に対して暴徒の怒りが高まり、逃げる手段がないと思われたとき、人間の姿をした天使が彼の側に来て、暴徒は後退した。こうしてキリストのしもべは危険な場所から無傷で立ち去りました。

ウェスリーは、そのような機会に怒った人々から救出されたときのことを次のように語っている。「街へ向かう滑りやすい道を丘を下りていると、多くの人々が私を押し出そうとしてくれました。もし転んでしまったら、なかなか立ち上がることはできないと思います。でも、私はそうしました。結局のところ、私は完全に彼らの手の届かないところに行くまで、ほんの少しも滑ることさえありませんでした...多くの人々が私の首輪と服をつかんで地面に投げつけようとしていましたが、彼らはできませんでした。「いかなる方法でも私を抱きしめないでください。襲撃犯の一人が私のチョッキのフラップをしっかりとつかみ、すぐに彼の手に渡されました。もう一方のフラップはポケットの中に紙幣が入っていて、半分引き裂かれたただけでした...」私のすぐ後ろにいた精力的な男が、オーク材でできた巨大な警棒で私を何度も殴ろうとしました。一度でも私の後頭部を殴ってあげれば、さらなる不快感は避けられたでしょう。打撃はそらされた、どうやってかわしたのか、右にも左にも動くことができなかった...別の人が群衆の中を駆け抜けて、私を攻撃しようと腕を上げ、突然腕を下ろし、軽く私に触れただけだった「何だ？あの人の髪は柔らかいんだ！」...最初に心を変えられたのは、街の英雄であり、常に民衆の指導者であり、そのうちの一人はプロボクサーでした。

「神は何という穏やかな歩みによって、私たちをご自身の意志に備えさせてくださっているのでしょうか！ 2年前、レンガの破片が私の肩を通り過ぎました。石が目の間に当たってから1年が経ちました。先月は打撲を受けましたが、今夜は2回、1回。私たちが街に着く前に、もう一人は街を出た後に、しかし、一人の男が私の胸を全力で殴り、もう一人の男が私の口を、すぐに血が吹き出るほどの勢いで殴ったにもかかわらず、両方とも無駄になりました。それらの打撃による痛みは、ストローで打たれた場合よりも大きな痛みを感じませんでした。」

当時のメソジスト派は、人々も説教者も、教会の人々と、彼らが提供した情報に激怒した無宗教を公言する人々の両方からの嘲笑と迫害に耐えました。当時の司法裁判所では正義が稀だったため、彼らは司法裁判所、司法裁判所とは名ばかりで裁判にかけられました。彼らはしばしば迫害者から暴力を受けました。暴徒たちは家々を訪問し、家具や所有物を破壊し、欲しいものは何でも略奪し、男性、女性、子供たちを残忍に虐待しました。場合によっては、メソジスト派の家の窓を割ったり略奪したりするのに協力したい人たちに名乗り出るよう呼びかける公告が掲載された。

特定の日、時間、場所に会う。人間の法律と神の法律の両方に対するこれらの目に余る違反は処罰されずに放置されました。罪人の足を滅びの道から聖なる道へとそらそうとすることだけを犯した民族に対して、組織的な迫害が行われた。

ジョン・ウェスリーは、彼とその同盟者たちに対してなされた告発について言及し、「ある人たちは、これらの人々の教義は虚偽で、誤っていて、熱狂的であると主張している。それらは新しく、最近まで聞いたこともないものであると主張している。それらはクエーカー教、偏見、そして教皇主義である」と述べた。この空想全体は今やその根元まで切り取られ、この教えのあらゆる部分が私たちの教会によって解釈された聖書の明確な教義であることが十分に実証されました。したがって、聖書は真実であるため、それは誤りでも誤りでもありません。「あなたの教義は厳格すぎる」と主張する人もいます。彼らは

彼らは天国への道を非常に狭くしています。」そして実のところ、これが最初の反対意見であり、しばらくの間ほぼ唯一の反対意見であり、さまざまな形で現れる他の千件の反対意見の最下位にひそかに位置していた。しかし、彼らは天国への道を私たちの主とその使徒たちが通った道よりも狭いのでしょうか？あなたの教義は聖書の教義より厳格ですか？いくつかの明確な文章を考えてみましょう。「あなたは、心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、精神を尽くして、あなたの神、主を愛さなければなりません。」 「人々が話すあらゆる無駄な言葉について、彼らは裁きの日に責任を負うことになる。」 「食べるにしても、飲むにしても、何をするにしても、すべてを神の栄光のためにしなさい。」

「もし彼らの教義がこれより厳格であれば、彼らは有罪である。だが、そうではないことをあなたは良心で知っている。そして、神の言葉を汚さずに、ほんの少しでも厳しくない者がいるだろうか？神の奥義の管理者を見つけられるだろうか？」信者は神聖な堆積物の一部を変更しますか？いいえ、彼は何も減らすことはできません、何も減らすことはできません。彼はすべての人に宣言することを余儀なくされています、「私は聖書をあなたの好みに変えることはできません。あなたはそれらに昇天しなければなりません。さもなければ滅びなければなりません。永遠に。」よく言われるのは、「この人たちには慈愛がない！慈愛がないのですか？！ どういう意味ですか？彼らは飢えた人に食事を与えないのですか？裸の人に衣服を着せるのではありませんか？いいえ、そうではありません。この点では彼らに落ち度はありません」。しかし、彼らは裁きにおいて容赦がありません！彼らは、自分の道を行く人々以外に自分自身を救うことはできないと考えています。」

その直前にイギリスで起きた精神的衰退

ウェスリーの教えは主に二律背反の教えの結果でした。多くの人は、キリストは道徳律を廃止したのであり、したがってキリスト教徒には道徳律を守る義務はない、と主張した。信者は「善行の束縛」から解放されるということです。他の人々は、法の永続性を認めながらも、神が救いのために選んだ人々は「神の恵みの抗しがたい衝動によって実践に導かれるから、牧師が人々にその戒めに従うよう勧める必要はない」と宣言した。一方、永遠の滅びを運命づけられていた人々は「神の法に従う力を自分自身に持っていなかった」。

さらに他の人たちは、「選民は恩恵から落ちたり、神の恩寵を失うことはできない」というテーゼを擁護し、「彼らが犯す不敬な行為は実際には罪ではないし、神の法への違反とみなされるべきではない」というさらに忌まわしい結論に達した。したがって、彼らは自分の罪を告白する必要も、悔い改めによって罪から背を向ける必要もありません。」したがって、彼らは、たとえ最も卑劣な罪の一つであっても、「普遍的に神の律法に対する途方もない違反であると考えられているが、それが選ばれた者の一人によって犯されたのであれば、神の目には罪ではない」と宣言した。そして選ばれた人々の際立った特徴は、彼らは神の不興を買うことは何もできず、神の法律で禁止されているということである。」

、または

この恐ろしい教義は本質的にローマ主義者が教えているものと同じで、「法王は法を修正し変更することによって法の遵守から解放され、間違っているものを正すことができる」と主張している。「彼は神と人間の法に反する判決や判決を下すことができる」。これらすべては、同じ主霊、そうです、天国の罪のない住人の中で、神の律法の正当な制限を解体しようとする働きを始めた同じ主霊の靈感を明らかにしています。

人間の性格を不変に固定する神の布告の教義は、多くの人を神の律法を事実上拒否するように導いていた。ウェスリーは、無律法的神学者の誤りに粘り強く反対し、無律法的立場を導いた教義が聖書に反していることを実証しました。「神の恵み

「これは、すべての人が救われ、真理を知るよう望んでいる救い主である神の目には良いことであり、喜ばしいことです。なぜなら、神は一人であり、神と人間との間の仲介者も一人である、すなわち、すべての人のためにご自身を身代金として与えられたイエス・キリストであるからである。」（テトス 2:11、1テモテ 2:3-6）神の霊は無償です。この光は、すべての人が救いの手段を手に入れることができるようにするために与えられたものであり、このように、「まことの光」であるキリストは、「世に来るすべての人を照らします」(ヨハネ1:9)。命の贈り物を頑なに拒否する。

キリストの死によって十戒の戒律は儀式法とともに廃止されたという主張に対して、ウェスリーは次のように述べた、「十戒に含まれ、預言者によって施行された道徳律は、キリストによって無効にされたわけではない。

神の来られた目的は、その一部を取り消すことではありませんでした。それは決して無効にすることができず、「天国の忠実な証人として変わらない」法律です...それは世界の始まりから存在し、「石板に書かれたものではなく、すべての人々の心の中に書かれています」人間の子らは、創造主の手を離れたとき。そして、かつて神の指によって書かれた文字は、今ではその大部分が罪によって損なわれていますが、私たちが善悪についてある程度の意識を持っている限り、それらを完全に消すことはできません。この法律の各部分は、全人類に対して常に有効であり続けなければなりません。それは時間や場所、あるいはその他の変化する状況には依存せず、神の性質と人間の性質、そして両者の不変の関係に依存します。」

「私が来たのは、破壊するためではなく、成就するためです。」...疑いの余地なく、イエスがこれと言いたかったのは、(これまでに起こったこととその後起こったことすべてと一貫して)次のとおりです。人間のあらゆる誤った解釈にもかかわらず、私はその中に不明瞭で漠然としたものを完全かつ明確な視点に置くようになりました。私はそのすべての部分の完全かつ真の目的を宣言するようになり、長さ、広さ、そして全体を示すようになりました。そこに含まれるあらゆる戒めの長さ、そしてその高さ、深さ、そのすべての部分における想像を絶する純粋さと霊性。」

ウェスリーは、律法と福音の完全な調和を主張しました。「このように、律法と福音の間には考えられる限り最も密接な関係がある。一方で、律法は絶えず私たちに福音への道を開き、福音に向かって私たちに指し示す。他方では、福音は絶えずたとえば、律法は私たちに、神と隣人を愛すること、柔和で謙虚で聖なる者であることを求めています。私たちが自分たちにはこれらのことを達成する資格がないと感じています。

そう、「人間にはそれは不可能」なのです。しかし、私たちは神がこの愛を私たちに与え、私たちに謙虚で柔和で聖なる者にしてくださいという約束を見ます。私たちはこの福音、祝福された知らせを活用します。そしてこれは私たちの信仰に従って私たちに行われます。そして『律法の義は、キリスト・イエスへの信仰を通して私たちのうちに実現される』のです。」

「キリストの福音の敵の最高位は、公然と『律法を裁く』『律法の悪口を言う』者たちであり、人間に破る(元に戻す、緩める、解放する)ことを教える者たちである」とウェスリーは述べた。義務から)) 最も小さな戒めだけでなく、最も大きな戒めだけでなく、それらすべてを一度に... この大きな欺瞞に伴うすべての状況の中で最も驚くべきことは、それを受け入れる人々が、自分たちが転覆することによってキリストを敬っていると本当に信じていることです。神の法、そして実際には神の教義を破壊しているにもかかわらず、神の奉仕を拡大している人々!そう、ユダが「先生、あなたに敬意を表し、あなたにキスをしました。」と言ったときと同じように、彼らは神を尊敬しています。そして神は彼らの一人一人に等しく正当にこう言うことができます、「あなたはキスで人の子を裏切るのか?」これは神を裏切ることにほかなりません。

キスをし、彼の血について語り、彼の冠を外してください。福音の進歩を促進するという口実のもとに、神の律法のいかなる部分も無視して扱うこと。実際のところ、直接的または間接的に従順の項目を軽視する傾向にあるこの種の信仰を説く人や、何らかの形で神の最も小さな戒めを無効にしたり弱めたりする目的でキリストを説教する人は誰もいません。彼はこの告発を逃れることはできないでしょう。」

「福音の宣教は律法のすべての目的を満たす」と主張する人々に対して、ウェスリーは次のように答えた。「私たちはこれを絶対に否定します。それは律法そのものの第一の目的、つまり人々に罪を納得させることとは一致しません。まだ地獄の端で眠っている人々を目覚めさせるために。」使徒パウロは、「律法を通して罪の知識がもたらされる」と宣言しています。

「そして、人は罪の有罪判決を受ける前に、キリストの贖いの血の必要性を真に感じることはないのでしょ...私たちの主ご自身が述べておられるように、「健康な人には医者はありません」、「しかし病気の人には医者が必要です」「ですから、健康な人、あるいは少なくとも健康だと思っている人に医者を勧めるのはばかげています。まず彼らに病気であることを納得させなければなりません。そうしないと、彼らはあなたの仕事に感謝しないでしょう。」心が健康でまだ謙虚になっていない人たちにキリストを差し出すのも同様にばかげている。」

したがって、ウェスリーは神の恵みの福音を宣べ伝えながら、師と同じように律法を拡大し、栄光あるものにしようと努めました。彼は神から託された働きを忠実に実行し、熟考することを許された結果は輝かしいものでした。巡回宣教に半世紀以上費やし、80年以上の彼の長い生涯の終わりの時点で、彼の宣言された信者の数は50万人を超えていました。しかし、彼の労苦によって罪の破滅と墮落からより純粋で高等な人生に引き上げられた大勢の人々、そして彼の教えによってより深く豊かな経験を積んだ人の数は、救われた者の家族全員が判明するまで決して知ることはできないだろう。神の国で再会しました。彼の人生はすべてのクリスチャンに貴重な教訓を与えます。このキリストの僕の信仰と謙虚さ、不屈の熱意、無私の心、献身が今日の教会に反映されますように。

第15章

聖書とフランス革命

16世紀、宗教改革は人々に開かれた聖書を示し、ヨーロッパのすべての国で導入されることを目指しました。いくつかの国では彼女を天からの使者として喜んで迎えました。他の国では教皇庁が彼女の入国を阻止することによりかなりの程度成功しました。そして、聖書の知識の光は、その高貴な影響とともに、ほぼ完全に排除されました。ある国では、光は入ってきたものの、深い闇のせいで理解できなかった。何世紀にもわたって、真実と誤謬が覇権を争ってきました。結局のところ、悪が勝利し、天の真理は否定されました。

「これは非難です。光が世に来たのに、人々は光よりも闇を愛したのです。」（ヨハネ 3:19）。国家は自らの選択の結果を享受することになった。神の御霊の抑制は、神の恵みの賜物を軽蔑していた民から取り除かれました。悪は成熟の段階に達することを許されました。そして全世界が自発的に光を拒否した結果を目にしました。

フランスで何世紀にもわたって続いた聖書に対する戦いは、革命の場面で頂点に達しました。この恐ろしい大火災は、聖書が消去されたことによる容赦ない結果にすぎません。それは、教皇政策の運用の最も注目すべき実例、つまり千年以上にわたってローマの教えが生み出す傾向にあった結果の実証を世界に示しました。

教皇の覇権の時代における聖書の禁止は預言者によって予言されていた。そして啓示者はまた、「罪の人」の支配によって、特にフランスで起こるであろう恐ろしい結果についても指摘している。

主の天使は言いました：「彼らは42ヶ月間聖なる都を踏みこむでしょう。そして私は二人の証人に力を与えます、そして彼らは荒布を着て千二百六十日間預言するでしょう...そして、彼らが証言を終えると、深淵から昇る獣が彼らと戦争を起こし、彼らに打ち勝ち、彼らを殺します。そして彼らの死体は、霊的にソドムと呼ばれる大都市の通りに横たわります。エジプト、彼らの主も十字架につけられた...そして地球に住む人々は彼らを喜び、喜び、お互いに贈り物を送り合うだろう、なぜならこれら二人の預言者は地球に住む人々を苦しめたからである。その三日半の間、神からの命の霊が彼らの中に入り、彼らは立ち上がったので、それを見た人々に大きな恐怖が降りかかりました。」（黙示録 11:2-11）。

ここで言及されている期間、「42か月」と「1,260日」は同じ時間の経過を指しており、同様にキリストの教会がローマからの弾圧に苦しむことになっていた時代を表しています。1,260年にわたる教皇の優位性は、西暦538年の教皇制の設立に始まり、1798年に終わります。その間、フランス軍がローマに侵攻し、教皇を捕虜として捕らえ、教皇は亡命中に亡くなりました。その直後に新しい教皇が選出されたが、それ以来、教皇階層はかつて持っていた権力を行使することができなくなった。

教会への迫害は1,260年間ずっと続いたわけではありません。神はご自分の民に対する憐れみの心から、彼らの激しい裁判の時間を短縮されました。救い主は教会に降りかかる「大艱難」について預言し、「もしその日が短縮されなければ、肉なる者は誰も救われないだろう。しかし、選ばれた者たちのためにその日は短縮されるだろう。」と述べられました。（マタイ 24:22）。宗教改革の影響により、迫害は1798年までに終わりました。

預言者は二人の証人について、「これらは全地の神の前にある二本のオリーブの木と二つの燭台である」と付け加えています。「あなたの御言葉は私の足の灯であり、私の道の光です」と詩編作者は言います。（黙示録 11:4、詩 11:4）

119:105）。二人の証人は旧約聖書と新約聖書の聖書を代表しています。どちらも神の律法の起源と永続性を示す重要な証人です。二人とも救いの計画の証人でもあります。旧約聖書の型、犠牲、預言は、来るべき救い主を示しています。新約聖書の福音書と書簡は、型と預言によって予測されたとおりに来られた救い主について語っています。

「彼らは荒布を着て千二百六十日間預言するだろう。」この期間のほとんどの間、神の証人は不明瞭な状態のままでした。教皇権力は真理の言葉を人々から隠蔽し、彼らの証言を矛盾させるために偽の証人を彼らの前に立たせようとした。聖書が宗教的および世俗的権威によって禁止されたとき、彼らの証言が曲解され、人々の心を聖典から遠ざける手段を考案するために人間と悪魔があらゆる努力を払ったとき、神聖な真実をあえて宣言しようとした人々が、追い詰められ、裏切られ、拷問され、地下牢に埋葬され、信仰のために殉教し、あるいは山岳地帯や地上の穴や洞窟への逃亡を強いられたとき、そのとき忠実な証人は彼らを目撃しました。荒布を着て預言した。

しかし、彼らは1,260年間を通じて証言を続けました。最も暗い時代に、神の言葉を愛し、神の名誉に嫉妬した忠実な人々がいました。これらの忠実な僕たちには、神の真実を宣言するための知恵、力、権威がずっと与えられてきました。

「もし誰かが彼らに危害を加えようとするれば、火が彼らの口から出て彼らの敵を焼き尽くすでしょう。そして誰かが彼らに危害を加えようとするなら、彼らは殺されなければなりません。」（アポック。11:5）。人間は神の言葉を何の罰も受けずに踏みにじることはできないでしょう。この恐ろしい非難の意味は、黙示録の最後の章に示されています。「この本の預言の言葉を聞くすべての人に証言しますが、もし誰かがそれに何かを加えれば、神はその人に、そこに書かれている災いをもたらすでしょう。」この本；そしてもし誰かがこの預言の本から言葉を取り去るなら、神はこの本に書かれている命の木と聖なる都からその人の分を取り去るであろう。」（黙示録 22:18 および 19）。

これが神が明らかにしたことや命令したことを人間が変えることを防ぐために与えた警告である。これらの厳粛な非難は、彼らの影響で人々が神の律法を軽々しく考えるように仕向けているすべての人に当てはまります。神の律法に従うかどうかは大した問題ではないと不遜に主張する人々に震えを引き起こすはずで、神の啓示よりも自分の意見を高く評価する人、自分の都合に合わせて、あるいは世に合わせて聖書の明白な意味を変える人は皆、大きな責任を自らに負っていることになります。書かれた御言葉、つまり神の律法は、各人の性格を測り、この間違いのないテストに欠陥があると主張する人々を非難します。

「彼らが証言を終えたとき。」二人の証人が荒布を着て預言をすることになっていた期間は1798年に終わった。無名のうちに彼らの仕事の完成が近づくにつれ、「深淵から甦る獣」として表される力を求めて彼らに対して戦争を仕掛けなければならなかった。ヨーロッパ諸国の多くでは、教会と国家を支配する権力は何世紀にもわたって教皇庁を通じてサタンによって支配されてきました。しかしここで、悪魔の力の新たな現れが明らかになります。

聖書を崇拜するという公言の下、聖書を未知の言語で封じ込め、人々から隠し続けたのはローマの政策でした。彼の統治下では、証人たちは「荒布を着て」預言した。しかし、別の力、深淵からの獣が立ち上がって、神の言葉に対して公然と戦争を宣言するはずで

目撃者たちが通りで殺害され、その死体が横たわった「大都市」は、「霊的にはソドムとエジプトと呼ばれています。」聖書の歴史に登場するすべての国の中で、エジプトは生ける神の存在を否定し、神の戒めに抵抗しました。非常に大胆な方法で、エジプト王ほど天の権威に対して傲慢な反逆を試みた君主はありません。メッセージがモーセによって主の名においてもたらされたとき、ファラオは誇らしげに答えました：「主とは誰ですか」イスラエルを解放せよという誰の声が聞こえるだろうか？「私は主を知りません。イスラエルを行かせません。」（出エジプト記 5:2）これは無神論であり、エジプトに代表される国民も同様に生ける神の主張を否定し、同様の精神を示すことになるでしょう。不信仰と反抗の「大都市」は、「霊的に」ソドムとも比較されます。神の律法に違反したソドムの墮落は、特に放縱な行為として現れました。そしてこの罪は、後に設立された国の顕著な特徴でもあるはずで

預言者の言葉によれば、1798年の少し前に、悪魔の起源と性格を持つ何らかの勢力が聖書に対して戦争を仕掛けるために立ち上がるでしょう。そして、神の二人の証人の証言がこのように沈黙させられるべき地では、ファラオの無神論とソドムの放縱さが明らかになるであろう。

この予言はフランスの歴史の中で最も正確かつ印象的な成就をもたらしました。1793年の革命中、「文明の中で生まれ教育を受け、ヨーロッパ最大の国家の一つを統治する権利を引き受けた人々の集会在、次のような最も厳粛な真実を否定するために一斉に声を上げたのを世界は初めて聞いた。人間の魂は神の信仰と崇拝を受け入れ、そして満場一致でそれを放棄します。」「フランスは、国民として宇宙の創造主に対して公然と手を上げたという本物の記録が残っている世界で唯一の国である。非常に多くの冒涇者、数え切れないほどの異教徒が存在し、そして今も続いている。イギリス、ドイツ、スペイン、その他の国々にも存在するが、フランスは立法議会の法令により神は存在しないと宣言し、首都の全人口と他のほとんどの場所では、この悪名高い宣言を聞いて、女性も男性も踊り、歌って喜びました。」

フランスもソドムをより際立たせる特徴を示しました。革命中、平原の都市に破壊をもたらしたのと同様の道徳的退廃と腐敗が明らかな状態でした。そして歴史家は、この予言の啓示に従って、フランスの無神論と放縱さを一緒に提示している：「宗教に関するこれらの法律と密接に関係しているのは、人間が形成できる最も神聖な関わりである結婚の結合を減少させた法律であり、その永続性は、より強力に社会の統合をもたらす——一時的な性質の単なる民事契約の状態に至るまで、二人の人間のどちらかが自分の好みに応じて関与したり破棄したりできる...もし悪魔が発見することに専念していたら家庭生活において由緒あるもの、優美なもの、永続的なものを破壊し、同時に彼らの目的である悪戯が世代から世代へと永続するという確実性を得るために、これ以上効率的な方法はなかったはずだ。より効率的な計画を立てた。結婚の劣化よりも効率的だ...機知に富んだ言葉で有名な女優ソフィー・アルヌーは、共和制の結婚を「姦淫の秘跡」と表現した。

「あなたの主も十字架につけられた場所です。」この預言的な仕様はフランスによっても実現されました。キリストに対する敵意の精神がこれほど顕著に表れている国は他にありません。真実がこれほど激しく激しい反対に直面した国はありません。フランスが福音を告白した人々を迫害した際、彼女は弟子たちの身代わりにキリストを十字架につけました。

何世紀にもわたって、聖徒たちの血が流されてきました。ワルド派の人々は「神の言葉とイエス・キリストの証しのために」ピエモンテの山中に命を捧げましたが、同様の真理の証言が彼らの同胞であるフランスのアルビジョワ人たちによっても行われました。宗教改革の時代、彼の弟子たちは恐ろしい拷問で殺されました。王と貴族、高貴な生まれの貴婦人と繊細な乙女たち、国民の誇りと高貴な人々は、イエスの殉教者の苦しみを見つめて目を楽しませていました。勇敢なユグノーたちは、人間の心が最も神聖視する権利のために戦い、多くの荒れた戦場で血を流しました。プロテスタントは無法者とみなされ、彼らの頭には代償が課せられました。彼らは野獣のように狩られました。

「砂漠の教会」、18世紀のフランスに生き残った古代キリスト教徒の数少ない子孫は、南の山中に隠れて、依然として父親の信仰を大切にしていました。彼らは危険を冒して夜の山の斜面や人里離れた沼地に集まり、騎兵隊に追い詰められ、ガレー船で永遠の奴隷生活に引きずり込まれました。「フランス人の中で最も純粋で、最も教養があり、知的な人々が、泥棒や殺人者の真っ只中で、恐ろしい拷問を受けながら鎖につながれた。」より慈悲深い扱いを受けながらも、冷血に銃撃され、無防備に放置され、ひざまずいて祈っていた人もいた。何百人もの老人、無防備な女性、罪のない子供たちが殺され、まさに彼らが集まっていた地面に埋められずに放置された。彼らがかつて集まっていた山や森の斜面を横切ると、「一歩ごとに死体が草の上に散らばったり、木にぶら下がったりしている」のを見つけることも珍しくありませんでした。その野原は「剣、斧、火によって荒廃し、広大で薄暗くなった」。

「これらの残虐行為は暗黒時代に犯されたのではなく、科学が発展し文字が栄えた時代、宮廷と首都の聖職者が読み書きができ雄弁で、柔和の恵みを大いに発揮した、充実した輝かしい時代に犯されたのである」そして慈善活動。」

しかし、黒い犯罪のカタログの中で最も凶悪なもの、恐ろしい世紀すべての悪魔の行為の中で最も恐ろしいものは、聖バーソロミューの虐殺でした。その極めて卑劣かつ残虐な攻撃の光景を、世界は今も恐怖に震えながら覚えている。フランス王はローマの司祭や高位聖職者らの説得を受けて、この恐ろしい行為を許可した。深夜に鳴り響く宮殿の大鐘が虐殺の合図だった。国王の名誉が損なわれることを信頼して、自宅で安らかに眠っていた何千人ものプロテスタント信者が、警告もなく引きずり出され、冷酷に殺害された。

ローマの狂信的な人物であるサタンがその責任者でした。キリストがエジプトの束縛から解放される神の民の目に見えない指導者であったように、サタンは殉教者を増やすというこの邪悪な業において、神の民の目に見えない指導者であった。パリでは7日間虐殺が続いた。想像を絶する凶暴性の最初の3つ。そして、大虐殺はその都市だけに限定されず、国王の特別命令により、プロテスタントが存在するすべての州と都市に拡大されました。年齢も性別も尊重されませんでした。無邪気な幼い子供でも白髪の男性でもない。貴族も農民も、老人も若者も、母親も子供も、一緒に皆殺しにされました。虐殺はフランス全土で2カ月間続いた。この国の立派な花の7万本が枯れた。

「教皇グレゴリウス13世は、ユグノーの運命の知らせを限りない喜びで受け取りました。彼の心の願いは満たされ、シャルル9世は今や彼の最愛の息子となった。

ローマは大喜びした。サント・アンアンジェロ城の大砲が祝祭の祝砲として轟音を立てました。各塔で鐘がチリンチリンと鳴り響きました。かがり火は一晩中燃え続けました。そしてグレゴリウスは、枢機卿や司祭の援助を受けて、ロレーヌの枢機卿がテ歌を歌ったサン・ルイス教会への壮麗な行列を追った。デウム…苦悩する群衆の叫びは、ローマの宮廷に穏やかな調和をもたらした。輝かしい虐殺を記念してメダルが铸造されました。聖バルトロマイの主な出来事を描いた絵が描かれ、現在もバチカンに残っています。教皇はシャルルの従順な行動に感謝の意を表したいと考え、彼に金のバラを贈った。そしてローマの説教壇からは、雄弁な説教者たちがカール、エカチェリーナ、軍指導者たちを教皇教会の新たな創設者として称賛した。」

聖バーソロミューの虐殺を扇動したのと同じ悪魔の精神が、革命の場面も演出しました。イエス・キリストは詐欺師であると宣言され、フランスの不信者たちのあざけりの叫び声は、キリストを意味する「惨めな者を打ち砕け！」でした。天を冒瀆する冒瀆と忌まわしい不敬虔が密接に関係しており、最も卑劣な残虐さと悪徳の怪物である人間の中で最も卑劣な者たちが最も崇高なものであった。この最高の敬意はすべてサタンに向けられましたが、キリストは、真理、純粋さ、自己犠牲の愛という彼の特徴において十字架につけられました。

「深淵から出てくる獣は彼らと戦い、彼らに打ち勝ち、彼らを殺すだろう。」革命と恐怖政治の間にフランスを支配した無神論勢力は、神とその聖なる御言葉に対して、世界中でかつて見たことのないような戦争を繰り広げました。神の言葉は国会によって禁止されました。聖書は収集され、想像し得るあらゆる嘲笑の現われの中で公の場で焼かれました。神の律法が踏みにじられたのです。聖書の制度は廃止されました。毎週の休息日が設けられ、その代わりに10日ごとがお祭り騒ぎと冒瀆に充てられました。洗礼と聖体拝領は禁止されました。死は夢であると宣言する張り紙が墓地に目立つように貼られた。

永遠の。

神への畏れは知恵の始まりとは程遠く、愚かさの始まりであると言われました。自由と国家を除くすべての宗教的カルトは禁止された。「立憲パリ司教は、国民代表の前でこれまで上演された中で最も厚かましくてスキャンダラスな茶番劇の主演を演じることを強いられた…彼は行列で全員列に並べられ、自分が長年教えてきたことを大会で宣言することを強要された」は、あらゆる点で、歴史にも神聖な真実にも根拠のない聖職者の策略でした。彼女は厳粛かつ明確な言葉で、自分が崇拜を捧げていた神の存在を否定し、自由、平等、美徳、道徳に敬意を払うことに身を捧げました。それから彼は司教の装飾品をテーブルの上に置き、大会会長から兄弟のような抱擁を受けた。何人かの背教司教がこの高位聖職者の例に倣いました。」

「そして、地上に住む者たちは彼らのことを喜び、喜び、互いに贈り物を送り合うでしょう。なぜなら、この二人の預言者は地上に住む者たちを苦しめたからです。」異教のフランスは神の二人の証人の非難の声を沈黙させた。真理の言葉は路上で死んでおり、神の律法の制限や主張を憎む人々は大喜びしていました。男性

天の王に公然と反抗した。昔の罪人たちと同じように、彼らは叫びました、「神はどうして知っているのですか？あるいは、いと高き方には知識があるのでしょうか？」（詩 73:11）。

新修道会の司祭の一人は、ほとんど信じられないような冒険的な大胆さでこう言いました。私は彼に挑戦します！主は沈黙したままです。あえて彼の雷を発射しないでください。その後、誰が神の存在を信じるだろうか。「これは、ファラオの質問のなんという正確なこたまでしょう。「私がその声に従うべき主とは誰ですか？」「私は主を知りません！」

「愚か者は心の中で『神などいない』と言った。」（詩 14:1）。そして主は真理を曲げる者たちについて、「彼らの愚かさはすべての人に明らかになるであろう」と宣言されます。（IIテモテ 3:9）。フランスが生ける神、「永遠に住まう崇高で崇高な神」への崇拜を放棄した後、自由奔放な女性の姿で理性の女神を崇拜することによって、フランスが墮落した偶像崇拜に陥るまでにそれほど時間はかかりませんでした。そしてこれは国の代表議会で、そして最高の文民および立法当局の面前で！この歴史家はこう述べている：「あの荒々しい時代の儀式の一つは、不敬虔さと不条理が組み合わさったその不条理さにおいて、今も比類のないものとなっている。大会の扉はブラスバンドの演奏に開かれ、続いて市当局のメンバーが厳粛な行列で入場し、歌を歌いながら入場した。自由を讃え、将来の崇拜の対象として、理性の女神と呼ばれるベールをかぶった女性をエスコートする賛美歌で、当局の前に連れて行かれると、盛大な儀式でベールが彼女から取り除かれ、右側に置かれました。この人物に、彼らが崇拜する理由の最も正当な代表者として、フランス国民公会は国民の敬意を表しました。この不敬でばかばかしいパフォーマンスはファッションに変わりました。そして理性の女神の叙任式は国中で、住民が革命にふさわしい生活をしたいと願った場所で繰り返され、模倣された。」

理性崇拜を紹介した講演者は、「立法狂信はその影響力を失い、理性に取って代わられた。我々はその神殿を放棄した。これらは改装されました。今日、そのゴシック様式の屋根の下に大勢の群衆が集まり、初めて真実の声が響き渡ります。そこでフランス人は自由と理性の真の崇拜を祝うことになる。そこで私たちは共和国軍に繁栄の願いを捧げます。そこで私たちは無生物の偶像への崇拜を放棄し、このアニメーションのイメージ、創造の傑作である理性に従います。」女神が大会に提示されたとき、発言者は彼女の手を取って、集会に向き直ってこう言った。「あなた自身の恐怖が生み出した神の無害な雷鳴に震えるのをやめてください。今後は理性以外の神性を認めないでください。あなたの最も高貴で最も純粋なイメージを提供します。偶像が必要な場合は、このようなものだけを犠牲にしてください...自由の8月元老院、理性のベールの前に倒れてください。」

「女神は大統領に抱きしめられた後、立派な車に乗せられ、大勢の群衆の中、神の代わりとしてノートルダム大聖堂に連れて行かれました。そこで彼女は主祭壇に上げられ、皆の崇拜を受けました」現在。"

これに続いて、ほどなくして聖書の公開焼却が行われました。そして「博物館大衆協会は市庁舎に入り、こう叫んだ。「万歳！レゾン！」そして、旧約聖書と新約聖書の縮約版を含む数冊の本の焼けかけた残骸を棒の上に担ぎ、それらは「大火で消え去った」と大統領が言ったように「人類を犯したすべての愚かさ」専念。"

無神論が今や完了しつつある仕事を始めたのは教皇庁であった。ローマの政策は、社会的、政治的、宗教的状况を生み出しました。

彼らは急速にフランスを破滅に導いた。ある作家は革命の恐ろしさについて次のように述べています。「こうした行き過ぎはまさに王座と教会のせいであるに違いありません。」厳格な正義のもとに、彼らは教会に帰属しなければなりません。教皇制度は、国王の敵であり、国家の平和と調和にとって致命的な不和の要素として、宗教改革に対して王たちの心を毒していた。それによって、ローマから始まった最も恐ろしい残虐行為と最も拷問的な抑圧を引き起こしたのはローマの天才でした。

王位。

聖書には自由の精神が伴っていました。福音が受け入れられた場所はどこでも、人々の心は目覚めました。彼らは、無知、悪徳、迷信の奴隷として自分たちを縛り付けていた束縛を打ち砕き始めました。彼らは男性のように考え、行動するようになりました。これを見た君主たちは、自らの専制主義を恐れた。

ローマは主権者たちの熱烈な恐怖を煽るのに遅々としていかなかった。教皇は1525年にフランス摂政に対し、「この狂信（プロテスタント）は宗教だけでなく、すべての公国、貴族、法律、秩序、階級をも破壊するだろう」と語った。数年後、ローマ法王の高官は国王に次のように警告した。「もしあなたが主権を無傷で保ちたいのであれば、また諸国民を平静のうちに陛下に服従させておきたいのであれば、勇敢にカトリックの信仰を守り、すべての敵を征服せよ。力。」そして神学者たちは人々の偏見に訴え、プロテスタントの教義は「人々を革新と愚かさにも駆り立てている」と宣言した。「それは国王から臣民の献身的な愛情を強要し、教会と国家の両方を荒廃させる。」このようにして、ローマはフランスを宗教改革に対して敵対させることに成功した。迫害の剣はフランスで初めて抜かれた。」

国の支配者たちは、この悲惨な政策の結果をほとんど予測していませんでした。聖書の教えは、国の繁栄のまさに基礎である正義、節制、真実、公平、博愛の原則を人々の精神と心に植え付けたでしょう。「義は国々を高めます。」このようにして、「正義をもって王座が確立される」(箴言 14:34; 16:12)。「義の効果は平和であり、義の働きは永遠に安らぎと安全をもたらすでしょう。」(イザヤ 32:17)。神の法則に従う人は、自分の国の法律を真に尊重するでしょう。神を畏れる者は、あらゆる正当かつ正当な権威を行使して王を敬うであろう。しかし、不幸にもフランスは聖書を禁止し、弟子たちを追放しました。何世紀にもわたって、原則と誠実さを持ち、知的鋭敏さと道徳的強さを持ち、真実のために苦しむ信念と信仰を表明する勇気を持った人々が、何世紀にもわたって調理室で奴隷として働き、火あぶりや命を落としました。、またはダンジョンの独房で腐っています。何千、何千人が飛行中に安全を確保した。そしてこれは宗教改革が始まってから二百五十年間続きました。

「この長い期間、福音の弟子たちが知性、芸術、産業、秩序を携えて迫害者の狂気の怒りから逃れようとしたのを目撃しなかった世代のフランス人はほとんどいなかった。、通常、彼らは非常に繁栄しました。彼らが避難所を見つけた土地を豊かにするために、強調されました。そして、これらの正確な贈り物で他国を満たしたのと比例して、彼らは自分の国からそれらを奪いました。もしこの 300 年の間、亡命者の産業能力が彼らの土壌を耕していたとしたら、もしこの 300 年の間、彼らの芸術的才能がその生産を完成させるのに使われていたとしたら、もしこの 300 年間の間に、彼らの創造的才能と分析力が文学を豊かにし、科学を培ってきたのであれば、もし彼の知恵が議会を導き、彼の勇気が戦いを戦い、彼の公平性が法律を制定し、そして聖書の宗教が

国民の知性を強化し、良心を統治することができれば、今日のフランスはどれほどの栄光に包まれることでしょうか。なんと偉大で、豊かで、幸せな国であり、他国の模範となるはずでした。

「しかし、盲目で容赦のない狂信が、あらゆる美德の教師、あらゆる秩序の擁護者、あらゆる誠実な王位擁護者をその領土から追放し、地上でこの国に『名声と栄光』を与えたであろう人々にこう言いました。『好きなものを選べ』 焚き火か追放か。最終的に、国家の破滅は完全に完了し、禁止される良心はなくなり、火刑に処せられる宗教も、追放される愛国心もなくなった。」そして革命は、そのあらゆる恐怖とともに、悲惨な結果をもたらしました。

「ユグノーの逃亡により、フランスでは全体的な衰退が始まった。繁栄した製造都市は衰退しました。肥沃な地域は自然の非耕作地に戻った。知的鈍麻と道徳的低下は、異常な進歩の期間を経て起こりました。パリは広大な救貧院となり、革命勃発時には20万人の貧しい人々が国王に慈善を乞うたと推定されている。

イエズス会だけが退廃的な国家の中で繁栄し、教会や学校、刑務所や調理室を恐ろしい圧制で支配した。」

福音があれば、フランスは、聖職者、国王、国会議員の能力を困惑させ、最終的に国を無政府状態と破滅に陥れた政治的および社会的問題の解決策を見つけることができたでしょう。しかしローマの支配下では、人々は自己否定と無私の愛についての救い主の祝福された教訓を失っていました。彼らは、他人の利益のために自己否定をする習慣から逸れていたのです。

富裕層は貧困層への抑圧を咎められていなかった。貧しい人々は、その隷属と墮落に対して何の援助も受けられませんでした。富裕層や権力者の利己主義がますます明らかになり、抑圧的になっています。何世紀にもわたって、貴族の貪欲と放蕩は農民からの圧政的な強奪をもたらしました。金持ちは貧乏人を搾取し、貧乏人は金持ちを憎んだ。

多くの地方では、不動産は貴族の手にあり、労働者階級は単なる借地人でした。彼らは所有者の言いなりになり、法外な要求に従うことを余儀なくされました。教会と国家の両方を支援する重荷は中流階級と下層階級の肩にかかっており、彼らは行政当局と聖職者から重税を課されていた。「貴族の快楽は最高法と考えられ、農民や小作人は抑圧者に心配されることなく飢えることができました。民衆は常に所有者の独占的な利益に相談することを強いられた。農業労働者の生活は絶え間ない労働の一つであり、救済されない悲惨さ、もし彼らがあえて不平を言おうものなら、彼らの不満は横柄な無視で扱われた。司法裁判所は常に農民よりも貴族に訴訟を与えた。裁判官は賄賂を公然と受け入れ、貴族のほんの少しの気まぐれも受け入れた。一方では世俗の有力者が、他方では聖職者によって一般市民から収奪された税金のうち、王室や聖公会の財務省に割り当てられたのは半分もありませんでした。そして残りは放蕩道徳に浪費された。こうして同胞を貧困に陥れた人々は税金を免除され、法律または習慣によって国家のあらゆる役職に任命された。特権階級の数約15万人であり、その人たちのために何百万人もの人々が墮落と絶望の人生を歩むことを宣告されたことに満足しています。」

法廷は欲望と放蕩に明け渡された。民衆と統治者の間にはほとんど信頼関係が存在しなかった。政府のあらゆる施策について、無謀で身勝手なものであるという疑惑が提起された。革命の半世紀以上前に、ルイ 15 世が王位を占めていました。

彼は怠惰で軽薄で官能的な君主として有名であった。墮落した残酷な貴族社会、貧しく無知な下層階級、財政的に揺るがされた国家、そして激怒した国民がいる中、恐ろしい差し迫った反乱を予見するのに預言者の目を持つ必要はなかった。顧問らの警告に対し、国王はよくこう答えた、「私が生きている間は物事を続けられるよう努力してください。私の死後は何が起こっても大丈夫です。」国王が改革の必要性を主張したのは無駄だった。彼には悪が見えていましたが、それらに立ち向かう勇気もエネルギーもありませんでした。しかし、フランスに差し迫った破滅は、まさに彼の怠惰で利己的な反応によって形作られたものでした。「私の後は洪水だ！」

ローマは国王や支配層の嫉妬を利用して、国民を奴隷状態に保つよう影響を与え、国家が弱体化することをよく知っていて、このような手段で君主と国民の両方を捕虜に陥れることを意図していました。彼は、非常に抜け目のない政治家として、人間を効果的に奴隷化するには魂に束縛を課さなければならないこと、そして人間が奴隷状態から抜け出すのを防ぐ最も確実な方法は、人間を自由にできなくすることであると認識した。彼の政策によってもたらされた身体的苦痛よりも千倍も恐ろしいのは道徳の低下だった。聖書を剥奪され、狂信と利己主義の教えに放棄された人々は、無知と迷信に浸り、悪徳に浸り、自らを統治することが全くできなくなった。

しかし、その結果はローマの計画とはまったく異なっていました。彼の仕事は、大衆を彼の教義に盲目的に服従させ続けるのではなく、結果的に彼らを不信者にして革命家にするにつながりました。彼らはローマ主義を聖職者の政治利用として軽蔑した。彼らは聖職者を抑圧的な政党とみなしていた。彼らが知っていた唯一の神はローマの神でした。彼の教えが唯一の宗教でした。彼らは自分たちの野心と残虐行為が聖書の正当な成果であると考えており、それとは何の関係も持ちたくありませんでした。

ローマは神の性質を誤って伝え、神の主張を歪め、今や人々は聖書とその著者の両方を拒否しました。それは、聖書の認可と称して、その教義への盲目的な信仰を要求していました。これに反動して、ヴォルテールと彼の共同宗教家たちは神の言葉を完全に脇に置き、不信仰の毒をあらゆる場所に広めました。ローマは鉄の圧政で人々を踏みにじりました。今、大衆は貶められ、残虐な扱いを受けながらも、専制政治から離れ、あらゆる制限を投げ捨てた。彼らは長い間名誉を与えてきたあからさまな詐欺行為に激怒し、真実も虚偽も共に拒否した。そして放蕩と自由を混同し、悪徳の奴隷たちは想像上の自由を歓喜した。

革命の初めに、国王の譲歩により、人民は貴族と聖職者を合わせたよりも大きな代表権を持つことが認められた。つまり、パワーバランスは彼の手の中にあっただけです。しかし、彼らはそれを賢明かつ控えめに使用する準備ができていませんでした。彼らは自分たちが受けた悪を修復したいと熱望し、社会の再建に取り組むことを決意した。長い間育まれてきた苦い記憶で頭がいっぱいだった虐待された群衆は、その耐えがたい悲惨な状況を根本的に変え、苦しみの元凶とみなした人々に復讐することを決意した。抑圧された人々は圧制から学んだ教訓を実践し、自分たちを踏みにじった人々の抑圧者となった。

不幸なフランスは、自らが蒔いた収穫を血とともに刈り取った。ローマの征服勢力に対する彼らの服従の結果は悲惨なものでした。どこフランス、以下

ローマ主義の影響を受け、宗教改革の初めに最初のかがり火が設置され、革命では最初のギロチンが設置されました。16世紀にプロテスタント信仰の最初の殉教者が火刑に処されたのとまったく同じ時期に、18世紀には最初の犠牲者が断頭台に処されました。フランスは、彼女に癒しをもたらしたであろう福音を拒否したことにより、不信仰と破滅への扉を開いたのです。神の律法の抑制が脇に置かれたとき、人間の律法では人間の情熱の巨大な波を食い止めるには不十分であることが判明し、そのため国は反乱と無政府状態に陥った。聖書に対する戦争は、「恐怖政治」として世界史に残る時代の幕開けとなった。平和と幸福は人々の家と心から追放されました。誰も安全を感じていませんでした。今日成功したことでも、明日は疑惑と非難の対象となる。暴力と貪欲が否定できない支配力を行使しました。

国王、聖職者、貴族は、興奮して狂った人々の残虐行為に服従することを余儀なくされました。彼の復讐への渴望は、王の処刑によってのみ鎮められました。そしてすぐに彼の死を宣告した人々が断頭台で彼を追った。革命に対する敵対の疑いのある者全員の一斉処刑が命じられた。刑務所は超満員で、20万人以上の囚人が収容されていました。王国の都市は恐怖の光景でいっぱいでした。革命家の一方が他方に対立し、フランスは情熱の怒りに支配された反対派の大衆にとって広大な論争の場となった。「パリでは暴動が続き、市民は寄せ集めの派閥に分かれ、相互排除以外何も考えていないようだった。」そして全体的な悲惨さをさらに悪化させるために、この国はヨーロッパ列強との長期にわたる壊滅的な戦争に巻き込まれることになった。「国はほぼ破産し、軍隊は賃金の支払い遅延に抗議し、パリ市民は飢え、地方は山賊に悩まされ、文明は無秩序と放縦によってほぼ消滅した。」

人々はローマが熱心に教えた残虐さと拷問の教訓をよく学んでいました。ついに報復の日がやって来た。さて、地下牢を占拠して拷問を受けていたのは、もはやイエスの弟子たちではありませんでした。信者たちはとうの昔に滅びるか、追放されていた。ローマは今や、血に飢えた行為を喜ぶように訓練した者たちの無慈悲な力を感じた。「フランスの聖職者が何世紀にもわたって見せてきた迫害の模範が、今や猛烈な勢いで自らに反抗した。処刑台は司祭たちの血で赤くなった。かつてはユグノー教徒でいっぱいだった調理室や牢獄は、今では混雑していた」ローマ・カトリックの聖職者たちは、ベンチに鎖でつながれたり、オールで働いたりして、教会が平和的な異端者たちに惜しげもなく与えたあらゆる不幸を経験した。」

「そして、すべての法典の中で最も野蛮な法廷が、最も野蛮な法廷によって施行される時代が来た。そこでは誰も隣人に挨拶したり、祈りをささげたりすることはできなかった…死刑を犯す危険もなく、スパイが隅々まで潜んでいた毎朝断頭台が素早く途切れることなく稼働していた場所、刑務所が奴隷船の船倉と同じくらい満杯だった場所、泡立った血が側溝からセーヌ川に流れ出ている場所…」

荷馬車に積まれた犠牲者がパリの街路を致命的な目的地に追いやられている間、主権委員会が地方に派遣した総領事たちは、首都でも知られていない残虐な祭典に歓喜した。致命的な機械の刃は、その殺人作業のために非常にゆっくりと上下しました。捕虜の長い列は機関銃で打ち切られた。人がぎっしり詰まったボートの底には穴が空いていた。リオンは砂漠と化した。アラスでは、囚人には即死という残酷な慈悲すら与えられなかった。へ

ソミュールから海までのロワール川沿いでは、カラスやトビの大群が、醜い抱擁で絡み合った裸の死体を食べていました。性別や年齢には容赦がありませんでした。あの極悪非道な政府によって殺害された17歳の少年少女の数は数百人と計算されるに違いない。暴力的に母親から引き離された幼い子供たちは、ジャコビアン人の行列に沿って槍から槍へと投げ飛ばされた。」10年間という短い期間に、何百万もの人間が殺された。

これらすべてはサタンの望みどおりに起こりました。何世紀にもわたって彼が働いてきたのはこのためでした。その政策は最初から最後まで欺瞞であり、その確固たる目的は人々に不幸と悲惨をもたらすこと、神の働きを傷つけ汚し、慈悲と愛という神聖な目的を歪曲し、こうして人々に悲しみをもたらすことである。そして、あたかもこの悲惨さのすべてが創造主の計画の結果であるかのように、その欺瞞的な術によって人々の心を盲目にし、その働きの悪について神を告発させるように導きます。同様に、彼の残忍な力によって貶められ、残忍な扱いを受けた人々が自由を手に入れるとき、彼は彼らに行き過ぎた残虐行為を犯すように仕向けます。したがって、この無制限の放縱の凶は、自由の結果を示すものとして暴君や抑圧者によって指摘されています。

変装の誤りが発見されたとき、サタンはそれを別の姿で覆い隠すだけで、群衆は最初と同じように熱心にそれを受け取ります。人々がローマ主義が欺瞞であり、サタンがこの手先を通して人々を神の律法に違反させることができなくなったことを発見したとき、彼は人々にすべての宗教を欺瞞とみなし、聖書を寓話として考えるよう扇動した。そして神の定めを無視して、はびこる不法行為に身を委ねたのです。

フランスの住民にこれほどの不幸をもたらした致命的な誤りは、合法的な自由は神の法の規定の範囲内にあるという、この唯一かつ偉大な真実を無知だったことである。「ああ！もしあなたがわたしの戒めを聞いていたら！」

そうすれば、あなたの平和は川のようになり、あなたの義は海の波のようになるでしょう。」「悪者には平安がない、と主は言われました。」「しかし、私の言うことを聞く者は安全に住み、恐れから安心するでしょう。」「(イザヤ書 48:18 と 22; 箴言 1:33)

無神論者、不信者、背教者は神の律法に反対し、それを非難します。しかし、彼らの影響の結果は、人間の幸福が神の法令への従順と結びついていることを証明しています。神の書のこの教訓を読んだことがない人は、諸国の歴史の中でこの教訓を読むよう勧められます。

サタンがローマ教会を通じて人々を従順からそらすために働いたとき、サタンはその活動を隠蔽し、その働きが非常に隠蔽されていたため、結果として生じる墮落と悲惨は罪の結果とは見なされませんでした。そして彼の力は神の御霊の働きによって非常に無力化され、彼の目的は完全に達成されることが妨げられました。人々は原因に関連して結果を考えなかったし、自分たちの悲惨さの原因を発見することもなかった。しかし革命では、神の法律は国家評議会によって公然と無視されました。そしてその後の恐怖政治では、誰もが原因と結果の働きを見ることができました。

フランスが聖書を公的に禁止したとき、悪人や闇の霊たちは、神の法の制約から解放された王国という長年の悲願の目標の実現に歓喜しました。悪業に対する判決がすぐに適用されなかったため、人の子らの心は「悪を行おうとする気持ちが完全に高まった」(伝道 8:11)。しかし、公正かつ正しい法律に違反すると、必然的に悲惨と破滅がもたらされます。すぐに裁きが下されることはなかったが、それでも人間の不敬虔は確実に非難の対象となりつつあった。何世紀にもわたる背教と犯罪は、報復の日への怒りを蓄積していた。そして、彼らの咎の杯が満たされたとき、彼らを軽蔑する者たちは、

神は、神の忍耐を使い果たすことがどれほど恐ろしいことであるかを知るのが遅すぎました。サタンの残酷な力に制限を設ける調整的な神の御霊はほとんど取り除かれ、人間の不幸が唯一の楽しみであるサタンは自由に自分の意志を実行できるようになった。反逆の奉仕を選んだ人々は、その果実を刈り取らなければならなくなり、地球はペンでは書ききれないほど恐ろしい犯罪で満たされました。荒廃した地方と廃墟となった都市からは、ひどい叫び声、激しい苦痛の叫び声が聞こえた。フランスはまるで地震が起きたかのように揺れた。宗教、法律、社会秩序、家族、国家、教会、すべてが神の法に反して立ち上がった邪悪な手によって破壊されました。賢者は真実にこう言いました。「悪者は自らの悪によって倒れる。」「たとえ罪人が百回悪を行い、その寿命が延びたとしても、神を恐れる者たち、神の御前を恐れる者たちにとってはうまくいくことを私は確信しています。しかし、悪人にとってはうまくいかないでしょう。」（伝道 8:12 および 13）。

「彼らは知識を嫌い、主を恐れることを好みませんでした。」「それゆえ、彼らは自分の道で得た果実を食べ、自分の勧告に満足するでしょう。」（箴言 1:29 と 31）。

「深淵から」湧き出た冒瀆的な力によって殺された神の忠実な証人たちは、これ以上沈黙しているべきではありません。「その三日半の後、神からの命の霊が彼らの中に入り、彼らは立ち上がった。それを見た人々は大きな恐怖に襲われた。」（黙示録 11:11）。聖書を廃止する法令がフランス議会通过したのは1793年でした。3年半後、この法令を廃止し、聖書への寛容を認める決議が同じ立法院で採択された。世界は神聖な神託の拒否から生じる罪の巨大さに驚き、人々は美徳と道徳の基礎として神と神の言葉への信仰の必要性を認識しました。主は言われる、「あなたは誰に逆らい、誰を冒瀆したのか。誰に対して声を上げ、目を高く上げたのか。イスラエルの聖者に対して。」（イザヤ 37:23）。

「それゆえ、見よ、わたしは彼らに知らせる。今度はわたしの手とわたしの力を彼らに知らせる。そうすれば彼らはわたしの名が主であることを知るだろう。」（エレ 16:21）。

預言者はまた、二人の証人について、「そして彼らは、天から大きな声を聞いて、『ここに上って来なさい』と言うのを聞いた。そして彼らは雲に乗って天に昇った。そして彼らの敵は彼らを見た。」と宣言した。（黙示録 11:12）。フランスが神の二人の証人に戦争を仕掛けて以来、彼らはこれまでにないほど栄誉を受けてきました。1804年に英国および外国聖書協会が組織されました。その後、ヨーロッパ大陸に多数の支部を持つ同様の組織が現れました。1816年にアメリカ聖書協会が設立されました。英国協会が設立されたとき、聖書は50か国語で印刷され、配布されていました。それ以来、この本は200以上の言語と方言に翻訳されています。聖書協会の努力により、1804年以来、1億8,700万部を超える聖書が配布されました。

1792年までの50年間、外国使節団の活動にはほとんど注目が払われなかった。新しい協会は設立されず、異教の地でキリスト教を広めようと努力した教会はほんのわずかしかなかった。しかし、18世紀の終わりに向けて大きな変化が起こりました。人間は合理主義の結果に不満を抱き、神の啓示と実験的な宗教の必要性を理解していました。献身的なキャリーは、1793年にインドへの最初の英国人宣教師となり、英国での宣教活動の火を再燃させました。20年後、アメリカではアドニラム・ジャドソンを含む学生団体の熱意によりアメリカ外国宣教委員会が設立され、その支援の下でジャドソンは宣教師としてアメリカからビルマへ旅行した。それ以来、外国使節団の活動は前例のない成長を遂げてきました。

印刷技術の進歩により、聖書を配布する活動に弾みがつきました。異なる国間のコミュニケーションがますます容易になり、偏見と国家排他主義の古い障壁が打ち破られ、ローマ教皇による世俗権力の喪失により、神の言葉が入る道が開かれました。数年間、聖書はローマの路上で何の支障もなく販売され、今では居住可能な地球上のあらゆる場所に運ばれています。

不信仰なヴォルテールはかつて傲慢にこう言った、「12人がキリスト教を設立したという話を聞くのはもううんざりだ。キリスト教を終わらせるにはたった1人で十分だと証明してやる。」彼の死から二百年以上が経過しました。何百万人もの人々が聖書に対する戦争に参加しています。しかし、ヴォルテールの時代には100部あった神の書が、今日では1万部、いや10万部も存在するほど、滅ぼされるには程遠いのです。キリスト教会に関する古代の改革者の言葉を借りれば、「聖書は多くのハンマーを使い古した金床である」。主はこう言われました、「あなたに対して用意されたあらゆる手段は榮えず、裁きにおいてあなたに対して立ち上がるあらゆる舌はあなたが罪に定めるでしょう。」（イザヤ 54:17）。

「私たちの神の言葉は永遠に残ります。」 「神の戒めはすべて真実です。それらは永遠に存続します。それらは真実と義によって行われます。」（詩 111:7 と 8）。人間の権威の上に築かれたものは何であれ、取り壊されるでしょう。しかし、不変の神の言葉という岩の上に築かれたものは永遠に残ります。

第16章

ピルグリム・ファーザーズ

英国の改革者たちは、ローマ主義の教義を放棄したにもかかわらず、その形態の多くを保存していました。このようにして、ローマの権威と信条を拒否しながらも、その習慣や儀式の多くが聖公会の礼拝に組み込まれました。これらの事柄には良心の問題は含まれていないと主張された。聖書に命令されておらず、したがって必須ではありませんが、本質的に邪悪なものは何も含まれていないため、禁止されるべきではありません。彼らの遵守は、ローマの改革派教会を隔てていた溝を狭める傾向にありました。彼らはローマ主義者によるプロテスタント信仰の受容を促進すると結論づけられました。

これらの議論は保守派や妥協派にとって決定的なものに見えた。しかし、そうは思わないクラスもありました。これらの習慣がローマと宗教改革の間の深淵を埋める傾向にあったという事実は、彼の見解では、その保存に対する反論の余地のない議論でした。彼らは、これらの形態を、自分たちが解放された奴隷制の特徴的なものとみなし、奴隷制に戻る気質を感じなかった。彼らは、神は御言葉の中で礼拝の方向性のガイドラインを定めており、人間にはそれを追加したり削除したりする自由はない、と推論した。大背教の始まりは、教会の権威を神の権威の補足とすることでした。ローマは神が禁じていないことを課し始め、最終的には神が明示的に命じたことを禁止することになりました。

多くの人は、初代教会の特徴であった純粹さと単純さに戻ることを熱望していました。彼らは英国国教会によって確立された習慣の多くを偶像崇拜の記念碑と考えており、良心的にそのカルトに加わることはできませんでした。しかし、教会は公権力の支援を受けて、その形態に関して異議を唱えることを許さなかった。法により礼拝への出席が義務付けられ、無許可の集会は懲役、流刑、死刑の罰則のもとで禁止された。

17世紀初頭、新たに即位したイングランド君主は、ピューリタンを「国外に追放するか、それとも苦しめるか、あるいはさらに悪化させるか」という決断を下したと宣言した。迫害され投獄された彼らは、将来に良い日が来る兆しも見えず、良心の命じるままに神に仕えようとする者たちにとって、「イングランドは永遠に居住可能な場所ではなくなった」という確信に身を委ねた。結局、オランダに避難することを決めた人もいた。そこで彼らは困難、損失、そして投獄に遭遇することになりました。彼らの目的は阻止され、裏切られて敵の手に渡されました。しかし、不屈の忍耐力が最終的に勝利を収め、彼らはオランダ共和国の友好的な海岸に避難所を見つけました。

逃亡の際、彼らは家、財産、生計手段を捨てました。彼らは見知らぬ土地に住み、言語も習慣も異なる人々でした。彼らは生活の糧を得るために、慣れていない新しい異なる職業に頼らざるを得ませんでした。土を耕すことに人生を費やしてきた中年男性は、機械的な仕事を学ばなければならなくなりました。しかし彼らは喜んでその状況を受け入れ、怠けたり泣き言を言ったりして時間を無駄にすることはありませんでした。彼らはしばしば貧困によって抑圧されていましたが、それでも与えられている祝福について神に感謝し、妨げられることのない靈的な交わりに喜びを見いだしました。「彼らは知っていた

彼らは巡礼者で、これらのことにはあまり目を向けず、最愛の国である天に目を向け、精神を静めていました。」

亡命と苦難の中で、彼の愛と信仰は強くなりました。彼らは主の約束を信頼しており、必要なときに主が約束を裏切ることはありませんでした。天使たちは彼らのそばにいて、彼らを励まし、サポートしていました。そして、神の御手が海の向こうに、自分たちで国家を築き、信教の自由という貴重な遺産を子供たちに残せる土地を彼らに指し示しているように見えたとき、彼らはためらうことなく、摂理が示した道に沿って前進したのです。

神は、ご自身の慈悲深い目的の達成に備えるために、ご自分の民に試練が訪れることを許可しておられました。教会は高められるために謙虚にされていました。主は彼女に代わってご自身の力を明らかにし、**ご自分を**信頼する者を見捨てないことを世界に再び証明しようとされました。彼はサタンの怒りと邪悪な人々の陰謀を彼の栄光に巻き戻し、

人々を安全な場所に連れて行きましょう。迫害と追放は自由への道を切り開いていました。

最初に英国国教会からの分離を余儀なくされたとき、ピューリタンたちは主の自由の民として「知らされた、あるいは知られるべき神のすべての道を歩む」という厳粛な契約で団結した。ここに宗教改革の真の精神、プロテスタントの重要な原則がありました。巡礼者たちが新世界に家を求めてオランダを離れたのはこの目的のためでした。摂理により同行を妨げられた彼らの牧師ジョン・ロビンソンは、亡命者たちへの別れの挨拶の中で次のように述べた。

「兄弟たち、私たちはもうすぐ別れますが、私が生きて再びあなたたちの顔を見ることができるかどうかは主がご存じです。しかし、主がお許しになるかどうかにかかわらず、私は神とその聖なる天使たちの前で、私がキリストに従った以上に私に従わないように強く勧めます。神が他の何らかの手段を通じてあなたに何かを明らかにするなら、あなたがいつも私の奉仕を通して真理を受け取ってきたのと同じように、それを受け入れる準備をしてください。なぜなら、主は御言葉からさらに多くの真理と光を放っておられると私は確信しているからです。」

「私としては、宗教が一段落し、宗教改革の手段以上に進んでいない改革派教会の状況を十分に嘆くことはできません。ルーテル派は、ルターが見たものを超えるよう誘惑されることはできません。そしてカルビン派は、ご存知のとおり、すべてを見たことのない偉大な神の人によって置き去りにされたところで止まりました。これは私たちが大いに後悔すべき悲惨なことです。なぜなら、それらは当時の光を輝かせていたにもかかわらず、神の計画全体を貫通していなかったからだ。しかし、もし彼らが今日生きていたら、最初に受け取った光と同じように、追加の光を積極的に受け入れるだろう。」

「既知であるか、まだ知られていないかに関係なく、主のすべての道を歩むことに同意したあなたの教会の契約を思い出してください。神と、そしてあなたがお互いに結んだ約束と契約を思い出してください。どんな光も歓迎するというものです。真理は、主の書かれた御言葉によってあなたに知らされました。しかし、さらに、あなたが真理として受け取るものについては注意してください、お願いします。それを調べ、検討し、彼らがそれを受け取る前に他の真理の節と比較してください。キリスト教世界はつい最近、重い霊的暗闇から出現し、知識の完成が直ちに達成されるはずです。」

巡礼者たちが海を渡る長い旅の危険に立ち向かい、苦難に耐え、

ジャングルの危険を乗り越え、神の祝福をもってアメリカの海岸に強大な国家の基礎を築くのです。巡礼者たちは誠実で神を畏れていましたが、宗教的寛容という偉大な原則をまだ理解していませんでした。彼らは多大な犠牲を払って得た自由を、他の人たちに同じように与える準備ができていませんでした。「17世紀の最も著名な思想家や道徳主義者の中でも、神を人間の信仰の唯一の裁判官と認める新約聖書の教えから生じる偉大な原理を正しく理解している人はほとんどいなかった。」神が良心を統治し、異端を定義し罰する権利を教会に託した教義は、最も根深い教皇の誤りの一つである。

改革者たちはローマの信条を拒否しましたが、その不寛容な精神から完全に自由になったわけではありません。何世紀にもわたる教皇庁の支配の過程でキリスト教世界全体を覆い尽くした濃い闇は、まだ完全には払拭されていなかった。マサチューセッツ湾植民地の有力牧師の一人は、「世界を反キリスト教にしたのは寛容だった。そして教会は異端者の処罰によって被害を受けることは一度もなかった。」と語った。入植者たちは、教会員のみが民政に参加できるという規定を採用した。

一種の国教会が設立され、国民全員が聖職者の維持に貢献する義務を負った。判事には異端を根絶する権限が与えられた。

こうして世俗の権力は教会の手に残った。これらの措置が迫害という避けられない結果につながるまでに時間はかかりませんでした。

最初の植民地の設立から11年後、ロジャー・ウィリアムズは新世界へ旅行しました。最初の巡礼者たちと同じように、彼も信教の自由を享受するようになりました。しかし、彼らと違って、彼は、この自由は、信条が何であれ、すべての人にとって奪うことのできない権利であるという、当時ほとんどの人が見たことがなかったものを見ました。彼は真理の熱心な探求者であり、ロビンソンとともに、神の言葉の光がすべて受け入れられることは不可能であると考えていました。

ウィリアムズは「現代キリスト教世界において、良心の自由、法の下での意見の平等という教義を完全に肯定した最初の人物であった。」彼は、犯罪を制限するのは治安判事の義務であるが、良心をコントロールすることは決してない、と宣言した。「人間から人間への義務を決めるのは国民か判事かもしれないが、人間の神への義務を規定しようとするとき、彼らはその場を離れており、安全などあり得ない。もし治安判事がこの権限を持っているなら、英国で異なる国王や女王、ローマ教会の異なる教皇や評議会によって行われたように、今日と明日は別の一連の意見や信念を布告できることは明らかです。それは混乱の山になるでしょう。」

教会の公式礼拝への出席は、罰金または懲役刑に処せられることになった。

「ウィリアムズはこの法律を非難した。英国法典の中で最悪の法令は、教区教会への出席を義務付ける条文だった。彼は、男性に異なる信条を持つ人々への参加を強制することは、彼らの自然権のあからさまな侵害であり、男性を礼拝に引きずり込むことであると考えた。」また、「誰も自分の意志に反して、それを提供したり、その費用を支払ったりすることを強制されるべきではない。「何？」と反対者たちは、彼の発言に恐怖を感じて叫んだ。「労働者は賃金を受け取るに値しないのか？」という教義。「はい、彼を雇ってくれる人たちからです」と彼は答えた。

ロジャー・ウィリアムズは、忠実な牧師であり、稀有な才能、揺るぎない誠実さと真の慈悲の持ち主として尊敬され、愛されました。しかし、教会に対する権威に対する民事判事の権利を否認する彼の揺るぎない否定と、信教の自由を求める彼の請願は容認できるものではなかった。この新しい教義の適用は「国の基本的な国家と政府を転覆させる」ものであると主張され、ウィリアムズは植民地からの追放を言い渡され、最終的には投獄を避けるために投獄された。

寒さと冬の嵐の中、未開の森に逃げることを余儀なくされました。

「14週間の間、私はパンも寝床も分からず、悪天候に痛めつけられました。しかし、砂漠でカラスが私に食事を与えてくれました。」そして、空洞の木がしばしば彼の隠れ家として機能しました。こうしてロジャー・ウィリアムズは、インディアンの部族に避難するまで、雪と未踏の森の中を苦痛に満ちた逃亡を続け、インディアンの部族に福音の真理を教えようと努めてその信頼と愛情を勝ち取った。

数カ月にわたる変化と放浪を経て、ウィリアムズはついにナラガンセット湾の海岸に向かい、最も広い意味で信教の自由の権利を認める最初の近代国家の基礎をそこに築きました。ロジャー・ウィリアムズの植民地の基本原則は、「すべての人は自分の良心の勧告に従って自由に神を崇拜すべきである」というものであった。彼の小さな州であるロードアイランドは、抑圧された人々の避難所となり、その基本原則である市民的および宗教的自由が確立されるまで成長し、繁栄しました。

彼らはアメリカ共和国の礎となった。

私たちの先祖が権利憲章として制定した高貴な古い文書、独立宣言の中で、彼らは次のように宣言しました。侵すことのできない権利であり、その中には生命、自由、幸福の追求に対する権利も含まれる。」そして憲法は、良心の不可侵性を最も明白な言葉で保証しており、「米国における公的信頼のある公職の資格として、いかなる宗教的前提条件も要求されない」としている。「議会は宗教の確立に関して、あるいはその自由な行使を禁止する法律を制定してはならない。」

「憲法の起草者らは、人間と神との関係は人間の法律を超えたものであり、人間の良心への権利は奪うことができないという永遠の原則を認識していた。この真理を確立するのに複雑な推論は必要なかった。私たちはそれを自分自身の心の底で認識している。この良心が、人間の法に反して、拷問や火刑で多くの殉教者を支えてきたのです。

彼らは、神に対する自分たちの義務は人間の命令よりも優れており、誰も自分たちの良心に権威を行使することはできないと感じていました。それは何もかも根絶することのできない生来の原理です。」

すべての人が良心の信念に従って自分の労働の成果を享受できる土地についてのニュースがヨーロッパ諸国に広がると、何千人もの人々が新世界の岸辺に群がりました。

コロニーは急速に増殖しました。「マサチューセッツ州は、特別法により、『戦争や飢餓、あるいは迫害者の抑圧から逃れるために』大西洋を越えて逃れてきたいかなる国籍のキリスト教徒も歓迎し、国家を犠牲にして援助を提供した。そして抑圧された人々は、法律、コミュニティのゲスト。」プリマスに初めて上陸してから20年後、他の何千人ものピルグリムがニューイングランドに定住しました。

彼らが求めていた目的を確保するために、「彼らは儉約と勤勉な生活と引き換えに、限られた収入を得ることで満足していた。彼らは自分たちの労働に対する相応の見返り以外に何も土に求めなかった。誤解を招くような黄金のビジョンなど存在しなかった。彼らは自分たちの進む道に光を灯した。彼らは社会政策のゆっくりだが確実な進歩に満足し、未開地域の窮乏に忍耐強く耐え、涙と額の汗で自由の木に水を注ぎ、根が深くなるまで耐えた大地に根を張る。」

聖書は信仰の基礎、知恵の源、そして自由の憲章であると考えられていました。その原則は家庭、学校、教会で熱心に教えられ、その成果は儉約、知性、純粋さ、節制として現れました。

ピューリタンの居住地に何年も住んでも、「酔っぱらいを見ず、悪口を聞かず、物乞いに会うこともない」かもしれない。聖書の原則が国家の偉大さを最も確実に守るものであることが実証されています。弱く孤立した植民地は強大な国家の連合体となり、世界は「教皇のいない教会と王のいない国家」の平和と繁栄を賞賛をもって注目した。

しかし、最初の巡礼者たちを動かした動機とは正反対の動機によって、アメリカのビーチに群衆が集まり続けた。信仰と原始的な純粋さは広く形成する力を発揮しましたが、世俗的な利益だけを求める人々の数が増えるにつれて、その影響力はますます小さくなっていました。

最初の入植者が採用した法律は、教会員のみ投票権と公職に就く権利を認めるもので、最も悲惨な結果をもたらした。この措置は国家の純粋さを保つ手段として受け入れられましたが、結果として教会の腐敗をもたらしました。宗教的職業は選挙権と公職に就く権利の条件であるため、世俗的な利益だけを理由に、心変わりすることなく教会に加わった人も少なくありませんでした。このようにして、教会はかなりの部分が未改宗の人々で構成されるようになりました。宣教の中にさえ、教義上の間違いを犯しただけでなく、聖霊の新たな力について無知な人々もいました。このようにして、コンスタンティヌス帝の時代から現在に至るまでの教会の歴史の中で頻りに目撃されてきた、国家の支援を受けて教会を再建し、世俗権力に訴えて国家を支持しようとした試みの邪悪な結果が再び実証されたのである。「わたしの国はこの世のものではない」と宣言された主の福音。（ヨハネ 18:36）。教会と国家の結合は、たとえそれがどれほどわずかであっても、そしてそれが世界を教会に近づけるように見えるかもしれませんが、実際にはそれは教会を世界に近づけるだけです。

ロビンソンとロジャー・ウィリアムズが気高く提唱した偉大な原則、つまり真理は進歩的であり、クリスチャンは神の聖なる言葉から輝くすべての光を受け入れる用意ができていなければならないという原則は、彼らの子孫によって見失われています。アメリカのプロテスタント教会とヨーロッパのプロテスタント教会は、宗教改革の祝福を受けて非常に好意的だったが、概説された道を前進することができなかった。新しい真理を宣言し、長い間大切にされてきた誤りを暴くために、忠実な人々の戦いが時々起こりましたが、キリストの時代のユダヤ人やルターの時代の教皇派のように、大多数は自分たちが信じていたように信じることに満足していました。そして彼らが生きたように生きます。

その結果、宗教は再び形式主義に墮落し、教会が神の御言葉の光に照らして歩み続けていれば脇に置かれたであろう誤りや迷信が心の中に残ったままでした。このようにして宗教改革に触発された精神は徐々に消えていき、ついにはプロテスタントの教会でもルターの時代のローマ教会と同じくらい改革の必要性が高まってきました。そこには同じ世俗性と霊的昏迷があり、人の意見に対する同じ敬意があり、神の言葉の教えを人間の理論に置き換えていました。

19世紀初頭に聖書が広く流通し、そのようにして世界に大きな光が当てられたが、それに伴って啓示された真理の知識や実験的宗教の進歩は見られなかった。サタンは、前世紀のように、人々から神の言葉を奪うことはできませんでした。これが置かれていました

誰もが手の届く範囲に。しかし、彼は依然として目的を達成するという意図を持っていたため、多くの人々がそれをあまり重要ではないと考えるようになりました。人間は聖書の研究を怠ったため、誤った解釈を受け入れ続け、聖書に根拠のない教義を大切にしました。

迫害によって真理を押しつぶそうとする努力が失敗したのを見て、サタンは再び妥協の計画を利用し、その結果、大規模な背教とローマ教会の設立がもたらされました。彼はキリスト教徒に、異教徒ではなく、この世のものへの献身によって、自分たちが彫刻の崇拝者と同じように真の偶像崇拝者であることを証明した人々と同盟を結ぶよう勧めました。そして、この結合の結果は、前世紀のものと同じくらい有害でした。宗教を装って誇りと贅沢が奨励され、教会は腐敗しました。サタンは聖書の教義を歪曲し続け、何百万もの人々を破滅させた伝統が深く根付き始めました。教会は「かつて聖徒たちに与えられた信仰」を争うのではなく、これらの伝統を支持し擁護した。このようにして、改革者たちが多大な努力をし、多大な苦しみを味わってきた原則が損なわれたのである。

第17章

モーニング・ヘラルズ

聖書の中で明らかにされている最も厳粛で最も輝かしい真実の一つは、偉大な救いの業を完了するためのキリストの再臨についての真実です。「死の領域と影」を長い間さまよってきた神の民には、「復活と命」である神の出現の約束において、貴重で喜びをもたらす希望が与えられています。追放された子供たちは再び家に帰ります。再臨の教義はまさに聖書の基調です。

最初のペアがエデンに背を向けた日以来、信仰の子供たちは、破壊者の力を打ち破り、失われた樂園に彼らを再び戻す約束された者の到来を待ち続けてきました。昔の聖人たちは、希望の成就として、栄光のうちにメシアが降臨されることを楽しみにしていました。エノクは、エデンに住み、3世紀にわたって神とともに地上を歩いた人々の7番目の子孫にすぎず、遠くから解放者の到来を熟考することを許されました。「見よ、主が何千人もの聖徒とともに来られ、すべての人に裁きを執行される」と彼は宣言した。（ユダ 14 章と 15 章）。族長ヨブは苦しみ、揺るぎない自信を持ってこう叫んだ。私自身を通して、そして私の目を通して、他の人は彼を見ることはありません。」（ヨブ記 19:25-27）。

義の王国を導くためのキリストの到来は、神聖な作家たちの最も崇高で感動的な言葉にインスピレーションを与えてきました。聖書の詩人や預言者たちは、天の火に燃えたぎる言葉でそれを主張しました。詩編作者はイスラエルの王の力と威厳について次のように歌いました、「完璧な美であるシオンから、神は輝いた。

私たちの神は来られ、沈黙されません...神は上から天と地を呼び、ご自分の民を裁くでしょう。」（詩 50:2-4）嬉しいよ！地球が主の御前にあれば、主は来られるから、主は地球を裁くために来るから、主は義をもって世を裁き、真理をもって民を裁かれるであろう。」（詩96:11-）13）。

預言者イザヤはこう言いました。「塵の中に住む者よ、目覚めよ、喜べ。あなたの露は草の露のようであり、地は死者を追い出すだろう。」「あなたの死者は生き、あなたの死者はよみがえる。」「神は永遠に死を遠ざけ、主エホバはすべての顔から涙をぬぐい、全地からご自分の民のそしりを取り除きます。主がそれを語られたからです。そしてその日、こう言われます。」「見よ、これは私たちの待ち望んでいた私たちの神であり、彼は私たちを救ってください。これが私たちが待ち望んでいた主である。私たちは彼の救いを楽しみ、喜ぶだろう。」「（イザヤ 26:19; 25:8 および 9）。

そしてハバククは聖なる幻に捕らえられ、彼の出現を見た。「神はテマンから来られ、聖なる方はパラン山から来られました。彼の栄光は天を覆い、地は彼の賛美で満たされました。そして彼の輝きは光のようでした。」「彼は立ち止まって大地を測り、目を凝らして国々を分けた。そして永遠の山々は砕かれ、永遠の丘は垂れ下がった。永遠の歩みは神のものである。」「あなたはあなたの馬とあなたの救いの戦車に乗って歩いてくださいました。」「山々はあなたを見て震えました。...深海は声を上げ、手を高く上げました。太陽と月は彼らの住居で静止し、彼らはあなたの矢の光の中、稲妻の明るさの中を歩きました」あなたの槍。」「あなたは自分の民を救い、油そそがれた者を救うために出てきました。」（ハバク 3:3-13）。

救い主は弟子たちのもとを去ろうとしたとき、再び来られるという確信をもって彼らの悲しみを慰めました。そして、もし私とあなたが行ったら

「場所を用意してください。わたしはまた来て、あなたをわたしのもとに連れて行きます。」(ヨハネ 14:1-3) 「そして、人の子が栄光のうちに来て、すべての聖なる天使たちも彼と一緒に座るでしょう。」彼の栄光の玉座に。そしてすべての国々が彼の前に集まるであろう」(マタイ25:31,32)。

キリストの昇天後、オリーブ山に立った天使たちは、弟子たちにキリストの再臨の約束を繰り返しました。「あなたから天に上げられたこのイエスは、あなたが天国に入るのを見たのと同じように来られます。」(使徒 1:11)。

そして使徒パウロは、靈感の霊によって語り、「主ご自身が、叫び声と、大天使の声と、神のラツパの音とともに天から降って来るであろう」と証言しました。(1テス。

4:16) パトモス島の預言者はこう言います。「見よ、彼は雲に乗って来る、そしてすべての目は彼を見るだろう。」(黙示録 1:7)。

神の来臨の周りには、「神が初めからすべての聖なる預言者の口によって語られた万物の回復」の栄光が集まります。

(使徒行伝 3:2) 。そして、悪の支配が長く続き、「世の王国は私たちの主とそのキリストの王国となり、彼は世々限りなく統治されるであろう」(黙示録11:15)。「主の栄光が現され、すべての肉なる者が共にそれを見るであろう(…)。主エホバはすべての国民の間に義と賛美をもたらすであろう(…)。主は栄光の王冠となり、美しい花輪となるであろう。残りの神の民」(イザヤ書 40:5; 61:11; 28:5)。

そのとき、待望の平和なメシアの王国が全天の下に設立されるのです。「主はシオンを慰め、彼女の荒廃した場所をすべて慰め、彼女の荒野をエデンのように、彼女の荒野を主の園のようにして下さるであろう。」「レバノンの栄光、カルメルとシャロンの卓越性は彼に与えられた。」「彼らは二度とあなたを『見捨てられた』と呼ぶことはないだろうし、あなたの土地を『荒廃』と呼ぶこともない。だが彼らはあなたを『わが喜び』と呼び、あなたの土地を『ビューラ』と呼ぶだろう。」「花婿が花嫁を喜ぶように、あなたの神もあなたのことを喜ぶでしょう。」(イザヤ 51:3; 35:2; 62:4 および 5)。

主の再臨は、いつの時代も、主の真の追従者たちの希望でした。救い主が再び来られるというオリーブ山での別れの約束は、弟子たちの未来を照らし、彼らの心を喜びと希望で満たしましたが、それは悲しみも試練も覆い隠すことができませんでした。苦しみと迫害の真只中に、「偉大な神であり私たちの救い主イエス・キリストの出現」は「祝福された希望」でした。テサロニケのクリスチャンたちが、生きて主の来臨を目撃することを望んでいた最愛の死者を埋葬しながら悲しみに満ちていたとき、彼らの教師であるパウロは、救い主の降臨の時に起こる復活を彼らに指摘しました。そのとき、キリストにある死者たちは復活し、生きている者たちとともに引き上げられ、空中で主に会うでしょう。「ですから、私たちはいつも主とともにいます。ですから、この言葉で互いに慰め合しましょう。」と彼は言いました。(1テサロニケ4:16-18)。

パトモス島の岩だらけの島で、最愛の弟子は「必ずすぐに来ます」という約束を聞き、彼の切望する答えは、「アーメン。さあ、主イエスよ、来てください。」という巡礼中の教会の祈りを要約しています。(黙示録22:20)。

聖人や殉教者が真実を証言した地下牢、火刑台、絞首台からは、何世紀にもわたって彼らの信仰と希望が現れてきます。「キリストの個人的な復活を確信しており、したがってイエスの再臨の際には自分たち自身の復活も確信している。彼らは死を軽蔑し、自分たちは死を超越していると考えていた。」彼らは、自ら進んで墓に入るつもりだった、とクリスチャンの一人は言う。彼らは「主が父の栄光とともに雲に乗って天から来られ」、「義人たちに王国の時代をもたらす」のを待っていた。ワルドー派の人々も同じ信仰を大切にしていた。ウィクリフは待っていた。教会の希望としての救い主の出現。

ルターはこう宣言しました、「裁きの日は三百年も遠くないことを心から確信しています。神はこの世を望んでおらず、耐えることもできません」

「忌まわしい王国が打倒される偉大な日は近い。」

「この古い世界は終わりからそう遠くない」とメランヒトンは語った。カルヴァンはキリスト教徒に「あらゆる出来事の中で最も縁起の良いキリストの来臨の日を熱望し、ためらわないように」と勧め、「信者の家族全員がその日を念頭に置く」と宣言している。「私たちはキリストに飢え、キリストを求め、見よ、その偉大な日の夜明けまで、私たちの主が御国の栄光を豊かに現されるまで、そうしなければならない」と彼は言う。

「私たちの主イエスは、私たちの肉体を天国に連れて行かれたのではありませんか？」とスコットランドの宗教改革者ノックスは言った、「そして彼は戻ってこないのですか？私たちは彼がすぐに戻ってくることを知っています。」真理のために命を捧げたリドリーとラティマーは、信仰をもって主の到来を待ち望みました。リドリーはこう書いている、「世界は間違いなく終わりを迎えると私は信じています。神のしもべヨハネとともに、私たちの救い主キリストに心の中で叫びましょう、主イエスよ、来てください。」

バクスターは、「主が来られることを思うと、私にとってとても嬉しくて楽しいです。」と言いました。「主の出現を愛し、祝福された希望を求めるのは、主の聖徒たちの信仰と品性の業である。死が復活において滅ぼされる最後の敵であるならば、私たちは信者たちがどれほど熱心に神の再臨を待ち望んでいるのかを知ることができるだろう。」完全かつ最終的な征服が達成される時、キリストを祈り、その成就を祈ってください。それは、すべての信者が待ち望んでいる日であり、彼らの救いの働き全体と、彼らのすべての願いと努力が成就する日です。魂たちよ。」「主よ、この祝福された日を急いでください！」これが使徒教会、「荒野の教会」、そして改革者たちの希望でした。

預言は、キリストの到来の方法と目的を予告するだけでなく、人々がキリストが近づいていることを知るためのしるしを示します。イエスは、「太陽にも、月にも、星にもしるしがあるでしょう」と言われました。（ルカ 21:25）。「太陽は暗くなり、月は光を与えなくなる。そして星が空から落ち、天にある力が動揺する。そして彼らは人の子が雲に乗って来るのを見るだろう」、偉大な力と栄光を持って。」

（マルコ 13:24-26）。啓示者ヨハネは、再臨に先立つ最初のしるしについて、「大地震が起こり、太陽は荒布のように黒くなり、月は血のようになった」と説明しています。（黙示録 6:12）。

これらの兆候は 19 世紀初頭までに目撃されていました。この預言の成就として、1755 年に歴史に記録されたことのない最も恐ろしい地震が発生しました。一般にリスボン地震として知られていますが、この地震はヨーロッパ、アフリカ、北アメリカの大部分に広がりました。それはグリーンランド、西インド諸島、マデイラ島、ノルウェー、スウェーデン、イギリス、アイルランドでも感じられました。その範囲は 1,000 万平方キロメートル以上に達しました。アフリカでもヨーロッパとほぼ同じくらい強烈な衝撃があった。アルジェリアの大部分は破壊されました。そしてモロッコから少し離れたところで、住民 8~1 万人の村が飲み込まれた。巨大な波がスペインとアフリカの海岸を襲い、都市を水没させ、大きな破壊を引き起こした。

衝撃が最大の勢いに達したのはスペインとポルトガルだった。カディスでは海の逆流が 20メートルの高さに達したと言われている。「ポルトガル最大の山々もあり、あたかもその根元から勢いよく揺さぶられ、その頂上が驚くべき形でひび割れ、裂け、そこから膨大な量の塊が下層の谷に投げ込まれた。」

これらの山々は炎を発する様子も目撃されています。」

リスボンでは「雷のような音が地面の下で聞こえ、その直後激しい衝撃があり、市の大部分が破壊された。約 6 分間で 6 万人が死亡した。最初に海が引いた」

バーを乾燥したままにしておく。その後、通常の高さより約 15 メートル上昇して戻ってきました。」
「大災害中にリスボンで起こった最も異常な状況は、巨額の費用をかけて全体が大理石で造られた新しい栈橋の沈下でした。落下する瓦礫から身を守ることができる場所だったので、安全を求めて多くの人がそこに集まっていた。しかし突然、栈橋は全員を乗せたまま沈み、遺体は一つも浮上しなかった。」

地震の衝撃の直後、「すべての教会と修道院、ほぼすべての大きな公共建物、そして住宅の4分の1が倒壊した。約2時間以内に、さまざまな地区で火災が発生し、そのようなもので火災が発生した」「ほぼ3日間にわたって怒りが続き、街は完全に荒廃した。地震は聖なる日に起こり、教会や修道院は人でいっぱい、逃げ出した人はほとんどいなかった。」「人々の恐怖は筆舌に尽くしがたいものでした。誰も泣きませんでした。悲劇は涙を超えていました。彼らは恐怖と驚きで錯乱して左右に走り回り、顔と胸を打ちながら叫びました。『慈悲あれ！これこそが慈悲だ』と叫びました。」「世界の終わり！」「母親たちは子供たちを忘れ、十字架を抱えて恐怖のあまり逃げ出した。残念なことに、多くの人が保護を求めて教会に駆け込んだが、無駄だった。秘跡は暴露された。無駄に、哀れな生き物たちは祭壇を抱き、像、司祭、人々は共同の廃墟に埋められた。」

その運命の日に9万人が亡くなったと推定されています。

25年後、預言に記されている次の兆候、つまり太陽と月の暗転が現れましたが、この事実をさらに印象づけたのは、その成就の時期が正確に指定されていたことです。救い主は、オリブ山での弟子たちとの会話の中で、教会の長い試練の期間、つまり1,260年に及ぶ教皇迫害を短縮すると約束したことについて説明した後、ご自身の来臨に先立つ特定の出来事について言及し、その最初の出来事が目撃された時期である。「あの頃、あの苦しみした後、太陽は暗くなり、月は光を与えないだろう。」（マルコ 13:24）。1,260日、つまり1,260年は1798年に終わりました。その四半世紀前に、迫害はほぼ完全に停止していました。キリストの言葉によれば、この2つの日付の間に太陽は暗くなるはずで、1780年5月19日、この預言は成就しました。

「最も神秘的で未だ説明されていない現象としては、この種のほぼ唯一の現象が...1780年5月19日の暗い日に起こりました。ニューイングランドで見える空全体と大気全体を覆い尽くした最も不可解な暗闇です。」暗闇が日食によるものではないことは、月が満月であったという事実から明らかです。暗闇の影響を受けた一部の場所では、空が星が見えるほど澄んでいたので、雲や大気密度によって発生したものではありませんでした。この現象の十分な原因を科学が示すことができないことについて、天文学者のハーシェルは、「北米の暗黒の日、哲学が説明しようとして混乱している自然の素晴らしい現象の一つであった。」と宣言しました。

「闇の広さも素晴らしかったです。最も多く観察されたのは、ニューイングランドの東部地域、西に向かってコネチカット州の最も遠い地域とニューヨーク州アルバニーへ。南では、この現象は海岸全体に沿って観察されました。北にはアメリカ人の入植地が広がる場所まで。黒人はおそらくこれらの制限を超えていましたが、正確な条件は決して明確には知られていませんでした。その持続時間に関して言えば、それはボストン近郊で少なくとも14時間か15時間続いた。」

「朝は晴れていて気持ちよかったです。8時ごろ、太陽に何か異常な現象が観察されました。雲はありませんでしたが、空気は重く、異常な様子をしていました。」

煙っぽく、太陽は淡い黄色を帯びていましたが、すぐにどんどん暗くなり、完全に見えなくなりました。」 「真昼の真夜中の暗闇」がありました。

「この出来事は、すべての創造物に恐怖を与えるだけでなく、多くの人々に激しい警戒と苦痛を引き起こしました。家禽たちは戸惑いながら止まり木へ、鳥たちは巣へ退却した。牛たちは厩舎に戻っていきました。」カエルが鳴き始め、夜鷹が鳴き始めました。鶏たちが夜明けのように鳴きました。農民たちは畑に仕事を残さざるを得なくなりました。すべてのビジネスは停止され、家ではろうそくが灯されました。「コネチカット州議会はハートフォード市で開会中だったが、活動を続けることができなかった。すべてが夜の外観と暗闇を持っていました。」

その日の強烈な暗闇の後に、日暮れの1～2時間前に部分的に晴れた空が現れ、太陽が現れましたが、依然として濃い黒い霧に覆われていました。しかし、この間隔の後に非常に近い暗闇が戻ってきて、夜の前半はおそらく何百万人もの人々が経験したであろう以前の経験を超えてひどく暗くなりました。日没から真夜中まで、月や星からの光線は大気中に侵入しませんでした。これは「すべての闇の中の闇」と呼ばれていました。現場の目撃者はこう語った、「もしあの時、私が想像したのは、もし宇宙のすべての発光体が突き抜けない黒に包まれるか、あるいは存在から取り除かれていたら、暗闇はこれ以上完全なものにはならなかったであろうということだった。」夜は満ちているように見えたが、「墓の影を分散させる効果はまったくなかった。」真夜中を過ぎると暗闇が消え、月が見えるようになったとき、血のような外観になった。

詩人ホイットニアはこの記念すべき日を次のように描写しました。

「それは遠い年の5月のある日のことでした」

落ちた千七百八十人のうち、
春に咲く甘い生活について、
ひんやりとした大地と夜空の上で、
巨大な闇の恐怖
男性は祈り、女性は泣いた
すべての耳が注目していました
破壊のトランペットの響きを聞くために
暗い空を震わせろ。」

1780年5月19日は歴史に「暗黒の日」として記録されている。モーセの時代以来、同じ密度、範囲、期間の暗闇の期間は記録されていません。この詩人と歴史家が述べたこの出来事の説明は、その成就の二千五百年前に預言者ヨエルによって記録された主の言葉のエコーにすぎません。「太陽は闇に変わり、そして月が入ります

主の大いなる恐るべき日が来る前に血を流せ)(ヨエル書2:31)。

キリストは民に、ご自分の降臨のしるしを観察し、来るべき王のしるしを見て喜ぶよう命じておられました。近いよ。"イエスは信者たちに春に咲く木々を指さし、こう言われた、「花が咲くと、それを見れば夏が近づいていることがわかります。ですから、あなた方も、こうした出来事が起こっているのを見ると、神の国が来ていることがわかります。」近い。" (ルカ 21:28,30,31)。

しかし、教会の謙虚さと献身の精神が誇りと形式主義に取って代わられるにつれて、キリストへの愛とキリストの来臨への信仰は冷めていきました。物質主義と快楽の追求に夢中になり、神の民と称した人々は救い主の出現のしるしに関する救い主の指示に盲目になってしまいました。の教義

再臨は無視されていた。それに言及した文書は誤った解釈によって曖昧になり、かなりの程度まで無視され、忘れ去られていました。これは特にアメリカの教会に当てはまりました。社会のあらゆる階級が享受する自由と快適さ。富と贅沢に対する野心的な欲求が、お金を稼ぐことに夢中になるようになる。誰もが手の届く範囲にあると思われる人気と権力を熱心に追い求めるあまり、人々は自分の興味と希望をこの世の事柄に集中させ、現在の秩序が過ぎ去る厳粛な日を非常に遠い将来に置くようになりました。

救い主は再臨のしるしに追隨者の注意を引いたとき、再臨の直前に起こるであろう霊的悪化の状態を予告されました。ノアの時代のように、神と来るべき命を忘れて、世俗的な商売や楽しみの追求、つまり、買ったり、売ったり、植えたり、建てたり、結婚したり、贈与したりする活動や忙しさが存在するでしょう。その時代に生きる人々に対するキリストの戒めは次のとおりである。「暴食と酩酊と人生の煩悩で心が満たされないように、自分に気をつけなさい。その日が思いがけずあなた方に襲いかかることのないように」。「だから、あなたがたは、これから起こるであろうこれらすべてのことを避けて、人の子の御前に立つのにふさわしい者とみなされるように、祈りながら常に目を覚ましていなさい。」（ルカ 21:34 および 36）。

この時の教会の状況は、黙示録に記録されている救い主の言葉「あなたには生きているという名前があるが、あなたには死んでいる」が示されています。そして、不注意な安心感から目覚めることを拒否する人々に対しては、次の厳粛な警告が向けられています。「あなたが見張っていないければ、私は泥棒のようにあなたに襲いかかります。そして私が何時にあなたに襲いかかるかあなたにはわかりません。」（黙示録 3:1 および 3）。

人間は自分たちが逃げようとする危険に目覚める必要があった。裁判の終わりに関連した厳粛な出来事に備える意図を持って立ち上がる。神の預言者はこう宣言しています。「主の日は偉大で、非常に恐ろしい。誰がそれに耐えることができようか。」「目には非常に清いので、悪を見ることができず、憤りを見ることができない者」が立っているとき、誰が立っているのでしょうか？（ヨエル 2:11; ハバ 1:13）。「神様！私たちは…」と叫ぶ人たちに。

私たちはあなたを知っています」と言いながらも、彼らは神の契約を破り、別の神を急いで追いかけて（ホセア 8:2 と 1; 詩 16:4）、心の中に不正を隠し、不義の道を愛してきたのです。主の日は光ではなく闇であり、「明るさのない完全な暗闇」（アモス 5:20）「その時、それは実現する」と主は言われます、「わたしは提灯でエルサレムを捜索し、罰するだろう」「主は善も悪も行われぬ、と心の中で言いながら、自分の糞の上に座っている人たちだ。」（ゼバ1:12）「わたしは世の悪を訪ね、悪人の咎を訪ねる。そして私は勇敢な者の傲慢に終止符を打ち、暴君たちの誇りを打ち倒します。」

（イザヤ 13:11）。「彼らの銀も金も彼らを救うことはできないでしょう。」「彼らの農場は略奪され、家は破壊されるだろう。」（ソフィア 1:18 および 13）。

預言者エレミヤはこの恐ろしい時を予見して、「私は心に傷を負っています！」と叫びました。「私は黙っていられません。おお、私の魂よ、あなたはラッパの音と戦争の騒音を聞いたのです。破壊に次ぐ破壊が宣言されています。」（エレ 4:19 と 20）。

「その日は怒りの日、苦悩と切望の日、騒動と荒廃の日、憂鬱と陰鬱の日、雲と深い闇の日、ラッパと叫び声の日である。」（ソフィア 1:15 および 16）。「見よ、主の日が来る……地を荒廃させ、その罪人を滅ぼすためである。」（イザヤ 13:9）。

この偉大な日を前に、神の言葉は最も厳粛かつ印象的な言葉で、神の民に霊的無気力から目覚め、悔い改めと屈辱をもって神の御顔を求めるよう呼びかけています。「シオンでラッパを吹き、大声で叫びなさい」わが神聖の山の声よ、主の日のために、地上のすべての住民を悩ませなさい

来なさい、彼は近くにいる。」 「断食を神聖なものとし、禁制の日を宣言せよ。人々を集め、会衆を聖化し、長老たちを集め、幼い子供たちを集めてください...花婿を部屋から出させ、花嫁を自分の部屋から出させてください。主の奉仕者である祭司たちは、玄関と祭壇の間で泣きましょう。」

「心を尽くしてわたしに立ち返りなさい。断食と泣きと悲しみとともに。そして衣ではなく心を引き裂き、あなたの神、主に立ち返りなさい。主は慈悲深く、憐れみ深く、怒りに遅い方だから」、そして慈悲に満ちています。」（ヨエル 2:1、15-17、12、13）。

神の日に立つために人々を備えるためには、偉大な改革の働きが行われなければなりません。神は、ご自分の民と告白した人々の多くが永遠に続くものではないことを見て、憐れみをもって彼らを昏迷から目覚めさせ、彼らを導くための警告のメッセージを送ろうとしていました。

彼らの主の到来に備えて。

この警告は黙示録 14 章に記録されています。そこでは、天の存在によって宣言された 3 つのメッセージが表されており、その直後に「地の収穫をもたらすために」人の子の到来が続きます。これらの警告の最初のもは、来たるべき裁きを告げるものです。預言者は天使が「永遠の福音を持って天の真ん中を飛んで、地上に住む者たち、すべての国民、同族、言語の人々、そして人々にそれを宣べ伝え、大声でこう言う、恐れよ」と観想しています。神よ、そして神に栄光を与えてください。神の裁きの時が来たからである。そして天と地と海と泉を造られた方を礼拝しなさい」（黙示録14:6、7）。

このメッセージは「永遠の福音」の一部であると宣言されています。福音を宣べ伝える働きは天使ではなく人間に委ねられました。この作業の指揮には聖なる天使が採用されています。彼らは人類の救いのための大運動を指揮してきました。しかし、福音の本当の宣言は、地上のキリストの僕たちによって行われます。

神の御霊の促しと神の言葉の教えに従順な忠実な人々は、この警告を世界に宣言することになっていました。彼らは、確かな「預言者の言葉」、「夜が明け、明けの明星が現れるまで、暗い所に輝く光」（IIペテロ1:19）に耳を傾けた人々でした。彼らは神を「銀の商品よりも優れており、その収入は純金よりも優れている」（箴言 3:14）と考え、隠されたあらゆる宝よりも神の知識を求めていました。そして主は王国の偉大なことを彼らに明らかにされました。「主の秘密は主を恐れる者たちにあり、主はその契約を彼らに知らせてくださる。」（詩 25:14）。

この真理を理解し、それを宣言することに専念したのは教会の指導者たちではありませんでした。もし彼らが忠実な見張りで、熱心に祈りながら聖書を調べていたなら、夜の時間を知っていたでしょう。預言は、これから起こる出来事を彼らに明らかにしたでしょう。しかし、彼らはその地位を占めず、メッセージは別のクラスによって与えられました。イエスは、「闇に襲われないように、光があるうちに歩きなさい」と言われました。（ヨハネ 12:35）。神が与えてくださった光から背を向けたり、光が手の届くところにあるのにそれを求めようとしない人は、暗闇の中に取り残されてしまいます。しかし救い主はこう宣言されます、「わたしに従う者は暗闇の中を歩むことはなく、命の光を持つであろう。」（ヨハネ 8:12）。シンプルな目的を持って、すでに受け取った光に誠実に注意を向けている人は誰でも、より大きな光を受け取るでしょう。天の輝きのある星がその魂に送られ、それをすべての真実へと導くでしょう。

キリストの初臨の時、神の託宣を託された聖都の祭司や律法学者たちは、時代の兆しを察知し、約束された方の到来を宣言することができたはずでした。ミカの預言は彼の誕生の場所を正確に示していました（ミカ 5:2）。ダニエルは彼の到来の時期を特定しました（ダニエル9:25）。神はこれらの預言をヘブライ人の指導者たちに委ねました。彼らはそうでしょう

メシアの到来が近づいていることを知らなかったり、人々に宣言しなかったとしても、彼らには言い訳の余地はありません。彼らの無知は罪深い怠慢の結果でした。ユダヤ人たちは死んだ預言者たちの記念碑を建て、一方、地上の偉人たちへの敬意からサタンの僕たちに敬意を表していました。彼らは人間の間での地位と支配をめぐる野心的な闘争に夢中になり、天の王によって与えられた神からの栄誉を見失った。

イスラエルの長老たちは、深く敬虔な関心を持って、世界史上最大の出来事、つまり神の御子が人類の救いを達成するために来臨されたときの場所、時期、状況を研究すべきであった。人々は皆、自分たちが世界の救い主を最初に歓迎する一人になれるよう、見守って待っていました。

しかしその後！ベツレヘムでは、ナザレの丘から来た二人の疲れた旅人が、街の東端まで狭い通りを全長にわたって通過しましたが、休憩場所と夜の避難所を探しましたが無駄でした。彼らを歓迎するために開かれたドアはありませんでした。牛のために用意された悲惨な小屋の下で、彼らはついに避難所を見つけ、そこで世界の救い主が生まれました。

天の天使たちは、世界が存在する前に神の子が父と分かち合った栄光を見て、すべての人々にとって計り知れない喜びに満ちた出来事として、神の子が地上に現れることを強い関心を持って望んでいた。

天使たちは、喜びの知らせを、それを受け取る用意ができていない人たちに伝えるよう任命され、喜んでそれを地上の住民に知らせようとしています。

キリストは人間の本性を自ら引き受けることによってご自身をへりくだらせられました。彼は自分の魂を罪の捧げ物とするという無限の不幸の重さに耐えなければなりません。

しかし、天使たちは、たとえ屈辱を与えられたとしても、いと高き御子とその性質にふさわしい威厳と栄光を持って人々の前に現れることを望んだ。

地球上の偉人たちはイスラエルの首都に集まり、神の到来を歓迎するのでしょうか？天使の軍団が待ち望んでいた群衆にイエスを紹介するのでしょうか？

天使が地球を訪れ、誰がイエスを迎える準備ができていないかを確認します。しかし、彼は期待の兆候を区別することができません。メシアの到来の 때가近いという賛美と勝利の声は聞こえません。天使はしばらくの間、選ばれた都市と、何世紀にもわたって神の存在が現れてきた神殿の上に浮かんでいます。しかし、そこでさえ彼は同じ無関心に気づきました。司祭たちは、尊大さと誇りに満ちて、神殿で汚染された犠牲を捧げています。

ファリサイ派の人たちは大声で人々に話しかけたり、街角でおこがましい祈りを捧げたりしています。王宮でも、哲学者の集会でも、ラビの学校でも、人類の救い主が地上に現われようとしているという全天を喜びと賞賛で満たしている素晴らしい事実に、誰もが同様に無関心である。

キリストが期待されているという証拠はなく、命の王子に対する準備は何も行われていません。天の使者は驚きながら、この恥ずべき知らせを持って天に戻ろうとしているとき、夜に羊飼いたちが羊の群れを観察し、星空を眺め、メシアが地上に来るといふ預言について思いを巡らせ、神の到来を待ち望んでいるのを発見した。世界の救い主。

天からのメッセージを受け取る準備ができていないグループがあります。そして突然、主の天使が現れ、大きな喜びの良い知らせを告げます。天の栄光が平原全体に溢れます。無数の多数の天使が現れ、あたかも一人の使者が天から喜びをもたらすにはその喜びが計り知れないほどであるかのように、救われたすべての国々がいつか歌うことになる賛美歌を無数の声が爆発させた。「神に栄光あれ」高み、地上の平和、人々に対する善意。」（ルカ 2:14）。

おお！この素晴らしいベレンの物語がもたらす教訓は何でしょう！それは私たちの不信仰、誇り、自給自足をなんと叱責することでしょう。私たちの犯罪的過失によってそのようなことが起こらないように、彼女は私たちにどれだけ注意するよう忠告しているのでしょうか。

私たちも時代の兆しを見極めることができず、したがって私たちの訪問の日を知りません。

天使たちがメシアの到来を待ち望んでいる人々を見つけたのは、ユダヤの丘や貧しい羊飼いの中だけではありませんでした。異邦人の地にもイエスを待ち望んでいた人たちがいました。彼らは東洋から来た賢明で裕福で高貴な哲学者たちでした。自然の研究者である魔術師たちは、神の働きの中に神を見ました。彼らはヘブライ語聖書からヤコブから現れるはずの星について学び、「イスラエルの慰め」であるだけでなく「異邦人を照らす光」となるであろう彼の到来を熱心に待ち望んでいました。「地の果てまでの救い」(ルカ2:25、32、使徒13:47)。彼らは光の探求者であり、神の御座からの光が彼らの足下を照らしました。任命された守護者であり真理の解説者であるエルサレムの司祭とラビたちが暗闇に包まれている間、天から送られた星が見知らぬ異邦人たちを生まれただけの王の生誕地へと導いた。

キリストが罪を犯さずに二度目に現れるのは、「救いを待ち望む者たち」(ヘブライ人への手紙9:28)です。人々の宗教指導者。

彼らは神とのつながりを保つことができず、天からの光を拒否しました。したがって、彼らは使徒パウロが次のように描写した人々には数えられません。なぜなら、あなた方は皆、光の子であり、日の子だからです。私たちは夜の者でも暗闇の者でもありません」(1テサロニケ5:4,5)。

シオンの城壁の見張りたちは、救い主の到来の知らせを誰よりも早く理解し、救い主の接近を求める最初の声を上げ、救い主の到来に備えることができるように人々に最初に警告すべきであった。しかし、人々が罪の中に眠っている間、彼らは平和と安全を夢見て怠惰でした。イエスはご自分の教会を、大げさな葉で覆われているのに、貴重な実が欠けている不毛のイチジクの木のように見ました。宗教的形式を誇らしげに遵守する一方で、真の謙虚さ、悔い改め、信仰の精神——それだけで奉仕を神に受け入れられるものにする——が欠けていた。御霊の恵みの代わりに、高慢、形式主義、見栄、利己主義、抑圧が現れました。背教した教会は時代の兆しに目を閉ざしました。しかし、神は彼らを見捨てたり、神の忠実さが彼らを裏切ることを許されませんでした。しかし彼らは主から背を向け、主の愛から離れてしまいました。あたかも条件を満たすことを拒否したかのように、彼らに対する神の約束は果たされませんでした。

これは、神が与えてくださる光と特権を無視し、享受しなかったことの結果です。教会が摂理が開いた道をたどり、あらゆる光線を受け入れ、教会に明らかにされたあらゆる義務を果たさない限り、宗教は必然的に形式を遵守するものに墮落し、重要な敬虔の精神は消滅するでしょう。この真実は教会の歴史の中で繰り返し示されてきました。

神は、与えられた祝福と特権に見合った信仰と従順の働きをご自分の民に求めます。従順には犠牲が必要であり、十字架も伴います。そのため、キリストの信奉者であると公言する人々の多くが天国の光を受けることを拒否し、昔のユダヤ人のように、キリストの訪問の時を知りません(ルカ16:30)。

19:44)。彼らの高慢と不信仰のために、主は彼らを脇に置き、ベツレヘムの羊飼いや東方の賢者のように、彼らが受けたすべての光に注意を払った人々に神の真理を明らかにされます。

第18章

アメリカの宗教改革者

聖書の神の権威を疑うように導かれていたが、真実を知りたいと心から望んでいた、名誉ある正直な農夫は、キリストの再臨の宣言を始めるために神によって特別に選ばれた男でした。多くの改革者と同様、ウィリアム・ミラーも人生の早い段階で貧困と闘い、活動と自己否定の偉大な教訓を学びました。彼が属していた家族の人々は、独立心と自由を愛する精神、抵抗力と熱烈な愛国心によって特徴付けられており、これらは彼らの性格においても際立った特徴であった。彼の父親は革命中に陸軍の大尉であり、その苦悩の時代の闘争と苦しみの中で払った犠牲が、ミラーの人生の初期の困難な状況に起因していると考えられます。

ミラーは健康な体格に恵まれ、幼少期からすでに優れた知力を示していた。成長し、発展するにつれて、この寄付はさらに注目に値するものになりました。彼の心は活発でよく発達しており、ミラーは知識に対する鋭い渴望を持っていました。彼は学術教育の恩恵を享受できませんでしたが、学問への愛情と注意深く考える習慣、そして鋭い批判的感覚により、彼は健全な判断力と広い視野を持った人でした。彼は非の打ちどころのない道徳的性格と、うらやましい評判を持っており、その誠実さ、儉約、慈悲深さで一般に尊敬されました。多大なエネルギーと応用力を犠牲にして、彼は当初、学習習慣を維持しながら能力を身につけることができました。ミラーはいくつかの民間および軍の名誉ある役職に就き、富と名誉への道は彼に広く開かれているように見えました。

彼の母親は悪名高い敬虔な女性で、幼少期に彼は宗教的な印象の影響を受けていました。しかし、成人早々に達すると、彼は理神論者と関わるようになりました。理神論者の強い影響力は、彼らが概して善良な国民であり、寛大で慈悲深い気質の人々であるという事実由来しています。キリスト教の制度の真ただ中に住んでいた彼の性格は、ある程度、環境によって形作られていました。彼らの尊敬と信頼を得た良い賜物は聖書の影響によるものでしたが、これらの良い賜物は神の言葉に反するように歪曲されました。これらの人々と関わることで、ミラーは彼らの感情を受け入れるようになりました。当時の聖書の解釈は、彼にとって乗り越えられない困難に思えました。しかし、彼の新しい信念は、聖書を脇に置いて、それに代わるものは何もなく、彼を満足させるものではありませんでした。すべてにもかかわらず、彼は約 12 年間、こうした意見を持ち続けました。

しかし、34歳のとき、聖霊は彼の心に、自分が罪人であるという感覚を植え付けました。彼は以前の信念では、墓を越えても幸福になる保証はないと考えていました。未来は暗く、悲劇的でした。

のちに当時の心境をこう語っている。

「消滅とは冷たく憂鬱な考えであり、責任とはすべての人にとって確実な破滅を意味する。私の頭の上の空は青銅のようであり、私の足の下地は鉄のようだった。永遠、それは何だったのか？そしてなぜ死は存在するのか？考えれば考えるほど解決から遠ざかってしまう。考えれば考えるほど結論が散漫になってしまう。考えるのをやめようとしたが、思考を制御することができなかった。心から感じた

可哀想ですが、理由が分かりませんでした。私は誰とも知らずにつぶやき、愚痴をこぼした。何かが間違っていることはわかっていたのですが、正しいものをどこで、どのように見つけるかはわかりませんでした。残念だったが、希望はなかった。」

ミラーさんはこの状態を数カ月間続けた。「突然、救い主のご性格が私の心に鮮明に印象づけられました。私たちの罪を償い、罪の罰に苦しむことから私たちを救ってくれるほど善良で慈悲深い存在が存在するのではないかと思われました。私はすぐにこの救い主がどれほど親切であるかを感じ、彼の腕の中に身を投げ出して彼の慈悲を信頼できると想像しました。しかし、疑問が生まれました: この存在の存在はどうやって証明できるのでしょうか? 聖書以外に、私は次のことを発見しました。サルバドールも、将来の国家も、そのような証拠は何も得られなかった。

「私は、聖書がまさに私が必要としていた救い主を明らかにしているのを知りました。そして、何のインスピレーションも受けていない本が、どのようにして墮落した世界のニーズに完璧に適合した原則を展開しているのかを知り当惑しました。私は聖書が啓示であるはずだったことを認めざるを得ませんでした」「神からの手紙です。それらは私の喜びとなり、私はイエスのうちに友人を見つけました。救い主は私にとって一人の最初の者となりました。かつては暗く矛盾していた聖書が、今では私の足の灯となり、私の光となりました」魂、道、私の心は落ち着き、満足し、主なる神が命の海の真ん中にある岩であることを発見しました。

聖書が私の主な研究となりました。本当に喜んで聖書を調べたと言えます。半分も話されていないことがわかりました。

私はその美しさと栄光をこれまで見たことがなかったことに驚きました。そしてそれを拒否したことに私は驚きました。その中で明らかにされているものはすべて、私の心が望むものであり、魂のあらゆる弱さに対する治療法であることがわかりました。私は他の本を読む気を失って、神の知恵を得ることに専念しました。」

彼は今、それまで軽蔑していた宗教への信仰を公に告白した。しかし、彼の未信者の仲間たちはすべての議論を思い出すのにそれほど時間はかかりませんでしたし、聖書の神の権威に反してミラー自身が作り出したすべての概念を生み出すのにそれほど時間はかかりませんでした。そのとき彼はそれらに答える準備ができていませんでしたが、もし聖書が神からの啓示であるなら、それはそれ自体と一致しており、人間の指導のために与えられ、したがって人間の理解に適応しているに違いないと推論しました。彼は自分で聖書を研究し、明らかな矛盾を調和させることができないかどうかを調べることにしました。

彼はあらゆる先入観を脇に置き、意見を参考にすることをやめようと努め、節と節を比較し、端的な参考文献や聖書の一致点に助けを求めました。彼は体系的かつ体系的な方法で研究を続けました。創世記から始めて、一節ずつ読み進めたミラーは、多くの文章の意味を明らかにし、すべての困難から解放されるほど速く読み進めました。曖昧な何かを見つけたとき、それを研究対象と何らかの関係があると思われる他のすべてのテキストと比較するのが彼の習慣でした。彼は、それぞれの単語がテキストのテーマと独自の関係を形成することを許可し、文章に対する彼の視点が各並列テキストと調和していれば、問題は解決されました。そのため、理解するのが難しい箇所遭遇すると、その説明が聖書のどこかにあることを発見しました。神の啓示を得ようと熱心に祈りながら勉強するうちに、以前は理解が難しく見えていたことが明らかになりました。彼は、「あなたの御言葉の説明は光を与え、単純な者に理解を与えます。」という詩編作者の言葉の真実を体験しました。(詩 119:130)。

彼は強い興味を持ってダニエル書と黙示録を研究し、聖書の他の部分を調べる際に使用したのと同じ解釈原則を採用しました。

そして、彼は非常に喜んで、預言の象徴が理解できることを発見しました。彼は、預言が成就するかぎり、文字通りにそのとおりであることに気づきました。さまざまな図、比喩、寓話、直喩などはすべて、直接の文脈によって説明されているか、またはそれらが表現されている用語が他の経典で定義されているということ。そしてそのように説明された場合、それらは文字通りに理解されるべきです。「こうして私は、聖書は啓示された真理の体系であり、非常に明確かつ簡潔に提示されているので、旅人はたとえ愚か者であっても、間違ふ必要はないのだと確信した。」真理の連鎖の連鎖が彼の努力に報いました。天の天使たちが彼の心を導き、聖書を理解できるように導いてくれました。

過去に預言が成就した方法を、まだ未来にある預言を分析する基準として採用し、彼は、キリストの霊的王国についての一般的な見方、つまり世の終わりの一時的な千年前が正しいと確信するようになりました。神の言葉によって裏付けられたものではありませんでした。この教義は、主が直接来られるまでの千年間の義と平和を示しており、神の日の恐怖を遠くまで追い払ってくれます。しかし、これは喜ばしいことかもしれませんが、小麦と毒麦は収穫、つまり世の終わりまで一緒に成長しなければならぬと述べたキリストとその使徒たちの教えに反しています（マタイ 13:30,38-41）。); 「邪悪で欺瞞的な人々はますます悪くなるだろう」。「終わりの日には困難な時代が来る」(IIテモテ3:13と1)。そして闇の王国は主の出現まで続き、主の口の霊に蝕まれ、主の来臨の輝きによって滅ぼされるであろう(IIテサロニケ2:8)。

世界の回心とキリストの霊的王国の教義は、使徒教会によって擁護されませんでした。それは18世紀の初め頃までキリスト教徒に一般に受け入れられませんでした。他のすべてのエラーと同様に、結果は陰性でした。それは人々に、非常に遠い将来に主が来られることを期待するように教え、主の接近を知らせるしるしに耳を傾けるのを妨げました。それは十分に根拠のない信頼と安心感を彼らの中に生み出し、多くの人が主との出会いに必要な準備を怠るようになりました。

ミラーは、キリストの文字通りの個人的な到来が聖書の中で完全に教えられていることを発見しました。パウロは、「主ご自身が叫び声と天使のかしらの声と神のラッパの音とともに天から降って来るであろう」と言いました。(Iテサロニケ4:16)。そして救い主はこう宣言されます、「彼らは人の子が力と大いなる栄光をもって天の雲に乗って来るのを見るであろう。」「稲妻が東から来て西に達するように、人の子の到来も同様である。」(マタイ 24:30 および 27)。彼はすべての天の軍勢を伴わなければなりません。「人の子は栄光のうちに来られ、すべての聖なる天使たちも彼とともに来られます。」(マタイ 25:31)「彼は大声でラッパを吹き鳴らしながら天使たちを送り、彼らは彼の選ばれた者たちを集めます。」(マタイ 25:31)マタ 24:31)。

主が再臨される時、義にかなった死者は復活し、義にかなった生者は変えられます。「わたしたちはみな眠っているわけではありません」とパウロは言います、「しかし、最後のラッパが鳴ると、瞬く間にわたしたちはみな変えられるでしょう。ラッパが鳴り響き、死者は朽ちないものとしてよみがえらせられ、わたしたちは変えられるからです」というのは、これが不朽の物を着るなら、それは腐敗するものであり、これは死ぬべきものを不死の物に着せなさい。」(Iコリント 15:51-53)。

そして、テサロニケ人への手紙の中で、主の来臨を説明した後、使徒は次のように述べています。主は空中におられるので、私たちはいつも主とともにいます。」(Iテサロニケ4:16と17)。

神の民は、キリストが個人的に降臨するまでは王国を受けることができません。救い主はこう言われました。「そして、人の子がその栄光のうちに来られ、すべての聖なる天使たちが彼とともに来るとき、彼はその栄光の玉座に座るだろう。そしてすべての国々が彼の前に集められ、彼は一つを分離するであろう。もう一つは、羊飼いが羊をヤギから分けるように、羊を右手に置き、ヤギを左手に置くと、王は右側にいる者たちに言う、「来なさい、わたしの父に祝福された者たちよ」、創世の時からあなたのために用意された王国を受け継ぎなさい。」（マタイ 25:31-34）。すでに引用した聖句から、人の子が来られるとき、死者は朽ちないものによみがえらされ、生者は変えられることが分かりました。この大きな変化によって、彼らは王国を受け入れる備えが整います。パウロが「肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、腐敗は朽ちないものを受け継ぐことはできない。」と言っているからです。（コリント15:50）。人間は現在の状態では死すべき存在であり、腐敗しやすいものですが、神の国は朽ちることなく、永遠に存続します。したがって、人間は今の状態では神の国に入ることができません。しかし、イエスが来られるとき、彼はご自分の民に不死を与えます。そして彼は、それまで彼らが単なる相続人であった王国を所有するように彼らと呼び出すでしょう。

これらおよび他の文書は、宇宙平和の統治や地上における神の統治の確立など、キリストの再臨前に一般的に起こると期待されていた出来事がミラーの心にはっきりと示した。

再臨後に起こるはずです。さらに、時代のあらゆる兆候と世界の状況は、終わりの日の預言的な記述と一致していました。聖書の研究だけから、地球が現在の状態で存続し続けるために定められた期間は終わりに近づいているという結論に達しました。

「私の心に決定的な印象を与えたもう一つの証拠は、聖書の年表でした。私は、起こったと予測されていた出来事があったことを発見しました」とミラーは言う。過去に達成されたものであり、多くの場合、特定の期間内に発生しました。百二十年間の洪水（創世記 6:3）、その前の 7 日間、40 日間の雨が予測されていたこと（創世記 7:4）、アブラハムの子孫の一時的な滞在の 400 年間（創世記 6:3）、15:13）、献酌官長とパン屋長の夢の三日間（創世記 40:12-20）。ファラオの7年間（創世記41:28-54）、荒野での40年間（民数記14:34）、3年半の飢餓（列王上 17:1、ルカ4:25参照）；70年間の捕囚（エレ25:11）、ネブカドネザルの7回（ダニエル4:13-16）、ユダヤ人のために定められた7週間、62週間、そして70週間となる1週間（ダニエル 9:24-27）預言的な事柄であった当時の限定的な出来事は、後に彼らの預言に従って成就しました。」

したがって、彼が聖書の研究の中で、彼の理解によればキリストの再臨にまで及ぶいくつかの年代記の時代を見つけたとき、それらを神が汝らに明らかにした「すでに定められた時代」であると考えざるを得ませんでした。召使いたち。モーセは、「秘密なことは私たちの神、主のためであるが、明らかにされたことは永遠に私たちと私たちの子供たちのためである」（申命記29:29）と言いました。そして主は預言者アモスを通して、「自分のしもべである預言者たちに自分の秘密を明らかにしない限り、彼は何も示さない」と宣言されます（アモス3:7）。したがって、神の言葉を学ぶ人は、真理の聖書に示されているように、人類の歴史の中で最も驚くべき出来事が起こることを自信を持って期待することができます。

「彼は完全に確信していたように、」とミラーは言う、「『聖書はすべて神の靈感によるものである』ということは有益であり、それは決して人間の意志から出たものではなく、聖なる人々が聖霊によって動かされたときに作られたものである（IIペテロ1章）。:21）そして、「私たちの教えのために」、「聖書の忍耐と慰めを通して、私たちが希望を持つことができるように」書かれたものであるため、聖書の年代順の部分は、私たちの真剣な考察に向けられたものとは異なるものと見なされずにはいられません。他の部分

彼女。したがって、神が憐れみをもって私たちに明らかにしようとしたことを理解しようとするとき、私には預言の時代を無視する権利はないと感じました。」

再臨の時期を最も明確に明らかにしていると思われる預言は、ダニエル書 8章14節の「夕と朝が二千三百まで、そして聖所は清められるであろう」という預言でした。ミラーは、聖書を独自の解釈者にするという規則に従って、象徴的預言の1日が1年を表すことを発見しました（民数記 14:34、エゼキエル書 4:6）。預言的な2,300日、または文字通りの年という期間は、ユダヤ人の神権時代の終わりをはるかに超えて延長されるため、その時間はその神権時代の聖域を指すことはできないと考えていました。ミラーは、キリスト教時代には地球は聖域であるという一般に受け入れられている見解に同意し、したがってダニエル書 8章14節で預言されている聖域の浄化は、キリストの再臨の際に火による地球の浄化を表すものであると理解していました。ミラー氏は、2,300日の正しい開始点を見つけることができれば、再臨の時期を簡単に決定できるだろうと結論付けました。このようにして、その大いなる完成の時、「誇りと権力、尊大と虚栄心、邪悪と抑圧をすべて備えた現在の国家が終わりを迎える時…その呪いが国家から取り除かれる時」が明らかになるであろう。地球では、死は滅ぼされ、神の僕、預言者、聖人、そして神の名を恐れる者すべてが報われ、地球を破壊する者たちは滅ぼされるであろう。」

ミラーは新たな、そしてより深い熱意を持って予言の検証を続け、今や彼にとって非常に重要で夢中になれる興味の対象であると思われる事柄の研究に昼も夜も捧げた。ダニエル書 8章ではそうではありません。

2,300日の開始点についての手掛かりは見つかりませんでした。天使ガブリエルは、ダニエルにその幻を理解させるよう命じられていたにもかかわらず、ダニエルに部分的な説明しか与えませんでした。教会に降りかかる恐ろしい迫害が預言者の幻の前に持ち込まれたとき、彼の体力は衰えてしまいました。彼はもうそれに耐えられなくなり、天使はしばらく彼から離れていきました。ダニエルは気を失い、数日間体調が悪かった。「私はそのビジョンに驚きました。そしてそれを理解できる人は誰もいませんでした。」と彼は言いました。

しかし、神はその使者に、「この人に理解できるビジョンを与えなさい」と命じられました。この手数料は満たさなければなりません。彼女に従い、天使はしばらくしてダニエルのところに戻り、こう言いました。「今、私はあなたにその意味を理解してもらうために出てきました。」 「言葉の意味を十分に理解し、ビジョンを理解してください。」（ダニエル 9:22 および 23）。第8章の幻の中で説明されていない点が1つだけありました。それは、時間に関する点、つまり 2,300日の期間についてです。それから天使は説明を再開し、主に時間の主題を強調しました。

「あなたの民とあなたの聖なる都市には70週間が定められています...知って理解してください：エルサレムを回復し建設する命令の発令から、メシアである王子が降臨するまで、7週間と62週間。街路も街路も再建されますが、それは困難な時です。そして62週間後にメシアは連れ去られ、もういなくなりま...そして彼は多くの人々と1週間の契約を結びます。週の半ばに彼はいけにえと食事の捧げ物をさげます。」

(ダニエル 9:24-27)。

天使がダニエルに遣わされたのは、第8章の幻の中で彼が理解できなかった点、つまり時間に関する次の記述を説明するという明確な目的がありました。預言者ダニエルに「そのことを熟考し、幻を理解する」よう勧めた後、天使の最初の言葉は、「あなたの民とあなたの聖なる都市には70週間が定められている」でした。ここで「決意した」と訳されている言葉は、文字通りには「切り離される」あるいは「分離される」という意味です。490年を表す70週間は、特にユダヤ人に属するものとして区別されると天使は主張します。しかし、何から離れているのでしょうか？

第 8 章で言及されているのは、2,300 日だけであるため、2,300 日は 70 週間を区切る期間に違いありません。したがって、70 週間は 2,300 日の一部を形成する必要があり、2 つの期間は同時に開始する必要があります。天使は、エルサレムを修復し建設する命令が出されてから 70 週間とするべきであると宣言しました。この命令の日付が判明すれば、2,300 日の期間の開始点が判明することになります。

エズラ記 7 章にその布告が記録されています (エズラ記 7:12-26)。最も完全な形では、紀元前 457 年にペルシャの王アルタクセルクセスによって発布されましたが、エズラ記 6 章 14 節では、エルサレムの主の家は「キュロスの命令[または法令]に従って」建てられたと述べられています。、ダリウスとペルシャ王アルタクセルクセスの。」これら 3 人の王は、この法令を発起し、確認し、完成させることによって、2,300 年の始まりを示す預言の要求どおりにこの法令を完成させました。この命令が完成した紀元前 457 年を命令の日付とすると、預言の仕様全体が完全に成就したように見えます。

「エルサレムを回復し建設せよという戒めが発せられてから、メシア王子が降臨するまで、七週間と六十二週間——つまり、六十九週間、つまり四八三年である。アルタクセルクセスの布告は紀元前 457 年の秋に発効し、その日から西暦 27 年の秋まで 483 年間かかりました。この時点でこの預言は成就しました。「メシア」という言葉は「油注がれた者」を意味します。西暦 27 年の秋、キリストは洗礼者ヨハネから洗礼を受け、聖霊の油注ぎを受けました。使徒ペテロは、「神はナザレのイエスに聖霊と力を注がれた」と証言しています。

(使徒 10:38)。そして救い主ご自身がこう宣言されました、「主の御霊が私の上にあります。貧しい人たちに良いたよりを宣べ伝えるために主が私に油を注がれたからです。」 (ルカ 4:18)。バプテスマの後、イエスはガリラヤに行き、「神の国の福音を宣べ伝え、『時は満ちた』と言われました」。(マルコ 1:14 と 15)。

「そして彼は多くの人々と一週間の契約を結ぶだろう。」ここで言う「週」は 70 週のうちの最後の週です。これらは、特にユダヤ人のために指定された期間の最後の 7 年間です。西暦 27 年から 34 年まで続いたこの期間中、キリストは、最初は直接、次に弟子たちを通して、特にユダヤ人に福音の招きを差し伸べました。使徒たちが王国の良いたよりを持って去ったとき、救い主の指示は次のとおりでした。「民の道に入ってはならず、サマリア人の町にも入ってはならない。イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい。」 (マタイ 10:5 と 6)。

「週の半ばに彼はいけにえを捧げ、肉の捧げ物をやめるでしょう。」バプテスマを受けてから 3 年半後の西暦 31 年に、私たちの主は十字架につけられました。イエスは、カルバリで捧げられた大いなる犠牲によって、4,000 年間にわたって神の小羊を指し示してきた捧げ物の制度に終止符を打たれました。型が型と一致し、儀式制度におけるあらゆる犠牲と奉納が停止した。

ユダヤ人に特別に与えられた 70 週間、つまり 490 年間は、これまで見てきたように、西暦 34 年に終わりました。当時、ユダヤ教のサンヘドリンの行為により、ユダヤ人はステパノの殉教の結果として福音の拒否を封印しました。そしてキリストの追隨者に対する迫害。このようにして、救いのメッセージは、もはや選ばれた人々に限定されるものではなく、世界に与えられたのです。迫害によってエルサレムからの逃亡を余儀なくされた弟子たちは、「どこへでも行って御言葉を宣べ伝えた」のです。

「フィリポはサマリアの町に下りて、彼らにキリストを宣べ伝えた。」 (使徒 8:5)。ペテロは神の導きを受けて、神を畏れる人であったカイサリアの百人隊長コルネリオに福音を伝えました。そして熱心なパウロはキリスト教の信仰に勝ち取り、遠くから異邦人に喜びの知らせを伝える任務を与えられました (使徒 8:4,5,22:21)。

これまでのところ、預言のあらゆる仕様は厳密に成就されており、紀元前 457 年にあらゆる議論を超えて 70 週間の始まりが確立されました。

西暦 34 年に終わる これらのデータに基づいて、2,300 日の終わりをを見つけるのは難しくありません。2,300日から70週間または490日を分けると、まだ1,810日が残っています。490 日が終わっても、まだ 1,810 日を完了する必要があります。私たちの時代の 34 年から、1,810 年は 1844 年まで延長されます。

その結果、ダニエル 8章14節の2,300日は1844年に終わりました。この偉大な預言期間の終わりに、神の天使の証言によれば、「聖所は清められる」とあります。こうして、聖所の清めの時期は、キリストの再臨の時に起こるとほぼ広く信じられていたが、決定的に定められた。

ミラーと彼の仲間たちは当初、2,300日は1844年の春に終わると信じていたが、予言はその年の秋を示していた。この点の誤解は、最初の日付を主の再臨の時と決めつけていた人々に失望と当惑をもたらしました。しかし、このことは、2,300 日が 1844 年に終わり、聖域の浄化に代表される偉大な出来事がある後に起こるべきであるという主張の強さにまったく影響を与えませんでした。

聖書が神の啓示であることを証明する目的で聖書の研究に専念していたミラーは、当初、自分が到達した結論に達することなどまったく期待していませんでした。彼自身、自分の調査結果を信用することはほとんどできませんでした。しかし、聖書の証拠は脇に置くにはあまりにも明白で強力でした。

彼はすでに 2 年間に聖書の研究に費やしていましたが、1818 年に、約 25 年以内にキリストが民の救いのために現れるだろうという厳粛な結論に達しました。ミラーはそれを次のように表現しました：「楽しい見通しで私の心を満たした喜びや、救われた人々の喜びに参加したいという私の魂の熱烈な願いについては、言う必要はありません。当時、聖書は私のためのものでした。」、新しい本でした。それは、まさに、理性の饗宴です。私にとって、その教えの中で不明瞭で、神秘的で、漠然としていたことはすべて、その神聖なページから今輝いている澄んだ光の前に、私の心から払拭されました。、ああ！、真理はなんと明るく輝かしいものに私には見えたのでしょうか！私がそれまでみことばの中で見つけていたすべての矛盾や不一致は消え去り、まだ満足のいく理解が得られていない部分もたくさんありましたが、それでもとても光が見えてきました。それは私の以前の暗い心を照らしてくれるものでした。私は聖書を学ぶことに喜びを感じました。その満足感は、聖書の教えから得られるとはかつて考えもしなかったものでした。」

「聖書の中で予告されているこれらの重要な出来事が間もなく実現するという厳粛な確信とともに、私自身の心に影響を与えた証拠を考慮して、世界に対する私の義務に関する大きな疑問が私の前に湧き上がりました。」ミラー彼は、自分が受けた光を他の人たちと分かち合うことが自分の義務であると感じずにはいられませんでした。邪悪な人々からの反対に遭うことは予想していましたが、クリスチャンは皆、自分たちが告白した救い主に会えるという希望を持って喜ぶだろうと信じていました。彼が唯一恐れていたのは、輝かしい救出が間もなく起こるという見通しに大喜びするあまり、多くの人がその教義の真実の証拠として聖書を十分に調べもせずにその教義を受け入れることだった。

したがって、彼はそれが間違いであり、他の人を誤った方向に導く手段となることを恐れて、それを提示することを躊躇しました。こうして彼は、到達した結論を裏付ける証拠を検討し、頭に浮かんだすべての困難を注意深く検討するようになりました。彼は、太陽の光の前の霧のように、神の言葉の光の前では反対意見が消えてしまうことに気づき、このようにして 5 年間に過ぎた結果、自分の意見の正しさを完全に確信するようになりました。

そして今、聖書の中ではっきりと教えられていると信じていることを他の人に知らせるといふ義務が、新たな力で彼に迫った。ミラーさんは、「自分の仕事について話しているとき、『行って世界に危機が迫っていることを伝えなさい』という言葉がずっと耳の中で鳴り響いていた」と告白した。私がいつも心に留めていた言葉は次のようなものだった：「もし私が悪人たちに『おお、悪人よ、あなたは必ず死ぬでしょう。そしてあなたが悪人を道から遠ざけるように話さないなら、その悪人は咎で死ぬでしょう。しかし、私はあなたの手から彼の血を要求します。しかし、あなたが邪悪な者たちをその道から遠ざけるように言ったのに、彼がその道から背を向けなかったとき、彼は咎で死ぬでしょう、しかしあなたはあなたのものを救い出しました。魂。』（エゼキエル 33:8、9）もし悪者たちに効果的に警告することができれば、多くの人が悔い改めるだろうし、警告されなければ彼らの血が私の手に要求されるかもしれないと私は感じました。」

彼は機会が訪れたとき、自分の意見を個人的に発表し始め、誰か牧師が彼らの力を感じてその普及に専念してくれるように祈りました。しかしミラー氏は、警告を発することは個人として果たすべき義務であるという信念を払拭することはできなかった。「行って、このことを世界に伝えなさい。私は彼らの血をあなたの手で要求します。」という言葉が常に彼の心の中で鳴り響いていました。彼は、1831年に初めて自分の信仰の理由を公に語るまで、魂に重荷を押しつけながら9年間待ちました。

エリシャが牛を連れて畑を耕していたときに、預言者の職への聖別の外套を受けるために召されたのと同じように、ウィリアム・ミラーもまた、鋤を離れて神の国の奥義を理解できるよう明らかにするよう招かれました。人々の彼は恐れを抱きながら仕事を始め、キリストの再臨までの預言の期間を段階的に聞き手を導きました。自分の言葉が大きな関心を引き起こしているのを見て、努力するたびに彼は力と勇気を獲得していった。

ミラーが自分の意見を公の場で発表することに同意したのは、兄弟たちの言葉に神の呼びかけを聞いたからだ。

当時彼は50歳で、人前で話すことに慣れていませんでした。

彼は目の前の仕事に自分が無能であるという感覚に打ちのめされた。しかし、魂の救いのための彼の働きは最初から驚くべき形で祝福されました。彼の最初の会議に続いて宗教的目覚めが起こり、2人を除いて30家族全員が改宗した。彼はすぐに他の場所で話すことを確信し、ほとんどどこでも彼の働きは神の働きの復活をもたらしました。罪人は回心し、キリスト教徒はより大きな奉獻に目覚め、理神論者と不信者は聖書とキリスト教の真実を認識しました。彼が働いた人々の証言は、「彼は他の人々の影響下でない層の人々に到達した」というものだった。彼の説教は、世論を宗教という偉大なテーマに目覚めさせ、当時の増大する世俗性と官能性を抑制するために計算されたものでした。

ほとんどすべての都市で、彼の説教の結果、何百人もの改宗者が現れました。多くの場所で、ほぼすべての宗派のプロテスタント教会が彼に門戸を開き、仕事への招待は通常、さまざまな会衆の牧師から来ました。ミラーは、招待されていない場所では仕事をしないことを不変の規則とした。しかし、彼はすぐに、自分に寄せられた要求の半分を満たすことが不可能であることに気づきました。

再臨の正確な時期に関する彼の見解を受け入れなかった人の多くは、キリストの到来が確実で近いこと、また準備が必要であることを確信していました。一部の大都市では、彼の作品は顕著な印象を残しました。飲料販売者は商売を放棄し、店舗を会議室に変えました。賭博場は閉鎖された。

不信者、理神論者、普遍主義者、そして最も自由主義者たちが変容し、そのうちの何人かは

何年も礼拝の家に入っていなかった人たちはです。祈禱会は、さまざまな地域でさまざまな宗派によって、ほぼ一日中毎時間開催されました。ビジネスマンたちは正午に祈りと賛美のために集まりました。奇妙な興奮はなく、人々の心にはほぼ普遍的な厳粛さがあった。彼の作品は、初期の改革者たちの作品と同様、単に感情を刺激するというよりはむしろ理解を説得し、良心を目覚めさせる傾向がありました。

1833年、ミラーは所属していたバプテスト教会から説教の免許を取得した。彼の宗派の多くの牧師も彼の働きを認めました。そして、この正式な承認を得て、彼は仕事を続けました。

彼は絶え間なく旅をし、説教をしましたが、個人的な活動は主にニューイングランドと中部諸州に限られていました。長年にわたり、彼の費用はすべて彼自身の資金で賄われていました。その後、彼は招待された場所への旅費を賄うのに十分な額を受け取ることはなかった。したがって、彼の公共事業は金銭的利益とは程遠く、彼の財産にとって大きな負担となり、それは彼の生涯のこの時期に徐々に減少していった。ミラーには大家族がいた。しかし、そこにいる人は皆経済的で勤勉だったので、彼の農場は皆を養うのに十分でした。

ミラーがキリストの再臨を示す証拠を公に示し始めてから2年後の1833年、救い主が再臨を示すものとして約束していた最後のしるしが現れた。イエスは「星が空から降ってくるだろう」と言われました。（マタイ 24:29）。そしてヨハネは黙示録の中で、神の日を告げる場面を幻の中で観想しながら、「そして、イチジクの木が強風に揺さぶられて未熟なイチジクを投げ出すときのように、天の星が地上に落ちた」と宣言した。

（黙示録6:13）。この予言は、1833年11月13日の大隕石群で見事に成就しました。これは、これまでに記録された中で最も大規模で素晴らしい流れ星の出現でした。「米上空全体が何時間も激しく騒ぎ立てた。植民地化の初期段階以来、ある階級からこれほど賞賛の目で見られ、別の階級からはこれほど恐れや警戒の目で見られるような天体現象は、この国では一度も発生したことがない。」「その崇高さと恐るべき美しさは今でも多くの心の中に残っています...地球に向かって落ちる流星ほど激しい雨はありませんでした。東も西も北も南も、すべてが同じでした。」

一言で言えば、空全体が動いているように見えました。シリマンは北アメリカ全土で見られました...午後2時から白昼まで、空は完全に穏やかで雲一つなく、大空全体にまばゆい光の絶え間ない遊びが続いていました。」

「その壮大なプレゼンテーションの素晴らしさを真に表現できる言語はありません...それを目撃したことのない人は、その栄光を十分に理解することはできません。あたかも星空全体が天頂近くの一点に集まっているかのようでした。星々は電光石火の速さで地平線の隅々まで同時に放出されましたが、それでも尽きることはありませんでした。

まるでこの機会のために作られたかのように、数千人がすぐに続いた。」

「強力な強風に吹かれてイチジクの木が実を放つ様子をこれ以上正確に思い描くことは不可能でしょう。」

この光景の翌日、ヘンリー・ダナ・ウォードはこの驚くべき現象を次のように述べています。1800年前、ある預言者はそれを正確に予言した——それが文字通り真実であることが可能な唯一の意味において、流れ星が流れ星を意味するものとして理解することに困難がなければの話だ。」

このようにして、神の到来の最後のしるしが知られるようになり、それに関してイエスは弟子たちに次のように宣言されました。（マタイ 24:33）。これらのしるしの後、ヨハネは次の大きな差し迫った出来事を見た。天は羊皮紙のように丸まり、地は揺り動かされ、山や島々はその場所から取り除かれ、悪者たちは恐怖に捕らわれ、神の前から逃げようとした。人の子。

星の落下を目撃した多くの人は、それを来るべき裁きの前触れ、つまり「恐るべき型、確実な前触れ、偉大にして恐るべき日の慈悲深いしるし」とみなした。このようにして、人々の注意は預言の成就に向けられ、多くの人が再臨の警告に注意を払うようになりました。

1840年には、別の注目すべき預言の成就が一般の関心を集めました。2年前、再臨者を説いている主要な牧師の一人であるジョサイア・リッチは、黙示録9章の解説を発表し、オスマン帝国の崩壊を予測し、年だけでなくそれが起こる正確な日を特定しました。彼の説明によれば、それは単に聖書の預言期間を計算するだけの問題であり、トルコ政府は1840年8月11日に独立を放棄することになるというものでした。この予言は広く公表され、何千人もの人々が強い関心を持って事の成り行きを見守りました。

指定された時期に、トルコは大使を通じてヨーロッパの同盟国の保護を受け入れ、自らをキリスト教諸国の管理下に置いた。その出来事はまさに予言を成就した。このことが知られるようになると、多くの人々がミラーとその仲間たちが採用した預言解釈の原則の正しさを確信し、待降節運動に素晴らしい勢いが与えられました。知識と地位のある人々は、説教と彼の見解の出版の両方においてミラーと団結し、1840年から1844年にかけてその活動は急速に広がりました。

ギリエルム・ミラーは、熟考と研究によって訓練された優れた知的能力を持っていました。これらの能力に、彼は天の知恵を加え、自らを知恵の源と一体化させました。ミラーは非常に価値のある人物であり、人格の誠実さと道徳的卓越性が考慮される限り、常に尊敬と尊敬を集めていました。

真の優しさとキリスト教的な謙虚さと自制力を兼ね備えた彼は、誰に対しても心配りがあり愛想がよく、他の人の意見に耳を傾け、議論を検討する準備ができていました。彼は情熱も興奮もなく、すべての理論と教義を神の言葉によって証明しました。彼の確かな推論と聖書に関する深い知識により、彼は誤りを論破し、虚偽を暴露することができました。

しかし、彼は激しい反対なしに仕事を遂行したわけではありません。初期の宗教改革者と同様に、彼が提示した真理は人気のある宗教教師には好意的に受け入れられませんでした。彼らは聖書を通じて自分たちの立場を支持できなかったため、人々や教父たちの伝統からの引用や教義を使用せざるを得ませんでした。しかし、神の言葉は、再臨の真実について説教者によって受け入れられた唯一の証言でした。「聖書、そして聖書だけ」が彼の合言葉だった。反対派の側に聖書に基づく議論の欠如は、嘲笑と嘲笑によって補われました。主の再臨を喜んで待ち望み、聖なる生活に努め、他の人たちに主の出現に備えるよう勧めることだけが唯一の罪である人々を中傷することに、時間、手段、才能が費やされた。

人々の心を再臨の問題からそらすために熱心な努力が払われました。キリストの到来と世の終わりに関する預言を研究することは、人間にとって恥ずべき罪であるかのように思われていました。このようにして、民衆の奉仕活動は神の言葉への信仰を弱体化させようとしたのです。あなたの教え

それは人々を不信者にし、多くの人が自分の不敬虔な欲望に従って行動する権利があると感じました。そこで著者たちは、このすべての悪はアドベンチストのせいだと考えました。

注意深く聡明な聴衆の家でミラーの名前が取り上げられることはあったが、告発と嘲笑の目的を除いて、宗教報道機関によってミラーの名前が言及されることはほとんどなかった。不注意で不敬な人々は、宗教教師の立場に煽られて、彼と彼の仕事をさらに攻撃しようとして、中傷的な表現、冒瀆的で下品な冗談に訴えました。快適な家を出て、自費で都市から都市へ、村から村へ旅をし、来たるべき裁きの厳粛な警告を世界に伝えるために絶え間なく働いていた白髪の男は、偏屈者、嘘つきとしてひどく非難された。、そして悪党。

彼に降り積もった嘲笑、虚偽、侮辱は、世俗的な報道機関からも憤慨する抗議を引き起こした。このような途方もない威厳と悲惨な結果をもたらす主題を軽妙かつ冷笑的に扱うことは、世の人々によって、単にその擁護者たちの感情を面白がるためではなく、「裁きの日を嘲笑し、神ご自身を嘲笑することである」と宣言された。そして彼の宮廷の恐怖を嘲笑するためだ。」

あらゆる悪を扇動した者は、降臨のメッセージの効果を打ち消すだけでなく、その使者自身を滅ぼそうとした。ミラーは聖書の真理を聞く人の心に実際に適用し、彼らの罪を叱責し、彼らの自己満足を妨げました。彼の明確で鋭い言葉は敵意を引き起こした。彼のメッセージに対して教会員が表明した反対は、下層階級がさらに前進することを奨励しました。彼が集会場から立ち去ったとき、敵たちは彼の命を奪おうと共謀した。しかし、神の天使たちが群衆の中において、そのうちの一人が人間の姿をして、この主の僕の腕を取り、怒っている群衆から安全に彼を連れ去りました。彼の働きはまだ終わっていなかったため、サタンとその使者たちは計画の失敗に失望しました。

あらゆる反対にもかかわらず、アドベンチスト運動への関心は高まり続けました。会衆は数十、数百から何千にも成長しました。さまざまな教会へのアクセスは良好でしたが、しばらくすると、これらの改宗者に対する反対の精神が現れ、教会はミラーの見解を受け入れた人々に対して懲戒処分を開始しました。この行動は、あらゆる宗派のキリスト教徒に宛てて彼のペンからの反応を引き起こし、もし彼らの教義が偽りであるなら、その間違いを聖書によって示すよう要求した。

「あなた方ご自身も信仰と実践の規則であり、唯一の規則であると認めている神の御言葉によって命じられていないことを、私たちは何を信じてきたのでしょうか？これほど激しい非難を引き起こすようなことを私たちは何をしたのでしょうか？」私たちが説教壇やマスコミからそんなに排除して、私たち[アドベンチスト]をあなたの教会や交わりから排除する正当な理由をあなたに与えたのですか？」「私たちが間違っているのなら、私たちの間違いが何であるかを示してください。私たちが間違っていることを神の御言葉から示してください。私たちは十分に嘲笑されてきました。それで私たちが間違っていることを決して納得させることはできません。」神の言葉だけが私たちの見方を変えることができます。

私たちの結論は、聖書にその証拠を見たので、熟考と祈りによって導き出されました。」

いつの時代でも、神がその僕たちを通して世界に送った警告は、同様の不信と不信仰に遭ってきました。古代の人々の咎によって主が地上に洪水を起こさざるを得なかったとき、主はまず彼らにその邪悪な道から立ち返る機会を与えるためにご自身の目的を彼らに知らせました。120年間、神の怒りが必ず現れるという罰の下で、悔い改めを求める警告がその世代の耳に鳴り響きました。

彼らを破壊するために。しかし、彼らにとってそのメッセージは無駄話のように思え、彼らはそれを信じませんでした。自分たちの不敬虔さに勇気づけられて、彼らは神の使者を嘲笑し、彼の嘆願を軽視し、さらには傲慢であると非難した。地球上のすべての偉人たちに対して、どうして人間が立ち上がることができるのでしょうか？ノアのメッセージが真実なら、なぜ全世界がそれを見て信じなかったのでしょうか？何千もの人の知恵に対する一人の人の言葉！彼らは警告を信じたくなかったし、避難も求めなかった

箱舟の中。

あざける者たちは、絶え間なく続く季節、一度も雨が降らなかった青い空、優しい夜露で爽やかになった緑豊かな野原など、自然のものを指して、「彼はたとえ話で話さないのですか？」と叫んだ。

彼らは、正義の説教者は狂った熱狂者であると嘲笑的に宣言した。そして彼らはこれまで以上に熱心に快楽を求め続け、これまで以上に邪悪なやり方に決意を新たにしました。しかし、彼らの不信仰は預言された出来事を妨げませんでした。神は彼らの不敬虔に長い間耐え、彼らに悔い改めの機会を十分に与えました。しかし定めの際に、主の裁きが主の憐れみを拒んだ者たちに下されました。

キリストは、彼の再臨に関しても同様の不信仰が存在すると宣言しています。ノアの時代の人々はノアのことを知りませんでした。しかし、「洪水が来て皆を連れ去ってしまうまでは」、私たちの救い主の言葉を借りれば「人の子の到来」（マタイ 24:39）が起こるでしょう。神の民と称する人々が世界と団結し、世界の人々と同じように生き、禁じられた快楽の中で彼らと団結するとき、世界の贅沢が教会の贅沢になるとき、結婚の鐘が鳴り響き、誰もが何年にもわたる世俗的な繁栄を期待して未来に目を向けているとき、突然、天からの稲妻のように、彼らの明るいビジョンと欺瞞的な希望の終わりが訪れるでしょう。

神は、来たるべき洪水について世界に警告するようそのしもべに命じたのと同じように、最後の審判が近いことを知らせるために選ばれた使者を送りました。そして、ノアの同時代人たちが正義の説教者の予言をあざ笑うように笑ったように、ミラーの時代には、神を公言する人々の中でも多くの人が警告の言葉を嘲笑した。

そして、なぜキリストの再臨に関する教義と説教は教会にそれほど受け入れられなかったのでしょうか？主の出現は悪人にとっては悲惨と荒廃をもたらしますが、義人にとっては喜びと希望に満たされます。この偉大な真理は、あらゆる時代を通じて神の忠実な人々の慰めとなってきました。なぜ彼女は、著者と同じように、主の自称民にとって「つまずきの石であり、攻撃の岩」となったのでしょうか？

「わたしが行ってあなたたちのために場所を用意すれば、また来てあなたたちをわたしのもとに連れて行きます。」と弟子たちに約束されたのは私たちの主御自身です。（ヨハネ 14:3）。慈悲深い救い主は、追隨者の孤独と悲しみを予期して、天使たちに彼らを慰め、天に昇られたときと同じように直接再び来られるという保証を与えました。彼らが愛するイエスの最後の場面をもう一度捉えようとして、彼らの注意は次の言葉に引き寄せられました。彼が天国に行くのを見ました。（使徒 1:11）。天使のメッセージによって希望が再び燃え上がりました。弟子たちは「大いに喜んでエルサレムに帰りました。そしていつも神殿にいて、神を賛美し、祝福していました」（ルカ24:52,53）。彼らが喜んだのは、イエスが自分たちから離れ、世の試練や誘惑と格闘することになったからではなく、イエスが再び来られるという天使からの保証のおかげでした。

キリストの再臨の宣言は、今、天使たちによってベツレヘムの羊飼いたちに告げられたときと同じように、大きな喜びに満ちた良い知らせでなければなりません。という人は

救い主を心から愛しているのに、永遠の命の希望の中心にある主が再び来られるという、神の御言葉の中に見出される発表を、喜びをもって歓迎せずにはられません。主の最初の降臨のときのように、侮辱され、軽蔑され、拒絶されるためではありません。しかし、神の民を救い出す力と栄光が備わっています。救い主を愛していない人たちは、救い主が来ないことを望んでいます。そして、この天から送られたメッセージによって引き起こされた苛立ちと敵意以上に、教会が神から背を向けたことを示す決定的な証拠はありません。

待降節の教義を受け入れた人々は、神の前での悔い改めと屈辱の必要性に目覚めました。多くの人はキリストとこの世の間で長い間迷っていました。今、彼らは立ち上がる時が来たことを理解しました。永遠のものは彼らにとって異常な現実を帯びました。天国は近づいていたので、彼らは神の前に罪悪感を感じました。クリスチャンは新しい霊的生活に目覚めました。彼らは時間が短く、仲間のためにしなければならないことを早く達成しなければならないと感じていました。地球は後退し、永遠が彼らの前に開かれたように見えました。そして魂は、その永遠の幸福や不幸に関係するあらゆるものとともに、あらゆる世俗的な目的が影を潜めつつあると感じた。神の御霊が彼らの上に留まり、兄弟たちと罪人たちに神の日に備えるよう熱心に呼びかける力を与えました。彼の日常生活に関する沈黙の証言は、正式な、奉獻されていない教会員に対する絶え間ない叱責でした。彼らは、快楽の追求、利益への献身、世俗的な名誉への野心を邪魔されることを望みませんでした。このため、アドベンチストの信仰とそれを宣言した人々に対して敵意と反対が生じました。

預言の時代に関する議論が反駁できないことが判明すると、反対派は預言は封印されていると教えて、この問題の調査を阻止しようと努めた。このようにして、プロテスタントはローマ主義者の足跡をたどりました。教皇教会は人々が聖書を持つことを妨げたが、プロテスタント教会は、聖書の重要な部分、つまり現代に特に当てはまる真理を提示する部分は理解できないという考えを擁護した。

大臣や人々は、ダニエル書と黙示録の預言は理解できない神秘であると宣言しました。しかしキリストは、弟子たちの時代に起こる出来事に関する預言者ダニエルの言葉に注意を向けさせ、「読む者は、理解させなさい」と言われました。（マタイ 24:15）。そして、黙示録は理解できない神秘であるという主張は、本のタイトル自体によって矛盾しています。「イエス・キリストの啓示。間もなく起こるはずの事柄を神のしもべたちに示すために神が与えたもの... うーん、この預言を読む者と、この預言の言葉を聞いてそこに書かれていることを守る者は幸いである、その時は近づいているからである。」（黙示録 1:1-3）。

預言者はこう言います。「読書する者は幸いである。」読まない人もいます。祝福はこれらの人々にはありません。「そしてそれを聞く人たち。」預言に関して何も聞こうとしない人々もいます。祝福はその階級にはありません。「そして彼らはそこに書かれたことを保管しています。」多くの人は黙示録に含まれている警告や指示に従うことを拒否します。これらのどれも、約束された祝福を要求することはできません。預言の対象を嘲笑し、そこに厳粛に示されている象徴を嘲笑する者たち。生活を改革して人の子の到来に備えることを拒否する人は皆、祝福されません。

靈感の証言を前にして、黙示録は人知の及ばない神秘であるとして人が教えられませんか？彼は明らかにされた謎であり、開かれた本です。黙示録の研究は心を次のことに向けます。

これらはダニエルの預言であり、どちらも神が人間に与えた最も重要な指示と、この世界の歴史の終わりに起こる出来事に関するものです。

ジョンは、教会での経験に深く刺激的な興味を示す場面を見せられました。彼は神の民の立場、危険、葛藤、そして最終的な救出を目の当たりにしました。彼は、天の納屋の束として、あるいは破壊の火の束として、地球の収穫を熟すための最後のメッセージを記録します。特に後者の教会にとって、非常に重要な事柄が彼に明らかにされたのは、誤りから真実へと向かう人々が直面するであろう危険と葛藤に関して教えられるためであった。地球にこれから何が起こるかについて、誰も闇の中にいる必要はありません。

では、なぜ聖典の重要な部分に関してこのような無知が広まっているのでしょうか？彼の教えを調べることに一般的に消極的なのはなぜでしょうか？これは、闇の王子が人間の間違いを明らかに示すものを人々から隠そうとする、研究された努力の結果です。このため、啓示者であるキリストは、黙示録の研究に対して繰り広げられるであろう闘争を予期し、預言の言葉を読み、聞き、観察するすべての人に祝福を宣言されました。

第19章

暗闇を通る光

地球上の神の働きは、何世紀にもわたって、それぞれの偉大な改革や宗教運動において驚くべき類似性を示しています。人間に対する神の取り扱いの原則は常に同じです。現在の重要な動きは過去の動きと平行しており、初期の教会の経験には現代にとって非常に価値のある教訓が含まれています。

聖書の中で、救いの業を前進させる大いなる運動の中で、神が聖霊によって特に地上の神の僕たちに指示する真理以上に明確に教えられている真理はない。人間は神の御手の中にある道具であり、神の恵みと憐れみの目的を達成するために神によって用いられています。誰もが自分の役割を果たします。各人には、その時代のニーズに適合し、神が彼に与えた仕事を実行するのに十分な量の光が与えられます。しかし、天から栄誉を受けても、偉大な救いの計画を完全に理解した人はいないし、自分の時代に任命された働きにおける神の目的を完全に理解した人もいない。あなた

人間は、神が彼らに与えた働きを通して何を達成したいのかを完全には理解していません。彼らは神の名において宣言するメッセージをあらゆる角度から理解することができません。

「あなたは神の道を得るのでしょうか、それとも全能者の完全さに到達するのでしょうか？」 「私の考えはあなたの考えではなく、あなたの道は私の道ではない、と主は言われます。天が地より高いように、私の道はあなたの道よりも高く、私の考えはあなたの考えよりも大きいからです。」 「わたしは神であり、他に神はなく、初めから終わりを宣言し、まだ実現していないことを太古の昔から宣言するわたしのような神はいない。」 (ヨブ記 11:7; イザヤ書 55:8 と 9; 46:9 と 10)。

御霊の特別な啓示の恩恵を受けた預言者でさえ、彼らに託された啓示の意味を完全には理解していませんでした。その意味は、時間が経つにつれて明らかになるはずであり、神の民はそこに含まれる指示を必要とします。

ペテロは、福音によって明らかにされた救いについて次のように書いています。「あなたがたに与えられた恵みについて預言した預言者たちは、その救いについて、いつ、あるいはどのような機会に聖霊が降ったのかを熱心に尋ね、それを取り上げました。」 「彼らのうちにおられたキリストは、キリストに来る苦しみとその後続く栄光を証言する前に示されました。彼らが彼らに仕えたのは、彼ら自身に対してではなく、私たちに対してであったことが明らかにされました。」 (ペテロ第一 1:10-12)。

預言者たちは、自分たちに啓示された事柄を完全には理解していませんでしたが、神が喜んで現すすべての光を手に入れようと熱心に努めました。「彼らは熱心に尋ね、対処した」、「彼らのうちにおられるキリストの御霊がいつ、あるいはいつのことを示したかを尋ねた」。キリスト教時代の神の民にとって、何という教訓でしょうか。彼らの利益のために、これらの預言は神の僕たちに与えられたのです。「彼らは自分たちに対してではなく、私たちに対して奉仕したことが明らかになりました。」神の聖なる人々が、今後何世代にもわたって与えられた啓示をどのように「尋ね、熱心に扱った」かを観察してください。あなたの聖なる熱意と、無関心な無関心を対比してください。

最近の恵まれた人々は、この天からの贈り物を大切にしています。預言は理解できないと宣言するだけで満足する、利己的で世界を愛する無関心に対するなんという叱責でしょう。

人間の有限な精神は、無限の者の助言を貫通したり、神の目的の働きを完全に理解したりすることはできませんが、人間側のある間違いや怠慢によって、天のメッセージをぼんやりとしか理解していないことがよくあります。人々の心、そして神の僕たちでさえ、人間の意見、伝統、誤った教えに目がくらんで、神が御言葉の中で明らかにされた偉大なことを部分的にしか理解できないことはほとんどありません。救い主が個人的に彼らと共におられたときでさえ、キリストの弟子たちに同じことが起こりました。彼らの心には、メシアはイスラエルを宇宙帝国の王位に高めるこの世の君主であるという一般的な考えが染み込んでいたため、彼の苦しみと死を予言する彼の言葉の意味が理解できなかった。

キリストご自身が彼らに、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」というメッセージを送っておられました。（マルコ 1:15）。そのメッセージはダニエル 9 章の預言に基づいていました。天使は「王子メシア」が現れるまでの 69 週間が延長されると宣言し、弟子たちは大きな希望と喜びに満ちた期待をもってメシアの王国の設立を楽しみにしていました。エルサレムで全地を支配する。

彼らはキリストが彼らに託したメッセージを説教しましたが、その意味は理解していませんでした。彼らの発表はダニエル 9 章 25 節に基づいていましたが、同じ章の次の節にはメシアが連れ去られるとは書かれていませんでした。弟子たちの心は生まれたときから、地上帝国の期待される栄光に向けられていたため、彼らは預言の詳細やキリストの言葉を理解することができませんでした。

彼らはユダヤ国民に慈悲の招きを示すことで義務を果たし、そして主がダビデの王座に就かれるのを期待していたまさにその時に、主が悪を行う者として捕らえられ、鞭打たれ、嘲笑され、非難され、そして非難されるのを見たのです。神の十字架に上げられました。彼らの主が墓で眠っておられた日々、弟子たちの心をどれほどの絶望と苦悩が襲ったことでしょうか。

キリストは預言通りの時と方法で来られました。聖書の証しは、イエスの宣教のあらゆる細部において成就されました。彼は救いのメッセージを説教しており、「彼の言葉には権威があった」。聖母の話聞いた人々の心は聖母が天から来たことを証しし、神の言葉と御霊が聖母の御子の神聖な使命を証しました。

弟子たちは今も愛する師に尽きることのない愛情を抱き続けていました。それにもかかわらず、彼らの心は不安と疑いに覆われていました。そのため、彼らは苦しみの中で、キリストの苦しみと死を事前に示していたキリストの言葉を思い出せませんでした。もしナザレのイエスが真のメシアだったら、彼らは苦い思いと失望に陥ったのでしょうか。これは、救い主が墓に横たわっている間、主の死と復活の間に過ぎた安息日の絶望的な時間の間、彼らの魂を苦しめた疑いでした。

苦しみの夜はイエスの追隨者たちに暗闇をもたらしましたが、彼らは見捨てられませんでした。預言者はこう言います。「もし私が闇の中に住んでいるとしても、主は私の光となってください...主は私を光に導き、私は神の義を見るでしょう。」 「闇はまだ私をあなたから隠しませんが、夜は昼のように輝きます。あなたにとって闇も光も同じです。」神は、「義人には闇の中に光が生まれる」と言われました。「そして、わたしは目の見えない人たちを、彼らがこれまで知らなかった方法で導き、彼らが知らない道を歩かせる。彼らの前で暗闇を光に変え、曲がったものをまっすぐにする。

わたしは彼らのために何かをします、そして決して彼らを見捨てません。』(ミカエル7:8,9; 詩139:12; 112:4; イザヤ42:16)。

弟子たちが主の御名において行った発表は、あらゆる点において正しく、それが指し示す出来事が今起きています。「時は満ち、神の国は近づいた」というのが彼のメッセージだった。「時」の終わり、ダニエル書第9章の69週間、

キリストは洗礼者ヨハネによってヨルダン川で洗礼を受けた後、御霊の油注ぎを受けられたのです。そして、彼らが宣言した「神の国」は、キリストの死によって確立されました。この王国は、彼らが信じるよう教えられてきたような、地上の帝国ではありませんでした。また、それは、「全天の下にある諸王国の王国、支配権、威光が至高の聖徒たちの民に与えられる」ときに確立される未来の不滅の王国、つまり永遠の王国ではなかった。それは「すべての支配者は彼に仕え、従うであろう」(ダニエル7:27)というものです。聖書で使用される「神の国」という表現は、恵みの王国と栄光の王国の両方を指します。恵みの王国はパウロによってヘブライ人への手紙の中で示されています。使徒は「私たちの弱さに同情する」ことができる慈悲深い執り成し者であるキリストを指した後、「ですから、私たちが憐れみと恵みを見いだすために、自信を持って恵みの御座に近づこうではありませんか」と述べています。(ヘブライ人への手紙 4:16)。

恵みの玉座は恵みの王国を表します。なぜなら、玉座の存在は王国の存在を意味するからである。キリストは多くのたとえ話の中で、人々の心の中にある神の恵みの働きを指すために「天の王国」という表現を用いています。

したがって、栄光の玉座は栄光の王国を表します。そしてこの王国は救い主の言葉の中で言及されています：「人の子が栄光のうちに来て、すべての聖なる天使たちが彼とともに来るとき、彼はその栄光の玉座に座るであろう。そしてすべての国民は集められるであろう」彼の前に。" (マタイ 25:31 および 32) 。この王国はまだ未来です。それはキリストの再臨まで確立されません。

恵みの王国は人類の墮落直後、罪を犯した種族の贖いの計画が策定されたときに設立されました。当時、イエスは神の目的と約束によって存在し、信仰を通して人々は神の臣民となることができました。

しかし実際には、それはキリストの死まで確立されませんでした。地上での奉仕を始めた後でも、救い主は人々の頑固さと忘恩にうんざりして、カルバリの犠牲を放棄することもできたでしょう。ゲツセマネでは、苦難の杯が彼の手の中で震えました。そうすれば、彼は額から血の汗をぬぐい、罪を犯した種族をその咎によって滅びるに任せることもできただろう。もし神がそのようにしていたら、墮落した人間には救いはなかったであろう。しかし、救い主がご自分の命を明け渡し、息を引き取りながら「終わった」と叫ばれたとき、救いの計画の成就が保証されました。エデンで罪深い二人になされた救いの約束は承認されました。神の約束によって以前から存在していた恵みの王国が確立されました。

したがって、弟子たちが希望の最終的な破壊と見ていたキリストの死こそが、彼らを永遠に確信させるものでした。これは彼らにひどい失望をもたらしましたが、それは彼らの信念が正しかったという最高の証拠でした。彼らに涙と絶望をもたらした出来事は、アダムの子供たち一人一人に希望の扉を開く出来事であり、その出来事を中心は、あらゆる時代の神の忠実な者全員の将来の命と永遠の幸福でした。

無限の慈悲の目的は、弟子たちに失望をもたらしましたが、達成されつつありました。彼らの心は神の恵みと、これまで誰も語らなかつたように語られる神の教えの力によって掴まれていましたが、イエスへの愛という純金と混ざり合っていたのは、人間の誇りと野心の融合でした。

わがまま。上の部屋でも、彼らの主人がゲツセマネの影の下に入ろうとしている厳粛な時に、「彼らの間で、どちらが一番偉いと思われるかについての争い」があった(ルカ22:24)。彼らの視界は玉座、王冠、栄光で占められているが、そのすぐ前には園、宮廷、カルバリの十字架の恥辱と苦しみがあった。彼らが当時の誤った教えに執拗に固執し、神の王国の真の性質を示し、その苦しみと死を指摘した救い主の言葉を無視させたのは、彼らの心の高ぶりと世の栄光への渴望でした。そして、これらのエラーにより、テストは厳しいものでしたが必要なものとなりました。

修正が許可されています。弟子たちは主のメッセージの意味を誤解し、彼らの期待が裏切られるのを目にしていますが、それでも彼らは神から与えられた警告を宣べ伝えました、そして主は彼らの信仰に報い、彼らの従順を称えられるでしょう。彼らは復活した主の輝かしい福音をすべての国に告知知らせる働きを任されていました。彼らにとって非常に苦い経験が許されたのは、この仕事に備えるためでした。

復活後、イエスはエマオへの道で弟子たちに現れ、「モーセから始めてすべての預言者たちに、聖書全体に書かれているご自身に関する事柄を彼らに説明されました」(ルカ24:27)。弟子たちの心は感動しました。彼の信仰は目覚めました。彼らは、イエスが彼らにご自身を現される前から、「生きた希望を持って」(1ペテロ1:3)再び生まれました。神の目的は、彼らの理解を啓発し、「預言の確かな言葉」に対する信仰を確立することでした。イエスは、真理が彼らの心に深く根付くことを望んでいました。それは、それがイエスの個人的な証言によって裏付けられているからだけではなく、儀式律法の象徴と影、そして旧約聖書の預言によって示される疑いの余地のない証拠のためです。キリストに従う者たちは、自分自身の利益のためだけでなく、キリストについての知識を世界にもたやすために、知的な信仰を持つことが必要でした。そして、この知識を伝えるための第一歩として、イエスは弟子たちに「モーセと預言者」に指示しました。これは、旧約聖書の価値と重要性について復活した救い主によって与えられた証言でした。

主の愛すべきお顔をもう一度見たとき、弟子たちの心には何という変化が生じたのでしょうか。(ルカ 24:32)。以前よりも完全で完全な意味で、彼らは「モーセが律法と預言者に記した神を見つけた」のです。不確実性、苦悩、絶望は、完全な安全と啓発された信仰に取って代わられました。主の昇天後、弟子たちが「いつも神殿にいて神を賛美し、祝福していた」のは驚くべきことではありません。救い主の不名誉な死についてしか知らなかった人々は、救い主の顔に悲しみ、混乱、敗北の表情を見ようとしたが、そこに喜びと勝利を見出した。これらの弟子たちは、目の前にある仕事のために何という備えを受けたことでしょうか。彼らは、自分たちが経験することのできる最も恐ろしい試練を乗り越え、人間の理解ではすべてが失われたとき、神の言葉がいかに勝利を収めたかを見ました。それ以来、何が彼らの信仰を揺るがし、あるいは彼らの愛の熱意を冷やすことができるでしょうか？最も深刻な悲しみの中で、彼らは「確固たる慰め」と、「確かでしっかりとした魂の錨のような」希望を持っていました(ヘブライ人への手紙6:18,19)。彼らは神の知恵と力の証人であり、「死も、生も、天使も、支配者も、力も、現在あるものも、これから来るものも、高さも深さも、その他の生き物も存在しない」と確信していました。彼らを「私たちの主キリスト・イエスにある神の愛」から引き離すことができるでしょう。「これらすべてのことにおいて、私たちを愛してくださった方によって、私たちは勝利者以上の存在なのです。」と彼らは言いました。(ロマ 8:38,39,37)。「主の言葉は永遠に存続します。」(ペテロ第一 1:25)。そして、「誰が彼らを罪に定めるのでしょうか。死んだキリスト、あるいはむしろ死人の中からよみがえられた方、神の右におられ、また私たちのために執り成してくださっているキリストだからです」(ローマ8:34)。

主はこう言われます、「わたしの民は永遠に恥じることはない」。(ヨエル 2:26)。
「泣き続けるのは一晩続くかもしれないが、喜びは朝にやってくる。」(詩 30:5)。
復活の日に、これらの弟子たちが救い主に会い、その言葉を聞いて心が燃え上がった時のことです。彼らが愛のゆえに傷ついた頭と手と足を見たとき。昇天の前に、イエスは彼らをベタニヤに連れて行き、両手を上げて彼らを祝福し、「全世界に出て行って福音を宣べ伝えなさい」と命じ、さらに「見よ、わたしはいつもあなたたちとともにいる」と付け加えた。マルコ 16:15; マタイ 28:20);ペンテコステの日に、約束された慰め主が降臨し、天からの力が彼らに与えられ、天に昇られた主の意識的な臨在に信者たちの魂が震えたとき、たとえ彼らの道が間違っていたとしても、イエスが犠牲と殉教を通して、その恵みの福音の奉仕を、キリストの再臨の際に受け取られる「義の冠」と引き換えに、地上での王座の栄光を手に入れるのと同じように。最初の弟子入りの希望は？「私たちが求めたり思ったりするよりもはるかに豊かなことを行うことができる」神は、苦しみを分かち合うとともに、喜びの交わりを彼らに与えてくださいました。

「多くの子らを栄光に導く」という喜び、言葉では言い表せない喜び——「永遠の栄光の重さ」、パウロはこれに比べれば、「私たちが一瞬の軽い痛み」とは比べものになりません。

キリストの初臨時に「神の国の福音」を宣べ伝えた弟子たちの経験は、キリストの再臨のメッセージを宣べ伝えた人々の経験に相当します。弟子たちが「時は満ち、神の国は近づいている」と説教して出て行ったちょうどそのとき、ミラーと彼の仲間たちは、聖書に示されている最長にして最後の預言期間が間もなく終わりを告げ、裁きが近づいていることを宣言した。永遠の王国が確立されるべきであるということです。時間に関する弟子たちの説教は、ダニエル 9 章の 70 週に基づいていました。ミラーとその仲間たちが提示したメッセージは、70 週の一部を構成するダニエル 8 章 14 節の 2,300 日の終了を告げるものでした。それぞれの説教は、同じ偉大な預言の時代の異なる部分の成就に基づいていました。

最初の弟子たちと同様に、ウィリアム・ミラーと彼の仲間たちは、自分たちが広めているメッセージの意味を完全には理解していませんでした。教会で長年確立され、大切にされてきた誤りにより、私たちは預言の非常に重要な点を正しく解釈することができませんでした。

したがって、神が彼らに世界に与えるよう命じたメッセージを宣言したにもかかわらず、彼らはその意味について誤った理解を持っていたために失望しました。

ダニエル 8 章 14 節「夕と朝が二千三百まで、そうすれば聖所は清められるであろう」を説明する際に、すでに述べたように、ミラーは地球が聖域であるという一般に受け入れられている見解を採用し、彼は地球が聖域であると信じるようになった。浄化は、主の到来時の火による地球の浄化を表していました。したがって、2,300日という期間が確実に予言されていることを発見したとき、彼はこれが再臨の時期を明らかにしていると結論付けました。彼の誤りは、聖域を構成するものについての一般的な概念を受け入れたことから生じました。

キリストの犠牲と祭司職の影である典型的なシステムでは、聖所の清めは、毎年行われる儀式サイクルの中で大祭司によって行われる最後の奉仕でした。それは最後の償いの業、つまりイスラエルの罪を取り除く、あるいは消し去ることでした。それは、天の記録に忠実に記録された神の民の罪を取り除く、あるいは消し去るという、天における私たちの大祭司の奉仕における最後の働きを表していました。このサービスには調査作業と裁判が含まれます。そしてこれは、

キリストは天の雲の中に力と偉大な栄光をもっておられます。なぜなら、キリストが来られるとき、すべての事件はすでに解決されているからです。イエスは、「わたしの報いはわたしとともにあり、それぞれの働きに応じて与えるのです」と言われました。（黙示録 22:12）。黙示録 14 章 7 節の最初の天使のメッセージで発表されているのは、再臨の直前に行われるこの裁きの働きです。神の裁きの時が来たからである。」

この警告を宣言した人たちは、適切なタイミングで適切なメッセージを發しました。しかし、最初の弟子たちがダニエル 9 章の預言に基づいて「時は満ち、神の国は近づいた」と宣言したのと同じように、同じ聖句でメシアの死が予告されていたことを認識していなかった、とミラー氏は述べた。彼らはまた、ダニエル 8 章 14 節と黙示録 14 章 7 節に基づいてメッセージを宣べ伝えましたが、黙示録 14 章に明らかにされている他のメッセージがあること、それも主の降臨前に提示されるべきであることに気づきませんでした。弟子たちが 70 週の終わりに設立される王国について誤解したのと同様に、アドベンチスト派も 2,300 日の終わりに起こる出来事に関して誤解しました。どちらの場合も、よくある間違いを容認したり執着したりして、真実に対する心を曇らせていました。どちらのクラスも、神が彼らに伝えてほしいと望んでいたメッセージを提示することで神のご意志を実現しましたが、それぞれのメッセージに対する自らの誤解により、どちらのクラスも失望を経験しました。

それにも関わらず、神はその憐れみ深い目的を遂行し、裁きの警告がそのまま与えられるようにされました。偉大な日が近づいており、神の摂理により、人々は心の内にあるものを明らかにするために、定められた時間に関して試されることになりました。このメッセージは教会を試し、浄化することを目的としたものでした。人々は、自分たちの愛情がこの世に向けられているのか、それともキリストと天国に向けられているのかを見極めるよう導かれなければなりません。今、彼らは愛を証明しなければなりません。彼らは世俗的な希望や野心を放棄し、主の出現を喜んで歓迎する用意ができていたでしょうか？このメッセージは、彼らが自分たちの本当の霊的状态を識別できるようにすることを目的としていました。

彼女は彼らを目覚めさせ、悔い改めと屈辱をもって主を求めるよう慈悲によって遣わされました。

さらに、彼らの失望は、彼らが伝えたメッセージの誤解によって引き起こされたものではありましたが、彼らにとって良いことになったはずで、彼は警告を受けたと公言する人々の心臓を試みるつもりだった。失望に直面して、彼らは自分の経験を急いで否定し、神の言葉への信頼を放棄するのでしょうか。それとも彼らは祈りと謙虚さをもって、預言の意味を理解できなかった箇所を見極めようとするのでしょうか。恐怖、衝動、興奮によってどれだけの人が動かされたのでしょうか？決断力がなく不信仰な人は何人いたのでしょうか。

多くの人が主の出現を愛していると告白しました。世の軽蔑と非難、そして遅れと失望の試練に耐えるよう求められたとき、彼らは信仰を放棄するだろうか。彼らは当初、自分たちに対する神の行動を理解していなかったため、神の言葉の最も明確な証言によって裏付けられた真理を拒否するのでしょうか。

この試練は、神の言葉と御霊の教えと信じていることに真の信仰をもって従った人々の強さを明らかにするでしょう。それは彼らに、聖書を自分自身の解釈者にするのではなく、人間の理論や解釈を受け入れることの危険性を、この経験だけがであることを教えることになるでしょう。

信仰の子供たちにとって、自分の間違いから生じる当惑と悲しみは、必要な矯正をもたらすでしょう。彼らは預言の言葉をさらに深く学ぶよう導かれるでしょう。彼らは自分たちの信仰の基盤をより注意深く検討し、すべてを拒否することを学ぶでしょう。

これはキリスト教世界に広く受け入れられていますが、聖書の真理に基づいたものではありませんでした。

最初の弟子たちの場合と同様に、これらの信者にとっても、裁判の時点では理解が曖昧に見えていたことが、後に明らかになるでしょう。彼らは「主の終わり」（ヤコブ 5:11）を見たとき、自分たちの過ちから生じた試練にもかかわらず、彼らに対する神の愛の目的がしっかりと果たされたことを知るでしょう。彼らは、祝福された経験を通して、神が「非常に慈悲深く、慈悲深い」方であることを学ぶでしょう。神のあらゆる道は「神の契約と証しを守る者たちにとっては慈悲であり真実である」と。

第20章

偉大な宗教的目覚め

キリストの差し迫った再臨の宣言の下での偉大な宗教的目覚め
それは黙示録 14 章の最初の天使のメッセージの預言の中で予告されています。天使は「天の真ん中を飛んでいるのが見られ、永遠の福音を持っていて、それを地上に住む人々とすべての国民、そしてすべての人々に宣べ伝えました」「大声で彼は次のメッセージを宣言する、「神を畏れ、神に栄光を帰せよ。神の裁きの時が来たからである。そして天と地と海と水の泉を造られた方を礼拝しなさい」(黙示録 14 :6、7)。

天使がこの警告の先駆者であると述べられているのは重要です。
天の使者の純粹さ、栄光、力によって、神の知恵は、そのメッセージによって遂行される働きの崇高な性質と、それを助ける力と栄光を表すのにふさわしいと考えた。そして、天使の「天の真ん中を通る」飛行、警告が発せられる「大きな声」、そしてその警告が「地上に住むすべての者…あらゆる国民、親族、言語、そして人々に発布される」は、運動のスピードと世界的な広がりを示しています。

メッセージ自体が、この運動が起こらなければならない時期を明らかにしています。それは「永遠の福音」の一部であると宣言され、裁きの始まりを告げる。救いのメッセージは何世紀にもわたって説教されてきました。しかし、このメッセージは終わりの日にのみ宣べ伝えられる福音の一部であり、その時に初めて裁きの時が来たことが真実となるからである。預言は、裁きの始まりに至る一連の出来事を示しています。これは特にダニエル書に当てはまります。しかし、終わりの日に関する預言のこの部分では、ダニエルは「終わりの時」までその書を閉じて封印するように命じられました。裁きに関する音信は、これらの預言の成就に基づいて裁きの時が到来するまで宣言することができませんでした。しかし、終わりの時には、「多くの人々が、ある場所から別の場所へ逃げ、知識は増えるでしょう」(ダニエル12:4)と預言者は言います。

使徒パウロは教会に対し、現代にキリストの到来を期待しないよう警告しました。
「背教が先に来て、罪を犯した人間が明らかにされない限り、そうなることはないだろう」と彼は言った。(IIテサロニケ2:3)。私たちは、大規模な背教と「罪の人」の長い統治期間が終わるまで、主の出現を待つことはできないでしょう。「不法の奥義」、「滅びの子」、「不法の者」とも呼ばれる「罪の人」は、預言者らの予告通り、1,260年間その優位性を維持することになっていた教皇庁を代表する人物である。年。この期間は 1798 年に終わりました。キリストの再臨はそれ以前には起こり得ませんでした。パウロは警告とともに、1798年までのキリスト教の神権時代全体をカバーしています。キリストの再臨のメッセージが宣言されなければならないのはこの時です。

過去何世紀にもわたってそのようなメッセージは宣言されていませんでした。これまで見てきたように、パウロはそれを説教しませんでした。彼は兄弟たちに、主の再臨は非常に遠い将来に起こるだろうと示唆しました。改革者たちはそれを説きませんでした。マルティン・ルターは、その判決が彼の時代から約 300 年後に起こると考えていました。しかし、1798年以來、ダニエル書が開かれ、預言についての知識が深まりました。多くの人々が差し迫った裁きの厳粛なメッセージを宣言しました。

16世紀の大宗教改革と同様に、待降節運動はキリスト教世界のさまざまな国で同時に起こりました。ヨーロッパでも国内でも

アメリカの信仰と祈りの人々は預言を研究するよう導かれ、靈感による報告を精査した結果、万物の終わりが近づいていることを示す説得力のある証拠があることが分かりました。さまざまな国に、聖書の研究だけを通して救い主の到来が近いことを発見した孤立したキリスト教徒のグループがありました。

1821年、ミラーが裁きの時を指し示す預言の解釈に到達してから3年後、「世界への宣教師」ジョセフ・ヴォルフ博士は間もなく主が到来することを宣言し始めた。ヴォルフはドイツでユダヤ系のユダヤ人として生まれ、父親はユダヤ人のラビでした。彼はまだ幼い頃、キリスト教の真理を確信しました。探究心と活動的な心を持っていた彼は、敬虔なユダヤ人たちが毎日集まって国民の希望や期待、来るべきメシアの栄光、そしてイスラエルの復興について語るために父の家で行われた会話に熱心に耳を傾けていた。ある日、ナザレのイエスの話を聞いて、少年はイエスが誰なのか尋ねました。

「比類のない才能を持ったユダヤ人です」との答えが返ってきた。「しかし、彼が自分は救世主であると主張したため、ユダヤ法廷は彼に死刑を宣告した。」「では、なぜエルサレムは未だに破壊され、私たちは捕虜になっているのでしょうか？」と質問者は答えた。「我々にとっては災いだ！我々にとっては災いだ！」と父親は答えた、「ユダヤ人が預言者を殺したからだ。」すぐに、少年の心に次の考えがよぎりました。「おそらくナザレのイエスは預言者であり、ユダヤ人は彼が無実であったにもかかわらず、彼を殺したのだろう。」この感情が非常に強かったため、彼はキリスト教の教会に入ることが許されなかったにもかかわらず、説教を聞くために外に留まることがよくありました。

わずか7歳のヴォルフは、近所の年配のキリスト教徒にメシアの出現におけるイスラエルの将来の勝利について自慢していたとき、老人は親切にこう言った。「すぐに、幼いヴォルフは強い確信を抱きました。彼は家に帰り、本文を読み、それがナザレのイエスにおいてどのように完全に成就されたかに驚きました。年老いたクリスチャンは真実を語っていたのでしょうか？少年は父親にその説明を尋ねました。しかし、彼はあまりにも厳粛な沈黙に遭遇したため、その話題に戻る勇気はありませんでしたが、これはキリスト教の宗教についてもっと知りたいという彼の欲求を増大させるだけでした。

彼が求めていた知識は、ユダヤ人の家の手の届かないところに注意深く保管されていました。しかし、ヴォルフはわずか11歳のとき、独学で宗教と職業を選択するために両親の家を出て外の世界へ出ました。彼は親戚の中に仮住まいを見つけましたが、間もなく背教者としてそこから追放され、孤独で無一文になって、見知らぬ人々の中で自分の進路を決めなければなりません。彼は各地を転々としながら熱心に勉強し、ヘブライ語を教えることで支援を得ました。カトリックの教授の影響で、彼はローマの信仰を受け入れるようになりました。それから彼は、自分の民族の中で宣教師になることを決心しました。この目的を念頭に置いて、数年後、彼はローマの宣伝大学で勉強を続けました。そこでは、彼の独立した思考の習慣と率直な発言が異端であると非難されました。

ヴォルフは教会の虐待を公然と攻撃し、改革の必要性を主張した。彼は当初、教皇の高官たちから特別な厚遇を受けていましたが、しばらくするとローマから追放されました。教会の監視の下、彼はローマの奴隷制に決して服従できないことが明らかになるまで、あちこちを転々とし、彼は反逆者であると宣言され、どこにでも自由に行けるようになりました。

より良い。その後イギリスへ向かい、プロテスタントの信仰を告白し、英国国教会に入会した。2年間の研究の後、彼は1821年に伝道を始めました。

ヴォルフは、キリストの初臨が「悲しみの人であり、労苦を知っていた」という偉大な真実を受け入れたとき、預言が力と栄光を持った再臨を同様に明確に示していることにも気づきました。そして、約束された方としてのナザレのイエスに民を導き、人類の罪のための犠牲としての屈辱の中での初臨を彼らに指摘しようとする一方で、王であり救出者としての再臨も彼らに教えました。

「ナザレのイエス、真のメシアです」と彼は言いました。子羊のように屠殺場に連れて行かれた人。彼は悲しみを抱え、出産の経験を積んだ人だった。ユダから王笏が奪われ、足の間から立法力が得られた後、彼は最初に来て、二度目は天の雲に乗って、大天使のラツパとともに来て、山の上に立つでしょう。オリーブ"; 「そして、かつてアダムに与えられ、アダムによって失われた創造物に対する支配権（創世記 1:26; 3:17）は、イエスに与えられるでしょう。彼は全地球の王となるでしょう。被造物のうめき声と嘆きがやみ、賛美と感謝の歌が聞こえるでしょう...イエスが聖なる天使たちとともに父の栄光のうちに来られるとき...死んだ信者たちが最初によみがえります(1テサロニケ4: 16; 1コリント 15:23)。これを私たちクリスチャンは第一の復活と呼んでいます。その後、動物界はその性質を変え(イザヤ11:6-9)、イエスに服従します(詩8)。宇宙の平和が行き渡るでしょう...主はもう一度地球を見てこう言われるでしょう、「見よ、すべてはととても順調だ。」

ヴォルフは主の到来が近づいていると信じており、彼の預言期間の解釈では、ミラーが示した時期から数年以内に大いなる成就が起こるとされていました。「その日とその時刻については誰も知りません」という聖句を主張し、人間はアドベントが近づいていることについて何も知りたくないはずだと述べた人々に対して、ヴォルフはこう答えた。イチジクの木の子葉で夏の前触れを知っているように（マタイ 24:32）、神は私たちに時代のしるしを与えてくださったので、少なくとも神の来臨が近づいていることを知ることができるのですか（マタイ 24:32）。預言者ダニエルを読むだけでなく、彼を理解することも必要でしょうか？そして、ダニエル書そのものでは、(彼の時代の場合と同様に) 終わりの時まで言葉は閉じられると言われていますが、「多くの人がある場所から別の場所へ逃げていき」（時間について観察し、考えることを意味するヘブライ語の表現）、そして（時間に関して）「知識」が「増える」（ダニエル書12:4）と、私たちの主は宣言されました。時間の近さは分からないということではないのではなく、正確な日時は人間の知識の範囲内ではないということです。彼は、ノアが箱舟を準備したように、私たちに彼の到来に備えさせるために、時代のしるしによって十分に知られるだろうと言いました。」

聖書の一般的な解釈や誤解の体系に関して、ヴォルフは次のように書いている。「キリスト教会の大部分は、聖書の明確な意味から背を向け、仏教徒の空想的な体系に目を向けている。彼らは、未来は次のようになると信じている」人類の幸福は空を飛ぶことにあるだろう、そして彼らがユダヤ人を読むとき、こう仮定する

異邦人を理解しなければなりません。そしてエルサレムを読むとき、彼らは教会を理解する必要があります。地球と言えば天国を意味します。そして主の到来によって、彼らは宣教社会の進歩を理解しなければなりません。そして主の家の山に登るということは、メソジストが大勢集まることを意味します。」

1821年から1845年までの24年間、ヴォルフはアフリカを広範囲に旅し、エジプトやエチオピアを訪れました。アジアを通過して、パレスチナ、シリア、ペルシャ、ウズベキスタン、インドを横断しました。彼はまた米国を訪れ、その旅行中に

セントヘレナ島で説教した。彼は1837年8月にニューヨークに到着し、その都市で講演した後、フィラデルフィアとボルチモアで説教し、最後にワシントンに行きました。そこで彼は、「ジョン・クインシー・アダムス元大統領が議会の一つで提出した提案により、その議会は私が講演のために議会ホールを使用することを許可し、その講演は私が土曜日に出席した上で行った」と述べた。国会議員全員、バージニア司教、ワシントンの聖職者と市民、そしてニュージャージー州とペンシルベニア州政府の議員たちからも同様の栄誉が私に与えられ、彼らの前で私はアジアでの私の研究について、そしてまた、イエス・キリストの個人的な王国です。」

ヴォルフ博士はヨーロッパ当局の保護を受けずに最も野蛮な国々を旅し、多くの困難に直面し、無数の危険に囲まれました。彼は殴られ、飢えさせられ、奴隷として売られ、3度死刑を宣告された。彼は強盗の被害に遭い、喉の渇きで死にそうになることもありました。ある時、彼は強盗に遭い、所有物すべてを奪われました。彼は顔に雪が降り、裸足が氷の地面に触れて凍りついた状態で、山の中を何百キロも歩いて移動することになりました。

野蛮で敵対的な部族の真っ只中に武器を持たずに行かないよう警告されたとき、彼は祈り、キリストへの熱意、そしてキリストの助けへの信頼で武装していると宣言した。「私も心の中には神と隣人への愛があり、手の中には聖書が与えられています。」と彼は述べました。彼はどこへ行くにもヘブライ語と英語の聖書を持ち歩きました。最後の旅行の一つについて、彼はこう語った。「私は聖書を開いて手に持っていました。自分の力は聖書の中にあり、その力が私を支えてくれると感じました。」

このようにして、裁きのメッセージが居住可能な地球の大部分に伝わるまで、彼は努力を続けました。ユダヤ人、トルコ人、ペルシア人、ヒンズー教徒、その他多くの国籍や人種の間で、彼はこれらのさまざまな言語で神の言葉を広め、あらゆる場所でメシアの差し迫った王国を宣言しました。

ウズベキスタンを旅する中で、彼は遠く離れた孤立した人々が告白する主のまもなくの再臨の教義に出会いました。イエメンのアラブ人について、「彼らは『シーラ』と呼ばれる本を所有しており、そこにはキリストの再臨と栄光の王国についての情報が含まれており、1840年に大きな出来事が起こることを期待している」と同氏は述べた。「イエメンでは、私はレカブ人たちと6日間過ごしました。彼らはぶどう酒を飲まず、ブドウ畑を植えず、種を蒔かず、天幕に住んでいます。彼らはレカブの子ヨナダブの言葉を覚えています。その中には子供たちも含まれていました」イスラエルのダン族出身の者たち……彼らはレカブの息子たちとともに、間もなく天の雲に乗ってメシアが到来するのを待っている。」

同様の信念がタルタリアの別の宣教師によっても発見されました。タルタルの司祭は宣教師に、キリストが二度目にいつ来るのか尋ねました。宣教師がそのことについては何も知らないと答えると、司祭は聖書教師を自称する者のそのような無知に非常に驚いたようで、預言に基づいて、キリストは1844年頃に来られるという自分の信念を宣言した。

1826年には、アドベントのメッセージがイギリスで説教され始めました。そこでの運動はアメリカのように明確な形をとっていませんでした。待降節の正確な時期については、一般にはあまり教えられていませんが、キリストの力と栄光が差し迫っているという偉大な真実が大声で宣言されました。そして、これは反体制派や非国教徒の間だけではありません。英国の作家モランテ・ブロックは、英国国教会の牧師約700人がこの「王国の福音」の説教に関わったと述べている。1844年を主の再臨の時期として指摘するメッセージは、イギリスでも伝えられました。米国からのアドベンチストの出版物は広く普及しました。本や雑誌はイギリスで再出版されました。そして

1842年、イギリス人として生まれ、アメリカでアドベンチストの信仰を受けていたロバート・ウィンターは、主の到来を告げるため母国に帰国しました。多くの人が彼の働きに加わり、イングランド各地で裁きのメッセージが宣言されました。

南アメリカで、司祭たちの野蛮さと悪意のさなか、スペイン人のイエズス会士ラクンザは聖書を知り、キリストの再臨が近いという真実を知りました。しかし、警告を発するように駆り立てられ、ローマの非難を逃れたいと願って、彼は改宗したユダヤ人であることを表し、「ラビ・ベン・イスラエル」というペンネームで自分の見解を発表した。ラクンザは18世紀に生まれましたが、彼の著書がロンドン市に浸透し、英語に翻訳されたのは1825年頃でした。この本の出版は、英国ですでに目覚めつつあった再臨のテーマに対する関心をさらに深めるのに役立ちました。

18世紀、ルーテル派の牧師であり、著名な学者で聖書批評家でもあったベンゲルは、ドイツで教義を教えました。教育を終えた後、ベンゲルは神学の研究に専念しました。「彼の精神の真剣で宗教的な性格は、教育と鍛錬によって深まり、強化され、自然に彼を神学に傾かせました。」彼の前後に現れた他の瞑想的な性質の若者たちと同様に、彼は宗教的な性質の疑いと困難に直面しなければなりません。そして彼は、「彼の哀れな心を突き刺し、青春時代を非常に耐え難いものにした多くの矢」について、非常に感情を込めて言及している。「信教の自由、「良心の力によって既成の教会から離脱せざるを得ないと感じる人々に、あらゆる合理的な自由が与えられること」を主張している。この政策の良い影響は今でも彼の故郷で感じられています。

ベンゲルの心にキリストの再臨の光が宿ったのは、「待降節」に向けて黙示録21章の説教を準備していたときでした。黙示録の預言は、これまでにないほど彼の理解に明らかにされました。預言者が提示した場面の途方もない重要性と極めて優れた栄光の感覚に圧迫されて、彼はしばらくこのテーマの熟考から逸脱せざるを得ませんでした。説教壇では、この主題がその力と活力のすべてを持って再び彼の前に現れました。それ以来、彼は預言、特に黙示録の預言の研究に専念し、すぐにそれらの預言はキリストの到来が近いことを示していると結論付け、信じました。彼が再臨の時期として決定した日付は、後にミラーによって維持される日付とわずかに数年しか異なっていませんでした。

ベンゲルの著作はキリスト教世界全体に広まりました。預言に関する彼の見解は、彼の故郷ヴュルテンベルクやドイツの他の地域でもある程度受け入れられました。彼の死後もこの運動は続き、待降節のメッセージはドイツで聞かれるとともに、他の国の人々の注目も集めました。最初、一部の信者はロシアに行き、そこで植民地を形成しました。したがって、キリストの到来が近いという信仰は、その国のドイツの教会によって今でも維持されています。

フランスとスイスでも光が射した。ファレルとカルヴァンが宗教改革の真実を広めたジュネーブで、ガウセンは再臨のメッセージを説いた。学生時代、ガウセンは18世紀後半から19世紀初頭にかけてヨーロッパ全土に浸透した合理主義の精神に遭遇しました。奉仕活動に入った当初、彼は真の信仰について無知であっただけでなく、懐疑的な態度をとっていました。彼は若い頃、預言の研究に興味を持っていました。

ローリンの『古代史』を読んだ後、彼の注意はダニエル書の第2章に引き寄せられ、ガウセンは歴史家の記述で彼自身が見たように、預言が驚くほど正確に成就したことに驚きました。そこには

これは聖書の靈感の証であり、聖書は近年の危機の中で彼にとって支えとなった。彼は合理主義の教えに満足できず、聖書を研究してより明確な光を求め、ある時期を境に積極的な信仰に導かれました。

彼は預言の調査を続けるうちに、主の再臨が近づいていることを理解するようになりました。この偉大な真実の厳粛さと重要性に感銘を受けた彼は、それを人々に伝えたいと考えました。しかし、ダニエルの預言は謎であり、理解できないという一般的な考えが、彼の行く手には重大な障害となっていました。ファレルがかつてそうしたように、彼はついに決意を固めた。

彼は子供たちから始めてジュネーブでの福音宣教を行い、それを通して親たちに興味を持ってもらいたいと考えた。

彼は、この仕事の目的について次のように語った。「私がそれを重要ではないと考えているからではなく、逆に、その大きな価値があるからこそ、それをこの作品に提示したいと思ったのであることを理解していただきたいと思います。」おなじみの方法で、私は子供たちに話しかけました。

私は話を聞いてもらいたかったのですが、先に大人に話しかけても聞いてもらえないのではないかと心配していました。そこで私は若い人たちのところへ行くことにしました。私は子供たちの聴衆を集めます。グループが成長した場合、彼らが興味を持って聞いて喜んでいのが見えたら、彼らがこの主題を理解して説明できれば、私はすぐに2回目のセッションを開始できるようにします。そして、大人たちも、それが座って勉強する価値があると理解するでしょう。

これが達成されたとき、大義は勝利したことになる。」

その努力は成功した。子どもたちに話していると、お年寄りが聞きに来てくれます。彼の教会のギャラリーは熱心な聴衆でいっぱいでした。その中には社会的地位や知識の高い男性もいたが、ジュネーブを訪れた見知らぬ人や外国人もいた。そのため、メッセージは他の部分に転送されました。

彼の成功に勇気づけられたゴーセンは、フランス語圏の教会で預言書の研究を促進することを願って、彼の教訓を出版しました。ガウセン教授は、「子供たちに与えられた指導を出版することは、そのような本は理解できないという誤った口実でしばしば無視する大人たちに、『子供たちが理解できるのに、どうしてその本が理解するのが難しいのか』と言っていることになる」と付け加えた。：「できれば、私たちの群れの間で預言の知識を広めたいと強く願っていました。」 「実際、時代のニーズをこれ以上満たしていると思われる研究はありません。」 「この方を通して、私たちは差し迫った艱難に備え、イエス・キリストを待ち望みなければなりません。」

ゴーセンは、フランス語で最も著名で愛されている説教師の一人であるにもかかわらず、しばらくしてから、青少年を教える際に、退屈で合理主義的なマニュアルである教会のカテキズムの代わりに聖書を使用したという主な違反により、牧師から停職処分を受けた。積極的な信仰がほとんどありません。その後、彼は神学校の教師となり、日曜日には子供たちに話しかけて聖書を教える教理要理者としての仕事を続けました。預言に関する彼の著作も強い関心を引き起こしました。ガウセンは、教授としての職から、報道機関を通じて、そして児童教師という大好きな職業を通じて、長年にわたり多大な影響力を及ぼし続け、多くの人々の注意を預言の研究に集める手段としての役割を果たしました。次に主が来られる。

スカンジナビアでもアドベントメッセージが説かれ、大きな関心を引き起こしました。多くの人々が不用意な安全から目覚め、自分の罪を告白し捨て、キリストの名において許しを求めています。しかし、州教会の聖職者たちはこの運動に反対し、彼らの影響力によって、メッセージを説いた人々の中には投獄された人もいた。主の差し迫った来臨の説教者たちがこのように沈黙させられている多くの場所で、神はメッセージをメッセージを送るのが適切であると判断されました。

小さな子供たちを通して奇跡的に。彼らは未成年であったため、州法は彼らにいかなる禁止も課すことができず、したがって、彼らは性的虐待を受けることなく話すことを許可された。

この運動は主に最も貧しい階級の間で起こり、人々は警告を聞くために最も単純な労働者の家に集まりました。

子どもの説教師たち自身も、大部分は貧しい小屋の住人でした。

彼らの中には6歳か8歳にすぎない人もいました。そして、彼らの人生は、救い主を愛し、神の聖なる戒めに従って生きようとしたことを証していました。全体としては、その年齢の子供たちに通常見られる能力と知性しか示していませんでした。しかし、人々の前に立つと、彼らが生来の才能を超えた影響力によって動かされたのは明らかでした。彼らの声の調子と態度は変わり、厳粛な力強さで「神を畏れ、神に栄光を帰せよ。神の裁きの時が来たからである」という聖書の言葉そのものを用いて裁きの警告を発した。彼らは人々の罪を叱責し、不道徳や悪徳を非難するだけでなく、世俗性や背教を非難し、来るべき怒りから急いで逃げるよう聴衆に忠告しました。

人々は震えながら聞いていました。説得力のある神の御霊が彼らの心に語りかけました。多くの人が新たな深い関心を持って聖書を調べるようになりました。乱暴で不道徳な人々は自分たちの生活を正しました。不誠実な行為を放棄した人もいます。このような働きが行われたため、国教会の牧師さえもこの運動に神の手があったことを認識せざるを得なくなった。

救い主の到来の知らせがスカンジナビア諸国に伝えられたのは神のご意志でした。そして、しもべたちの声が静まると、神はその働きが達成されるように子供たちに御霊を与えられた。イエスが勝利の声を上げ、ヤシの枝を振りながらイエスをダビデの子として称賛する歓喜の群衆を引き連れてエルサレムに近づいたとき、嫉妬深いパリサイ人たちはイエスに彼らを黙らせるよう求めた。しかしイエスは、これはすべて預言の成就であり、もしそれらの声が沈黙すれば、石そのものが叫ぶであろう、と答えられました。人々は祭司や君主たちの脅迫に脅迫され、エルサレムの門に入ったところで喜びの宣言をやめた。しかしそのとき、子供たちは神殿の中庭でヤシの枝を振りながら、「ダビデの子にホサナ！」と叫びながら合唱を歌いました。（マタイ 21:8-16）。パリサイ人たちがひどく不快になってイエスに言った、「この人たちが言っていることが聞こえるか」。神はキリストの初臨の時に子供たちを通して働いたように、再臨のメッセージを伝える際にも子供たちを通して働いた。救い主の到来の宣言がすべての人々、言語、国家に与えられるように、神の言葉は成就されなければなりません。

ギリエルメ・ミラーと彼の協力者たちは、アメリカでこの警告を説くという使命を与えられました。この国は大いなる待降節運動の中心地となりました。

最初の天使のメッセージの預言が最も直接的に成就したのはそこででした。

ミラーと彼の仲間たちの著作は遠い国に運ばれました。宣教師たちがどこへ行っても、全世界に、間もなくキリストが戻ってくるという喜びの知らせが送られました。「神を畏れ、神に栄光を帰せよ。神の裁きの時が来たからである」という永遠の福音のメッセージがあらゆる場所に広まりました。

1844年の春にキリストが降臨することを示唆していると思われる預言の証言は、人々の心に深く刻み込まれました。メッセージが州から州へと伝わるにつれて、どこでも大きな関心が集まりました。多くの人は、預言時代から引き出された議論が正しいと確信し、自分の意見の誇りを犠牲にして、喜んで真実を受け入れました。いくつかの

牧師たちは宗派的な考えや感情を脇に置き、給料も教会も放棄して、一致団結してイエスの再臨を宣言しました。しかし、このメッセージを受け入れた牧師は比較的少数でした。こうしてそれは、大部分が謙虚な平信徒の手に渡ったのです。農民は畑を去り、整備士は道具を、商人は商品を、専門家はその地位を離れました。それにも関わらず、行われる作業に比べて労働者の数は少なかった。不敬虔な教会と邪悪に横たわる世界の状態は、真の監視者たちの魂にとって重荷であり、彼らは人々に救いへの悔い改めを呼び掛けるために、進んで労苦、窮乏、苦しみに耐えた。サタンの反対にもかかわらず、働きは着実に続き、降臨の真理は何千人もの人々に受け入れられました。

世俗と教会の両方の罪人に、来たるべき怒りから逃げるように警告する鋭い証言がどこでも聞こえました。キリストの先駆者である洗礼者ヨハネのように、説教者たちは木の根元に斧を突きつけ、悔い改めにふさわしい実を結ぶよう皆に促しました。彼らの心を揺さぶる訴えは、民衆の説教壇から聞いていた平和と安全の保証とは著しく対照的であった。そしてそのメッセージがどこに伝えられても、人々の心を動かしました。聖霊の力によって魂に届く聖書の単純で直接的な証言は、完全に抵抗できる人はほとんどいないであろう確信の重みを伴っていました。宗教を自認する人々は、偽りの安全保障から動揺した。彼らは彼の背教、世俗性と不信仰、彼のプライドと利己主義を見ました。多くの人が悔い改めと屈辱を感じながら主を求めました。長い間地上のものにしがみついていた愛情は、今や天に定まり、神の御霊が彼らの上に留まり、心を和らげ、沈んだ心で団結し、「神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。なぜなら、神を畏れなさい。神に栄光を帰せよ。」神の裁きの時が来た。」

罪人たちは涙ながらに、「救われるためには何をしなければなりませんか?」と尋ねました。不正直によって人生を汚された人々は、償いをしたいと熱望していました。キリストにあって平和を見出した人は皆、他の人にもこの祝福にあずかるように望んでいたのです。親の心は子に、子の心は親に向けられました。プライドと遠慮の壁は取り払われました。誠実な告白がなされ、家族は最も親しい人々の救いのために働きました。熱心なとりなしの声がよく聞こえました。いたるところで、深い苦しみの中で神に嘆願する魂がいました。多くの人が、自分たちの罪の確実な赦しを求めて、あるいは親戚や隣人の回心のために、一晩中祈り続けた。

すべてのクラスはアドベンチストの集会に集中しました。金持ちも貧乏も、偉い人も謙虚な人も、さまざまな理由から、彼らは再臨の教義を自分の目で聞くことを切望していました。主は、主の僕たちが信仰の理由を説明する間、反対の心を抑えられました。時には楽器が弱かったり、しかし、神の御霊は神の真理に力を与えました。これらの集会では聖なる天使の存在が感じられ、毎日多くの人が信者に加わりました。キリストが間もなく来られるという証拠が繰り返されると、大勢の群衆は完全に沈黙してその厳粛な言葉に耳を傾けた。天と地が近づいているように見えました。神の力は老人も若者も中年者も同様に感じられました。男たちは賛美を口にしながら家に帰り、その歓喜の音が静かな夜の空気に響き渡った。これらの会議に出席した人は誰も、深い関心を集めた場面を決して忘れることはできません。

キリストの再臨の明確な時期の宣言は、牧師、説教壇、教会員に至るまで、あらゆる階級の多くの人々の大きな反対を引き起こした。

最も大胆な罪人。預言の言葉は成就した。「終わりの日には、あざける者たちがやって来て、自分の欲望に従って歩き、こう言うだろう、『神の来臨の約束はどこにあるのか?』というのは、父祖たちが眠りについてから、すべてのことは、世の初めからそのまま残っているからである。』創造。」（ペテロ第二 3:3 および 4）。救い主を愛していると公言する人の多くは、再臨の教義には反対していないと宣言しました。それらは、定められた時間の設定に反しているだけです。しかし、神の探求の目は彼らの心を読みました。彼らは、正義をもって世界を裁くキリストの到来について聞きたくありませんでした。彼らは不忠実な召使でした。彼らの行いは心を探る神の検査に耐えられず、主に会うのを恐れました。キリストの初臨の時代のユダヤ人のように、彼らはキリストを迎える準備ができていませんでした。彼らは聖書の明確な主張に耳を貸さないだけでなく、主を待ち望んでいる人々を嘲笑しました。

サタンとその天使たちは、キリストと聖なる天使たちに大喜びし、侮辱の言葉を投げかけました。なぜなら、キリストを公言した人々はキリストに対する愛があまりなく、キリストの出現を望まなかったからです。

「その日とその時については誰も知りません」というのが、待降節信仰を否定する人々によって最も頻繁に主張された議論であった。

聖典にはこう書かれています。「その日とその時については、天の天使も子も知らない、ただわたしの父だけが知っています。」（マタイ 24:36）。この聖句については、主を待ち望んでいた人々によって明確で調和のとれた説明が与えられ、反対者による誤用が明らかになりました。この言葉は、キリストが最後に神殿を出た後、オリーブ山での弟子たちとの忘れられない会話の中でキリストによって語られた言葉です。弟子たちは「あなたの来臨と世の終わりのしるしは何ですか?」と質問しました。イエスは彼らにしるしを与えて言われた、「これらすべてを見たら、神が戸口に近づいていることを知りなさい。」（マタイ 24:3 および 33）。主の一つの言葉は、他の言葉を滅ぼすために発せられるものではありません。主が来られる日や時間を誰も知りませんが、私たちはそれについて教えられており、それがいつ近いかを知るように求められています。さらに、警告に無関心であること、警告について知ることを拒否すること、あるいは神の降臨が近づいていることを無視することは、ノアの時代に生きていた人々にとってそうであったのと同じように、私たちにとっても致命的であると教えられています。いつ洪水が来るかわからない。そして、同じ章に記録されているたとえ話は、忠実な僕と不忠実な僕たちを対比させ、心の中で「私の主は来るのが遅れるだろう」と言った彼に呪いを宣告します。それは、キリストがどのような光の中で観察し、キリストの再臨を見守り説教している人々や、それを否定する人々を観察し、報いるかを明らかにします。「だから気をつけなさい」と彼は言います。「主が来られるとき、このように仕える僕を見いだされる僕は幸いである。」（マタイ 24:42-

51）。「もしあなたが見ていないなら、私は泥棒のようにあなたに襲いかかります。あなたは私が何時にあなたに襲いかかるかわかりません。」（黙示録 3:3）。

パウロは主の出現が予期せぬ階級の人々について次のように語っています、「主の日は夜の盗人のように来るでしょう。というのは、彼らが平和だ、安全だと言うと、突然滅びが彼らに襲いかかるからです。……そして、彼らは決して逃げることはできません。」そして彼は、救い主の警告に従う人々のためにこう付け加えた。「兄弟たち、あなたがたはもう暗闇の中にいません。その日が盗人のようにあなたがたを襲うはずがありません。なぜなら、あなたがたは皆、光の子であり、昼の子だからです。私たちはそうです。夜でも暗闇でもない。」（1テサロニケ5:2-5）。

このようにして、聖書はキリストの再臨が差し迫っていることについて無知なままの人々に何の保証も与えていないことが証明された。しかし、真実を拒否する言い訳だけを望んでいた人々は、この説明に耳を閉ざしました。そして、「その日、その時のことは誰も知りません」という言葉は、大胆に嘲笑する者たちによって、そしてキリストの奉仕者であると公言する者たちによってさえ繰り返され続けた。

人々が目覚め、救いの道を尋ね始めたとき、

宗教教師たちは彼らと真実の間に入って、神の言葉の誤った解釈を通じて彼らの恐怖を静めようとした。不忠実な見張りたちは、神が平和について語られていなかったときに、「平和、平和！」と叫びながら、大詐欺師の働きに加わりました。キリストの時代のパリサイ人のように、多くの人が天国に入るのを拒否し、天国に入る人々を妨害しました。これらの魂の血があなたの手元に必要となります。

通常、教会の中で最も謙虚で聖別された人々が最初にメッセージを受け取りました。自分で聖書を研究した人たちは、預言についての一般的な意見の非聖書的な性格を見逃すことはできませんでした。また、人々が聖職者の影響に支配されていない場所ではどこでも、自分自身で神の言葉、つまり降臨の教義を検索した場合はどこでも、その神聖な権威を確立するには、聖書と比較するだけで十分です。

多くの人が不信者の兄弟たちから迫害されました。教会内での立場を維持するために、自分の希望について何も言わないことに同意した人もいます。しかし、神への忠誠心が神から託された真実を隠すことを禁じていると感じた人もいた。キリストの到来に対する信仰を表明するというただ一つの理由で、教会の交わりから離れてしまった人も少なくありません。信仰の試練に耐えた人々にとって、預言者の言葉は非常に貴重でした。「あなたを憎み、私の名のためにあなたから遠く離れたあなたの兄弟たちよ、『主に栄光あれ。しかし主はあなたの喜びのために現れる』と言いなさい」と混乱してしまうだろう。（イザヤ 66:5）。

神の天使たちは警告の結果を深い関心をもって見守っていました。教会がそのメッセージを全面的に拒否したとき、天使たちは深い悲しみとともに撤退しました。しかし、待降節の真実についてまだ試されていない人たちがたくさんいました。多くの人が夫、妻、親、子供たちに騙され、アドベンチストの説く異端を聞くだけでも罪だと思込まれました。天使たちはそれらの魂を忠実に見守るように命じられました。神の御座からの別の光が依然として彼らを照らすはずだからです。

このメッセージを受け取った人々は、言い表せない願いを抱いて救い主の到来を待ち望んでいた。彼らがイエスにお会いできると期待していた時が近づいていました。彼らは静かに厳かにこの時間を待っていました。彼らは神との甘い交わりの中で休んでいました。これは、明るい未来において彼らのものとなるはずの平和の保証です。この希望と自信を経験した人は、その貴重な期待の時間を忘れることはできません。定められた時の数週間前に、世俗の職業はほとんど脇に置かれました。誠実な信者たちは、あたかも死の床にあり、地上の光景に目を閉じるのがほんの一瞬であるかのように、自分の心の中のあらゆる考えや感情を注意深く調べました。

「昇天のための衣服」を作ることはありませんでしたが、誰もが救い主に会う準備ができているという内なる証拠の必要性を感じていました。彼らの白い衣は魂の純粋さ、つまりキリストの贖いの血によって罪から清められた人物たちを表していました。神の民を公言する人々の中に、同じ内省の精神、同じ決意を持った熱烈な信仰が今も残っていればいいのにとおもいます。もし彼らが主の前にへりくだり、執拗に慈悲の座に請願を送り続けていたら、彼らは今よりもはるかに豊かな経験を積んでいただろう。

祈りもほとんどなく、実際に罪を認識することもほとんどなく、生きた信仰の欠如により、多くの人が私たちの救い主が豊かに与えてくださった恵みを受容できなくなります。

神はご自分の民を試みるつもりでした。彼の手は預言の期間の計算における誤りを隠しました。アドベンチストたちはこの間違いを発見しませんでしたし、彼らの反対派の最も知識のある人たちもそれを発見しませんでした。彼らはこう言った、「あなたの預言の期間の数は正しい。何か大きな出来事が起ころうとしている。

場所;しかし、それはミラー氏の予測ではない。しかし、キリストの再臨ではなく、世界の回心です。」

期待の時は過ぎ、キリストは民の救出のために現れませんでした。誠実な信仰と愛を持って救い主を待ち望んでいた人々は激しい失望を経験しました。しかし、神の目的は達成されました。彼は、彼の出現を期待していると公言した人々の心を試していました。彼らの中には、恐怖以上の動機で動かされた人たちがたくさんいた。彼らの信仰告白は彼らの心や生活に影響を与えませんでした。期待した出来事が起こらなかったとき、彼らは失望していないと宣言した。彼らはキリストが来られるなど一度も信じていませんでした。彼らは真の信者の悲しみを最初に嘲笑した人々の一人でした。

しかしイエスと天の軍勢全体は、失望していたにもかかわらず、愛と同情の目で試練に遭った忠実な人々に目を向けました。目に見えるものと見えないものを隔てるヴェールが脇に引かれていれば、天使たちがそれらの忠実な魂に近づき、サタンの矢から彼らを守っているのが見えただろう。

第21章

拒否された警告

再臨の教義を説くにあたって、ウィリアム・ミラーとその仲間たちは、人々を目覚めさせて裁きに備えさせるという唯一の目的のために働いてきた。彼らは、宗教を公言する人々の目を教会の真の希望と、より深いキリスト教経験の必要性に対して開かせようと努めていました。彼らはまた、直ちに悔い改めと神への回心を強制するために、未回心者を目覚めさせるよう努めました。「彼らは人々を宗教的な宗派や政党に改宗させようとはしなかった。したがって、彼らは組織や規律に干渉することなく、すべての政党や宗派の間で努力した。」

ミラー氏は、「これまでの仕事を通じて、既存の宗派とは別の利益を確立したいとか、ある宗派に利益をもたらして別の宗派に不利益をもたらしたいという願望や考えは一度もなかった。私はすべての宗派に好意を寄せようと考えた。仮にすべてのキリスト教徒がそうするだろうと仮定すると、喜んでください——私はキリストの再臨という観点に立っていて、私が見たように物事を見なかった人たちも、この教義を受け入れた人たちと同じように愛するだろうということを考えていたので、別個に集会を開く必要はないと思いました。願いは、魂を神に回心させ、来たるべき裁きを世界に知らせ、神との平和を見つけることができる心の準備をするよう同胞を説得することでした。現存するさまざまな教会。」

彼の仕事は教会の再建に向けたものであったため、しばらくの間好意的に見られていました。しかし、牧師や宗教指導者たちは再臨の教義に反対することを決定し、この主題に関するあらゆる扇動を抑え込みたいと考えたため、説教壇からそれに反対しただけでなく、信者が再臨の説教に参加する特権さえも否定した。教会の集会でそのような希望について語ることで、このようにして、信者たちは自分たちが大きな艱難と困惑の状況に陥っていることに気づきました。

彼らは自分たちの教会を愛し、教会から離れることを拒否しました。しかし、神の言葉の証言が脇に置かれ、預言を調査する権利が否定されたのを見て、彼らは神への忠誠心が服従を許さないと感じました。神の言葉の証言を阻止しようとした人々は、「真理の柱であり基礎」であるキリストの教会の一部であるとは見なされませんでした。その結果、彼らは彼らとの関係を断つことが正当化されたと感じました。1844年の夏、約5万人の会員が教会を去りました。

このとき、米国のほとんどの教会で顕著な変化が観察されました。長年にわたって、世俗的な慣習や慣習への徐々にではあるが不変の順応と、それに伴う真の精神的生活の低下が注目されてきました。しかしその年、国内のほぼすべての教会で突然の顕著な衰退の証拠が明らかになった。誰も原因を特定できなかったが、その事実自体は報道機関と説教壇の両方で広くコメントされ、注目された。

フィラデルフィア中老会の集会で、よく使われている解説書の著者であり、同市の主要教会の一つの牧師でもあるバーンズ氏はこう宣言した。もし彼が多かれ少なかれ改宗者を受け入れずに儀式を執行していたら。しかし今では、クリスチャンと称する人々に目覚めも回心も恵みの明らかな成長も見られず、彼のオフィスに来る人もいない。

彼らの魂の救いについて語るために活動します。ビジネスの増加と商工業の明るい見通しに伴い、世俗化への傾向が高まっています。これはすべての宗派で起こります。」

同年2月、Prof.オーバリン大学のフィニー氏は、「一般に、わが国のプロテスタント教会は、この時代のほとんどすべての道徳改革に対して無関心であり、敵対的であるという事実を目の前で知っている。いくつかの例外はあるが、宗教改革には十分ではない」と語った。蔓延しなくなる状況。

また、もう一つの裏付けとなる事実があります。それは、教会には復活の影響力がほぼ普遍的に存在していないということです。精神的な無関心はほとんどあらゆるものに浸透しており、非常に根深いものです。これは全国の宗教報道機関が証言していることです。教会員はかなりの程度、ファッション愛好家になり、快樂の祭典、ダンス、お祭りなどで悪者と手を組むようになっていく。しかし、この痛ましいテーマにこだわる必要はありません。一般に教会が悲しいほど墮落しつつあることを示す証拠が蓄積され、私たちに重くのしかかっていることを知るだけで十分です。彼らは主から遠く離れ、主も彼らから遠ざかりました。」

そして、宗教テレスコープの編集者の一人は、「私たちは、現在のような宗教的衰退を目の当たりにしたことはありません。本当に、教会は目を覚まして、教会を悩ませているものの原因を探るべきです。なぜなら、シオンを愛する者は皆、そうしなければならないからです。」と証言しました。真の回心の事例がいに稀で稀であるかを思い出すとき、そして罪人たちのほぼ比類のない悔い改めと頑なさを思い出すとき、私たちはほとんど無意識にこう叫んでしまう、『神は慈悲深いことを忘れたのだろうか？あるいは、慈悲の扉は閉ざされてしまったのだろうか？』

そのような状況は、理由もなく教会には決して存在しません。国家、教会、個人に降りかかる霊的な暗闇は、神の恵みの助けを神の側が恣意的に撤回したことによるものではなく、人間側の神の光の無視または拒絶によるものです。この真理の顕著な例は、イエス・キリストの時代のユダヤ人の歴史に現れています。彼らの世への献身と神と神の言葉の忘れによって、彼らの理解力は暗くなり、彼らの心は世俗的で官能的になってしまいました。このようにして彼らはメシアの到来を知らず、高慢と不信仰のゆえに救い主を拒絶したのです。そのときでさえ、神はユダヤ国民から救いの祝福についての知識や救いの祝福への参加を取り消されませんでした。しかし、真理を拒否した人たちは、天からの賜物に対するすべての欲求を失いました。彼らは、自分たちの中にあつた光が闇になるまで、「闇を光に、光を闇に交換」しました。そしてこの暗闇はなんと素晴らしかったことでしょう！

重要な敬虔の精神がまったく欠けているかもしれないが、人間に宗教の形態を保持させることはサタンの方策の一部である。ユダヤ人は福音を拒否した後も、古代の儀式を熱心に維持し続けました。彼らは、神の存在がもはや彼らの間に存在しないことを認めなかったにもかかわらず、国家排他主義を厳格に維持した。ダニエルの預言はメシアの到来の時を非常に明確に示し、彼の死をあまりにも直接的に予言したため、彼らはその研究を阻止するためにあらゆる手段を尽くし、最終的にラビは時間を計算しようとしたすべての人々に呪いを宣告しました。イスラエルの民は千九百年間、盲目と悔い改めの中に留まり、慈悲深い救いの申し出には無関心で、福音の祝福を忘れ、天の光を拒否する危険性についての厳粛かつ恐ろしい警告を忘れていました。

そのような原因が存在する場合はどこでも、同じ結果が続きます。義務の信念が自分の傾向を妨げるために意図的に抑圧する人は、最終的には真実と誤りを区別する能力を失うでしょう。理解が曖昧になり、良心が鈍くなり、心がかたくなになり、

魂は神から離れてしまいます。神の真理のメッセージが軽視され、軽く扱われるところでは、教会は暗闇に包まれます。信仰と愛は冷たくなり、不和と疎外が入り込みます。教会員は関心とエネルギーを世俗的な努力に集中させ、罪人は悔い改めの中でかたくなになります。

黙示録 14 章の最初の天使のメッセージは、神の裁きの時を告げ、人々に神を恐れ崇拝するよう呼びかけるもので、神の民を公言する人々を世の腐敗した影響から引き離し、彼らを自分たちの罪の意識に目覚めさせることを目的としていました。本当の自分、世俗性と背教の状態。このメッセージの中で、神は教会に警告を送り、もしそれが受け入れられていけば、教会を神から引き離している悪は正されたであろうという警告を与えました。もし彼らが天からのメッセージを受け取り、主の前に心をへりくだり、熱心に主の御前に立とうとしていけば、神の御霊と力が彼らの間に現れたであろう。教会は、信者たちが「心と魂を一つにし」、「神の言葉を大胆に宣言した」使徒時代に存在していた一致、信仰、愛の祝福された状態を再び達成したであろう。救われようとする人々を教会に呼び寄せなさい」（使徒4:32,31,2:47）。

もし神の民と自称する人々が、神の聖言から自分たちを照らす光を受け取っていたなら、彼らはキリストが祈った一致、そして使徒が「平和のきずなにおける御霊の一致」と表現している一致に達したであろう。「あなたが召されたという一つの希望で召されたのと同じように、一つの体と一つの御霊があります。一つの主、一つの信仰、一つのバプテスマです。」と彼は言います。（エフェソス 4:3-5）。

これが、アドベントメッセージを受け入れた人々が経験した祝福された結果でした。彼らは「さまざまな宗派の出身であり、宗派の壁は徹底的に取り払われました。対立する信条は原子にまで還元されました。地上千年期という非聖書的な希望は脇に置かれ、再臨についての誤った見方は正されました。誇りと世界への順応性は吹き飛ばされました。バグが修正されました。心は甘い交わりで一つになり、愛と喜びが最高に君臨しました。この教義がそれを受け入れた少数の人たちに同じことをしたとしても、もし彼らがそれを受け入れたなら、すべての人たちにも同じことをしたでしょう。

しかし、教会は概してそれを拒否しました。「イスラエルの家を見守る者」としてイエスの来臨のしるしを真っ先に見分けるはずだった牧師たちは、預言者の証言からも時代のしるしからも真実を学ぶことができなかつた。世俗的な希望と野心で彼らの心が満たされるにつれ、神への愛と神の御言葉への信仰は冷めていきました。そして、降臨の教義が提示されたとき、それは彼らの偏見と不信仰を呼び起こすだけでした。そのメッセージの大部分が一般信徒によって説かれたという事実は、それに対する反論として提示されました。以前と同様に、神の言葉の明確な証言は、「君主やパリサイ人の中に信じた人はいますか?」という質問に反対しました。そして、預言の時代から引き出された議論に反駁する作業は難しいと考え、多くの人々が預言の研究を思いとどまらせ、預言の書は封印されており理解すべきではないと教えた。大勢の人々は暗黙のうちに牧師を信頼していたが、警告に耳を傾けようとしなかつた。また、真実を確信していても、「シナゴグから追放」されることを恐れて、あえて告白しなかつた人たちもいた。神が教会を試し、清めるために送られたメッセージは、キリストではなくこの世に愛情を注ぐ人々の数がどれほど多いかをはっきりと明らかにしました。彼らを地球に結びつける絆は、天上の魅力よりも強かった。彼らは世俗の知恵の声に耳を傾けることを好み、真実を探求するメッセージから目を背けました。

最初の天使の警告を拒否して、彼らは天が彼らを回復するために備えた手段を軽蔑しました。彼らは神から自分たちを引き離す悪を正そうとした慈悲深い使者に反抗し、より大きな勢いで再び世界の友情を求めました。1844年に教会に存在した世俗性、背教、霊的死といった恐ろしい状態の原因はここにありました。

黙示録 14 章では、最初の天使に続いて 2 番目の天使がこう宣言します。「バビロンは倒れた、あの大都市は倒れた。それはすべての国々に彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲ませた。」（黙示録 14:8）。「バビロン」という用語は「バベル」に由来しており、混乱を意味します。これは聖書の中で、さまざまな形の偽りの宗教または背教的な宗教を指すために使用されています。黙示録 17 章では、バビロンは女性によって表されており、聖書の中で教会の象徴として使用されている像です。清らかな教会を代表する高潔な女性、背教した教会を比喻する卑劣な女性。

聖書では、キリストとその教会との関係の神聖かつ永続的な性質は、夫婦の結びつきによって表されています。主は厳粛な契約を通してご自分の民をご自分と結び付け、彼らの神となることを約束し、彼らは自らが主であり、主だけになることを誓いました。主は言われました、「そして私はあなたを永遠に私と婚約させます。私は義と裁きと親切と憐れみをもってあなたを私と婚約させます。」（ホセア 2:19）。そしてまた「私はあなたと結婚します。」（エレ 3:14）。そして、パウロは新約聖書で同じ人物を使って、「私はあなたを純粋な処女として一人の夫、さらにはキリストに差し出すように用意しました。」と述べています。（IIコリント11:2）。

教会の信頼と愛情がキリストから離れ、世俗的なものへの愛が魂を占めることを許す教会のキリストに対する不誠実は、結婚の誓いの違反に喩えられます。主から離れたイスラエルの罪は、このイメージの下に示されています。そして、彼らが軽蔑していた神のすばらしい愛が感動的に描かれています。「わたしはあなたに誓い、あなたと契約を結んだ、と主エホバは言われる。そうすればあなたはわたしのものになった。」「そして、あなたは女王になるまで、非常に美しく、裕福でした。そして、あなたの名声はその美しさのゆえに国々に広まりました。なぜなら、あなたは私があなたに課した私の栄光のゆえに完璧だったからです...」

しかし、あなたは自分の美しさを信頼し、自分の名声のために身を墮落させました。」「女性が仲間から不実で離れるように、イスラエルの家よ、あなたは私に対して不実を犯したと主は言われます。」；「姦淫の女性として、夫の代わりに、見知らぬ人を受け入れます。」（エゼキエル 16:8,13-15,32; エレミヤ 3:20）。

新約聖書では、世界との友情を求め、それを神の好意よりも優先する自称クリスチャンに対して、非常によく似た言葉が使われています。使徒ヤコブはこう言います。「姦淫する者たちよ、姦淫する者たちよ、世との友情は神に対する敵対であることを知らないのですか。ですから、世の友人になりたい者は、自分自身を神の敵にします。」

黙示録 17 章の女性、バビロンは、「紫と緋色の服を着て、金、宝石、真珠で飾られ、手には忌まわしいものと汚物で満たされた金の杯を持っていた...そして彼女の上に」と描写されています。額には名前が書かれていた：ミステリー、大いなるバビロン、娼婦の母。預言者はこう言います。「私はその女が聖徒たちの血とイエスの証人の血に酔っているのを見た。」また、バビロンは「地の王たちを統治する大いなる都市」であるとも宣言しています（黙示録17:4-6,18）。何世紀にもわたってキリスト教世界の君主に対する専制的な支配を維持してきた権力はローマです。紫と緋色、金、真珠、宝石は、傲慢なローマの宮殿が示す壮麗さと王室の威厳を鮮やかに描写しています。そして、キリストの追隨者たちをこれほど残酷に迫害してきた教会ほど、「聖徒の血に酔っている」と真に宣言できる権力は他にないでしょう。バビロンはまた、「地の王たち」との不法な関係の罪でも告発されています。それは主が取り去られたためであり、

ユダヤ教会が売春婦となった異教徒との同盟。そしてローマも同様に世界権力に支援を求めて自らを墮落させ、同様の非難を受ける。

バビロンは「売春婦の母」と言われています。彼の娘たちは、世界と違法な同盟を結ぶために真理と神の承認を犠牲にした例に倣い、教義と伝統に固執する教会を象徴すべきである。バビロンの崩壊を告げる黙示録 14 章のメッセージは、かつては純粹であったが後に倒錯した宗教組織にも当てはまらなければなりません。このメッセージは裁きについての警告に続くものであるため、終わりの日に宣言されなければなりません。したがって、この教会は何世紀にもわたって崩壊した状態にあるため、ローマ教会のみを指すことはできません。

さらに、黙示録18章では、まだ先のことになるメッセージの中で、神の民はバビロンを離れるように勧められています。この經典によれば、神の民の多くは今もバビロンに残っているはずで、そして、今日キリストの信者の大多数を占めている宗教法人はどこでしょうか？間違いなく、プロテスタントの信仰を告白するさまざまな教会で。出現当時、これらの教会は神の側で高貴な地位を占め、真理と神の祝福が彼らと共にありました。未信者の世界ですら、福音の原則を受け入れた結果として有益な結果がもたらされたことを認識せざるを得なくなってきました。イスラエルへの預言者の言葉は次のとおりです。「そしてあなたの名声はあなたの美しさのゆえに諸国民の間に広まった。あなたはわたしがあなたに与えたわたしの栄光のゆえに完全だったからである、と主エホバは言われる。」

(エゼキエル書 16:14)。しかし彼らは、イスラエルの呪いと破滅と同じ欲望、つまりその慣習を模倣し、邪悪な者の友情を求める欲望に陥ったのです。「あなたは自分の美しさを信頼し、名声のために自分を墮落させました。」

プロテスタント教会の多くはローマの例に倣い、「地の王たち」と邪悪な同盟を結んでいます。国教会は、世俗政府や他の宗派との関係を通じて、世界の好意を求めています。そして、「バビロン」（混乱）という用語は、これらの機関に適切に適用されるかもしれません。彼らは皆、自分たちの教義を聖書に由来していると公言していますが、完全に相反する信条や理論を持つ無数の宗派に分かれています。

世界との罪深い結合に加えて、ローマから分離した教会には別の特徴があります。ローマ・カトリックの著書「カトリック・クリスチャン・インストラクテッド」は、次のように非難している。そしてホプキンス氏は、ミレニアムに関する論文の中で、「反キリスト教の精神と実践が現在ローマ教会と呼ばれているものに限定されていると考える理由はない。プロテスタント教会には反キリストが多く存在しており、腐敗と邪悪から完全に改革されるには程遠いのです。」

長老派教会とローマ教会の分離について、博士はこう書いています。
ガスリー：「300年前、私たちの教会は、旗に聖書を開いて、名簿に『聖書を調べよ』というモットーを掲げて、ローマの門を出て行進しました。」
次に彼は重要な質問をします。「彼らはバビロンからきれいになって出てきたのですか？」

チャールズ・スポルジンは、「英国国教会は秘跡主義に完全に侵食されているようだが、その不適合は哲学的不貞によってほとんど悪性的な方法で引き裂かれているようだ。我々がより良いものを期待していた人々が、一人また一人と信仰の基礎から外れつつある」と語った。英国の心そのものが、未だに説教壇に登って自らをキリスト教徒と称する、嘆かわしい不誠実さのせいで蝕まれていると私は思う。」

この大背教の起源は何でしょうか？教会はどのようにして福音の単純さから初めて離れたのでしょうか？異教の慣習に従うことによって、異教徒によるキリスト教の受容を促進する。使徒パウロは、彼の時代においてさえ、「不義の奥義が働いている。」(IIテサロニケ2:7)と宣言しました。使徒たちの生涯の間、教会は比較的純粋なままでした。新たな改宗者の到着を確実にするために、キリスト教信仰の崇高な基準が引き下げられ、その結果、「異教の洪水が教会に侵入し、教会の習慣、習慣、偶像を持ち込んだ」のです。キリスト教は世俗の支配者の好意と支持を確保していたため、名目上は群衆に受け入れられましたが、多くの人々はキリスト教の外観を持ちながらも、「本質的には異教徒であり、特に偶像を密かに崇拝することにおいては依然として異教徒であった」のです。

プロテスタントを自称するほぼすべての教会で同じプロセスが繰り返されてきたのではないだろうか？創設者が亡くなると、真の改革の精神を持った人々、その子孫が引き継ぎ、その理念に新たなモデルを与えます。彼らは父親の信条を盲目的に遵守し、いかなる真実も事前に受け入れることを拒否しますが、改革者の子供たちは、父親が定めた謙虚さ、自己否定、世界の放棄の模範から大きく離れています。したがって、原始的な単純さは消えます。世俗性の洪水が教会に押し寄せ、その習慣、習慣、偶像を持ち込んでしまいます。

そこには！「神に対する敵意」である世の友情が、キリストの追隨を公言する人々の間で大切にされているのは、なんと恐ろしいことでしょう。キリスト教世界中の人気のある教会は、謙虚さ、自己否定、単純さ、敬虔さという聖書の基準からどれほど大きく逸脱していることでしょうか。ジョン・ウェズリーは、お金の正しい使い方について語るときに、このことを次のように表現しました：「目の欲望を満足させるためだけで、非常に貴重な才能の一部を、余分な、高価な衣服や不必要な装飾品に浪費してはなりません。その一部が家の装飾に使われたり、不要な家具や高価な家具に使われたり、高価な絵画、絵画、金メッキに使われたりするのです。」「人生の欲望を満たすため、人々の賞賛や称賛を得るためには何も計画してはなりません。」「あなたが自分自身に良いことをしている限り、人々はあなたのことを良く言うでしょう。」「あなたが紫と上質の亜麻布を着て、毎日贅沢に暮らしている限り、多くの人があなたの優雅な趣味、寛大さ、もてなしを称賛することは間違いありません。しかし、男性の賞賛をそんな高い値段で買ってはいけません。むしろ、神から与えられる荣誉に満足しなさい。」しかし、当時の多くの教会では、そのような教えは無関心に扱われていました。

宗教という職業は世界中で人気があります。支配者、政治家、弁護士、医師、商人は、社会の尊敬と信頼を確保し、自らの世俗的な利益を促進する手段として教会に加わります。

こうして彼らは、キリスト教を信仰しているという名のもとに、不当な取引を隠蔽しようとします。さまざまな宗教宗派は、洗礼を受けた世俗的な人々の富と影響力によって強化され、より大きな人気と後援を獲得するためにさらに努力しています。最も贅沢な方法で装飾された壮麗な教会が、最も有名な大通りに建てられています。参拝者は高価でファッショナブルな衣装を着ています。人々を楽しませ、魅了する才能ある牧師には高い給料が支払われます。彼の説教は一般的な罪について言及することはできませんが、滑らかで洗練された耳に心地よいものでなければなりません。このようにして、不敬なファッション愛好家は教会の教科書に記録され、彼らの罪は敬虔な信仰の下に隠蔽されます。

主要な世俗新聞の一つは、世界に対する自称キリスト教徒の現在の態度について、「いつの間にか教会は時代の精神に服従し、礼拝の形態を現代のニーズに適応させてきた」と述べた。「宗教を魅力的なものにするのに真に貢献するあらゆるものを、教会は現在その手段として利用しています。」そして、ニューヨーク・インディペンデント紙の記者は、今日のメソジズムに関して次のように述べています：「敬虔な人と無宗教の人を隔てる境界線は、ある種の黄昏の中に消えていき、双方の熱心な人々は、あなた方の考え方の違いをすべて解消しようと躍起になっています。」演技もエンターテイメントも。「宗教の人気は主に、義務を誠実に果たさずにその利益を確保したいと願う人々の数を増加させる傾向にあります。」

ハワード・クロスビーは言う：「神の教会は今日世界に求愛している。その会員たちは世界を不敬虔な者のレベルに引き上げようとしている。舞踏会、劇場、ヌーディストや猥褻な芸術、リベラルな道徳をすべて伴った社会的贅沢が神聖な限界を侵食している」「教会のすべての事柄を満足させようとして、キリスト教徒は断食と復活祭の期間と教会の装飾に関して大きな取引を行っています。ユダヤ人の教会はその岩の上に設立されました。ローマの教会も同じように設立されました」そしてプロテスタントも同様の破滅を迎える段階に急速に近づいている。」

この世俗性と快楽の追求の潮流の中で、キリストの愛のための自己否定と犠牲はほぼ完全に失われています。「現在、私たちの教会で活動している男性や女性の中には、キリストのために何かを捧げたり、何かをしたりするために犠牲を払うよう子供のころに教育された人もいます。」しかし、「もし今資金が必要なら…誰からも寄付を求められるべきではありません。ああ、だめです！」

縁日、演劇、コメディ、昔ながらのディナー、または何か食べるものなど、人々を楽しませるものを用意してください。」

ウィスコンシン州のウォッシュバーン知事は年次メッセージの中で、「教会の展示物、慈善活動のための抽選会、慈善活動やその他の目的での宝くじ、賞品パッケージ、その他の種類の賞品の配布は、まさに犯罪の温床である。これらは無償で何かを約束していることを考慮すると、まさに犯罪の温床である」と述べた。；それらは彼らによって練習される運任せのゲームです。」同氏によれば、ギャンブルの有害な精神は、善良な市民にはほとんど知られていない程度に、これらの機関によって刺激され、活気づけられ、生かされているという。

世界への順応の精神がキリスト教世界全体の教会に浸透しつつあります。ロバート・アトキンスは、ロンドンで行われた説教の中で、イギリスに蔓延している霊的衰退について暗い描写をしている：「真の義人は地上から消えつつあり、それを心に留める人は誰もいない。今日、どの教会でも、信仰を告白する人々は、「彼らは世を愛し、神に従う者である。また、慰めを愛し、尊敬の対象となることを熱望している。彼らはキリストと共に苦しむように召されているが、あらゆる非難には尻込みする。背教、背教、背教、それは背教だ」「これはすべての教会のファサードに刻まれています。もし彼らがこれに気づき、これを感じたなら、希望はあるかもしれませんが。しかし、その後彼らは叫びます、『私は金持ちで、私は豊かで、私には何も欠けていません。』」

バビロンの宣言された大きな罪は、彼女が「すべての国々に自分の淫行の怒りのぶどう酒を飲ませた」ということです。彼女が世界に提示するこの魅惑的なカップは、地球の偉大な者たちとの違法な関係の結果として彼女が採用した誤った教義を表しています。世界との友情は彼女の信仰を腐敗させ、そして彼女は世界に腐敗した影響を及ぼし、神聖な文書の最も明確な主張に反対する教義を世界に教えます。

ローマは人々の聖書を抑圧し、すべての人が聖書そのものではなくその教えを受け入れるよう要求しました。神の言葉を人々に取り戻すのが宗教改革の仕事でした。しかし、次のようなこともまた真実ではないでしょうか。

現代の人々は、聖書よりも自分の信条や宗派の教えに信仰を置くように教えられているのでしょうか？チャールズ・ビーチャーはプロテスタント教会について次のように述べた。「聖なる教父たちが聖人や殉教者の崇拝に反対して発言された攻撃的な言葉にたじろぐのと同じ敏感さで、人々は自分たちの信仰に反するどんな無礼な言葉にもたじろぐ。プロテスタントの福音主義諸宗派は、このようにして、聖書以外の本を受け入れなければ、どこの説教者にも絶対になれないという方法で、自分たちの手だけでなく、お互いの手も結びつけてきました。「信条の力が今、ローマと同じくらい現実的な方法で、しかしはるかに巧妙に聖書を禁止し始めているという宣言には、想像上のものは何もありません。」

忠実な教師が神の言葉を解説すると、聖書を理解していると公言する学者、牧師が現れ、健全な教義を異端として非難し、真理の探求者を追い払います。もし世界がバビロンのぶどう酒に夢中になっていなかったら、多くの人々が神の言葉の明確で鋭い真理によって確信し、改心したであろう。しかし、宗教的信仰は非常に混乱しており、不調和であるため、人々は何を真実として信じるべきかわかりません。この世の悔い改めの罪は教会の入り口にあります。

黙示録 14 章の第二の天使のメッセージは 1844 年の夏に初めて説教され、その後、裁きの警告が最も広く宣言され、一般に拒否され、教会の衰退が見られた米国の教会に、より直接的に適用されるようになりました。教会の方が早かったのです。しかし、第二の天使のメッセージは 1844 年に完全には成就しませんでした。当時の教会は、待降節のメッセージの光を拒否した結果、道徳の低下を経験しました。しかしこの秋はまだ終わっていませんでした。今回だけの特別な真実を拒否し続けたことで、彼らはどんどん低くなっていきました。しかし、まだ「バビロンが倒れた…すべての国々にその淫行の怒りのぶどう酒を飲ませた」とは言えません。彼女はまだこのワインをすべての国民に飲ませていません。世界に順応し、現代の真理を試すことに無関心という精神があり、それはキリスト教世界のすべての国のプロテスタント信仰の教会に浸透しつつあります。そして、これらの教会は、第二の天使の厳粛かつ恐ろしい非難の中に含まれています。しかし、背教の動きはまだ頂点に達していません。

聖言は、主の再臨の前に、サタンが「あらゆる力と、しるしと、偽りの不思議と、あらゆる不正と欺瞞をもって」働くであろうと宣言しています。そして「救われるために真理の愛を受け取らない人々」は「誤謬の働き」に翻弄されることになり、その結果、彼らは嘘を信じてしまいます(IIテサロニケ 2:9-11)。この条件が達成され、キリスト教世界全体で教会と世界との結合が完全に完了するまで、バビロンの完全な崩壊は影響を受けません。この変化は漸進的であり、黙示録 14 章 8 節が完全に成就するのはまだ先のことです。

教会には霊的な暗闇と神からの疎外感が存在するにもかかわらずこれらはバビロンを構成していますが、キリストの真の追随者の大多数は今でもキリストの交わりにあります。今回の特別な真実を聞いたことがない人も多いでしょう。現状に不満を持ち、よりクリアな光を求めている人も少なくありません。彼らは自分たちがつながっている教会のキリストの姿を無駄に眺めます。これらの宗派が真実からますます遠ざかり、世界とより緊密に連携するにつれて、2つの階級間の差異は拡大し、最終的には分離に至るでしょう。神をこの上なく愛する人々が、「神を愛する者というよりは快楽を愛する者、敬虔さの形を持ちながらもその力を否定する者」ともはや結びつかない時代が来るでしょう。

黙示録 18 章は、黙示録 14 章 6 節から 12 節の三重の警告を拒否した結果、教会が第二の天使によって予告された状態に完全に達し、バビロンにまだいる神の民が召される時を指しています。彼らの交わりとは別に。このメッセージは世界に与えられる最後のメッセージであり、その働きを完了します。「真理を信じず、不法行為を楽しんでいた」（IIテサロニケ2:12）人々が、大きな欺瞞を受け入れて嘘を信じるように背を向けたとき、その時、真理の光は、心を開いているすべての人々を照らすでしょう。そうすれば、バビロンに残っているすべての主の子供たちは、「私の民よ、彼女から出て行きなさい」という呼びかけに耳を傾けるでしょう。（黙示録 18:4）。

第22章

予言は成就した

1844年の春、主の再臨が最初に期待されていた時期が過ぎ、信仰を持って主の出現を待っていた人々は、しばらく疑いと不安の餌食になりました。世界が彼らを完全に敗北者とみなし、彼らが幻想を大事にしていると感じたという事実にもかかわらず、彼らの慰めの源は依然として神の言葉でした。多くの人は聖書を研究し続け、より大きな光を得るために預言を注意深く研究しました。彼の立場を支持する聖書の証言は明確かつ決定的であるように思えました。誤解の余地のない兆候は、キリストの来臨が疑いなく近いことを示していました。罪人の回心とクリスチャンの霊的生活の復活における主の特別な祝福は、そのメッセージが天から来たことを証明しました。そして信者たちは失望を説明できませんでしたが、神が自分たちを導いてくださったと確信しました。あなたの過去の経験。

彼らが再臨の時に当てはまると考えていた預言の中に、彼らの不確実性と不安の状態に特別に適合した指示が散りばめられており、今では理解が曖昧になっていることが確実に実現するという確信を持って辛抱強く待つよう彼らに促しました。晴れて、やがて。

これらの預言の中には、ハバククの預言、第2章1節から4節がありました。「私は自分の監視下にあり、要塞の上に立って監視し、私に語りかけてくださる方と、私が告発されたときに何と答えるかを見るつもりです」「それから主は私に答えて言われた、「幻を書いて、通り過ぎる人が読めるように板に書きなさい。幻は定められた時のためのものであり、彼は最後まで語るであろうし、決して語ることはないであろう」」

すでに1842年に、預言の中で示現を書き、それをタブレットにはっきりと読み取れるようにして、通り過ぎる人が誰でも読めるようにするという指針が示され、チャールズ・フィッチに示現を説明する目的で預言図を作成するよう提案していました。ダニエルと黙示録の。このイラストの写真の出版は、ハバククからの命令の履行とみなされました。当時、幻の成就における明らかな遅れ、つまり時間の遅れが同じ預言の中に示されていることに誰も気づきませんでした。失望した後、この文章は非常に重要であるように思えました。「幻はまだ定められた時のためのもので、最後まで彼は話し、嘘をつきません。もし彼が遅れても、彼を待ちなさい。彼は必ず来るからです。彼は来ません。」待てよ……信仰によって義人は生きるだろう。」

エゼキエルの預言の一部は、信者にとって力と慰めの源でもありました。「そして、主の言葉がわたしに臨んだ、こう言った。『人の子よ、あなたがたがイスラエルの地で、『日は長く、すべての幻は滅びる』と言っているのは何ということだろう。だから彼らにこう言いなさい。主エホバは言われる：……日が来て、あらゆる幻の言葉が……わたしは語る、そしてわたしが語る言葉は実現するであろう、それは延期されることはない。』『イスラエルの家の人々は言う、『この人が見ている幻は何日も続くもので、遠い昔のことを預言している。だから彼らに言いなさい、主エホバはこう仰せられる、わたしの言葉はもはや延期されない』そうすれば、私の言ったことは成就します。』(エゼキエル12:21-25,27,28)。

期待していた信者たちは、終わりを最初から知っている神が時代を通して見下ろしていたと信じて喜び、彼らの失望を予見し、

彼は彼らに励ましと希望の言葉を与えた。もし聖書のそのような部分が、忍耐強く待ち、神の御言葉にしっかりと信頼し続けるようにと忠告していたとしたら、彼らの信仰はその試練の時に失敗していたでしょう。

マタイ 25 章の 10 人の処女のたとえ話も、アドベンチスト派の人々の経験を示しています。マタイ 24 章で、キリストの来臨と世の終わりのしるしに関する弟子たちの質問に答えて、キリストは初臨から再臨までの世界と教会の歴史の中で最も重要な出来事のいくつかを指摘されました。エルサレムの破壊、異教と教皇の迫害による教会の大難難、太陽と月の暗転、そして星の落下など。

この後、イエスはご自身の王国への到来について語り、イエスの出現を待つ二つの階級の僕を表すと話を提案されました。25 章は次の言葉で始まります。「そのとき、天の国は 10 人の処女のようになるでしょう。」ここでは、終わりの日に生きている教会が指摘されており、第 24 章の終わりで示されたものと同じです。このたとえ話では、その経験が東方の結婚式の出来事によって説明されています。

「そのとき、天国は、ともしびを持って花婿に会いに出かけた 10 人の乙女のようになるでしょう。そして、彼らのうちの 5 人は賢く、5 人は愚かでした。狂った女たちはランプを持っていきましたが、油は持っていませんでした。しかし、賢い人たちはランプと一緒に器に油を入れました。花婿が遅れたので、皆はまどろんで眠りに落ちましたが、真夜中に叫び声が聞こえました。「花婿が来た、迎えに行きなさい。」

最初の天使のメッセージによって告げられたキリストの到来は、花婿の到来を表すものと理解されていました。主の差し迫った到来の宣言のもとで行われた徹底的な改革は、処女たちの出発と似ていました。このたとえ話では、マタイ 24 章と同様に、2 つの階級が表されています。彼らは皆、ランプである聖書を手に取り、その明かりの下で花婿に会いに出かけました。しかし、「愚かな者たちはともしびを持ち、油を持ち歩かなかった」のに対し、「賢い者たちは、ともしびとともに、器に油を持ち込んだ」のです。最後のクラスは神の恵みと、御言葉を足元のともしび、道の光とする聖霊の再生と光を与える力を受けていました。神への恐れの中で彼らは真理を学ぶために聖書を研究し、心と命の清さを非常に熱心に求めました。彼らには個人的な経験、神と神の御言葉への信仰があり、それは失望や遅れによって覆されることはありませんでした。他の人たちは、「ランプを持って、油も持って行かなかった」。これらは衝動的に動かされたものでした。彼らの恐怖は厳粛な音信によって興奮したが、兄弟たちの信仰に依存しており、真理や世における真の恵みの働きについての十分な理解はなく、良い感情の揺れる光に満足していた。心臓。彼らはすぐに報酬が得られるという期待に胸を膨らませて、主に会いに出かけました。しかし、彼らは遅れと失望に対する準備ができていませんでした。試練が来たとき、彼らの信仰は失敗し、彼らの光は暗くなりました。

「そして、花婿が遅れたとき、彼らはみなまどろんで眠りに落ちました。」花婿の遅れは、主が期待されていた時間の経過、失望、そして明らかに遅れを表しています。無関心はすぐに崩れ始め、彼らの努力は弱まりましたが、聖書の個人的な知識に基づいて信仰を持っていた人々は、足の下に岩があり、失望の波がそれを揺るがすことはできませんでした。無関心で信仰を放棄した階級、より明確な光が与えられるまで辛抱強く待っている階級だったが、試練の夜、最後の階級はある程度負けたようだった。

ポイントは、彼の熱意と献身です。軽薄で無関心な人々は、もはや兄弟たちの信仰にしっかりと立つことができませんでした。誰もが自分で立ったり倒れたりする必要がありました。

この時点で、狂信が現れ始めました。このメッセージの熱心な信者であると公言していた人々の中には、神の言葉が唯一の間違いない指針であることを拒否し、聖霊に導かれていると主張して、自分の感情、印象、想像力の制御に身を委ねた人もいました。中には盲目的で狂信的な熱意を表し、自分たちの処置を認めない者全員を非難する者もいた。彼らの狂信的な考えや行為は、アドベンチストの偉大な友愛団体の間で共感を得られませんでした。真理の大義に不名誉をもたらすのに役立ちました。

サタンはこれらの手段によって神の働きに反対し、神を滅ぼそうとしていました。人々はアドベンチスト運動によって大いに揺さぶられ、何千人もの罪人が改宗しました。忠実な人たちは、たとえ遅れが生じていたとしても、真理を宣べ伝える業に献身的に取り組みました。悪の君主は臣民を失いつつあり、神の大義に対して非難の声が高まるようにするために、信仰を告白する一部の人々を欺き、彼らを極端な実践に導こうとした。その代理人たちは、アドベンチストとその信仰を忌まわしいものにするために、あらゆる誤り、欠陥、不都合な行為を発見し、最も誇張された見解で公表する用意ができていました。

したがって、彼の力が彼らの心を支配しながら、再臨時に信仰告白をするよう導いた人数が多ければ多いほど、信者全体の代表として彼らに注意を喚起する際に彼が得る利点は大きくなるだろう。

サタンは「私たちの同胞を告発する者」であり、主の民の善行が見過ごされている間に、その誤りや欠点を偵察し、明るみに出すよう人間を鼓舞するのはサタンの霊です。神が魂の救いのために働くとき、彼は常に活動的です。神の子らが主の前に現れると、サタンも彼らの中に入ります。あらゆるリバイバルの中に、神は心が清められておらず、精神的にバランスのとれていないものを導入する用意ができています。これらがいくつかの真実の点を受け入れ、信者の間で地位を獲得すると、彼はそれらを介して不注意な人々を欺く理論を導入するよう努めます。礼拝の家や主の食卓の周りであっても、神の子供たちと一緒にいることで自分が真のクリスチャンであることを証明する人は誰もいません。サタンは、最も厳粛な行事の際に、自分の手先として利用できる人々の形でそこに現れることがよくあります。

悪の君主は、神の民が天の都を目指して旅を進める地面の隅々まで争う。教会の歴史全体を通して、重大な障害に遭遇せずに改革が進められたことはありません。パウロの時代もそうでした。

使徒が教会を建てたところにはどこでも、信仰を受け入れると公言する人もいましたが、もし受け入れられれば最終的には真理への愛を消滅させることになる異端が浸透していました。

ルターはまた、神の直接の代弁者であると主張し、したがって聖書の証言よりも自分の考えや意見を優先する狂信的な人々の行動により、大きな当惑と苦悩に苦しみました。信仰も経験も欠けていたが、かなりの自立心を持ち、何かニュースを聞いたり伝えたりするのが好きだった多くの人々は、新しい教師たちの見せかけに騙され、神がルターに起こさせたものを打ち壊すというサタンの手先の働きに加わった。そして、ウェスリー夫妻やその影響力と信仰によって世界を祝福した他の人々は、あらゆる段階で、バランスを欠いた過激派で神聖でない人々をあらゆる種類の狂信に導くサタンの欺瞞に直面しました。

ギリエルメ・ミラーは、狂信につながる影響に対して全く同情を持ちませんでした。彼はルターと同じように、あらゆる霊は神の言葉によって試されるべきであると宣言しました。「悪魔は現代の一部の人々の精神に対して大きな力を持っています。では、それらがどのような霊であるかをどうやって知ることができるのでしょうか。聖書はこう答えています。『その実によってあなたはそれらを知ることができます』。』世界、そして私たちは命じられています

試してみてください。今日の世界で私たちを慎み正しく、敬虔に生きるように導かない霊は、キリストの霊ではありません。私は、これらの無秩序な動きにはサタンが多くの関与をしているとますます確信しています。」 「完全に神聖化されたと主張する私たちの多くは、人間の伝統に従っており、そのような主張をしない他の人々と同様に明らかに真理を知らないようです。」 「誤りの霊は私たちを真理から遠ざけますが、神の霊は私たちを真理に導きます。しかし、あなたがたに言わせれば、ある人は誤りを犯していて、自分は真理を持っていると思っているかもしれません。では、どうなるでしょうか？」

私たちは答えます、「御霊と御言葉は一致します。」人が神の言葉によって自分自身を判断し、その言葉全体に完全な調和を見つけたなら、その人は自分が真理の中にいることを信じることができます。しかし、もし自分が導かれている精神が律法や神の書の内容全体と調和していないことに気づいたら、悪魔の罠にたまたま引っかからないように注意して歩ませなさい。」 「私はキリスト教世界の喧騒よりも、啓発された表情、涙ぐんだ顔、途切れ途切れの発言から、内なる敬虔さの証拠を得ることがよくありました。」

宗教改革の時代、その敵は狂信の悪はすべて狂信と闘うために最も熱心に働いていた人々のせいになりました。アドベンチスト運動の反対者たちも同様の態度をとりました。そして、過激派や狂信者の間違いを歪曲したり推定したりするだけでは満足せず、真実とは少しも似ていない不利な噂を広めました。これらの人々は偏見と憎しみに駆られていました。彼らの平和は、キリストが戸口におられるという宣言によって乱されました。彼らはこれが真実であるかもしれないと恐れ、そうでないことを望み、これがアドベンチストと彼らの信仰に対する戦争の理由でした。

パウロやルターの時代には教会に狂信者や欺瞞者が存在していたことを考えると、一部の狂信者がアドベンチストの隊列に浸透していたという事実は、その運動が神から出たものではないと判断する大きな理由にはならず、またそれも言い訳にはなりません。彼らの仕事を非難するには十分だ。神の民が眠りから目覚め、悔い改めと改革の働きを熱心に始められますように。イエスにある真理を知るために聖書を調べさせてください。完全に神に奉献すれば、サタンが依然として活動し、警戒しているという証拠には事欠きません。彼はあらゆる欺瞞を駆使して自らの力を現し、王国の墮天使たちに助けを求めるだろう。

狂信と分裂を生み出したのは再臨の宣言ではありませんでした。これらは、アドベンチスト派が自分たちの本当の立場について疑問と困惑を抱いていた 1844 年の夏に現れました。最初の天使のメッセージの説教と「真夜中の叫び」は、狂信と不和を直接抑圧する傾向がありましたが、これらの厳粛な運動に参加した人々は調和していました。

彼らの心は互いへの愛と、すぐに会いたいと願っていたイエスへの愛で満たされていました。一つの信仰、一つの祝福された希望が彼らを人間の影響力の制御を超えて引き上げ、サタンの攻撃に対する盾となった。

「そして、花婿が帰ってくると、みんなまどろんで眠りに落ちました。しかし、真夜中に叫び声が聞こえました。『花婿が来たよ。私は花婿を迎えに出かけました。それから、あの乙女たちはみな起き上がり、ともしびの火を消しました。』（マタイ 25:5-7)。1844 年の夏、2,300 日の終わりと考えられていた期間と、後に判明した期間が延長されると考えられていた同年の秋の間の頃、メッセージは次のように述べられました。まさに聖書の言葉通りに宣言されました。「花婿がやって来ました！」

この運動を推進したのは、エルサレム復興に関するアルタクセルクセスの法令が発見されたことであり、これがエルサレムの時代の出発点となった。

2,300日は、当初考えられていたように年の初めではなく、紀元前457年の秋に施行されました。457年の秋から数え始めて、2,300年間は1844年の秋に終わります。

旧約聖書の象徴に基づく議論もまた、「聖域の浄化」に代表される出来事が行われる時期として秋を示しました。このことは、キリストの初臨に関連する象徴がどのように成就したかに注目すると、非常に明らかになりました。

過越の小羊の犠牲はキリストの死の影でした。パウロはこう言います、「私たちの過越の祭りであるキリストは、私たちのために犠牲になりました。」(コリント5:7)。復活祭の時期に主の前で振られた初穂の束は、キリストの復活を象徴していました。パウロは主と主のすべての民の復活について、「初穂であるキリスト、その後、キリストの来臨の際にキリストのものとなる者たちである」と宣言しています。(コリント15:23)。収穫前の熟した穀物の最初の収穫である波状の束と同様に、キリストは、将来復活して神の納屋に集められる、救い出された者の不滅の収穫の初穂です。

これらのタイプは、イベントだけでなく時間に関しても満たされました。ユダヤ教の最初の月の14日、まさに15世紀にわたって過越の小羊が屠られたその日と月に、キリストは弟子たちとともに過越の祭りに参加し、ご自身の過越を記念する祭りを制定されました。「世の罪を取り除く神の子羊」としての死。その同じ夜、イエスは邪悪な手によって投獄され、十字架につけられて殺されました。そして、波打つ束の対型として、私たちの主は「眠っている者の初穂」(コリント15:20)として三日目に死人の中からよみがえられ、「殺された体」を持って復活したすべての義人の例です。「神の栄光の体に適合するよう変えられる」

(フィリピ3:21)。

同様に、再臨に言及するタイプは、象徴的な奉仕によって示された時間に満たされなければなりません。モザイク制度では、聖所の清め、または大いなる贖罪の日は、ユダヤ人の第7月の10日に起こりました(レビ記16:29-34)。このとき、大祭司は全イスラエルのために罪を償い、したがって全イスラエルのために罪を償ったのです。彼らの罪を聖所から取り除き、イエスは出て行って人々を祝福しました。したがって、私たちの大祭司であるキリストが現れて、罪と罪人を滅ぼすことによって地球を清め、ご自分を待ち望んでいる人々に不死の報いを与えると信じられていました。第7月の10日は、大いなる贖罪の日であり、聖域の清めの日であり、1844年には10月22日であったが、主が再臨される日であると理解されていた。これは、2,300日が秋に終わるというすでに提示された証拠と一致しており、この結論は抗しがたいものであるように思われた。

マタイ25章のたとえ話では、待ち時間と眠気の後に花婿がやって来ます。これは、預言と型の両方から提示された議論と一致していました。彼らは自分たちの真実性に対する強い確信を伝えました。そして「真夜中の叫び」が何千人もの信者によって宣言されました。

その運動は海の波のように全国に広がりました。彼は、神を待ち望んでいた民が完全に目覚めるまで、都市から都市へ、村から村へ、そして国の最も辺鄙な地域へ行きました。狂信はこの宣言の前に、朝日の前の朝霜のように消え去った。信者たちは疑いや困惑が取り除かれ、希望と勇気が心を活気づけた。

この作品には、神の御言葉と御霊の支配的な影響が及ばない人間の興奮があるときに常に現れる極端さはありませんでした。

それは、古代イスラエルにおいて、主の僕たちからの警告メッセージに従って行われた、屈辱と主への帰還の期間に性格的に似ていました。それは、あらゆる時代において常に神の働きを特徴づけてきた特徴をもたらした。ありました

恍惚とした喜びはほとんどありませんが、より深い心の探求、罪の告白、そして世界の放棄です。主に会う準備をすることは、死にゆく霊にとっての重荷でした。そこには絶え間ない祈りと神への無条件の奉献がありました。

その作品を説明する際、ミラーは次のように宣言した。「喜びの表現はありません。それはいわば、天と地のすべてが栄光に満ちた言葉では言い表せない喜びと一緒に喜ぶ将来の時間に延期されています。賞賛の言葉はありません。「それらも天国のために用意されています。歌手たちは沈黙しています。彼らは天使のような軍団、天の聖歌隊に加わるのを待っています。感情の衝突はありません。全員が同じ心と考えを持っています。」この運動の別の参加者は次のように証言した。「それはあらゆる場所で、最も深い心の探求と魂のへりくだりを生みました…それは、この世のものに対する軽蔑、論争や敵意からの孤立、過ちの告白、神の前での落胆、そして嘆願を生みました」「許しと受け入れを求めて神に悔い改めた人々の心。説教は、私たちがこれまで見たことのないような自己卑下と魂のひれ伏を引き起こしました。神が預言者ヨエルを通して命じられたように、神の大いなる日が近づいたとき、それは引き裂きを引き起こしました」神が預言者ゼカリヤを通して語られたように、恵みと嘆願の霊が神の子供たちに注がれ、彼らは自分たちが刺し貫いた神を見つめ、地上では大きな嘆きが響き渡り、主を待ち望んでいた人々は主の前で自らの魂を苦しめた。」

使徒たちの時代以来のすべての偉大な宗教運動の中で、1844年の秋の運動ほど、人間の不完全さとサタンの欺瞞から自由になった運動はありません。長い年月が経った今日でも、その運動に参加していたすべての人々は、そして真理の壇上にしっかりと立っている人たちは、その祝福された働きの聖なる影響を今でも感じており、それが神から出たものであることを証します。

「花婿が来ました。迎えに出てください」という叫び声に、期待している人は「立ち上がってランプを修理しました」。彼らはこれまでにないほどの強い関心をもって神の言葉を研究しました。天使は落胆した人たちを目覚めさせ、メッセージを受け取る準備をさせるために天から遣わされました。その働きは人間の知恵や知識によってではなく、神の力によって行われました。その呼びかけを最初に聞いて従ったのは、最も才能のある人たちではなく、最も謙虚で聖別された人たちでした。農民たちは作物を畑に置き去りにし、整備士たちは道具を置き、涙と喜びを抱えて警告を発した。

当初この大義を管理していた人々は、この運動に最後に参加した人々の一人でした。一般に教会はこのメッセージに対して門戸を閉ざし、それを受け取った多くの人々が教会の中から身を引いた。神の摂理において、この宣言は第二天使のメッセージと結びついて、その働きに力を与えました。

「花婿がやって来る」というメッセージは、聖書の証明が明確かつ決定的であったにもかかわらず、あまり議論の余地はありませんでした。彼女には魂を揺さぶるような衝動的な力が伴っていた。何の疑問も疑問もありませんでした。キリストのエルサレム入城の際、祭りに参加するために地球上のあらゆる場所から集まった人々はオリーブ山に群がり、イエスを護衛する群衆に加わり、その出来事の興奮に圧倒されました。そして、「主の御名によって来られる方は幸いです」という叫びを高めるのに役立ちました。（マタイ 21:9）。同様に、アドベンチスト派の集会に集まった未信者たちは、ある者は好奇心から、ある者は単なる嘲笑目的であったが、「花婿が来た！」というメッセージの説得力を感じた。

当時は祈りの答えを得る信仰、つまり報いを目指す信仰がありました。乾いた大地に豪雨のように恵みの霊が降臨した

熱心に主を求めた人々に。すぐに救い主と対面することを望んでいた人々は、厳粛で言葉では言い表せない喜びを感じました。聖霊の感動的な力は、聖霊の祝福が忠実な信者たちに豊かに与えられるにつれて心を和らげました。

慎重かつ厳粛に、そのメッセージを受け取った人々は、主にお会いできると期待していた時を迎えました。彼らは毎朝、神に受け入れられていることを確信することが自分たちの最初の義務であると感じました。彼らの心は固く結ばれ、お互いのためにたくさん祈りました。彼らは神と交わるために人里離れた場所に集まることが多く、とりなしの声は野原や森から天にまで届きました。救い主の是認という確実性が彼らにとって毎日の食事よりも必要であり、もし何か彼らの精神を暗くするものがあれば、それが消えるまで彼らは休まなかった。彼らは恵みの赦しのあかしを感じて、自分たちの魂が愛した主に会いたいと切望しました。

しかし、彼らは再び失望する運命にありました。期待の時は過ぎたが、救い主は現れなかった。彼らは揺るぎない自信を持って主の来臨を待ち望んでいたが、今や救い主の墓に到着し、そこが空であることに気づいて涙を流しながら叫んだマリアのような気分になった。（ヨハネ 20:13）。

恐怖の感情、つまりそのメッセージが真実であるかもしれないという恐怖は、しばらくの間、不信者の世界を抑制するのに役立ちました。時間が経っても、この感情はすぐには消えませんでした。最初、彼らは失望した人々に勝利する勇気がありませんでした。しかし、神の怒りの兆候は見られなかったため、彼らは恐怖から立ち直り、非難と嘲笑の態度を再開しました。

主の到来を信じると公言していた大勢の階級が信仰を捨てました。自信を持っていた人たちの中には、プライドに深く傷つき、世界から疎外されているように見える人もいました。ヨナと同じように、彼らも次のように不平を言いました。神は生よりも死を好まれました。神の御言葉ではなく、他人の意見に基づいて信仰を築いていた人々は、今や再び考えを変える準備ができていました。嘲笑する者たちは弱者や卑怯者を仲間に加え、彼ら全員が団結して、もう恐怖も期待もなくなると宣言した。時は過ぎ、主は来られず、世界は何千年も変わらないままでいたかもしれません。

熱心で誠実な信者たちはキリストのためにすべてを捨て、かつてないほどにキリストの臨在を感じました。彼らは信じていたように、最後の警告を世界に伝え、すぐに神聖なマスターと天の天使たちの仲間を迎えられることを期待していました。彼らは、メッセージを受け取らなかった人々の仲間からかなりの程度まで孤立していました。彼らは強い願いを込めて、「主イエスよ、来てください。早く来てください。」と祈りました。しかし、彼は来ませんでした。そして今、人生の悩みや困難という重荷を再び背負い、嘲笑する世界の皮肉や軽蔑に耐えることは、信仰と忍耐の恐ろしい試練でした。

しかし、この失望は、キリストの初臨の時に弟子たちが経験したほど大きくはありませんでした。イエスが意気揚々とエルサレムに入城されたとき、イエスに従う者たちは、イエスがダビデの王座に就き、イスラエルを抑圧者から解放しようとしていると信じた。希望と喜びに満ちた期待に満ちた彼らは、王を讃える機会を求めて互いに競い合い、多くはキリストの道に沿って絨毯のように外衣を広げたり、葉の茂ったヤシの枝をキリストの前に置いたりしました。彼らは熱狂的に喜び、「ダビデの子にホサナ！」という歓声を上げました。この喜びの爆発に動揺し激怒したパリサイ人たちが、イエスに弟子たちを叱責してほしいと願ったとき、イエスは、「もし彼らが黙っていれば、石そのものが叫ぶでしょう」と答えられました。（ルカ19:40）。
予言はこうあるべきだ

満たされました。弟子たちは神の目的に仕えていました。しかし、彼らは苦い失望に見舞われる運命にあった。数日以内に、彼らは救い主の苦しみの死を目撃し、彼を墓に横たえるでしょう。彼らの期待は何一つ実現されず、彼らの希望はイエスと共に消え去った。

彼らの主が墓から勝利を収めてよみがえられるまで、彼らはすべてが預言で予告されていたこと、そして「キリストが苦しみを受けて死人の中からよみがえらなければならないこと」（使徒行伝17:3）を理解することができませんでした。

5世紀前、主は預言者ゼカリヤを通してこう宣言されました、「シオンの娘よ、大いに喜べ。エルサレムの娘よ、喜べ。見よ、あなたの王が義人で救い主として、貧しくロバに乗ってあなたのところに來られる。」ロバ、ロバの息子。」（ゼカエル 9:9）。もし弟子たちがキリストが裁きと死に向かっていることを知っていたら、この預言は成就しなかっただろう。

同様の方法で、ウィリアム・ミラーと彼の仲間たちは預言を成就し、インスピレーションが彼らが世界に与えるだろうと予測したメッセージを発表しましたが、もし彼らが失望を明らかにし、別のメッセージがすべての国に宣言されなければならないという預言を完全に理解していれば主が來られる前であれば、彼らはその働きをしなかっただろう。第一天使と第二天使のメッセージは適時に与えられ、神が彼らに達成するよう意図された働きを達成しました。

世界は、もし時間が過ぎてキリストが來られなければ、アドベンティズムのシステム全体が放棄されることを期待して注目していました。しかし、多くの人々が強い誘惑に遭って信仰に屈した一方で、堅固であり続けた人もいました。アドベンチスト運動の成果、すなわち、その働きに伴う謙虚さと自己探求の精神、世を捨てて生活を改革する精神は、それが神から出たものであることを証しました。彼らは、聖霊の力が再臨の説教を証言したことを敢えて否定せず、預言の期間の計算に何の誤りも見つけることができませんでした。彼の敵対者の中で最も有能な者たちも、彼の預言的解釈のシステムを破壊することができなかった。彼らは、聖書の証拠がなければ、神の御霊によって啓発され、神の生ける力で心が輝く心によって引き受けられた、聖書の熱心で献身的な研究によって到達した立場を放棄することはできませんでした。この立場は、民衆の宗教教師やこの世の賢人たちからの最も厳しい批判や激しい反対に耐え、科学と雄弁の結合した力、そして著名な人々や社会の人々の侮辱や軽蔑に直面しても毅然とした態度をとった。謙虚なクラス。

確かに、予想された出来事に関して間違いがありましたが、それでも神の言葉に対する彼の信仰を揺るがすことはできませんでした。ヨナがニネベの街路で、ニネベの街は40日以内に転覆されると宣言したとき、主はニネベ人の屈辱を受け入れ、彼らの恵みの時間を延長されました。しかし、ヨナのメッセージは神からのものであり、ニネベは神のご意志に従って試みられました。アドベンチストたちは、同じように神が裁きの警告を与えるために彼らを遣わされたと信じていました。彼らは言った、「彼女は、それを聞いたすべての人の心を試し、主の出現を求める願いを目覚めさせ、あるいは多かれ少なかれ明らかな憎悪を引き起こしましたが、神の來臨を神に知られていました。彼女は線を引いたので、検査した人々はもしあの時主が來られたら、彼らはどちらの側に立っていただろうか、彼らは「見よ、これが私たちの神だ。私たちが待ち望んでいたこの人だ。彼は私たちを救ってくれるだろう」と叫んだらうか、あるいは、彼らは岩や山々に向かって、「自分たちに襲いかかってくるように」と叫び、王座に座しておられる御顔と小羊の怒りから隠してくださったであろう。そして彼らが撤退するかどうかを見ました

彼が自分を置くのに適していると考えた位置。そして彼らは神の働きに暗黙の信頼を置き、この世界を放棄するでしょう。」

自分の経験において神が自分たちを導いてくださったと今でも信じている人々の感情は、ウィリアム・ミラーの次の言葉で表現されています。私はすべてを自分と同じようにやっただろう。」
「魂の血で衣を洗えたことを願っています。私は可能な限り、彼らの非難におけるあらゆる罪から解放されていると感じています。」この神の人は、「私は二度失望しましたが、まだ打ちひしがれたり落胆したりはしていません」と書きました。「キリストの来臨に対する私の希望は、これまでと同様に堅いものです。私は、何年も冷静に検討した結果、実行することが自分の厳粛な義務であると感じたことだけを実行しました。もし私が間違っていたとすれば、それは慈善の側にあったということです。」同胞への愛、そして神への義務の確信です。「一つだけわかっていることは、私は自分が信じたこと以外は何も説教しなかったということ、そして神の御手が私に伴ってくださったということです。神の力はその働きの中で現され、多くの善が成し遂げられたのです。」「当時の預言のせいで、何千人もの人々が聖書を学ぶように導かれたようです。そして、この手段によって、信仰とキリストの血の注ぎによって、彼らは神と和解しました。」「私は誇り高き人々の承認の笑顔に好意を持ったことは一度もありませんし、世界が私たちを軽蔑の目で見ていたときに落胆したこともありません。今日私は彼らの好意を買うつもりはありませんし、彼らの憎しみを和らげるために義務を超えて行動するつもりはありません。私はそうします」「彼らに命を助けてほしいとは決して言いませんし、私も撤退しません。もし神がその摂理でそう要求するなら、私は彼女を追放する用意があります。」

神はご自分の民を見捨てておられません。イエスの御霊は、自分たちが受けた光を無謀に拒否したり、アドベンチスト運動を非難したりしなかった人々の中に今も留まっています。ヘブライ人への手紙には、この危機の中で試練に遭い、これからを待ち望んでいる人々への励ましと警告の言葉があります。神の御心よ、約束が得られますように。まだ少し時間はありますし、これから来ることは必ずやって来ますし、遅れることはありません。しかし義人は信仰によって生きています。そしてもし彼が後退するなら、私の魂は喜びません。しかし、私たちは、滅びに引退する人々ではなく、魂の保存のために信じる人々です。」（ヘブライ 10:35-39）。

この警告が終わりの日の教会に向けられたものであることは、主の来臨が近いことを示す次の言葉から明らかです。「明らかな遅れがあり、主が遅れるようであることが明確に示されています。ここで与えられた指示は、当時のアドベンチストの経験と完全に一致しています。ここで言及されている人々は信仰が沈む危険にさらされていました。彼らは神の御霊と御言葉の導きに従って神の旨を実現しました。しかし、彼らは過去の経験から神の目的を理解することも、目の前にある道を見ることができませんでした。すると彼らは、神が本当に自分たちを導いたのかどうかを疑う誘惑に駆られました。そのとき、「しかし正しい者は信仰によって生きる」という言葉が適用されました。彼らの道を照らす「真夜中の叫び」のまばゆい光にもかかわらず、預言の封印が解け、キリストの間もなくの到来を告げるしるしが速やかに成就するのを見ていたにもかかわらず、彼らはいわば視覚によって歩いてきたのである。しかし今、彼らは挫折した希望に抑圧され、神と神の言葉への信仰によってのみ抵抗することができました。嘲笑する世界は、「あなたは騙された。信仰を捨てて、アドベンチスト運動はサタンから来たものだと言いなさい。」と言っていたのです。しかし神の言葉は、「彼が後ずさりするなら、私の魂は彼を喜ばない」と宣言しています。今信仰を放棄し、そのメッセージを支えた聖霊の力を否定することは、滅びに後退することになります。彼らはパウロの次の言葉によって、毅然とした態度を保つよう励まされました。「自信を捨ててはいけません。」「忍耐が必要だ」「まだ少しあるから」

彼らの唯一確実な方法は、すでに神から受けた光をしっかりと握り、神の約束をしっかりと守り、聖書を見つめながら研究し続けることでした。より大きな光を受け取るために辛抱強く待ちます。

第23章

サンクチュアリとは何ですか？

何よりもアドベンチスト信仰の基礎であり中心柱となった聖句は、「二千三百の夕と朝に至るまで、そして聖所は清められるであろう」という声明でした。（ダニエル 8:14）。これらの言葉は、間もなく主が来られるとき、すべての信者にとってよく知られたものでした。この預言は何千もの人々の口を通して、彼らの信仰の合言葉として繰り返されました。誰もが、自分たちの最も明るい期待と大切にしている希望が、その中で予測される出来事に依存していると感じました。これらの預言的な日々は 1844 年の秋に終わることが示されました。他のキリスト教世界と同様に、この時点ではアドベンチストは地球またはその一部が聖域であると考えていました。彼らは、聖所の浄化は最後の大きな日の火の下での地球の浄化であり、これは再臨の時に起こると理解していました。したがって、キリストは 1844 年に地球に再臨するという結論になります。

しかし、推奨された時間が過ぎても主は来られませんでした。信者たちは神の言葉が失敗するはずがないことを知っていました。あなたの預言の解釈は間違っているに違いありません。しかし、どこに間違いがあったのでしょうか？多くの人は、2,300日か1844年に終わったことを否定することで、賢明にも困難の結び目を切り取っています。これについては、キリストが期待された時に来なかったということ以外に理由はありません。彼らは、預言の時代が 1844 年に終わっていたら、キリストは地球を火で一掃することによって聖域を浄化するために戻ってきただろうと主張した。そしてイエスが現れなかったため、日々が終わるはずはありませんでした。

この結論を受け入れることは、これまでの預言期間のカウントを放棄することと同じでした。2,300 日は、紀元前 457 年の秋にエルサレムの修復と建設に関するアルタクセルクセスの命令が発効したときに始まったことが判明し、その日付を出発点として利用すると、2,300 日の適用には完全な調和が見られたことがわかりました。ダニエル書 9:25-27 の説明の中で、予測されたすべての出来事。23世紀という偉大な期間の最初の483年間である69週間は、油そそがれた者であるメシアに到達することになっていました。私たちの時代の第27年に聖霊によるキリストのバプテスマと油注ぎは、この仕様を厳密に満たしました。第70週の半ばにメシアは連れ去れることになりました。バプテスマを受けてから 3 年半後。31年の春、キリストは十字架につけられました。70週間、つまり490年という期間は、特にユダヤ人に当てはまります。この時代が終わると、国民は弟子たちの迫害を通じてキリストの拒絶を確固たるものとし、34年に使徒たちは異邦人にその働きを向けた。2,300年の偉大な時代から離れて最初の490年間が終わり、まだ1,810年が残っていた。私たちの時代の西暦 34 年に基づく、1,810 年は 1844 年に達します。そして天使は言いました。「その時、聖域は清められるでしょう。」これまでの預言の仕様はすべて、疑いもなく、定められた時に成就しました。すべてが明確になり、調和がとれたものになりました。この計算は、当時、1844年に行われる聖域の浄化を満たす出来事が見られなかったことを除いて、その時点で日々が終わったことを否定することは、問題全体を混乱に巻き込み、立場を放棄することでした。それは預言の確実な成就によって確立されました。

しかし、神はご自分の民を率いて大なるアドベンチスト運動を起こさせられました。神の力と栄光がその働きに伴っていたので、神はそれが暗闇と失望のうちに終わり、偽りの狂信的な興奮として中傷されることを許さなかった。神は、ご自分の言葉を疑いと不確かさに包まれたままにしておくつもりはありませんでした。多くの人が持っているという事実にもかかわらず、

預言の時代に関するこれまでの計算を放棄し、それに基づいた運動の正確さを否定する一方で、聖書と神の御霊の証しによって裏付けられた信仰と経験の要点を放棄しようとする者もいなかった。彼らは、預言の研究において正当な解釈原則を採用しており、すでに発見された真理を遵守し、聖書研究の同じ基準を継続することが彼らの義務であると信じていました。彼らは熱心な祈りをもって自分たちの立場を見直し、聖書を研究して自分たちの間違いを発見しました。彼らは預言期間の計算に誤りが見られなかったため、聖域の主題をより具体的に調べるように導かれました。

彼らは調査の結果、地球が聖域であるという一般的な解釈を裏付ける聖書的な証拠が存在しないことを知りました。しかし、彼らは聖書の中に聖域の主題、その性質、場所、奉仕についての完全な説明があることを発見しました。聖なる著者たちの証言は非常に明瞭かつ広範であったため、この問題はまったくの疑問の余地がありませんでした。使徒パウロはヘブライ人への手紙の中でこう述べています、「さて、最初の者たちにも神の崇拝の儀式と地上の聖所があった。最初の者たちには幕屋が用意されており、その中には燭台と食卓があり、そして幕屋が用意されていたからである」しかし、第二の幕屋の後には至聖所と呼ばれる幕屋があり、そこには金の香炉があり、契約の箱は周囲を金で覆われており、その中には器が入っていました。マナを含んだ金、芽を出したアロンの杖、契約の台、そして箱の上には栄光のケルビムがあり、慈悲の座を覆い隠していた。」

(ヘブル 9:1-5)。

パウロがここで言及している聖所とは、いと高き者の地上の住まいとして、神の命令によりモーセが建てた幕屋のことです。「そして彼らはわたしを聖所とし、わたしは彼らの中に住むだろう」(出エジプト記25:8)とは、神とともに山にいるモーセに与えられた指示でした。イスラエル人は砂漠を旅していましたが、幕屋はある場所から別の場所に移動できるように建設されました。しかし、その構造は非常に壮麗なものでした。壁は金がふんだんに塗られた垂直の板でできており、その基礎金具は銀でできていました。その屋根は一連のカーテンまたはカバーで形成されており、外側のカーテンまたはカバーは皮で作られ、内側のカーテンは上質のリネンでできており、天使の像が美しく細工されていました。全焼のいけにえの祭壇が置かれていた外の中庭に加えて、幕屋自体には、聖所と至聖所と呼ばれる2つの区画があり、豪華で美しいカーテンまたはベールで区切られていました。同様のベールが最初の区画への入り口を閉じました。

聖なる場所には幕屋の南側に燭台があり、昼も夜も聖所を照らす七つのともしびがありました。北側には御臨在のパンのテーブルがありました。そして、聖所と至聖所を隔てる幕の前には金の香の祭壇があり、そこから香りのよい雲がイスラエルの祈りとともに毎日神の御前に立ち上っていました。

最も神聖な場所には、金で覆われた貴重な木の箱である箱舟と、神が十戒の律法を刻んだ2枚の石板が保管されていました。箱舟の上に聖なるものの覆いを形成するその容器は慈悲の座であり、その上に純金でできた2つのケルビムが両側に1つずつ置かれた素晴らしい芸術作品でした。この区画では、神の存在がケルビムの間の明らかな栄光の雲として現れました。

ヘブライ人がカナンに定住した後、幕屋はソロモン神殿に取って代わられました。ソロモン神殿は恒久的な建造物であり、より大きな規模ではありましたが、同じ比率を保ち、同様の方法で提供されました。

前の。この形式で、聖域は紀元前 70 年にローマ人によって破壊されるまで、ダニエルの時代に廃墟になっていた場合を除いて存在しました。

これは地球上にかつて存在した唯一の聖域であり、聖書はそれについていくつかの情報を与えています。パウロはここが最初の契約の聖所であると宣言しました。しかし、新しい契約には聖域がないのでしょうか？

再びヘブライ人への手紙に目を向けると、真理の探求者たちは、パウロの前述の言葉に暗示されている第二の聖所、つまり新しい契約の聖所の存在を発見しました。「さて、第一の聖所にも神の崇拝の儀式と聖域があった。」そして、「また」という言葉の使用により、パウロが以前にこの聖所について言及したことがわかります。前の章の冒頭に戻って、彼らはこう書いています、「さて、私たちがこれまで述べてきたことを総合すると、私たちに、天にある聖域の大臣である陛下の御座の右に座るこのような大祭司がいるということです」そして、人間ではなく主が設立された真の幕屋について。」（ヘブライ人への手紙 8:1 と 2）。

ここに新しい契約の聖所が明らかになります。最初の契約の聖所は人間によって建てられ、モーセによって建てられました。後者は人間ではなく主によって建てられました。その聖所では地上の祭司たちが奉仕を行った。この中で、私たちの偉大な大祭司であるキリストが神の右で仕えるのです。一つの聖域は地上にあり、もう一つは天国にありました。

さらに幕屋はモーセによって型に従って建てられました。

「幕屋の型とそのすべての器の型について、わたしがあなたに示したすべてのとおりにしなさい。」そして再び命令が与えられた。「山の上であなたに示されたその模型によると。」（出エジプト記 25:9 と 40）そしてパウロは、最初の幕屋は「贈り物といけにえがさげられた、現在の時代の寓話」だったと述べています。その聖地は「天にあるものの型」であり、律法に従って贈り物をさげられた祭司たちは「天上のものの模範と影」としての役割を果たし、「キリストは手で造られた聖所には入れなかった。真の者の型ですが、同じ天国にいて、今私たちのために神の御顔の前に現れるのです」（ヘブライ人への手紙 9:9 と 23:8、5:9、24）。

イエスが私たちに代わって奉仕する天の聖所は偉大なオリジナルであり、モーセによって建てられた聖所はそのコピーでした。神は地上の聖所を建設する者たちに御霊を与えられました。その建設に採用された芸術的技術は神の知恵の現れでした。壁は純金の外観を持ち、金の燭台にある 7 つのランプの光を四方八方に反射していました。供えのパンのテーブルと香の祭壇は、磨かれた金のように輝いていました。天井を形成する美しいカーテンは、青、紫、緋色の天使の像で飾られ、場面の美しさをさらに高めました。そして第二の幕の向こうには、神の栄光が目に見える現れである聖なるシェキーナがあり、大祭司以外は誰もその前に入ることができませんでした。地上の幕屋の比類のない素晴らしさは、私たちの先駆者であるキリストが神の御座の前で私たちのために仕える天の神殿の栄光を人間の目に反映しました。王の王の住居。そこには何千人もの人々が彼に仕え、何百万もの人々が彼の前に立っている（ダニエル書 7:10）。この神殿は、永遠の王座の栄光に満ちており、その輝かしい守護者であるセラフィムが崇拝で顔を覆い、これまで人間の手によって建てられたどんな壮大な建造物の中でも、その広大さと栄光の淡い反射以外には見つけることができません。しかし、天上の聖所と、そこで人類の救いのために行われた偉大な業に関する重要な真理は、地上の聖所とその奉仕によって教えられました。

天上の聖域の聖地は、地上の聖域の2つの区画によって表されます。使徒ヨハネは天の神の神殿の幻を与えられました。そこで彼は玉座の前で七つの火の灯が燃えているのを見ました（黙示録 4:5）。彼は「金の香炉を持った天使を見て、御座の前にある金の祭壇にすべての聖徒の祈りを添えるために、たくさんの香を与えられた」（黙示録8:3）。預言者は天の聖所の最初の区画について熟考することを許されました。そこで彼は「七つの火のともし火」と、地上の聖所の金の燭台と香の祭壇に代表される「金の祭壇」を見ました。

再び「神の神殿が天に開かれ」（黙示録11:19）、彼は内幕の内側にある最も聖なる場所を覗き込みました。そこで彼は、神の律法を収めるためにモーセによって造られた神聖な器に代表される「契約の箱」を観察しました。

このようにして、この主題を研究していた人々は、天国に聖所が存在するという議論の余地のない証拠を発見しました。モーセは示されたモデルに基づいて地上の聖所を作りました。パウロはこの模型が天国にある真の聖所であると教え、ヨハネもそれを天国で見たと証言します。

神の住まいである天の神殿には、正義と裁きにおいて神の玉座が確立されています。最も神聖な場所には神の律法があり、それは全人類が試される偉大な正義の規則です。律法の表を安置する箱は憐れみの座で覆われており、その前でキリストは罪人に代わってその血によって祈ります。これは、正義と慈悲の結合が人類の救いの計画においてどのように表現されるかです。無限の知恵だけがこの結合を考案でき、無限の力だけがそれをもたらすことができます。これは天国全体を驚きと崇拜で満たすつながりです。地上の聖所のケルビムは、敬虔な気持ちで慈悲の座を見つめており、天の軍勢が救いの働きを観察する関心を表しています。これが天使たちがたどりた慈恵の神秘である。神は悔い改めた罪人を義とし、墮落した種族との関係を新たにしながらも正義でいられるということである。それは、キリストがご自身をへりくだって、数え切れないほどの群衆を破滅の淵からよみがえらせ、彼らにご自身の義の汚れのない衣を着せることができ、彼らが決して墮落することのなかった天使たちに加わり、永遠に神の御前に住めるようにするためであった。

人間のとりなし手としてのキリストの働きは、「その名は枝」であるキリストに関するゼカリヤの美しい預言の中に述べられています。預言者はこう言います。「彼自身が主の神殿を建て、栄光をもたらし、その王座に座って統治し、その王座で祭司となり、両者の間には平和の協議が行われるであろう。」
(ザカ 6:13)。

「彼自身が主の神殿を建てましょう。」キリストは、その犠牲と仲介によって、神の教会の基礎であり、また建設者でもあります。使徒パウロはイエスを「主要な礎石であり、その中で建物全体が組み合わされて、主にある聖なる神殿へと成長します。このキリストの中で、あなたがたも共に建てられ、神の住まいとなるのです。」と彼は言います。霊」（エペソ2:20-22）。

彼は「栄光を得る」でしょう。墮落した民族の救いの栄光はキリストに属します。永遠の時代を通して、贖われた者の歌はこうなるでしょう。「私たちが愛し、その血で私たちの罪を洗ってくださった方に……栄光と力を世々限りなく与えてください。」（黙示録 1:5 および 6）。

「そして彼はその玉座に座って統治し、その玉座で祭司となるだろう。」彼はまだ「栄光の座に就いて」いません。栄光の王国はまだ確立されていません。仲介者としての働きが終わった後にのみ、神は彼に「父ダビデの王座」、つまり「終わりのない」王国を与えます(ルカ1:32,33)。キリストは祭司として、御父とともに御座に座っておられます（黙示録 3:21）。永遠の自己存在なる存在とともに王座に就かれたのは、「私たちの弱さをご自身で引き受けられたのです。

「私たちの悲しみを背負った」；彼は「あらゆる面で誘惑されたが、罪を犯さなかった」；それは「誘惑されている人々を助けるため」であった。；ヘブライ 4:15; 2:18; ヨハネ第一 2:1). 彼のとりなしは、傷つき浸軟化した体、汚れのない命に対するものです。傷ついた手、刺された脇腹、刺された足は、墮落した人間のために懇願しています。、その償還は無限の費用で購入されました。

「そして、平和の勧告が両者の間にあるでしょう。」父の愛は、御子の愛に劣らず、失われた民族の救いの源です イエスはこの世を去る前に弟子たちにこう言いました。あなたのために父に祈りますなどとは言わないでください。「父ご自身があなたを愛しておられるからです。」(ヨハネ 16:26 と 27)「神はキリストにあって、世をご自分と和解させました。」(IIコリント 5:19)そして上の聖所の務めにおいて、「勧告」「神は、ご自分の独り子をお与えになったほど、世を愛されました。それは、彼を信じる者が滅びず、永遠の命を持つためです。」(ヨハネ 3:16)

「聖所とは何ですか?」という質問には、聖書の中に明確に答えがあります。聖書の中で使われている「聖所」という用語は、第一に、天上のもののモデルとしてモーセによって建てられた幕屋を指し、第二に、地上の聖所が指し示した天の「真の幕屋」を指します。典型的な礼拝は終了しました。天国にある「真の幕屋」は、新しい契約の聖所です。そしてダニエル 8:14 の預言がこの神権時代に成就するように、それが指す聖所は、新しい契約の聖所でしかあり得ません。2,300 日が終わる頃には、何世紀にもわたって地球上に聖域は残されていませんでした。そうすれば聖所は清められるであろう」と、疑いなく天の聖所を指しています。

しかし、最も重要な質問はまだ答えられていません。それは聖域の清めとは何でしょうか?地上の聖所に関連してそのような礼拝があったことは、旧約聖書に記載されています。しかし、天国に清められるものがあるだろうか?ヘブライ人への手紙 9 章では、地上と天の聖域の両方の清めが完全に教えられています。「律法によれば、ほとんどすべてのものは血によって清められます。そして、血を流さなければ赦しはありません。ですから、天国にあるものの姿がこの方法で清められることが非常に必要だったので(血によって)」しかし、天にあるもの自体は、これらよりも優れた犠牲を払って(ヘブライ人への手紙9:22と23)、つまり、キリストの尊い血によってです。

典型的な奉仕と実際の奉仕の両方において、浄化は血によって達成されることになっていました。最初は動物の血で、最後はキリストの血で。パウロは、この清めが血によって行われなければならない理由として、血を流すことがなければ赦しはないという事実を挙げています。罪の赦し、つまり罪を取り除く行為は、達成されるべき仕事です。しかし、天であろうと地上であろうと、どうして罪が聖所に関係するということがあり得ますか?これは、象徴的な崇拝を参照することで理解できます。なぜなら、地上で奉仕する祭司たちは「天上のものの模範および影」としての役割を果たしたからです(ヘブライ人への手紙 8:5)。

地上の聖所の奉仕は 2 つの部分から構成されていました。祭司たちは聖所で毎日奉仕を行い、一方、年に一度、大祭司は聖所の清めのために最も聖なる場所で特別な贖罪の働きを行いました。来る日も来る日も、悔い改めた罪人は自分の捧げ物を幕屋の入り口に持っていき、犠牲者の頭に手を置いて罪を告白し、こうして罪のない犠牲に自分の姿をとって罪を移しました。その後、動物は殺されました。「血を流すことなしには、罪の赦しはありません」と使徒は言います。「肉の命は血の中にある。」(レビ記 17:11)。違反した神の律法は違反者の命を要求します。その血は、罪を犯した罪人の失われた命を表しています。

犠牲者によって引き受けられたものは、司祭によって聖なる場所に連れて行かれ、ベールの前に振りかけられました。その後ろには、罪人が犯した律法が入った箱がありました。

この儀式を通じて、罪は比喩的に聖域に移されました。場合によっては、その血は聖なる場所に運ばれなかった。しかし、モーセがアロンの息子たちに命じたように、犠牲者の肉は祭司によって食べられることになった、「主があなたたちにそれを与えたのは、あなたたちが会衆の咎を担うためである。」（レフ。

10:17）。どちらの儀式も同様に、悔い改めた者の罪を聖域に移すことを象徴していました。

この作業が一年中毎日続きました。こうしてイスラエルの罪は聖所に移され、それを取り除くためには特別な働きが不可欠となった。神は神聖な区画ごとに償いをするよう命じました。

「彼は、イスラエルの子らの汚れと、彼らのすべての罪に応じて、聖所のために贖いをしなければならぬ。また、彼らの汚れのただ中に彼らとともに住む会衆の天幕のためにもそうするであろう。」。

「イスラエルの子らの汚れ、彼らの罪、そして彼らのすべての罪のために、祭壇を清めるために、贖いも行われなければなりませんでした。

（レビ記 16:16～19）。

年に一度、大いなる償いの日に、司祭は至聖所に入り、聖所を清めました。そこで行われた活動によって宣教の年次サイクルが完了しました。贖罪の日、二頭のやぎが幕屋の入り口に連れて来られ、「一つのくじは主に、もう一つのくじは身代わりのため」（レビ記16:8）、そのためにくじが引かれました。主の運命がかかった山羊は、民のための罪のいけにえとして殺されることになっていました。そして祭司はヤギの血をベールの中に入れて持ってきて、それを慈悲の座とこの慈悲の対象の前に振りかけることになっていました。血はまた、ベールの前にあった香の祭壇にも振りかけられなければなりません。

「そしてアロンは生きていたヤギの頭に両手を置き、その上でイスラエルの子らのすべての咎と、彼らのすべての罪に応じてすべての罪を告白し、それをヤギの頭の上に置く。」 「ヤギを送りなさい。その目的のために任命された人の手によって、彼は彼を砂漠に連れて行きます。そうすれば、そのヤギは孤独な土地ですべての咎を負うことになります。」（レビ記 16:21,22）。スケープゴートはもはやイスラエルの陣営に戻ることができず、スケープゴートを率いていた男は陣営に戻る前に体と衣服を洗う必要がありました。

この儀式全体は、神の聖さと罪に対する神の反発をイスラエル人に印象づけることを目的としていました。そしてさらに、自分自身を汚すことなしには罪と触れ合うことはできないということも彼らに示してください。償いの業が続く間、各人は自分の魂を苦しめる必要がありました。すべての一般的な活動は脇に置かれ、イスラエルの会衆全体が、祈り、断食、心の深い検査とともに、神の御前で厳粛な屈辱の中でその日を過ごすように召集されました。

償いに関する重要な真理は、典型的な礼拝によって教えられました。罪人の代わりに代理人が受け入れられました。しかし、その罪は犠牲者の血によってキャンセルされませんでした。このようにして、彼を聖域に移送する手段が提供されました。罪人は血を捧げることによって律法の権威を認め、罪を犯したことを告白し、来るべき救い主への信仰を通して赦しを求める願望を表明しました。しかし、彼は依然として法の非難から完全に解放されたわけではなかった。贖罪の日、大祭司は会衆から捧げ物を受け取り、その捧げ物の血を持って至聖所に入り、自分の要求を満たすためにそれを憐れみの座、律法の上に直接振りかけました。それから、仲介者の役割として、彼は自らの罪を引き受け、それらを聖所から取り除きました。

スケープゴートの頭に手を置き、彼はこれらすべての罪を告白した

比喩的に、それらを自分自身からヤギに移します。それから彼は彼らを遠くに連れ去り、彼らは人々から永遠に引き離されたと考えられました。

これは「天のものの模範と影」として行われた礼拝でした。そして、地上の聖所の奉仕において形式的に行われたことは、実際には天の聖所の奉仕において達成されます。私たちの救い主は昇天後、大祭司として働きを始められました。パウロはこう言います。「キリストは、真の御姿である手で造られた聖所に入るのではなく、天そのものに入り、今、私たちのために神の御前に現われてくださったのです。」（ヘブル 9:24）。

一年を通して、聖所の最初の区画、扉を構成し聖所を外庭から隔てる「幕の内側」での司祭の奉仕は、キリストが昇天することによって始められた奉仕の働きを表している。祭司は日々の奉仕に従事し、罪のためのいけにえの血と、イスラエルの祈りとともに上がった香を神の前にささげるためでした。このようにキリストは、罪人に代わって御父の前で、御自身の血を通して嘆願され、御自身の義の尊い香りとともに、悔い改めた信者の祈りを御前に提示されます。これは天の聖域の最初のアパートでの奉仕の仕事でした。

そこでは、イエスが彼らの目の前で天に昇られたとき、弟子たちの信仰も同行しました。そして、彼らの希望はそこに集中し、この希望はパウロは言います、「私たちは魂の錨として確かです。しっかりとおり、私たちの先駆者であるイエスが私たちのために入って永遠に造ってくださったベールの内側にまで届きます。」大祭司よ。」

「ヤギや子牛の血によってではなく、ご自身の血によって、イエスは一度聖所に入り、永遠の救いを成し遂げられたのです。」（ヘブライ人 6:19 と 20; 9:12）

18世紀にわたって、この奉仕活動は聖域の最初の区画で続けられました。悔い改めた信者たちのために捧げられたキリストの血は、彼らに御父の御前での赦しと受け入れを保証しました。しかし、彼らの罪は依然として記録簿に残っています。通常の礼拝と同様に、毎年の終わりに贖いの働きがあったため、人間の救いのためのキリストの働きが完了する前に、聖域から罪を取り除くための贖いの働きも行われます。2,300日が終了したタイミングで開始したサービスです。その際、預言者ダニエルの予告どおり、私たちの大祭司はその厳粛な働きの最終段階を遂行するために至聖所に入った。

聖域を清めます。

かつて人々の罪は信仰によって罪のいけにえの上に置かれ、犠牲者の血によって姿を変えて地上の聖所に移されたのと同じように、新しい契約の摂理においては悔い改めた者の罪は信仰によって置かれます。キリストの上に置かれ、実際に天の聖所に移されました。そして、地上の聖域の典型的な浄化が、それが汚染されていた罪の除去によって完了したように、天上の聖域の実際の浄化は、そこに記録されている罪を除去する、あるいは消し去ることによって達成されなければなりません。

しかし、これを達成する前に、罪の悔い改めとキリストへの信仰によって誰がキリストの贖いの恩恵を受ける権利があるのかを判断するための記録簿の調査が必要です。したがって、聖域の清めには調査、つまり判決が伴います。この働きは、キリストがご自分の民を救いに来られる前に行われなければなりません。なぜなら、キリストが来られるとき、その報いはキリストとともにあり、その行いに応じて各人に与えられるからです（黙示録22:12）。

したがって、預言の言葉の光に従った人々は、2,300日の終わりの1844年に、イエスが地球に来られる代わりに、私たちの主が天の聖所の最も聖なる場所に入り、次の働きを遂行されたことを見ました。償いを終える、主の到来への準備。

また、罪のいけにえは犠牲としてのキリストを指し、大祭司は仲介者としてキリストを代表していましたが、スケープゴートは罪の作者であり、真の悔い改めた者の罪が最終的に負わされるサタンを象徴していることも分かりました。大祭司は、罪過のいけにえの血によって聖所から罪を取り除いたとき、それらをスケープゴートに置きました。キリストがご自身の血の徳と功績によって、ご自分の民の罪を天の聖所から取り除くとき、その宣教の終わりに、裁きの執行において最終的な罰を負わなければならないサタンの上に罪を置くでしょう。身代わりは無人数に送られ、イスラエルの会衆に戻ることはありませんでした。こうしてサタンは神とその民の前から永久に追放され、罪と罪人の最終的な滅びによって存在から排除されることになる。

第24章

サント・ドス・サントスではない

聖域のテーマは、1844年の失望の謎を明らかにする鍵でした。それは、相互に関連し調和した真理の完全な体系を明らかにし、神の手が偉大なアドベンチスト運動を導いたことを示し、現在の義務を明らかにし、問題を明らかにしました。神の民の立場と働き。苦しみと失望のひどい夜を過ごしたイエスの弟子たちと同じように、アドベンチストたちは「主を見て大いに喜び」、信仰によって主の再臨を待ち望んでいた人々も喜びました。彼らは、主が栄光のうちに現われ、その僕たちに報われるのを待っていました。希望が打ち砕かれたとき、彼らはイエスを見失い、墓の前のマリアと同じように、「彼らは私の主を連れて行ってしまった。主をどこに置いたのか分からない。」と嘆きました。今、至聖所で、彼らは再び、彼らの王であり救出者として現れる準備ができている慈悲深い大祭司であるイエスを目にしました。聖域から差し込む光は、過去、現在、未来を照らしました。

彼らは、神が間違いのない摂理によって自分たちを導いてくださったことを知っていました。最初の弟子たちと同様、彼らも自分たちが伝えたメッセージを理解できませんでしたが、それでも多くの点で正しかったのです。それを宣言することによって、彼らは神の目的を達成したことになり、彼らの働きは主の前で無駄ではなかったのです。

「生きた希望へと」再生された彼らは、「言葉では言い表せないほどの喜びと栄光に満ちて」歓喜した。

ダニエル 8 章 14 節の預言「夕と朝が二千三百まで、そうすれば聖所は清められるであろう」と、最初の天使のメッセージ「神を畏れ、神に栄光を帰せよ。神の裁きの時が来たからである」と、最も神聖な場所でのキリストの奉仕、すなわち調査判決を指摘し、キリストの民の救いと悪人の滅びのためのキリストの再臨を指摘したのではなかった。誤りはなかった。預言期間の数え方ではありましたが、2,300日の終わりに起こる出来事でした。この間違いのせいで、信者たちは失望を経験しましたが、預言によって予言されたことはすべて、聖書の本文が彼らに保証したことはすべて失望しました。彼らが希望の挫折を嘆いていると同時に、メッセージによって予告されていた出来事が起こり、主がその僕たちに報いるために現れる前にそれは成就しなければなりませんでした。

キリストは予想されたように地上ではなく、典型的な礼拝で予告されていたように、神の天の神殿の最も聖なる場所に来られました。預言者ダニエルは、彼がその時、日の老いた者に来たと描写しています。「私は夜の幻を見た、そして見よ、人の子のような方が天の雲に乗ってやって来た。そして彼は地球に向かってではなかった」しかし、「日々の古き者に、そして彼を彼の近くに連れて行った」。

(ダニエル 7:13)。

この到来は預言者マラキによっても預言されています：「突然、あなたが求めている主、あなたが望む契約の天使が神殿に来られます。見よ、彼が来られます、と万軍の主は言われます。」(マラ 3:1)。主の神殿への来臨は突然であり、民にとって予期せぬことでした。彼らはそこでイエスを探しませんでした。彼らは主が「燃え盛る火のように、神を知らない者たちと福音に従わない者たちに復讐する」(IIテサロニケ1:8)と、地上に戻って来られることを期待していました。

しかし人々は主にお会いする準備ができていませんでした。彼らにはまだ準備作業が残されていました。彼らの心を天の神の神殿に向けるために光が当てられました。

そこでの彼らの奉仕、新たな義務が彼らに明らかにされつつありました。警告と指示の別のメッセージが教会に与えられることになっていました。

預言者は次のように述べています。そして、彼が現れたとき、誰が生き残ることができるでしょうか？なぜなら、神は金細工師の火のようなものであり、フラーの力のようなものだからです。彼は銀を溶かす者、そして浄化する者として座るでしょう。彼はレビの子らを清め、金や銀のように精錬するであろう。彼らは主に義のいけにえをもたらすでしょう。」（マラヤ 3:2 および 3）。天の聖所におけるキリストのとりなしが終わったときに地上に生きている人たちは、仲介者なしで聖なる神の目の前に立たなければなりません。彼の衣服は汚れがなく、彼の性格は振りかけられた血によって罪から清められていなければなりません。神の恵みと彼ら自身の勤勉な努力によって、彼らは悪との戦いで勝利者となるに違いありません。天国では捜査の判決が続いており、悔い改めた信者の罪が聖域から取り除かれている間、地上の神の民の間では罪からの浄化または分離の特別な働きが行われなければなりません。この働きは黙示録 14 章のメッセージに最も明確に示されています。

この働きが完了すると、キリストに従う者たちはキリストが現れる準備が整うでしょう。「そのとき、ユダとエルサレムの捧げ物は、昔も昔もそうであったように、主に喜ばれるであろう。」（マラ 3:4）。したがって、私たちの主が再臨の際にご自身のために受け取らなければならない教会は、「シミヤしわ、そのようなものが一切なく、聖であり、傷のない輝かしい教会」でなければなりません。

（エフェソス 5:27）。そのとき彼女は夜明けのように立ち上がり、月のように美しく、太陽のように純粋で、旗を掲げた軍隊のように恐るべきだろうか？」（歌 6:10）。

主の神殿への到来に加えて、マラキはまた、主の再臨、裁きを執行するために来られることを次の言葉で予言しています。魔術師、姦通者、偽りの誓いを立てる者、雇われ人を騙す者、未亡人、孤児、異邦人の権利を侵害する者、そしてわたしを恐れるな、と万軍の主は言われる。。」（マラ 3:5）。ジュードは同じ場面を引用して、「見よ、主は数千の聖徒たちとともに来られ、すべての人に裁きを執行し、彼らの中の不敬虔な者たちすべての邪悪な行為を罪に定められる。」（ユダ 14 章と 15 章）。この来臨と主の神殿への来臨は別個の出来事です。

キリストが私たちの大祭司として聖所の清めのために至聖所に来られることと、第8章14節で預言者ダニエルによって言及されたことの両方。ダニエル 7:13 に記録されているように、人の子が日の古き者に到来することも。マラキによって預言された主の神殿への到来も、同じ出来事の記述です。これは、マタイの福音書 25 章に示されている 10 人の処女のたとえ話でキリストが描写した、結婚式への夫の到着によっても表されています。

1844 年の夏から秋にかけて、「花婿がやってきました！」という宣言がなされました。その後、賢い乙女と愚かな乙女に代表される 2 つの階級が発展しました。あるクラスは主の出現を喜んで待ち望み、主にお会いするために熱心に準備をしていました。恐怖に影響され、衝動的に行動し、真理理論に満足していた別の階級は、自分たちが神の恵みに欠けていることに気づきました。たとえ話では、花婿の到来が起こったとき、「準備ができていた人々が花婿と一緒に結婚式に出席した」とあります。ここで述べられている花婿の到来は結婚式の前に起こります。結婚式はキリストによる王国の歓迎を表します。首都であり王国を代表する聖都、新エルサレムは「花嫁、小羊の妻」と呼ばれています。天使はヨハネに、「来なさい。小羊の妻をあなたに見せましょう。」と言いました。「そして彼は私を霊において連れ去り、神のもとから天から下りてくる大いなる都、聖なるエルサレムを私に見せてくれた。」と預言者は言います。（黙示録 21:9と10）。で

したがって、花嫁は聖なる都を表しており、花婿に会いに出かける処女たちは教会の象徴であることは明らかです。黙示録には、神の民が結婚披露宴に招待されていると書かれています(黙示録19:9)。ゲストであるため、花嫁の代理を務めることはできません。預言者ダニエルが宣言したように、キリストは天の日の古人から支配権と名誉と王国を受け取ります」；彼は「夫のために飾られた花嫁として準備された彼の王国の首都、新しいエルサレムを受け取るでしょう(ダニエル7章) :14; 黙示録 21:2)王国を受け取ったイエスは、王の王、主の主として栄光のうちに来られ、ご自分の民の贖いのために、すなわち「アブラハム、イサク、ヤコブとともに」座することになります。小羊の結婚の晩餐に参加するために、彼の王国での食卓（マタイ 8:11; ルカ 22:30）。

1844年の夏になされた「花婿がやって来ます！」という宣言は、何千人もの人々を主の即時到来を待つように導きました。約束の時間になると、花婿は人々が期待していたように地上ではなく、天国の日々の古代、結婚式、そして彼の王国の披露宴にやって来ました。「準備ができていた人たちはイエスと一緒に結婚式に出席しましたが、ドアは閉まりました。」彼らは結婚式に直接出席すべきではありません。なぜなら、これらは地上にいる間に天国で起こるからです。キリストの追随者は、「主が結婚式から戻ってくる時」（ルカ 12:36）を待たなければなりません。しかし彼らは神の働きを理解し、神が神に近づくにつれて信仰によって従わなければなりません。この意味で、彼らは結婚式に行くと言われています。

たとえ話の中で、結婚式に参加したのは、器に油を入れ、ともしびを持っていた人たちでした。聖書から得た真理の知識があり、神の御霊と恵みも受けていて、苦い試練の夜、聖書の中にこの問題についてのより明確な光を求めて辛抱強く待っていた人々、これらの人々は、彼らは天の聖所に関する真理と救い主の宣教の変化を認識し、信仰によってその聖所での救い主の働きに従いました。

そして、聖書の証言に基づいて同じ真理を受け入れ、信仰によってキリストに従い、最後の仲介の働きを行うために神の臨在に入り、その終わりに神の王国を受け取るすべての人々は、これらすべてが次のように表されます。結婚式に行く。

マタイ 22 章にあるたとえ話では、同じ結婚式のイメージが示されており、調査判決は結婚式の前行われるように表されています。結婚式の前に、王は来客を観察し（マタイ 22:11）、全員が婚礼の衣装を着ているかどうかを確認します。人格の汚れのない衣服は小羊の血で洗われて白くされています（黙示録 7: 14）。これらの衣装を着ていないことが判明した者は捨てられますが、検査の結果、婚礼衣装を着ている者は皆、神に受け入れられ、神の王国に参加し、神の玉座に座るにふさわしい者とみなされます。人格を吟味し、誰が神の国への準備ができているかを判断するこの働きは、天の聖所の最後の働きである調査判決の働きである。

捜査の仕事が終わり、何世紀にもわたってキリストの追随者であると公言してきたすべての人々の事件が捜査され、その時初めて保護観察期間は終了し、慈悲の扉は閉まるのである。

このように、「準備ができていた人々は主とともに結婚に行き、ドアが閉まった」という短い一文で、私たちは救い主の最後の奉仕、つまり人類の救いのための大いなる業が行われた時代へと連れて行かれます。完成します。

地上の聖所での奉仕は、これまで見てきたように、天の聖所で行われる奉仕の一種であり、大祭司が贖罪の日に至聖所に入ったとき、最初の区画の奉仕は停止した。神はこう命じておられました。「また、人は、聖所で贖いをするために入るときは、出て行くまでは会見の天幕の中に入ってはならない」。（レビ記 16:17）。それで、キリストが入ってこられたとき、

贖いを終える働きを行う最も神聖な場所で、イエスは最初の区画での奉仕を終えた。しかし、最初の区画での奉仕が終わると、すぐに第二区画の奉仕が始まりました。典型的な礼拝では、大祭司が贖いの日に聖所を離れるとき、罪を真に悔い改めたすべてのイスラエル人に代わって神の前に出て罪のいけにえの血を捧げました。このようにして、キリストは私たちの執り成しとしての働きの一部を完了しただけで、別の働きを開始し、依然として罪人に代わって御父の御前に血をもって嘆願されました。

この問題は、1844年のアドベンチストには理解されていませんでした。救い主の到来が期待されていた時間が経過した後も、彼らは依然として救い主の到来が近いと信じていました。彼らは、重大な危機に達しており、神の前での人間の執り成しとしてのキリストの働きは終わったという考えを擁護した。彼らは聖書によって、人間に与えられた試用期間は天の雲に乗って主が来られる少し前に終わると教えられているようでした。彼らは、この教義は、人間が恵みの扉を探し、ノックし、叫びながらも開かれない時代を指し示している聖句の中に明らかであると考えた。彼らの中には、キリストの到来を待ち望んでいたその日はむしろキリストの到来直前の期間の始まりではないのではないかという疑問があった。裁きが近づいているという警告を与えた後、彼らは世のための自分たちの働きが終わったと感じ、罪人の救いのために働くという重荷を魂の中で忘れたが、一方、悪人の大胆で冒瀆的な軽蔑が彼らには見えた。これは神の御霊が神の恵みを拒む者たちから取り去られたことのもう一つの証拠である。これらすべてが彼らに、保護観察期間は終わった、あるいは彼ら自身が言ったように「保護観察の扉は閉まった」という信念を確信させた。

しかし、聖域問題の調査により、より明確な光が見えてきました。その後、彼らは、1844年の2,300日の終わりが重大な危機を示すと信じていたことが正しかったことがわかりました。18世紀にわたって人間が神に近づくことができた希望と恵みの扉が閉まったのは事実ですが、別の扉が開かれ、最も重要な場所におけるキリストのとりなしによって、その扉を通して罪の赦しが人々に提供されました。聖なる。彼は宣教の一部を終えたが、別の部分に道を譲った。天の聖所への「開かれた扉」はまだあり、そこではキリストが罪人に代わって奉仕しておられました。

さて、同時期に教会に宛てられた黙示録のキリストの言葉の応用が理解されました：
「これは、聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持っている方、開ける方で誰も閉ざさない方だと言っています」「そして、閉まり、誰も開けません。私はあなたの行いを知っています。そして見よ、私はあなたの前に開いた扉を置いたが、誰もそれを閉めることはできない。」

(黙示録 3:7 および 8)。

信仰によってイエスに従う偉大な贖いの業を行う人々は、自分に代わってイエスの仲介の恩恵を受けます。一方、このとりなしの奉仕において示される光を拒否する人は、その恩恵を受けられません。キリストの最初の降臨のときに与えられた光を拒否し、キリストを世界の救い主として信じることを拒否したユダヤ人は、キリストを通して赦しを受けることができませんでした。昇天後、イエスがとりなしの祝福を弟子たちに注ぐために、ご自身の血の功績によって天の聖所に入られたとき、ユダヤ人たちは完全な暗闇の中に取り残され、無駄な犠牲や捧げ物をささげ続けました。活字と影の奉仕は終わった。かつて人間が神に近づくための扉は、もはや開かれていませんでした。ユダヤ人たちは、イエスを見つけるための唯一の手段である天の聖所での奉仕を求めてイエスを求めることを拒否しました。その結果、彼らは神との交わりを達成できませんでした。彼らにとって、扉は閉ざされたのです。いいえ

彼らはキリストが真の犠牲であり、神の前での唯一の仲介者であるという知識を持っていました。したがって、彼らは神の仲介の恩恵を受けることができません。

不信者のユダヤ人の状態は、私たちの慈悲深い大祭司の働きを進んで無視する、自称クリスチャンの中で不注意で不信者の状態を示しています。典型的な礼拝では、大祭司が至聖所に入ると、全イスラエルが聖所の周りに集まり、最も厳粛な方法で神の前に魂を謙虚にし、罪の赦しを受けて排除されないようにすることが求められました。会衆から、この典型的な贖罪の日において、私たちが大祭司の働きを理解し、どのような義務が私たちに求められているかを知ることがさらに重要です。

人間は、慈悲深い神が彼らに送ってくださる警告を、何の処罰も受けずに拒否することはできません。そのメッセージはノアの時代に天から世界に送られ、人々の救いはノアの扱い方にかかっていた。彼らが警告を拒否したため、神の御霊は罪深い民族から引き離され、人々は洪水の水の中で滅びました。アブラハムの時代には、罪を犯したソドムの住民に慈悲は及ばなくなり、ロトとその妻、二人の娘を除いて全員が天からの火で焼き尽くされましたが、キリストの時代も同様でした。神の御子は、その世代の不信者のユダヤ人たちに、「あなたの家は荒廃するままに放置されるであろう」と宣言されました。（マタイ 23:38）。終わりの日に目を向けると、同じ無限の力が、「救われるべき真理の愛を受け取らなかった」人々に関して次のように宣言します。真理を信じず、不正を喜んでいたすべての者を裁いたのです。」

(IIテサロニケ2:10-12)。彼らが御言葉の教えを拒否するため、神は御霊を撤回し、彼らが大好きな欺瞞そのものに彼らが陥ることを許しておられます。

しかし、キリストは依然として人間のために執り成しており、光はそれを求める人々に与えられるでしょう。これは最初アドベンチスト派には理解されませんでした。後に彼らの真の立場を定義する聖書のテキストが彼らの前に開かれ始めるにつれて明らかになりました。

1844年の時が経ち、アドベンチストの信仰を依然として維持していた人々にとっては大きな試練の時期が続きました。彼らの本当の立場に関する限り、彼らの唯一の救いは、彼らの心を天の聖域に向ける光でした。一部の人々は、以前の預言期間のカウントへの信仰を放棄し、アドベンチスト運動に伴う聖霊の強力な影響を人間の力または悪魔の働きによるものだと考えました。別のクラスは、過去の経験において主が自分たちを導いてくださったという教えを粘り強く守り、神の御心を知るために待ち、見守り、祈っていると、彼らの偉大な大祭司が神の宣教の新たな部分を始められたのを見ました。信仰によってイエスに同行した彼らは、教会の最後の働きも見るように導かれました。彼らは第一と第二の天使のメッセージをより明確に理解しており、黙示録 14 章の第三の天使の厳粛な警告を受け取り、世界に伝える準備ができていました。

第25章

不変の神の法則

「神の神殿が天に開かれ、神の契約の箱が神の神殿に見られました。」（黙示録 11:19）。神の契約の箱は至聖所、つまり至聖所、聖所の第二区画にあります。「天上のものの模範と影」としての役割を果たした地上の幕屋の奉仕において、この区画は聖所の清めのために大なる償いの日にのみ入ることができました。

したがって、神の神殿が天に開かれ、神の契約の箱がそこで見られたという発表は、キリストが神の働きを遂行するためにそこに入った1844年に天の聖所の最も聖なる場所が開かれたことを示している。償いを締めくくる。偉大な大祭司が至聖所で宣教を始められたとき、信仰によって同行した人々は、主の契約の箱を見ました。聖所の主題を研究した後、彼らは救い主の宣教に生じた変化を理解するようになり、救い主が今神の箱の前で務めを果たし、罪人に代わってその血を捧げているのを見ました。

地上の幕屋の箱には2つの石の台があり、そこには神の律法の戒めが刻まれていました。箱舟は律法の表を収めた単なる容器にすぎませんでしたが、これらの神の戒めの存在によって箱舟に価値と神聖さが与えられました。天の神殿が開くと、契約の箱が見えました。至聖所、つまり天の聖域では、神の律法が神聖に保存されています。この律法は、シナイの雷鳴のただ中で神ご自身によって宣言され、ご自身の指によって石板に書かれたものです。

天の聖所における神の律法は偉大な原本であり、石の台に刻まれた戒律はモーセ五書に記録され、そこから完全に書き写されたものである。このようにして、この重要な点を理解した人々は、神の律法の神聖かつ不変の性質を理解するように導かれました。彼らはかつてないほどに、「天と地が減るまでは、一銭も一銭も律法から逃れることはできない」という救い主の御言葉の力を悟りました。（マタイ 5:18）。神の律法は神の意志の啓示であり、神の性質の翻訳であり、「天国における忠実な証人として」永遠に存続しなければなりません。いかなる戒めも無効にはならなかった。ジョークやタイトルは一切変更されていません。

詩編作者はこう言います。「主よ、あなたの言葉は永遠に天にあります。」 「神の戒めはすべて真実です。それは永遠に存続します。」（詩 119:89,111:7,8）。

十戒のまさに中心にあるのは、最初に宣言された第4の戒めです。「安息日を聖く保つために、安息日を忘れないでください。あなたは六日間働き、すべての仕事をしなければなりません。しかし、七日目はあなたの神、主の安息日です。安息日は安息日です。」あなたも、息子も、娘も、下男も、召使も、家畜も、門の中にいる見知らぬ人も、いかなる仕事もしてはならない。

なぜなら、主は六日間で天と地と海とその中にあるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖化されたのである」（出エジプト記 20:8-11）。

神の御霊は、神の言葉を研究した人々の心に感動を与えました。彼らの心には、自分たちが創造主の安息日を軽視し、知らずにこの戒めに違反したのではないかという説得が頭に浮かびました。それから彼らは、神が聖別した日ではなく週の最初の日を守る理由を検討し始めました。彼らは証拠を何も見つけることができなかった

第四戒が廃止された、あるいは安息日が変更されたという聖書。7日目を最初に神聖化した祝福は、決して取り除かれることはありませんでした。彼らは神の意志を知り、それを実現しようと誠実に努めていました。

さて、自分たちが神の律法に違反していると見て、悲しみが彼らの心を満たし、彼らは神の聖なる安息日を守ることによって神への忠誠を示しました。

彼らの信仰に終止符を打つために、多くの多大な努力が払われました。

地上の聖域が天の聖域の姿や模型であるとすれば、地上の箱舟に預けられた律法は天の箱舟にある律法の正確なコピーであることを、誰もが気づかずにはいられませんでした。そして、天の聖域の真理を受け入れることには、神の律法の主張と第四戒の安息日の義務を認めることが含まれるとしました。そこには、天の聖所におけるキリストの奉仕を明らかにする聖書の調和のとれた説明に対する、激しく断固とした反対の秘密が隠されていました。

人間は神が開いた扉を閉め、神が閉じた扉を開けようとした。しかし、「開けても誰も閉めない者、また閉めても誰も開けない者」は、「見よ、わたしはあなたの前に開いた扉を置いたが、誰もそれを閉めることはできない」と言いました。（黙示録 3:7 および 8）。

キリストは最も聖なる場所の扉、つまり宣教の扉を開いてくださったのです。天の聖所のこの開かれた扉から光が差し込み、そこに祀られている律法に含まれる第四の戒めが示されました。神が定めたものは、誰も破壊することができません。

キリストの仲介と神の律法の永続に関する光を受け入れた人々は、これらが黙示録 14 章に述べられている真理であることを発見しました。この章のメッセージは、地球の住民が主の再臨に備えるべき三重の警告を構成しています。「神の裁きの時が近づいている」という発表は、人々の救いのためのキリストの奉仕を終わらせる働きを指している。それは、救い主のとりなしが終わり、救い主がご自分の民を探すために地球に戻るまで、宣言されなければならない真理を宣言しています。1844年に始まった裁きの働きは、生者と死者の両方のすべての事件が決着するまで続けられなければならない。したがって、それは人類の恵みの時が終わるまで続くこととなります。人間が備えを整えて裁きの場に立つことができるように、メッセージは神を畏れ、神に栄光を帰し、「天と地と海と水の泉を造られた方を崇拜せよ」と命じている。これらのメッセージを受け入れた結果は、「神の戒めとイエスの信仰を守る人々がここにいます」という言葉で示されます。裁きに備えるためには、人間は神の律法を守る必要がある。この法律が判決における人格の基準となる。使徒パウロはこう宣言しています。「律法の下で罪を犯した者は皆、律法によって裁かれることとなります…その日、神はイエス・キリストによって人の秘密を裁かれるでしょう。」そして彼はさらにこう言います、「律法を實踐する者は義とされるのです」(ロマ 2:12-16)。神の律法に従うためには信仰が不可欠です。なぜなら、「信仰がなければ神を喜ばせることは不可能だからです」。「そして信仰から出ていないものはすべて罪です。」（ヘブライ人への手紙 11:6、ローマ人への手紙 14:23）。

最初の天使のメッセージを通して、人々は神を畏れ、神に栄光を帰し、天と地の創造者として神を崇拜するよう呼びかけられています。そのためには、彼らは神の律法に従わなければなりません。賢者はこう言います、「神を畏れ、神の戒めを守りなさい。これがすべての人の義務だからです。」（伝道 12:13）。神の戒めに従わなければ、いかなる礼拝も神に喜ばれることはできません。「私たちが神の戒めを守ること、これが神の愛です。」「律法を聞かずに耳をそむける者は、その祈りさえも忌まわしいものとなる。」（ヨハネ第一 5:3; 箴言 28:9）。

神を崇拜する義務は、神が創造主であり、他のすべての存在は神のおかげで存在しているという事実に基づいています。そして聖書の中で、異教の神々を崇拜し礼拝する神の権利が示されるどころはどこでも、神の創造力の証拠が引用されています。「民の神々はみなむなしなものだが、主は天を造られた。」（詩 96:5）。「それでは、私を誰に似せて、私を好きにしてくれるのですか？」

似ている?と聖人は言います。「目を高く上げて、誰がこれらのものを創造したのを見なさい。」
「天を創造した主、地を形作り造られた神はこう言われます。「……わたしが主であり、他にはない。」(イザヤ書 40:25 と 26; 45:18)詩編作者はこう言っています、「主が神であることを知りなさい。私たちではなく、主であったのです。」「私たちがあなたの民にしてくれました。」「さあ、礼拝し、ひれ伏しましょう。私たちが創造された主の前にひざまずきましょう。」(詩 100:3; 95:6)そして天で神を崇拝する聖なる者たちは、なぜ神に敬意を払うべきなのかを宣言します。栄光、名誉、権力。あなたは万物を創造されたからです」(黙示録 4:11)。

黙示録 14 章では、人々は創造主を崇拝するよう求められています。そしてこの預言は、三つのメッセージの結果として神の戒めを守っているある階級を強調しています。これらの戒めの 1 つは、創造主としての神を直接示しています。第四の戒めはこう述べています。「七日目はあなたの神、主の安息日です…主は六日間で天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたからです。それゆえに彼は安息日を主に祝福し、それを神聖なものとした。」(出20:10と11)。安息日について主は、これは「わたしがあなたの神、主であることをあなたが知るためのしるし」でもあると言われます(エゼキエル20:20)。その理由は、「主は六日間で天と地を造り、七日目に休んで元気を与えられたからである。」(出31:17)。

「創造の記念としての土曜日の重要性は、神を崇拝する真の理由を常に提示し続けることです。なぜなら、神は創造主であり、私たちは神の被造物だからです。」「したがって、安息日は神の礼拝のまさに基礎にあります。安息日はこの偉大な真理を最も印象的な方法で教えており、他のどの機関もこれを行っていないからです。神の礼拝の真の基盤は、単に7日目に捧げられる礼拝ではありません。」「しかし、すべての崇拝の中で、創造主とその被造物との区別にあるのです。この重要な事実は決して時代遅れになることはなく、決して忘れてはなりません。」神がエデンに安息日を設けたのは、この真理を常に人々の心に留めておくためでした。そして、神が私たちの創造者であるという事実が、私たちが神を礼拝すべき理由であり続ける限り、安息日はそのしるしであり、記念であり続けるでしょう。もし安息日が広く守られていたなら、人々の思いや愛情は尊敬と崇拝の対象として創造主に向けられ、偶像崇拝者や無神論者、不信者は決して存在しなかつただろう。安息日を守ることは、「天と地と海と水の泉を造られた方」である真の神への忠誠のしるしです。神を礼拝し、神の戒めを守るようにと人々に命じるメッセージは、特に第四戒への従順を求めていることが分かりました。

神の戒めを守り、イエスの信仰を持つ人々とは対照的に、第三の天使は別の階級の間人を指差し、その誤りに対して厳粛かつ恐ろしい警告を發します。顔や手にある跡も、神の怒りのぶどう酒を飲むことになるだろう。」(黙示録 14:9 および 10)。このメッセージで使用されている記号を正しく解釈する必要があります。獣、像、記号は何を表しているのでしょうか？

これらのシンボルが登場する一連の預言は、黙示録の第 12 章で始まり、キリストの誕生時にドラゴンが破壊しようとしたところから始まります。ドラゴンはサタンであると宣言されています(黙示録 12:9)。救い主を殺すためにヘロデに行動をとったのは彼でした。しかし、キリスト教時代の最初の数世紀に、キリストとその民に対して戦争を仕掛けたサタンの主な代理人は、異教が支配的な宗教であったローマ帝国でした。したがって、ドラゴンは主にサタンを表しますが、二次的な意味では異教ローマの象徴でもあります。

13章には、「ヒョウのような」別の獣が描写されており、ドラゴンはそれに「自分の力、王座、そして偉大な力」を与えた。このシンボルは、ほとんどの場合と同様に、

プロテスタントは、かつて古代ローマ帝国が持っていた権力、王位、権威の後継者である教皇権を代表すると信じてきました。ヒョウのような獣についてはこう宣言されています。「彼には偉そうなことや冒涇を語る口が与えられた…そして彼は神に対して冒涇の口を開いた、神の名と幕屋とそこに住む者たちを冒涇するためだった」そして彼には、聖徒たちと戦争をし、彼らに打ち勝つことが与えられた。そして、あらゆる部族、言語、国家を支配する力が彼に与えられた。」この預言は、ダニエル書 7 章の小さなヒントとして記述されているものとほぼ同じであり、疑いもなく教皇制を指しています。

「彼には42か月間活動を続ける権限が与えられた。」そして預言者は、「私は彼の頭の一つが、まるで死ぬほど傷ついているかのように見えた」と言います。そしてまた、「もし誰かを捕虜に導くなら、彼は捕虜になります。誰かが剣で殺すなら、彼は剣で殺されなければなりません。」42か月は「時、時、半時」と同じであり、ダニエル書7章の3年半または1,260日であり、その間教皇権力が神の民を抑圧することになります。前の章で述べたように、この期間は、西暦 538 年の教皇制の確立とともに始まりました。その際、教皇制度が廃止され、教皇がフランス軍の捕虜となったとき、教皇権力は致命傷を負い、次の予言が成就した。「もし誰かが捕虜になったら、捕虜の意志は。」

この時点で、別のシンボルが導入されます。預言者はこう言います。「私は別の獣が地から起き上がるのを見た。それは子羊のような二本の角を持っていた。」（黙示録 13:11）。この獣の外観とその出現方法の両方は、それが表す国家が前述のシンボルの下で特定された国家とは異なることを示しています。世界を支配してきた大王国は、「天の四つの風が大海で戦った」ときに立ち上がった略奪的な獣として預言者ダニエルに提示されました(ダニエル書7:2)。黙示録 17 章で、天使は水が「人々、群衆、国民、言語」を表していることを明らかにしました(15 節)。風は紛争の象徴です。

大海原で戦う天の四つの風は、王国が権力を握る征服と革命の恐ろしい場面を表しています。

しかし、子羊のような角を持った獣が「地から現れる」のが見えました。他の勢力を殲滅して自らを確立するのではなく、このように代表される国家は、それまで無人の領域に出現し、徐々に平和的に成長しなければならない。したがって、旧世界の人口が密集し好戦的な国々、つまり「人々、群衆、国家、言語」のあの荒れ狂う海の中からそれが生まれることはあり得ませんでした。この国は西大陸にあるはずだ。

1798 年に台頭し、強さと偉大さを示し、世界の注目を集めた新世界の国はどこでしょう?このシンボルの適用には疑いの余地がありません。北米アメリカ合衆国を明確に示すこの預言の仕様を満たすのは 1 つの国だけです。

聖なる作家のほぼ正確な言葉であるこの考えは、繰り返し、この国の出現と発展を説明するために講演者と歴史家によって無意識に使用されているようです。獣が「地から現れる」のが見られました。そして翻訳者によれば、ここで「立ち上がる」と訳されている言葉は、文字通りには「植物のように成長する、または芽を出す」という意味だそうです。そして、私たちがすでに見る機会があったように、国家は以前は無人だった領域に出現するはずで、著名な作家は米国の出現を描写し、「空虚からの起源の謎」について語り、「物言わぬ種子のように、我々は帝国に発展した」と述べている。1850年のヨーロッパの新聞は、アメリカ合衆国が新興の素晴らしい帝国であり、「地球の静寂の中で、日々権力と誇りを高めている」と述べた。エドワード・エヴェレットは、建国の巡礼者に関する講演で次のように述べた。人里離れた場所、目立たないために無害な場所を探さないでください。

専制君主の迫害から距離を置くことで守られ、ライデンの小さな教会は良心の自由を享受できるでしょうか？平和的な征服で彼らが十字架のパビリオンを植えた強力な地域を見よ！」

「そして彼には子羊のように2本の角がありました。」子羊のような角は若さ、純真さ、従順さを表しており、1798年に預言者に「台頭している」と表現されたときの米国の性格を適切に表している。最初に米国に亡命したキリスト教徒は王室の抑圧と聖職者の不寛容から庇護を求めた。市民的および宗教的自由という広範な基盤の上に政府を樹立することを決意した。独立宣言は、「すべての人間は生まれながらにして平等」であり、「生命、自由、幸福の追求」に対する不可侵の権利を与えられているという偉大な真実を確立しています。そして憲法は国民に自治政府を樹立する権利を保障し、一般投票で選ばれた代表者が法律を制定し施行することを保証している。宗教上の信仰の自由も保証され、すべての人が良心の命じるままに神を崇拝することが認められました。

共和主義とプロテスタント主義が国の基本原則となった。

これらの原則があなたの力と繁栄の秘密です。キリスト教世界全体で抑圧され無力な人々が、関心と希望を持ってこの地に目を向けています。何百万もの人々がその海岸に到着し、米国は地球上で最も強力な国の中で傑出した地位を獲得しました。

しかし、子羊のような角を持つ獣は、「ドラゴンのように話しました。そして、彼は彼の前で最初の獣の力をすべて行使し、地球とそこに住む人々に、致命的な傷が癒された最初の獣を崇拝させました。」……地上に住む者たちに、剣の傷を受けて生きていた獣の像を作るように告げた」（黙示録13:11-14）。

このシンボルの子羊のような角とのような声は、このシンボルが象徴する国家が公言していることと実践していることとの間の顕著な矛盾を示しています。国家の「対話」とは立法・司法当局の行動である。そのような行動は、その政策の基礎として確立した自由主義と平和の原則に反することになる。彼が「のように」話し、「最初の獣のすべての力」を行使するという予言は、明らかに、とヒョウのような獣に代表される国々を通して明らかにされた不寛容で迫害的な精神の発達を予期しています。二角の獣が「地球とそこに住む人々に最初の獣を崇拝させる」という宣言は、教皇制への敬意の行為である何らかの遵守事項を強制するためにその国の権威が行使されなければならないことを示している。

そのような態度は、この政府の原則、その自由な制度の性格、独立宣言と憲法の直接かつ厳粛な声明に真っ向から反するものである。国の建国者たちは賢明にも、不寛容と迫害という避けられない結果を伴う教会による世俗権力の行使を避けようとした。憲法は、「議会は宗教の設立に関する法律、またはその自由な行使を禁止する法律を制定してはならない」と定めており、また「合衆国の下で公的信託を受ける職の資格として、宗教的性質の証明は決して要求されない」と定めている。。」国家の自由のこれらの保護手段に著しく違反する場合にのみ、いかなる宗教的遵守も民間当局によって強制されることができません。しかし、そのような立場の矛盾は、象徴によって表される矛盾よりも大きいものではありません。それは子羊に似た角を持ち、純粋で慈悲深く無害であると主張し、ドラゴンのように話す獣です。

「地上に住む者たちに、獣の像を作るように告げる。」ここには、立法権が国民から得られる政府の形態が明確に示されている。これは、米国が預言に示された国家であることを示す最も説得力のある証拠です。

しかし、「獣の像」とは何でしょうか？そしてそれはどのように形成されるべきでしょうか？この像は二角の獣によって作られ、最初の獣の像です。獣の像とも言われます。したがって、イメージが何であるか、そしてそれがどのように形成されるかを知るためには、獣そのもの、つまり教皇権の特徴を研究する必要があります。初代教会が福音の単純さに背を向け、異教の儀式や習慣を受け入れたことによって腐敗したとき、教会は神の御霊と力を失いました。そして人々の良心をコントロールするために、世俗権力の支援を求めた。この態度の結果として、国家の権力を管理し、特に「異端」の処罰においてそれを自らの目的を推進するために利用する教会である教皇制が生まれた。米国が野獣のイメージを形成するには、教会が自らの目的を達成する目的で国家権力を利用できるように、宗教権力が市民権力を統制しなければならない。

教会が世俗的な権力を獲得するたびに、その教義に反対する人々を罰するためにそれを利用しました。世俗権力と同盟を結んでローマの足跡をたどってきたプロテスタント教会も、良心の自由を制限したいという同じ願望を表明しています。この一例は、聖公会による反体制派に対する長期にわたる迫害に見ることができます。16世紀から17世紀にかけて、何千人もの非国教徒の牧師が教会からの追放を余儀なくされ、牧師も国民も含めた多くが罰金、投獄、拷問、殉教の対象となりました。

初代教会が民間政府に助けを求めるきっかけとなったのは背教であり、これが教皇制度、つまり野獣の発展への道を切り開いた。パウロは、「背教」が起こり、「罪の人」が明らかにされるだろうと言いました(IIテサロニケ2:3)。このように、教会における背教は獣の像の形成への道を備えることになる。そして聖書は、主の再臨の前に、最初の世紀と同様の宗教的衰退状態が起こると宣言しています。「終わりの日には、危険な時代が来る。自分を愛する者、貪欲、自慢者、傲慢、冒涇者、父や母に従わない、恩知らず、不敬、自然な愛情を持たず、和解できない、中傷する、失禁する、残酷な人々が現れるからである」善人に対する愛がなく、裏切り者で、頑固で、高慢で、神を愛する人よりも快楽を愛し、敬虔さの形を持っているが、その力を否定している。」(IIテモテ3:1-5)。「しかし、御霊は、後の時代、人を惑わす霊や悪霊の教義に注意を払い、信仰から離れる人がいるだろうとはっきりと告げています。」(テモテへの手紙第一4:1)。サタンは「あらゆる力と、しるしと、偽りの不思議と、あらゆる欺瞞と不正を用いて働きます。そして、「救われるべき真理への愛を受け取らなかった」すべての人は、「偽りを信じるようにするための誤謬の働き」を自由に受け入れることとなります(IIテサロニケ2:9-11)。そのような不敬虔の状態に達すると、最初の数世紀と同じ結果が現れるでしょう。

プロテスタント教会における信仰の幅広い多様性は、強制的な統一性を確保する努力が決して行われないことの決定的な証拠であると多くの人がみなしている。しかし、プロテスタント信仰の教会では、教義の共通点に基づく結合を支持する強い感情が長年にわたって存在し、ますます高まってきました。このような遵守を確実にするためには、聖書の観点から見た重要性にもかかわらず、合意のない主題に関するいかなる議論も避けなければなりません。

チャールズ・ビーチャーは、1846年に行った説教の中で、「福音派プロテスタント諸派」の奉仕活動は「ひどい下で結成されただけではない」と宣言した。

しかし、彼はまた、根本的に腐敗した物事の中で生き、動き、呼吸し、真実を隠し、背教の力にひざまずくために、あらゆる瞬間に自分の本性のあらゆる最低の要素に訴えます。それがローマの状況ではなかったか？私たちは再び彼の道歩んでいるのではないのでしょうか？そして私たちの目の前には何が見えるのでしょうか？また総評議会だ！世界大会！福音主義の聖約であり、普遍的信条だ！」、もし彼らが国家に影響を与えて法令を執行し、その制度を支援すれば、プロテスタントのアメリカはローマの階級社会のイメージを形成し、反対者に対する民事罰の適用は必然的に結果として生じるだろう。

二角の獣は、「小さい者も大きい者も、金持ちも貧しい者も、自由な者も絆のある者も、すべての人に右手か額に印を付けさせ、その印を持つ者以外は誰も売買できないようにし、あるいは獣の名前、あるいはその名前の数字」（黙示録13:16,17）。第三の天使の警告は、「もし誰かがその獣とその像を崇拜し、額や手にその刻印を受けるなら、その人もまた神の怒りのぶどう酒を飲むことになるでしょう。」です。このメッセージで言及されている「獣」は、二角の獣によって崇拜が命じられていますが、黙示録13章の最初の獣、またはヒョウのような獣、つまり教皇庁です。「獣の像」は、プロテスタント教会が自らの教義を押しつけるために市民権力の援助を求めたときに発展する背教的なプロテスタンティズムの形態を表しています。「獣の刻印」はまだ定義されていません。

預言は、獣とその像の崇拜に対する警告の後に、「神の戒めとイエスの信仰を守る者たちがここにいます」と宣言しています。このように、神の戒めを守る人々が、獣とその像を崇拜し、神の刻印を受ける人々と対照的に位置づけられていることを考えると、一方では神の律法の遵守、他方ではその違反が行われるということになります。神を崇拜する者と獣を崇拜する者を区別しなければなりません。

獣の、そしてしたがってその像の特別な特徴は、神の戒めに違反することです。小さな角である教皇庁について、預言者ダニエルは、「彼は時代と法律を変えることに気を配るだろう」と述べています。（ダニエル7:25）。そしてパウロは、この同じ力を、自分を神よりも高めていると主張する「罪の人」と呼んだのです。1つの預言は、もう1つの預言を補完するものです。神の法律を変えることによるのみ、教皇庁は自らを主よりも高く高めることができました。このように変更された法律を良心的に遵守する者は、その変更をもたらした権力に最高の榮譽を与えることになる。教皇の法に従うそのような行為は、神ではなく教皇への忠誠のしるしとなるでしょう。

教皇庁は神の法律を変えようとした。像の崇拜を禁じる第二戒は法律から削除され、第四戒は安息日として7日目の代わりに1日目を守ることを認めるために変更された。しかし教皇派は、第二戒が省略された理由として、第二戒は第一戒に含まれているので不必要であり、神が人間に理解させることを意図したものと同じ法律を与えていると主張している。これは預言者が予言した変化ではありません。意図的な、意図的な変化が提示されます。「彼は時代と法律を変えることに尽力するだろう。」第四戒の変更はまさに預言を成就します。これに関して唯一とされる権威は教会です。ここでは教皇の権力が公然と神の上に位置しています。

神の崇拜者は特に第四戒を尊重する点で際立っていますが、これは神の創造力のしるしであり、次のことの証しであるからです。

人間への畏敬と敬意に対する彼らの権利、つまり獣の崇拜者たちは、創造主の記念碑とローマの制度の高揚を破壊することを目的とした彼らの努力で際立っているでしょう。教皇庁が傲慢な主張をし始めたのは、日曜日を支持する立場のためであった。彼が国家権力に要求した最初的手段は、日曜日を「主の日」として遵守することを強制することでした。しかし聖書は、最初の日ではなく7日目を主の日として示しています。キリストは「人の子は安息日の主である」と言われました。第四戒には「七日目は主の安息日である」とあります。そして主は預言者イザヤによってこの日を「私の聖なる日」と呼ばれています。（海。

2:28; 1つ。 58:13）。

キリストが安息日を変えたというよく言われる主張は、キリストご自身の言葉によって反駁されています。山上の説教の中でイエスはこう言われました、「わたしが律法や預言者を滅ぼすために来たと思うな。わたしは律法を廃止するためではなく、それを成就するために来た。天と地が減るまで、真実にあなたがたに言います。したがって、これらの最も小さな戒めの1つでも違反し、このように人々に教える者は、天国で最も低い者と呼ばれますが、それを履行し教える者は誰でも、天の御国で偉大な者と呼ばれるだろう。」（マタイ 5:17-19）。

聖書のどこにも安息日の変更を許可していないことは、プロテスタントによって一般に受け入れられている事実です。このことは、アメリカ・トラクト協会とアメリカ日曜学校連合が発行する出版物で率直に述べられています。これらの著作の1つは、「日曜日に対する明確な戒めや、その遵守のための明確な規則に関する新約聖書の完全な沈黙」を認めている。

別の人は、「キリストの死の時まで、その日には何も変化がなかった」と言います。そして、「記録が示す限り、彼ら（使徒たちは）7日目の安息日を放棄し、週の最初の日にそれを遵守することを命じる明確な命令は出していない。」

ローマ・カトリック教徒は安息日の変更が自分たちの教会によって行われたことを認識しており、プロテスタントは日曜日を守ることでローマ教会の力を認めていると宣言する。カトリックのキリスト教信仰問答では、第4戒めに従うべき日についての質問に答えて、次のように述べられています。「古い法律では、安息日は聖なる日でしたが、教会は、「イエス・キリストによって、そして神の御霊によって導かれ、土曜日が日曜日に置き換えられました。それで今、私たちは7日目ではなく最初の日を聖別しています。日曜日は今や主の日を意味します。」

カトリック教会の権威のしるしとして、パピストの作家らは「安息日を日曜日に変更するという行為自体をプロテスタントも認めているが、それはプロテスタントが日曜日を厳格に守ることで、祝祭を定め、それを課す教会の権力を認めているからである」と引用している。罪を負った犯罪者には罰が与えられる。」それでは、安息日の変更がローマ教会の権威のしるし、あるいは「獣の刻印」でなければ何になるのでしょうか？

ローマ教会は覇権の主張を放棄しませんでした。そしていつ世界とプロテスタント教会は、聖書の安息日を拒否しながらも、その創造からの休息日を受け入れていますが、事実上これらの主張を認めています。彼らは変革のために伝統と教父の権威を呼び起こすかもしれないが、その際、彼らをローマから隔てる原則そのもの、つまり「聖書、そして聖書だけがプロテスタントの宗教である」という原則を無視している。教皇主義者たちは、自分たちが自分たちを欺き、この事件に関する事実から自発的に目を閉じていることがわかります。日曜運動が支持を得ると、彼らは自分たちを祝福し、この運動がローマの旗のもとにプロテスタント世界全体を結集させるだろうと確信する。

ローマ主義者たちは、「プロテスタントによる日曜日の遵守は、何があろうとも、[カトリック]教会の権威に敬意を表している」と宣言している。プロテスタント教会による日曜日の遵守の強制は、教皇制、つまり獣の崇拜の強制である。第四戒の要求を理解して、真の安息日の代わりに偽りの安息日を守ることを選択する人々は、それによって、それが命じられる力のみで敬意を表していることになります。しかし、世俗権力を通じて宗教的義務を課するというまさにその行為において、教会は野獣のイメージを形成することになるだろう。したがって、米国で日曜日の遵守を課することは、獣とその像を崇拜することへの強制です。

しかし、前の世代のクリスチャンは日曜日を守り、そうすることで聖書の安息日を守ることになると考えていました。今日、ローマ・カトリック教会を除くすべての教会に、日曜日が神が定めた安息日であると正直に信じている真のクリスチャンがいます。神は誠実な目的と誠実さを受け入れます。しかし、日曜日の遵守が義務となり、正当な安息日の義務について世界が啓発される時、ローマの戒律よりも権威のない戒律に従うという神の戒めに違反する者は、神の上にある教皇権を尊重することになる。あなたはローマと、ローマが命じた制度を課す権力に敬意を払うことになります。あなたは獣とその像を崇拜することになります。神が神の権威のしるしであると宣言した制度を拒否し、その代わりにローマが至高性のしるしとして選んだ制度を人々が尊重するとき、彼らはローマへの忠誠のしるし、つまり「獣の刻印」を受け入れていることになる。この問題が人々の前に明確に提示され、人々が神の戒めと人間の戒めのどちらかを選択するようになったとき、違反の道が続ける人々は「獣の刻印」を受け取るでしょう。

これまで定命の者たちに向けられた最も恐ろしい脅威は、第三の天使のメッセージに含まれています。それは慈悲と混じり合わない、神の怒りを招く恐ろしい罪となるでしょう。男性はこの重要な問題について闇の中に放置されるべきではありません。そのような罪に対する警告は、神の裁きが訪れる前に世界に発せられなければなりません。そうすれば、誰もがなぜこれらの刑罰が課されるのかを知り、それらから逃れる機会を得ることができるようになります。この預言は、最初の天使が「すべての国民、同族、言語、民族」にこの発表を行うと宣言しています。三重のメッセージの一部である第三の天使の警告は、同様に広く普及するはずですが、それは、天の真ん中を飛んでいる天使によって大声で宣言され、世界の注目を集めているという預言として表現されています。

この論争の結果、キリスト教世界全体が、神の戒めとイエスの信仰を守る者と、獣とその像を崇拜し、その刻印を受ける者という、二つの大きな階級に分けられることになる。教会と国家は力を合わせて、「小さい者も大きい者も、富める者も貧しい者も、自由と絆をもつすべての者」に「獣の刻印」（黙示録13:16）を強制するために、しかし、国民は、神はそれを受け取らないでしょう。パトモス島の預言者は、「獣とその像とその刻印とその名の数に勝利し、ガラスの海のほとりに立ち、神の豎琴を持った人々」について熟考しています。そして彼らはモーセの歌と小羊の歌を歌った」（黙示録15:2,3）。

第26章

改革の取り組み

終わりの日に行われる安息日の改革の働きは、イザヤの預言で予告されている：「主はこう言われる、『裁きを堅持し、義を行なえ。わたしの救いは来るべき備えがあり、わたしの義は明らかにされるからである』……これを行う者と、これをしっかりと掌握し、安息日を汚さないようにし、自分の手を悪行から守る者の子は幸いである。」「主に仕え、主の御名を愛するために主のもとに来て、したがって主のしもべである外国人の子供たち、安息日を守り、それを汚さず、わたしの契約を受け入れるすべての人たちへ。彼らを私の聖なる山に連れて行き、私の祈りの家で彼らを祝います。」（イザヤ 56:1,2,6,7）。

これらの言葉は、文脈からわかるように、キリスト教の神権時代に当てはまります。「イスラエルの散らされた者を集める主エホバはこう言われる、『わたしは、自分のもとに集められた者たちのところに他の者を集める』。」（イザヤ 56:8）。ここには、福音によって促進された異邦人の集合が暗示されています。そして安息日を守る者には祝福が宣言されます。したがって、第四戒の義務は、キリストの磔刑、復活、昇天を超えて、キリストの僕たちがすべての国に福音のメッセージを宣べ伝える時まで及ぶことになる。

主はこの同じ預言者を通して、「証を結び、弟子たちの間で律法を封印せよ」と命じられます。（イザヤ 8:16）。神の律法の封印は第四戒にあります。10件のうち、これだけが名前だけでなく議員の肩書も記録されています。神は天と地の創造者であると宣言し、何よりも畏敬し崇拝する権利があることを示しています。この教訓を除いて、十典には法律が誰の権威によって与えられたのかを示すものは何もありません。安息日が教皇の権限によって変更されたとき、封印は法律から削除されました。イエスの弟子たちは、第四戒の安息日を創造主の記念として、またその権威のしるしとして正当な位置に再確立し、高めるよう求められています。

「法と証言に！」矛盾する教義や理論が数多く存在しますが、神の律法は、すべての意見、教義、理論がテストされなければならない唯一の絶対的な規則です。預言者はこう言います。「この言葉に従って語らない限り、彼らは決して夜明けを見ることはないでしょう。」（イザヤ 8:20）。

再び、「大声で叫びなさい。ためらわずに、ラツパのように声を張り上げ、わたしの民に彼らの罪を、ヤコブの家に彼らの罪を宣言しなさい」と命じられています。罪を戒められるのは邪悪な世ではなく、主が「わたしの民」と定めた人々です。さらに彼はこう宣言する、「それにもかかわらず、彼らは毎日わたしを求め、義を行う民としてわたしの道を知ること喜びを感じており、神の定めを捨てない。」（イザヤ 58:1 と 2）。ここでは、自分たちは義であると考えており、神への奉仕に大きな関心を示しているように見える階級が強調されています。しかし、心臓検査官の厳しく厳粛な非難は、彼らが神の戒めを踏みにじていることを証明しています。

このように預言者は、忘れ去られていた儀式を次のように区別しています。安息日、そして私の聖日にあなたの意志を行うことから、そしてもしあなたが安息日を喜び、主の聖日、名誉に値する聖日と呼ぶなら、自分のやり方に従うのではなく、また自分の意志を行うふりをするのではなく、それを尊重しなさい。自分の言葉を語らないなら、あなたは主にあって喜ぶことになるだろう。」

(イザヤ 58:12-14)。この預言は私たちの時代にも当てはまります。神の律法への違反は、ローマの力によって安息日に変更されたときに起こりました。しかし、神の制度を回復しなければならない時が来ました。亀裂は修復され、何世代にもわたる基盤を構築しなければなりません。

創造主の休息と祝福によって神聖化された安息日は、アダムによって聖なるエデンで無邪気なまま守られました。アダムが墮落して悔い改め、幸福な住まいから追放された後に書いたもの。それは、アベルから正義のノア、アブラハムからヤコブに至るまで、すべての族長によって守られていました。選ばれた民がエジプトの捕虜になったとき、多くの人が、蔓延する偶像崇拜の真ただ中で、神の律法についての知識を失いました。しかし、主がイスラエルを救い出されたとき、集まった群衆が主の御心を知り、主を畏れ、永遠に従うようにと、主は恐ろしいほどの壮麗さで律法を宣告されました。

その日から現在に至るまで、神の律法の知識は地上に保たれており、第四戒の安息日が守られています。「罪の人」は神の聖日を踏みじめることに成功したが、反キリストが優越した時代であっても、人里離れた場所に隠れ、聖なる戒めを守った忠実な魂がいた。宗教改革以来、どの世代にもその遵守を守り続けた人たちがいます。しばしば非難や迫害のさなかであっても、神の律法の永続と天地創造の安息日の神聖な義務については、絶えず証言がなされてきました。

「永遠の福音」に関連して黙示録 14 章に述べられているこれらの真理は、キリストが現れた当時のキリストの教会を区別することになります。なぜなら、三重のメッセージの結果として、「ここに神の戒めとイエスの信仰を守る者たちがいる」と告げられるからである。そして、このメッセージは主の再臨前に与えられる最後のメッセージです。この宣言の直後、人の子が栄光のうちに来て、地の収穫を刈り取るのが預言者によって見られます。

聖所と神の律法の不変性に関する光を受けた人たちは、真理体系の美しさと調和が理解できるようになったのを見て、喜びと熱意で満たされました。彼らは、自分たちにとってとても貴重に思えた光がすべてのクリスチャンに伝わることを望みました。そして彼らは彼女が喜んで受け入れられると信じることはできませんでした。しかし、世と対立するような真理は、キリストの追隨者であると自称する多くの人たちには受け入れられませんでした。

第四の戒めに従うには犠牲が必要でしたが、その前にほとんどの人は尻込みしました。

安息日の要求が提示されたとき、多くの人々は世俗的な観点から推論しました。彼らは言いました。「私たちはいつも日曜日を守ってきました。私たちの父親たちも日曜日を守りました。多くの善良で敬虔な人々が日曜日を守りながら幸せに死んでいきました。もし彼らが正しければ、私たちも同じです。この新しい7日目の安息日を守ることで、私たちは生活から解放されるでしょう」「世界との調和を保っていれば、私たちは彼に対して何の影響も持たないでしょう。日曜日を守る全世界に対して、7日目を守る少数のグループに何ができるでしょうか？」ユダヤ人も同様の議論でキリストの拒絶を正当化しようと努めました。彼の両親は犠牲を捧げることで神に受け入れられました。そしてなぜ子供たちは同じ行動をとって救いを見つけないことができなかったのでしょうか？また、ルター時代にも、教皇派は、真のキリスト教徒はカトリック信仰の中で死んだので、救いには宗教で十分だと主張した。そのような推論は、宗教の信仰や実践におけるあらゆる進歩に対する効果的な障壁であることが判明しました。

多くの人々は、日曜日を守ることは確立された教義であり、何世紀にもわたって広く教会の習慣であったと主張しました。この議論に対して、安息日とその遵守はより古く、より古いものであることが示されました。

世界そのものと同じくらい古く、神と天使の両方の認可を受けて伝播しました。地球の基礎が据えられ、明けの星が共に歌い、神の子ら全員が喜んだとき、安息日の基礎が据えられました（ヨブ記 38:6,7、創世記 2:1-3）。この機関は我々に敬意を払うに値する。それは人間の權威によって命令されたものではなく、人間の伝統に基づいたものでもありません。それは日の古人によって設立され、彼の永遠の言葉によって定められました。

安息日改革の主題に人々の注意が向けられたとき、人気のある牧師たちは神の言葉を曲解し、探究心を静めるような解釈をしました。そして、自分で聖書を調べなかった人たちは、自分の欲望と一致する結論を受け入れて満足しました。議論や詭弁によって、教父や教会当局の伝統によって、多くの人が真実を破壊しようと努めてきました。聖書の真実の擁護者たちは、第四戒の正当性を擁護するために聖書に目を向けました。真理の言葉だけを備えた謙虚な人々は、学識ある人々の攻撃に直面したが、彼らの雄弁な詭弁は、学術的な微妙な点よりも聖書に精通している人々の単純かつ直接的な推論には無力であることに気づき、驚きと怒りを抱いた。。

自分たちに有利な聖書の証言がなかったので、多くの人は、同じ論拠がキリストとその使徒たちに対してどのように使われたかを忘れ、不屈の粘り強さで自分たちの議論を主張しました。ただあなたと同じように信じてください。あなたが正しいことはあり得ませんし、世界中の読み書きができる人全員が間違っている可能性もあります。」

そのような推論に反論するには、聖書の教えとあらゆる時代における主の民との関わりの歴史を引用するだけで十分でした。神は、神の声を聞いてそれに従う人々、必要に応じて不愉快な真実を語り、民衆の罪を戒めることを恐れない人々を通して働かれる。主が改革運動の指導者として学識や地位の高い人をあまり選ばない理由は、彼らが自分たちの信条、理論、神学体系を信頼しており、神から教えられる必要性を感じていないからである。知恵の源と個人的なつながりを持つ人だけが、聖書を理解したり説明したりすることができます。学問的な指導をほとんど受けていない人が時々真理を宣べ伝えるように召されることがありますが、それは彼らが文盲だからではなく、神から教えられるだけで十分ではないからです。彼らはキリストの学校で学び、その謙虚さと従順さが彼らを偉大にするのです。神は彼らに神の真理の知識を委ねることによって、地上の栄光や人間の偉大さが取るに足らないものになってしまうのと比較して、彼らに栄誉を与えます。

ほとんどのアドベンチスト派は神の聖所と律法に関する真理を拒否し、多くはアドベンチスト運動への信仰を放棄し、アドベンチスト運動に適用される預言について誤った矛盾した見解を採用しました。ある人たちは、キリストの再臨の明確な時期を何度も決めるという誤りに導かれてきました。聖域の出来事から今輝いている光は、預言の期間が再臨まで延長されないことを彼らに示したでしょう。この出来事の正確な時刻は予測されていません。しかし、彼らは光に背を向けて、何度も主の来臨の時を刻み続け、しばしば失望しました。

テサロニケの教会がキリストの到来に関する根拠のない考えを聞いたとき、使徒パウロは、神の言葉によって自分たちの希望や期待を注意深く試すよう彼らに勧告しました。彼は、キリストが来られる前に起こる出来事を明らかにした預言を引用し、彼らが時代に主を待ち望む根拠がないことを示しました。「いかなる形であっても、だれにもあなたを騙してはなりません」（IIテサロニケ書、

2:3)は彼の警告の言葉です。もし彼らが聖書で認められていない期待に屈したなら、彼らは誤った行動に導かれるでしょう。失望すれば不信者の軽蔑にさらされ、救いに不可欠な真理を疑いたくなる誘惑に駆られて落胆する危険にさらされるでしょう。テサロニケ人に対する使徒の勧告には、終わりの日に生きる人々にとって重要な教訓が含まれています。アドベンチストの多くは、主の再臨の明確な時期に信仰を固めることができなければ、準備の働きに熱心に熱心に取り組むことはできないと感じてきました。しかし、彼らの希望は何度も興奮して打ち砕かれるだけなので、彼らの信仰は大きな衝撃を受け、預言の偉大な真理に感動することはほとんど不可能になってしまいます。

最初のメッセージの発表において、定められた裁きの時を宣べ伝えることは、神によって命じられました。このメッセージの基礎となった預言期間の計算は、2,300 日の終わりを 1844 年の秋とするため、現在も妨げられていません。預言期間の始まりと終わりの新たな日付を見つけようとする度重なる努力と、そのような立場を支持するために必要な誤った推論は、現在の真実から心をそらすだけでなく、預言を説明しようとするあらゆる努力を軽蔑するものとなっている。再臨の明確な時期がより頻繁に設定され、それがより広く教えられるほど、それはサタンの目的によりよく役立ちます。時が経つと、彼は擁護者たちへの嘲笑と軽蔑を煽り、1843年と1844年の偉大なアドベンチスト運動に中傷を投げかけることになる。この誤りに固執する人々は、最終的には非常に遠い将来にキリストの到来の日付を定めることになるだろう。こうして彼らは偽りの安全の中で休むことになり、手遅れになるまで偽りに気付かないことになる。

古代イスラエルの歴史は、アドベンチストのグループの過去の経験を示す顕著な例です。神は、イスラエルの子らをエジプトから導き出したのと同じように、アドベンチスト運動においてご自分の民を導きました。大きな失望の中で、彼の信仰は紅海のヘブライ人の信仰と同じように試されました。もし彼らが以前の経験の中で共にあった導きの手をまだ信じていたら、彼らは神の救いを目にしたでしょう。1844年の働きに協力したすべての人々が聖霊の力によって第三の天使のメッセージを受け入れて宣言していたなら、主は彼らの努力を通して力強く働いたでしょう。光の洪水が世界に降り注いだことでしょう。地球の住民は何年も前に警告され、閉鎖の働きは完了し、キリストがご自分の民の救いのために来られたでしょう。

イスラエルが砂漠で40年間さまようことは神の御心ではありませんでした。彼は彼らを直接カナンに導き、そこで彼らを神聖で幸福な民として確立したいと願われました。しかし、「彼らは不信仰のゆえに中に入ることができなかった」（ヘブライ人）。3:19) 。彼らは無謀と背教のゆえに荒野で滅びましたが、他の者たちはよみがえって約束の地に入ることができました。同様に、キリストの到来がこれほど遅れ、神の民がこの罪と悲しみの世界に何年も留まるのも神の意志ではありませんでした。しかし、不信仰が彼らを神から引き離しました。まるで彼が指摘した仕事をするのを拒否したかのように、他の人たちは立ち上がり、メッセージを宣言しました。イエスは世に対する憐れみとして、神の怒りが注がれる前に罪人たちが警告を聞き、**イエスのうちに避難**できる機会を得るために、ご自身の到来を遅らせました。

過去の時代と同様に、今日でも、時代の罪や過ちを戒める真理を提示すると反発を招くでしょう。「悪を行う者は皆、光を憎み、その行為が非難されることを恐れて光のもとに来ない。」（ヨハネ 3:20）。

聖書によって自分の立場を維持できないとわかると、多くの人は、

彼らは危険を冒してでもそれを支持すると決意し、不人気な真実を擁護する人々の性格や動機を悪意を持って攻撃します。これは常に守られてきた同じポリシーです。エリヤはイスラエルの問題児であると宣言され、エレミヤは裏切り者として告発され、パウロは神殿を冒瀆したとして告発されました。当時から今日に至るまで、真理に忠実でありたいと願う人々は、扇動者、異端者、または偽り者として非難されてきました。確かな預言の言葉を受け入れることができないあまりに不信仰な群衆は、現代の罪をあえて叱責しようとする人々に対する非難を疑いの余地のない軽率さで受け取ることになるでしょう。この気分はますます高まります。そして聖書は、国の法律が神の法と大きく矛盾し、神の戒めのすべてに従おうとする者は誰でも悪者として非難と罰に直面する時代が近づいていることを明確に教えています。

このことを考慮すると、真理の使者の義務は何でしょうか？多くの場合、その結果は人々がその要求を回避したり抵抗したりするだけであるため、真実は提示されるべきではないと彼は結論付けるのだろうか？いいえ、初期の改革者たちほど、反対を招くからといって神の言葉の証言を差し控える理由は彼にはありません。聖人や殉教者たちの信仰告白は後世の人々のために記録されました。聖さと揺るぎない誠実さを示すこれらの生きた模範は、今日神の証人として立つように召されている人々に勇気を与えるために私たちのところにやって来ました。

彼らは恵みと真理を受けたのですが、それは自分たちのためだけでなく、彼らを通して神についての知識が地球を照らすためでした。神はこの世代のご自分の僕たちに光を当てたのでしょうか？だから彼らはそれを世界に輝かせるべきなのです。

古代、主はご自身の名によって語る者に、「イスラエルの家はあなたの言うことを聞かない。彼らがわたしの言うことを聞かないからである。」と宣言されました。しかしイエスは、「彼らが聞くか聞かないかにかかわらず、あなたは彼らにわたしの言葉を伝えるだろう」と言われました。（エゼク人。3:7; 2:7）。このとき神の僕に対して、「ラツパのように声を上げて、わたしの民に彼らの罪を、ヤコブの家に彼らの罪を宣言せよ」という命令が与えられています。機会が許す限り、真理の光を受けた人は皆、イスラエルの預言者と同じ厳粛で恐ろしい責任の下にあります。彼に次のような主の言葉が下されました。「人よ、わたしはイスラエルの家を見守る者を任命した。だから、あなたはわたしの口から言葉を聞き、わたしから彼らにそれを宣言するだろう。もしわたしが悪者たちに、『悪人よ、あなたたちは必ず死ぬであろう』と言えば、あなたたちはそうするだろう。悪人をその道から遠ざけるためには話さないでください、その悪人は咎で死ぬでしょう、しかし私はあなたの手から彼の血を要求します。しかし、あなたが悪人を彼の道から遠ざけるように言ったとき、彼はそこから立ち去ることができます。そうすれば彼は自分の道から背を向けない、彼はその不法行為の中で死ぬだろうが、あなたはあなたの魂を救い出しました。」（エゼキエル書 33:7-9）。

真実の受け入れと普及の両方に対する大きな障害は、それが不便と恥を伴うという事実です。これは、その擁護者たちがこれまで反駁できなかった、真実に対する唯一の反論です。しかし、これはキリストの真の追隨者を揺るがすものではありません。これらは真実が広まるのを待ちません。彼らは自分たちの義務を確信して、使徒パウロと一致して、「私たちの軽い一時的な苦しみは、私たちにさらに偉大で永遠の重みのある栄光を生み出す」（IIコリント4:17）と考えながら、意図的に十字架を受け入れます。」、昔の人のように、「キリストの非難はエジプトの宝よりも大きな富です」（ヘブライ人への手紙11:26）。

職業が何であれ、心の中で世の奉仕者である人だけが、宗教問題の原則に基づいて行動するのではなく、政治に行動します。私たちはそれが正しいので正しいことを選択し、その結果を神に委ねなければなりません。原則、信仰、そして大胆さを持った人々に対して、世界は偉大な人々に対して恩義を感じています。

改革。このような人々を通じて、今回の改革の取り組みは進められなければなりません。

主はこう仰せられる、「義を知る者よ、義を知る民よ、わたしの言うことを聞け。わたしの律法が中心です。人々の非難を恐れるな、彼らの侮辱に悩まされるな、なぜなら蛾は衣服のようにあなたを食べ、害虫は羊毛のようにあなたを食べるからです。しかし、わたしの義は永遠に続き、わたしの救いは世代から世代へと続くであろう。」(イザヤ書 51:7,8)。

第27章

モダンリバイバル

神の言葉が忠実に説教されたところではどこでも、その神聖な起源を証明する結果が続いています。神の霊は神の僕たちのメッセージに伴われ、その言葉は力をもって宣言されました。罪人たちは良心が目覚めるのを感じました。「世に来るすべての人を照らす光」は彼らの魂の秘密の部屋を明らかにし、闇の隠されたものが明らかになりました。深い確信が彼らの心と心を支配しました。彼らは罪と義と裁きが来ることを確信していました。彼らはエホバの正義の感覚に取り憑かれており、心を探る者の前に自分たちの罪と汚れが現れることに恐怖を感じました。彼らは苦しみながらこう叫びました。「誰が私をこの死の体から救い出してくれるのでしょうか？」人間の罪のための無限の犠牲を伴うカルバリの十字架が明らかにされると、彼らは、キリストの功績以外に自分たちの罪を償うには十分ではないことを知りました。これだけが人間と神を和解させることができるのです。彼らは信仰と謙虚さをもって、世の罪を取り除く神の小羊を受け入れました。彼らはイエスの血によって「過去のすべての罪の赦し」を得ました。

魂たちは悔い改めに値する果実を生み出しました。彼らは信じてバプテスマを受け、新しい命、つまりキリスト・イエスにある新しい生き物の中を歩むために立ち上がりました。以前の欲望に従うのではなく、神の子への信仰によって神の足跡に従い、神の性質を反映し、神が純粋であるのと同じように自分自身を清めます。かつては嫌いだったものが、今では大好きになった。そして、かつては好きだったが、今は嫌いになったもの。高慢で傲慢だった人が、心は柔和で謙虚になりました。うぬぼれと傲慢さが、真剣で謙虚になりました。不敬な者は敬虔になり、酔った者は素面になり、自堕落な者は純粋になった。世の中の無駄な流行は脇に置かれました。クリスチャンは「縮れた髪、金の装飾品、衣服などの外的なもの」を求めませんでした。しかし、それは神の御前で非常に価値のある、穏やかで静かな霊という朽ちない衣と一体となった心の内なる人でありなさい。」(1ペテロ3:3,4)。

リバイバルは深い心の探求と謙虚さを生み出しました。彼らは、罪人に対する厳粛かつ熱烈な訴えと、キリストの血の獲得に対する優しい同情によって特徴づけられました。男も女も魂の救いのために神に祈り、神と戦いました。そのような目覚めの成果は、自己否定や犠牲からひるむことなく、キリストのために恥辱や試練に耐えるにふさわしいと認められることに喜んだ魂の中に見られました。人々は、イエスの名を告白した人々の生活の変化を熟考しました。コミュニティは彼の影響力から恩恵を受けました。彼らはキリストとともに集まり、永遠の命を刈り取るために御霊によって種を蒔きました。

それらについて次のように言うことができます。「あなたは悔い改めのために悲しくなりました...敬虔な悲しみは救いへの悔い改めを生み出しますが、それは誰にも悲しみをもたらしません。しかし、世界の悲しみは死を生み出します。なぜなら、このことが、神によれば悲しんでいたあなた方に、どれほどの気遣いをもたらしたことでしょう。何という防御、何という憤り、何という恐怖、何という憧れ、何という熱意、何という復讐だろう。これらすべての証拠が、あなたがこの問題に関して無罪であることを証明しています。」(IIコリント 7:9-11)。

これは神の御霊の働きの結果です。彼が改革に取り組まない限り、真の悔い改めの証拠はありません。罪人が誓約書を返し、盗んだものを返し、自分の罪を告白し、神と同胞を愛しているなら、できるでしょうか？

あなたは神との平和を見つけたと確信してください。宗教的目覚め後の最初の数年間には、このような影響があった。その果実から判断すると、彼らは人々の救いと人類の高揚において神の祝福を受けた者として知られていました。

しかし、現代のリバイバルの多くは、初期の頃に神の僕たちの働きに伴って行われた神の恵みの現れとは顕著な対照を示しています。幅広い関心が呼び起こされ、多くの人々が改宗を公言し、教会には大勢の参加者が集まっているのは事実である。しかし、この結果は、霊的生活に相応の真の関心があったことを保証するものではありません。しばらく燃えていた光はやがて消え、闇は以前よりも濃くなる。

人気のリバイバルは、想像力への訴え、感情の興奮、新しく驚くべきものへの愛の満足によってもたらされることがよくあります。こうして勝ち取った改宗者たちは、聖書の真理を聞きたいという欲求はほとんどなく、預言者や使徒の証言にもほとんど関心を持ちません。宗教行事が何かセンセーショナルな性格を持っていない限り、彼らにとっては魅力を感じません。冷静な理性に訴えるメッセージは何の反応も引き起こさない。神の永遠の利益に関する神の言葉の明確な警告は、そうではありません。

聞いた。

真に回心したすべての魂にとって、神との関係、そして永遠のものとの関係が人生の大きなテーマとなるでしょう。しかし、今日の一般的な教会のどこに、神への奉獻の精神があるのでしょうか？改宗者は世界に対する誇りと愛を放棄しません。彼らは回心前と同様に、自らを否定し、十字架を負い、柔和で謙虚なイエスに従うことを望まなくなりました。宗教は、その名を冠した人々の多くがその原則を知らないため、異教徒や懐疑論者のスポーツになっています。敬虔な力は多くの教会からほとんど消え去りました。ピクニック、劇場、教会での展示会、優雅な邸宅、個人的な展示物は、私たちの思考を神から遠ざけてきました。土地や所有物、世俗的な職業は心を魅了しますが、永遠の関心のあるものは一瞬たりとも注目を集めることはほとんどありません。

信仰と敬虔さの広範囲にわたる低下にもかかわらず、これらの教会にはキリストの真の追隨者がいます。地上に神の裁きが最後に訪れる前に、主の民の間には、使徒時代以来決して見られなかった原始的な敬虔さが復活するでしょう。神の霊と力が神の子供たちに注がれるでしょう。その時、多くの人々は、この世の愛が神と神の言葉への愛に取って代わられた教会から離れるでしょう。牧師も民も、多くの人々は、主の再臨に向けて民を備えるために、神がその時代に宣べ伝えられると定めた偉大な真理を喜んで受け入れるでしょう。魂の敵はこの働きを妨害したいと考えています。そして、そのような動きが起こる前に、模倣品の導入によってそれを阻止するよう努めます。彼が欺瞞的な力の下に置くことができる教会では、あたかも非常に特別な祝福が注がれているかのように見せるでしょう。多くの人々が宗教上の大きな関心事になると考えていることが起こるだろう。多くの人々は、その働きが別の霊によるものであっても、神が彼らのために奇跡を働いてくださるので喜ぶでしょう。サタンは宗教的カモフラージュの下で、キリスト教世界への影響力を拡大しようとします。

過去半世紀の間に起きたリバイバルの多くには、多かれ少なかれ同じ影響が働いており、それが将来的にはより大きな運動として現れるだろう。真実と虚偽が入り混じった感情的な興奮があり、騙すのに適しています。しかし、誰も騙される必要はありません。神の言葉に照らして、これらの運動の性質を判断するのは難しくありません。人々が証言を無視するたびに、

聖書によれば、自己否定とこの世の放棄を要求する明白で実証的な真理から目を転じると、そこでは神の祝福が与えられなかったことを確信できます。そして、キリストご自身が与えられた「その実によってあなたがたはそれを知るであろう」（マタイ 7:16）という規則から、これらの運動が神の御霊の働きではないことは明らかです。

御言葉の真理において、神は人間に御自身の啓示を与え、それを受け入れるすべての人にとって、それらはサタンの欺瞞に対する盾となるのです。これらの真理が無視されたことが、現在宗教界に蔓延している悪への扉を開いてしまったのです。神の律法の性質と重要性はほとんど見失われています。神の律法の性格、永続性、義務的性質についての誤った概念は、回心と聖化に関連した誤りを引き起こし、教会の敬虔さの基準の低下をもたらしました。

これが、現代のリバイバルにおける御霊と神の力の欠如の秘密です。

さまざまな宗派の中に、その敬虔さで注目に値する人々がおり、彼らによってこの事実が認められ、嘆かれています。教授エドワード・パークは、今日の宗教的危険性を紹介する際に、適切にも次のように述べています。初期の頃、説教壇は良心の声のこだまでした...

私たちの最も著名な説教者たちは、師の模範に従い、法とその戒律と脅威を際立たせながら、圧倒的な威厳を持ってスピーチを行いました。彼らは、律法は神の完全性を転写したものであり、律法と福音はどちらも神の真の性質を反映する鏡であるため、律法を愛さない人は福音を愛さない、という2つの大きな格言を繰り返しました。この危険は、罪の悪性、その大きさとデメリットを過小評価するという別の危険につながります。

戒めの正義と比例して、それに従わないことの不正義もある。」

「すでに述べた危険に関連するのは、神の正義を軽視することです。

現代の説教壇の傾向は、神の正義を神の慈悲から切り離し、それを原則として崇拝するのではなく感情の中に沈めることです。新しい神学的プリズムは、神が結合したものを分離します。神の法則は善ですか、それとも悪ですか？それはいいことです。

したがって、正義は善です。なぜなら、それは法を遵守する意欲だからです。人は神の法と正義、そして人間の不従順の範囲とデメリットを過小評価する習慣から、罪の償いを与えてくれる恵みを軽視する習慣に陥りやすい。」こうして人々の心の中で福音はその価値と重要性を失い、人々はすぐに聖書自体を事実上脇に置いてしまうことに気がきます。

多くの宗教学者は、キリストはその死によって律法を廃止し、今後人間は律法の要求から自由になると主張している。これを屈辱的なくびきとして表現し、法の奴隷制とは対照的に、福音の下で享受される自由を提示する人もいます。

しかし預言者と使徒たちは神の聖なる律法に関してはそうしませんでした。ダビデは、「私はあなたの戒めを求めたので、自由のうちに歩みます。」と言いました。（詩 119:45）キリストの死後に書いた使徒ヤコブは、この十章を「王法」および「自由の完全な法」と呼んでいます（ヤコブ 2:8; 1:25）。そして、十字架刑から半世紀後、啓示者は、「命の木に力を与え、門を通過して都市に入ることができるように、神の戒めを守る者たち」に祝福を宣言します（黙示録 4:3）。

22:14 - 改訂および修正されたアメリカ版）。

キリストがその死によって父の律法を廃止したという主張には根拠がない。もし律法が変更されたり廃止されたりすることが可能であったなら、キリストは人間を罪の罰から救うために死ぬ必要はなかったでしょう。キリストの死は、律法を廃止するどころか、律法が不変であることを証明しました。神の御子は「律法を大いなるものとし、輝かしいものとする」ために来られました（イザヤ書 42:21）。彼は言いました、「私が律法や預言者を廃止するために来たとは思わないでください...」

それは決して律法を超えることはありません」(マタイ 5:17,18)。そして彼は自分自身について次のように宣言しています。私の心の中にはあなたの法があります。」(詩 40:8)

神の律法は、その性質上、不変です。それは作者の意志と性格の啓示です。神は愛であり、神の法は愛です。その2つの大きな原則は、神への愛と人間への愛です。「法律に従うことは愛だ。」(ロム。

13:10)。神の性質は正義と真実です。それが神の律法の性質です。詩編作者はこう言います。「あなたの律法は真理そのものです…あなたの戒めはすべて義です。」(塩。

119:142,172)。そして使徒パウロは次のように宣言しています。そして戒めは聖であり、正しく、そして良いものです。」(ロマ 7:12)。法律は神の心と意志の表現であり、その作者と同じくらい永続的でなければなりません。

人間を神と和解させ、神の律法の原則と調和させることは、回心と聖化の働きである。人間は初めに神の似姿に創造されました。彼は神の性質と法と完全に調和していました。正義の原則は彼の心の中に書かれていました。しかし、罪は彼を創造主から遠ざけました。彼はもはや神の姿を反映していませんでした。彼の心は神の律法の原則に反抗するようになりました。「肉の心は神に対する敵意です。肉の心は神の律法に従わないし、従うこともできないからです。」(ロマ 8:7)しかし、「神はご自分の独り子をお与えになったほどに世を愛されました」。それは人間が神と和解できるようにするためでした。キリストの功績によって、彼は創造者との調和を回復することができます。あなたの心は神の恵みによって新たにされる必要があります。彼には上からの新しい人生が必要です。この変化は新たな誕生であり、それがなければイエスは言います。

神の国は見えません。」

神との和解への第一歩は罪を認めることです。「罪とは法律に違反することです。」(ヨハネ第一 3:4)「律法によって罪の知識が得られます。」(ローマ 3:20)。自分の罪を認識するために、罪人は偉大な神の正義の基準によって自分の人格をテストしなければなりません。神は義なる人格の完全さを示し、人が自分の欠点を識別できるようにする鏡です。

律法は人間の罪を明らかにしますが、それに対する救済策は提供しません。それは従順な者には命を約束する一方で、違反者には死が与えられると宣言しています。キリストの福音だけがあなたを罪の非難や汚染から解放することができます。人は律法が犯された神の前で悔い改め、キリストとその贖いの犠牲への信仰を働かなければなりません。こうして彼は「過去の罪の赦し」を得て、神の性質にあずかる者となります。彼は今、養子の霊を受けて神の子となり、その霊を通して「アバ、父よ！」と叫びます。

彼は今、自由に神の律法に違反できるのでしょうか？パウロはこう言います、「それでは、私たちは信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか？」いえ、全然違います！その前に法律を確認します。」

「罪に対して死んだ私たちは、どうやって罪の中で生き続けるのでしょうか？」(ロマ 3:21 および 6:2)。そしてヨハネはこう述べています。「わたしたちが神の戒めを守ることこそが神の愛だからです。今では神の戒めはそれほど厳しいものではありません。」(ヨハネ第一 5:3)。新生において、心は神の律法に従って神と調和します。この強力な変容が罪人に起こるとき、彼は死から命へ、罪から聖さへ、罪と反逆から従順と忠誠へと移ります。神から離れた古い生活には終わりがあります。和解、信仰、愛の新しい人生が始まります。そのとき、「律法の義」は、「肉に従って歩むのではなく、御霊に従って歩む私たちのうちに」実現されます(ローマ8:4)。そして魂の言語は「私はあなたの律法をどれほど愛していることでしょうか！」となるでしょう。それは私の一日中瞑想です！」(詩 119:97)。

「主の律法は完全であり、魂を回復させます。」(詩 19:7)。律法がなければ、人間は神の純粋さと聖さ、あるいは自分自身の罪と不純さについて正確に理解することができません。彼らは実際に罪を認識しておらず、必要性を感じていません

悔い改めの。彼らは自分たちが失われた状態を神の律法の違反者として認識していないため、キリストの贖いの血の必要性を理解していません。救いの希望は、根本的な心の変化や生活の改革をしなくても受け入れられます。このように、表面的な回心は多く、多くの人がキリストに加わることなく教会に加わります。

さらに、神の律法の無視または拒否から生じる聖化に関する誤った理論は、現代の宗教運動において顕著な位置を占めています。

これらの理論は教義の点で誤りであり、実際の結果においては危険です。そして、それらが一般に受容性を持って満たされるという事実は、この点について聖書が教えていることをすべての人が明確に理解することが二重に重要であることを示しています。

真の聖化は聖書の教義です。使徒パウロはテサロニケの教会に宛てた手紙の中で、「これが神のご意志、すなわちあなたの聖化なのです」と宣言しています。そして彼はこう懇願します。「平和の神があなたをすべてにおいて聖めてくださいますように」(1テサロニケ4:3と5:23)。聖書は、聖化とは何か、そしてそれはどのようにして得られるのかを明確に教えています。救い主は弟子たちのためにこう祈られました。

「彼らを真実に聖別してください。あなたの言葉は真実です。」(ヨハネ 17:17)。そしてパウロは、信者は聖霊によって聖化されなければならないと教えています(ローマ15:16)。御霊の働きとは何でしょうか？イエスは弟子たちにこう言いました。「しかし、真理の御霊が来るとき、彼はあなた方をすべての真理に導いてくださるでしょう。」(ヨハネ 16:13)。そして詩編作者は、「あなたの律法は真理です」と述べています。神の言葉と御霊によって、神の律法に具体化された正義の偉大な原則が人々に開かれます。そして神の律法は「聖で、正しく、善い」ものであり、神の完全性を転写したものであるため、その律法に従って形成される人格は聖なるということになります。キリストはそのような性格の完璧な例です。彼は言います、「私は父の戒めを守ってきました。」「私はいつも神が喜ばれることをします。」

(ヨハネ 15:10; 8:29)。キリストに従う者は、神の恵みによって、キリストのようになり、神の聖なる律法の原則と調和した人格を形成します。これが聖書の聖化です。

この働きは、キリストへの信仰を通して、また信者の中に働く聖霊の力を通してのみ達成することができます。パウロは信者たちに次のように忠告しています。なぜなら、あなたがた二人の内に働いて、ご自分の御心にかなうように意志させ、実行させて下さるのは神だからである。」(ピリピ人への手紙 2:12 と 13)。クリスチャンは罪の促しを感じますが、それに対して絶えず戦い続けるでしょう。ここでキリストの助けが必要です。人間の弱さは神の力と結びつき、信仰は「私たちの主イエス・キリストを通して私たちに勝利を与えてくださった神に感謝します」と叫びます。(1コリント15:57)。

聖書は、聖化の働きが漸進的であることを明確に示しています。

罪人が回心し、贖いの血を通して神との平和を見つけたとき、彼の人生は始まったばかりです。今、彼は「完璧になるまで 続けなければなりません。使徒パウロはこう述べています。キリスト・イエスにおける神の高い召しという賞に向かって。」(フィリピ 3:13 と 14)そしてペテロは、聖書の聖化を達成するための手順を私たちに示しています。「コントロール、自制心、忍耐力、忍耐力、敬虔さ、敬虔さ、兄弟愛、兄弟愛、愛…そうすれば、決してつまづくことはないからです。」(ペテロ第二 1:5-10)。

聖書の聖化を経験した人は、謙虚な精神を示すでしょう。モーセと同じように、彼らは聖なる方の恐るべき威厳の幻を見て、無限の神の純粋さと崇高な完全性との対比で自分自身の無価値さを認識しています。

預言者ダニエルは真の聖化の一例でした。彼の長い人生は主君への崇高な奉仕に満ちていました。彼は天に「大いに愛された」人でした。しかし、この名誉ある預言者は、自分が純粹で神聖であると主張する代わりに、民を代表して神の前に次のように嘆願したとき、イスラエルの罪深い現実を自分自身と認識しました。あなたの多くの慈悲の中で。」「私たちは罪を犯し、悪いことをしてきました。」そして彼はこう宣言します。「わたしはなおも語り、祈り、自分の罪とわたしの民イスラエルの罪を告白しました…」(ダニエル書9:18,15,20)。そして、終わりの時、神の御子が彼に指示を与えるために現れたとき、彼はこう叫びました。私の顔は変色し、醜くなり、力がなくなりました。」(ダニエル 10:8)。

ヨブはつむじ風の中から出てくる主の声を聞いたとき、「だから私は自分を憎み、塵と灰の中で悔い改めます」と力強く言いました。(ヨブ記 42:6)。それはイザヤが主の栄光を見て、ケルビムが「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の神、主よ」と叫ぶのを聞いたときであり、預言者は「悲惨だ、わたしは滅びる」と叫んだ。(イザヤ 6:3,5)。パウロは第三の天に翻訳され、人間には言い表せないことを聞いた後、自分のことを「すべての聖徒の中で最も小さい者」と語った(IIコリント 12:2-4;エフェス。 3:8)。イエスの胸に寄りかかり、その栄光を眺めていた最愛の弟子ヨハネが、天使の足もとで死んだかのように倒れたのです(黙示録22:8)。

カルバリの十字架の影の中を歩む人々には、自己の高揚や罪からの解放を誇らしく主張することはできません。彼らは、神の御子の心を打ち砕いた苦しみを引き起こしたのは自分たちの罪であると感じており、この考えが彼らを自らの屈辱に導くことになる。イエスの最も近くに住んでいる人々は、人間の弱さと罪深さを最も明確に認識しており、彼らの唯一の希望は十字架につけられ復活した救い主の功德にあります。

現在、宗教界で注目を集めている聖化は、自己高揚と神の律法に対する軽視の精神をもたらし、それが聖書の宗教とは異質なものであることを示しています。その支持者たちは、聖化は瞬間的な働きであり、それによって信仰のみによって完全な聖性を達成できると教えています。

「ただ信じてください。そうすれば祝福はあなたのものです。」と彼らは言います。受信側の追加の努力は必要ないと考えられます。同時に、彼らは神の律法の権威を否定し、戒めを守る義務はないと主張します。しかし、神の性質と意志の表現であり、神に喜ばれることを明らかにする原則と調和せず、人間が神の意志と性質に従って聖なることが可能でしょうか？

闘争も、自己否定も、この世の愚かさからの分離も必要としない、安易な宗教への願望が、信仰の教義、そして信仰のみを一般的な教えにしました。しかし、神の言葉は何と言っているのでしょうか？使徒ヤコブはこのことを次のように述べています。

そのような信仰が彼を救うことができるのでしょうか？...愚かな人よ、行いのない信仰は効果がないと確信したいですか？私たちの父であるアブラハムが自分の息子イサクを祭壇に捧げたとき、義とされたのは行いによるものではなかったのでしょうか。信仰が彼の行いとどのように連動したかがわかりません。実際、信仰は行いによって達成されました…人は信仰だけによってではなく、行いによって義とされることがわかります。」

(テア 2:14-24)

神の言葉の証言は、行いのない信仰という欺瞞的な教義に反対します。慈悲が与えられる条件に注意を払わずに天の恩恵を主張するのは信仰ではありません。真の信仰は聖書の約束と規定に基礎があるので、これは推測です。

神の主張の一つを意図的に破りながらも聖人になれるなどと考えて自分を欺いてはなりません。既知の罪の犯行は聖霊の証言の声を沈黙させ、魂を神から引き離します。

「罪とは法律に違反することです。」そして、「罪を犯した者は皆、主を見たことも、知ったこともありません。」(1ヨハネ3:6)。ヨハネはその書簡の中で愛について詳しく述べていますが、神の律法に背いて生きているにもかかわらず、聖化されたと主張する階級の本物の性格を明らかにすることを躊躇しませんでした。「『わたしは神を知っている』と言いながら神の戒めを守らない者は嘘つきであり、その人の中に真理は存在しない。しかし、神の言葉を守る人は、神の愛を真に神の中で完全なものとしているのです。」(ヨハネ第一 2:4 と 5)。これが各人の信仰告白の証拠です。私たちは、まず天と地の神聖さの唯一の基準に照らしてその人を評価することなしに、その人が神聖であると考えすることはできません。もし男性が道徳律の重みを感じていないとしたら。もし彼らが神の戒めを矮小化して軽くするならば、もし彼らがこれらの最も小さな戒めの一つに違反してこのように人間に教えるならば、それらは天の目から見て何の価値も持たず、私たちは彼らの主張が根拠のないものであることを知ることができます。

そして、彼らが罪がないと主張すること自体が、彼らが聖性から遠く離れていることの証拠です。それは、彼らが神の無限の純粋さと神聖さについての本当の考えを持っていないからであり、神の性質と調和するために自分たちが何にならなければならないかについての感覚を持っていないからです。なぜなら、彼らは、イエスの純粋さと高貴な魅力、そして人間が自分たちを聖人であると考えた罪の悪さについて、真の概念を持っていないからです。彼らとキリストとの間の距離が遠ければ遠いほど、そして神の性質や主張についての彼らの概念が不適切であればあるほど、彼ら自身の目には彼らはより正義に見えるようになります。

聖書で示されている聖化には、霊、魂、体といった存在全体が含まれます。パウロはテサロニケの人々のために、「私たちの主イエス・キリストの来臨の際に、あなたがたの霊、魂、体が、非難のない状態で保たれますように」と祈りました(1テサロニケ1:30)。(5:23)。「ですから、兄弟たち、神の憐れみによって、私はあなたたちをお願いします。あなたがたは自分の体を神に受け入れられる、神聖な生きたいけにえとして捧げてください。それがあなたたちの当然の奉仕です。」(ロマ 12:1)。古代イスラエルの時代、神へのいけにえとしてもたらされた捧げ物はそれぞれ注意深く検査されました。捧げられた動物に何らかの欠陥が見つかった場合は、神がその捧げ物には「傷のないもの」であるようにと命じられていたため、その動物は拒否されました。したがってクリスチャンは、自分の体を「聖なる、神に喜ばれる生きたいけにえ」としてささげるよう勧められています。これを行うには、すべての体力を可能な限り最良の状態に維持する必要があります。肉体的または精神的な強さを弱めるあらゆる習慣は、人が創造主に仕えることを不可能にします。私たちが提供できる最高のもの以外のものを主は喜ばれるでしょうか？イエスは、「あなたは心を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい」と言われました。

心から神を愛する人は、生涯で最高の神への奉仕をしたいと願い、自分の存在のあらゆる能力を、神の意志を行う能力を促進する法則と調和させるよう常に努めるでしょう。彼らは食欲や情熱に耽溺して、天の父に捧げるべき捧げ物を弱めたり汚したりしません。

使徒ペテロはこう述べています。「愛する人たち、巡礼者であり見知らぬ人であるあなたたちに、魂に対して戦争を起こす肉欲を避けるよう勧めます」。(ペテロ第一 2:11)。あらゆる罪深い耽溺は能力を鈍らせ、精神的および霊的認識を弱める傾向があり、神の言葉や御霊は心に弱い印象しか与えません。パウロはコリント人への手紙の中でこう述べています。「肉と霊の両方の不純物から身を清め、神への恐れの中で聖性を完全なものにしましょう。」(IIコリント 7:1)。そして御霊の実とともに、「愛、喜び、平和、

忍耐力、優しさ、善良さ、忠実さ、優しさ、自制心。」（ガラテヤ 5:22 および 23）。

これらの靈感による宣言にもかかわらず、どれほど多くの自称クリスチャンが利益の追求やファッションの崇拜に体力を浪費していることでしょうか。暴食したり、ワインを飲んだり、禁じられた快楽を求めたりすることで、神に似た男としての品格を貶めている人がどれほど多いことか。そして教会は、叱責する代わりに、キリストの愛が弱すぎて満たすことができないその宝庫を埋めるために、食欲、利得への欲求、快楽への愛に訴えて悪を奨励することがあまりにも多いのです。もしイエスが今日の教会に入り、そこで宗教の名のもとに搾取されている祭りや不敬な取引について熟考したとしたら、神殿から両替商を追放したのと同じように、これらの冒涇者たちを追放することになるのではないだろうか。

使徒ヤコブは、上からの知恵は「第一に純粹である」と宣言しています。タバコで汚れた唇にイエスの尊い御名を刻み、息も体もその憎むべき臭気に染まり、天国の空気を汚し周囲にその毒を吸わせる人々に会わなければならないとしたら、彼はこうするだろう。福音の純粹さに非常に反する行為に触れたなら、彼はそれを「世俗的で官能的で悪魔的」と非難しなかったでしょうか？タバコ奴隷は完全な聖化の祝福を持っていると主張し、天国への希望を語りますが、神の言葉は「汚れたものは決してそこに入らない」とはっきりと述べています。（アポク21.27）。

「あなたの体は、あなたの内におられる聖霊の宮であり、あなたが神からいただいたものであり、あなた自身のものではないことを知らないのですか。お金を払って買われたのですから。ですから今、あなたの体で神の栄光を讃えましょう。」（Iコリント6:19と20）。

体が聖霊の神殿である人は、有害な習慣の奴隷になることはありません。彼のエネルギーはキリストのものであり、キリストは血の代償として彼を買って取ってくださった。あなたの財産は主のものであり、彼に託された資本を消失させて、どうすれば罪悪感から解放されるのでしょうか？クリスチャンと称する人々は毎年、無益で有害な免罪符に莫大な金額を費やしていますが、いのちの言葉が不足して魂は減びつつあります。神は十分の一献金や捧げ物を奪われますが、彼らは貧しい人々を助けたり福音を支援するために捧げる以上に、破壊的な欲望の祭壇で消費します。もしキリストの追隨者であると公言するすべての人が真に聖化されたなら、彼らの資力は不必要な、さらには有害な贅沢に費やされるのではなく、主の宝庫に充当され、クリスチャンは節制、自己否定、犠牲の模範を示すことになるでしょう。そうすれば彼らは世界の光となるでしょう。

世界は自らの見下しに見捨てられている。「肉の欲望、目の欲望、そして人生の誇り」が大衆を支配しています。しかし、キリストの追隨者には、より神聖な使命があります。「あっちへ、あっちへ、そこから出て、汚れたものには一切触れないでください。」（イザヤ 52:11）。神の御言葉に照らして、罪深い行為と世俗的な満足を完全に放棄することを行わない聖化は本物ではないと私たちが宣言するのは正当です。

「去れ、去れ、そこから出て行け、汚れたものに触れないでください」という条件を満たす者たちに対して、神の約束は次のとおりです。全能の主は言われる。」（IIコリント 6:17 および 18）。神の事柄に関して豊かで豊富な経験を持つことは、すべてのクリスチャンの特権であり義務です。

イエスはこう言われました。「わたしは世の光です。わたしに従う者は誰でも暗闇の中を歩むことはない。それどころか、彼は命の光を得るでしょう。」（ヨハネ 8:12）。「しかし、義人の道は夜明けの光のようなもので、完璧な日になるまでますます明るく輝きます。」（箴言 4:18）。信仰と従順の各段階は、魂を世界の光とより密接に結びつけます。光には暗闇がまったくありません。義の太陽からの明るい光線が神の僕たちを照らし、彼らはそれを反射しなければなりません。星が私たちに素晴らしい光を告げるように、

天国、その栄光が彼らを輝かせるのですから、クリスチャンは宇宙の玉座に神がおり、その人格は賞賛と模倣に値するものであることを明らかにすべきです。神の御霊の恵み、彼の性格の純粋さと神聖さは、彼の証しの中に明らかになるでしょう。

パウロはコロサイ人への手紙の中で、神の子らに与えられる豊かな祝福について述べています。「このような理由から、私たちも、聞いた日から、あなたのために祈り、あらゆる知恵と霊的理解によって神のご意志の知識が溢れ出るようにと願っています。それは、あなたが主にふさわしい生き方をして主の喜びに満ち、あらゆる良い行いで実を結び、神についての完全な認識の中で成長するためです。あらゆる忍耐と忍耐のために、神の栄光の力に応じてあらゆる力で強められる。喜んで。」（コロサイ 1:9-11）。

彼は再び、エフェソスの兄弟たちにクリスチャンの特権の高さを理解してもらいたいという願いを書いています。イエスは、いと高き方の息子、娘として彼らが持つことができる素晴らしい力と知識を、最も包括的な言葉で彼らの前に示されます。それは彼らに属しており、「愛に根ざし、愛に根ざしている内なる人の内にある神の御霊によって力が強められ、あなたがすべての聖徒とともに広さと長さで高さで深さを理解できるようになります」それは、人知を超えたキリストの愛を知り、神の満ち足りたもので満たされるためである」（エフェソス 3:16-19）。

ここには、天の父の約束への信仰を通して私たちが到達できる高みが明らかにされています。キリストの功績によって、私たちは無限の力の玉座にアクセスできるのです。「ご自分の御子を惜しまず、私たち全員のために差し出してください。御子とともに私たちにすべてのものを無償で与えてくださるではありませんか。」（ロマ 8:32）。御父はご自分の御霊を計り知れず御子に与えてくださいました。そして私たちもその満ち足りたものにあずかることができます。イエスはこう言われました。「もしあなたがた悪人が、自分の子供たちに良い贈り物を与える方法を知っているのなら、ましてやあなたがたの天の父は、求める者たちにどれほど聖霊を与えてくださるでしょうか。」

（ルカ 11:13）。「そして、あなたが私の名において求めることは何でも、私はそうします。」（ヨハネ 14:14）。「求めなさい。そうすれば、あなたは与えられます。そうすれば、あなたの喜びが満たされるでしょう。」（ヨハネ 16:24）。

クリスチャンの人生は謙虚さを特徴としていますが、悲しみや自虐的なものであってはなりません。私たちが常に罪に定められ暗闇にさらされることは、天の父のご意志ではありません。頭を下げ、心を自分のことではないにしておくことは、真の謙虚さの証拠にはなりません。私たちはイエスのもとに来て清められ、不名誉な思いや良心の呵責を感じることなく律法の前立つことができます。「ですから、キリスト・イエスにある者たち、つまり肉に従ってではなく霊に従って歩む者たちには、今では何の罪に定められることもありません。」（ロマ 8:1）。

墮落したアダムの子らはイエスを通して「神の子」となるのです。

「なぜなら、聖化する者も聖化される者も、すべては一つから生じているからです。だからこそ、神は彼らを兄弟と呼ぶことを恥ずかしがらないのです。」（ヘブライ人への手紙 2:11）。クリスチャンの人生は、神への信仰、勝利、喜びの人生であるべきです。「神から生まれた者は皆、世に打ち勝つからです。そしてこれが世界に打ち勝つ勝利、すなわち私たちの信仰です。」（ヨハネ第一 5:4）。

神の僕ネヘミヤは確信を持ってこう言いました。「主の喜びがあなたの力だからです。」（ネヘム 8:10）。そしてパウロはこう言いました。「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います、「喜びなさい」。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝しなさい。これがキリスト・イエスにおける神の御心だからです。」（1テサロニケ5:16-18）。

これが聖書の回心と聖化の成果です。そして、神の律法に定められた義の偉大な原則は、キリスト教世界では非常に無関心に扱われているため、これらの成果はめったに見られません。これが、かつてのリバイバルを特徴づけた神の御霊の深く永続する働きがほとんど見られない理由である。

私たちが変容するのは熟考を通してです。神が人間に完全さと神聖さを示した神聖な戒律が無視されるとき

彼の性格、そして人間の教えや理論に惹かれる人々の心を考えれば、教会内で実際的な敬虔さが低下しているのは驚くべきことではありません。「わたしの民は二つの悪を犯した。彼らは生ける水の泉であるわたしを離れ、水をためることのできない壊れた貯水池を掘った。」と主は言われる。（エレ 2:13）。

「悪人の助言に従って歩まない人は幸いです...しかし、その人の喜びは主の律法であり、主の律法を昼も夜も黙想します。神は水の流れのほとりに植えられ、季節が来れば実を結び、葉も枯れない木のようなものです。そうすれば彼のやることはすべて成功するだろう。」（詩 1:1-3）。「主はこう言われる、『道端に立って見よ、古き道を求めなさい、それが良い道である。その中を歩めば、魂の休息が得られるでしょう。』（エレ 6:16）。

第28章

捜査上の判決

預言者ダニエルはこう述べています。彼の服は雪のように白く、頭の髪は純粋な羊毛のようでした。彼の玉座は炎であり、その車輪は燃え盛っていた。火の川が彼の前から流れ出ました。何千人もの人々が彼に仕え、無数の人々が彼の前に立った。法廷が開かれ、帳簿が開かれた。」

(ダニエル 7:9 と 10)。

こうして預言者には、人類の性格と人生が全地の裁判官の前で再検討され、各人が「自分の行いに応じて」報いを受ける、偉大で厳粛な日のビジョンが提示されたのである。詩編作者は、「山々が生まれ、地と世界が形成される前から、とこしえからとこしえまで、あなたは神です。」と述べています。(詩 90:2)。すべての存在、すべての法の源であり、裁きを統括しなければならないのは彼です。そして、「無数の無数」の聖なる天使たちが大臣および証人としてこの大法廷に出席します。

「私は夜の幻視を眺めていました。見よ、人の子のような方が天の雲に乗ってやって来て、日の老いた方のところにやって来ました。そして彼らは彼を彼に近づけました。彼には支配と栄光が与えられました。王国は、あらゆる言語の人々、国家、人々が神に仕えるようにするためです。彼の支配は過ぎ去ることのない永遠の支配であり、彼の王国は決して破壊されない。」(ダニエル 7:13 と 14)。ここで述べられているキリストの到来は、地上への再臨ではありません。彼は、仲介者としての働きの終わりに彼に与えられる支配権、栄光、王国を受け取るために、天の日々の古代にやって来ます。2,300日の終わり、1844年に成就すると預言で予言されていたのは、イエスの地球への帰還ではなく、この到来でした。天の天使たちに助けられ、私たちの偉大な大祭司が至聖所に侵入し、そこに現れます。神の臨在のもとで、人間のために神の奉仕の最後の行為を行い、調査判決を執行し、その恩恵を受ける価値があるとみなされるすべての人たちに償いをするのである。

典型的な礼拝では、告白と悔い改めを持って神の前に現れ、その罪が罪のいけにえの血によって聖所に移された者だけが、贖罪の日に礼拝に参加した。

したがって、贖罪と捜査判決の偉大な最後の日において、考慮されるのは神の民を自称する人々の事件だけである。悪人の裁きは別個の働きであり、後で行われます。「神の家で裁きが始まる時が来たからです。さて、もしそれが私たちに先に起こったら、神の福音に従わない人々はどうなるでしょうか？」(ペテロ第一 4:17)。

人の名前と行為が記録されている天国の記録簿は、審判の決定を決定するものです。預言者ダニエルはこう述べています。「法廷が開かれ、帳簿が開かれた」。啓示者ヨハネは同じ場面についてこう付け加えています。「さらに別の本、『命の書』が開かれました。そして死者たちはその行いに応じて、また本に書かれていることに従って裁かれた。」(黙示録20:12)。

命の書には、神への奉仕に参加したすべての人々の名前が含まれています。イエスは弟子たちに、「喜びなさい。霊があなたに服従するからではなく、あなたの名前が天に記されているからです」と言われました。(ルカ 10:20)。パウロは、「命の書にその名が記されている」忠実な同労者について語っています(フィリピ 4:3)。ダニエルは「かつてないほどの苦難の時代」を見据えて、神の民はこう宣言します。

「その書に記されている者は皆」彼から救い出されるであろう(ダニエル12:1)。そして啓示者は、「小羊の命の書に名前が書かれている」者だけが神の都に入ることができると述べています(黙示録21:27)。

「主の前に記念碑が書かれており」、そこには「主を恐れる者たちと主の御名を覚えている者たち」の善行が記録されている(マタイ3:16)。ネヘミヤの信仰の言葉と愛の行為は天に記録されており、ネヘミヤはこのことに言及して、「わたしを覚えていてください。わたしが神の家と神への奉仕のために行った親切を消さないでください」と言いました。神の記念書では、あらゆる正義の行為が不滅のものとされています。そこには、抵抗したすべての誘惑、すべての悪に打ち勝った、表現されたすべての優しい同情の言葉が忠実に記録されています。そして、キリストのために耐えられたあらゆる犠牲の行為、あらゆる苦しみと悲しみがそこに記されています。詩篇作者はこう述べています。あなたは私の涙をあなたの瓶に集めました。それはあなたの本に書かれていないのですか？」(詩 56:8)。

男性の罪の記録もあります。「神はあらゆる行いを、たとえそれが善であろうと悪であろうと、隠されたものであっても裁きを受けるからである。」(伝道者 12:14)。「言うておくが、人間が話すどんな不注意な言葉も、裁きの日にその責任を問うだろう。あなたの言葉によってあなたは義とされ、あなたの言葉によって罪に定められるからです。」(マタ 12:36,37)。秘密の目的と動機は、間違いのない記録の中に現れています。主は「暗闇の隠された事柄を明らかにしますが、心の考えも明らかにしてくださいからです」(1コリント4:5)。「見よ、わたしの前に……あなたの咎と、あなたの先祖たちの咎が一緒に記されている」(イザヤ65 :6,7)。

各人の働きは神の前で審査され、その忠実さや不誠実によって記録される。天の書にあるあらゆる名前が、あらゆる不当な言葉、あらゆる利己的な行為、あらゆる果たされなかった義務、あらゆる秘密の罪とともに、あらゆる狡猾な偽善、天から送られた警告と戒めの無視、時と時間の反対に、恐ろしいほど正確に並べられている。無駄にされた機会、良くも悪くも及ぼされた影響、そしてその広範囲にわたる結果はすべて、執筆天使によって注目されます。

神の律法は、裁きにおいて人間の性格と人生が評価される基準です。賢明なソロモンはこう言います。それはすべての人の義務だからです。神はすべての行いに裁きを下すからです。」(伝道 12:13 および 14)。使徒ヤコブは兄弟たちに、「自由の律法によって裁かれる者としての態度と態度で話さない」と忠告しています。(ヤコブ 2:12)。裁きでふさわしいとみなされる人々は、義人の復活に参加することになります。イエスはこう言われました。「しかし、来たるべき時代と死者の中からの復活に達するのにふさわしいとみなされる人々は……天使たちと同等であり、神の子であり、復活の子なのです。」(ルカ 20:35 および 36)。そしてもう一度、「善を行った者は命の復活に[出て来る]」(ヨハネ5:29)と宣言しています。義にならなかった死者は、「命の復活」に値するとみなされる裁きが終わるまで復活しません。このため、記録が調べられ、事件が決定される際に、彼らは法廷に直接出廷することはありません。

イエスはあなたの弁護者として現れ、あなたの代わりに神の前に訴えを起こします。「しかし、もし誰かが罪を犯したとしても、私たちに義なるイエス・キリストという御父の弁護人がいます。」(ヨハネ第一 2:1)。「というのは、キリストは、真の聖所の一種である、手で造られた聖所に入るのではなく、天国そのものに入り、今、私たちのために神の御前に現れてくださったからです。」「したがって、神は、神のもとに来る人々を完全に救うこともでき、常に生きて彼らのために執り成してくれま

す。」(ヘブライ 9:24; 7:35)。

審判の際に記録簿が開かれると、イエスを信じたすべての人の人生が神の前で見直されま

す。という人たちから始めて、

私たちの弁護人は、最初に地球上に住んでいたときから、歴代の各世代の事例を紹介し、最後に生きて
いる人々の事例を紹介します。すべての名前が言及され、すべての事件が厳密に調査されます。名前は
受け入れられますが、拒否されます。誰かが悔い改めず赦されない罪を記録書に残した場合、その
人の名前は命の書から削除され、その善行の記録は神の記念書から消去されます。主はモーセに、「わ
たしに対して罪を犯した者をすべてわたしの書から消し去る」と言われました。(例 32:33)。そして預
言者エゼキエルにこう言われました。彼が犯した罪と犯した罪の中で、彼は死ぬでしょう。」(エゼ
キエル書 18:24)。

自分の罪を真に悔い改め、信仰によって贖いの犠牲としてキリストの血を要求した人
は皆、天の書に名前の横に赦しが記されています。彼らがキリストの義にあずかり、その性格が神の律
法と調和していると見なされるとき、彼らの罪は消え去られ、永遠の命を受けるに値することが分かる
でしょう。主は預言者イザヤを通してこう宣言されています。「わたしですら、自分のためにあなたの
罪を消し去る者であり、あなたの罪は覚えていません。」(イザヤ 43:25)。イエスはこう言われま
した。「勝利する者は白い衣を着ることになる。わたしは決して彼の名前を命の書から消すつもりはな
い。それどころか、わたしは父とその天使たちの前で彼の名を告白します。」(アポック。

3:5)。「ですから、人々の前でわたしを告白する者は誰でも、わたしも天におられるわたしの父の
前で告白します。しかし、人々の前でわたしを否認する者は、わたしも天におられるわたしの父の前で
否認するであろう。」(マタイ 10:32 および 33)。

地上の法廷の判決に対して人々の間に示される最も深い関心は、命の書に刻まれた
名前が全地球の裁判官の前で審査されるときに天の法廷で示される関心をほんのわずかに表してい
るにすぎません。神聖な執り成し者は、神の血への信仰によって克服したすべての人が罪を赦され、エ
デンの園に戻され、神との「最初の統治権」の共同相続人として戴冠できるよう嘆願します。サタンは、
私たちの種族を誘惑し欺こうとして、人間創造における神の計画を阻止できると考えていましたが、キ
リストは今や、あたかも人間が一度も墮落しなかったかのように、その計画が実行されるよう求めてい
ます。神はご自分の民に完全かつ完全な赦しと正当化だけでなく、ご自身の栄光の一部と玉座の座
を求めておられます。

イエスが恵みの対象者を懇願している間、サタンは神の前で彼らを違反者として非
難します。この偉大な詐欺師は、彼らを懐疑的に導き、神への信頼を失わせ、神の愛から引き離し、神の
律法を破らせようとしてきました。今、彼は彼らの人生の記録、性格の欠陥、彼らの救い主の名誉を傷つけた
キリストとの相違点、キリストが彼らに犯させようとして誘惑したすべての罪を指摘し、これらの理由で彼
らを自分の臣民であると主張する。

イエスは彼らの罪を許すのではなく、悔い改めと信仰を示し、彼らの許しを求めて、
父と聖なる天使たちの前に傷ついた手を上げてこう言われました。手のひらに刻んであります。」

「神に喜ばれる犠牲は砕かれた精神です。打ち砕かれて悔い改めた心、神よ、あなたはそれを軽蔑す
ることはありません。」(詩 51:17)。そして、彼の民を告発する者に対して、彼は次のように宣言し
ます。そうです、エルサレムを選んだ主はあなたを叱責されます。これは火の中から拾われたブランド
ではないでしょうか？」(ゼカ 3:2)。キリストはご自分の義を信徒たちに着せ、彼らを「シミやし
わなどのない輝かしい教会」(エペソ人への手紙 5:27)として御父に示すことができるようになります。
彼らの名前は残ります

いのちの書に記録されており、彼らについてはこう書かれています。「彼らは白い服を着てわたしと一緒に歩いてください。彼らはふさわしいからです」(黙示録3:4)。

このようにして、「わたしは彼らの不法を赦し、彼らの罪をもう思い出さない」という新しい契約の約束が完全に果たされることとなります。「その時代、その時に、イスラエルの咎は追及され、もはやそれはなくなる、と主は言われる。」ユダの罪はありますが、それは見つかりません。」(エレミヤ 31:34; 50:20)。「その日、主の枝は美しさと栄光を持つでしょう。そして、救われたイスラエルの人々にとっては、土地の果実、誇り、そして装飾品です。シオンの残りの者とエルサレムに残っている人々は聖徒と呼ばれるのでしょうか。エルサレムに生涯登録されているすべての人です。」(イザヤ書 4:2 および 3)。

調査の裁きと罪の消し去りの働きは、主の再臨の前に達成されなければなりません。死者は本に書かれた事柄によって裁かれなければならないため、事件が調査される裁きが終わるまでに人間の罪を消し去ることは不可能である。使徒ペテロは、「さわやかな時が来て…あなたたちのために任命されたキリスト、イエスを遣わしてください」(使徒3:20)とき、信者の罪はぬぐい去られると明白に宣言しています。捜査判決が下されるとき、キリストは来られ、その報いはキリストとともにあり、その行いに応じてすべての人に与えられるであろう。

典型的な礼拝では、イスラエルのために贖罪を行った大祭司が出てきて会衆を祝福します。このように、キリストは仲介者としての働きの終わりに、「救いを待ち望む人々の前に、罪を持たずに二度目に現れます。

(ヘブライ 9:28)そして、主を待ち望んでいる人々に永遠の命を祝福するためです。大祭司が聖所から罪を取り除いた後、その罪をスケープゴートの頭の上で告白したように、キリストはこれらすべての罪を罪の創始者であり扇動者であるサタンに負わせるでしょう。イスラエルの罪を背負った身代わりが送られた

砂漠へ(レビ記16:22)。このようにして、サタンは神の民に犯させたすべての罪の罪に直面し、千年間地球に閉じ込められることになり、地球はその後、住人がいなくなり荒廃し、最終的には完全な懲罰を受けることになる。私たちの中にある罪。

すべての悪人を滅ぼす火。このようにして、偉大な救いの計画は、最終的には罪が根絶され、悪を放棄しようとするすべての人々が救出されるという形で成就するでしょう。

1844年の2,300日の終わりである裁きの時期に、調査と罪の除去の働きが始まりました。キリストの名を公言したことがある人は皆、キリストの厳重な監視を通過しなければなりません。生きている人も死者も「その行いに従って、本に書かれていることに従って」裁かれなければなりません。

悔い改められず、見捨てられなかった罪は赦されず、記録簿から抹消されませんが、神の日に罪人に対して証言するためにそこに残ります。彼は昼の光の中で、あるいは夜の暗闇の中でその邪悪な行為を行ったかもしれませんが、それらは公然と、私たちが対処しなければならない神の前に明らかになります。神の天使たちはあらゆる罪を目撃し、それを間違いのない記録に記録しました。罪は、父親、母親、妻、子供たち、仲間たちから隠されたり、否定されたり、隠蔽されたりしたかもしれませんが、犯人自身以外の誰もその悪行を少しも疑うことはできませんが、それは天上の知性の前では明らかです。最も暗い夜の暗闇も、あらゆる欺瞞的な芸術の秘密も、永遠の知識についてのたった一つの考えを覆い隠すには十分ではありません。神はあらゆる不当な会計とあらゆる不誠実な取引の正確な記録を持っています。彼は見た目の敬虔さに騙されません。神は人格の評価に間違いを犯しません。人間は心の腐敗した人々に騙されるかもしれませんが、神はあらゆる偽りを見破り、内面を読み取られます。

この考えは何と厳粛なことでしょう！毎日、永遠に過ぎ、その記録は天の書にまで及びます。一度発した言葉、一度行った行為は、もう取り消すことはできません。天使は善と悪の両方を記録します。地上で最も強力な征服者であっても、一日の記録を戻すことはできません。私たちの行動、言葉、そして最も秘密の動機さえも、幸福か不幸かの運命を決定する役割を果たします。私たちからは忘れ去られています、彼らは正当化または非難するために証言をするでしょう。

写真撮影でも顔の特徴が正確に再現されているように、天書にも人物像が忠実に描写されています。しかし、天上の存在たちの見守る前にあるこの記録には、なんとほとんど注目が払われていないことでしょう。目に見える世界と目に見えない世界を隔てるベールが取り除かれ、人の子らが天使がすべての言葉と行為を記録することを観想したとしたら、それは裁きの際に再び問われることになるだろう。毎日語られる言葉のどれだけが止められ、どれだけの行為が残るだろうか。元に戻した！

審査では、それぞれの才能の使い方が徹底的にチェックされます。私たちは天から託された資本をどのように使ってきたでしょうか？主は再臨の際、彼の関心のあるものを受け取るでしょうか？私たちは神の栄光と世界の祝福のために私たちに託された肉体的、知的能力を向上させたでしょうか？私たちは自分の時間、筆、声、お金、そして影響力をどのように使ってきたでしょうか？私たちは貧しい人、苦しんでいる人、孤児や未亡人に対してキリストのために何をしてきたでしょうか？神は私たちを神の聖言の寄託者とされました。人間を賢く救いに導くために与えられた光と真理を私たちはどうしたでしょうか？キリストへの信仰を単に告白することには何の価値もありません。行為を通して明らかにされた愛だけが本物とみなされます。天の目から見て、価値のある行為をするのは愛だけです。愛によって行われたことはすべて、人間の考えでは小さなことのように見えるかもしれませんが、神は受け入れ、報いを与えます。

人間の隠された利己心が依然として天の書物に明らかにされています。他者に対する義務が果たされなかったこと、救い主の要求を忘れたことの記録があります。そこで彼らは、キリストのものだった時間、思考、力がどれほど頻繁にサタンに引き渡されたかを知ることになるでしょう。天使たちが天国に連れて行った記録は悲しいものであり、キリストの追隨者であると公言する知的な存在たちは、この世の所有物を獲得したり、この世の楽しみを楽しむことに集中しています。見栄や自己満足のために、お金、時間、体力が犠牲になります。しかし、祈り、聖書の研究、魂の屈辱、罪の告白に捧げられる時間はほとんどありません。

サタンは私たちの心を占領するための無数の装置を発明し、私たちがもっとよく知っているべき仕事に集中しないようにします。大詐欺師は、償いの犠牲と全能の調停者を明らかにする偉大な真実を憎んでいます。すべてはイエスとその真実から心をそらすかどうかにかかっていることを彼は知っています。

救い主のとりなしの恩恵を享受しようとする者は、神を恐れて聖さを完全にするという義務を何事も妨げられてはならない。貴重な時間を快楽や見栄や利益の追求に費やすのではなく、真理の言葉の熱心で献身的な研究に充てるべきです。聖所と調査判決の主題は、神の民によって明確に理解されるべきです。すべての人は、偉大な大祭司の立場と働きについて自分自身で知る必要があります。そうでなければ、彼らがこの時代に不可欠な信仰を行使することも、神が彼らに望んでいる地位に就くことも不可能になるでしょう。人にはそれぞれ、救いたい、あるいは救わなければならない魂がある。

失う。それぞれが偉大な裁判官と面と向かって向き合わなければなりません。したがって、ダニエルとともに、各人が日々の終わりに自分の運命に就かなければならないときに、審判が行われ、本が開かれる厳粛な場面を頻繁に熟考することは、どれほど重要なことでしょうか。

これらの主題に光を当てた人は皆、神が彼らに託された偉大な真理を証ししなければなりません。天の聖所は、彼らに代わって行われるキリストの働きの真の中心です。それは地球上のすべての生きている魂に関係します。私たちに救いの計画を明らかにし、私たちが時の終わりに連れて行き、正義と罪の間の対立の勝利の結末を明らかにしてください。全員がこれらの問題を徹底的に調査し、その中に抱いている希望について説明を求めるすべての人に答えることができることが非常に重要です。

天の聖所における人間に代わってのキリストのとりなしは、十字架での死と同様に救いの計画にとって不可欠です。イエスは死によってこの働きを始められ、復活後にそれを完了するために天に昇られました。信仰によって、私たちは「イエスが先駆者として私たちのために入ってくださった場所」のベールを超えて、主とともに入らなければなりません。

(ヘブライ人への手紙 6:20)。そこにカルバリの光が反射します。そこで私たちは、救いの神秘についてより明確な認識を得ることができます。人間の救いは、天への無限の犠牲を払って達成されます。捧げられた犠牲は、神の律法に違反した最大限の主張に等しいのです。

イエスは父の御座への道を開いてくださいました。そして、イエスの仲介を通して、信仰を持ってイエスに来るすべての人の心からの願いが神の前に示されることができるようになります。

「自分の罪を隠す者は決して繁栄しない。しかし、告白してそれらを捨てる者は慈悲を得るであろう。」(箴言 28:13)。もし自分の過ちを隠して言い訳する人々が、サタンが彼らをどれほど喜び、キリストと聖天使たちを彼らの行為によってどのように嘲笑しているかを知ることができたら、彼らは急いで罪を告白し、彼らを見捨てるだろう。サタンは性格の欠陥を通して精神全体を支配しようと努めており、これらを大切にすれば自分の努力が成功することを知っています。したがって、彼はキリストの追隨者を、彼らが勝つことは不可能であるという致命的な詭弁で常に欺こうとしています。しかしイエスは、自分の傷ついた手と体を自分のために差し出し、自分に従うすべての人にこう宣言されました。「わたしの恵みはあなたに十分です。」(IIコリント12:9)。「わたしのくびきを負い、わたしから学びなさい。わたしは心優しく、へりくだった者だから、そうすればあなた方は魂に安らぎを得るだろう。なぜなら私のものだから

くびきは軽く、私の重荷は軽い。」(マタ 11:29,30)。あなたの欠点を治せないものだと誰も思わないでください。神はそれらを克服する信仰と恵みを与えてくださいます。

私たちは今、大いなる償いの日に生きています。典型的な礼拝では、大祭司がイスラエルのために贖罪を行っている間、全員が民の中から切り離されることを恐れて、罪の悔い改めと神の前での屈辱によって魂を苦しめることが求められた。同様に、命の書に名前が刻まれているすべての人は、今、試練の時が残る数日、神の前で罪に対する悲しみと真の悔い改めで魂を苦しめる必要があります。心を深く忠実に精査する必要があります。多くの自称クリスチャンが抱いている軽薄な精神は捨てられなければなりません。支配を求めて戦う邪悪な傾向を鎮圧したいと願うすべての人たちの前には、途方もない闘争が存在します。準備作業は本質的に個人的なものです。私たちは集団の中で救われるものではありません。ある人の純粋さと献身は、他の人のこれらの資質の必要性を満たしません。すべての国は神の前で裁かれなければなりません。神は、あたかも地球上に他に人間がないかのように、慎重かつ鋭い精査で各個人の事件を調べられます。それぞれを試してみ、汚れやシワなどがないことを確認する必要があります。

厳粛な場面は、償いの終わりの働きに関連しています。それに関わる利害は重大だ。判決は現在行われています

天の聖域。40年以上にわたってこの取り組みが続けられてきました。すぐに——どれほど早くなるかは誰にもわからない——彼女は生者の事件に移るだろう。私たちの人生は、神の荘厳な臨在の前で見直されなければなりません。このとき、すべての魂が「目を覚まして祈っていなさい。その時がいつ来るかわからないからです。」という救い主の警告に留意することが何よりもふさわしいのです。（マルコ 13:33）。「そして、もしあなたが見ていないなら、私は泥棒のようにあなたに襲いかかります。あなたは私が何時にあなたに襲いかかるか分らないでしょう。」（黙示録 3:3）。

捜査判決の仕事が完了したとき、すべての人々の運命は

それは生死を分けることになる。裁きは、主が天の雲の中に現れる直前に終わります。キリストはこの時を見つめて、黙示録の中で次のように宣言されています。そして、汚れている人は、やはり汚れるに違いありません。そして義なる者は依然として正義を行う。そして聖なる者は、なおも聖化されなさい。そして見よ、わたしはすぐに来る、そしてわたしの報酬はわたしとともにあり、その働きに応じてすべての人に与えるのだ。」（黙示録 22:11 および 12）。

正義の人も邪悪な人も、死すべき状態で地球に生き続けるでしょう。人々は、天の聖域で最終的かつ取り消し不能な決定が下されたことに気付かずに、植えたり、建てたり、食べたり飲んだりすることになるだろう。

洪水の前、ノアが箱舟に入った後、神はノアを巨大な船の中に閉じ込め、邪悪な者たちを外に残しました。しかし、民は7日間、自分たちの滅びが決定していることを知らず、快楽を愛し、ノアを嘲笑する無頓着な生活を続けました。差し迫った破滅の警告。救い主はこう言われました。「人の子の到来も同様です。」（マタイ 24:39）。真夜中の泥棒のように、誰にも気付かれずに、静かに、各人の運命が決定され、罪を犯した人たちへの慈悲の捧げが最終的に撤回される決定的な時間に来るでしょう。

「だから気をつけて…彼が突然やって来て、あなたが眠っているのを見つけないように。」

（マルコ 13:35 と 36）。見るのに飽きて世界の魅力に目を向ける人たちの状態は危険です。ビジネスマンが利得の追求に夢中になり、快楽を愛する人が自分の欲望を満たそうとする一方で、ファッションの奴隷が自分を飾り立てるときが、全地球の裁判官が次の判決を下す時かもしれない。「あなたは天秤で量られて、足りないことがわかりました。」

（ダニエル 5:27）。

第29章

悪の根源

多くの人にとって、罪の起源とその存在理由は大きな困惑の原因となっています。彼らは、不幸と荒廃という恐ろしい結果を伴う悪の働きを見て、知恵、力、愛において無限である存在の支配下でこれらすべてがどのようにして存在し得るのかを疑問に思っています。これは彼らも説明が見つからない謎です。そして、彼らは不安と疑いのあまり、救いに不可欠な神の言葉に完全に啓示されている真理に盲目です。罪の存在に関する調査において、神が決して明らかにしていないことを探ろうと努める人たちがいます。したがって、彼らは自分たちの困難に対する解決策を見つけることができません。疑いと論争の傾向に動かされている人々は、神聖な書物の言葉を拒否する言い訳としてこれにしがみつきます。しかし、伝統と誤解により、神の性質、神の政府の性質、罪に対する神の取り扱い原則に関する聖書の教えが曖昧になっているために、悪という大きな問題に関して満足のいく理解を得ることができていない人もいます。

罪の存在理由を示すような方法で罪の起源を説明することは不可能です。しかし、悪に対する神の正義と慈悲が完全に明らかになるように、その起源と最終的な性質に関しては十分に理解することができます。聖書の中で、神は罪の侵入に対して決して責任を負わないということ以上に明確に教えられているものではありません。そして、反乱の蜂起のきっかけを与えるような神の恵みの恣意的な撤回や神の統治の欠陥はなかった。罪は、その存在理由を説明できない侵入者です。それは神秘的で説明のつかないものです。彼を言い訳することは彼を擁護することと同じだ。もしその出現について何らかの言い訳が見つかるか、あるいはその存在の原因が与えられるなら、それは罪ではなくなるでしょう。私たちの罪の唯一の定義は、神の言葉に与えられているもの、つまり「律法を破ること」です。彼は、神の統治の基礎である愛という偉大な法則と対立する原則の運営です。

悪が浸透する前は、宇宙全体に平和と喜びがありました。すべてが創造主の意志と完全に調和していました。神への愛は最高であり、お互いへの愛は公平でした。神の言葉であるキリストは、神の独り子であり、永遠の父と一つであり、性質、性格、目的において一つであり、神のすべての勧告と目的に入ることができる全宇宙の唯一の存在でした。

キリストを通して、父はすべての天上の存在の創造に働きました。「キリストにおいて、天にあるすべてのものは創造されました。王座であれ、統治権であれ、君主国であれ、権力であれ（コロサイ 1:16）。キリストと御父に対して、天のすべてが忠誠を捧げました。

愛の法則は神の統治の基礎であるため、すべての被造物の幸福は神の偉大な正義原則との完全な調和にかかっています。神はすべての被造物に愛情を持った奉仕、つまり神の性質に対する知的な認識から生じる敬意を望んでいます。神は強制的な服従を喜ばず、すべての人に自由意志を与えて、自発的に神に奉仕できるようにします。しかし、この自由を壊そうとする者がいた。罪は、キリストの後、神から最も尊敬され、天の住人の中で最高の力と栄光を与えられた者から生じました。

彼は、聖なる、汚れのない、最初の覆いケルビムでした。「主エホバはこう言われる。『あなたは測る者であり、知恵に満ち、美しさにおいて完全である。あなたは神の園、エデンにいました。あらゆる宝石があなたの覆いでした。』」「あなたは守るために油注がれた智天使でした、そして私はあなたを立てました。あなたは神の聖なる山の上、燃えるような石の真ん中にあなたは歩きました。あなたは創造された日から、不正がなくなるまで、その道において完璧でした。」あなたの中に見つかりました。」（エゼキエル書 28:12-15）。

ルシファーは神の好意の中に留まり、天使全体から愛され尊敬され、他の人を祝福し創造主に栄光をもたらすために高貴な能力を行使することができたでしょう。しかし、預言者はこう言います、「あなたの心はあなたの美しさのゆえに高揚し、あなたはあなたの輝きのゆえに知恵を墮落させた。」（エゼキエル 28:17）。ルシファーは少しずつ、自己高揚の欲求にふけるようになりました。「あなたは自分の心を神の心であるかのように大切にしています。」「そしてあなたは言いました...私は神の星の上に自分の王座を高め、会衆の山に座ります...私は最も高い雲の上に登り、いと高き者になるでしょう。」（エゼキエル 28:6; イザヤ 14:13 および 14)。神を被造物の愛情と忠誠において最高のものにしようとする代わりに、ルシファーは彼らへの奉仕と自分自身への敬意を勝ち取るための独創的な努力でした。

無限の父が御子に与えた栄誉を切望し、この天使のような王子はキリストの独占的な特権である力を熱望した。

天のすべてが創造主の栄光を反映し、創造主の賛美を宣言することに喜びを感じました。そして、神がそのように誉められた一方で、すべては平和と喜びでした。しかし、不協和音の音が天の調和をかき乱してしまいました。自己への奉仕と高揚は、創造主の計画に反して、神の栄光が至高である心に悪い予感呼び起こしました。天の評議会はルシファーに上訴した。神の子は創造主の偉大さ、善良さ、正義、そして神の律法の神聖で不変の性質を彼に示しました。神ご自身が天国の秩序を確立されました。そしてルシファーは彼女から背を向けることで創造主の名誉を傷つけ、自らに破滅をもたらすだろう。しかし、無限の愛と慈悲をもって与えられた警告は、抵抗の精神を目覚めさせるだけでした。

ルシファーはキリストに対する嫉妬が蔓延するのを許し、彼はより決意を強めました。

自分の栄光に対する誇りが、覇権への欲望を煽った。ルシファーに与えられた高い栄誉は神からの贈り物としては評価されず、創造者に対する感謝の気持ちも呼び起こされませんでした。彼は自分の輝きと高揚感に誇りを持ち、神と同等であることを熱望した。彼は天のホストに愛され、尊敬されていました。

天使たちは彼の命令を実行することに喜びを感じ、彼はそれらすべての上に知恵と栄光を身に付けていました。しかし、神の子は認められた天の主権者であり、父なる神と力と権威を持った者であり、キリストは神のすべての助言に参加しましたが、ルシファーは神の目的を貫くことを許されませんでした。

力強い天使はこう尋ねました。「なぜキリストが優位性を持つべきなのでしょう？なぜ彼はルシファーよりも高く評価されているのでしょうか？」

ルシファーは神の御前を離れて、天使たちの中に不満の心を広めるために出かけました。謎めいた秘密の下で行動し、神への敬意を装ってしばらく真の目的を隠した彼は、天体を統治する法則に対する不満をかき立てようと努め、天体に不必要な制限を課しているのではないかと示唆した。彼は天使が神聖な性質によって構成されていると考え、天使は自らの意志の命令に従わなければならないと主張した。彼は、神がキリストに最高の栄誉を与えることで自分を不当に扱ったと宣言して、自分自身への同情を引きつけようとした。彼は、より大きな権力と名誉を求め、自己の高揚を念頭に置いているのではなく、天国のすべての住民がより高い生存状態に到達できるよう、天国のすべての住民の自由を確保しようと努めたと主張した。

神はその大いなる憐れみにより、長い間ルシファーに耐えられました。彼が最初に不満の精神にふけたときや、忠実な天使たちの前で誤った主張を示し始めたときでさえ、彼はすぐに高い地位から外されませんでした。彼は長い間天国に留められ、悔い改めと服従を条件に何度も許しを与えられました。彼に自分の誤りを納得させるために、無限の愛と知恵だけが考え出すことができる努力が払われた。ルシファー自身も、最初は自分がどこへ向かっているのか見えなかった。彼は自分の感情の本当の性質を理解していませんでした。しかしルシファーは、自分の不満には理由がないことを示され、自分が間違っていること、神の主張は正当であること、そして全天の前でそれを認めるべきであることを確信しました。そうすれば、彼は自分自身と多くの天使たちを救うことができただけでしょう。この時点では、彼はまだ神への忠誠を完全には捨てていませんでした。彼はケルブを守る立場を失ったが、創造主の知恵を認識し、神の偉大な計画で定められた地位を満たすことに満足して神のもとに戻る意欲があったなら、彼は再びその職に復帰したであろう。しかし、プライドが彼を服従させなかった。

彼は自分の行為を粘り強く弁護し、悔い改める必要はないと訴え、その後、創造者に対する大論争に完全に突入した。

その後、彼の特権的な精神のすべての能力が、彼の指揮下にあった天使たちの同情を得る目的で、欺瞞の仕事に使われました。キリストがこの高貴な天使に警告し、助言したという事実自体が、彼の裏切り者の計画に奉仕するために歪められました。サタンは、極度の自信によってサタンと最も密接に結びついていた人々に対して、自分が不当に裁かれていることを表明し、サタンの立場が尊重されておらず、自由が制限されていると主張した。キリストの言葉を捏造することから、彼は、神の御子が天国の住民の前で屈辱を与えようとしていると非難し、矛盾と完全な虚偽に進みました。天上の存在たち。彼自身が行っていた働きそのものを、神に忠実であり続ける人々に注ぎ込んだのです。そして、彼に対する神の側の不当性の告発を弁護するために、彼は創造主の言葉と行動の歪曲を利用しました。神の目的に関する微妙な議論を通じて天使たちを困惑させるのが彼の戦術でした。彼は単純なことをすべてを謎で包み込み、狡猾な倒錯によってエホバの最も明確な発言に疑問を投げかけました。神の行政と非常に密接な関係にある彼の高貴な地位は、彼の主張に大きな力を与え、多くの人が天の権威に対する反逆に彼に加わるように誘導されました。

神は、その知恵によって、不満の精神が活発な反乱へと熟すまで、サタンがその働きを続けることを許可されました。これは彼の計画を完全に展開し、彼の本当の性質と傾向がすべての人にわかるようにするために必要でした。油そそがれた智天使として、ルシファーは非常に高められていました。天人たちにとっても愛されており、天人たちへの影響力は強かった。神の政府には天国の住民だけでなく、神が創造したすべての世界の住民も含まれていました。そしてサタンは、天の天使たちを反乱に導くことができれば、他の世界にも反乱を起こせると考えた。彼は自分の目的を確実に達成するために詭弁と詐欺を用いて、自分の立場を狡猾に提示した。彼の欺く力は非常に強かった。そして偽りの外套で身を隠すことによって、彼は有利に立つことができた。忠実な天使でさえ、彼の性格を完全に見分けることはできず、彼の仕事がどこに向かっているのかを理解することはできませんでした。

サタンは非常に尊敬されており、彼の行為はすべて謎に包まれていたため、天使たちに彼の働きの本当の性質を明らかにするのは困難でした。罪が完全に発達する前には、その真の悪性は現れません。それまで神の宇宙ではそんなことは起こらなかったし、聖なる存在たちはその性質や倒錯について全く理解していなかった。彼らは神の律法を無視した場合に生じる悲惨な結果を認識できませんでした。サタンは当初、神への忠誠を狡猾に公言して自分の働きを隠していました。彼は、神の名誉、神の政府の安定、そして天のすべての住民の利益を増進しようとしていると主張し、彼の命令に従って天使たちの不満をかき立てながら、巧妙にも自分が神の名誉を求めているように見せかけました。不満を解消するために、彼が神の政府の秩序と法律に変更が加えられるべきだと主張したとき、それは天国の調和を保つために必要であるという理由に基づいていました。

罪を扱う際、神は正義と真実しか用いることができませんでした。サタンは神が使わないもの、つまりお世辞や欺瞞を使うことができました。敵は神の言葉を偽造し、天使たちの前で神の統治計画を偽って表現しようとし、主は天国の住民に法と規則を公布するのは公平ではないと言って、神の言葉を偽り、神の統治計画を偽って伝えようとした。被造物たちに服従と従順を要求することによって、神は単にご自身を高めようとしていたのです。したがって、神の政府は公正であり、神の律法は完全であることを、天の住民とすべての被造物世界の住民の前で実証する必要があります。サタンは、宇宙の善を促進しようとしているかのように見せかけていました。篡奪者の本当の性格と彼の本当の目的は誰もが理解する必要があります。

サタンは、自分の行動が天に引き起こした不和は神の律法と政府のせいだと考えました。彼は、すべての悪は神の統治の結果であると宣言しました。彼は自分の目的はエホバの規定を改善することであると主張しました。したがって、彼は自分の主張の性質と、彼の主張する神の法の変更の影響を実証する必要があった。彼自身の作品は彼を非難すべきだ。サタンは初めから自分は反逆していないと主張していました。宇宙全体が詐欺師の正体を暴くのを目撃すべきである。

彼がもはや天国に留まることはできないと決定されたときでさえ、無限の知恵はサタンを滅ぼしませんでした。愛ある奉仕だけが神に受け入れられるので、神の被造物の忠誠は神の正義と慈悲の確信に基づいていなければなりません。天国や他の世界の住民は、罪の性質や結果を理解する準備ができていなかったため、最終的にサタンを滅ぼす際の神の正義と慈悲を当時理解することはできなかつたでしょう。

もし彼がただちに存在から排除されていたら、彼らは愛よりも恐れから神に仕えただろう。詐欺師の影響力が完全に破壊されることも、反逆の精神が完全に根絶されることもなかったでしょう。神は悪が完全に成熟することを許すでしょう。終わりのない世紀を通じて宇宙全体の利益のために、サタンは神の政府に対する彼の告発がすべての被造物に真の光の中に見えるように、自分の原則をより完全に発展させるべきである。それは、神の正義と慈悲、そして神の律法の不変性が永遠に疑いの余地のないものとなるためです。

サタンの反逆は、あらゆる時代に渡って全宇宙に与えられる教訓となり、罪の本質と恐ろしい結果に対する永遠の証しとなるはずでした。サタンの支配の結果、つまり人間と天使の両方に対するその影響は、神の權威を脇に置くという結果を示すでしょう。彼らは、神が創造したすべての存在の幸福は神の政府と神の律法の存在に依存していることを証明するでしょう。こうして悲惨な反逆体験の物語が

それは、すべての聖なる知性を永続的に保護し、罪の性質について欺かれるのを防ぎ、罪を犯してその罰を受けることから解放するものでなければなりません。

天の争いが終わるまで、偉大な篡奪者は自らを正当化し続けた。彼とその同調者全員が天国の幸福の住処から追放されると発表されたとき、反乱軍の指導者は創造主の法に対する軽蔑を大胆に宣言した。彼は、天使は制御される必要はなく、彼ら自身の意志に従って自由にさせられるべきであり、それが彼らを常に正しく導くであろう、という主張を繰り返した。彼は神の法令が自分の自由を制限するものであると非難し、法律の廃止を獲得することが自分の目的であると宣言した。彼はまた、この制限から解放されれば、天の軍勢はより高尚で輝かしい実存状態に到達することができることも述べた。

共通の合意により、サタンとその軍勢は反逆の責任を全面的にキリストに負わせ、告発されなければ立ち上がらなかったであろうと宣言した。こうして、断固として反抗的であり、神の政府を打倒しようとする無駄な努力をし、圧制的な権力の無実の犠牲者であったと冒瀆的に抗議して、大反逆者とその同調者は最終的に天から追放された。

天で反乱を引き起こしたのと同じ精神が、今でも地上で反乱を引き起こしています。サタンは天使に対してと同じ政策を人間に対しても採用しています。彼の霊は今、不従順の子供たちを支配しています。彼の模範に倣い、人々は神の律法の押し付けを打ち破り、神の聖なる戒めに違反することによって自由を約束しようとし、罪の戒めは依然として憎しみと抵抗の心を引き起こします。神からの警告メッセージが良心に向けられると、サタンは人間を自分自身を正当化し、その罪深いやり方に対して他人に同情を求めよう導きます。自分の間違いを正す代わりに、自分を叱責した人が困難の原因であるかのように怒ります。正義のアベルの時代から現代に至るまで、あえて罪を非難しようとする人々に対して示されてきた精神はこのようなものです。

サタンは天で用いたのと同じ神の性質の歪みによって、主が専制的で不屈であるとみなされるようにして、人間を罪に陥らせました。そして目的を達成したので、彼は神の不当な制限が人間の破滅につながったのと同じように、それが人間自身の反逆を引き起こしたと宣言した。

しかし永遠のご自身は、ご自分のご性質を次のように宣言しています。「主なるエホバは、慈悲深く慈悲深い神であり、怒るのが遅く、慈悲と真理に富み、千人に慈しみを保ち、咎と背きと罪を赦し、罪を犯した者を有罪と考えない方である。無実の。」(出34:6と7)。

サタンを天から追放することで、神はご自身の義を宣言し、ご自身の王座の名誉を維持されました。しかし、人間がこの背教的な霊の欺瞞に屈して罪を犯したとき、神はご自分の独り子を墮落した種族のために死ぬように差し出すことによってご自身の愛の証拠をお与えになりました。神の性質は償いにおいて明らかになります。十字架の力強い議論は、ルシファーが選んだ罪の道が決して神の政府によるものではないことを全宇宙に証明しています。

救い主が地上で宣教された際のキリストとサタンとの争いにおいて、この偉大な詐欺師の性格が暴露されました。世界の救い主に対するサタンの残酷な闘いほど、天の天使たちと忠実な宇宙全体の愛情からサタンを効果的に根絶できたものはありません。キリストに自分に敬意を払うよう要求する彼の僭越な冒瀆、山の頂上と神殿の頂点にキリストを連れて行くという無駄な大胆さ、彼の心から発せられた悪意。

私たちの主がめまいのする高みからご自身を投げ出されたという主張、あちこちで主を攻撃し、司祭と人々の心を主の愛を拒否するように鼓舞した飽くなき悪意、そして最後の叫び「十字架につける、十字架につける」 - すべてこのことは宇宙の驚きと憤りを呼び起こしました。

世界がキリストを拒絶するよう扇動したのはサタンでした。悪の君主はイエスを滅ぼすために自分の力と洞察力のすべてを注ぎ込んだ。なぜなら、彼は救い主の憐れみと愛、同情心と優しい優しさが世界に神の性質を表しているのを見たからだ。サタンは人の子のあらゆる発言に反対し、救い主の人生を苦しみと悲しみで満たすために人間を手先として雇いました。彼がイエスの働きを当惑させようとした詭弁と虚偽、不従順の子供たちに対する明らかな憎悪、前例のない善良な生涯を送ったイエスに対する残酷な非難はすべて、根深い復讐の願望から生じたものでした。抑えられていた嫉妬と悪意、憎しみと復讐の炎がカルバリで神の御子に対して爆発し、その一方で全天が沈黙の恐怖の中でその光景を見つめた。

大いなる犠牲が成就されると、キリストは天に昇られ、「私がいる場所に、彼らも私のいる場所にいてくださいますように」という願いを提示するまで、天使の崇拝を拒否されました。（ヨハネ 17:24）。そのとき、言葉では言い表せない愛と力をもって、御父の玉座から答えが来ました。「そして、神のすべての天使たちに彼を崇拝させてください。」

（ヘブライ人への手紙 1:6）。イエスには何の汚れもつきませんでした。彼の屈辱は終わり、彼の犠牲は終わり、そして何よりも名前が彼に与えられました。

さて、サタンの罪は何の弁解もなく示されました。彼は嘘つきで殺人者としての本性を明らかにした。彼が自分の権力下にあった人間の子らを統治したのと同じ精神が明白であり、もし彼が天国の住民を支配することを許されていたなら、それが現れただろう。そして高揚感。しかし、そこで見られたのは退廃と隷属でした。

神の性質と政府に対するサタンの嘘による非難

彼らの真の光の中に現れました。彼は、神が被造物に服従と服従を要求することで単にご自身の高揚を求めているだけだと非難し、創造主は他のすべての者に自己否定を要求する一方で、ご自身はそれを実践せず、犠牲も払わなかったと宣言した。今、宇宙の総督が、墮落した罪深い種族の救いのために、愛が引き受けることのできる最大の犠牲を払ったことが、ますます明らかになりました。なぜなら、「神はキリストのうちにおられ、世界をご自分と和解させた」からです（IIコリント 2:30）。5:19。また、ルシファーは名誉と優位性を求めるあまり、罪が入り込む扉を開いた一方、キリストは罪を滅ぼすためにへりくだり、死に至るまで従順になったことが分かりました。

神は反逆の原理に対する嫌悪感を明らかにしていました。天のすべての人は、サタンの非難と人間の救いの両方において神の義が明らかにされるのを見た。

ルシファーは、神の法が不変であり、その罰が遡及できないのであれば、すべての違反者は創造主の恩恵から永久に排除されるべきであると宣言した。邪悪な者は、罪深い種族は自らを救いの手が届かないところに置き、それゆえに正当な獲物であると主張した。しかし、キリストの死は人間にとって反論の余地のない議論でした。律法の刑罰は神に等しい者に課せられ、人は自由にキリストの義を受け入れ、悔い改めと屈辱の人生を経て、サタンの力に勝利した神の子として勝利を収めることができた。...このように、神は正義であり、イエスを信じるすべての人を義とする方です。

しかし、キリストが苦しみ、死ぬために地上に来られたのは、単に人間の救いを達成するためだけではありませんでした。イエスは「律法を拡大し」、「律法を輝かしいものとする」ために来られました。いいえ

それはただ、この世界の住民が法を正しく認識できるようにするためであり、宇宙のすべての世界に神の法が不変であることを証明するためでした。彼らの主張が脇に置かれることができれば、神の子は聖なる戒めの違反を償うために命を捨てる必要がなくなるでしょう。キリストの死は変えられないことが証明されました。罪人が救われるよう、無限の愛が父と子に課した犠牲は、正義と慈悲が神の法と政府の基礎であることを全宇宙に証明している（そしてこの償いの計画だけが達成に十分であった）。

最終的な裁きの執行において、罪の存在には理由がないことが再び証明されるでしょう。地球の裁判官がサタンに「なぜあなたはわたしに反逆し、わたしの王国の民をわたしから盗んだのですか？」と尋ねても、悪の創始者は何も答えることができないだろう。すべての口は閉じられ、反抗的なホストはすべて言葉を失うでしょう。

カルバリの十字架は、律法の不変性を宣言すると同時に、罪の代償は死であることを宇宙に宣言します。瀕死の救い主の「もう終わった」という耐え難い叫び声は、サタンに死の宣告を告げた。そして、長年続いてきた大論争に決着がつき、悪の最終的な根絶が確認された。神の御子は、「死の力を持つ者、すなわち悪魔を死によって滅ぼすため」（ヘブライ2:14）、墓の門を通られました。

ルシファーは自己を高めたいという願望から、「私は自分の玉座を神の星々の上に高めます...私は至高者のようになるでしょう。」と言うようになりました。神は宣言します：「そして私はあなたを地上の灰に変えました...そしてあなたはもはや永遠ではありません。」（イザヤ 14:13 と 14、エゼキエル 28:18 と 19）。その日が来ると、「かまどのように燃えて……高ぶる者も、悪を行う者もみなもみがらのようになる。そして、来たるべき日には彼らが焼き尽くされる、と万軍の主は言われる。根も枝も残さないでください。」（マラヤ 4:1）。

宇宙全体が罪の性質と結果の証人となるでしょう。そして、当初は天使たちに恐怖と神への不名誉をもたらしたであろう彼らの決定的な絶滅は、今では神の愛を証明し、神の意志を行うことに喜びを感じ、心の中に神の律法がある存在たちの全宇宙の前で神の名誉を確立するでしょう。悪が再び現れることはありません。神の言葉には「苦難は二度起こらない」とあります。（ナホム 1:9）。サタンが奴隷のくびきを負っている神の律法は、自由の法則として崇拜されるでしょう。試され、試された創造物は、計り知れない愛と無限の知恵の表現として彼らの前に完全に現れた御方への忠実さを二度と逸脱することはありません。

第30章

人間とサタンの間の敵意

「わたしはあなたとその女との間に、またあなたの子孫とその子孫との間に敵意を置く。それはあなたの頭を打ち砕き、あなたはそのかかとを傷つけるであろう。」(創世記 3:15)。人間の墮落後にサタンに対して宣告された神の宣告は、地球上に住むことになる人類のあらゆる人種が巻き込まれるであろう大規模な紛争を予期した、終末の時まで全時代に及ぶ預言でもあった。

神は「わたしは敵意を置く」と宣言されます。この敵意は自然なものではありません。人間が神の法を破ると、人間の本性が悪となり、サタンと対立するのではなく調和するようになりました。罪深い人間と罪の根源との間には、自然な敵意は存在しません。どちらも背教の結果として悪になりました。背教者は、他の人に自分の模範に従うように勧めることによって同情と支持を得るとき以外は休むことはありません。このため、墮天使と悪人は絶望的な仲間として団結します。もし神が特別に介入しなかったら、サタンと人間は同盟を結んで天に敵対し、心の中にサタンに対する敵意を抱く代わりに、人類家族全体が団結して神に敵対したであろう。

サタンは、天使たちに反逆を誘発したのと同じように、人間を罪に陥れるよう誘惑し、天との戦いに協力を確保しようとしていました。他のすべての点で意見の相違はあったものの、彼らは宇宙の立法者の権威に対抗して固く団結した。しかし、サタンは、自分とその女性との間に、そして自分の子孫と女性の子孫の間に敵意が生まれるであろうという宣言を聞いたとき、人間性を墮落させようとする彼の努力は止められることに気づきました。何らかの方法で人間がその力に抵抗できるようにする必要があるということです。

人類に対するサタンの敵意に火をつけるのは、サタンがキリストを通して神の愛と憐れみの対象であるということです。彼は、神の手の働きを傷つけ、汚すことによって、人間の救いという神の計画を阻止し、神に不名誉を投げかけようと望んでいます。彼は天に苦痛を与え、地上を呪いと荒廃で満たすだろう。そして彼は、これらすべての悪は人間を創造した神の働きの結果であるとマークしています。

キリストが魂に植え付ける恵みこそが、人間の中にサタンに対する敵意を生み出すのです。この回心の恵みと新たな力がなければ、人はサタンの虜となり、いつでも命令を実行する準備ができていた僕のままになってしまうでしょう。しかし、魂に導入された新しい原則は、それまで平和が支配していた場所に紛争を引き起こします。キリストが与えてくださった力によって、人は暴君や篡奪者に抵抗することができます。罪を愛する代わりに罪を憎む人、心の中に支配する情熱に抵抗して征服する人は、完全に上から来る原則が自分の中で働いていることを示しています。

キリストの霊とサタンの霊との間に存在する対立は、世界がイエスを受け入れた際に最も顕著に示されました。ユダヤ人たちがイエスを拒絶するようになったのは、イエスが世俗的な富や華やかさ、威厳を持たずに現れたからというだけではありません。彼らは、イエスがそれらの外面的な利点の欠如を補って余りある力を持っていることに気づきました。しかし、キリストの純粋さと聖さは、悪人の憎しみを彼に引き寄せました。彼の罪のない自己否定と献身的な人生は、誇り高く官能的な人々に対する永遠の叱責でした。それが私を目覚めさせたものです。

神の子に対する敵意。サタンとその邪悪な天使たちは邪悪な人々と団結しました。背教のあらゆる勢力が真実の擁護者に対して共謀した。

主に対して現れたのと同じ敵意が、キリストの追隨者に対しても現れます。罪の忌まわしい性質を見て、上からの力で誘惑に抵抗する者は、間違いなくサタンとその臣下たちの怒りを買うであろう。純粋な真理原則に対する憎しみ、そしてその擁護者に対する非難と迫害は、罪と罪人が存在する限り存在し続けるでしょう。キリストに従う者とサタンの僕たちは調和することができません。十字架に対する非難は消えていない。「キリスト・イエスにあって敬虔に生きようとする者はみな迫害を受けるであろう」(IIテモテ3:12)。

サタンの手先は、神の政府に対抗してサタンの権威を確立し、サタンの王国を建設するためにサタンの指示の下で絶えず働いています。この目的のために、彼らはキリストの弟子たちを欺き、従順から誘惑しようとしています。彼らの指導者と同様に、彼らは目標を達成するために聖書をねじ曲げ、歪曲します。サタンが神に対して告発を行おうとしたのと同じように、サタンの手先は神の民に対して虚偽の告発を行おうとしています。キリストを殺した霊は悪人たちを動かして弟子たちを滅ぼさせます。このすべては、最初の預言の中で予測されています。「私はあなたとその女性との間に、またあなたの子孫と彼女の子孫の間に敵意を置きます。」そしてそれは終わりの時まで起こるでしょう。

サタンはすべての力を結集し、戦闘に全力を注ぎます。なぜもっと大きな抵抗に遭遇しないのでしょうか？なぜキリストの兵士たちはそんなに眠っていて無関心なのでしょうか？なぜ彼らはこれほど無関心を示すのでしょうか？なぜなら、彼はキリストとの本当の交わりがほとんどないからです。なぜなら、彼らは神の御霊にとっても欠けているからです。彼らにとって罪は、主にとってそうであったように、嫌悪感や嫌悪感を与えるものではありません。彼らは、キリストがなさったように、断固とした断固とした抵抗をもってそれに直面しません。彼らは罪の極度の邪悪さと悪性を理解しておらず、闇の君主の性格と力に盲目です。サタンとその働きに対する敵意はほとんどありません。なぜなら、サタンの力と悪意、そしてキリストとその教会に対するサタンの闘争の計り知れない範囲についてはあまりにも無知だからです。この点に関して群衆は欺かれています。彼らは、自分たちの敵が、邪悪な天使の心をコントロールし、よく練られた計画と巧みな動きで、魂の救いを阻止するためにキリストに対して戦争を仕掛けている強力な将軍であることを知りません。キリスト教徒を自称する人々の間、さらには福音を伝える奉仕者の間でさえ、おそらく説教壇での偶発的な言及を除いて、サタンについての言及はほとんど聞かれません。彼らは継続的な活動と成功の証拠には目をつぶっています。彼らはその微妙さに関する多くの警告を無視します。彼らは自分たちの存在に気づいていないようです。

人間は自分の間違いに気づいていませんが、この用心深い敵が常に彼らの前に立ちはだかります。彼は家の隅々に、都市のあらゆる通りに、教会に、国家評議会に、司法裁判所にその存在を導入し、あらゆる場所で男性、女性、子供の魂と肉体を混乱させ、欺き、誘惑し、台無しにしています。、家族を引き離し、憎しみをまき散らし、対立、争い、そして殺人。そしてキリスト教世界は、これらのことをあたかも神ご自身が定めたものであり、存在するに違いないと考えているようです。

サタンは神の民を世から隔てている障壁を打ち破ることによって、神の民を打ち負かそうと絶えず努めています。古代イスラエルは、異邦人との違法な交際に踏み切ったとき、罪に誘惑されました。同様に、現代のイスラエルも誤解されています。「この時代の神は、信じない者の心を盲目にし、神の似姿であるキリストの輝かしい福音の光が彼らを照らさないようにしました。」(IIコリント4:4)全ての

キリストに断固として従う者ではない人は、サタンの僕です。再生されていない心の中には、罪を愛し、それを大切に、許そうとする意欲があります。新しくされた心の中には、罪に対する憎しみと、それに対する断固とした抵抗があります。

クリスチャンが邪悪な者や不信者の社会を選択すると、自らを誘惑にさらすことになります。サタンは人目につかないところに隠れて、こっそり彼らの目を欺きの目隠しで覆います。彼らは、そのような仲間が自分たちに危害を加えるために計算されていることを理解できず、性格、言葉、行動において常に世間と似ているにもかかわらず、ますます盲目になっていきます。

世界の習慣に従うことは、教会を世界に変えます。それは決して世界をキリストに変えることはありません。罪をよく知ると、必然的に罪への嫌悪感が薄れます。サタンの僕たちと交わることを選んだ者は、すぐに自分の主を恐れなくなるでしょう。ダニエルが王の宮廷にいたように、職務の途中で私たちが試練にさらされるとき、私たちは神が私たちを守ってくださると確信できます。しかし、もし私たちが誘惑に翻弄されるなら、遅かれ早かれ墮落するでしょう。

誘惑者は、多くの場合、自分の支配下にあるとは思えない人々を通して最もうまくいきます。才能と教育を持った人は、あたかもそれらの資質が神への畏れの欠如を補い、人間を神の好意に値するものにするかのように賞賛され、尊敬されます。厳密な意味で考えると、才能や文化は神からの贈り物ですが、それらが敬虔さの代わりに使われ、魂を神に近づける代わりに神から遠ざけてしまうと、それらは呪いとなり罰となります。礼儀正しく、洗練されているように見える人は皆、ある意味でクリスチャンに違いないという意見が多くの人の間で広まっています。これほど大きな間違いはかつてありませんでした。これらの特質はすべてのクリスチャンの人格を飾るべきです。なぜなら、それらは真の宗教を支持する強力な影響力を及ぼすからです。しかし、それらは神に奉獻されなければなりません、そうでなければ悪のための力にもなります。一般に不道徳な行為と呼ばれるものに止まらない、文化的に変容した知性と良いマナーを備えた男性がたくさんいます。それはサタンの手によって磨かれた道具にすぎません。彼らの影響力と模範の危険で欺瞞的な性質により、彼らは無知で教育を受けていない人々よりも神の大義にとってより危険な敵となっています。

ソロモンは、熱烈な祈りと神への信頼を通じて、世界の驚きと驚異を呼び起こす知恵を獲得しました。しかし、イエスが力の源から離れ、ご自身を信頼して前進したとき、誘惑の犠牲者として墮落してしまいました。そして、この最も賢明な王に与えられた素晴らしい能力は、彼を魂の敵に対するより効果的な代理人にただけでした。

サタンは絶えず彼らの心を盲目にさせようとしているが、クリスチャンは「血肉に対してではなく、公国に対して、権力に対して、この世の闇の支配者に対して、高き所にいる邪悪な霊に対して戦っている」ということを決して忘れていない（エペソ人への手紙） 6:12）。この靈感による警告は、何世紀にもわたって現代にまで響き渡っています。「身を慎んで、気を付けていなさい。あなたの敵である悪魔がライオンのように吠え、食い尽くす者を求めているからです。」（ペテロ第一 5:8）。

「悪魔の計略に立ち向かうことができるように、神の武具を身に着けなさい」（エペソ6:11）。

アダムの時代から現代に至るまで、私たちの偉大な敵はその力を行使して抑圧し、破壊してきました。彼は現在、教会に対する最新のキャンペーンの準備をしている。イエスに従おうと努力する人は皆、この容赦ない敵との戦いに巻き込まれることになります。クリスチャンが神の模倣に近づけば、彼は確実に自分自身を攻撃の標的にするでしょう。

サタン。神の働きに積極的に携わり、悪の欺瞞を暴き、人々の前にキリストを示そうと努めているすべての人は、パウロの証しに加わることができるでしょう。その中でパウロは、謙虚な気持ちで神に仕えることについて語っています。たくさんの涙と誘惑とともに。

サタンは最も暴力的かつ巧妙な誘惑でキリストを攻撃しましたが、キリストはどの争いでも拒否されました。これらの戦いは我々に有利に戦われ、その勝利により我々の勝利が可能となった。キリストは力を求めるすべての人に力を与えてくださいます。誰も自分の同意なしにサタンに打ち勝つことはできません。誘惑者には、意志を制御したり、魂に罪を強制したりする力はありません。人を苦しめる可能性はありますが、汚染することはありません。それは苦しみを引き起こすかもしれませんが、腐敗は引き起こしません。キリストが勝ったという事実は、キリストの追隨者たちに、罪とサタンと全力で戦う勇気を与えるはずで

第31章

悪霊の作戦

目に見える世界と目に見えない世界の関係、神の天使の働き、悪霊の働きは聖書の中に明確に明らかにされており、人類の歴史と不可分に絡み合っています。悪霊の存在を信じない傾向が強まっていますが、その一方で「救いを受け継ぐ人々のために仕える」(ヘブル1:14)聖なる天使は死者の霊であると多くの人が考えています。しかし、聖書は善と悪の両方の天使の存在を教えているだけでなく、これらが肉体を持たない死者の霊ではないという疑問の余地のない証拠を示しています。

人間が創造される前に、天使はすでに存在していました。地球の基礎が築かれたとき、「明けの明星は賛美を歌い、神の子たちは皆、喜びの叫びを上げました」(ヨブ記38:7)。人間が墮落した後、生命の木を守るために天使が派遣されましたが、これはまだ人間が亡くなる前のことでした。詩篇作者は、人間は「天使より少し低く」造られたと述べているため、天使は本質的に人間より優れています(詩篇8:6)。

聖書は、天上の存在の数、力、栄光、神の政府との関係、そして救いの働きとの関係についての情報を与えてくれます。

「主は天に王座を定め、その王国はすべてを支配します。」

そして預言者は、「玉座の周りで多くの天使の声を聞いた」と言いました。彼らは王の玉座の間に仕え、「力の強い天使」、「命令を実行する大臣」、そして「その言葉に従う」のです(詩篇103:19-21、黙示録5:11)。預言者ダニエルが見た天の使者は、一万倍、数千倍でした。使徒パウロは彼らを「数え切れないほどの天使の軍勢」と呼んでいます。

(ヘブライ人への手紙 12:22)。神の使者として、彼らは「稲妻のように」(エゼキエル1:14)前進し、その栄光はまばゆいほどであり、その飛行は非常に速いです。主の墓に現れた天使は、「その姿は稲妻のようで、その衣は雪のように白かった」ため、番兵は恐怖に震え、彼らは「死んだようだった」(マタイ28:3,4)。 . 傲慢なアッシリア人センナケリブが神を冒し侮辱し、イスラエルを滅ぼすと脅したとき、「その夜、主の御使いが出て行って、アッシリア人の陣営で百八万五千人を殺した。」センナケリブ軍の「勇猛果敢な者たちと指導者と大尉たち」はすべて「滅ぼされた」。「それから彼は恥をかいた顔をして自分の土地に戻った」(列王記下 19:35、歴代誌下 32:21)。

天使たちは神の子供たちへの慈悲の使命のために派遣されました。アブラハムに、正義の口を炎の死から救い出す祝福の約束を。砂漠で疲労と飢えで死にそうになったとき、エリヤに。エリシャへは、戦車と火の馬が小さな町を取り囲み、そこで彼は敵に囲まれていました。ダニエルには、異教の王の宮廷で神の知恵を求めたとき、あるいはライオンの餌食になるために捨てられたとき。ヘロデの牢獄で死刑を宣告されたペテロに。フィリピの囚人たちへ。嵐の夜の海で、ポールとその仲間たちへ。コルネリオの心を開いて福音を受け入れるために。異邦人の見知らぬ人に救いのメッセージを伝えるために、ペテロに派遣するためです。このように聖なる天使たちは、いつの時代も神の民に奉仕してきました。

キリストに従う者にはそれぞれ守護天使が任命されています。これらの天の番兵は、正義の人たちを邪悪な者の力から守ります。サタン自身もこのことを認めて、「ヨブは無駄に神を恐れているのだろうか」と言いました。「あなたは彼と彼の家、そして彼の持ち物すべてを補償しなかったのですか？」（ヨブ記 1:9 と 10）。神がご自分の民を守る手段は、詩編作者の次の言葉に表れています。「エホバのみ使いは、ご自分を恐れる者たちの周りに陣を張り、彼らを救い出す」（詩編 34:7）。救い主はご自分を信じる人々についてこう言われました。「あなたがたは、これらの小さな者たちを一人も軽蔑しないように気をつけなさい。天にいるみ使いたちは、わたしの天の父の顔を絶えず見ていると言っておきます。」（マタイ 18: 10）。神の子供たちに奉仕するよう命じられた天使たちは、いつでも神の臨在にアクセスできます。

このようにして、闇の君主の欺瞞的な力と継続的な悪意にさらされ、あらゆる悪の勢力と対立する神の民は、天の天使たちの絶え間ない守りを保証されることになる。そして、この保護は不必要に与えられるものではありません。もし神がご自分の子供たちに恵みと保護の約束を保証したのであれば、それは立ち向かうべき強力な悪の手先が存在するからです。その悪性と力を安全に軽蔑したり、無知にできる者は誰もいません。

罪のない初めに創造された悪霊は、性質、力、栄光において、現在神の使者である聖なる存在たちと同等でした。しかし、彼らは罪によって墮落すると、力を合わせて神を辱め、人類を滅ぼしました。彼らは反逆においてサタンと団結し、天から追放され、歴代を通じて、神の権威に対する戦いにおいてサタンに協力してきました。私たちは聖書の中で、彼らの連合と政府、彼らのさまざまな秩序、彼らの知性と巧妙さ、そして人々の平和と幸福に対する彼らの邪悪な計画について知らされています。

旧約聖書の歴史には、彼の存在と活動について時折言及されています。しかし、悪霊が最も印象的な形でその力を現したのは、キリストが地上にいた時代でした。キリストは人間の救いのために立てられた計画を実現するために来られ、サタンは世界を支配する権利を主張することに決めました。彼はパレスチナの地を除く地球上のあらゆる場所に偶像崇拜を植え付けることに成功しました。誘惑者の影響に完全に屈服しなかった唯一の土地に、キリストは人々に天の光を当てるために来られました。2つの対立する勢力が覇権を主張しました。イエスは愛の手を差し伸べて、イエスのうちに赦しと平安を見いだしたいと願うすべての人を招いておられました。闇の軍勢は、自分たちが無制限に制御できるわけではないことを理解し、もしキリストの使命が成功すれば、彼の統治はすぐに終わるだろうと理解していました。サタンは檻に入れられたライオンのように激怒し、人間の肉体と魂の両方に対してその力を反抗的に示しました。

ある人々が悪霊に取り憑かれていたことは、新約聖書にはっきりと述べられています。このように苦しめられた人々は、単に自然原因の病気に苦しんでいたわけではありません。キリストは、自分が扱っている人々について完全な知識を持っており、霊の直接の存在と働きを認識していました。

マウス。

彼らの数、力、悪性度、そしてキリストの力と憐れみの顕著な例は、ガダラ人の地の悪霊に取り憑かれた人々の癒しに関する聖書の記述の中に示されています。あの哀れな狂人たちは、あらゆる自制を無視して、身もだえし、泡を立て、激怒し、叫び声で空気を満たし、自分たちを虐待し、近づく者すべてを危険にさらしていた。

彼らの血みどろの醜い肉体と失われた精神は、闇の王子に心地よい光景を見せた。苦しむ人々を支配していた悪霊の一人は、「軍団というのが私の名前です。私たちは大勢いるのですから」と宣言しました（マルコ5:9）。で

ローマ軍では、軍団は 3,000 人から 5,000 人で構成されていました。サタンホストもいくつかの会社に組織されており、これらの悪魔が所属する単一の会社だけでも軍団以上の数がありました。

イエスの命令により、悪霊は犠牲者を見捨て、従順で知的で優しい彼らを主の足元に静かに座らせました。しかし、悪霊たちは豚の群れを海に投げ込むことを許され、ガダラ人の地の住民にとって彼らの喪失はキリストが与えてくださった祝福よりも価値があり、神の医師は立ち去るように勧められました。これがサタンが達成したかった結果でした。自分の喪失をイエスのせいにして、人々の利己的な恐れを引き起こし、人々がイエスの言葉に耳を傾けるのを妨げました。サタンは、その非難を自分自身やその代理人に課すのではなく、損失、恥辱、苦しみの原因としてクリスチャンを絶えず非難しています。

しかし、キリストの目的は挫折しませんでした。彼は、利益を求めてこれらの汚れた動物を育てたユダヤ人たちへの非難として、悪霊が豚の群れを滅ぼすことを許可しました。もしキリストが悪霊たちを抑えつけていなかったら、悪霊たちは豚だけでなく、その羊飼いや飼い主も海に投げ込んでいたでしょう。牧師と所有者の両方が救われたのは、ひとえに彼らの救出のために慈悲深く行使された神の力によるものでした。これに加えて、この出来事は弟子たちが人間と動物の両方に対するサタンの残酷な力を目の当たりにするために起こることが許されました。救い主は、ご自分の追従者たちが、自分たちが直面するであろう敵を認識し、騙されたり、欺瞞に打ち負かされたりしないように望んでおられました。また、その地域の人々がサタンの束縛を打ち破り、捕虜を解放するこの力を目の当たりにすることも神のご意志でした。そしてイエスは去ったが、見事に救出された人々は残り、恩人の慈悲を宣言した。

同様の性質の他の出来事が聖書に記録されています。シロフェニキア人の女性の娘は、イエスが言葉によって追い出した悪霊によって悲惨な苦しみを受けました（マルコ 7:26-30）。ある人は「悪魔に取り憑かれ、目も見えず、口もきけない」（マタイ 12:22）、口のきけない霊を持った若者で、しばしば「彼を殺すために火と水の中に投げ込まれた」（マルコ 9:17-27）。カファルナウムの会堂の安息日の静けさを乱す「汚れた悪魔の霊」（ルカ 4:33-36）に悩まされていた狂人たちは皆、憐れみ深い救い主によって癒されました。ほとんどすべての場合において、キリストは悪魔を知性ある存在として語り、犠牲者を放っておいてこれ以上苦しめないよう命じました。カファルナウムの崇拝者たちは、その偉大な力を見て、「皆驚いて、互いに話し合って言った、「権威と力をもって汚れた霊たちに命令し、彼らが出てくるというのは、何という言葉だろう？」（ルカ 4:36）。

悪霊に取り憑かれた人は通常、大きな苦しみの状態にあるように表現されます。ただし、この規則には例外があります。超自然的な力を得るために、悪魔の影響に自発的に服従する人もいます。明らかに、これらは悪魔と対立していませんでした。占いの霊を持った人たちは、このカテゴリーに属します。魔術師シモン、魔術師エリマス、そしてフィリピでパウロとシラスを追った若い女性です。

聖書の直接的かつ十分な証言にもかかわらず、悪魔とその天使たちの存在と働きを否定する人々ほど、悪霊の影響下に陥る危険にさらされている人はいません。私たちが彼らの策略を無視している間、彼らにはほとんど考えられない利点があり、多くの人々は彼ら自身の知恵の命令に従うつもりでありながら、彼らの提案に従います。これが、終末が近づくにつれ、サタンがより大きな力で働き、欺き、

破壊すると、彼は自分が存在しないという信念をあらゆる場所に広めます。彼の行動方法は、自分自身と自分の仕事のやり方を隠すことにあります。

偉大な誘惑者が、私たちが彼の策略に慣れることほど恐れるものではありません。彼の性格と目的をよりうまく隠すために、彼は嘲笑や軽蔑以上の感情を呼び起こさないような方法で彼を表現しました。彼は、ばかばかしい、あるいは気持ち悪い、半分動物で半分人間として描かれるのが好きです。自分は知的で知識が豊富だと信じている人たちによって、あなたの名前が娯楽や嘲笑の対象として使われるのを聞くのは楽しいことです。

彼が完璧な技術で自分自身を覆い隠したために、「そのような存在は本当に存在するのか?」という疑問が広く聞かれたのです。これは、宗教界で一般に受け入れられている聖書の明確な証言に関連して、嘘を提示する理論を作成することに彼が成功した証拠です。サタンは自分の影響力に気づいていない人々の心を簡単にコントロールできるため、神の言葉はサタンの邪悪な働きの多くの例を私たちに示し、サタンの秘密の力を明らかにし、私たちがサタンの攻撃に対して警戒させています。。

私たちが救い主の優れた力の中に避難所と救出を見つけることができるという事実にもかかわらず、サタンとそのホストの力と悪意は当然私たちに驚かせるかもしれません。私たちは、財産と生命を悪者から守るために、ボルトと鍵で慎重に家を固定します。しかし、私たちは絶えず私たちに近づこうとしている邪悪な天使たちのことや、私たち自身の力では防御する方法のない彼らの攻撃について考えることはほとんどありません。許可されれば、それらは私たちの心を乱し、乱雑にし、私たちの体を苦しめ、私たちの所有物や生活を破壊する可能性があります。彼らの唯一の楽しみは悲惨と破壊だ。神の要求に抵抗し、神が彼らを悪霊の支配に委ねるまでサタンの誘惑に屈する人々の状態は恐ろしいものです。しかし、キリストに従う者は常にキリストの保護のもとに安全に保たれます。彼らを守るために、力を超えた天使が天から派遣されます。邪悪な者は、神がご自分の民に設けられた警備を打ち破ることはできません。

第32章

サタンの罠

6000年近く続いてきたキリストとサタンの大いなる争いは間もなく終結しなければならず、邪悪な者は人間に代わってキリストの働きを破壊し、魂を自らの罠に罠にはめる努力を倍増させている。彼は、救い主の仲裁が終わり、罪のための犠牲がなくなるまで、人々を暗闇と悔い改めの中に閉じ込めることを望んでいます。これが彼が達成しようとしている目的です。

サタンの力に抵抗するための特別な努力がないとき、教会や世の中に無関心が蔓延しているとき、サタンは悩まされません。なぜなら、彼は自分の意志の虜として導いている人々を失う危険がないからである。しかし、永遠の事柄に注意が向けられ、魂が「救われるためには何をしなければならないか？」と尋ねるとき、彼は注意を払って、キリストの力に対抗し、聖霊の影響に対抗しようと努めます。

聖書は、ある時、神の天使たちが主の前に出て行ったとき、サタンも彼らの中に入って行き(ヨブ記1:6)、永遠の王の前にひれ伏すのではなく、永遠の王に対する悪意のある計画を促進するためであったと宣言しています。あなた正義の。同じ目的で、人々が神を崇拝するために集まるときにも彼はそこにいます。姿は見えませんが、熱心に参拝者の心をコントロールしようと努めています。経験豊富な将軍と同じように、彼は事前に計画を立てます。神の使者が聖書を調べているのを見ると、彼は人々に提示される主題に注目します。そして、彼は自分の知性と洞察力のすべてを使って状況をコントロールし、まさにその点で欺いている人々にメッセージが届かないようにします。警告を最も必要としている人は、自分の存在を必要とする何らかの商取引に関与するか、あるいは他の何らかの手段によって、人生の香りとなり得る言葉を一生聞くことができないようにすることになるだろう。

サタンは、人々を覆う霊的な闇のせいで、主の僕たちを不安げに見ています。無関心、怠慢、怠惰の呪縛を打ち破る神の恵みと力を懇願する牧師たちの熱烈な祈りを聞いてください。

そして、新たな熱意を持って、策略に忙しく取り組みます。それは、男性を食欲やその他の自己満足に駆り立て、その結果、男性の感受性を麻痺させ、最も学ぶ必要のあることそのものを聞くことができなくなるのです。

サタンは、自分が祈りや聖書の吟味を無視させることができる者は皆、自分の攻撃によって打ち負かされることをよく知っています。したがって、心を吸収するためにあらゆる可能なトリックを発明してください。真理の知識を追求する代わりに、自分の考えに同意しない人々の性格の欠如や信仰の誤りを探求することを宗教とする信心深い階級が常に存在しました。そのような人々はサタンの救いの手です。兄弟たちを告発する人は少なくない。神が働いておられるとき、彼らは常に働いており、神の僕たちは神に真の敬意を払っています。彼らは、真理を愛し、真理に従う人々の言葉や行動に偽りの色を与えるでしょう。彼らは、キリストの最も熱心で、熱心で、自己犠牲的な僕たちを、騙す者と騙される者として表現するでしょう。あらゆる真実で崇高な行動の動機を歪曲し、ほのめかしを広め、経験の浅い人々の心に疑惑を引き起こすのが彼の仕事である。

彼らは考えられるあらゆる方法で、純粹で正しいものを憎しみに満ちた欺瞞的なものにしようとするでしょう。

しかし、誰もそれらについて騙される必要はありません。彼らが誰の子供であり、誰の模範や仕事に従っているのかがすぐにわかります。「その実によってあなたは彼らを知るでしょう。」（マタイ 7:16）。彼の行為は、忌まわしい中傷者、「私たちの兄弟を告発する者」（黙示録 12:10）であるサタンの行為に似ています。

この偉大な詐欺師は、魂を罠にかけるためにあらゆる種類の間違いを提示する準備ができて多くのエージェントを用意しています。彼が破滅させたい人々のさまざまな好みや能力を満たすために準備された異端です。彼の目的は、不誠実で再生不可能な要素を教会に持ち込むことであり、それが疑いと不信を助長し、神の働きが進歩し、それに伴って前進するのを見たいと願うすべての人を妨げることになる。神や神の御言葉に対する真の信仰を持たない人の多くは、特定の真理原則を受け入れ、クリスチャンであると偽ります。こうして彼らは、自らの誤りを聖書の教義として浸透させることができるのです。

人間が何を信じているかは重要ではないという立場は、サタンの最も成功した欺瞞の一つである。彼は、愛によって受け取られた真実が、それを受け取った人の魂を聖化することを知っています。したがって、彼は常にそれを誤った理論や寓話、あるいは別の福音に置き換えようとしています。神の僕たちは最初から、単に倒錯した人間としてではなく、魂にとって致命的な偽りを広める者として、偽教師と争ってきました。エリヤ、エレミヤ、パウロは、人々を神の言葉から遠ざけようとする人々に断固として勇敢に反対しました。正しい宗教的信仰を重要ではないと考える寛容さは、真理の神聖な擁護者たちに好意を寄せませんでした。

聖書のあいまいで空想的な解釈と、キリスト教世界に見られる宗教信仰に関する多くの矛盾した理論は、私たちの偉大な敵の仕業であり、人々の心を混乱させて真実を識別できなくさせています。そして、キリスト教世界の教会間に存在する不和や分裂は、主に、好みの理論を支持するために聖書を歪曲するという一般的な慣習によるものです。多くの人は、神の御心を知るために謙虚な心で神の言葉を注意深く研究する代わりに、何か特別な、あるいはユニークなものを発見することだけを求めます。

誤った教義や反キリスト教の実践を支持するために、文脈から切り離された聖書の一節に固執する人もいます。おそらく、残りの部分が示されていれば全く逆の意味になるのに、自分たちの見解の証拠として半分の節を引用します。蛇のような洞察力を持った彼らは、肉欲に合わせて用意された支離滅裂な発言の背後に自らを立てこもった。多くの人はこのように意図的に神の言葉を曲げます。また、活発な想像力の持ち主で、聖典の図や象徴に固執し、自分の想像力に従って解釈し、聖書の証言を自分の解釈者としてほとんど考慮せず、自分の空想を聖書の教えとして提示する人もいます。..

聖書の研究が祈りなしに、また従順で謙虚な精神なしに行われるときは常に、最も明瞭で最も単純な聖句も、最も難しい聖句も、その真の意味から歪められてしまいます。教皇の指導者たちは、聖書の中から自らの目的に最も適した部分を選択し、自分たちが適切だと思うように解釈して国民に提示する一方で、聖書を研究し、その神聖な真理を自ら理解する特権を国民に否定しています。

完全な聖書は書かれたままの形で人々に与えられるべきです。結局のところ、彼らにとっては、あまりにも残酷に歪曲された聖書の教えを受けるよりは、聖書の教えを受けないほうが良いでしょう。

聖書は、創造主の意志を知りたいと願うすべての人へのガイドとなることを目的としていました。神は人間に確かな預言の言葉を与えられました。天使たちと

キリストご自身が、間もなく起こるはずの事柄をダニエルとヨハネに知らせるために来られました。私たちの救いに関係するこれらの重要な事柄は、謎に包まれたままではありません。それらは、真実を求める誠実な探求者を困惑させたり欺いたりするような方法で明らかにされたものではありません。主は預言者ハバククを通して、「幻を書き、はっきりと読めるようにしなさい…そうすれば、通り過ぎる人がそれを読めるようになります。」と言われました。(ハブ 2:2)神の言葉は、悔い改めた心でそれを学ぶすべての人にとって明らかです。すべての真に誠実な魂は真理の光に来るでしょう。「光は義人に蒔かれる。」(詩 97) : 11) そして、教会員が隠された宝のように真理を熱心に探求しない限り、いかなる教会も神聖さにおいて進歩することはできません。

自由を叫ぶと、人々は敵の欺瞞に盲目になりますが、一方で彼は目的の達成に向けて絶えず着実に努力していることに気づきます。神が人間の思惑によって聖書を超えることに成功すると、神の律法は脇に置かれ、教会は罪から自由であると宣言しているにもかかわらず、自らが罪の束縛の下にあることに気づきます。

多くの人にとって、科学研究は呪いになっています。神は、科学的、芸術的な発見において、世界に光の洪水が降り注ぐことを許可されました。しかし、どんなに優れた知性を持った人でも、研究において神の言葉に導かれなければ、科学と黙示録の関係を調査しようとする試みに当惑するでしょう。

人間の知識は、物質的なものと精神的なものの両方において、部分的で不完全です。したがって、多くの人々は自分の科学的意見と聖書の記述を調和させることができません。多くの人々は単なる理論や推測を科学的事実として受け入れ、神の言葉は「誤ったいわゆる科学」の教えによって試されなければならないと感じています。創造主とその作品はあなたの理解を超えています。そして、それらを自然法則で説明できないため、聖書の歴史は信頼できないと見なされています。旧約聖書と新約聖書の記録の信頼性を疑う人々は、さらに一歩進んで神の存在を疑い、無限の力を自然に帰することがよくあります。錨を手放した後、彼らは不信仰の岩礁に衝突することになります。

このようにして多くの人々が信仰から外れ、悪魔に誘惑されてしまいます。人間は創造者よりも賢くなろうと努力してきました。人間の哲学は、永遠の時代を経ても決して明かされることのない謎を解明し、説明しようと試みてきました。もし人々が、神ご自身とその目的に関して神が知らされたことを調べて理解すれば、エホバの栄光、威厳、力についてのそのような見方を獲得し、自分の有限性を意識し、明らかにされたことに満足するであろう。彼ら自身と彼らの子供たち。

神が知らされていないこと、また神が私たちに理解することを意図していないことについて人々の心を探求させ、推測させ続けるのは、サタンの欺瞞の最高傑作である。こうしてルシファーは天国での居場所を失ってしまったのです。彼は神の目的の秘密のすべてが彼に委ねられていなかったため、不満を抱いていました。そして彼は、自分に割り当てられた高い地位にある自分自身の仕事に関して明らかにされたことを完全に無視した。彼は配下の天使たちにも同じ不満を引き起こし、天使たちの滅亡を引き起こした。今、墮落した大天使は人々の心を同じ精神で満たそうとしており、また人々が神の直接の戒めを無視するように仕向けている。

聖書の明確で鋭い真理を受け入れようとしない人は、良心を落ち着かせるために楽しい寓話を探し続けます。提示された教義が霊的でなく、自己犠牲的で、屈辱的なものであればあるほど、その教義が受け取られる好意は大きくなるでしょう。これらの人々は知的能力を低下させ、

彼らの肉欲に奉仕します。魂の悔い改めと神の導きを求める熱烈な祈りをもって聖書を調べるには、彼ら自身の意味で賢すぎるので、欺瞞に対して防御することができない状態に置かれています。サタンは心の願いをかなえる用意ができており、真実の代わりに自分の欺瞞を提示します。このようにして教皇制は人々の精神に対する支配権を獲得し、十字架を伴う真理を拒否することで、プロテスタントも同じ道をたどっているのです。世と対立しないように神の御言葉を無視して方便や政治を学ぶ者は皆、宗教的真理の代わりに嘆かわしい異端を受けることになるでしょう。

意図的に真実を拒否する人々には、考えられるあらゆる形式の誤りが受け入れられます。一つの間違いを恐怖の目で見ると、別の間違いを簡単に受け入れるでしょう。使徒パウロは、「救われるための真理の愛を受け入れられなかった」人々について、次のように宣言しています。彼らは真理を信じず、不法を喜んでいたので」（IIテサロニケ2:10-12）。このような警告が目の前にあるので、私たちはどのような教義を受け取るかについて警戒する義務があります。

この偉大な詐欺師の最も成功した活動の中には、スピリチュアリズムのもっともらしい教えと偽りの驚異があります。光の天使に扮した彼は、予想外の場所に網を広げます。もし人々が、それを理解できるよう熱心に祈りながら神の書を研究するならば、偽りの教義を受け入れるために闇の中に取り残されることはないでしょう。しかし、彼らは真実を拒否するため、欺瞞の餌食になってしまいます。

もう一つの重大な誤りは、キリストがこの世に出現する前には存在しなかったと主張し、キリストの神性を否定する教義です。この理論は、聖書を信じていると公言する非常に多くの層に好意的に受け入れられています。しかし、この理論は、御父との関係、神の神性、および救い主の以前の存在に関する救い主の明確な発言と矛盾しています。聖書を最も不合理に曲解しない限り、それを受け入れることはできません。これは、救いの働きに対する人間の概念を低下させるだけでなく、神の啓示としての聖書への信仰を弱体化させます。これにより、危険性が高まると同時に、立ち向かうのがより難しくなります。もし人々がキリストの神性に関する靈感による聖書の証言を拒否するならば、この点について彼らと議論するのは無駄である。なぜなら、どんなに決定的な議論があったとしても、彼らを納得させることはできなかったからである。「生来の人は、神の御霊の事柄を理解できません。なぜなら、それらは彼にとって愚かに見えるからです。そして、それらは霊的に識別されているので、彼はそれらを理解することができません。」（Iコリント 2:14）。この誤りを擁護する人は、キリストの性格や使命、あるいは人間の救いのための神の偉大な計画について真の概念を持つことはできません。

さらにもう一つの微妙で悪質な間違いは、サタンは個人的な存在として存在しないという信念が急速に広まっていることです。この名前は聖書の中で単に人間の邪悪な考えや欲望を表すために使われているということです。

キリストの再臨とは死の際に各個人に臨在することであるという教えが、大衆の説教壇から広く反響を呼んでいるが、これは天の雲に乗って個人的に臨臨されることから人々の心をそらすための狡猾な装置である。サタンは何年もの間、「見よ、彼は家の中にいる」（マタイ 24:23-26）と言い続けてきました。そしてこの嘘を受け入れたために多くの魂が失われました。

世の知恵は、祈りは必須ではないと教えています。科学者たちは、祈りに本当の答えなどありえないと断言します。これは法律違反であり、奇跡であり、奇跡など存在しないのです。彼らによれば、宇宙は一定の法則によって支配されており、神ご自身はこれらの法則に反することは何も行いません。

したがって、それらはあたかも神の法則の運用が神の自由を排除するかのようになり、神がご自身の法則に拘束されているということを示しています。そのような教えは証言に反する

聖書の。キリストとその使徒たちは奇跡を行ったのではないのでしょうか？同じ憐れみ深い救い主が今日も生きておられ、人々の間を目に見えて歩まれたときと同じように信仰の祈りを喜んで聞いてくださいます。自然は超自然と協力します。私たちが求めなければ神が与えてくれなかったものを、信仰の祈りに応えて私たちに与えるという神の計画の一部です。

キリスト教世界の教会の間にはびこっている誤った教義や想像上の考えが数え切れないほどあります。神の言葉によって修正された目印の1つを取り除いた場合の悪い結果を見積もることは不可能です。あえてこれを行おうとする人で、たった1つの真実を拒否するだけで終わる人はほとんどいません。大多数は真実の不信者になるまで、真理の原則を次々と脇に置き続けます。

通俗神学の誤りは、そうでなければ聖書を信じていたかもしれない多くの魂を懐疑的にさせてきました。彼らにとって、正義、慈悲、博愛の感覚を揺るがす教義を受け入れることは不可能です。そして、これらが聖書の教えとして提示されると、彼らはそれを神の言葉として受け取ることを拒否します。

そしてこれがサタンが達成しようとしている意図です。神と神の言葉への信頼を破壊すること以上に彼が望んでいることはありません。サタンは疑う者の大軍の先頭に立ち、魂を自分の仲間に取り入れるために全力を尽くして働いています。疑うことが流行しつつある。神の言葉が罪を非難し、非難しているという理由で、その著者と同じ理由で、神の言葉を疑いの目で見ると階級が大勢います。彼の要求に従わない人々は、彼の権威を破壊しようと努めます。彼らは聖書を読んだり、神聖な説教台から説明されるその教えを聞いたりするのは、単に自分自身や説教のあら探しをするためです。

義務を怠ったことを正当化したり言い訳したりするために不信者になる人も少なくありません。プライドや怠惰から懐疑的な原則を採用する人もいます。自己満足を愛するあまり、名誉に値することを達成することに目を向けることができず、それにはコミットメントと自己否定が必要であり、聖書の批判を通じて優れた知恵を持っているという評判を自分たちで確保しようとします。聖書には、神の知恵によって啓発されていない有限の精神では理解できないことがたくさんあります。そして彼らは機会を見つけてそれを批判します。それが美德だと思っている人も多いようです。

自分を不信、懐疑、不貞の側に置いてください。しかし、誠実さを装って、これらの人々が自信とプライドによって動かされていることは明らかです。多くの人は、聖書の中に他の人の心を混乱させるような事柄を見つけ喜んで喜んでいます。単純に論争が好きで、最初は批判したり議論したりする人もいます。彼らは自分たちが捕食者の罠に陥っていることを理解していません。

しかし、不信感を公然と表明した彼らは、自分たちの立場を維持しなければならないと感じている。

こうして彼らは邪悪な者たちと団結し、楽園の扉を自ら閉ざしてしまうのです。

神は御言葉の中でご自身の神性を示す十分な証拠を与られています。私たちの救いに関する偉大な真理が明確に示されています。心から神を求めるすべての人に約束されている聖霊の助けによって、すべての人はこれらの真理を自分で理解することができます。神は人間に信仰を置くための強い基盤を与えてくださいました。

しかし、人間の有限な心は、無限の計画と目的を完全に理解することはできません。私たちは調査によって神を発見することは決してできません。私たちは傲慢な手で、主がその威厳を覆っているカーテンを持ち上げようとはなりません。使徒は「神の裁きは何と調べ難いものであり、神のやり方は何と不可解であることだろう！」と叫んでいます。（ロマ 11:33）。私たちは神の私たちに對する扱いや、神が行動する動機を理解できるので、無限の力と組み合わされた神の無限の愛と慈悲を識別することができます。私たちの天の父

神は知恵と正義をもってすべてのことを命じており、私たちは不満や不信感を抱いてはならず、敬虔な服従をもってひれ伏さなければなりません。神は私たちに神の目的の多くを明らかにし、それが私たちの益となることだけでなく、私たちが全能の手と愛に満ちた心に信頼しなければならないことを明らかにしてください。

神は私たちに信仰の証拠を十分に与えてくださいましたが、不信仰の言い訳をすべて取り除いたことはありません。疑問を解消するためのフックを探している人なら誰でも、それを見つけるでしょう。そして、すべての異論が取り除かれ、疑いの余地がなくなるまで神の言葉を受け入れて従うことを拒否する人々は、決して明るみになることはありません。

神への不信感は、心が新しくなっていないことの自然な結果です。しかし、信仰は聖霊によって鼓舞され、培われてこそ栄えます。断固とした努力がなければ、誰でも信仰を強くすることはできません。不信仰は励まされることでさらに強くなり、人々が信仰を維持するために神が与えてくださった証拠にこだわるのではなく、疑問を抱き、悪口を言うのを自分に許すなら、自分たちの疑いがさらに確認されることに気づくでしょう。

しかし、神の約束を疑い、確実性を信じない人は、神の恵みや、彼らは神の名誉を汚しているのです。そしてその影響力は、他の人をキリストに引き寄せるのではなく、キリストから遠ざける傾向があります。これらは、暗い枝を大きく伸ばし、他の植物に日光が当たらないようにする非生産的な木であり、極寒の日陰で萎縮させて死なせてください。これらの人々の業績は、彼らに対する頑固な証人として現れるでしょう。彼らは疑いと懐疑の種を蒔き、確実な収穫をもたらすでしょう。

疑いから自由になりたいと心から願うすべての人がたどるべき道はただ一つ。理解できないことについて質問したり、からかったりするのではなく、すでに自分たちを照らしている光に耳を傾けさせてください。そうすれば、彼らはより大きな光を受けられるでしょう。すでに理解している義務をすべて果たせば、まだ疑問が残っている義務も理解して果たせるようになるでしょう。

サタンは、真理に非常によく似た偽物を提示して、騙されることをいとわない人々、真理が要求する自己否定と犠牲から逃れたいと願う人々を欺くかもしれません。しかし、どんな犠牲を払ってでも真実を知りたいと心から願う一人の魂を彼の力の下に留めておくことは、彼には不可能です。キリストは真理であり、「世に来るすべての人に光を与える光」(ヨハネ1:9)です。真理の御霊は、人間をすべての真理に導くために送られました。そして神の子の権威によって、「探みなさい。そうすれば見つかるだろう」と宣言されています。「もし誰かが神のご意志を行いたいと思うなら、同じ教義によって、それが神からのものであるかが分かるでしょう。」(マタイ 7:7; ヨハネ 7:17)。

キリストの追隨者たちは、サタンとその軍勢が彼らに対して働いている陰謀についてほとんど知りません。しかし、天に座しておられる神は、これらすべての戦略がその深遠な計画の実現に向けられることを保証します。主がご自分の民が激しい誘惑の試練にさらされることを許されるのは、主が民の苦しみや苦悩を喜んでからではなく、この過程が民の最終的な勝利に不可欠であるからです。ご自身の栄光と一致して、イエスは彼らを誘惑から守ることはできませんでした。なぜなら、試練の目的は、悪の誘惑のすべてに抵抗できるように彼らを備えることだからです。

悪人も悪魔も、悔い改め、従順な心をもって罪を告白し捨て、信仰をもって神の約束を主張するならば、神の働きを妨げたり、神の民から神の臨在を隠したりすることはできない。あらゆる誘惑、あらゆる反対の影響は、公然であろうと秘密であろうと、「武力や暴力によってではなく、わたしの霊によってうまく克服できる、と万軍の主は言われる。」

(ザカ 4:6)。

「主の目は義人たちに注がれ、主の耳は彼らの祈りに耳を傾ける…そして、あなたが善のために熱心であるなら、あなたを害する者は誰ですか？」（ペテロ第一 3:12,13）。豊かな報酬の約束に誘惑されたバラムがイスラエルに呪文を唱え、主への犠牲によって民に呪いを呼び下ろそうとしたとき、主の御霊が彼が宣告しようとしていた悪を阻止し、バラムは強制された。「神が呪われないものをどうやって呪えばいいのか？そして主が憎まれないのにどうやって憎むことができようか？」と言うために。「私の魂が義人の死と同じように死にますように、そして私の最後があなたのものと同じになりますように。」再びいけにえがささげられたとき、邪悪な預言者はこう宣言しました。彼はイスラエルに不正を見なかったし、ヤコブに邪悪も見なかった。彼の神、主は彼と共におられ、彼の中におられ、王の叫び声が彼らの間に聞こえます。「ヤコブに対して力はなく、イスラエルに対して占いも何も用がないからである。」

このとき、ヤコブとイスラエルについて、「神は何ということをしたのだ！」と言われるでしょう。」（民数記 23:8,10,21,23）さらに 3 番目の祭壇が建てられ、再びバラムは呪いを唱えようしました。預言者のくちびるで、神の御霊は消極的になった人々の繁栄を宣言し、彼らの敵の愚かさや邪悪を叱責しました。「あなたを祝福する者は幸いである、あなたを呪う者は呪われる」（ヌム） . 24:9）。

当時、イスラエルの民は神に忠実であり、神の律法に従い続ける限り、地上の力も地獄の力も彼らに勝つことはできませんでした。しかし、バラムは神の民に告げることが許されていなかった呪いを、彼らを誘惑して罪に陥らせることによって、ついに彼らにもたらすことに成功しました。神の戒めに背くことで、彼らは神から離れ、破壊者の力を感じるようになりました。

サタンは、キリストのうちに残っている最も弱い魂でも闇の軍勢に立ち向かうのに十分であること、そしてもし彼が公然と姿を現したなら、遭遇して敗北するであろうことをよく知っています。したがって、彼は十字架の兵士たちを彼らの強力な要塞から排除しようと努め、同時に彼の領土に侵入するすべてのものを破壊する準備ができて軍隊とともに待ち構えています。神を謙虚に信頼し、神のすべての戒めに従うことによつてのみ、私たちは安全になれるのです。

男性も女性も、祈りなしでは一日や一時間は安全ではありません。

特に御言葉を理解するための知恵を主に求めるべきです。誘惑者の欺瞞と、それらにうまく抵抗する手段が明らかになります。サタンは聖書を引用するのが得意で、聖書の箇所には独自の解釈を与えて、私たちをつまづかせようとしています。私たちは謙虚な心で聖書を研究し、神への服従を決して忘れてはいけません。

わたしたちは常にサタンの罠から身を守る必要がありますが、信仰をもって絶えず「誘惑に陥らないようにしてください」と祈らなければなりません。

第33章

最初の大きな間違い

人類の歴史の最も早い時期に、サタンは私たちの種族を欺こうと努力を始めました。天で反乱を扇動した彼は、神の政府に対する闘いにおいて、地上の住民を自分と団結させるよう導きたいと願っていました。アダムとエバは神の律法に従って完全に幸せでした。そしてこの事実は、神の律法は抑圧的で神の被造物の利益に反するというサタンが天で行った主張に対する一貫した証拠でした。さらに、罪のない夫婦のために用意された美しい住居を見て、サタンの羨望が目覚めました。彼は彼らを滅ぼすことを決意し、一度彼らを神から引き離し、彼らを神の支配下に置き、いと高き者に対抗して地球を所有し、そこに神の王国を確立しようとしていました。

もしサタンが本当の姿を現していたら、即座に撃退されただろう。なぜなら、アダムとエバはこの危険な敵に対して警告されていたからだ。しかしサタンは、より効果的に目的を達成するために、自分の目的を隠して影で働いた。当時魅力的な姿をした生き物だった蛇を媒介として、彼はエバにこう言いました。「神が『園のどの木も食べてはならない』と言われたということでしょうか。」（創世記 3:1）。もし彼女が誘惑者との口論を拒否していたら、彼女は無事だったでしょう。しかし、彼女はあえて彼と議論しようとしたが、彼の欺瞞の犠牲者となった。こうやっていつも負けてしまう人が多いのです。彼らは神の要求に関して疑い、議論し、神の命令に従う代わりに、サタンの欺瞞を隠すだけの人間の理論を受け入れます。

「女は彼に言った、『園の木の実を食べてもよい。しかし、園の真ん中にある木の実については、神は言われた、あなたがたもそれを食べてはならない、あなたがたも食べてはならない』死なないように触ってください。すると蛇は女に「あなたは死なない」と言った。それを食べると、あなたの目が開かれ、神と同じように善悪がわかるようになるということを神はご存じだからです」（創世記 3:2-5）。彼は、彼らは神のようになり、以前よりも優れた知恵を持ち、より高い存在状態に入ることができるだろうと宣言しました。イブは誘惑に負けた。そしてその影響によってアダムは罪を犯しました。彼らは、神が実際に言ったことは本意ではないという蛇の言葉を受け入れました。彼らは創造者を信頼せず、神が自分たちの自由を制限しており、神の律法を破ることで偉大な知恵と高揚感を得ることができると想像しました。

しかし、アダムは罪を犯した後、「それを食べる日には必ず死ぬだろう」という言葉の意味をどう考えたでしょうか。サタンが彼に信じ込ませたように、それらが、自分がより高貴な存在状態に導かれようとしていることを意味しているのを彼は見たのだろうか？そうすれば、違犯によって得られるものは確かに大きく、サタンは自分が種族にとって恩人であることが証明されただろう。しかし、アダムは、これが神の宣言の意味ではないことを証明しました。神は、罪に対する罰として、人は自分が連れ去られた土に戻らなければならないと宣言されました。「あなたは塵である、そしてあなたは塵に帰るであろう」（創世記3:19）。「あなたの目は開かれる」というサタンの言葉は、この意味でのみ真実であることが判明しました。アダムとエバが神に従わなかった後、彼らの目は彼らの愚かさを識別するために開かれました。彼らは悪を知っており、違反の苦い果実を味わいました。

エデンの真ん中には生命の木が生えており、その果実には生命を永続させる力がありました。もしアダムが神に従順であったなら、彼はこの木に自由にアクセスする権利があり、永遠に生きていたでしょう。しかし、彼が罪を犯したとき、彼は命の木にあずかることを奪われ、死にさらされることになりました。「あなたは塵である、そしてあなたは塵に帰るだろう」という神の言葉は、生命の完全な絶滅を示しています。

従順を条件として人間に約束された不死は、罪によって失われました。アダムは自分が持っているものを子孫に伝えることができませんでした。そして、もし神が御子の犠牲によって不死を彼らの手の届くところに置かれていなければ、墮落した人類に希望はなかったであろう。「すべての人が罪を犯したので、このように死がすべての人に移った」一方で、キリストは「福音を通して命と不死を明らかにされました」（ローマ人への手紙5:12、IIテモテ1:10）。そしてキリストを通してのみ不死を得ることができます。イエスはこう言われました。「御子を信じる者は永遠の命を持っています。しかし、御子に反抗し続ける者はいのちを見ることができないであろう」（ヨハネ 3:36）。条件を満たせば、誰もがこの計り知れない祝福を得ることができます。「善を行い続け、栄光と名誉と不滅を求める者」は皆、永遠の命を得るでしょう（ローマ人への手紙2:7）。

不従順のアダムに永遠の命を約束したのは、偉大な詐欺師だけでした。そしてエデンのイブへの蛇の宣言「あなたは決して死なない」それは魂の不滅について説かれた最初の説教でした。そして、サタンの権威のみに基づいたこの同じ宣言がキリスト教世界の説教壇から響き渡り、人類の最初の両親が受け取ったのと同じように、人類の大多数が容易に受け入れました。神の宣告に対して：「罪を犯した魂は死ぬ」

(エゼキエル 18:20)、次の意味が与えられています。罪を犯した魂は死ぬことはなく、永遠に生きます。私たちは、人間がサタンの言葉に関してあれほど信じ込み、神の言葉に関してこれほど信じられない奇妙な頑固さを感じずにはいられません。

もし人間が墮落した後、命の木に自由にアクセスできたなら、人間は永遠に生き、したがって罪は不滅化されたであろう。しかし、ケルブと炎の剣が「命の木への道」(創世記3:24)を守っており、アダムの家族の誰もこの障壁を通過して命の実を食べることを許されていません。したがって、不滅の罪人は存在しません。

しかし、墮落後、サタンは天使たちに、人間の自然不死に対する信仰を教え込むために特別な努力をするよう命じた。そして、人々にこの誤りを受け入れさせたので、罪人は永遠の悲惨な暮らしをするだろうという結論に人々を導くべきである。今、闇の君主はその代理人を通して働いて、神を復讐の暴君として提示し、神に気に入らない者たちをすべて地獄に投げ込み、永遠に神の怒りの影響を感じさせると宣言している。そして、彼らが言いようのない苦しみに苦しみ、永遠の炎の中で悶えている間、彼らの創造主は満足そうに彼らを見つめているのです。

こうして、大敵は人類の創造者と恩人を自らの属性で逆転させます。残虐行為は悪魔的です。神は愛である;そして、最初の偉大な反逆者によって罪が持ち込まれるまで、神が創造したものはすべて、純粋で、神聖で、愛らしいものでした。サタン自身は人間を誘惑して罪を犯させ、可能であれば人間を滅ぼす敵です。自分が犠牲者であることを確信すると、彼は自分が引き起こした破滅に歓喜する。もし許されるなら、彼は全人類を自らの網の中に閉じ込めるだろう。神の力の介入がなかったら、アダムの息子や娘は誰も逃げられなかったでしょう。

神は私たちの最初の両親を克服し、創造主に対する彼らの信頼を揺るがし、神の政府の知恵と神の法の正義に疑念を抱かせたように、今日も人間を克服しようとしています。サタンとその使者は、自分たちの邪悪さと反逆を正当化するために、神を自分たちよりも悪い者として表現します。おおきい

欺瞞者は、自分の恐ろしい残酷な性格を天の父のせいになしようと努め、自分がそのような不当な政府に服従しないために、天から追放されてひどく傷ついた者であるかのように見せかけようとしている。神はエホバの厳しい法令によって課せられた奴隷制とは対照的に、ご自分の優しい政府のもとで享受できる自由を世界に示しています。こうして彼は魂を神との契約から遠ざけることに成功した。

邪悪な死者は死後、永遠に燃える地獄で火と硫黄で責め苦しみに遭い、短い地上生活の罪のために苦しみを受けなければならないという教義は、あらゆる愛と慈悲の感情、さらには私たちの正義の感情にとってもどれほど不快なものであるか。神が生きている限り。しかし、この教義は一般に広く教えられており、今でもキリスト教世界の多くの信条に組み込まれています。ある学識ある神学博士はこう述べています。「地獄の苦しみの光景は、聖徒たちの喜びを永遠に増大させるでしょう。自分たちと同じ性質を持ち、同じ環境で生まれ、悲惨な状況に陥っている他の存在が、自分たちはこれほど異なる状況にあるのを見るとき、彼らは自分たちの幸福の享受をより一層感じるだろう。」別の人は次の言葉を使いました。「非難の判決が怒りの対象に対して永遠に執行される一方で、彼らの苦痛の煙は慈悲の対象である人々の目の前で永遠に立ち上るであろう。彼らは彼らに同情する代わりに、叫びます :アーメン !ハレルヤ !主を礼拝しましょう！」

神の言葉のどこにそのような教えが見られるのでしょうか。天国で救われた人には、哀れみや同情の感情がまったくなく、人間性のほんの少しの表れさえないのでしょくか？これらの感情は、無神経な人の無関心や野蛮人の残忍さによって置き換えられるのでしょうか？いいえ、いいえ、神の書の教えはそのようなものではありません。上で述べた意見は教養のある正直な人々からのものかもしれませんが、彼らはサタンの詭弁に騙されます。彼は彼らに、聖書の明確な表現の特徴を誤らせるよう導き、その言語に、創造主ではなく彼自身に属する苦味と悪性の色を与えます。「わたしが生きているとき、わたしは悪人の死を喜ばず、悪人がその道から離れて生きることを喜ぶ、と主なる神は言われる。「立ち返れ、邪悪な道から立ち返れ、イスラエルの家よ、なぜ死ななければならないのか？」（エゼキエル 33:11）。

もし私たちが、神が絶え間ない拷問を目撃することに喜びを感じていると認めたら、神は何を得るのでしょうか。神が地獄の炎の中に留め置かれている苦しむ生き物たちのうめき声、痛みの叫び、非難の声を誰が喜ぶのでしょうか？これらの恐ろしい音は、無限の愛の耳に音楽となるのでしょうか？邪悪な人々に終わりのない悲惨を与えることは、宇宙の平和と秩序を破壊する悪としての罪に対する神の憎しみを示すべきであると主張されています。ああ、ひどい冒瀆だ！あたかも神の罪に対する憎しみが、神が罪を永続させる理由であるかのように。これらの神学者の教えによれば、慈悲を期待せずに拷問を続けると、不幸な犠牲者は気が狂い、その怒りを呪いや冒瀆で表現することで罪の重荷が増大するからである。神の栄光は、このように終わりのない時代を通して罪が増え続け、永続することによって増大するわけではありません。

永遠の責め苦という異端によってもたらされた悪は、人間の知力では計り知れません。聖書の宗教は、愛と優しさ、思いやりに満ちていますが、迷信によって暗くなり、恐怖で覆われています。サタンが神の性格をどのような偽りの色で描いたかを考えるとき、私たちの慈悲深い創造者が信じられず、恐れられ、さらには嫌われていることに不思議に思うのでしょうか。広められてきた神に関する衝撃的な考え

説教壇からの教えから世界について知ること、何千人、それ以上、何百万人も懐疑論者や異教徒が生まれました。

永遠の責め苦の理論は、バビロンの忌まわしいワインを構成する誤った教義の一つであり、バビロンはそれをすべての国民に飲ませている」(黙示録14:8,17:2)。キリストの奉仕者たちがこの異端を受け入れ、神聖な説教壇からそれを宣言できたということは、本当に謎です。彼らも偽りの安息日を受け取ったように、ローマからそれを受け取りますように。それが偉大で善良な人々によって教えられたことは確かです。しかし、この問題における光は、私たちに与えられたように彼らには与えられていませんでした。彼らはその時代に輝いていた光に対してのみ責任を負っていました。私たちは現代に輝く人のために答えなければなりません。もし私たちが神の言葉の証しに背を向け、先祖が教えたからといって偽りの教義を受け入れるなら、私たちはバビロンに宣告された有罪判決に該当し、バビロンの忌まわしいワインを飲んでいることとなります。

永遠の責め苦の教義に反感を抱いている多くの階級は、反対の誤りに向けられています。彼らは、聖書が神を愛と慈悲の存在として表していることを理解しており、神がその被造物を永遠に燃える地獄の炎に投げ込むとは信じられません。しかし、魂は本来不滅であるという信念を受け入れ、最終的には全人類が救われると結論付ける以外に選択肢はないと考えています。多くの人は、聖書の脅しは人々を怖がらせて従わせることだけが目的であり、文字通りに実現する必要があるものではないと考えています。このように、罪人は神の要求を無視し、最終的に神の好意を受け入れられることを望みながら、利己的な快楽に生きるかもしれません。そのような教義は、神の憐れみを前提としていますが、神の正義については無知で、肉の心を喜ばせ、悪人の不法行為を奨励します。

普遍的な救いを信じる人たちが、自分たちの魂を破滅させる教義を支持するために聖書の意味をどのように捻じ曲げているかを示すには、彼ら自身の発言を引用するだけです。事故で即死した若い無神論者の葬儀で、普遍主義者の牧師は、ダビデに関する聖書の言葉「彼は死んだアムノンのことで自分を慰めていた」(サムエル第二13:39)という言葉を選択しました。

「私はよく尋ねられます。罪を犯したまま世を去り、おそらく酩酊状態で死ぬか、衣服についての犯罪の血痕を洗い流さずに死ぬ人々の運命はどのようなのですか、」と講演者は言いました。あるいは、職業についてことも、宗教の経験もなかったこの若者がどうやって亡くなったのか。私たちは聖書に満足しましょう。聖書の答えが途方もない問題を解決してくれるでしょう。アムノンは非常に罪深い人でした。彼は悔い改めず、酔ってしまい、酔った勢いで殺された。ダビデは神の預言者でしたから、アムノンが来るべき世界で善か悪になるかを知っていたに違いありません。あなたの心の表情はどうでしたか? 「ダビデ王の魂はアブサロムに会うことを望んだ。彼はアムノンの死を見て慰められたからである。」

「これらの言葉から何を推測すべきでしょうか? 終わりのない苦しみは彼の宗教的信念の一部ではなかったのではないのでしょうか? したがって、私たちはそれを理解しています、そしてここに、究極の純粋さと平和と普遍性に関する最も同意的で、最も啓発的で、最も慈悲深い仮説を支持する勝利の議論を見つけます。彼は息子が死んだのを見て慰められた。その理由は? なぜなら、預言の目によって、彼は輝かしい未来を見据えることができ、息子があらゆる誘惑から遠く離れ、捕らわれの身から解放され、罪の腐敗から清められ、十分に清められ啓発された後、教会の集会に認められるのを見ることができたからです。精神が高揚し、幸せになります。彼の唯一の慰めは、愛する息子が罪と苦みの現状から解放されて、聖なるものの最も崇高な息吹が響く場所へ行ったことだった。

霊が彼の暗い魂に注がれるだろう。そこでは彼の心は天の知恵と不滅の愛の甘いエクスタシーに開かれ、こうして永遠の遺産の休息と交わりを楽しむための神聖な性質を備えることになるだろう。

「これらの考えの中で、私たちは天国の救いは私たちがこの世で何ができるかには決して依存しないと信じていることを暗示しています。現在の心変わりも、現在の信念も、現在の宗教の職業ありません。」

このようにして、キリストの奉仕者と称する者は、エデンで蛇がついた「あなたは死なない」という嘘を繰り返します。「それを食べたその日、あなたの目は開かれ、あなたは神のようになるでしょう。」彼は、最も卑劣な罪人、つまり人殺し、泥棒、姦通者は死後に不滅の栄光に入る準備ができていると宣言します。

この聖書の変曲者はどこから結論を導き出すのでしょうか？摂理の摂理に対するダビデの服従を表す簡単な文から。彼の魂は「アブサロムに会うことを望んだ。彼は死んだアムノンのことで慰められていたからである」。この悲しみの深刻さはやがて放棄され、彼の思考は死から生きている息子へと向き、自分の犯罪に対する正当な罰への恐怖から自ら追放された。これは、近親相姦で酒に酔ったアムノンが死ぬとすぐに至福の住処に連れて行かれ、そこで清められ、汚れのない天使たちの社会のために準備されたという証拠です！確かに、肉の心を満足させるのに非常に適した楽しい寓話です。それはサタン自身の教義であり、事実上効果を発揮します。このような指導に不法行為が蔓延していることに驚くでしょうか。

この偽教師の行動は、他の多くの教師の行動を例証しています。聖書の言葉のうち、文脈から切り離されている言葉はほとんどありませんが、多くの場合、与えられた解釈とは正反対の意味を示すことになります。これらの切り離された文章は曲解されており、神の言葉に何の根拠もない教義を証明するために使用されています。大酒飲みのアムノンが天国にいるという証拠として引用された証言は単なる推論であり、大酒飲みは神の国を受け継ぐことはないという聖書の明確で肯定的な記述と真っ向から矛盾しています(1コリント6:10)。このようにして、懐疑者、不信者、懐疑論者が真実を嘘に変えるのです。そして多くの人々が彼らの詭弁に騙され、肉の安全のゆりかごの中で眠りに落ちてしまった。

すべての人の魂が死の瞬間に直接天国に移るのが本当なら、私たちは命ではなく天国を待ち望むかもしれませんが。多くの人がこの信念に導かれて自分たちの存在に終止符を打ってきました。トラブル、当惑、失望を抱えているとき、人生の繊細な糸を断ち切り、永遠の世界の至福の中に身を投じることは簡単なことのように思えます。

神は御言葉の中で、律法の違反者を罰するという決定的な証拠を与えられました。神は憐れみ深いので罪人に正義を執行できないと自画自賛する人は、カルバリの十字架だけを見ればよいのです。汚れのない神の御子の死は、「罪の対価は死である」ことを証明しています。

(ローマ人への手紙 6:23)神の律法の違反はすべて、正当な報いを受けなければならないということです。汚れのないキリストは人間にとって罪となりました。彼は罪を犯し、父の顔を隠したという罪を負い、心は打ち砕かれ、命は絶たれました。そして、この犠牲は罪人が救われるために捧げられました。それ以外の方法では、人は罪の刑罰から解放されることはできません。そのような代償を払って得られる償いの参加者になることを拒否するすべての魂は、違反に対する罪と罰を自らの身で負わなければなりません。

聖書が邪悪な者たちに関して何を教えているか考えてみましょう。

普遍主義者は彼らを聖なる幸福な天使として天国に位置づけます。

「渇いている者には、わたしは命の水の泉から惜しみなく与えます」(黙示録 21 :6)。

この約束は渇いている人だけに与えられます。と感じている人以外は誰もいない

命の水が必要で、他のすべてを失ってでもそれを求める人は、それを受け取るでしょう。「勝利する者はこれらのものを受け継ぎ、私は彼の神となり、彼は私の子となる。」

(黙示録 21:7)。ここでも条件が指定されています。すべてのものを受け継ぐためには、私たちは罪に抵抗し、それを克服しなければなりません。

主は預言者イザヤを通して、「義人たちに、彼らはうまくいくと言いなさい」と宣言されました。

「邪悪な者たちには災いあれ！それは彼らにとって悪いことである、なぜなら彼らの手の働きに応じて報酬が支払われるからである」(イザヤ書3:10,11)。「たとえ罪人が百回悪を行い、その命が長くても、神を恐れる者にはうまくいくと私は確信しています。」と賢者は言います。しかし、悪者はうまくいかないだろう」(伝道の書 8:12,13)。そしてパウロは、罪人は「自分の行いに応じてすべての人に報いる神の正しい裁きが明らかにされる怒りの日のために」自分のために怒りを蓄えていると証言しています。「悪を行う者はみな、その魂全体に艱難と苦しみが降りかかる」(ローマ2:6,9)。

「失禁した者、汚れた者、貪欲な者、偶像礼拝者は、キリストと神の国に何の相続財産もありません」(エペソ5:5)。「すべての人との平和と聖さを追い求めなさい。それがなければ、誰も主を見ることができません。」(ヘブライ人への手紙 12:14)「主の戒めを守る人たちは幸いです。彼らは命の木に対する権利を持ち、門を通して町に入ることができます。しかし、外には犬、魔術師、汚れた者、殺人者、偶像崇拜者、そして偽りを愛し、それを実践するすべての人がいます。」(黙示録 22:14,15)。

神は人間に、ご自身の性格と罪への対処法についての説明を与えられました。「主よ、主なる神は、いつくしみ深く、慈悲深く、忍耐強く、憐れみと誠実に満ちておられます。千世代にわたって憐れみを保ち、不法と罪と罪を赦し、それでも罪を晴らさない者。」(出エジプト記 34:6 と 7)。「彼はすべての悪者を滅ぼします。」「違反者については、彼らは一人ずつ滅ぼされます。悪者の子孫は絶滅されるであろう。」(詩篇 145:20,37:38)。神の政府の力と権威は反乱を鎮圧するために利用されますが、その報復的な正義の現れはすべて、慈悲深く忍耐強く慈悲深い存在としての神の性質と完全に調和するでしょう。

神は誰かの意志や判断を強制しません。彼は奴隷的な従順を喜ばない。神は、被造物たちが神の手を離れて神を愛することを望んでおられます。なぜなら、神は愛に値するお方だからです。神は彼らが神に従うことを望んでいます。なぜなら、彼らは神の知恵、正義、慈悲を理性的に理解しているからです。そして、これらの特質について正しい概念を持っている人は皆、神の特質への賞賛によって神に惹かれるため、神を愛するでしょう。

私たちの救い主が教え、模範として示された優しさ、憐れみ、愛の原則は、神のご意志とご性質を転写したものです。キリストは、御父から受けたもの以外は何も教えなかった、と宣言されました。神の統治の原則は、「敵を愛しなさい」という救い主の教訓と完全に調和しています。神は宇宙の利益のため、さらには神の裁きが下される人々の利益のためにも、悪人に対して正義を執行します。もし神が政府の法律と神の人格の正義に従ってそれを行うことができれば、神は彼らを幸せにするでしょう。神は彼らをご自身の愛のタッチで包み込み、彼らに神の律法の知識を与え、神の慈悲の申し出をもって彼らに従います。しかし彼らは神の愛を軽蔑し、神の律法を無効にし、神の憐れみを拒否します。彼らは神の賜物を継続的に受け取りながら、与え主の名誉を傷つけることとなります。彼らが神を憎むのは、神が自分たちの罪を憎んでいることを知っているからです。主は長い間その倒錯に耐えられますが、彼の運命が決定される決定的な時が終りを迎えます。それで神はこれらの反逆者たちを自分の側に縛り付けるのでしょうか？神は彼らに神のご意志を行うよう強制するのでしょうか？

サタンを指導者として選び、サタンの力に支配されている人々は、神の御前に入る準備ができていません。

プライド、欺瞞、放縦さ、残酷さが彼の性格に根付いた。彼らはできますか

天国に入って、地上で軽蔑し憎んでいた人々と永遠に生きるのでしょうか？嘘をつく者にとって真実は決して心地よいものではなく、柔和は虚栄心やプライドを満足させるものではなく、純粋さは堕落した者には受け入れられず、利己的な愛は利己的な者には魅力的に映らない。地球の利己的な利益に完全に夢中になっている人々に、天はどのような喜びを与えてくれるのでしょうか？

神への反逆に生涯を費やしてきた人々が突然天国に運ばれ、常にそこに存在する崇高で神聖な完璧な状態、すべての魂が愛に満たされ、すべての顔が喜びで輝き、メロディアスな旋律の歓喜の音楽が高揚していくのを目撃できるだろうか。神と子羊に敬意を表し、玉座に座っておられる神の顔から救われた者たちに降り注ぐ絶え間ない光の光のために、神と真理と聖さに対する憎悪で心が満たされている人々が、この世界に加わることができるでしょうか。天の群衆が賛美の声に加わるのでしょうか？彼らは神と小羊の栄光に耐えることができるのでしょうか？ - いいえ、いいえ、彼らは天国の性格を形成できるように何年もの試練が与えられましたが、彼らは純粋さを愛するように心を訓練することはなく、天国の言語を学ぶこともありませんでした。そして今では手遅れです。神に対する反逆の人生により、彼らは天国にふさわしくなくなったのです。

その純粋さ、神聖さ、平和は彼らにとって苦痛であり、神の栄光は彼らにとって焼き尽くす火となるでしょう。彼らはその聖地から逃げ出すことを切望しているでしょう。彼らは滅びを喜んで歓迎するでしょう、それは彼らを贖うために死んだ神の顔から隠されるためです。悪人の運命は彼ら自身の選択によって決まります。彼を天国から排除することは彼自身の意志による行為であり、神の側の正義と慈悲の行為です。

洪水の水のように、大いなる日の炎は、悪人は不治であるという神の判決を告げ知らせるでしょう。彼らには神の権威に従う意志がありません。彼らは反乱として行使されてきた。そして人生が終わったとき、思考の流れを逆の方向に変えるには遅すぎます。違反から従順に、憎しみから愛に変えるには遅すぎます。

神は、人殺しのカインの命を救うことによって、罪人が邪悪のはびこる生活を続けた場合にどのような結果が生じるかを世界に示しました。カインの教えと模範の影響により、彼の子孫の多くが罪に導かれ、ついには「人間の邪悪が地上に蔓延し、その心のあらゆる思いが常に邪悪なものとなった」「地球は神の前に腐敗した」そして暴力に満ちていた」（創世記6:5と11）。

神は世界に対する憐れみとして、ノアの時代に邪悪な住民を一掃し、憐れみとしてソドムの堕落した住民を滅ぼしました。サタンの欺瞞の力によって、悪の働き者は同情と賞賛を獲得し、その結果、絶えず他の人々を反乱に引き込んでいます。カインとノアの時代も、アブラハムとロトの時代もそうでした。そしてそれは私たちの時代でもそうです。神が最終的に神の恵みを拒む者たちを滅ぼすのは、宇宙に対する慈悲によるものです。

「罪の対価は死ですが、神の賜物は私たちの主キリスト・イエスにある永遠の命なのです」（ローマ人への手紙6:23）。命は義人の相続分ですが、死は悪人の相続分です。モーセはイスラエルにこう宣言しました。「今日わたしが命と善、死と悪を提案するのを見てください」（申命記30:15）。これらの聖典が言及している死はアダムに宣告されたものではありません。全人類が彼の罪の罰に苦しむからです。永遠の命と対比されるのが「第二の死」です。

アダムの罪の結果、人類全体に死が移りました。誰もが平等に墓に降ります。そして、救いの計画の規定によって、すべての人が墓から呼び出されるのです。「正しい者も正しくない者も復活するであろう」（使徒24:15）。「アダムにあってすべての人が死ぬのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのです」（第一コリント15:22）。ただし、復活する2つのクラスには区別があります。「…墓の中にいる者は皆、彼の声を聞いて出て来るでしょう。善を行った者は命の復活に至るでしょう。悪を行った者には復活の裁きを与えられる」（ヨハネ5:28、29）。命の復活に「ふさわしいとみなされる」人は「祝福され、聖なる」のです。「これらに対して、第二の死は力を持たない」

（黙示録 20:6）。しかし、悔い改めと信仰によって赦しを確保しなかった人は、罪の罰、つまり「罪の報酬」を受けなければなりません。彼らは「自分の行いに応じて」期間や強度の異なる懲罰を受けることになるが、最終的には二度目の死で終わることになる。ご自身の正義と憐れみに従って、神が罪を犯した罪人を救うことは不可能であるため、神はその罪によってすでに損なわれ、ご自身が自分に価値がないことを示した存在をその人から奪います。靈感を受けたある作家は次のように述べています。あなたは自分の居場所を探しても見つからないだろう」（詩篇37:10）。そして別の者は、「彼らはまるで最初から存在していないかのようになるだろう」（オバデヤ書16章）と宣言しています。彼らは悪名にまみれ、絶望的な永遠の忘却の中に陥ってしまいます。

こうして罪は終わりを迎え、それによって生じたあらゆる呪いと破滅がもたらされるのです。詩編作者はこう述べています。「あなたは悪者を滅ぼし、彼らの名を永久に消し去ります。敵に関して言えば、彼らは終わった、彼らの破滅は永遠である。」

（詩篇 9:5 と 6）。ヨハネは黙示録で永遠を待ち望んでおり、いかなる不調和の音にも邪魔されずに普遍的な賛美のアンティフォニーを聞いています。天と地のすべての生き物が神に栄光を帰しているのが聞こえました（黙示録5:13）。そうすれば、神を冒瀆して終わりのない苦痛に悶える失われた魂は存在せず、選ばれた者の歌に叫び声を合わせて地獄で悶える存在も存在しないだろう。

自然不死の根本的な誤りの上に、死における良心の教義があり、この教義は永遠の責め苦の教義と同様、聖書の教え、理性の命令、人間の感情に反するものである。

一般に信じられているところによると、天国で救われた人たちは地上で起こるすべてのこと、特に自分たちが残した友人たちの命について知っています。しかし、死者にとって、生者の苦しみや苦しみを知り、愛する人たちが犯した罪を目撃し、彼らが人生のあらゆる苦しみ、失望、苦痛に耐えるのを見ることが、どうして喜びの源となり得るのでしょうか。

地球上の友人たちの上に留まる人々は、天の祝福をどれほど享受できるのでしょうか？そして、息が体から離れるとすぐに、悔い改めない者の魂は地獄の炎に投げ込まれるという信念は、何と絶対的に反抗的なことでしょうか。友人が何の準備もできずに墓に入るのを見た人たちは、何という苦しみの深淵に突き落とされ、永遠の呪いと罪に陥ることになるのでしょうか。

この苦痛に満ちた考えによって、多くの人が気が狂ってしまいました。聖書はこれらのことに関して何と述べていますか？デビッドは、人間は死んだら意識がなくなると断言します。「彼らの霊は消え去り、彼らは塵に帰ります。その日、彼らの計画はすべて滅びます。」（詩篇 146:4）ソロモンも同じ証言をしています。「生きている者は自分が死ぬことを知っていますが、死んだ者は何も知りません」。「彼らに対する愛も憎しみも妬みもすでに消え去った。彼らは永遠に、太陽の下で行われることには何の関与もしないのです。」「あなたが行ったところには、仕事も計画も知識も恵もまったくありません。」（伝道の書 9:5、6、10）。

祈りに応えてヒゼキヤの命が15年も延びたとき、感謝した王は神にその偉大な憐れみに対する賛美の賛辞を捧げました。彼は歌の中で、自分が喜ぶ理由を次のように語っています。穴に落ちる者はあなたの忠実さを待ちません。今日わたしがしているように、生きている者、生きている者だけがあなたを賛美します」（イザヤ書38:18,19）。一般的な神学では、義なる死者は天国において祝福を受け、不滅の舌で神を賛美していると表現されています。しかしヒゼキヤには、死にそのような輝かしい見通しはありませんでした。彼の言葉は詩篇作者の次の証言と一致しています。墓の中で誰があなたを褒めてくれるのでしょうか？」（詩篇 6:5）。「死者も主を賛美しない、沈黙の地に下る者も」（詩篇115:17）。

ペテロはペンテコステの日、族長ダビデが「死んで埋葬され、彼の墓は今日まで私たちの中に残っている」と宣言しました。「ダビデは天に昇らなかったからです」（使徒2:29,34）。ダビデが復活の日まで墓の中に残るという事実は、義人は死んでも天国に行かないことを証明しています。復活を通してのみ、そしてキリストが復活したという事実によってのみ、ダビデは最終的に神の右に座ることができるのです。

そしてパウロはこう言いました、「死人がよみがえらなければ、キリストもよみがえらなかったのです。そして、もしキリストがよみがえらなかったら、あなたの信仰は無駄になり、あなたは依然として罪の中に留まります。さらに、キリストにあって眠りについた者は失われるのです」（第一コリント15:16~18）。もし四千年の間、死んだ義人が直接天国に行っていたとしたら、もし復活がなかったら、「キリストにあって眠っていた人々もまた失われる」とパウロはどうして言えるのでしょうか？復活する必要はないでしょう。

殉教者ティンダルは死者は眠っているという教義を擁護し、「あなた方は、彼ら[死者の魂]を天国、地獄、煉獄に置くことによって、キリストとパウロが復活を証明する論拠を破壊することになる。」と宣言しました。「魂が天国にいるなら、なぜ彼らが天使ほど良好な状態にないのか教えてください。それでは、復活にはどのような動機があるのでしょうか？」

死における不滅の祝福への希望が、復活に関する聖書の教義の広範囲にわたる無視につながっていることは、議論の余地のない事実です。この傾向はアダム・クラーク博士によって指摘され、今世紀初めに次のように述べています。どうしてそうなるのでしょうか？使徒たちは絶えずそれを促し、それを通して神の追従者たちに勤勉、従順、そして勇気を促しました。そして現代の彼の後継者たちは、そのことについてほとんど言及しません。使徒たちが説教したように、初期のキリスト教徒は信じましたし、私たちが説教するとき、聞かされる人も信じます。福音の中に、これより重要な教義はない。そして、現在の説教体系において、これほど軽蔑的に扱われる教義はないのです！」

これは、復活の輝かしい真実がキリスト教世界によってほぼ完全に隠蔽され、見失われるまで続きました。このように、宗教作家として認められ、テサのパウロの言葉についてコメントしている。4章13節から18節にはこう書かれています。「実際の慰めの目的として、義人の祝福された不滅の教義が、主の再臨に関するあらゆる疑わしい教義に取って代わります。

私たちが死ぬとき、主は私たちのところに来られます。これは私たちが期待しなければならないことであり、警戒しなければならないことです。死者はすでに栄光の中に入っています。彼らはラツバが裁きと祝福を受けるのを待ちません。」

イエスは弟子たちと別れようとしたとき、すぐに弟子たちに加わるとは言わず、「私はあなたたちのために場所を用意して行きます」と言いました。「そして、私が行って、あなたがたのために場所を用意するとき、私は再び来て、あなたを自分のもとの迎えます」（ヨハネ14 :2,3）。

パウロは後にこう語っています。「主ご自身が、その命令の言葉と、聞こえる大天使の声と、神のラツパの音とともに天から降り、キリストにある死人が最初によみがえります。そのとき、生き残った私たちも、彼らとともに雲に引き上げられ、空中で主に会い、こうして永遠に主とともにいることとなります。」そして、「だから、この言葉で互いに慰め合いなさい」（1テサロニケ4:16-18）と付け加えています。これらの慰めの言葉と、上で引用した普遍主義者の牧師の言葉とのなんと大きな対照でしょう。

後者は、たとえ故人がどれほど罪を犯していたとしても、息を引き取った後は天使たちの中に迎え入れられるだろうとの確信を持って、悲しむ友人たちを慰めた。パウロは兄弟たちに、主の将来の到来、鎖が断たれ、「キリストにある死者」が永遠の命によみがえることを指示しています。

祝福された者の邸宅に入る前に、彼らの事件が調査され、神の前でその性格と行動が検討されなければなりません。誰もが本に書かれていることに従って裁かれ、その働きに応じて報酬を受けなければなりません。この裁きは死の瞬間には行われません。パウロの次の言葉に注目してください。「神は、誰よりも先に任命し信じた人によって、死人の中からよみがえらせることによって、義をもって世を裁く日を定められたからである。」（使徒 17:31）。ここで使徒は、世界の審判のために特定の、したがって将来の時が定められたと明確に宣言しました。

ユダはその同じ時期についてこう述べています。「そして天使たちは、元の状態を保たず、自分の家を捨て、大いなる日の裁きまで、永遠の鎖につながれて暗闇に閉じ込められました。」そして再び彼はエノクの言葉を引用します。「見よ、主はすべての人に裁きを執行するために、その聖なる無数の人たちの中に来られた」（ユダ6、14、15）。ヨハネは、「大いなる者も小さな者も、玉座の前に立っている死人を見た」と宣言しています。それから本が開かれました。「そして死者はその行いと書物に書かれたことに応じて裁かれた」（黙示録20:12）。

しかし、もし死者たちがすでに天国の祝福を享受しているか、あるいは地獄の炎の中で悶えているとしたら、将来の裁きが必要になるでしょうか？これらの重要な点に関する神の言葉の教えは曖昧でも矛盾もなく、普通の心で理解できます。しかし、現在の理論で知恵や正義を理解できる正義の心があるでしょうか？正義の人たちは、判決での自分たちの事件の調査の後、「よくやった、善良で忠実な僕よ」、「あなたの主の喜びの中に入りなさい」（マタイ 25:21）という勲章を受け取るだろうか。おそらく長い間、彼は御前にいたのでしょうか？悪人たちは苦しみの場から呼び出され、全地球の裁判官から「呪われた者よ、私から離れなさい。地獄の火に入れ」という判決を受けるだろうか？（マタイ 25:41）。ああ、儀式的な嘲笑だ！神の知恵と正義に対する恥ずべき違反です！

魂の不滅の理論は、ローマが異教から借用してキリスト教に取り入れた誤った教義の1つでした。マルティン・ルターはこれを「ローマの卑劣な法令に関する無数の寓話」の一つに分類しました。死者は何も知らないという伝道者の書のソロモンの言葉について、宗教改革者はこう述べた。「死者が鈍感であるというもう一つの証拠だ。したがって、ソロモンは、死者は通常眠っていて何も考えていないのだと考えます。彼らは、何日も何年も数えずに休んでいます。目が覚めると、ほんの少ししか眠っていないかのように見えるでしょう。」

聖書のどの箇所にも、死の瞬間に義人は報酬を受け、悪人は罰を受けるという記述は見つかりません。

族長や預言者はそのような保証を残していませんでした。キリストとその使徒たちはそうしませんでした

これについては少し言及しました。聖書は、死者はすぐに天国に行くわけではなく、復活の日まで眠っているように描かれていると明確に教えています(1テサロニケ4:14、ヨブ14:10-12)。銀の糸が切れ、金の杯が砕けたその日(伝道の書12:6)、人の思いは滅びます。墓に降りる人々は沈黙します。彼らは太陽の下で何が行われているかを何も知りません(ヨブ14:21)。疲れた義人たちに祝福された休息を、彼らにとって時間は長くても短くても、ほんの一瞬にすぎません。彼らは眠り、神のラツパによって目覚め、輝かしい不滅の境地に達します。「ラツパが鳴り響き、死者は朽ちないものによみがえる…そして、この朽ちる体が朽ちないものを身に着け、死ぬべき者が不死の体を身に着けると、書かれている言葉は成就するだろう。死は勝利に飲み込まれる。」(1コリント15:52-54)。深い眠りから目覚めた瞬間、中断されたところから思考を再開します。最後の感覚は死の苦しみであり、最後の考えは彼らが墓の力の下に落ちているということでした。

彼らが墓から立ち上がる時、彼らの最初の喜びの思いは、勝利の叫びとしてこだまされるでしょう。「死よ、あなたの勝利はどこにありますか？」死神よ、あなたの刺し傷はどこにあるのか？」(1コリント15:55)。

第34章

心霊術

聖書に示されている聖なる天使の働きは、キリストに従う一人一人にとって最も慰めとなる貴重な真理です。しかし、この点に関する聖書の教えは、通俗神学の誤りによって曖昧になり、歪められてきました。自然不死の教義は、最初は異教の哲学から借用され、大背教の暗闇の中でキリスト教の信仰に組み込まれたが、「死者は何も知らない」という聖書で明確に教えられている真理を抑圧してきた。

多くの人は、死者の霊は「救いの相続人となる人々に奉仕するために遣わされた奉仕の霊」であると信じるようになりました。そして、これは、死者が存在する以前の天の天使の存在と人類の歴史との関係に関する聖書の証言にもかかわらずです。

死における人間の意識の教義、特に死者の霊が生者に奉仕するために戻ってくるという信念は、現代のスピリチュアリズムへの道を開きました。死者が神と聖なる天使たちの前に認められ、以前に持っていたものをはるかに超える知識を与えられるのであれば、なぜ彼らは地上に戻って生者を啓発し、教えるべきではないのでしょうか？そうです、人気の神学者が教えているように、死者の霊は地球上の友人の上に浮かんでいます。なぜ彼らが悪に対して警告したり、彼らの苦しみを慰めたりするために彼らとコミュニケーションをとることが許されないのでしょうか？人間の死後の意識を信じる人々は、栄光を受けた霊によって伝えられる神の光として自分たちにやってくるものをどうして拒否できるのでしょうか？ここに神聖視されている通路があり、サタンはそれを通じて目的を達成します。

彼の命令を遂行する墮天使たちが霊界からの使者として現れる。生者と死者とのコミュニケーションを公言しながら、悪の王子は彼らの心に魅惑的な影響力を行使します。

神には、亡くなった大切な人の姿を人々の前にもたらす力があります。偽造は完璧です。見慣れた外観、言葉、口調が驚くほど正確に再現されています。多くの人は、愛する人が天国の祝福を享受しているという確信に慰められています。そして彼らは危険を疑うことなく、「誘惑する霊や悪魔の教義」に注意を払います。

どれほど多くの人間が、死者が実際に戻ってきて彼らとコミュニケーションをとっていると信じ込まされてきたことでしょうか。そのため、サタンは彼らに、墓に降りた人々には準備ができていなかったように見せかけています。彼らは天国で幸せであり、天国で高い地位に就いているとさえ言います。そのため、義人と悪人の間には区別がないという誤りが広く教えられています。霊界からの訪問者志望者が警告や警告を発し、それが正しいことが判明することがあります。そして、信頼が得られるとすぐに、聖書への信仰を直接破壊する教義を提示します。

彼らは地球上の友人たちの幸福に深い関心を示しながら、最も危険な間違いをほのめかします。彼らがいくつかの真実を語り、時には将来の出来事を予測できるという事実は、彼らの発言に信頼性があるように見せかけ、彼らの誤った教えは、あたかもそれらが最も神聖な真実であるかのように、群衆によって熱心に受け入れられ、盲目的に信じられています。聖書。神の律法は脇に置かれ、恵みの御霊は軽蔑され、契約の血は不聖なものとなみなされます。霊たちはキリストの神性を否定し、創造主を自分たちと同じレベルにさえ置きます。そこで、新たな変装をして、

この大反逆者は、天で始まり地上で約6000年間続いた神に対する戦争を実行し続けている。

多くの人は、霊媒師の詐欺や手品によるものとして心霊現象を説明しようとします。しかし、詐欺の結果が本物の現れであるかのように見せかけていることが多いのは事実ですが、超自然的な力が顕著に表れている場合もあります。現代のスピリチュアリズムの始まりとなった神秘的な嘆きは、詐欺や人間の狡知の結果ではなく、邪悪な天使の直接の仕業であり、魂の破壊において最も成功した欺瞞の一つをもたらしました。多くの人は心霊術は単なる人間の欺瞞であるという信念に囚われるでしょう。しかし、超自然的な性質を否定できない現象に直面すると、彼らは騙され、それを神の偉大な力として受け入れるように導かれるでしょう。

これらの人々は、サタンとその手先によってもたらされた奇跡に関する聖書の証言を無視しています。ファラオの魔術師たちが神の働きに対抗できるようになったのは、サタンの助けによるものでした。パウロは、キリストの再臨の前に同様の悪魔の力の現れがあると証言しています。主の来臨には、「サタンがあらゆる力と、しるしと、偽りの不思議と、あらゆる不正な欺瞞をもって働く」ことが先行しなければなりません（IIテサロニケ2：9、10）。そして使徒ヨハネは、終わりの日に現れるであろう奇跡を起こす力について説明し、次のように宣言しています。神は、行うよう与えられたしるしのゆえに、地上に住む者たちを誘惑するのである」（黙示録13：13、14）。ここでは単なる詐欺行為は予想されません。人間は、サタンの手先が実行する力を持っている奇跡に騙されますが、彼らが実行しようとしているわけではありません。

長い間、その優れた精神の力を欺瞞の仕事に向けてきた闇の君主は、あらゆる階級や境遇の人間に巧みに誘惑を適応させている。文化的で洗練された人々に向けて、彼はスピリティズムをその最も洗練された知的な側面で提示し、多くの人を彼の欺瞞に引き付けることに成功しています。心霊術が伝える知恵とは、使徒ヤコブが述べた知恵であり、それは「上から来るものではなく、地上的で、動物的で、極悪非道なものである」（ヤコブ3:15）。しかし、偉大な詐欺師は、それを隠す方が目的にかなう場合、これを隠します。誘惑の砂漠でキリストの前に天のセラフィムの輝きをまもって現れることができる人は、最も魅力的な方法で、光の天使として人々の前にやって来ます。彼は崇高なテーマを提示することで理性に訴え、魅惑的なシーンで感覚を楽しませ、愛と慈善の雄弁なイメージを通じて愛情を演出します。彼は想像力を刺激して飛行を崇高にし、人々が自分の知恵を誇りに思うあまり、心の中で永遠の存在を軽蔑するように仕向けます。世界の救い主を非常に高い山に、そして彼の目の前に地球のすべての王国とその栄光を運ぶことができたこの強力な存在は、すべての人の感覚を歪めるような方法で人々に誘惑を提示します。神の力に守られていない人たち。

今日のサタンは、エデンでエバを誘惑したように、お世辞によって男性を誘惑し、禁断の知識を得たいという欲求を植え付け、自己高揚を通じて野心を刺激します。彼の墮落を引き起こしたのはこれらの悪の愛撫であり、それらを通して彼は人々を破滅させようとしています。「あなたは神のようになり、善悪を知るようになる」と彼は宣言します（創世記3:5）。心霊術は、「人間は進歩し続ける生き物である」と教えています。あなたの誕生からの運命は、永遠に至るまで、神に向かって進歩することです。」そしてまた、「それぞれの良心は自分自身を裁くのであって、他の良心は裁かないのです。」「それは自分自身の判断なので、その判断は公平になるでしょう。（...）法廷はあなたの中にあります。」スピリチュアリズムの先生はこう言いました、「スピリチュアルな意識」が生まれると、

彼の中で目覚めた：「私の仲間は皆、墮落していない半神だった。」そして別の人は、「義になかった完全な存在はどんな人でもキリストです」と宣言します。

したがって、崇拜の真の対象である無限の神の正義と完全性の代わりに、サタンは、人間の達成の真の基準である律法の完全な義の代わりに、人間自身の誤った罪深い性質を唯一の崇拜の対象、唯一の裁きの規則または性格の基準として設定しました。これは上向きの進歩ではなく、下向きの進歩です。

熟考することによって私たちは変容するという、知的性質と霊的性質の両方の法則があります。心は、そこに留まることが許されている対象に徐々に適応していきます。人間は、純粋さ、善良さ、真実の基準を超えることは決してありません。自己があなたの最高の理想であるならば、あなたはこれ以上に崇高なものを達成することは決してできないでしょう。それどころか、どんどん下がっていきます。神の恵みだけが人間を高める力を持っています。放っておけば、その進路は必然的に下降することになる。

自堕落な人々、快楽を愛する人々、官能的な人々にとって、心霊主義は、より洗練された知的な人々に現れるときよりも、それほど巧妙な偽装の下で現れます。彼らはその全体的な形の中に、自分の傾向と調和するものを見出します。サタンは人間の本性の弱さをあらゆる兆候を研究し、各人が個別に犯しがちな罪を指摘し、邪悪な傾向を満たす機会が不足しないように注意します。それは、それ自体が正当であることを過剰に行うように男性を誘惑し、節制を通して肉体的、道徳的、精神的な力を弱めるように導きます。彼は情熱の耽溺によって何千もの人々を破壊し、そして今も破壊し続けており、それによって人間の本性全体を残忍にしています。そして自分の仕事を完成させるために、彼は霊を通して「真の知識は人間をあらゆる法よりも優先する」と宣言します。「何が正しい」ということ。「神は罪に定めない」ということ。そして「犯された罪はすべて無実である」ということです。

このように人々が欲望が最高の法則であると信じ込まされているとき、腐敗と墮落があらゆる手に溢れていることを誰が不思議に思うでしょうか。多くの人々は、肉の心の衝動に自由に従うことができる教えを熱心に受け入れています。自制心の手綱は欲望の手に委ねられ、心の力は向きを変えられ、動物の性癖に支配され、サタンはキリストの追隨者であると自称する何千人もの人々を狂喜して自分の網の中に閉じ込めます。

しかし、心霊術の嘘に騙される必要は誰にもありません。神は世界に、彼らが畏を發見できるように十分な光を与えました。

すでに示したように、心霊術の同じ基礎を構成する理論は、聖書の最も明確な記述と矛盾しています。聖書は、死者は何も知らず、彼らの思考は消え去ったと宣言しています。彼らは太陽の下で行われることに何の関与もしていません。彼らは地球上の大切な人たちの喜びも悲しみも何も知りません。

さらに、神は死者の霊とのあらゆるコミュニケーションを明示的に禁止されました。ヘブライ人の時代には、今日のスピリチュアリストのように、死者とのコミュニケーションを維持しようとする人々の階級がありました。しかし、これらの異世界からの訪問者を「馴染みの霊」と呼ぶ場合、聖書は「悪霊の霊」と宣言しています（民数記 25:1-2; 詩篇 106:28; Iコリント 10:20 と比較）；黙示録 16:14。身近な霊と交わる仕事は主の忌まわしい行為であると宣言され、死刑のもと厳粛に禁止された（レビ記 19:31; 20:27）。

現在では魔術という名前自体が軽蔑されています。人間が悪霊と交信できるという発言は、

暗黒時代の寓話。しかし、科学界に進出し、教会に侵入し、立法議会や王の法廷でさえも支持を得ている何十万人、そう、何百万人も心の霊術 - この巨大な欺瞞は復活にほかなりません。過去に非難され、禁じられていた魔術が新たな姿を変えて。

もし心霊術の本当の性質を示す他の証拠がなかったとしても、すべてのクリスチャンは、霊が正義と罪、キリストの使徒の中で最も高貴で純粋な者と最も堕落したサタンの僕との間で何の違いも持たないことを知れば十分でしょう。最も卑劣な人間が天国にいて、そこで非常に高められていると見せかけて、サタンは世界にこう言います。好きなように生きてください。天国はあなたの家です。」スピリチュアリストの教師たちは事実上次のように宣言しています。あるいは、裁きの神はどこにいるのか？

(マラヤ 2:17) 「神の言葉はこう述べています。「悪を善と呼び、善を悪と呼ぶ者たちは災いです。闇を光にし、闇を明るくする者よ！」 (イザヤ書 5:20)。

これらの偽りの霊によって擬人化された使徒たちは、彼らが地上にいたときに聖霊の靈感を受けて書いたものと矛盾するものとして描かれています。彼らは聖書の神聖な起源を否定し、それによってキリスト教の希望の基盤を無効にし、天国への道を明らかにする光を消してしまいます。

サタンは、聖書は単なるフィクション、あるいはせいぜい人類の子供時代にふさわしい本であるが、今は無視されるべきか、時代遅れのものとして捨てられるべきである、と世界に信じ込ませています。そして、神の言葉の代わりに、彼は心霊現象を表します。ここは完全にあなたの制御下にあるチャンネルです。このような手段によって、彼は自分の望むことを世界に信じさせることができるのです。彼は、彼と彼の追従者の両方を裁くことになる本を、彼が望む場所、つまり影に置きます。彼は世界の救い主を単なる普通の人であるかのように見せかけます。そして、イエスの墓を守っていたローマの衛兵が、祭司や長老たちがイエスの復活を否定するために口にした虚偽の報告を広めたのと同じように、心霊術の現れを信じる人々も、この状況に奇跡など何もないように見せかけようとするのです。救い主の生涯について。このようにしてイエスの焦点を外そうとした後、彼らは自分たちの奇跡に注目を集め、これらの奇跡はキリストの業をはるかに超えていると宣言します。

心霊術が現在その形を変え、その最も不快な側面のいくつかを覆い隠し、キリスト教の仮面をかぶっていることは確かである。しかし、壇上や報道機関での彼の発言は約 40 年間にわたって公衆の前に発表されており、その中で彼の本当の性格は依然として明らかにされています。

これらの教えを否定したり隠したりすることはできません。

現在の形態であっても、以前よりも寛容に値するどころか、その欺瞞がより巧妙になったため、実際には以前よりも危険になっています。彼は以前はキリストと聖書を攻撃していましたが、現在は両方を受け入れると公言しています。しかし聖書は、刷新されていない心を喜ばせるように解釈されており、その厳粛で重要な真理は何の効果も与えられていません。愛は神の最大の特質として位置づけられていますが、それは弱い感傷性に貶められており、善と悪の区別はほとんどありません。神の義、罪に対する神の戒め、神の聖なる律法の要求はすべて、目に見えないところに隠されています。

人々は十章書を形骸化したものと考えるように教えられている。楽しく魅力的な寓話は感覚を魅了し、信仰の基盤である聖書を拒否するように人々を誘います。キリストは以前と同じように真に否定されています。しかし、サタンが人々の目を盲目にしたため、欺瞞が分からなくなりました。

心霊術の欺瞞的な力とその影響下に陥る危険性について、公正な概念を持っている人はほとんどいません。多くの人は単に好奇心を満たすためにそれに対処します。彼らは神を真に信じておらず、霊の支配に身を委ねることを考えると恐怖でいっぱいになるでしょう。しかし、彼らは禁断の地に足を踏み入れ、強力な破壊者は彼らの意志に反して彼らに力を行使します。一度だけ誘導されてその方向に心を服従させると、彼らは虜になってしまいます。彼ら自身の力だけでは、魔術的で魅惑的な呪縛を解くことは不可能です。信仰の熱烈な祈りに応えて与えられる神の力以外に、この囚われの魂を解放できるものはありません。

罪深い性格特性にふけている人、または既知の罪を故意に大切にしている人は皆、サタンの誘惑を招いていることとなります。彼らは神や神の天使たちの世話から自分たちを切り離します。そして、邪悪な者が欺瞞を見せると、彼らは無防備になり、簡単に餌食になってしまいます。このようにしてその力の下に身を置く人々は、自分たちの道がどこで終わるのかほとんど知りません。彼らを破滅させた後、誘惑者は彼らを自分の手先として使い、他者を破滅に誘い込むだろう。

預言者イザヤはこう述べています。「彼らがあなたたちに『死霊術師や占い師たちに相談してください。彼らは鳴き声を上げ、つぶやくのです。人々は自分たちの神に相談しないでしょか。』生きている人に代わって死者が相談を受けるのでしょうか？法と証言に！このように語らなければ、彼らは決して夜明けを見ることができないでしょう」（イザヤ書 8:19,20）。もし人間が、人間の本性と死者の状態に関して、聖書の中でこれほど明確に表現されている真理を受け取りたいと思ったなら、彼らは心霊術の宣言と表明の中に、力と偽りのしるしと不思議を伴うサタンの働きを見ることになるでしょう。しかし、肉の心にとっても大切な自由を放棄し、彼らが愛する罪を放棄する代わりに、多くの人は光に目を閉じ、警告に関係なく進み続ける一方、サタンは彼らの周りに彼の欺瞞を織り込み、彼らは彼らの餌食になります。「彼らは救われるために真実への愛を受け入れなかったからだ」、それゆえに「神は彼らに嘘の功績を認める誤謬の作戦を送った」

(テサロニケ第二 2:10 ~ 11)。

心霊術の教えに反対する人々は人間だけでなく、サタンとその天使たちも攻撃しています。彼らは天上の権力者、公国、邪悪な霊に対して戦争を仕掛けてきました。サタンは天の使者の力によって撃退される場合を除いて、一步も譲歩しません。神の民は、救い主がなさったように、「書いてある」という言葉でそれに応えることができます。サタンは今日でもキリストの時代と同じように聖書を引用することができ、その教えを曲解して自分の欺瞞を支持するでしょう。この危機の時代にしっかりと立ち向かおうとする人は、聖書の証しを自分で理解する必要があります。

多くの人は、親戚や親愛なる友人になりすました悪魔の霊に直面し、最も危険な異端を宣言するでしょう。これらの訪問者は私たちの最も優しい同情に訴え、彼らの主張を支持するために奇跡を起こすでしょう。私たちは、死者は何も知らず、そのように現れる者は悪霊であるという聖書の真理を持って彼らに抵抗する準備をしなければなりません。

「地上に住む者を試すために全世界に訪れる試練の時」が私たちの目の前にあります（黙示録3:10）。神の言葉に信仰がしっかりと確立されていない人は騙され、敗北するでしょう。サタンは人の子らを支配するために「あらゆる不義の欺きを用いて」働きます。そして彼らの欺瞞は絶えず増加するでしょう。しかし、男性が自分の目標を達成できるのは、男性が自発的に彼の要求に屈した場合のみです。

誘惑。真理の知識を心から求め、従順によって自分の魂を清めようと努力し、争いに備えるためにできる限りのことをしている人は、真理の神に安全な避難所を見つけるでしょう。「あなたが私の忍耐の言葉を守ってくれたので、私もあなたを守ります。」

(黙示録 3:10)これは救い主の約束です。神は、神を信頼するたった一人の魂がサタンに打ち負かされるよりも、すぐに天の天使全員を送って民を守るだろう。

預言者イザヤは、邪悪な者たちに起こる恐ろしい欺瞞を明らかにし、彼らに神の裁きから安全であると信じ込ませます。災いの洪水が過ぎ去っても、それは私たちには届かないでしょう、なぜなら私たちは避難所として嘘をつき、偽りの下に自分自身を隠しているからです。」

(イザヤ書 28:15)。ここで説明されている階級には、頑固な悔い改めの中で、罪人には罰はないという確信を持って自分を慰めている人々が含まれています。それは、どんなに墮落した人間であっても、すべての人類は天に高められ、神の天使のようになるということです。しかし、さらに強調すべきなのは、苦難の日に義人を守るために天が備えてくださった真理を放棄し、その代わりにサタンが差し出した偽り、つまり心霊術の幻想的な見せかけを受け入れる人々である。死との契約と地獄のような取引。

驚くべきことに、この世代の人々の盲目さは、言葉で言い表せないほどです。何千人もの人々が神の言葉を信じるに値しないものとして拒否し、熱心な自信を持ってサタンの欺瞞を受け入れています。懐疑論者や嘲笑者は、預言者や使徒の信仰を争う人々の狂信を非難し、キリストと救いの計画に関する聖書の厳粛な宣言や、真理を拒否する者たちへの訪問をばかばかしいと呼んで面白がっている。彼らは、神の要求を認識し、神の律法の要求に従うほど狭く、弱く、迷信深い心を非常に憐れんでいるふりをします。彼らは、あたかも実際に死と契約を結び、地獄と契約を結んだかのように、あたかも自分たちと神の復讐との間に通行不能で侵入不可能な障壁を築いたかのように、そのような確信を表明します。何もあなたの恐怖を呼び覚ますことはできません。彼らは誘惑者に完全に屈服し、あまりにも親密に誘惑者と一体化し、彼の精神に完全に染まってしまったので、彼らには彼の罠から逃れる力も意志もありません。

サタンは長い間、世界を欺くための最後の努力の準備をしてきました。彼の仕事の基礎は、エデンでエバに与えられた「あなたは死なない」という保証によって築かれました。「それを食べる日には、あなたの目は開かれ、神のように善悪が分かるようになる」(創世記 3 : 4、5)。彼はスピリティズムの発展における欺瞞の傑作への道を少しずつ準備してきました。彼はまだ自分の設計を完全に実現していません。しかし、これらは残り最後の時間で達成されるでしょう。預言者はこう述べています。「私はカエルのような3つの汚れた霊を見た。……彼らは悪魔の霊であり、しるしを行っており、万国の偉大な日の戦いのために彼らを集めるために全世界の王たちのところにやってくる」「神。力強いお方です」(黙示録 16:13 および 14)。神の御言葉への信仰によって神の力によって保たれている人々を除いて、全世界がこの欺瞞の網に囚われることになります。人々は急速に致命的な安全の中に誘い込まれますが、神の怒りのほとぼしりによって目覚めます。

主なる神はこう言われます。「わたしは裁きを支配者とし、義を鉛直線とする。雲は嘘の避難所を一掃し、水は隠れ場所を一掃するでしょう。死との契約は無効になり、死後の世界との契約は存続しません。そして災いの洪水が通り過ぎると、あなたがたはそれに押しつぶされるであろう」(イザヤ書 28 : 17、18)。

第35章

教皇庁の性格と意図

ローマ主義は現在、プロテスタントによって以前よりもはるかに好意的に見なされています。カトリックが優勢ではなく、教皇派が影響力を得るために融和的な方針をとっている国々では、改革派教会を教皇の階層から切り離す教義に対する無関心が高まっている。結局のところ、我々は重要な点でこれまで想定されていたほど大きな相違はなく、我々が少し譲歩すればローマとのより良い理解につながるだろうという意見が広まりつつある。プロテスタントは、多大な犠牲を払って手に入れた良心の自由を高く評価していた時代がありました。

彼らは子供たちに教皇を憎むように教え、ローマとの調和を求めることは神への不誠実であると主張した。しかし、今日表現されている感情は、なんと大きく異なっていることでしょう。

教皇制の擁護者たちは、教会が中傷されたと宣言する。そしてプロテスタント世界はこの宣言を受け入れる傾向にある。何世紀にもわたる無知と闇の時代にその支配を特徴づけた忌まわしい行為や不条理を理由に今日の教会を裁くのは不公平だと多くの人が主張している。彼らは自分たちの恐ろしい残虐行為を当時の野蛮さの結果だと言い訳し、現代文明の影響で自分たちの感情が変わってしまったと主張する。

この人たちは無謬性の主張を忘れてしまったのだろうか

この傲慢な力によって800年もの間？この声明は放棄されるどころか、19世紀になってもこれまで以上に積極的に肯定されてきました。

ローマは教会が「一度も過ちを犯したことがないし、決して過ちを犯し得ない」と主張しているのに、過去の時代にその進路を形作った原則をどうやって放棄することができるのでしょうか？

教皇教会は無謬性の主張を決して放棄しません。彼の教義に反駁する人々を迫害する際に彼が行ったことはすべて、彼を正しいものとします。そして、もし機会が与えられたら、彼女は同じ行為を繰り返さないだろうか？現在世俗政府が課している制限措置を撤廃し、ローマをかつての権力に戻せば、すぐに圧制と迫害が復活するだろう。

現代作家 (ジョサイア・ストロング、DD、 『Our Country』、 46 ページ-)

48) このように、良心の自由に関する教皇階層の態度と、特にその政策の成功に関して米国を脅かす危険性について語っている。

「米国におけるローマ・カトリックへの恐怖を狂信や幼稚さのせいだと考えようとする人はたくさんいます。このような人々は、ローマ主義の性格や態度に、私たちの自由な制度に敵対的なものは何も見当たりませんし、その成長に何の予兆も感じません。そこでまず、私たちの政府の基本原則のいくつかをカトリック教会の基本原則と比較してみましょう。

「合衆国憲法は良心の自由を保障しています。

これほど高価で基本的なものはありません。ピウス9世は、1854年8月15日の回勅の中で次のように述べている、「不条理で誤った教義や、良心の自由を擁護する叫びは、最も有害な誤り、すなわち疫病であり、とりわけ人々が恐れなければならないものである」状態。'同じ教皇は、1864年12月8日の回勅の中で、「良心の自由を主張する人々」を非難した

「宗教的礼拝」、そして「教会は武力行使はできないと主張するような声明」もあった。

「米国におけるローマの平和的な論調は、心変わりを意味するものではありません。彼女は自分が無力なところにも寛容だ。オコナー司教は言う：『信教の自由は、反対運動がカトリック世界に危険を及ぼさずに実行できるようになるまで容認されるに過ぎない。』「セントルイス大司教はかつてこう言った。『異端と不信仰は犯罪である。宗教の自由は、カトリック世界に危険を及ぼさずに反対運動が実行されるまで容認される。』そして、例えばイタリアやスペインのようなキリスト教国では、国民全員がカトリック教徒であり、カトリックの宗教が国の法律の重要な一部となっているところでは、他の犯罪と同様に処罰される。』」

「カトリック教会のすべての枢機卿、大司教、司教は教皇に対して忠誠の誓いを立てるが、その中には次のような言葉がある。「我らの主である教皇やその後継者に対する異端者、外国人、反逆者たちを、私は共に迫害する。私の全力、私の力」。

カトリック教会の聖体拝領に真のクリスチャンがいることは事実です。その教会の何千人もの人々が、自分たちの持つ最高の光に従って神に仕えています。彼らは神の言葉にアクセスすることを許可されていないため、真実を識別できません。彼らは、心のこもった生きた奉仕と単なる儀式や形式の輪廻との対比を決して認識しませんでした。神は、欺瞞的で満足のいかない信仰の中で育てられるこれらの魂を、優しい憐れみをもって見守っておられます。彼は光線を周囲の濃い闇に浸透させます。神はイエスにあるように真理を彼らに明らかにするでしょう、そして多くの人は依然として神の民に対して自分の立場を保つでしょう。

しかし、体系としてのローマ主義は、その歴史のどの時期よりも現在もキリストの福音と調和していません。プロテスタント教会は大きな暗闇の中にいます、そうでなければ時代の兆候を識別することはできません。ローマ教会には広範囲にわたる計画と運営方法があります。世界の支配権を取り戻し、再び迫害を確立し、プロテスタントが行ってきたことを元に戻すための、熾烈かつ断固たる紛争に備えて、影響力を拡大し、権力を増大させるためにあらゆる手段を講じている。カトリックはあらゆる方面で勢力を伸ばしている（付録、注10を参照）。アメリカでの大学や神学校の人気に注目してください。そのスポンサーは主にプロテスタントです。イングランドにおける儀式主義の成長とカトリック教徒への頻繁な離反に注目してください。これらのことは、福音の純粋な原則を大切にすべての人に不安を呼び起こすはずで

プロテスタントはこれに専念し、教皇制度を後援しました。彼らは妥協と譲歩をしましたが、法王派自身もそれを見て驚いており、理解することができません。人々はローマ主義の本当の性格と、まだ垣間見えていないその優位性の危険性に対して目を閉じています。市民と宗教の自由に対するこの最も危険な敵の進歩に抵抗するために、人々が目覚める必要があります。

多くのプロテスタントは、カトリックの宗教は魅力がなく、自分たちの礼拝は無意味な儀式の退屈な繰り返しだと考えています。ここで彼らは間違いを犯します。ローマ主義は欺瞞に基づいていますが、それは粗悪で品のない詐欺ではありません。ローマ教会の礼拝は非常に印象的な儀式です。彼らの厳粛な儀式と展示物は人々の感覚を魅了し、理性と良心の声を沈黙させます。景色は魅惑的です。壮大な教会、堂々とした行列、黄金の祭壇、宝石で飾られた聖遺物箱、厳選された絵画、精緻な彫刻が美への愛を訴えます。音楽は比類のないものです。大きなパイプオルガンの深い音色が、大聖堂の高くそびえ立つドーム型の柱のある回廊に響く多くの声のメロディーと混ざり合って、人々の心に敬意と畏敬の念を抱かずにはいられません。

病的で罪深い魂の切望を失望させるだけの外面的な華麗さ、華やかさや儀式は、内面の腐敗の証拠です。キリストの宗教は賞賛に値するためにそのような魅力が必要としません。十字架の輝く光の中で、真のキリスト教は非常に純粋で愛らしく見えるため、いかなる外面的な装飾もその真の価値を高めることはできません。それは神聖さの美しさ、穏やかで静かな精神であり、神にとって価値のあるものです。

スタイルの素晴らしさは、必ずしも純粋で高尚な思想の表れではありません。芸術の高度な概念、繊細な味の洗練は、一般に、地上的で感覚的な心の中に存在します。彼らはしばしばサタンによって人間が魂の必要を忘れ、未来や不滅の命を見失い、無限の助け手から逸らされ、この世のためだけに生きるように導くために利用されます。

表面的な儀式の宗教は、新しくされていない心に魅力を与えます。カトリック礼拝の華やかさと儀式には、魅惑的で魅惑的な力があり、多くの人々が騙されます。真理の基礎にしっかりと足を踏み入れ、神の御霊によって心が新たにされた人々以外は、ローマ教会が天国の門であると考えようになり、その影響から守られるのです。キリストについて実験的な知識を持たない何千人もの人々は、無力な形の敬虔さを受け入れるよう導かれるでしょう。このような宗教こそが大衆が望んでいることなのです。

赦す権利があるという教会の主張は、ローマ主義者に罪を犯しても構わないと感じるように導きます。そして、告白の儀式は、それなしでは彼の恩赦が保証されず、悪に許可を与える傾向もある。墮落した人間の前にひざまずいて、墮落した人間に対して心の秘められた思いや想像力を開く者は、その人間性を低下させ、その魂のあらゆる高貴な本能を損なうこととなります。

自分の生涯の罪を司祭——背を向けて罪深い定命の者であり、しばしばワインと放縦で墮落している——に暴露することで、彼の人格水準は低下し、その結果として汚されることになる。彼らの神に対する概念は、墮落した人類のようなものに墮落しています。なぜなら祭司は神の代表者であり続けるからです。この人間から人間への屈辱的な告白は、世界を腐敗させ、最終的な破滅への準備をさせている悪の多くが流出する秘密の源である。それでも、自己満足を愛する彼にとっては、神に魂を開くよりも、死すべき仲間に自分自身を告白する方が楽しいのです。罪を放棄するよりも悔い改めをする方が人間の本性にとって好ましい。肉欲を十字架につけるよりも、ひもやイラクサ、引き裂く鎖を使って肉体を痛めつけるほうが簡単です。肉の心がキリストのくびきに従うのではなく、進んで負おうとするくびきは重いのです。

キリストの初臨の時のローマ教会とユダヤ教会の間には驚くべき類似点があります。ユダヤ人は神の律法のあらゆる原則を密かに踏みにじっていましたが、表向きはその戒律の遵守に厳格であり、従順を苦痛と疲労にさせる強奪や伝統を課していました。ユダヤ人が律法を尊重すると公言したのと同じように、ローマ主義者も十字架を崇拝すると公言します。彼らはキリストの苦しみの象徴を称賛しますが、その一方で、この象徴が表すキリストを自らの人生において否定します。

教皇派は教会、祭壇、祭服に十字架を置きます。十字架の記章がいたるところに見られます。どこにいても、彼女は外見的に尊敬され、称賛されています。しかし、キリストの教えは、大量の無意味な伝統、誤った解釈、厳しい強要の中に埋もれています。偽善的なユダヤ人に関する救い主の言葉はさらに当てはまります

カトリック指導者たちに力を与えてください。しかし、彼ら自身は指で動かすことすら望まないのです」(マタイ23:4)。良心的な魂は、気分を害した神の怒りを恐れて、絶えず恐怖の中に置かれていますが、一方、教会の高官たちは、情欲と官能的な快樂の中で生きています。

像や遺物の崇拝、聖人への祈願、教皇の高揚は、人々の心を神とその御子から遠ざけるためのサタンの欺瞞です。彼らを確実に破滅させるために、神は彼らの注意を、唯一救いを見出すことができる神から逸らそうと努めます。神は、「すべて苦勞している人、重荷を負っている人は、わたしのもとに来なさい。わたしはあなたたちを休ませてあげます」(マタイ11:28)と言われた方にとって代わることのできるあらゆる対象に魂を導くでしょう。

神の性質、罪の性質、そしてこの大論争で問題となっている真の結果を誤って伝えようとするサタンの絶え間ない努力です。彼らの詭弁は神の法の義務を軽減し、人間に罪を犯す許可を与えます。同時に、それは彼らに神についての誤った概念を大切にすることになり、愛ではなく恐れと憎しみの目で神を見るようになります。彼自身の性格に内在する残忍さは創造主によるものです。それは宗教体系に具体化され、礼拝様式に表現されます。こうして人間の心は盲目になり、サタンは人間を神との戦いの手先として拘束する。神の属性に関する倒錯した概念により、異教諸国は神の好意を得るには人間の犠牲が必要であると信じ込まされ、さまざまな形の偶像崇拝の下で恐ろしい残虐行為が行われてきました。カトリック教会は、異教とキリスト教の形態を統合し、異教と同様に神の性質をほとんど表していないにもかかわらず、同様に残酷で反抗的な慣行に訴えてきました。ローマが覇権を誇っていた時代には、人々にその教義を強制的に受け入れるための拷問器具がありました。自分たちの要求に譲歩したくない人々にとっては一か八かの賭けだった。判決で明らかにされるまで決して明かされない規模の虐殺があった。教会の高官たちは、主であるサタンに率いられ、犠牲者の命を絶たずに、可能な限り最大の拷問を引き起こす方法を発明することを研究しました。この地獄のようなプロセスは、自然が屈服し、患者が死を甘い安らぎとして歓迎するまで、人間の忍耐の限界まで繰り返されました。

ローマの敵の多くはそのようなものだった。会員にとっては、鞭打ちの懲らしめ、飢えの苦痛、考えられる限りの肉体的苦痛、想像し得る限り最も苦痛な苦痛が課せられていた。天の好意を確保するために、悔い改める者たちは神の法を犯し、自然法則に違反しました。彼らは、人類の地球滞在を祝福し、喜ばせるために神が設けられたあらゆる絆を解消するように教えられました。教会の墓地には何百万人も犠牲者が眠っており、彼らは自然な感情を抑え、同胞のためにあらゆる考えや同情の感情を神に不快にさせるものとして抑制しようと、無駄な努力に人生を費やしてきたのである。私たちが、何百世紀にもわたって、神について聞いたことのない人々の間ではなく、キリスト教世界のまさに中心部とその広範囲にわたって現れてきたサタンの断固とした残忍さを理解したいのであれば、ローマ主義の歴史に目を向けるだけで済みます。この巨大な欺瞞システムを通じて、悪の君主は神に不名誉を、人間に悲惨をもたらすという目的を達成します。

彼が自分を偽ることに成功し、教会の指導者たちを通して自分の仕事を達成しているのを見ると、なぜ彼が聖書に対してあれほど大きな反感を抱いているのかがよく理解できます。この本を読めば、神の憐れみと愛が明らかになります。神はこれらの重荷を人間に課さないことが分かるでしょう。

神が求めておられるのは、打ち砕かれて悔い改めた心、謙虚で従順な精神だけです。

キリストは生涯において、男性も女性も天国への備えをするために修道院に閉じ込められるという例を示しておらず、愛や同情は抑圧されるべきだとも決して教えませんでした。救い主の心は愛で溢れていました。人は道徳的な完成に近づくほど、感受性はより洗練され、罪に対する認識はより鋭くなり、苦しんでいる人々への同情はより深くなります。教皇は自らをキリストの代理者であると宣言する。しかし、彼の性格は救い主の性格と比べてどうなのでしょう？キリストは、天の王としてのキリストに敬意を払わなかった人々を刑務所や拷問に移送することで常に知られていたのでしょうか？主を受け入れなかった人々を死刑に宣告する主の声が聞こえたのでしょうか？イエスがサマリアの村の人々に軽蔑されたとき、使徒ヨハネは憤りに満ちて、「主よ、エリヤがしたように、私たちに天から火を降らせて彼らを焼き尽くしてほしいと思われませんか？」と尋ねました。（ルカ 9:54）。イエスは弟子たちを憐れみの目で見つめ、「人の子は人の魂を滅ぼすためではなく、彼らを救うために来たのです」（ルカ 9:56）と言って、彼らの頑なな精神を叱責されました。キリストによって現された霊と、キリストが公言する牧師の霊とは、どれほど異なっているか。

カトリック教会は現在、その恐ろしい残虐行為の記録を謝罪で覆い、世界に快い顔を見せている。彼女はキリストの衣を着ました。しかし、それは変わっていません。過去の時代に存在した教皇制の原則はすべて今日も存在します。暗黒時代に発明された教義は今でも維持されています。

誰も騙されないでください。現在プロテスタントが喜んで尊重している教皇制度は、宗教改革の時代に世界を支配していたものと同じであり、その時、神の人々は自らの咎を暴くために命の危険を冒して立ち上がった。彼女は、王や王子たちを支配し、自分には神の特権があると考えていたのと同じプライドと傲慢な見栄を持っています。彼女の精神は今、人間の自由を破壊し、至高者の聖徒たちを殺害したときと同様に残酷で横暴です。

教皇制はまさに預言が宣言したとおり、終わりの日の背教です(IIテサロニケ2:3および4)。自分の目的をよりよく達成できるような性格を引き受けるのは彼のポリシーの一部です。しかし、カメレオンのさまざまな外見の下には、不変の蛇の毒が隠されています。「異端者に対する信仰や約束を守る必要はない」と宣言しています。千年にわたって聖徒たちの血にその記録が刻まれてきたこの力は、今ではキリストの教会の一部として認められているのだろうか？

プロテスタント諸国において、カトリックとプロテスタントの違いが以前ほど大きくなくなっていると宣言されたのには理由がないわけではありません。変化がありました。しかし変化は教皇庁にはない。プロテスタントは宗教改革者の時代から大きく退化しているため、カトリックは確かに今日存在するプロテスタントとよく似ています。

プロテスタント教会は世の好意を求めてきましたが、偽りの慈善活動が彼らの目を盲目にしてきました。彼らは、すべての悪を善と考えるのが公平であると信じています。そして必然の結果として、彼らは最終的にはすべての善を悪と考えるようになるでしょう。かつて聖人たちに与えられた信仰を擁護する立場に立つ代わりに、どうやら彼らは、どうやら今、彼らに対する慈しみのない意見についてローマに謝罪し、その狂信に対する許しを請っているようだ。

大多数の階級は、ローマ主義を好意的に見ていない人々さえも、その力と影響力から生じる危険性をほとんど理解していません。多くの人は、中世に蔓延していた知的および道徳的な闇がその教義、迷信、抑圧の蔓延を促進し、現代の知性の向上、知識の一般的な普及、宗教問題における寛大さの増加により、宗教的な問題が禁止されていると主張しています。不寛容と圧制の復活。

この啓蒙された時代にそのような状況が存在するという考えさえ嘲笑されています。知的、道徳的、宗教的な偉大な光が輝いているのは事実です

この世代のこと。神の聖なる御言葉の開いたページに、天からの光が世界に当てられています。しかし、与えられた光が大きければ大きいほど、それを曲げたり拒否したりする人の闇も大きくなるということを忘れてはなりません。

祈りを伴う聖書の研究は、プロテスタントに教皇制の本当の性格を示し、それを嫌悪し、避けるよう導くだろう。しかし、多くの人は自分自身の意見が非常に賢明であるため、真理に導かれるために謙虚に神を求める必要を感じていません。彼らは教育を受けたことを誇りに思っていますが、聖書と神の力の両方について無知です。彼らは自分の良心を落ち着かせる何かが必要であり、より霊的で屈辱的なものではないものを求めます。彼らが望んでいるのは神を忘れる方法であり、それが神を思い出す方法になるのです。教皇庁はこれらすべてのニーズを満たすためにうまく適応しています。

イエスは、ほぼすべての人を対象とする2つのクラスの間、つまり自分の長所によって救われることを望む人々と、罪の中で救われることを望む人々に備える用意ができています。あなたの強さの秘密がここにありま

す。知的に大きな暗闇の日が、教皇庁の成功に有利であることが判明した。素晴らしい知的光の日も同様に成功に有利であることが証明されるでしょう。昔、人々が神の言葉もなく、真理の知識もなかったとき、彼らの目は目隠しされ、何千人もの人々が足に張られた網を見ることができず、絡め取られていました。この世代には、「科学と誤って呼ばれる」人間の思惑のまぶしさに目をくらませている人がたくさんいます。彼らは網を識別せず、あたかも目隠しをしているかのように簡単に網に入ります。神は、人間の知的能力が創造主からの贈り物とみなされ、真理と正義の奉仕に用いられるように設計されました。しかし、誇りと野心が大切にされ、人々が神の言葉よりも自分の理論を称賛するとき、知性は無知よりも大きな害を及ぼす可能性があります。このように、聖書への信仰を損なう19世紀の偽科学は、知識の保持が教皇制の拡大への道を開いたのと同じように、その好ましい形を持った教皇制を受け入れる道を準備するのと同じくらい効果的であることが証明されるだろう。暗黒時代。

教会の制度と実践に国家の支援を確保しようとする米国で現在進行中の運動において、プロテスタントは教皇派の足跡をたどっている（付録、注11を参照）。さらに、彼らは教皇制が旧世界で失った優位性をプロテスタントのアメリカで取り戻すための扉を開いている。そして、この運動に大きな意味を与えるのは、主に企図されている目的が、ローマ発祥の習慣であり、彼女が自らの権威のしるしであると宣言する日曜日の遵守の強制であるという事実である。これが教皇庁の精神、つまり世俗の慣習への順応の精神、神の戒めよりも人間の伝統を崇拝する精神であり、プロテスタント教会に浸透しており、教皇庁と同じ日曜日の昇栄の働きを教会に行わせるよう導いている。彼らの前でやった。

読者が、来たるべきコンテストでどのような手段が使用されるかを知りたい場合は、ローマが過去の時代に同じ目的のために使用した手段の記録を追跡するだけで済みます。統一された教皇派とプロテスタントがその教義を拒否する人々にどのように対処するかを知りたい場合は、安息日とその擁護者に関してローマが示した精神を参照してください。

世俗権力に支えられた国王勅令、総評議会、教会の儀式は、異教の祝日がキリスト教世界において名誉ある地位を獲得するためのステップでした。日曜日の遵守を課す最初の公的措置は、コンスタンティヌスによって公布された法律（西暦321年）でした。この布告は都市住民に「太陽の尊い日」に休むことを義務付けたが、許可されたのは

田舎の人たちは農業を続けています。事実上異教の法律ではあるが、この法律は名目上キリスト教を受容した皇帝によって課されたものである。

王の委任は神の権威に十分に代わるものではないようだったため、王子たちの好意を求め、コンスタンティヌスの親友でありお世辞でもあった司教エウセビオスは、キリストが安息日を安息日から安息日に移したという宣言を推進した。日曜日。新しい教義を証明するために、聖書についての簡単な証言さえも提出されませんでした。エウセビオスは無意識のうちにその虚偽を認識し、変化の真の作者を指摘します。

「すべてのこと」と彼は言います。「安息日に行われるはずだったすべてのことは、主の日に移されました。」しかし、日曜日を支持する議論は、根拠のないものでしたが、人々が主の安息日を踏みこむのを奨励するのに役立ちました。

世界から名誉を得たいと思っていた人は皆、人気のある休日を受け入れました。

教皇制度がしっかりと確立されるとすぐに、日曜日の昇栄の働きが継続されました。一時期、人々は教会に出席しないときは農業労働に従事し、7日目は依然として安息日とみなされていました。しかし、冷静にコントロールして、変化がもたらされました。神聖な職に参与する治安判事は、日曜にいかなる民事論争でも判決を執行することを禁じられた。その直後、階級を問わずすべての人々が通常の労働を控えるよう命じられ、自由民には罰金、使用人には鞭打ちの刑が科せられた。その後、富裕層は財産の半分を失う罰を受けることが布告されました。そして最後に、もし彼らが従わないと主張した場合、彼らは奴隷にされるでしょう。下層階級の人々は永久追放の対象となった。

奇跡も使われました。報告された他の奇跡の中でも、日曜日に畑を耕そうとした農民が、手に刺さったアイロンで鋤を掃除し、「あまりの苦痛と恥辱に、まるまる2年間、鋤を取り出すことができなかった」と言われている。」

その後、教皇は教区の司祭に対し、日曜日を破った人々に警告し、自分たちや隣人に大きな災難がもたらされないように教会に来て祈るよう説得するよう命じた。教会評議会は、それ以来、プロテスタントの間でさえ頻繁に採用されている議論を承認し、日曜日に仕事中に落雷で死亡した人もいるという事実を考慮すると、それは安息日であるに違いないという主張を承認した。「それは見えています」 -

高位聖職者たちはこう言いました。「この日を無視した人々に対する神の不快感はどれほど大きかったことでしょう。」その後、司祭や牧師、国王や王子、そしてすべての信者に対し、「この日が名誉を回復し、キリスト教世界の利益のために、より敬虔に守られるようできる限りのことをしよう」と訴えがなされた。間に合うように」

評議会の布告では不十分であることが判明したため、世俗当局は人々の心に恐怖を引き起こし、日曜日に仕事を控えるよう強制する布告を公布するよう求められた。ローマで開催された評議会では、これまでのすべての決定がより強力かつ厳粛に再確認されました。

それらはまた教会法に組み込まれ、キリスト教世界のほとんどの地域で行政当局によって課されました。

それにもかかわらず、日曜日の遵守を支持する聖書の権威の欠如は多くの困難を引き起こしました。人々は、太陽の日を敬うための「七日はあなたの神、主の安息日である」というエホバの積極的な宣言を教師が覆す権利に疑問を抱きました。聖書の証言の欠如を補うためには、他の手段が必要でした。日曜日の熱心な弁護士は、12世紀の終わり頃にイギリスの教会を訪れましたが、真実の忠実な証人たちによって抵抗されました。彼の努力はあまりにも無駄だったので、彼はしばらく国を捨てた。

彼の教えを強化する方法を探すのに時間を費やしました。彼が戻ったとき、欠落は埋められ、今では仕事でさらに成功していました。彼は巻物を持ってきて、それを神ご自身からのものであると提示しました。そこには日曜日を守るために必要な命令と、不服従者を恐怖に陥れる恐ろしい脅迫が含まれていた。

この貴重な文書は、保護しようとしていた機関と同じくらい卑劣な詐欺であり、天から落ち、エルサレムのゴルゴダの丘にある聖シメオンの祭壇で発見されたと主張された。しかし実際には、彼が生まれたのはローマの教皇宮殿でした。教会の権力と繁栄を促進するための詐欺と混ぜ物は、いつの時代も教皇階層によって正しいと考えられてきました。

この規定では、土曜日の午後3時である9時から月曜日の日の出までの労働が禁止されていた。そして彼の権威は多くの奇跡によって確認されると宣言されました。指定時間を超えて働いた人は麻痺に見舞われたという。農夫が小麦粉の代わりに小麦を挽こうとしたところ、大量の水にもかかわらず血しぶきが飛び散り、水車が止まってしまいました。ある女性は生地をオープンに入れ、オープンが非常に熱かったにもかかわらず、取り出してみると生地が生でした。別の人は、9時にパンを焼くために生地を準備していましたが、月曜日までそれを置いておくことにし、翌日、それが神の力によってパンに変わり、焼かれていることに気づきました。土曜日の9時過ぎにパンを焼いた男性が、翌朝パンを割ったところ、パンから血が出ているのに気づきました。このようなばかげた迷信的な発明によって、日曜日の擁護者たちは日曜日を神聖なものにしようとしました。

スコットランドとイングランドの両国では、日曜日を古代の安息日の一部と結びつけることによって、日曜日をよりよく尊重するようになりました。しかし、神聖にすべき時間は様々です。スコットランド国王の布告は、土曜日の正午以降は聖なる日とみなされ、その瞬間から月曜日の朝までは誰も世俗的な仕事に従事してはならないと宣言した。

しかし、日曜日の神聖性を確立するためにあらゆる努力が払われたにもかかわらず、同じ教皇たちは安息日の神聖な権威と、安息日にとって代わられたこの制度の人間の起源を公に告白した。16世紀、教皇公会議は明確に次のように命令した。しかし、私たちクリスチャンは安息日を主の日に変更しました。神の法則を踏みにじていた人々は、自分たちの仕事の性質を知らなかったわけではありません。彼らは意図的に自分自身を神よりも上に置いていたのです。

彼女に同意しない人々に対するローマの政策の驚くべき例は、安息日の守り人もいたワルドー派の長く血なまぐさい迫害の中に示されています。他の人たちも第四戒に忠実だったために同様に苦しみました。エチオピアの教会の歴史は特に重要です。暗黒時代の暗闇の真っ只中、中央アフリカのキリスト教徒は視界から失われ、世界から忘れ去られました。が、何世紀にもわたって信仰を实践する自由を享受していました。しかし、ついにローマは彼の存在を聞き、エチオピア皇帝はすぐに教皇をキリストの代理者として認めるように誘導されました。

他の譲歩も続いた。最も厳しい罰則のもとで安息日の遵守を禁止する布告が発布された。しかし、教皇の圧制はすぐに非常に苦いくびきとなり、エチオピア人はそれを首から断ち切ろうと決心した。ひどい闘争の後、ローマ主義者たちはその支配地から追放され、古代の信仰が回復されました。

教会は自由を喜び、ローマの欺瞞、狂信、専制権力に関して学んだ教訓を決して忘れませんでした。彼らはいた

彼らはキリスト教世界の他の国々には知られていない、自分たちの島王国の真ん中に留まることに満足していた。

アフリカの教会は、教皇教会が完全に背教する前に安息日を守っていたのと同じように、安息日を守った。彼らは神の戒めに従って7日目を守りましたが、教会の習慣に従って日曜日には仕事を控えました。最高権力を獲得することによって、ローマは自らの地位を高めるために神の安息の日を踏みにじったのです。しかし、アフリカの教会は約千年間知られていなかったが、この背教には何の関与もしていません。彼らがローマの支配下に陥ったとき、彼らは真の安息日を脇に置いて偽りの安息日を崇拝することを強いられましたが、彼らはやっとう独立性を回復し、第四戒への従順に戻りました。

これらの過去の記録は、真の安息日とその擁護者に対するローマの敵意、そしてその創設の制度を尊重するためにローマがどのような手段をとったかを明らかに示しています。神の言葉は、教皇派とプロテスタントが主日の高揚において団結するときに、これらのことが繰り返されると教えています。

黙示録 13 章の預言は、子羊のような角を持つ獣によって表される力によって、「地とそこに住む人々」が教皇権を崇拝するようになるだろうと宣言しています。ここでは「ヒョウのような」獣によって象徴されています。2本の角を持つ獣はまた、「地上に住む者たちに獣の像を作るように」と命じ、さらに、「小さい者も大きい者も、金持ちも貧しい者も、自由な者も奴隷も」すべての人に、「獣の刻印」(黙示録 13:11-16)。アメリカ合衆国は子羊のような2本の角を持つ獣によって代表される権力であり、ローマが日曜日を特別に認めると宣言している日曜日の遵守をアメリカ合衆国が課するとき、この預言は成就するであろうことが実証されている。彼の優位性。しかし、この教皇制への賛辞において、米国は単独ではない。かつてローマの統治を認めた国々におけるローマの影響力は、破壊されるには程遠い。そして預言は彼の力が回復することを予告しています。そして全地がその獣を追って驚いた(黙示録 13:3)。致命傷の発生は、1798年に教皇制度が廃止されたことを示している。その後、預言者は、「彼の致命傷は癒され、全地球がその獣に従って驚嘆した」と述べている。パウロは、罪を犯した人間は再臨の時まで残ると明確に宣言しています(IIテサロニケ2:8)。最後の最後まで、彼は欺瞞の仕事を続けるだろう。そして啓示者は教皇制度に言及して、「命の書に名前が記されていない地上に住む者は皆、彼女を崇拝するだろう」と宣言しています。

(黙示録 13:8)。旧世界でも新世界でも、教皇庁はローマ教会の権威のみに依存する日曜日の制度に与えられる栄誉を通じて敬意を表されることになる。

40年近くにわたり、米国の預言の研究者たちはこの証言を世界に向けて発表してきました。現在進行中の出来事では、この予測の成就に向けた急速な進展が見られます。プロテスタントには、神の戒めを置き換えるために奇跡をでっち上げた教皇の支配者たちと同様に、日曜日の遵守に対する神の権威に対する主張と同様の聖書的証拠の欠如がある。人間の日曜休みの違反によって神の裁きが下されるという主張は、今後も繰り返されるだろう。これは今日すでに宣言されています。そして日曜日の遵守を強制する運動が急速に広まりつつある。

ローマ教会はその狡猾さと洞察力において素晴らしいです。未来を読むことができます。彼女は、プロテスタント諸教会が偽りの安息日を受け入れたことで彼女に敬意を表しており、それを課す準備をしていることを見て、時を待っている。

彼女自身が過去に使ったのと同じ手段で。真実の光を拒否する人々は、自らを無謬であると称するこの力に由来する制度を称賛するために、依然としてその力の助けを求めましょう。彼女がこの仕事においてプロテスタントをどれほど容易に助けに来るかを推測するのは難しくありません。教皇の指導者ほど、教会に不従順な人々にどのように対処するかを理解している人は誰でしょうか？

ローマ教会は世界中に支部を持ち、教皇の監視下にある巨大な組織を形成し、その利益に奉仕する運命にあります。世界のあらゆる国にいる何百万人もの彼の信奉者は、自分たちは教皇と同盟を結んで団結していると考えよう教えられている。あなたの国籍や政府が何であれ、あなたは何よりも教会の権威を考慮しなければなりません。

彼らは国家への忠誠を誓う宣誓をすることができるが、その背後にはローマへの服従の誓いがあり、自らの利益に反するいかなる約束も免除される。

プロテスタントは、日曜日の昇栄の働きにおいてローマの援助を受け入れることを提案するとき、自分たちが何をしているのかほとんど知りません。彼らが自らの目的を確立することに熱心である一方で、ローマは権力を再確立し、失われた覇権を取り戻すことに熱心である。国家問題に干渉しようとする彼らの狡猾かつ執拗な努力を歴史が証明しましょう。そして、君主と国民の破滅を犠牲にしても、自らの目的を推進するために自らの足を踏み固めた。ローマ主義は、教皇が「諸国の法、神と人間の法に反する判決や判決を下すことができる」と公然と宣言している（『法令』）。

そして、ローマは決して変わらないことを誇りに思っていることを忘れないでください。グレゴリウス 7 世とイノケンティウス 3 世の原則は、今でもローマ カトリック教会の原則です。そして、もし彼女に力があれば、過去数世紀と同じくらいの勢いで今もそれらを実践するだろう。かつて米国で確立された、教会が国家権力を利用または統制できるという原則を考えてみましょう。宗教的行事は世俗の法律によって強制される可能性があること。要するに、教会と国家の権威が良心を支配しなければならず、そうすればこの国におけるローマの勝利は保証される、ということである。

神の言葉は差し迫った危険について警告を与えています。それを無視すれば、プロテスタント世界は、罠から逃れるには手遅れになって初めて、ローマの真の目的が何であるかを知ることになるでしょう。彼女は静かに力を増し続けています。その教義は立法裁判所、教会、そして人々の心に影響力を及ぼしています。彼女は、過去の迫害が繰り返されるであろう秘密の窪地に、高く巨大な建造物を建てています。クーデターを実行する時が来たら、密かにそして何の疑いもなく、自らの目的を達成するために勢力を増強している。彼女が望んでいるのはチャンスだけであり、それはすでに彼女に与えられています。私たちは間もなく、ローマの体の目的が何であるかを見て、感じるようになるでしょう。神の言葉を信じて従う者は誰でも、非難と迫害を受けるでしょう。

第36章

差し迫った紛争 – その原因

天での大論争が始まって以来、神の律法を破壊することがサタンの目的でした。これを達成するために、彼は創造主に対する反逆を始めました。そして彼は天から追放されたにもかかわらず、地上で同じ戦争を続けています。人間を欺き、それによって神の律法に違反するように仕向けることが、彼が堅実に追求してきた目的である。それが法律全体を放棄することによって達成されるか、その戒律の1つを拒否することによって達成されるかにかかわらず、最終的には同じ結果になります。「一点で」違反する者は、律法全体に対する軽蔑を表明していることになる。彼の影響力と模範は違反の側にあります。彼は「すべての人に対して罪を負う」ことになります（ヤコブ 2:10）。

神の法令を軽蔑しようとして、サタンは聖書の教義を曲げ、聖書を信じていると公言する何千もの人々の信仰に誤りが組み込まれています。真実と誤謬の間の最後の大きな対立は、神の律法をめぐる長年にわたる論争の最後の闘争にほかなりません。私たちは今、この戦い、つまり人間の律法とエホバの戒めの間、聖書の宗教と寓話と伝統の宗教の間の戦いに突入しているのです。

この紛争において真実と正義に対して団結する機関が現在活発に活動している。多くの苦しみと血を犠牲にして私たちに伝えられた神の聖なる言葉は、ほとんど考慮されていません。聖書は誰でも入手できますが、それを人生の指針として真に受け入れている人はほとんどいません。不貞は世界だけでなく教会にも驚くほど蔓延しています。

多くの人々がキリスト教信仰のまさに柱である教義を否定するようになりました。靈感を受けた作家たちが提示した創造の偉大な真理、人間の堕落、贖罪、そして神の律法の永続は、キリスト教を公言する世界の大部分によって、全体的または部分的に実質的に拒否されています。自分たちの知恵と独立心に誇りを持っている何千人もの人々は、聖書に暗黙の信頼を置くことは弱さの証拠であると考えています。彼らは自分たちのプライドが優れた才能の証拠であると考えており、聖書について推測し、聖書の最も重要な真実を精神化して歪曲することを学びます。多くの牧師が会員に教えており、多くの教師や教師が生徒に神の律法が変更または廃止されたことを教えています。そして、その要求が依然として有効であると考え、文字通り従うべきであると考える人々は、嘲笑または軽蔑に値するものとして選ばれます。

真実を拒否することによって、人は自分の作者を拒否します。神の法を踏みにじることによって、彼らは法の与え主の権威を否定することになるのですが、偽りの教義や理論の偶像を作るのは、木や石から偶像を切り出すのと同じくらい簡単です。サタンは神の属性を誤って伝えることによって、人間に神の性質についての誤った概念を形成させるように導きます。多くの場合、哲学的な偶像がエホバの代わりに即位します。一方、生ける神は、御言葉、キリスト、そして創造の業の中に示されているように、崇拜される人はほとんどいません。何千もの人々が自然を神格化する一方で、自然の神を否定しています。偶像崇拜は、形は違えど、かつてエリヤの時代に古代イスラエルに存在したのと同じように、今日のキリスト教世界にも存在しています。多くの賢者と称される人々、哲学者、詩人、政治家、ジャーナリストの神 - サークルの神

多くの大学や大学、さらには一部の神学機関からも洗練されたファッションが集まりました。それはフェニキアの太陽神バアルよりも少し優れています。

キリスト教世界によって受け入れられている誤りの中で、これほど急速に地盤を広げている現代の教義ほど、天の権威に大胆に反抗するものはなく、理性の命令に最も真っ向から反対するものではなく、その結果が有害であるものはない。神はそうではありません。それは男性にとってより活発です。どの国にも法律があり、尊重と服従が求められます。彼らなしでは政府は存在できません。そして、天と地の創造者には、自分が造った存在を統治する法がないなどと考えられるだろうか？著名な閣僚が、自国を統治し国民の権利を保護する法令には拘束力はない、つまり法令は国民の自由を制限するものであり、従って従う必要はない、と公に教えるでしょう。そのような人々はいつまで説教壇に立つことが許されるのでしょうか？しかし、州や国家の法律を無視することは、すべての政府の基礎である神の戒めを踏みこむことよりも重大な犯罪なのではないでしょうか？

宇宙の主権者が自らの法律を無効にし、有罪者を非難したり正当化するための基準を世界から持たないようにするよりも、諸国家が法令を廃止して国民が好き勝手に行動できるようにする方が、はるかに一貫性があるだろう。従順な神の律法を無効にした結果を私たちは知ることができるのでしょうか？その実験はすでに試みられています。無神論が支配力となったフランスで命じられたシーンはひどかった。

そして、神が課した制限を放棄することは、最悪の暴君の支配を受け入れることであることが世界に証明されました。正義の基準が脇に置かれたとき、悪の王子が地球上で権力を確立する道が開かれます。

神の戒めが拒否されるとどこでも、罪は罪深いものに見えなくなり、義が望ましいものに見えなくなります。神の政府に服従することを拒否する人は、自分自身を統治するのにまったく適していません。彼らの有害な教えを通して、不服従の精神が子供や若者の心に植え付けられます。彼らは生まれながらにコントロールに耐えられません。そして無法な放縦状態が社会に生じます。群衆は神の要求に従う人々の騙されやすさを嘲笑しながらも、サタンの欺瞞を熱心に受け入れます。彼らは好色を抑制し、異教徒に裁きをもたらした罪を実践しています。

神の戒めを軽視するよう人々に教え、不従順の種をまき、不従順を刈り取る者たち。神の法則によって課せられた制限を完全に脇に置きましょう。そうすれば、人間の法則はすぐに無視されるでしょう。神は不誠実な行為、貪欲、嘘、詐欺を禁じているため、人間はこの世の繁栄を妨げるものとして神の定めを踏みこむのです。しかし、これらの戒律を追放した結果は、彼らが予想していなかったようなものになるでしょう。もし法律が施行されていないとしたら、なぜ法律を破る恐れがあるのでしょうか？不動産はもはや安全ではなくなります。人間は暴力によって隣人の所有物を手に入れます。そして最も強い者が最も裕福になるだろう。命そのものが尊重されなくなります。結婚の誓いはもはや家族を守るための神聖な旗ではなくなるだろう。力のある者は、望めば隣人の妻を暴力で奪うこともできるだろう。第五戒は第四戒とともに脇に置かれることになる。そうすることで墮落した心の願いを達成できるのであれば、子供たちは親の命を奪うことを恐れないでしょう。文明世界は強盗と殺人者の大群となるだろう。そうすれば、平和、休息、幸福は地球から追放されるでしょう。

人間は神の要求への従順を免除されているという教義は、道徳的義務の強さを弱め、世界に不法行為の水門を開いてしまいました。不法行為、散逸、腐敗が抑圧的な罫のように私たちに蔓延しています。サタンが家族の中で働いています。あなたの

キリスト教を公言している国でも国旗ははためいています。そこには、憎しみ、邪悪な疑い、偽善、口論、虚偽、不和、神聖な真実の裏切り、好色への耽溺があります。社会生活の基盤と基盤を形成すべき宗教の原則と教義の体系全体が、今にも崩壊しそうな不安定な塊のように見えます。最も卑劣な犯罪者は、その罪で刑務所に入れられると、あたかもうらやむべき榮譽を獲得したかのように、贈り物や注目の対象となることがよくあります。彼の性格と犯罪は大々的に宣伝されている。マスコミはその悪徳の忌まわしい詳細を公表し、それによって他人を詐欺、窃盗、殺人の実践へと導きます。そしてサタンは地獄のような計画の成功に大喜びする。悪徳への陶醉、みだらな生活行為、あらゆる程度の禁酒と不法行為の恐ろしい増加は、神を畏れるすべての人を目覚めさせ、悪の流れを止めるために何ができるかを問うべきである。

司法裁判所は腐敗している。知事は利得への欲求と官能的な快樂への愛によって動機づけられています。禁酒により多くの人の能力が暗くなり、サタンがほぼ完全に彼らを支配するようになりました。法学者は倒錯し、賄賂を受け取り、欺かれています。法律を管理する人々の間には、酩酊と乱交、情熱、妬み、あらゆる種類の不正直が表れています。「正義は遠くに立っています。真理は路地つまずき、義は入ることができないからです。」(イザヤ書 59:14)。

ローマの覇権の下に蔓延した不法行為と霊的な暗闇は、ローマによる聖書の抑圧の必然的な結果でした。しかし、信教の自由の時代における福音の光の炎の下で、蔓延する不貞、神の律法の拒否、そしてその結果として生じる腐敗の原因はどこにあるのでしょうか？

サタンは聖書を隠すことで世界を自分の支配下に置くことができなくなったので、同じ目的を達成するために別の手段に訴えます。聖書への信仰を破壊することは、聖書自体を破壊するだけでなく、その目的も果たします。神の律法はもはや効力を持たないという信念を導入することによって、神は人々をあたかもその戒律を全く知らないかのように事実上違反に導きます。そして今も昔と同じように、彼は教会を通して自分のデザインをさらに推し進めています。今日の宗教団体は、経典の中で明らかに明らかになった不人気な真実に耳を傾けることを拒否し、それらと戦う際に懐疑の種を広く蒔くような解釈を採用し、立場をとってきました。人間の自然な不滅性と死の意識に関する教皇の誤りにしがみつき、彼らは心霊術の欺瞞に対する唯一の防御策を拒否した。永遠の責め苦の教義により、多くの人々が聖書を信じなくなりました。そして、第四戒の要求が人々の前で迫られるとき、七日目、安息日を守ることが命じられていることがわかります。そして、彼らが望んでいない義務から解放される唯一の方法として、人気のある教師たちは、神の律法はもはや効力を持たないと宣言します。そこで彼らは律法と安息日と一緒に廃止します。

安息日改革の取り組みが広がるにつれて、第四戒の記述を避けるために神の律法を拒否することは、ほぼ普遍的なものとなるでしょう。宗教指導者の教えは、不貞、心霊術、神の聖法への軽蔑への扉を開いており、これらの指導者はキリスト教世界に存在する不法行為に対して恐るべき責任を負っています。

この同じ層は、急速に広がる汚職は主にいわゆる「キリスト教の安息日」の冒涇に起因しており、日曜日の遵守の強制は社会の道徳を大きく改善するだろうという宣言にも賛成する。この言葉は、真の安息日の教義が最も広く説かれているアメリカで特に強調されています。ここでは、道徳改革の中で最も顕著かつ重要なものの1つである節制の取り組みが行われます。

多くの場合、日曜運動と組み合わせられており、後者の支持者は社会の最高の利益を促進するために活動していると主張しています。そして彼らと団結することを拒否する人々は節制と改革の敵として非難される。しかし、誤りを確立しようとする運動が、それ自体は優れた作品と結びついているという事実は、誤りを支持する議論にはなりません。健康食品と混ぜることで毒を隠すことはできますが、その性質を変えることはできません。逆に、誤って服用する可能性が高くなるため、より危険になります。サタンの欺瞞の1つは、妥当性を与えるのに十分な真実と虚偽を組み合わせることです。日曜運動の指導者たちは、人々が必要とする改革、聖書と調和する原則を主張するかもしれないが、それでも神の律法に反する要求がある。

彼らが神の戒めを無視して人間の戒めを優先することを正当化できるものは何もありません。

魂の不死性と日曜日の聖化という二つの大きな誤りを通して、サタンは人々を自らの欺瞞に導くでしょう。前者は心靈術の基礎を築きますが、後者はローマとの共感の絆を生み出します。米国のプロテスタントは、スピリチュアリズムと握手するために湾を越えて手を差し伸べる最初の人となるだろう。彼らは深淵を越えてローマ権力の手を握るだろう。そしてこの三国同盟の影響下で、この国はローマに倣って良心の権利を踏みにじることになるだろう。

心靈主義は今日の名目上のキリスト教に似ているため、欺き、魅了する大きな力を持っています。現在の秩序によれば、サタン自身も回心しています。光の天使のキャラクターで登場する、心靈術の働きを通して、奇跡が行われ、病人は癒され、多くの否定できない奇跡が行われるでしょう。

自称クリスチャンと邪悪な者との境界線は、今ではほとんど識別できません。教会員は世界が愛するものを愛し、世界と団結する用意ができています。そしてサタンは、**彼らを一つの体に団結させ（アクセントの撤回）**、こうして彼ら全員を心靈術の仲間入りに引きずり込むことで自分の大義を強化しようと決意した。真の教会の確かなしるしとして奇跡を誇りに思う教皇派は、この不思議な力にすぐにだまされるでしょう。そして真理の盾を捨てたプロテスタントもまた騙されるだろう。教皇主義者も、プロテスタントも、そしてこの世の人々も同様に、力のない敬虔の形態を受け入れるだろうし、彼らはこの結合の中に、世界の回心と待望の千年紀の始まりに向けた大きな動きを見ることになるだろう。

スピリチュアリズムを通じて、サタンは人種の恩恵者として現れ、人々の病気を治し、新しくより崇高な信仰体系を提示すると公言します。しかし同時に彼は破壊者としても働いています。彼の誘惑は多くの人を破滅に導きます。禁欲は理性を奪う。官能的な耽溺、戦い、そして流血が続きます。サタンは戦争を喜びます。なぜなら、それは魂の最悪の情熱を刺激し、犠牲者を悪徳と血に浸った永遠の世界に引きずり込むからです。彼らの目的は、国々を互いに戦争に駆り立てることです。なぜなら、このようにして神は人々の心を神の日に立つための準備の働きからそらすことができるからである。

サタンはまた、準備ができていない魂の収穫の収穫に集まるために、要素を乗り越えて働きます。彼は自然の実験室の秘密を研究しており、神が許す限り要素を制御するために全力を尽くしています。彼がヨブを苦しめようとしたとき、群れや羊飼、召使い、家、子供たちが、あっという間に次々と災難に遭い、壊滅させられたことでしょう。そして神

神は自分の被造物を守り、破壊者の力から彼らを黙らせます。しかしキリスト教世界はエホバの律法を軽蔑してきた。そして主はご自身が行うと宣言されたとおりに行われ、地上からご自分の祝福を取り除き、主の律法に反抗し、他の人にも同じことを教えたり強制したりする人々からの保護を取り除きます。サタンは、神が特に守っていない人々すべてを支配しています。神は、自分の計画を推進するために、ある者を優遇し、繁栄させ、他の者に不幸をもたらし、人々を苦しめているのは神であると信じ込ませるでしょう。

人間の子らにはすべての病気を治すことができる偉大な医師として現れる一方で、彼は病気と災害をもたらし、人口の多い都市が廃墟と荒廃に陥るまで続きます。今でも彼は働いています。陸海による事故や災害、大火災、激しい竜巻や恐ろしいひょう嵐、嵐、大洪水、サイクロン、津波、地震など、あらゆる場所で、千もの形態で、サタンはその力を行使しています。彼は実りつつある収穫物を破壊し、飢餓と苦難が続きます。こうした訪問はますます頻繁になり、悲惨なものとなるだろう。人間と動物の両方に破壊が訪れるでしょう。「地は嘆き、色あせ」、「民の高き所は……衰える。確かに、その地は住民のせいで汚されている。彼らは律法を犯し、掟を犯し、永遠の契約を破っているからである。」(イザヤ書 24 章) :4と5)。

そして、その偉大な詐欺師は、神に仕える者たちがこれらの悪を引き起こしていると人々を説得するでしょう。天の不興を買った階級は、自分たちのすべての不幸を、神の戒めに従うことが違反者に対する永遠の戒めとなっている人々のせいにするだろう。男性も女性も主日を犯して神を怒らせていること、彼らの罪が主日の遵守が厳格に施行されるまで止むことのない災いをもたらしていること、そして第四戒の主張をする人々がそれによって人々による崇敬を破壊していることを宣言するだろう。日曜日、彼らは人々を扇動し、人々が神の恵みと一時的な繁栄を取り戻すのを妨げます。したがって、神の僕に対して過去に強調された告発は、同様に十分に確立された根拠に基づいて繰り返されるだろう。「そして、アハブがエリヤを見たとき、アハブは彼に言った、「あなたがイスラエルを悩ませているのですか？」すると、彼は答えました、「私はイスラエルを悩ませません。しかし、あなたとあなたの父の家は、このことで神の戒めを忘れています」主よ、バアルに従いました」(列王記上18:17,18)。

偽りの告発によって人々の怒りが高まると、彼らは背教したイスラエルがエリヤに関してとった道と非常によく似た道を神の使者に関して追求するでしょう。

スピリチュアリズムを通して現れる奇跡を起こす力は、人間ではなく神に従うことを選んだ人々に対して影響力を及ぼします。霊たちからの通信は、神が日曜拒否者たちに自分たちの誤りを納得させるために彼らを遣わしたと宣言し、この地の法律は神の法律として従うべきであると主張するだろう。彼らは、道徳の低下した状態は日曜日の冒涇によって引き起こされているという宗教教師の証言を支持して、世界の甚大な不敬虔を嘆くだろう。彼の証言を受け入れることを拒否するすべての人に対して起こる憤りは大きいでしょう。

神の民とのこの最終的な衝突におけるサタンの政策は、天での大論争を開始した際に採用したものと同じであり、神政府の安定を促進すると公言しながら、密かにその打倒を確保するためにあらゆる努力を指揮していた。そして、彼がこのようにして達成しようとしていたまさにその仕事を、彼は忠実な天使たちに捧げました。同じ欺瞞政策がローマ教会の歴史に特徴を与えてきました。彼女は天の代表者として行動する一方、自分を神よりも高め、神の法を変えようとしていると公言しました。政府の下で

ローマの皆さん、福音への忠実さのゆえに死に苦しんだ人々は悪行者として非難されました。彼らはサタンと同盟を結んでいると言われました。そして、彼らを恥辱で覆い、人々の目に、そして彼ら自身の目にさえ、彼らを最も卑劣な犯罪者であるように見せるために、あらゆる手段が講じられました。だから今もそうなるだろう。サタンは神の律法を尊重する人々を滅ぼそうとするため、彼らを法律違反者として、神を汚す者として告発させ、世界に裁きをもたらすでしょう。

神は決して意志や良心を強制することはありません。しかし、サタンの絶え間ない手段は、他の方法では誘惑できない人々を支配することですが、それは残酷さによる抵抗です。彼は恐怖や力によって意識を支配し、自分自身への敬意を確保しようとしている。これを達成するために、彼は宗教当局と世俗当局の両方を通じて働きかけ、神の法に反して人間の法律を課すよう指導しています。

聖書の安息日を尊重する人々は、法と秩序の敵として、社会の道徳的制約を崩壊させ、無政府状態と腐敗を引き起こし、地上に神の裁きを招くとして非難されるでしょう。彼らの良心的な遠慮は、頑固さ、頑固さ、権威の軽蔑と呼ばれるでしょう。彼らは政府に対する不誠実で非難されるだろう。神の法の義務を否定する牧師は、神が定めた行政当局に服従する義務を説教壇から提示することになる。立法府や司法裁判所では、戒めを守る者は中傷され、非難されるでしょう。あなたの言葉には偽りの色が与えられるでしょう。あなたの動機について最悪の解釈がなされるでしょう。

プロテスタント教会は神の律法を擁護する聖書の明確な主張を拒否するため、聖書によって信仰を覆すことができない人々を黙らせようとするでしょう。彼らはその事実には目をつぶっているが、キリスト教世界の他の国々が行っていることを良心的に拒否する人々を迫害し、教皇の安息日の主張を認めるよう導く方針を現在とっている。

教会と国家の高官は団結して賄賂を贈ったり、すべての階級に日曜日を守るよう説得したり強制したりするだろう。神の権威の欠如は、抑圧的な法令によって補われるでしょう。政治の腐敗は正義への愛と真実への敬意を破壊しています。そして自由なアメリカでも、知事や議員は国民の支持を得るために、日曜日の遵守を強制する法律を求める国民の要求に屈するだろう。このような多大な犠牲を払った良心の自由は、もはや尊重されなくなるでしょう。近づいている紛争の中で、私たちは預言者の言葉が例示されているのを見ましょう。「竜はその女性に腹を立て、神の戒めを守り、イエスの証しを持っている残りの子孫たちと戦いに行った。海の砂の上に立っていました」(黙示録 12:17)。

第37章

聖書 — 安全策

「律法と証言に対して !もし彼らがこの言葉に従って語らなければ、彼らに朝はないでしょう。」 (イザヤ 8:20)。神の民は、偽教師の影響や闇の霊の欺瞞の力から身を守る手段として聖書に導かれています。神の言葉の明確な教えがその欺瞞を暴くので、サタンはあらゆる策略を使って人々が聖書の知識を得るのを妨げます。神の働きが復活するたびに、悪の君主はより激しい活動に目覚めていることに気づきます。今、キリストとその追隨者との最後の戦いに全力を尽くしてください。最後の大きな詐欺が間もなく私たちの前に持ち出されるに違いありません。反キリストは私たちの目の前でその素晴らしい業を行うでしょう。

偽物は真実に非常に近いため、聖書を介さない限り両者を区別することは不可能になります。聖典の証言を通して、あらゆる発言とあらゆる奇跡がテストされなければなりません。

神の戒めをすべて守ろうと努力する人は、反対され、嘲笑されるでしょう。彼らは神においてのみ抵抗することができます。目の前にある試練に立ち向かうためには、神の御言葉に明らかにされている神の御心を理解する必要があります。彼らは神の性格、統治、目的について正しい概念を持ち、それらに従って行動することによってのみ神を讃えることができます。

聖書の真理によって心を強めた人以外は、最後の争いに立ち向かうことができません。すべての魂に厳しい試練が訪れるだろう :私は人ではなく神に従うだろうか ?決定的な時はすぐそこまで来ています。私たちの足は、不変の神の言葉という岩の上に置かれていますか ?わたしたちは神の戒めとイエスの信仰をしっかりと守る用意ができていますか?

十字架につけられる前に、救い主は弟子たちに、自分は殺され、墓からよみがえらなければならないと説明されました。天の天使たちは主の言葉をキリストに従う人々の思いと心に刻むためにそこにいたのです。しかし弟子たちは、ローマのくびきから一時的に解放されることを待ち望んでいましたが、彼らのすべての希望の中心であったイエスが不名誉な死を遂げるという考えに耐えることができずして、覚えておく必要があった言葉が頭から抜け落ちてしまいました。そして裁判の時が来たとき、彼らは準備ができていなかったことに遭遇しました。キリストの死は、あたかもキリストが事前に警告しなかったかのように、彼らの希望を完全に打ち砕きました。このように預言では、キリストの言葉を通して弟子たちに明らかにされたのと同じくらい、未来が私たちの前に開かれています。試練の時代の終わりに関連した出来事と、苦悩の期間に向けた準備の取り組みが明確に示されています。しかし、群衆にはそれ以上のものはありません

これらの重要な真実を、彼らに明らかにされなかった場合よりも理解することができます。サタンは、彼らが救いのために賢明になるであろうあらゆる印象を奪い取ろうと警戒しており、苦難の時に彼らは準備ができていないことがわかります。

神が人間に警告を送る非常に重要な警告は、中天を飛んでいる聖なる天使によって宣言されるように表現されていますが、神は推論する力を授けられたすべての人がそのメッセージに耳を傾けるよう要求されます。

獣とその像の崇拝に対して恐ろしい判決が下されました (黙示録 14:9-)

11) は、獣の刻印が何なのか、またそれを受けないようにする方法を学ぶために、誰もが預言の応用的な研究につながるはずですが。しかし、大衆は真実に耳を閉ざし、寓話を好む。使徒パウロはそれを見ながら、

最後の日、「彼らが健全な教義に苦しまなくなる時が来るだろう」と述べた。(IIテモテ 4:3)。その時はすでに到来しています。群衆が聖書の真理を望んでいないのは、聖書の真理が彼らの罪深い、世を愛する心の欲望を妨げるからです。そしてサタンは彼らが好む欺瞞を彼らに提供します。

しかし、神は地球上に聖書を、そして聖書だけをすべての教義の標準として、またすべての改革の基礎として維持する民をもつでしょう。学識ある人々の意見、科学の演繹、教会の評議会の信条や決定は、教会と同じくらい多くて不一致であり、多数派の声を代表するものであるが、これらのどれも、またそのすべてが、何らかの賛成または反対の証拠とみなされるべきではない。宗教的信仰のポイント。教義や戒めを受け入れる前に、「主はこう言われる」という明確な要求をすべきです。

サタンは常に神ではなく人間に注目を集めようと努めています。彼は人々に、自分の義務が何なのかを自分で知るために聖書を調べるのではなく、司教、牧師、神学の教師にガイドとして頼るように導いています。そして、これらの指導者たちの心をコントロールすることで、自分の思い通りに群衆に影響を与えることができます。

キリストがいのちの言葉を語られるために来られたとき、一般の人々は喜んで彼の話を聞きました。そして多くの人が、司祭や君主さえもイエスを信じました。しかし、祭司長たちと国民は彼の教えを非難し、否定する決意を固めていました。彼らは、イエスに対する告発が無駄であることを理解していましたが、彼らは神の言葉を見て神の力と知恵の影響を感じずにはいられませんでした。それでも偏見に逃げていました。

彼らは、イエスの弟子になることを強いられることを恐れて、イエスの救世主としての性質を示す明確な証拠を拒否しました。イエスのこれらの敵対者たちは、人々が幼い頃から尊敬するように教えられ、その権威に対して暗黙のうちに頭を下げることに慣れていた人々でした。「どうして私たちの指導者や賢明な律法学者たちがイエスを信じないのでしょうか？もしイエスがキリストだったら、この敬虔な人たちはイエスを受け入れるのではないか？」と彼らは尋ねました。ユダヤ民族がその救い主を拒否するようになったのは、そのような教師たちの影響でした。

それらの司祭や指導者の中に働いていた精神は、今でも敬虔な職業に就いている多くの人々によって体現されています。彼らは、今回の特別な真理に関する聖書の証言を検討することを拒否しています。彼らは自分たちの数、富、人気を指摘し、真理の擁護者たちは数が少なく、貧しく、世間から隔絶された信仰を持っているとして軽蔑します。

キリストは、律法学者とパリサイ人による権威への不当な服従は、ユダヤ人が分散しても止まらないであろうと予言されました。イエスは預言的なビジョンを持って、あらゆる時代において教会にとって恐ろしい呪いであった良心を統治するために人間の権威を高める働きを予見されました。そして、律法学者やパリサイ人に対するイエスの恐ろしい非難や、これら盲目的な指導者に従わないよう人々に警告したことは、後世への戒めとして記録されました。

ローマ教会は聖職者のために聖書を解釈する権利を留保します。聖職者だけが神の言葉を説明する能力があるという主張の下で、聖書は一般の人々から取り上げられました。宗教改革により聖書はすべての人にアクセスできるようになりましたが、ローマが維持したのと同じ原則により、プロテスタント教会の群衆が自分で聖書を調べることができなくなりました。これらの人々は、教会の解釈に従って自分たちの教えを受け入れるように教えられています。そして、聖書の中で明らかに明らかにされているにもかかわらず、自分たちの信条や教会の確立された教えに反するものをあえて受け取らない人たちが何千人もいます。

聖書には偽教師に対する警告がたくさん書かれていることがわかっていますが、多くの人は自分の魂の保護を聖職者に委ねようとしています。今日、宗教を告白する人々が何千人もいますが、彼らは宗教指導者から教えられたこと以外に自分の信仰の理由を説明できません。彼らは救い主の教えにほとんど気付かず素通りしており、牧師の言葉に暗黙の信頼を置いています。しかし、大臣は無謬なのでしょう？彼らが光の担い手であることを神の御言葉から知らなければ、どうやって彼らの方向に自分の魂を委ねることができるのでしょうか？世界の使い古された道から外れる道徳的勇気の欠如により、多くの人が学識ある人の足跡をたどることになります。そして、自分たちで調査することに消極的なため、彼らは間違いの連鎖に絶望的に束縛されつつあります。彼らは、今回の真実が聖書の中に明確に明らかにされていることを知り、その宣言を注視している聖霊の力を感じていますが、聖職者の反対によって彼らが光から遠ざかることを許しています。理性と良心は確信していますが、これらの騙された魂は牧師と異なる考えをあえて持ちません。そして彼の個人的な認識、彼の永遠の利益は、他人の不信仰、プライド、偏見のために犠牲になります。

サタンが人間の影響力を利用して捕虜を罠にかける手段は数多くあります。彼は群衆を自分のもとに引き寄せ、キリストの十字架に敵対する者たちへの絹のような愛情の絆で彼らを結びつけます。あなたのつながりが父性、親孝行、夫婦間、社会的など、どのようなものであっても、その効果は同じです。真理に反対する者たちは良心をコントロールする力を行使し、その影響下にある魂は自らの義務の信念に従うだけの十分な勇気も独立性も持っていません。

真理と神の栄光は切り離せないものです。聖書がすぐ近くにある私たちが、間違っただけで意見を言って神を敬うことは不可能です。多くの人は、自分の人生が正しければ、その人が何を信じているかは問題ではないと主張します。しかし、人生は信仰によって形作られます。もし光と真実が私たちの手の届くところにあるのに、それらを聞いたり見たりする特権を享受することを怠るなら、私たちは事実上それらを拒否し、光ではなく闇を選んだことになります。

「人間にとって正しいと思われる道はあるが、その行き着く先は死の道である。」
(箴言 16:25)。神の御心を知るあらゆる機会があるとき、無知は間違いや罪の言い訳にはなりません。男が旅行していて、いくつかの道がある場所に到着し、標識がそれぞれの道の行き先を示しています。もし彼が標識の表示を考慮せず、自分にとって正しいと思われる道を選択するなら、彼は非常に誠実かもしれませんが、おそらく間違いなく間違っただけの道にいることに気づくでしょう。

神が私たちに御言葉を与えてくださったのは、私たちが神の教えを知り、神が私たちに何を求めておられるかを知ることができるようにするためでした。弁護士が「永遠の命を受け継ぐには何をすればよいのでしょうか？」と尋ねたとき、救い主は彼に聖書を引き合いに出し、「律法には何と書いてありますか？どう読むのですか？」とおっしゃいました。無知だからといって、老若男女が許されるわけではなく、神の律法違反に対する罰から解放されるわけでもありません。なぜなら、誰もが神の律法、その原則、主張を忠実に表現したものを手にしているからです。善意を持つだけでは十分ではありません。その人が正しいと思うこと、あるいは大臣の言うことが真実であることを行うだけでは十分ではありません。彼らの魂の救いが危機に瀕しているため、彼らは自分で聖書を調べなければなりません。あなたの信念は強いかもしれませんが、大臣が真実であると知っていることに頼るかもしれないが、それが根拠であってはなりません。彼らは天国への道順を示した地図を持っているので、何事も思い込みをしてはいけません。

すべての理性的存在の第一にして最高の義務は、真理とは何かを聖書から学び、次に光の中を歩み、他の人たちに模範に従うよう励ますことです。私たちは毎日熱心に聖書を研究し、あらゆる考えを比較検討し、聖句と聖句を比較しなければなりません。神の助けを得て、私たちは神の前で自分自身で答えなければならぬのと同じように、自分自身で意見を形成しなければなりません。

聖書の中で最も明確に明らかにされている真理は、偉大な知恵を装って、聖書には神秘的で秘密の意味、使用されている言語では明らかではない霊的な意味があると教える学識ある人々によって、疑惑と闇に包まれてきました。この人たちは偽教師です。イエスはそのような階級に対して、「聖書も神の力も知らないから、あなたは間違いを犯している」と宣言されました。（マルコ 12:24）。聖書の言語は、記号や図が使用されない限り、その明白な意味に従って説明されなければなりません。キリストは次のように約束されました。「だれでも自分の意志を行ないたいなら、それが神からのものかどうか、同じ教義によって分かるでしょう。」（ヨハネ 7:17）。もし人々が聖書をそのまま受け入れるとしたら、もし彼らの心を惑わし、混乱させる偽教師がいなかったら、天使たちを喜ばせる働きが達成され、今誤ってさまよっている何千人もの人々をキリストの罠に引き入れることになるだろう。

私たちは心のすべての能力を聖書の研究に応用し、定命の者に可能な限り、神の深い事柄を理解するために理解を働かせなければなりません。しかし、子供の従順さと服従こそが学習の真の精神を特徴づけるものであることを忘れてはなりません。聖書の中で遭遇する困難は、哲学的問題に取り組む際に使用されるのと同じ方法では決して克服できません。私たちは、多くの人が科学の領域に入るような自信を持って聖書の研究に取り組むべきではなく、むしろ神に敬虔に依存し、神の御心を知りたいという誠実な願望を持って取り組むべきです。私たちは偉大な「私」についての知識を得るために、謙虚で教えやすい精神を持って臨まなければなりません。そうしないと、邪悪な天使が私たちの心を盲目にし、私たちの心をかたくなにして、私たちが真実に感動することができないようにします。

学者たちが謎であると言う聖書の部分や、重要ではないとして無視されている部分は、キリストの学校で教えられた人にとっては慰めと教えに満ちています。多くの神学者が神の言葉をより明確に理解していない理由の1つは、彼らが実践したくない真理に目を閉ざしていることです。聖書の真理を理解することは、研究に適用される知的力よりも、目的の単一性、正義への熱烈な願望に依存します。

祈りなしに聖書を学ぶべきではありません。聖霊だけが、私たちにわかりやすいものの重要性を感じさせたり、理解しにくい真実を歪めないようにすることができます。私たちが神の言葉の美しさに魅了され、警告によって戒められ、あるいは約束によって励まされ強められるように、神の言葉を理解する心を準備させるのが天の天使の役割です。私たちは詩編作者の「あなたの律法から生まれる不思議なことが見えるように、目を開いてください」という願いを自分のものにする必要があります。（詩 119:18）。誘惑は、祈りと聖書の研究を怠ることで、容易に神の約束を思い出し、聖書の武器でサタンに立ち向かうことができないため、誘惑は抗いがたいものであるように見えます。しかし、天使たちは神聖なことを教えてもらいたいと願う人々を取り囲んでいます。そして、非常に必要なときには、彼らはあなたが必要としているまさにその真実を思い出させてくれるでしょう。したがって、「敵が洪水のように来るとき、主の霊は彼に対してその規準を立てるでしょう」（イザヤ書 59:19）。

イエスは弟子たちにこう約束されました。「父がわたしの名によって遣わしてくださる助け手、聖霊は、あなたたちにすべてのことを教え、わたしがあなたたちに言ったことすべてを思い出させてくださいます。」(ヨハネ14:26)。しかし、危機の際に神の御霊が私たちの記憶に呼び起こすことができるように、キリストの教えは事前に記憶に留めておかなければなりません。ダビデは、「私はあなたに対して罪を犯さないように、あなたの御言葉を心の中に隠しました」(詩119:11)としました。

自分の永遠の利益を大切にする人は皆、懐疑論の侵入に対して警戒しなければなりません。真実の基盤そのものが攻撃されるでしょう。皮肉や詭弁、現代の不貞に関する陰湿で疫病のような教えが及ばない範囲にとどまることは不可能です。サタンは誘惑をあらゆる階級に適応させます。彼は文盲の人々を嘲笑や軽蔑で攻撃する一方、教育を受けた人々には科学的反論や哲学的推論で対応し、同様に聖書への不信感や聖書への軽蔑を刺激するように計算されている。経験の少ない若者でさえ、キリスト教の基本原則について疑いをほのめかすことがあります。そして、この若い頃の不倫は、表面的ではありませんが、影響力を持っています。このようにして、多くの人が先祖たちの信仰を嘲笑し、恵みの御霊を軽蔑するように導かれています(ヘブル10:29)。神への栄誉と世界への祝福となると約束した多くの人生が、不信仰の憎しみの息吹によって焦がされてきました。人間の理性の傲慢な決定を信頼し、神の知恵の助けなしに神の神秘を説明し、真実に到達できると想像している人は皆、サタンの束縛に陥っています。

私たちは、この世界の歴史の中で最も厳粛な時代に生きています。地球の計り知れない多くの人々の運命が決定されようとしています。私たち自身の将来の幸福、そして他の魂の救いも、私たちが今追求する道にかかっています。私たちは真理の御霊に導かれる必要があります。キリストに従う者は皆、「主よ、あなたは私に何をしてほしいのですか？」と熱心に尋ねるべきです。私たちは断食と祈りによって主の前にへりくだり、主の御言葉、特に裁きの場面についてよく黙想する必要があります。私たちは今、神の事柄について深く生きた経験を求めるべきです。無駄にする時間は一分もありません。非常に重要な出来事が私たちの周りで起こっています。私たちはサタンの魅惑的な領域にいます。神の番兵たちよ、眠らないでください。敵は私たちのすぐ近くに潜んでおり、あなたがリラックスして眠くなったら、いつでもあなたに飛びかかって獲物にしようとしています。

多くの人は神の前での自分の本当の立場について誤解しています。彼らは、自分がしていない悪い行いを自画自賛し、神が彼らに求めているにもかかわらず、実行することを怠っている善良で崇高な行いを列挙することを忘れてしています。神の園の木であるだけでは十分ではありません。彼らは実を結ぶことで神の期待に応えなければなりません。神は彼らが、神の強められる恵みによってできるはずの善をすべて果たせなかった責任を彼らに負わせます。天の書には、彼らは地上の迷惑者として記録されています。しかし、このクラスの場合でも、まったく絶望的なわけではありません。忍耐強い愛の心は、神の憐れみを軽蔑し、神の恵みを乱用した人々に対して今も懇願しています。「そこで彼はこう言う、『眠っている者よ、目覚めよ、死者の中から立ち上がれ、そうすればキリストがあなたを啓いてくださるだろう。だから、どのように歩むかに気をつけなさい...時間を償うためだ。日々は悪であるからだ。』

(エフェソス 5:14-16)。

試練の時が来ると、神の言葉を生活の規律とした人々が明らかになります。夏には、常緑樹と他の樹木の違いはわかりません。しかし、冬の突風が吹くと、常緑樹はそのまま残りますが、他の木々は葉を失い、葉を失います。したがって、偽りの心を持った自称クリスチャンは今や真のクリスチャンと区別できないかもしれません。しかし、その時が来ます、そしてそれは私たちの目の前にあります。

違いが明らかになるでしょう。反対派が生じ、狂信と不寛容が再び表面化し、迫害が再燃し、不誠実で偽善者は動揺して信仰を放棄するでしょう。しかし、真のクリスチャンは岩のようにしっかりと立ち、彼の信仰はより強くなり、彼の希望は繁栄の時代よりも明るくなります。

詩編作者はこう言います、「私はあなたのあかしを思い思います」。「あなたの戒めを通して、私は理解するようになりました。したがって、私はあらゆる誤った道を憎みます。」（詩 119:99 と 104）。

「知恵を見出す人は幸いである。」 「それは水辺に植えられた木のようなもので、流れに向かって根を広げ、暑さが来ても恐れることなく、葉は緑のままであり、乾燥した年には苦勞せず、実を結ぶのをやめます。」（箴言 3:13; エレミヤ書 17:8）。

第38章

最終警告

「私は、別の天使が大きな力を持って天から降りてくるのを見た。そして地はその栄光で明るくなった。そして彼は大声で力強く叫んで言った、「大いなるバビロンは倒れた、倒れ、そして、悪魔、あらゆる汚れた霊の性交、そしてあらゆる汚れた憎むべき鳥の性交。」 「また、私は天から別の声を聞いた。『私の民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女の災いを受けないように。』」（黙示録 18:1,2,4）。

この箇所は、黙示録 14 章の第二天使によって宣言されたバビロンの崩壊の発表が、そのメッセージが発表されて以来、バビロンを構成するさまざまな組織に忍び込んでいる腐敗についての追加の言及とともに繰り返されなければならない時を示しています。宗教界の悲惨な状況がここで説明されています。真実を拒否するたびに、人々の心はますます曇り、心はますます汚くなり、ついには大胆な不貞行為に囚われてしまいます。神の脅威を無視して、彼らは十戒を神聖視する人々を迫害するようになるまで、十戒の戒律の一つを踏みにじり続けるだろう。キリストは御言葉と人々に投げかけられた軽蔑によって軽視されています。スピリチュアリズムの教えが教会に受け入れられると、肉の心に課せられた制限が取り除かれ、宗教的職業は最も忌まわしい不正を隠すための外套となるでしょう。霊的な現れを信じると、悪霊の欺瞞や教義への扉が開かれ、したがって邪悪な天使の影響が教会に感じられることとなります。

バビロンについては、預言によって定められた時に、「彼女の罪は天にまで積み重なっており、神は彼女の咎を覚えておられた」と宣言されています。（アポック。18:5）。彼女は罪の量を満たしており、破滅が彼女に降りかかろうとしています。しかし、神は依然としてバビロンに民を持っておられます。そして、神の裁きが訪れる前に、これらの忠実な者たちは、その罪にあずからず、その災いに巻き込まれないように、そこから呼び出されなければなりません。この運動が、天から降臨し、その栄光で地上を照らし、大声で力強く叫び、バビロンの罪を告げる天使によって象徴されるのはこのためである。彼女のメッセージに関連して、「私の民よ、彼女から出て行きなさい」という呼びかけが聞こえます。これらの警告は、第三の天使のメッセージに加わり、地球の住民に与えられる最後の警告となります。

世界が最終的にもたらす結果は恐ろしいものです。神の戒めに反して戦争を行うために団結する地球の力は、「小さい者も大きい者も、富める者も貧しい者も、自由と絆を持った者」（黙示録 13:16）のすべての人が、次のことによって教会の習慣に従うことを布告するでしょう。偽土曜日の観察。従うことを拒否する者は全員、民法の規則によって罰せられ、最終的には死刑に値すると宣告されます。一方、神の律法は創造主の安息の日を課し、従順を要求し、その戒めに違反するすべての人を神の正義の怒りで脅かします。

このように明確に述べられているように、神の律法に違反して人間の定めに従う者は獣の刻印を受けることとなります。彼は神の代わりに自分が従うことを選んだ権力への忠誠のしるしを受け入れます。天からの警告はこうである。「もし誰かが獣とその像を崇拜し、額や手にその刻印を受けると、その人は混ぜずに杯に注がれた神の怒りのワインも飲むことになる。神の怒りだ」（黙示録 14:9,10）。

しかし、真理が自分の心と良心に提示され、神によって拒否されるまでは、誰も神の怒りに耐えることはできません。今回の特別な真実を聞く機会がなかった人もたくさんいます。第四戒の義務は、真の意味で彼らに提示されることはありませんでした。あらゆる心を読み取り、あらゆる動機を考慮する彼は、真実の知識を望む者がこの紛争の結果についてだまされることを許さないでしょう。この法令は盲目的に国民に押しつけられるものではない。各人は、賢明な意思決定を行うのに十分な光を受け取ることができます。

土曜日は特に物議を醸す真実のポイントであるため、忠誠心が試される大きなテストとなるだろう。最後の試練が人間に降りかかる時、神に仕える者と仕えない者との間に明確な線が引かれることになる。国の法律に従い、第四戒に反して偽りの安息日を遵守することは、神に敵対する勢力に対する忠誠の告白であるのに対し、真の安息日を遵守することは、神の法に従って、それは創造主への忠誠の証拠です。ある階級は、地上の力に対する服従のしるしを受け入れることによって獣の刻印を受けますが、もう一方の階級は、神の権威に対する服従のしるしを優先し、神の印章を受けます。

これまで、第三の天使のメッセージの真実を提示した人々は、単なる警戒者とみなされることが多かった。米国では宗教的不寛容が支配を強め、教会と国家が団結して神の戒めを守る人々を迫害するだろうという彼の予測は、根拠がなくばかげているとして却下された。この国は、これまでそうであったこと、すなわち信教の自由の擁護者以外の何者にもなることは決してできない、と自信を持って宣言された。しかし、日曜日の義務的遵守の問題が広く騒がれている中、長い間疑われ、信じられなかったこの出来事が、まるで入り口に立ったかのように確認されています。そして3番目のメッセージは、以前には起こり得なかった効果を生み出します。

あらゆる世代において、神は世と教会の両方で罪を叱責するためにご自分の僕たちを遣わしてきました。しかし、人々はスムーズなことを言われることを望んでおり、純粋で単純な真実を受け入れられません。多くの改革者は活動を始めるにあたり、教会と国家の罪を攻撃するには細心の注意を払うことを決意しました。彼らは、純粋なクリスチャンの生き方の模範によって、人々を聖書の教義に立ち返らせることを望んでいた。しかし、神の御霊がエリヤに臨んだのと同じように彼らの上に臨み、不敬虔な王と背教した民の罪を叱責するよう彼に促しました。彼らは、聖書の明確な表現、つまり提示することに消極的だった教義を説教せずにはいられませんでした。彼らは **(スマートマークは削除されました)** 真実と自分たちの魂を脅かす危険について熱心に宣言する必要に迫られていると感じました。主が彼らに与えられた言葉を、彼らは起こり得る結果を気にせず、恐れることなく宣言したので、人々はその警告に耳を傾けざるを得ませんでした。

このようにして、第三の天使のメッセージが宣言されるでしょう。それがより大きな力で与えられる時が来ると、主は謙虚な手段を通して働き、自らを神への奉仕に捧げる人々の心をご導いてくださいます。むしろ、労働者は教育機関で得られる学術的な準備によってではなく、主の御霊の油注ぎによって資格を得るのです。信仰と祈りを持つ人々は、神が与えてくださった言葉を宣言しながら、聖なる熱意を持って出かけなければなりません。バビロンの罪が明らかになります。公権力によって課せられた教会の義務的遵守、スピリチュアリズムの侵略、秘密裏ではあるが教皇権力の急速な進歩がもたらした恐ろしい結果は、すべて暴露されることになるだろう。これらの厳粛な警告に人々は感銘を受けるでしょう。このような言葉を聞いたことのない何千人もの人が聞くでしょう。彼らは、バビロンが教会であり、その誤りと罪のために、またバビロンがバビロンから送られた真理を拒否したために墮落した教会であるという証言を驚きをもって聞くことになるでしょう。

天国の人々が「物事は本当にこのようなものなののでしょうか?」という不安な疑問を抱いて古代の教師に頼ると、牧師たちは寓話を披露し、楽しいことを預言して、人々の恐怖を静め、高まった良心を沈黙させます。しかし、多くの人々が人間の単なる権威に満足することを拒否し、「主はこう言われる」という明確な説明を求めているため、民衆の奉仕活動は、昔のパリサイ人のように、自分たちの権威が疑問視されていることに怒りを感じて、そのメッセージが来ると非難するだろう。そして、罪を愛する群衆を扇動して、それを宣言する人々を侮辱し、迫害するでしょう。

論争が新たな分野に広がり、踏みこまれた神の律法に人々の注目が集まるにつれ、サタンが動き出す。メッセージを支援する力は、それに反対する人々を激怒させるだけです。聖職者たちは、光が自分たちの群れを照らすことを恐れて、光を遮断するためにほとんど超人的な努力をします。彼らはあらゆる手段を講じて、これらの重要な問題についての議論を避けるよう努めるだろう。教会は市民権力の強力な力に訴え、この取り組みにおいて教皇主義者とプロテスタントは団結することになる。日曜日を課す運動がより大胆かつ決定的になると、戒めを守る人々に対して法律が求められるようになるだろう。

彼らは罰金や投獄で脅迫され、信仰を放棄するよう勧誘として影響力のある地位やその他の報酬や利益を提供される人もいるだろう。しかし、彼の動かない答えは、「神の言葉によって私たちの間違いを示してください」であり、これは同様の状況でルターが出したのと同じ要求です。法廷で罪状認否を受けた人たちは、真実を精力的に立証し、それを聞いた人たちは、神のすべての戒めを守る立場をとるよう導かれるでしょう。こうして、そうでなければこれらの真実を何も知らないであろう何千もの人々に光がもたらされるでしょう。

神の言葉に対する良心的な従順は反逆として扱われるでしょう。

サタンに盲目になった父親は、信じる息子に対して残酷で厳しい態度をとるでしょう。上司や愛人は戒めを守る従業員を抑圧するでしょう。愛情は引っ込められます。子供たちは相続権を剥奪され、家から追い出されるでしょう。「キリスト・イエスにおいて敬虔に生きる者は皆、迫害に苦しむであろう」という使徒パウロの言葉は文字通り成就します。(IIテモテ 3:12)。真理の擁護者たちは日曜日の休みを尊重することを拒否するため、その中には刑務所に入れられたり追放されたり、奴隷として扱われる人もいます。人間の知恵の目から見ると、これらすべては今では不可能に見えますが、抑制的な神の霊が人間から引き離され、神の戒めを憎むサタンの支配下に置かれると、奇妙なことが起こるでしょう。神への恐れと愛がなくなると、心は非常に残酷になることがあります。

嵐が近づくにつれ、第三の天使のメッセージへの信仰を告白しながらも、真理への従順によって神聖化されていない多くの階級が、自らの立場を放棄し、敵対者の仲間入りをする。世界との結合とその精神への参加を通じて、彼らは物事をほぼ同じ観点から見るようになります。そしてテストが来ると、彼らはより簡単でより人気のある方を選択する準備ができていくことに気づくでしょう。才能と愛想の良い態度を持ち、かつては真理を喜んでいた人々が、その能力を利用して魂を欺き、誤解させます。彼らはかつての同胞にとって最も憎むべき敵となる。安息日の守り人がその信仰について答えるために法廷に引き出されるとき、これらの背教者たちは、彼らに偽りの光を当て、彼らを非難し、偽りの証言とほめかしを通じて支配者たちを彼らに対して動かすためのサタンの最も効率的な手先となるだろう。

この迫害の時代において、主の僕たちの信仰は試されます。彼らは神と神の言葉だけに目を留めながら、忠実に警告を発しました。神の御霊が彼らの心に働いて、彼らが話すことを制約した。聖なる熱意と抗しがたい神の衝動に刺激されて、彼らは主が与えられた御言葉を人々に説教することがどのような結果をもたらすかを冷静に計算することをやめることなく、自らの義務を果たしました。

彼らは自分たちの一時的な利益を考慮しませんでしたし、自分たちの評判や生命を保とうともしませんでした。しかし、反対と傷害の嵐が彼らに襲いかかると、不安に押しつぶされそうになり、「もし自分たちの言葉がもたらす結果を予見していれば、私たちは平和でいられたらう」と叫びたくなる人もいよう。彼らは困難に囲まれていることに気づきます。サタンは激しい誘惑で彼らを攻撃します。彼らが行った仕事は、彼らが達成できる能力をはるかに超えているようです。彼らは破壊の脅威にさらされています。しかし、彼らを活気づけた熱意は失われてしまいました。戻ることにはできません。そして、自分たちのまったくの無力さを感じて、彼らは力を求めて力のある人のもとへ走ります。彼らは、自分たちが話した言葉が自分たちのものではなく、警告を与えるよう命じた方のものであることを覚えています。神は彼らの心に真理を置き、彼らはそれを宣言せずにはいられません。

過去に神の人間も同様の試練を経験しました。

ウィクリフ、ハス、ルーサー、ティンダル、バクスター、ウェスリーは、すべての教義は聖書によって証明されなければならないと強調し、聖書が非難するものはすべて放棄すると宣言した。容赦のない怒りでこれらの人々に対して迫害が始まりましたが、彼らは真実を宣言することをやめませんでした。教会の歴史のさまざまな時期は、それぞれ、その時代の神の民の必要に合わせて、何らかの特別な真理が発展したことを特徴としています。新たな真実が生まれるたびに、憎しみと反対との間に道が切り開かれてきました。彼の光の祝福を受けた人々は誘惑や試練を経験しました。主は緊急事態において人々に特別な真理を与えられます。あえてそれを公言しない人がいるだろうか？神はご自分のしもべたちに、究極の慈悲の招きを世界に提示するよう命じられます。彼らは魂が危険にさらされる場合を除き、沈黙を続けることはできません。キリストの大使はその結果とは何の関係もありません。彼らは自分の義務を果たし、結果を神に委ねなければなりません。

反対派がさらに激しくなると、神の僕たちは再び当惑する。なぜなら、彼らにとっては彼らが危機を引き起こしたように見えるからです。しかし、良心と神の言葉は彼らの方向が正しいことを保証し、試練は続くものの、彼らはそれに耐えられるように強められます。紛争はさらに悪化し、痛ましいものになりますが、この緊急事態とともに彼らの信仰と勇気は高まります。彼の証言は次のとおりです。「私たちは、世の好意を得たいために、神の御言葉を改ざんしたり、神の聖法を分割したり、一部を重要なものと別の部分をそうでないものに分類したりしようとはあてしません。私たちが仕えている主は私たちを救い出すことができになります。」キリストは地球の力に勝利しました。

我々はすでに敗北した世界を恐れているのだろうか？」

さまざまな形での迫害は、サタンが存在し、キリスト教が生命力を持っている限り続く原則の発展です。闇の軍勢からの反対を招かず、神に仕える人は誰もいません。邪悪な天使たちは、自分たちの影響で獲物があなたの手から奪われることを恐れて、あなたを攻撃するでしょう。

悪人は忠実な者の模範によって非難され、悪の勢力と団結し、魅惑的な誘惑によって悪の勢力を神から引き離そうとします。これらが成功しない場合、良心を強制するために強制力が訴えられます。

しかし、イエスが人間のとりなし者として天の聖所に留まる限り、聖霊の抑制的な影響は支配者も人々も同様に感じられるでしょう。現在でも国の法律をある程度まで統制している。もしこれらの戒律がなかったら、世界の状況は今よりもさらに悪化していただろう。私たちの支配者の多くはサタンの積極的な手先ですが、神はまたこの国の指導者たちの間でもご自身の手段を持っています。敵は神の働きを大きく妨げる措置を提案するよう召使たちに促している。しかし、主を恐れる政治家は聖なる天使の影響を受けて、答えのない議論でそのような命題に反対します。したがって、人間の戦いは悪の強力な流れを阻止するでしょう。真理の敵の反対は抑制されるだろう

それは、第三の天使のメッセージがその働きを達成できるようにするためです。最後の警告が発せられるとき、それは主が今働いておられる著名な人々の注目を集め、その中の何人かはそれを受け入れ、あらゆる苦難の時を乗り越えて神の民に加わるでしょう。

第三の天使のメッセージを宣言することに参加する天使は、その栄光で全地球を照らさなければなりません。ここでは、世界的な範囲と並外れた力を持つ作品が予測されています。1840年から1844年にかけてのアドベンチスト運動は神の力の輝かしい現れでした。最初の天使のメッセージは世界中のあらゆる宣教地に伝えられ、一部の国では16世紀の宗教改革以来、どの国でも最大の宗教的関心が見られました。しかし、第三の天使の最後の警告の下での力強い動きによって、これははるかに超えられるに違いありません。

この働きはペンテコステの日の働きと似ています。福音の宣教の初めに、聖霊の注ぎによって貴重な種の発芽をもたらす「初期の雨」が与えられたのと同じように、「後の雨」は、その終わりが近づくと、種子が熟すために与えられます。収穫。「私たちに主を知らせ、知り続けましょう。主が来られるのは朝です。主は雨のように、地を潤す後の雨のように、私たちのところに来られます。」(オセ6:3)。「シオンの子らよ、あなたがたは、あなたの神、主にあつて喜び、喜びなさい。主はあなたに義の教師を与え、早い雨も後の雨も雨を降らせてくださるからである。」(ヨエル書2:23)。「そして終わりの日には、わたしはすべての肉なる者の上にわたしの霊を注ぐ、と神は言われる。」「そして、主の名を呼び求める者は救われるであろう」(使徒行伝2:17、21)。福音の偉大な働きは、その始まりを特徴づけた神の力の発現よりも少ない形で終わってはなりません。福音の宣言の初めに、前の雨が降り注いで成就した預言は、福音の宣言の始まりである後の雨の中で再び成就しなければなりません。これらは、使徒ペテロが次のように言ったときに念頭に置いていた「さわやかさの時」です。彼をイエスキリストに」(使徒行伝3:19,20)。

神のしもべたちは、顔を照らし、聖なる奉獻に燃え上がり、天からのメッセージを宣言するために場所から場所へ急いで行き、地球中の何千もの声によって警告が与えられます。奇跡が行われ、病人は癒され、しるしと不思議な出来事が信者たちに起こります。サタンはまた、偽りの奇跡を行い、人間の目の前で天から火を降らせることさえあります(黙示録13:13)。こうして地球の住民は自らの立場をとるよう導かれることになる。

メッセージは議論によってではなく、神の御霊による深い確信によって伝えられます。論点が提示された。種は蒔かれ、これから芽が出て実を結びます。宣教者が配布した出版物は影響力を及ぼしています。しかし、心に感動を覚えた多くの人々、真理を完全に理解することも、それに従うこともできませんでした。今、光の光線があらゆる場所に浸透し、真実がその明瞭さで見られ、誠実な神の子たちは彼らを捕らえていた絆を打ち破ります。

家族のつながりや教会のつながりは、今ではそれらを引き留める力がありません。真理に反するあらゆる手段が組み合わさったにもかかわらず、非常に多くの人々が主の側に立っています。

第39章

苦悩の時

「その時、あなた方の民の子らを代表する大君ミカエルが立ち上がり、それまで国家が存在して以来かつてなかったような困難の時が来るでしょう。しかしその時、あなた方の民はこの本に書かれているのが見つかった人全員に届けられます。」（ダニエル書 12:1）。

第三の天使のメッセージが結論に達すると、慈悲はもはや地上の罪を犯した住民に有利に働くことはなくなります。神の民は自分たちの働きを完了するでしょう。彼は「後の雨」、つまり「主の御前からのさわやかさ」（使徒3:19）を受けており、目の前の試練の時に備えています。天国では、天使たちがある場所から別の場所へと急いでいます。地球から帰還した天使は、自分の仕事が終わったことを告げる。最後の試練が世界に適用され、神の戒めに忠実であることを証明した者は皆、「生ける神の印章」を受け取りました（黙示録 7:2）。それからイエスは天の聖所でのとりなしの働きを終えます。彼は手を上げ、大きな声で「完了しました」と言い、キリストが厳粛な発表をすると、天使の軍勢全員が冠を脱ぎます。「不正な者は、なお不正を行ないなさい。汚れている者は、なおも汚れたままにしないで。義なる者は、なお義を行ないなさい。聖なる者は、なお聖められなさい。」（アポック。

22:11）。すべての事件は生死が決定されました。キリストはご自分の民のために贖いをし、彼らの罪を消し去りました。彼の臣民の数は完成しました。「そして、全天の下にある王国と支配権と諸王国の威厳」（ダニエル書 7:27）は、救いの相続者たちに与えられようとしており、イエスは王の中の王、また人々の主として統治されることになっています。領主たち。

彼が聖域を離れると、闇が地球の住民を覆います。

その恐ろしい時代に、義人はとりなしなしで聖なる神の目の前で生きなければなりません。邪悪な者たちに向けられていた制止は取り除かれ、サタンはついに悔い改めない者たちを完全に支配するようになりました。神の忍耐は終わりを迎えました。世界は神の慈悲を拒否し、神の愛を軽蔑し、神の律法を踏みにじりました。

邪悪な者たちは執行猶予の限界を超えました。神の霊は抵抗し続けましたが、ついに取り除かれました。神の恵みの保護がなければ、彼らは邪悪な者から身を守ることができません。その後、サタンは地球の住民を最後の大患難に投げ込むでしょう。神の天使たちが人間の情熱による破壊的な風を抑えるのをやめるとき、争いの要素はすべて解放されるでしょう。全世界は、過去にエルサレムに降りかかった破滅よりも恐ろしい破滅に包まれるでしょう。

一人の天使がエジプト人の初子をすべて滅ぼし、地上を嘆きの声で満たしました。ダビデが人口調査を行って神を怒らせたとき、天使はその恐ろしい滅びを引き起こし、それによって彼の罪が罰されました。神の命令の下で聖なる天使が使用するのと同じ破壊的な力が、神が許可した場合には邪悪な天使によって行使されます。今、荒廃を広範囲に広げるための神の許可を待っている力が用意されています。

神の法を尊重する人々は、世界に裁きをもたらすとして非難され、恐ろしい自然の動揺、人間の戦争と流血、地球を不幸で満たすあらゆるものの原因とみなされます。最後の警告メッセージに従う力が邪悪な者たちを激怒させました。そのメッセージを受け取ったすべての人に対して神の怒りが燃え上がり、サタンは憎しみと迫害の精神をさらに激化させるでしょう。

神の臨在がついにユダヤ国民から取り除かれたとき、祭司も人々もそれに気づきませんでした。サタンの支配下にあり、最も恐ろしく倒錯した情熱に操られているにもかかわらず、彼らは依然として自分たちを神に選ばれた者だと考えていました。神殿奉仕は続けられた。汚れた祭壇に犠牲がささげられ、神の最愛の御子の血で罪を犯し、神の牧師や使徒たちを死に至るまで迫害する民に対して、毎日神の祝福が呼び掛けられました。したがって、聖域の取り消し不可能な決定が下され、世界の運命が永遠に決定される時、地球の住民はそれを知りません。

宗教の形式は、最終的には神の御霊が取り除かれるであろう人々によって維持され続けるでしょう。そして、悪の君主がその邪悪な計画を実行するよう彼らを鼓舞する悪魔のような熱意は、神への熱意に似ています。

安息日がキリスト教世界全体で特別な論争の的となっており、宗教当局と世俗当局が連携して日曜日の遵守を強制しているため、少数派が大衆の要求に従うことを頑なに拒否しているため、安息日は普遍的な刑罰の対象となるだろう。教会法と州法の制度に反対し続ける少数の人々には免罪符が与えられるべきではないと主張されるだろう。国々全体が混乱と不法状態に陥るよりも、彼らが苦しむ方が良く、と。同じ議論が、1900年以上前に「人民の指導者たち」によってキリストに対して用いられました。賢明なカヤパはこう言いました、「国全体が滅びないように、一人の人が民のために死ななければなりません」（ヨハネ11:50）。この議論は決定的であるように見えます。そして最終的に、第四戒の安息日を神聖化する者たちに対して法令が発令され、彼らは最も厳しい刑罰に値すると非難され、一定期間後に人民に彼らを殺害する自由が与えられるだろう。旧世界のローマ主義と新世界の背教的なプロテスタントは、すべての神の戒めを尊重する人々に対して同様の行動をとるでしょう。

そのとき、神の民はヤコブの苦難の時として預言者が描写した苦難と苦悩の場面に入ることになります。ああ、その日はとても素晴らしい日で、これに勝るものはありませんでした。ヤコブにとっては苦難の時ですが、彼はそこから救われるでしょう。」（エレミヤ 30:5-）

7)。

ヤコブがエサウの手から救われるよう祈りながら戦ったときの苦悩の夜（創世記 32:24-30）は、苦難の時代の神の民の経験を表しています。ヤコブは、本来はエサウに宛てた父親の祝福を確保するために行われた欺瞞のせいで、兄の致命的な脅迫に怯え、命からがら逃げていました。長年亡命生活を送った後、神の命令により彼は女性、子供、羊の群れとともに故郷に戻りました。国の国境に到着すると、戦士の一団を指揮するエサウが近づいてきたという知らせを聞いて恐怖でいっぱいになり、疑いもなく復讐する気になった。ジェイコブのキャラバンは武器も無防備で、今にも倒れ、暴力と虐殺の犠牲者となりそうだった。そして、不安と恐怖の重荷に、自責の念という圧倒的な重みが加わりました。なぜなら、この危険を引き起こしたのは彼自身の罪だったからです。彼の唯一の希望は神の憐れみでした。あなたの唯一の防御は祈りであるべきです。

しかし、ジェイコブは犯した過ちを修復し、差し迫った危険を回避するために、できる限りやり残したことはありません。したがって、キリストに従う者は、苦難の時が近づくにつれ、偏見を取り除き、良心の自由を脅かす危険を避けるために、適切な光の中に自分自身を置くようあらゆる努力をすべきである。

ヤコブの苦悩を目撃しないように家族を先に送ったので、ヤコブは神にとりなしをするために一人残されました。彼は自分の罪を告白し、感謝の気持ちを持って自分に対する神の憐れみを認めますが、同時に深い屈辱とともに、両親と交わした契約、そしてベテルとその地での夜の幻の中で交わされた約束の履行を懇願します。彼の亡命のこと。彼の人生の危機が到来した。すべてが危険にさらされています。暗闇と孤独の中で、彼は祈り続け、神の前にへりくだっています。突然、彼は肩に手が置かれたのを感じました。自分の命を狙う敵だと思い、必死の思いで敵と戦う。夜明けに、見知らぬ人は超人的な力を発揮します。触れると、この屈強な男は麻痺したように見え、謎の敵対者の首に身を投げ出し、泣きながら懇願する。ヤコブは今、自分が契約の天使と格闘していたことを知りました。障害を負い、突き刺すような痛みを苦しんでいるにもかかわらず、彼は自分の目的を放棄しません。長い間、彼は自分の罪に対する困惑、後悔、苦悩に耐えてきました。今、彼は自分が許されていることを確信する必要がありました。神聖な訪問者は去ろうとします。しかし、ヤコブはイエスにしがみついて祝福を懇願します。天使は「夜が明けたから行かせてください」と主張します。しかし族長は「あなたが私を祝福してくださらない限り、私はあなたを手放しません」と叫びます。ここには何という自信、何という堅実さ、そして忍耐力が示されているのでしょうか。もしこの発言が高慢で傲慢な主張であったなら、ヤコブは即座に破滅したでしょう。しかし、彼の確信は、自分の弱さと無価値を告白しながらも、契約を守ってくださる神の憐れみを信頼している人の確信でした。

「彼は天使と戦って勝利した」(オセ12:4)。この誤った罪深い人間は、屈辱、悔い改め、自己放棄を経て、天の威厳に打ち勝ち、震えながらも神の約束にしっかりと固執し、無限の愛の心は罪人の嘆願から目を背けることができませんでした。彼の勝利の証拠と、他の人たちに彼の例に倣うよう奨励するために、彼の名前は、彼に罪を思い出させる名前から彼の勝利を祝う名前に変更されました。そして、ヤコブが神に対して勝利したという事実は、彼が人間に対しても勝利するという確信を与えました。主が彼を守ってくださったので、彼はもはや兄弟の怒りに直面することを恐れていませんでした。

サタンは神の天使たちの前でヤコブを告発し、彼の罪のために彼を滅ぼす権利があると主張しました。サタンはエサウに敵対する行進をそそのかし、族長の長い夜の闘いの間、サタンはエサウを落胆させ、神への執着を打ち砕くことを目的として、エサウに罪の意識を植え付けようと努めた。ヤコブは絶望に追い込まれそうになりました。しかし彼は、天の助けがなければ屈服するに違いないことを知っていました。

彼は自分の大きな罪を心から悔い改め、神の憐れみを懇願しました。彼は目的を放棄せず、むしろ天使にしっかりとしがみつき、天使が勝利するまで、熱烈で苦痛に満ちた叫び声をあげて嘆願を主張した。

サタンがエサウをそそのかしてヤコブに向かって進軍させたように、サタンもまた、困難の時に悪人たちをそそのかして神の民を滅ぼすことになるでしょう。そしてヤコブを非難したように、彼は神の民を非難するでしょう。彼は世界の住民を臣民とみなしています。しかし、神の戒めを守る少数のグループが神の優位性に抵抗しています。自分の存在を地球上から消すことができれば、彼の勝利は完全なものとなる。

彼は聖なる天使たちが彼らを守っているのを見て、彼らの罪は許されると推測します。しかし彼は、自分の事件が天の聖域で決定されたことを知りません。大敵は、自分が犯すように誘惑した人々（「彼ら」を削除し、「に」を挿入）の罪について正確な知識を持っており、これらの罪を最も推定された光の中で主の前に提示し、これらの人々は非常に受けるに値すると言います。彼自身が天の恩恵から除外されること。主は正義をもって赦すことはできないと宣言する

彼らの罪を滅ぼし、彼と彼の天使たちを滅ぼしてください。彼は彼らを獲物だと主張し、彼らを破壊するために彼らを彼の手に渡すよう要求します。

サタンは神の民を罪のゆえに非難しますが、主はサタンが彼らを最大限に誘惑することを許します。神への信頼、信仰、堅固さが厳しく試されます。彼らは自分の過去を振り返るにつれて、希望が薄れていきます。なぜなら、彼らは生涯を通じて良いことしか見ることができないからです。彼らは自分の弱さと無価値を十分に認識しています。サタンは、彼らの事件は絶望的であり、彼らの墮落の汚点は決して除去されないという考えで彼らを怖がらせようとしています。彼は、彼らが誘惑に負けて神への忠誠から背を向けるようにして、彼らの信仰を破壊することを望んでいます。

神の民は、わざわざ滅ぼそうとする敵に囲まれています。彼らが苦しむのは、真理による迫害の恐れによるものではありません。彼らは、自分たちがすべての罪を悔い改めておらず、自分たちの落ち度のせいで、「全世界に来るであろう誘惑の時から、あなたたちを守ります」という救い主の約束が果たされないのではないかと恐れています（黙示録3章）：10。もし彼らが許しを確信できれば、拷問や死に怯むことはないでしょう。しかし、もし彼らが人格的欠陥のためにふさわしくなく命を失ったとしたら、神の聖なる名は軽視されることになるでしょう。

彼らはあらゆる方面から危険な陰謀を聞き、反乱の活発な活動を観察します。彼ら自身の中で、この大規模な背教を阻止し、悪人の不敬虔を終わらせることができるという強烈な願望、魂の燃えるような切望が燃え上がります。しかし、彼らは反逆の働きを終わらせるよう神に懇願しながらも、激しい自責の念とともに、悪の強大な波に抵抗し、それを押し戻す力が自分たちにはないことに気づきます。彼らは、自分の能力のすべてを常にキリストへの奉仕に捧げ、ますます強くなっていたら、サタンの形態が彼らに打ち勝つ力は弱かっただろうと感じています。

彼らは神の前で自らの魂を悲しみ、過去の多くの罪の悔い改めを指摘し、次の救い主の約束に訴えます。5). .あなたの祈りがすぐに答えられないからといって、あなたの信仰が失われるわけではありません。最も突き刺さるような不安、深い恐怖、そして消耗的な苦痛に苦しんでいるにもかかわらず、彼らのとりなしは止まらない。ヤコブが天使を利用したように、彼らは神の力を利用します。そして彼の魂の言葉は、「あなたが私を祝福しない限り、私はあなたを手放しません」です。

ヤコブが詐欺によって長子の権利を獲得したという罪を事前に悔い改めなかったら、神は彼の祈りを聞き入れず、慈悲深く彼の命を救ってくれなかったでしょう。したがって、苦難の時代に、もし神の民が恐怖と苦痛に苛まれながら、告白していない罪が彼らの前に現れたとしたら、彼らは敗北するでしょう。絶望は彼らの信仰を失い、神に救いを懇願する自信を持ってなくなります。しかし、彼らは自分が無価値であることを深く認識していますが、明らかにすべき隠れた間違いを持っていません。彼らの罪は事前に調べられ、判決で消去されたため、彼らの記憶に残ることはありません。

サタンは多くの人に、神は人生のささいな事柄における自分たちの不誠実を見逃してくれるだろうと信じ込ませます。しかし、主はヤコブとの関係において、悪を決して容認したり容認したりしないことを示されています。自分の罪を言い訳したり隠したりして、告白も許されずに天の本に留まろうとする人は皆、サタンに征服されるでしょう。彼らの職業が高く、彼らが占める地位がより名誉あるものであるほど、神の前での彼らの行動はより真剣になり、大きな敵の勝利がより確実になります。延期する人は、

神の日への備えであっても、苦難の時やその後のいかなる時にもそれを得ることができません。これらすべてのケースは絶望的です。

最後の恐ろしい紛争に備えもせずにやって来た自称クリスチャンは、絶望的な苦悩の言葉で必死に罪を告白する一方、邪悪な者たちは苦痛の中で歓喜するだろう。これらの告白は、エサウやユダの告白と同じ性質のものであり、罪の結果を嘆くものの、罪を嘆く人々の告白と同じです。彼らは悪に対して真の悔い改めや嫌悪感を感じません。

彼らは罰を恐れて自分の罪を認めています。もし判決が取り除かれれば、昔のファラオのように天への反抗に戻るでしょう。

ヤコブの物語は、罪に騙され、誘惑され、誘惑された人々であっても、真の悔い改めを持って神に立ち返った人々を神は拒まないという確信でもあります。サタンがこの階級を滅ぼそうとしている間、神は遣わされるでしょう。天使たちは危険なときにあなたを慰め、守ってくれます。サタンの攻撃は激しく、断固としたものです。彼らの間違いはひどいものです。しかし主の目はその民に注がれ、主の耳は彼らの叫びを聞く。彼らの苦しみは大きく、炉の炎が今にも彼らを焼き尽くしてしまいそうである。しかし、精製者はそれらを火で試した金として提示します。最も激しい試練の時期における神の子供たちに対する神の愛は、最も輝かしい繁栄の時代と同じくらい強く優しいものです。しかし、彼らは燃える炉に入れられなければなりません。キリストの姿が完全に反映されるように、あなたの地上的な性質は消費される必要があります。

私たちの前に横たわる苦悩と苦難の時代には、疲労、遅れ、飢えに耐えることができる信仰、つまりたとえ厳しい試練に遭っても衰えることのない信仰が必要です。その時に備えて猶予期間が誰にでも与えられています。ヤコブは忍耐力と決意の強さで勝利しました。彼の勝利は、切実な祈りの力の証拠です。族長のように神の約束をしっかり守り、族長のように熱心で忍耐強い人は皆、族長のように成功するでしょう。自己を否定し、神の前で苦しみ、神の祝福を求めて長く熱心に祈ることを望まない人は、それを得ることができません。神との格闘 - それは何を意味するのかを知っている人は、なんと少ないことでしょう。あらゆる能力が最大限に発揮されるまで、魂の悔い改めと強烈な欲望をもって神に引き寄せられることを許した人は何と少ないことでしょう。言葉では表現できない絶望の波が嘆願者を押し寄せるとき、揺るぎない信仰を持って神の約束にしがみつく人はなんと少ないことでしょう。

信仰をほとんど持たない人々は現在、悪魔のような欺瞞や良心を拘束する布告の力に陥る危険性が高まっています。そして、たとえ試練に耐えたとしても、彼らは神を信頼する習慣を身につけていないため、苦難の時にはさらに深い苦しみと苦悩に投げ込まれることとなります。彼らが無視してきた信仰の教訓は、落胆という恐ろしい圧力の下で学ばざるを得なくなるでしょう。

私たちは今、神の約束を証明することによって神を知る必要があります。天使たちは、それぞれの熱心で誠実な祈りを記録します。私たちは神との交わりを無視するのではなく、利己的な満足をなくすべきです。最も深い貧困や最大の自己否定は、主の承認があれば、主のいない富、名誉、安楽、友情よりも優れています。もし私たちが世俗的な関心事に心を奪われているなら、主は私たちから金の偶像、家、肥沃な土地を取り除く時間を与えてくださるかもしれません。

若者たちは、神の祝福を求める以外の道を歩むことを拒否したとしても、罪に誘惑されることはないでしょう。世界に最後の厳粛な警告を伝える使者たちが、冷淡で無関心で怠惰な態度ではなく、ヤコブのように熱心に信仰を持って神の祝福を祈るなら、彼らは次のように言える場所をたくさん見つけるでしょう。「私は見たことがあります」

神と面とを合わせて、私の魂は救われた。」(創世記 32:30) 彼らは天から君主としてみなされ、神にも人間にも勝つ力があるとみなされるでしょう。

「かつてないほどの苦難の時」が私たちに襲おうとしています。そして、私たちは今持っていない経験、そして多くの人が怠惰すぎて得られない経験を必要とするでしょう。苦しみが現実よりも大きいと想像されることがよくあります。しかし、私たちの目の前にある危機に関してはそうではありません。最も鮮明な物語であっても、証拠の大きさに達することはできません。その試練の時に、すべての魂は神の前に立たなければなりません。「たとえノア、ダニエル、ヨブが私が生きているように地上にいたとしても、彼らは息子や娘を救わないだろう、と主エホバは言われます。彼らは義によって自分の魂を救出するだけです。」(エゼキエル14:20)。

さて、私たちの偉大な大祭司が私たちのために贖いを行ってくださっている間、私たちはキリストにあって完全になるよう努めなければなりません。私たちの救い主は、考えたことによってさえ、誘惑の力に屈することはできませんでした。サタンは人間の心の中に足を踏み入れる場所を見つけます。ある種の大切にされた罪深い欲望によって、誘惑はその力を発揮します。しかし、キリストはご自身について、「この世の君が来るが、わたしのうちには何も持っていない」(ヨハネ14:30)と宣言されました。

サタンは神の子のうちに勝利をもたらすものを何も見つけることができませんでした。彼は父の戒めを守っており、サタンが自分の利益のために利用できるような罪は彼の中にはありませんでした。これは、困難の時に立ち向かう人々を見つけないといけない状況です。

この人生において、私たちは血への信仰を通して自分を罪から切り離さなければなりません。キリストの贖罪。私たちの尊い救い主は、私たちが主と一致し、私たちの弱さを主の強さに、私たちの無知を主の知恵に、私たちの無価値を主の功績に結びつけるよう、私たちを招いておられます。神の摂理は、私たちがイエスの柔和さと謙虚さを学ばなければならない学校です。主は常に私たちの前に、私たちが選ぶ、より簡単で楽しいと思われる道ではなく、人生の真の目標を置いておられます。私たちの役割は、私たちのキャラクターを神のモデルに適合させる作業において天が採用している機関と協力することです。魂に重大な危険を及ぼさずにこの仕事を無視したり先延ばしにしたりすることは誰にもできません。

使徒ヨハネは幻の中で、天で大声で叫んだのを聞いた、「地と海に住む者たちは災いだ。悪魔があなたたちのところへ下って来て、自分の命が短いことを知って激しい怒りを抱いているからである」時」(黙示録 12:12) 。恐ろしいのは、この天の声の表現を生み出すシーンです。サタンの怒りは時間が短くなるにつれて増大し、その欺きと破壊の働きは苦難の時に最高潮に達する。

超自然的な性質の恐ろしいビジョンが、奇跡を起こす悪魔の力の兆候として、間もなく天に現れるでしょう。悪魔の霊たちは、地球と全世界の王たちに出かけて、彼らを欺瞞に陥れ、天の政府に対する最後の闘争にサタンに加わるよう説得するであろう。これらの手先を通じて、皇帝も臣民も等しく騙されるだろう。人々はキリストご自身であると主張し、世の救い主のみに属する称号と崇拜を主張して立ち上がるでしょう。彼らは聖書の証言と矛盾する天からの啓示があると宣言しながら、素晴らしい癒しの奇跡を起こすでしょう。

偉大な欺瞞劇の最高潮の行為として、サタン自身がキリストを擬人化するでしょう。教会は長い間、救い主の出現を希望の成就として期待すると公言してきました。そのとき、大詐欺師はキリストが来たかのように見せかけます。地球のさまざまな場所で、サタンは、黙示録でヨハネが与えた神の子の描写に似た、まばゆいばかりの輝きを持つ荘厳な存在として人々の間に現れます (1:13-15) 。彼を取り囲む栄光は、人間の目にはこれを超えるものではありません。勝利の叫び声

「キリストが来た！キリストが来た！」という音が空中に響き渡ります。人々は彼の足元にひれ伏して礼拝し、一方、キリストが地上にいたときに弟子たちを祝福したように、イエスは手を上げて祝福を宣言します。彼の声は愛情深く、柔らかく、メロディーに満ちています。優しく思いやりのあるイントネーションで、は、救い主が宣言されたのと同じ慈悲深い天の真理のいくつかを提示し、人々の病気を癒し、その後、キリストの性格と思われる姿で、安息日を日曜日に変更したと主張し、彼が定めた日を聖く守るようすべての人に命じます。「七日目を守り続ける人々は、光と真実をもって遣わされた天使たちの言うことを聞くことを拒否して、神の名を冒瀆しているのです。これは強力で、ほとんど抵抗不可能な欺瞞です。」

シモン・マグスに騙されたサマリア人のように、身分の低い者から偉い者に至るまで、群衆はこれらの魔術に耳を傾け、「これは神の偉大な力だ」(使徒8:10)と言いました。

しかし神の民は誤解されません。この偽キリストの教えは聖書と一致していません。神の祝福は、獣とその像の崇拜者たち、つまり慈悲と混じり合わない神の怒りが注がれると聖書が宣言しているのと同じ階級に対して宣言されます。

しかしさらに、サタンがキリストの降臨の仕方を改ざんすることは許されません。救い主はこの点でご自分の民に欺きを警告し、再臨の様子を明確に予告されました。「偽キリストと偽預言者たちが現れ、できれば選ばれた人々さえも欺くほどの大きなしるしと不思議を示すであろう。だから、彼らがあるあなたたちに、見よ、彼は荒野にいる、と言ったら、外に出るはいけない」「見よ、彼は家の中にいる。信じてはいけない。稲妻が東から来て西まで現れるのと同じように、人の子の到来もまたそうなるだろう。」

(マタイ 24:24-27)。この到来は偽造できません。それは広く知られ、世界中で目撃されるでしょう。

聖書を熱心に学び、真理への愛を受け入れた人だけが、世界を虜にする強力な欺瞞から守られるのです。聖書の証言を通して、彼らは変装した詐欺師を見破るでしょう。試練の時は誰にでも必ずやってきます。誘惑のふるいを通して、真のクリスチャンが明らかにされるでしょう。神の民は今、神の言葉をしっかりと確立しているので、自分の感覚の証拠に屈しないのでしょうか？このような危機の中で、あなたは聖書と聖書だけにすがりつきますか？サタンは、可能であれば、彼らとその日に立つために必要な備えを得るのを妨げようとします。神は彼らの行く手を阻むように状況を整えるでしょう。彼は地上の宝物で彼らを当惑させるだろう。神は彼らに重く疲れる重荷を負わせ、彼らの心にはこの世の煩惱が重荷となり、試練の日が泥棒のように彼らに襲いかかるであろう。

キリスト教世界のさまざまな支配者が戒めの遵守者に対して発した布告が彼らから政府の保護を剥奪し、破壊を望む者たちの手に委ねられると、神の民は都市や町から逃げて集まるだろう。集団と一緒に、最も荒涼とした孤独な場所に住んでいます。多くの人々は山の要塞に避難するでしょう。ピエモンテ渓谷のクリスチャンと同じように、彼らは地上の高い場所を聖域とし、「岩の要塞」を神に感謝します(イザヤ書33:16)。しかし、あらゆる国民、あらゆる高層階級と下層階級、富める者も貧しい者も、黒人も白人も、多くの人々が最も不当で残酷な奴隷制度に投げ込まれることになる。神の愛する人たちは、手錠をかけられ、鉄格子に閉じ込められ、死刑を宣告され、暗くておぞましい地下牢の中で餓死するまで放置されるという苦しい日々を過ごすことになるだろう。彼らの叫び声を聞くために耳を傾ける人間はいないでしょう。人間の手では彼らを助けることはできません。

この試練の時に、主はご自分の民を忘れてしまうでしょうか？神の裁きが古代世界に下ったとき、神は忠実なノアのことを忘れたでしょうか。天から火が降りてきて平原の町々を焼き尽くした時、神は口のことを忘れたのだろうか？エジプトで偶像崇拝者たちに囲まれたヨセフのことを忘れましたか？イゼベルの誓いによってバアルの預言者の運命が脅かされたとき、神はエリヤのことを忘れたのでしょうか。彼は刑務所の暗く陰惨な洞窟の中でエレミヤを忘れたのだろうか？燃える炉の中にいた三人の立派なヘブライ人を忘れたのですか？それともライオンの穴にいるダニエル？

「しかしシオンは言う、『主はわたしを見捨てられた、主はわたしを忘れられた』。女性は、自分が育てた子供のことをあまりにも忘れて、自分のお腹の子である子供に対して同情を感じなくなるでしょうか？でも、たとえこの人が忘れたとしても、私はあなたのことを忘れません。見よ、わたしはあなたをわたしの手のひらに刻んだ。」(イザヤ書 49:14)
16) 。万軍の主はこう言われました、「あなたに触れる者はその目のリンゴに触れる」(ゼカエル2:8)。

たとえ敵が彼らを牢獄に放り込んでも、ダンジョンの壁が彼らの魂とキリストとのコミュニケーションを妨げることはできません。自分の弱さをすべて知っている人、あらゆる試練に精通している人は、何よりも地上の力に勝ります。天使たちは独房にいる彼らのもとにやって来て、天国から光と平和をもたらすでしょう。なぜなら、信仰の豊かな人々がそこに住み、パウロとシラスがピリピの地下牢で真夜中に祈り、賛美を歌ったときのように、薄暗い城壁が天の光で照らされるからである。

神の裁きは、神の民を抑圧し破壊しようとするすべての者に訪れます。悪人に対する彼らの忍耐強さは、彼らをより大胆に罪に陥らせるが、彼らの罰は、長く延期されたとはいえ、それゆえに確実に恐ろしいものであることに変わりはない。「主はペラジム山のように立ち上がり、ギベオン谷のように怒って、その働き、その奇妙な働きをし、その行い、その奇妙な行いを行うであろう。」(イザヤ書28:21)。私たちの慈悲深い神にとって、罰を与えるという行為は奇妙な行為です。「わたしは生きているがゆえに、悪人の死を喜ばないと主エホバは言われる」(エゼキ書 4:3)。

33:11) 。主は「憐れみ深く慈悲深く、怒るのが遅く、善と真理に富み、不法と罪と罪を赦してくださいませ。」しかし、「有罪者は無罪とはみなされない」。「主は怒るのが遅いが、力は大きく、罪を犯した者を無罪とはされません。」(出エジプト記 34:6 と 7; ナホム 1:3) 恐るべき正義の行為を通して、主は踏みこまれた権威を取り戻すでしょう。法違反者を待ち受ける報復の厳しさは、主が正義を実行することを躊躇するかどうかによって判断されるかもしれない、主が非常に長い間耐え忍ぶ国、その罪の罪がすべて満たされるまで主は罰を加えられない神は最終的には容赦なく怒りの杯を飲むでしょう。

キリストが聖所での執り成しをやめるとき、獣とその像を崇拜し、その刻印を受けた者たちに慈悲のない怒りが注がれるでしょう(黙示録14:9,10)。神がイスラエルを救おうとしていたときにエジプトに降り注いだ疫病は、神の民の最終的な救出の直前に世界に降りかかるであろう最も激しく恐ろしい裁きと性質的に似ていました。

黙示録の著者はこれらの恐ろしい災難について説明する際、「獣の刻印を持ち、その像を崇拜していた人々に邪悪で悪性の傷がついた」と述べています。

海は「死んだ人の血のように変わり、生きている魂はすべて海の中で死んだ」。

そして川と水の噴水は「血と化した」。これらの惨劇は恐ろしいものですが、神の正義は完全に証明されています。神の天使はこう宣言します、「おお、あなたは正義の人です。」

主よ...なぜあなたはこれらのことを判断したのですか。彼らが聖徒や預言者の血を流したので、あなたはまた彼らに飲む血を与えました。彼らはそれに値するからです」

(黙示録 16:2-6)。神の民に死刑を宣告することにより、彼らはまさに自らの手で流されたかのように、自らの血の罪を負ったのです。

同様に、イエスは当時のユダヤ人がアベルの時代以来流された聖なる人々の血すべてに対して有罪であると宣言されました。彼らは同じ精神を持ち、預言者を殺害した者たちと同じ働きをしようとしていたからである。

その後起こる疫病の中で、太陽は「火で人間を焦がす。そして人間は激しい熱で焦げた」（8節と9節）という力を与えられます。このように預言者たちは、その悲惨な時期の地球の状態を次のように描写しています。「そして、地球は[...]畑の収穫がなくなって悲しいのです。」 「野の木はみな枯れ、人の子らの喜びは枯れてしまった。」 「種は土塊の下で腐り、納屋は荒廃した。」 「なんて牛がうめいているのでしょう！牛の群れは混乱しています。牧草がないからです。...川は枯れ、火は砂漠の牧草地を焼き尽くしました。」 「その日、神殿の歌は苦しみの叫びとなる、と主エホバは言われる。死体は多くなり、彼らはあらゆる場所に沈黙のうちに追い出されるであろう。」（ヨエル1:10-12,17-20。アモス 8:3）。

これらの疫病は普遍的なものではありません。そうでなければ、地球上のすべての住民が完全に消費されてしまうでしょう。しかし、それらは定命の者にとってこれまで知られている中で最も恐ろしい惨劇となるでしょう。執行猶予が終了する前に、男性に対するすべての判決には慈悲が混じっていた。キリストの執り成しの血は、罪人が自らの罪を完全に受けることを妨げました。しかし、最後の審判では、慈悲が混じることなく怒りが注がれます。

その日、群衆は長い間軽蔑してきた神の憐れみの避難所を望むでしょう。「見よ、その日が来る、と主エホバは言われる。その時、わたしは地上に飢饉を起こす。それはパンの飢餓でも水の渴きでもなく、主の言葉を聞くことである。そして彼らは一つの場所からさまようだろう。海から別の海へ、北から東へ、どこへでも走って主の御言葉を求めますが、見つかりません」（アモス8:11,12）。

神の民は苦しみから解放されることはありません。しかし、たとえ彼らが迫害され、苦悩し、苦難や食糧不足に耐えたとしても、彼らが滅びるまま放置されることはありません。エリヤを世話した神は、無私の子供たちを一人も無視しません。自分の頭の毛を数える者は、それらの世話をするだろう。そして飢餓の時には彼らは満足するだろう。邪悪な者たちが飢えと疫病で死んでいく一方で、天使たちは正しい者たちを守り、彼らの必要を満たすでしょう。「義のうちに歩む」者には次の約束があります。「彼のパンは与えられ、彼の水は確かなものとなる。

苦しんでいる人や貧しい人は水を求めますが、水はなく、彼らの舌は渴いて乾きます。しかし、主であるわたしは彼らの言うことを聞き、イスラエルの神であるわたしは彼らを見捨てない」（イザヤ33:16,41:17）。

「いちじくの木には花が咲かず、ぶどうの木には実がなりません、オリーブの木は実を結び、畑には食べ物なくなり、牧草地の羊は奪われ、ひだには牛がいなくなりますが、「しかし、主を畏れる者は喜ぶ。彼らは主にあって、救いの神にあって喜ぶであろう。」（ハブ3:17,18）。

「主はあなたを守ってくださる方です。主はあなたの右手にあるあなたの影です。昼は太陽があなたを傷つけず、夜は月があなたを傷つけません。主はあなたをすべての悪から守り、あなたの魂を守ってくださいます。」

「彼はあなたを鳥の罠と致命的な疫病から救い出します。彼はあなたを彼の羽で覆い、彼の翼の下であなたは安全です。彼の真実は盾であり座屈者です。あなたは夜の恐怖も、昼に飛んでくる矢も、暗闇の中で忍び寄る疫病も、真昼に破壊する破壊も恐れることはありません。千人があなたの側に倒れ、一万人があなたの右側に倒れるでしょうが、あなたは打たれることはありません。目だけで見れば、悪人の報いが分かるだろう。なぜなら、主よ、あなたは私の避け所だからです。いと高き者はあなたの住まいです。あなたに災いが降りかかることはなく、あなたの天幕に疫病が近づくこともありません」（詩121:5-7,91:3-10）。

しかし、人間の目には、先の殉教者たちの場合と同じように、神の民はすぐに自分たちの血で証しを封印しなければならぬように見えるでしょう。彼ら自身も、主が自分たちを見捨てて敵の勢力に陥ったのではないかと恐れ始めます。大変な苦しみの時です。彼らは昼も夜も神に救いを求めて叫びます。邪悪な者たちの喜びと嘲笑の叫びが聞こえます。彼らの信仰は今どこにあるのでしょうか？あなたが本当に神の民であるなら、なぜ神はあなたを私たちの手から救い出さないのでしょうか？

しかし、待ち望んでいた聖徒たちは、イエスがカルバリの十字架で死んだことを思い出し、祭司長や君主たちが嘲笑的に叫んだ、「彼は他人を救ったが、自分自身を救うことはできない。もし彼がイスラエルの王なら、今すぐ十字架から降りてください、そうすれば私たちは彼を信じます」（マタイ 27:42）。ヤコブと同じように、誰もが神と格闘しています。尊容内面の葛藤を表現します。すべての顔に蒼白の刻印が施されています。しかし、彼らの熱烈なとりなしは止まらない。

人間が天のビジョンでこの状況を見ることができれば、キリストの忍耐の言葉を守った人々の周りに、優れた力を持つ天使の集団が配置されているのが見えるでしょう。天使たちは愛情深い優しさであなたの苦しみを見守り、あなたの祈りを聞きました。彼らは指揮官からの危険からの連絡を待っています。しかし、もう少し待つ必要があります。神の民はその杯を飲み、洗礼を受けなければなりません。彼らにとって非常に苦痛である遅延そのものが、彼らの請願に対する最善の答えである。彼らは自信を持って主が働いてくださるのを待とうと努力するにつれて、信仰、希望、忍耐を働かせるように導かれますが、これは宗教的経験の中でほとんど発揮されなかったものです。しかし、選ばれた人々の愛のため、苦難の時間は短縮されます。「そして神は、昼も夜も神に叫び求めているご自分の選ばれた者たちに正義を与えないでしょうか…言うておくが、神は彼らに速やかに正義を与えてくださるだろう」（ルカ18:7,8）。終わりは男性が予想しているよりも早くやって来ます。

小麦は集められ、神の納屋のために束に束ねられます。毒麦は破壊の火のために束ねられます。

天の番兵たちは、自分たちの預けられたものを忠実に守り、警戒を続けています。一般法令では戒律の遵守者を殺害できる期限が定められているが、場合によっては彼らの敵が法令を先取りしようとして、指定された期限が来る前に彼らの存在を抹殺しようと努める。しかし、すべての忠実な魂の周りに配置されている強力な守護者を通り抜けることはできません。都市や町から逃げる途中で襲われる人もいます。しかし、彼らに向けて振り上げられた剣は砕け散り、藁のように無力に地面に落ちます。戦士の姿をした天使によって守られる者もいる。

あらゆる時代において、神は聖なる天使たちを通して働いて、ご自分の民を救い、解放してきました。天人たちは人類の営みに積極的に参加してきました。彼らは稲妻のように輝く衣服を着て現れました。彼らは旅人の服を着た男のようにやって来た。天使は神の僕たちの前に人間の姿で現れました。彼らは疲れたかのように正午に榎の木の下で休んでいます。彼らは人間の家のもてなしを受け入れました。彼らは夜に驚く旅人の案内役を務めてきた。彼らは自分たちの手で祭壇に火を灯しました。

彼らはまた刑務所の扉を開け、主の僕たちを解放しました。彼らは天の鎧を着て、救い主が眠る墓から石を取り除きにやって来ました。

人間の姿をした天使は、義人の集会によく見られますが、自分たちの行動を報告するためにソドムに行ったのと同じように、悪人の集会にも訪れ、自分たちが限界を超えたかどうかを判断します。神の辛抱強さ。主は憐れみを喜ばれます。そして真に神に仕える少数の人々のおかげで、神は災難を抑え、群衆の平穏を長引かせます。神に敵対する罪人は、嘲笑し抑圧することを喜んでいる少数の忠実な人々に命の恩義があることをほとんど理解していません。

この世界の支配者たちがその事実を無視しているにもかかわらず、天使たちはしばしば議会で代弁者となってきました。人間の目は彼らを見てきました。人間の耳は彼らの嘆願を聞きました。人間の唇は彼らの提案に反対し、彼らのアドバイスを嘲笑しました。人間の手によって彼らは侮辱と虐待を受けてきました。これらの天の使者たちは、評議会や司法裁判所において、人類の歴史に深い精通を示してきました。彼らは、最も有能で雄弁な擁護者よりも、抑圧されている人々の大義を訴える能力が高いことを証明しました。彼らは目的を打ち破り、神の働きを大きく遅らせ、神の民に多大な苦しみをもたらすであろう悪を阻止した。

危険や苦難の時には、「主の使いは主を恐れる者の周りに陣を張り、彼らを救い出します」(詩34:7)。

神の民は熱烈な願いを抱いて、来るべき王のしるしを待っています。城壁の監視員が「警備員さん、夜何が起こったのですか？」と尋ねると、答えは迷うことなく与えられます。「朝が来るし、夜も来る」(イザヤ書 21:11,12)。山頂の上の雲に光が当たっています。間もなく彼の栄光が明らかになります。正義の太陽が昇ろうとしています。朝と夕方が近づいています。義人にとっては終わりのない日の夜明けがあり、悪人にとっては永遠の夜が明けけるのです。

苦悩する信者たちが主の前に嘆願書を送ると、彼らを目に見えないものから隔てていたバールが取り除かれそうになる。永遠の日が明けると天が輝き、天使の歌のメロディーのように、「忠実にしっかり立ちなさい。助けは来る」という言葉が耳に響きます。全能の征服者であるキリストは、疲れた戦士たちに不滅の栄光の冠を差し伸べます。そして彼の声は、半分開いたポータルを通して投影されます：「見よ、私はあなたとともにいます。恐れる必要はありません。

私は皆さんの苦悩をよく知っています。私はあなたの悲しみを耐えました。あなたは証明されていない敵と戦っているではありません。私はあなたに代わって戦いを戦いました、そして私の名においてあなたは征服者以上の存在です。」

尊い救い主は、私たちが最も必要とするときに助けを送ってください。天国への道は主の足跡によって神聖化されます。私たちの足を傷つけるあらゆるとげは、彼の足を傷つけます。私たちが負うよう求められているあらゆる十字架を、神は私たちの前に負ってくださいました。主は魂に平和をもたらすために争いを許しておられます。苦難の時は神の民にとって恐ろしい試練です。しかし、今はすべての真の信者が目を上げ、信仰によって自分を取り囲む約束のアーチを見る時です。

「主によって贖われた人々は戻ってきて、喜びをもってシオンに来るでしょう。そして永遠の喜びが彼らの頭の上にあり、喜びと喜びが彼らを襲い、悲しみとうめきは逃げ去ります。私、私があなたを慰める人です。それでは、死ぬべき人間、あるいは干し草になる人の子を恐れるべきあなたは何者ですか？そして、あなたはあなたを創造した主を忘れますか...そして、あなたは一日中、破壊の準備をしている厄介者の怒りを絶えず恐れ続けますか？あなたを悩ませたものの怒りはどこへ行ったのでしょうか？追放された捕虜はすぐに解放され、洞窟で死ぬことはなく、パンに不足することもありません。わたしは海を分け、その波がどろくあなたの神、主だからである。その名は万軍の主です。そしてわたしはわたしの言葉をあなたの口に伝え、わたしの手の影であなたを覆った」(イザヤ51:11-16)。

「だから、今、これを聞いてください、抑圧され、酒に酔っているあなたたち、しかしぶどう酒には酔っていないあなたたち。あなたの主、エホバ、そしてご自分の民の大義を弁護されるあなたの神はこう言われます。見よ、私はあなたの手からためらいの杯を取り除きます、わたしの怒りの杯の排泄物、あなたはもうそれを飲むことはない。しかし、私はそれを、あなたを悲しませ、あなたの魂にこう言う人々の手に渡します。そしてあなたはあなたの背中を地面とし、旅人のための道とされました」(イザヤ51:21-23)。

神の目は何世紀にもわたって見下ろし、地上の勢力が彼らに対抗するときに神の民が直面しなければならない危機を見つめてきました。捕虜として亡命した人々と同様に、彼らは飢えや暴力による死を恐れるでしょう。しかし、イスラエルの前で紅海を分けた聖なる方は、彼らを捕らわれの身から解放することによって、その無限の力を現されるでしょう。「彼らはわたしのものになる、と万軍の主は言われる。その日、わたしは彼らをわたしの宝とする。人が自分に仕える子を惜しむように、わたしも彼らを惜しまない。」(マラヤ3:17)。もしその時にキリストの忠実な証人の血が流されたとしても、それは殉教者の血のように、神に収穫をもたらすために蒔かれた種のようなものではないでしょう。あなたの忠実さは、他の人に真実を納得させる証拠にはなりません。というのは、かたくなな心は慈悲の波を拒絶し、ついには戻ってこれなくなったからです。もし義人たちが今残されたとしたら

敵の餌食になれば、それは闇の王子の勝利となるだろう。詩篇作者はこう言います、「苦難の日には、神は私を御自分の楼閣に隠し、御自分の幕屋の秘密に私を隠してください。」(詩篇27:5)。キリストはこう命じた、「それゆえ、わたしの民よ、行って、部屋に入り、戸を閉めなさい。怒りが消えるまで、ほんの一瞬だけ身を隠しなさい。見よ、主がその場所から出てきて、この地の住民を罰するからである。彼らの不法行為のゆえに、地球は滅びるのです」(イザヤ書 26:20、21)。神の到来を辛抱強く待ち望んでおり、命の書に名前が記されている人々の救出は栄光に満ちたものとなるでしょう。

第40章

神の民の救出

神の律法を尊重する人々から人間の律法の保護が剥奪されると、さまざまな土地で、それらを破壊することを目的とした運動が同時に起こるでしょう。法令で定められた時間が近づくと、人々は憎むべき宗派を根絶やしにするために共謀するだろう。一夜のうちに決定的な攻撃が完了し、反対と不支持の声が完全に沈黙することが決定されるだろう。

神の民は、独房にいる者もあれば、森や山の孤独な隠れ家に隠れている者もいるが、今も神の加護を懇願している一方で、各地で邪悪な天使の軍勢に駆り立てられた武装集団が悲惨な業に備えている。今、最も極端な時期に、イスラエルの神がご自身の選ばれた者たちの救出のために介入される時です。主は言われる、「祭りが祝われる夜のように、あなたがたの間に歌があり、笛を吹きながら出かける人のような心の喜びがあり、主の山、岩に来るであろう」「イスラエルよ。そして主は御声の栄光を聞かせ、怒りの憤りとして腕を下げることに、焼き尽くす火の炎、稲妻、洪水、雹を示されるであろう。」（イザヤ 30:29 と 30）。

勝利の叫び、嘲笑、呪いの声を上げながら、大勢の邪悪な男たちが獲物に殺到しようとしているとき、見よ、夜の闇よりも深い濃い闇が地球に降り注ぎます。そのとき、神の御座から栄光に明るく輝く虹が天を横切り、祈りの中で各グループを包み込むように見えます。怒った群衆は突然立ち止まる。彼らのあざけりの咆哮は静まりました。彼の殺人的な怒りの対象は忘れ去られる。恐ろしい前兆とともに、彼らは神の契約の象徴を熟考し、その抑制された輝きの下で守られることを切望しています。

神の民は、「見上げてください」という澄んだメロディーの声を聞きます。そして目を天に上げて、彼らは約束のアーチを見ます。雲大空を覆っていた黒くて恐怖を引き起こす雲は背を向け、ステパノのようにしっかりと天を見つめ、神の栄光とその玉座に座る人の子を見よ。彼の神聖な姿の中に、彼の屈辱の痕跡を見分けてください。そして彼らは彼の口から、父と聖なる天使たちに向けて提出された嘆願を聞く。「私は、あなたが私に与えてくださった人々が、私がいる場所においても、彼らも私と一緒にいてほしいのです。」（ヨハネ 17:24）。再び、旋律に満ちた勝ち誇った声が聞こえます、「彼らが来る！彼らが来る！」神聖で、純真で、汚れのないもの。彼らは私の忍耐の言葉を守りました。彼らは天使たちの間を歩くだらう」そして信仰を堅く守り続けた人々の青白く震える唇は勝利の叫びを発する。

神がご自分の民を解放するために力を発揮されるのは真夜中です。太陽はその力強さで輝いて見えます。兆候と驚異がすぐに次々と起こります。邪悪な者たちはその現場を恐怖と驚きの目で見つめる一方、義人たちは救出の兆しを厳粛な満足感をもって観察します。自然界のあらゆるものは、通常のコースから外れているように見えます。電流が流れなくなります。暗く重い雲が現れ、互いに衝突します。嵐の天の真っ只中に、言葉では言い表せない栄光の澄んだ空間が見え、そこから多くの水の音のような神の声が聞こえてきて、「それは終わった」と言います。（黙示録 16:17）。

その声は天と地を揺るがす。「人類が地球上に存在して以来一度もなかったような大きな地震があった。これはとても大きかった」

「地震」(黙示録 16:18)。大空は開いたり閉じたりしているようです。神の御座の栄光が天空を照らしているように見えます。山々は風に翻弄される葦のように揺れ、ごつごつとした岩が四方八方に投げられています。差し迫った嵐のような轟音があり、海は怒りに満ちています。

ハリケーンの鋭い音、まるで破壊の使命を帯びた悪魔の声。地球全体が海の波のように隆起し、拡大します。その表面は断片化しています。

その基盤そのものが崩れ去ってしまったようだ。山脈が沈みつつある。人の住む島々は消滅する。悪事によってソドムのようになってしまった港は、荒れ狂う海に飲み込まれていく。偉大なバビロンは神の前に思い出され、「彼女に神の怒りの憤りのぶどう酒の杯を与えるため」(黙示録16:19,21)。それぞれが「タラントの重さ」である巨大な雹が破壊の働きをしています。地球上で最も素晴らしい都市を以下に挙げます。世界の偉人たちが自らの栄光のために富をばらまいた荘厳な宮殿は、彼らの目の前で瓦礫と化す。刑務所の壁が割れ、信仰のゆえに捕らわれていた神の民が解放される。

墓が開き、「地の塵の中で眠っている人々の多くが目覚め、ある者は永遠の命に、またある者は恥辱と永遠の軽蔑にさらされるだろう」(ダン 1:3)。

12:2)。第三の天使のメッセージを信じて死んだ人は皆、栄光を受けて墓から立ち上がり、神の律法を守った者たちとの平和の神聖な契約を聞くのです。「彼を刺した同じ者たち」(黙示録 1:7)、キリストの苦しみをあざ笑った者たち、そして神の真理とその民に最も暴力的に反対した者たちは、再び立ち上がり、その栄光の中でキリストを見て、その栄誉を見るのです。忠実で従順な人々に神に与えられたものです。

コンパクトな雲がまだ空を覆っています。しかし、太陽は時々それらを通り、エホバの復讐の視線のように見えます。激しい稲妻が天から落ち、地球を炎のシートで包みます。恐ろしい雷鳴の上で、神秘的で恐ろしい声が邪悪な者の破滅を宣言します。話された言葉は誰もが理解できるわけではありません。しかし、偽教師にはそれらがはっきりと理解されます。直前まであれほどのんきで、あれほど傲慢で、反抗的で、戒めを守る神の民に対する残虐行為を喜んでいた人々が、今では驚愕に打ちひしがれ、恐怖に震えている。彼らの叫び声は自然の音を超えて聞こえます。悪魔はキリストの神性を認識し、その力に震える一方、人間は慈悲を叫び、卑劣な恐怖に這う。

昔の預言者たちは、聖なる幻の中で神の日を見たとき、「ほえよ、主の日は近い。それは荒廃として全能者から来るのだ。」と言いました。(イザヤ書 13:6)。「岩の中に入って、主の恐るべき臨在とその威光の栄光から、塵の中に身を隠しなさい。人々の高慢な目は謙虚になり、人々の高慢さは謙虚になる。そして主だけがそうされるだろう」「その日には高められる。万軍の主の日は、高慢で傲慢なすべての者に対して、また自分を高めて自分を低くするためにすべての者に対して敵対するからである。」「その日、人は、以前ひれ伏すために作った銀の偶像と金の偶像をモグラやコウモリに投げ、岩の裂け目や岩の洞窟に入るだろう」それは主の臨在と、主が地上に出没するときのその威光の栄光のためである。」(イザヤ 2:10,20,21)。

雲の隙間から星が輝き、その明るさは暗闇とは対照的に4倍になります。それは忠実な人たちに希望と喜びを伝えるだけでなく、神の律法を破る者たちに厳しさと怒りを伝えます。

キリストのためにすべてを犠牲にした人々は今、隠れた場所にいるかのように隠れて安全です。

主の館の秘密。彼らは試され、世と真理を軽蔑する人々の前で、自分たちのために死んでくださった方への忠実さを証しました。死に直面しても誠実さを堅持した人には素晴らしい変化が訪れます。彼らは突然、悪魔と化した人間たちの暗闇と恐ろしい圧制から解放されました。最近はとても青白く、不安でやつれ果てていた彼らの顔は、今では賞賛と信仰と愛を放っています。彼の声は勝利の歌のように上がります：「神は私たちの避け所であり力であり、困難の中でまさに今いる助けです。だから、たとえ地が動き、山々が海の真ん中に流されても、私たちは恐れることはありません。それでも、させましょう」その激しさで山々が揺れているにもかかわらず、水は轟音を立ててかき乱される。」（詩 46:1-3）。

これらの聖なる信頼の言葉が神に向けて上がると、雲は遠ざかり、星空が、両側の黒くて重荷を負った大空と対照的に、言葉では言い表せないほど輝かしいものになります。天上の都市の輝きが、半開きのドアから放射されます。次に、折り畳まれた2枚の石板を保持する手のシルエットが空に現れます。預言者はこう言います：「天は神の義を宣言するでしょう。神ご自身が裁判官だからです。」（詩篇 50:6）。雷と炎の中でシナイから人生の指針として宣言されたその聖なる律法、神の正義は、今では裁きの規則として人々に明らかにされています。手で石板を開くと、十戒の戒律がまるで燃えるようなペンでなぞられるかのように表示されます。言葉はとても明瞭なので誰でも読むことができます。記憶が呼び覚まされ、迷信と異端の闇がすべての心から一掃され、簡潔で包括的かつ権威ある十の神の戒めが地球上のすべての住民の目に提示されます。

神の聖なる戒めをほくそ笑んでいた人々の恐怖と絶望は、筆舌に尽くしがたいものです。主は彼らに律法を与えられました。悔い改めと改革の機会がまだあるうちに、彼の性格と彼女の性格を比較し、彼女の欠点を発見することもできたでしょう。しかし、世の好意を得るために、彼らは自分たちの戒律を脇に置き、他の人に違反することを教えました。彼らは神の民に神の安息日を冒瀆するよう強制しようと努めた。今、彼らはかつて軽蔑していた法律によって非難されていることに気づきました。恐ろしいほどの明晰さで、彼らは言い訳ができないことに気づきます。彼らは誰に仕え、崇拜したいかを選びました。「そうすれば、正しい人と悪人の違い、神に仕える人と仕えない人の違いが再び分かるでしょう。」（マラヤ 3:18）。

神の律法の敵は、奉仕者から最も小さな者に至るまで、真理と義務について新しい概念を持っています。彼らは第四戒の安息日が生ける神の印であることに気づくのが遅すぎます。彼らは第四戒が生ける神の印であることに気づきました。彼らは偽りの安息日の本当の性質と、その上に築き上げてきた砂のような基盤に気づくのが遅すぎます。

彼らは自分たちが神と戦ってきたことに気づきます。宗教教師たちは魂を楽園へ導くと公言しながら、魂を滅びに導きました。最後の清算の日が来るまで、神聖な職に就く男性の責任がどれほど大きいのか、そして彼らの不貞がどれほど恐ろしい結果をもたらすかは分からないだろう。我々は永遠に続けて初めて、一人の魂の喪失がどれだけの費用がかかるかを正確に見積もることができるでしょう。

神が「出て行け、邪悪な僕よ」と言われる者の破滅は恐ろしいことになるだろう。

神の声が天から聞こえ、イエスの来臨の日時を宣言し、永遠の契約を民に伝えます。最も強力な雷鳴のように、神の言葉は地球全体に響き渡ります。神のイスラエルは視線を高く上げて彼らの話を聞きます。彼の顔は栄光に照らされ、シナイから下りてきたモーセの顔のように明るく輝いています。悪人は彼らを見ることはできません。そして、安息日を守って神を敬った人々に祝福が宣言されるとき、勝利の叫びが響き渡ります。

すぐに、人の手の半分ほどの大きさの小さな黒い雲が東に現れます。それは救い主を取り囲む雲であり、遠くから見ると暗闇に包まれているように見えます。神の民は、これが人の子のしるしであることを知っています。厳粛な沈黙の中で、彼らは地球に近づく雲に目を留め続け、雲はますます明るく輝かしくなっていく、ついには巨大な白い雲となり、その根元は火を焼き尽くすような栄光を放ち、その上にはコンサートの虹がかかっています。イエスは強力な征服者として前進します。

今は「悲しみの人」として、恥と悲惨の苦い杯を飲むのではなく、天と地で勝利を収めて生者と死者を裁く者として。「忠実で真実な」神は「正義のために裁き、戦う」のです。そして「天の軍隊が彼を追った」

(黙示録 19:11 および 14)。天上の旋律の賛美歌を奏でながら、聖なる天使たちは数え切れないほどの群衆となって主の道に同行します。大空は、何千、何百万もの輝く形で溢れているように見えます。

人間のペンではこの光景を描くことはできず、定命の者が自分自身を見つけることもできません。その素晴らしさを理解する資格がある。「彼の栄光が天を覆い」、地は彼の賛美で満たされました。そして彼の輝きは光のようだった。」(ハブ 3:3,4) 雲がさらに近づく、すべての人がいのちの君を見ます。今、いばらの冠が神聖な頭を傷つけることはありませんが、栄光の王冠がその頭にかかっています。その神聖な顔は、真昼の太陽のまばゆいばかりの輝きをはるかに上回っており、「そして、その衣とともにも、彼はこの名を書かれた。王の中の王、主の中の主である。」(黙示録19:16)。

彼の臨在の前では「すべての顔がやつれてしまった」。神の憐れみを拒む者には永遠の絶望の恐怖が降りかかる。「彼らの心は溶け、膝は震え」、「そして彼らの顔は青ざめます」。(エレミヤ 30:6; ナホム 2:10)。震える義人たちは「誰が耐えられるだろうか?」と叫びます。天使の歌は沈黙し、恐ろしい沈黙の時間が訪れる。そのとき、イエスの声が聞こえます、「わたしの恵みはあなたに十分です。」義人の顔は明るくなり、喜びがすべての心を満たします。

王の中の王が炎に包まれ雲に乗って降臨する。天は巻物のように巻き上がり、地は神の前で震え、すべての山や島々はその場所から動き出す。「私たちの神は来られ、沈黙されません。神の前で火が焼き尽くされ、神の周りに大きな嵐が起こります。神は上から天と地を呼び起こし、ご自分の民を裁くでしょう。」(詩 50:3 と 4)。

「そして、地上の王たち、偉人たち、金持ちたち、護民官たち、有力者たち、あらゆる召使いたち、そしてあらゆる自由人たちは、洞窟や山の岩の中に身を隠した。「わたしたちに襲いかかってきて、王座に座しておられる方の顔と小羊の怒りからわたしたちを隠してください。神の怒りの大いなる日が近づいているのです。そして誰が耐えられるのでしょうか?」(黙示録 6:15-17)。

冷やかしのジョークは止んだ。横になっている唇を閉じます。武器の雷鳴と戦闘の喧騒は「音を立てて」響き渡り、衣は血の中で転がり(イザヤ書9:5)静まり返りました。今は嘆願の声とすすり泣きと嘆きの声以外何も聞こえません。つい最近まで嘲笑していた唇から、「神の怒りの大いなる日が来る。そして誰が耐えられるだろうか?」という叫びが漏れる。邪悪な者たちは、自分たちが軽蔑し、拒絶した主の顔を見るよりも、山の岩の下に埋葬されることを願います。

彼らは死者の耳に響くあの声を知っている。彼らの優しく懇願する訴えがどれほど頻繁に彼らを悔い改めに誘ったことでしょうか。友人、兄弟、救い主の感動的な嘆願を通して、何度彼女の願いを聞いたことでしょうか。

神の恵みを拒否する者たちにとって、これほど豊かな声は他にないでしょう。

非難は、あまりにも非難に満ちており、「邪悪な道から離れなさい。なぜ死ぬのですか？」と長い間嘆願していたものと同じだった。

(エゼキエル書 33:11)。ああ、この声が彼らにとって奇妙だったかもしれないなんて！イエスはこう言われます。「わたしが電話したのに、あなたは断った。わたしが手を差し伸べても、誰も聞く耳を持たなかったからである。しかし、あなたはわたしの勧告をすべて拒否し、わたしの叱責を望まなかった。」(箴言 1:24 と 25)。

その声は、警告は無視され、招待は拒否され、特権は無視され、彼らが喜んで消し去ろうとする記憶を呼び起こします。

キリストの屈辱を嘲笑した人々がいます。大祭司に呼び出されて、彼が厳かに宣言したときの受難者の言葉が、途方もない力をもって彼の心に呼び起こされる、「あなたがたは間もなく、人の子が権力の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るだろう」。

(マタイ 26:64)。今、彼らは主の栄光を見ますが、それでも彼らは主が権力の右に座しておられるのを見なければなりません。

神の子であるという彼の主張を嘲笑した人々は、今では言葉を失っています。傲慢なヘロデ王がいます。彼は王の称号を風刺し、嘲笑する兵士たちに彼に王の冠を授けるよう命じました。そこには、邪悪な手でイエスに紫のローブを着せ、その神聖な額に茨の冠をかぶせた者たちがいたのです。また、抵抗することなく王笏のようなものを彼の手に置き、冒瀆的な嘲笑の中で彼の前に身をかがめました。

命の君を殴り、彼に唾を吐きかけた男たちは今、その鋭い視線から顔を背け、彼の臨在の支配的な栄光から逃げようとしている。主の手足に釘を打ち込んだ者たち、そして主のわき腹を刺した兵士たちは、恐怖と後悔の念を込めてこれらの痕跡を見つめています。

司祭と王子たちは恐ろしいほどの鮮明さでカルバリの出来事を思い出します。彼らは恐怖に震えながら、悪魔のような歓喜で首を振り、こう叫んだことを覚えている。彼を。」；神を信頼している；あなたが神を愛しているなら、今すぐ彼を解放してください。(マタイ 27:42 および 43)。

彼らは、主人にブドウ畑の果実を与えることを拒否し、使用人を虐待し、息子を殺した農民のたとえ話を鮮明に覚えています。彼らはまた、ブドウ園の主人が「悪人に恥ずべき死を与えるだろう」という自分たち自身が宣告した宣告を覚えている。祭司や長老たちは、これら不忠実な人々の罪と罰の中に、自分たちの行為と正当な判決を見出します。今、死の苦しみのかげが上がり、エルサレムの街中に響き渡った「十字架につける、十字架につける」という叫びよりも大きく、「この人は神の子だ！彼こそ真のメシアだ！」という恐ろしく絶望的な叫びが響き渡る。彼らは王の中の王の存在から逃れようとしています。

元素の戦争によって分断された地球の深い洞窟で、彼らは隠れようとしませんが無駄です。

真実を拒否するすべての人の人生には、良心が目覚める瞬間があり、偽善の人生の拷問的な思い出が思い出され、魂が空しい悲しみに悩まされる瞬間があります。しかし、「恐怖は破壊としてやって来る、破壊は嵐としてやって来る！」あの日の悔い改めと比べたら、これは何ということだろう。(箴言 1:27)？キリストとその忠実な民を滅ぼそうとした者たちは今、彼らの上に栄光がかかっていることを証言しています。彼らは恐怖の真只中に、喜びの旋律に乗って叫ぶ聖徒たちの声を聞く、「見よ、これは私たちの神だ。私たちが待ち望んでいたこの人だ。彼は私たちを救ってくれるだろう。」(イザヤ 25:9)。

地球の動き、稲妻の閃光、雷鳴のただ中で、神の御子の声が眠っている聖徒たちを呼びます。彼は義人の墓を見つめ、それから両手を天に上げて叫びます、「目覚めよ、目覚めよ、塵の中に眠っている者よ、起きなさい！」地球の縦横に渡って、

死んだ人はその声を聞き、それを聞いた人は生きます。そして、あらゆる国、部族、言語、民族の途方もない大軍の足音が地球全体に響き渡ることになる。彼らは死の地下牢からやって来て、不滅の栄光をまとい、「死よ、あなたの刺し傷はどこにあるのですか？ 地獄よ、あなたの勝利はどこにありますか？」と叫びます。（1コリント 15:55）。そして、生ける義人と復活した聖徒たちは、声を合わせて長く喜びに満ちた勝利の叫びを上げます。

誰もが墓に入ったときと同じ高さで墓から出ます。復活した大勢の人の一人であるアダムは、背が高く、堂々とした姿をしていますが、神の子より少し小さいです。後世の人々とは顕著な対照をなしている。この一つの側面だけでも、人種の途方もない退化が示されています。しかし、それらはすべて、永遠の若さの活力とエネルギーを持って現れます。初めに、人間は性格だけでなく、形や特徴においても神に似せて創造されました。罪は神の姿を傷つけ、ほとんど消し去ってしまいました。しかし、キリストは失われたものを回復するために来られました。神は私たちの卑劣な体を変え、その栄光の体に倣って形作ってください。腐敗し、恵みを欠き、罪によって汚された定命の形態は、完全に美しく不滅になります。すべての奇形や欠陥が墓に残されています。長い間失われていたエデンの生命の木に戻された者たちは、原始の栄光の中で種族の身長にまで成長するだろう。罪の呪いの最後の残り物は取り除かれ、キリストの忠実な者たちは「私たちの神、主の美しさのうちに」現れ、霊、魂、肉体に主の完全な姿を反映するでしょう。おお！

素晴らしい償還です！それは非常に長い間噂され、非常に待ち望まれ、熱心な期待を持って熟考されてきましたが、完全に理解されることはありませんでした。

生きている義人は「一瞬のうちに、瞬く間に」変えられます。神の御声によって彼らは栄光を受けた。今、彼らは不滅にされ、復活した聖徒たちとともに空中で主に会うために引き上げられています。天使たちは「天の端から端まで、四方から選ばれた者たちを集めます」。小さな子供たちは聖なる天使によって母親の腕に抱かれます。死によって長い間離れ離れになっていた友人たちは、二度と離れることのない再会を果たし、喜びの歌を歌いながら、共に神の都へと登っていきます。

雲の戦車の両側には翼があり、その下には生きた車輪が見えます。車が上昇すると、車輪が「聖なる」と叫び、翼が動きながら「聖なる」と叫び、天使の従者が「聖なる、聖なる、聖なる、全能の主なる神よ」と叫びます。そして、救われた者たちは「ハレルヤ！」と叫びます。一車が新エルサレムに向かって進んでいるとき。

神の都に入る前に、救い主は信者たちに勝利の紋章を授け、彼らに王国の記章を授けられます。救われた者の輝かしい翼は、王の周りに中空の正方形の形で配置されており、その雄大な姿は聖人や天使よりもはるかに際立っており、その顔はすべての人への善良な愛の充満を放射しています。救われた無数の群衆を通して、すべての目は主に注がれ、すべての目は「外見は他の誰よりもひどく損なわれ、その姿は人の子らよりも大きかった」主の栄光を見ます。イエスは勝利者の頭に栄光の冠をご自身の右手で置きます。それぞれに彼の「新しい名前」（黙示録2:17）と「主への聖さ」という碑文が刻まれた冠があります。それぞれの手には勝利者の手のひらと光り輝くハープが置かれています。そして、支配する天使たちが音色を奏でると、すべての手がハープの弦の上で器用に動き、豊かでメロディアスな和音で甘い音楽を響かせます。言葉では言い表せないエクスタシーがすべての心を震わせ、すべての声が感謝の賛美の声を上げます。

イエスの血は私たちが罪から洗い落とし、私たちを神と父に対する王および祭司としました。彼に栄光と力が世々限りなくありますように」（黙示録1:5,6）。

救出された大勢の人々の目の前には聖都がある。イエスが真珠の門を完全に開き、真理を観察した国々が入ってきます。そこで彼らは、無邪気なアダムの家である神の樂園について思いを巡らせます。そして、定命の者がこれまで聞いたどの音楽よりも熱狂的なその声はこう告げる、「お前たちの争いは終わった」。「さあ、わたしの父に祝福された者たちよ、天地の初めからあなたたちのために備えられた王国を受け継ぎなさい。」

そのとき、弟子たちを代表した救い主の祈りが成就します。「私は、あなたが私に与えてくださった人々が、私がいる場所においても、私と一緒にいてほしいのです。」

「罪のない、喜びをもって、その栄光の前に」（ユダ24）、キリストは彼らをご自分の血の買いとして父に差し出し、「私はここにいます、あなたが私に与えてくださった子供たちと一緒にいます」と宣言されました。「あなたからいただいたものは保管しておきました。」おお！愛を取り戻す不思議！罪の不一致とその呪いが取り除かれることなく、無限の父が救出された人々を見つめながらその姿を熟考し、人間が再び神と調和するその時の歓喜！

イエスは言い表せない愛をもって信者たちを迎え、彼らを「あなたの主の喜び」の中に迎え入れます。救い主の喜びは、栄光の王国で、主の苦しみと屈辱によって救われた魂を見ることにあります。そして、救われた者たちは、愛の祈り、労苦、犠牲を通してキリストのために勝ち取られた祝福された人々の中で熟考するとき、神の幸福にあずかるでしょう。彼らが大きな白い玉座の周りに集まるとき、彼らがキリストに勝ち取った人々を見て、またある人が他の人たちを勝ち取り、さらに他の人たちもみな安息の地、そこに連れて行かれたのを見ると、言いようのない喜びが彼らの心を満たすでしょう。イエスの足もとに冠を置き、終わりのない永遠の何世紀にもわたって彼を讃美します。

救出された人々が神の都に迎え入れられる瞬間、礼拝の喜びの叫びが空中に響き渡ります。二人のアダムはこれから会おうとしています。神の御子は、私たちの種族の父、つまり神が創造し、創造主に対して罪を犯し、その罪のために救い主の体に十字架の跡が現れた存在を受け入れるために腕を広げて立っています。アダムは残酷な釘の傷を見るやいなや、主の胸にひれ伏すのではなく、屈辱のあまり主の足元に身を投げ、「屠られた小羊はふさわしい、ふさわしい！」と叫んだ。救い主は優しく彼を抱き上げ、長い間追放されていたエデンの園を再び見つめるように勧めます。

エデンから追放された後、地上でのアダムの人生は悲しみに満ちていました。すべての枯れ葉、すべての犠牲、すべての自然の美しい顔の劣化、人間の純粋さのすべての汚れは、彼の罪を新たに思い出させました。

はびこる不法行為を目の当たりにし、彼らの警告に応じて、罪の原因として自分に対してなされた非難に直面したときの彼の自責の念の苦しみはひどいものだった。彼は忍耐強く謙虚に、千年近く罪の罰を耐え続けました。彼は約束された救い主の功績を信頼して自分の罪を忠実に悔い改め、復活を望みながら息を引き取りました。神の御子は人間の失敗と墮落を救い出しました。そして今、償いの働きを通して、アダムは最初の支配権を取り戻しました。

溢れ出る喜びの中で、彼はかつて自分の喜びだった木々を眺めます。それは、彼自身が無邪気で喜びに満ちた日々実を集めていたのと同じ木々でした。彼は自分の手で手入れしたブドウの木、かつて彼が世話をすることにとっても喜んでいたので同じ花を観察します。あなたの心はその場面の現実を捉えます。彼は、ここが本当に復元されたエデンであることを理解しています。

彼がそこから追放されたときよりも今の方が美しい。救い主は彼を命の木に導き、その輝かしい果実を摘み取り、食べるように命じられます。アダムは周囲を見回し、大勢の家族が神の楽園で救われているのを目にします。それから、彼は輝かしい王冠をイエスの足元に投げ、彼の胸に倒れ込み、救い主を抱きしめます。彼が黄金のハーブを爪弾くと、天のアーケードに勝利の歌がこだまします。「屠られて生き返った小羊こそがふさわしい、ふさわしい、ふさわしいのだ！」アダムの子孫はその曲を拾い、救い主の前に頭を下げながら王冠を救い主の足元に投げつける。彼は礼拝中です。

この出会いは、アダムが倒れたときに泣き、イエスが復活後に天に昇り、その名を信じたすべての人の墓を開いたときに喜んだ天使たちによって目撃されています。今、彼らは救いの業が達成されたのを見て、声を合わせて賛美の歌を歌います。

水晶の海、玉座の前、火と混ざり合ったガラスの海——神の栄光でとても輝いている——には、「獣に、その像に、そして野獣に勝利して出てきた大勢の人々が集まっている」彼のマーク、そしてあなたの名前の数字を超えて」

(黙示録 15:2)。「神の立琴を持っている」シオンの山の小羊とともに、人間の中から救われた14万4千人がいます。そして、多くの水の音や大きな雷の音のように、「ハーブを奏でるハーパーたちの声」が聞こえます。そして彼らは「玉座の前で新しい歌を歌った。その歌は14万4千人以外には誰も知ることができなかった。それはモーセと子羊の歌、救出の賛美歌である。140人以外には誰もいない」-4,000、あなたはその歌を学ぶことができます、それはあなたの経験の音楽だからです - そして誰も同じような経験をしたことはありません。地球よ、彼らは生きている者の中で、神と小羊の初穂とみなされるのです。」(黙示録 14:1-5; 15:3)。

「これらは大患難から抜け出した者たちである」(黙示録 7:14) 。彼らは、国家が誕生して以来、かつてないような困難な時代を経験しました。彼らはヤコブの苦難の時の屈辱に耐えました。彼らは、神の裁きが最後に噴出する間、とりなし者なしで留まりました。しかし、彼らは「衣服を洗い、小羊の血で白くした」ため、解放されました。「彼らの口には偽りが見つからなかった。彼らには罪がないからである」神の前に。「それゆえ、彼らは神の御座の前に立って、昼も夜も神の神殿で神に仕える。そして、御座に座っておられる方が彼らを覆うであろう。」(黙示録 7:15) 。彼らは飢餓と疫病に見舞われた地球について考えました。彼らは太陽が人間を高熱で罰するのを見て、彼ら自身も苦しみ、飢え、渇きに耐えました。しかし、「彼らは二度と飢えることも、喉が渇くこともありません。太陽も静けさも彼らに降り注ぐことはありません。王座の真ん中にいる小羊が彼らを養い、彼らを水の泉に導くからです」そうすれば神は彼らの目に涙を流して清めてくださるであろう」(黙示録 7:16,17) 。

いつの時代も、救い主に選ばれた者たちは、保護観察学校で教育を受け、訓練を受けてきました。彼らは地球上の狭い道を歩いていました。彼らは苦しみの炉の中で浄化されました。イエスのおかげで、彼らは反対、憎しみ、中傷に耐えました。彼らは痛ましい葛藤を経験しながらも主に従いました。彼らは自己否定を行い、激しい失望を経験しました。彼らは、つらい経験を通して、罪の悪性、その力、罪悪感、そして不幸を理解しました。そして彼らは嫌悪感を持って彼を見た。治癒のために支払われた無限の犠牲の感覚は、彼ら自身の目に謙虚になり、一度も倒れたことのない人には感謝できない感謝と賞賛で心を満たします。彼らは多くを赦されてきたので、多くを愛します。キリストの苦しみにあずかった彼らには、キリストの栄光にあずかる資格があります。

神の相続人たちは、屋根裏部屋から、小屋から、地下牢から、足場から、山から、砂漠から、地球と海の洞窟から来ました。地球上では彼らは

「無力で、苦しみ、虐待されている」。何百万人もの人々が、サタンの欺瞞的な見せかけに従うことを断固として拒否したため、悪名を積んで墓に落ちました。彼らは人間の法廷で最も卑劣な犯罪者として裁かれた。

しかし今は「神ご自身が裁判官です」（詩50:6）。今、地上の決定は覆されます。

「主はご自分の民のそしりを取り除いてくださるでしょう。」（イザヤ 25:8）。「彼らは彼らを『主に救われた聖なる民』と呼ぶだろう。彼は「灰には美しさを、悲しみには喜びの油を、重苦しさには賛美の衣を与えるべきである」と決意しました（イザヤ62:12,61:3）。彼らはもはや弱く、苦しみ、追放され、抑圧されているわけではありません。これからあなたは永遠に主と共にいます。

彼らは、これまで地球上で最も高貴な人々が着ていたものよりも豪華な衣服を着て玉座の前に立っています。彼らは、これまで地上の君主の頭に置かれていたものよりも輝かしい王冠をかぶっています。痛みと涙の日々は永遠に終わりました。栄光の王はすべての顔から涙をぬぐいました。痛みの原因はすべて取り除かれました。ヤンの枝が揺れる中、彼らは澄んだ、甘くてメロディアスな賛美歌を歌います。すべての声が天のアーチを満たすハーモニーに加わり、「玉座に座っておられる私たちの神と小羊に救いを。そして天の住人は皆、こう答えます。「アーメン。」私たちの神に賛美と栄光と知恵と感謝と栄誉と力と強さが世々限りなくありますように」（黙示録7:10,12）。

この人生において、私たちは救いという素晴らしいテーマを理解し始めることができるだけです。私たちの有限な理解力によって、十字架で出会った非難と栄光、生と死、正義と憐れみを非常に詳しく考えることができます。しかし、私たちの精神的能力を最大限に発揮しても、その意味を完全に理解することはできません。救いの愛の長さや広さ、深さと高さは、ぼんやりとしか理解できません。救いの計画は、たとえ救出された人々が見られているとおりに見て、彼らが知っているとおりに知っていたとしても、完全には理解されないでしょう。しかし、永遠の時代を通して、驚きと喜びの心に新たな真実が次々と明らかにされるでしょう。たとえ地上の悲しみ、痛み、誘惑が終わり、その原因が取り除かれたとしても、神の民は自分たちの救いにどれだけの費用がかかるかについて、明確で知的な知識を常に持っています。

キリストの十字架は永遠に救われた者の知識であり、歌となるでしょう。栄光を受けたキリストのうちに、彼らは十字架につけられたキリストを見るでしょう。広大な宇宙に広がる無数の世界を創造し維持したその力を持つ神、神の最愛の人、天の威厳、ケルビムと輝かしいセラフィムが喜んで崇拝した人が、人間を高揚させるためにへりくだったということは、決して忘れられることはないでしょう。落ちた。失われた世界の苦悩が彼の心を打ち砕き、カルバリの十字架で命を絶たれるまで、イエスは罪の罪と非難を負い、父の顔を隠したことを。すべての世界の創造者、すべての運命の裁定者が人間への愛のために栄光を捨て、謙虚になることは、宇宙の永遠の称賛と崇拝を集めるだろう。救われた者の国々が自分たちの救い主を見つめ、御顔に輝く御父の永遠の栄光を見よ。彼らは永遠から永遠に続く神の玉座を見つめ、神の王国に終わりが無いことを知ると、恍惚とした賛美歌を歌い出します。血！"

十字架の謎は他のすべての謎を説明します。カルバリから差し込む光の中で、私たちが恐れと恐れで満たした神の特質は美しく魅力的に見えます。慈悲、優しさ、父性の愛は、神聖さ、正義、権力と混同されているように見えます。わたしたちがその高尚で崇高な御座の威厳を熟考するとき、その慈悲深い現れの中に神の性格が見え、「私たちの父」というその愛情深い称号の意味がこれまでにないほど理解されます。

無限の知恵を持つ神は、御子の犠牲を必要とする以外に、私たちを救い出す計画を立てることはできなかつたことが理解されるでしょう。この犠牲の代償は、地球を救われた神聖で幸福な不滅の存在で満たす喜びです。救い主と闇の勢力との闘いの結果は、救われた者の喜びとなり、その結果、永遠に神に栄光がもたらされます。そして、それぞれの魂の価値はそのようなものであり、父は支払われた代償に満足されます。そしてキリストご自身も、その偉大な犠牲の成果を見て満足されています。

第41章

地球の荒廃

「彼女の罪は天にまで積み重なり、神は彼女の咎を覚えておられた。」 「彼女があなたに飲ませてくれた杯に、二倍の量を彼女に与えなさい。彼女が自分を讃え、喜んでいただけ、苦しみと悲しみの中で彼女に与えなさい。彼女は心の中でこう言っているからです。『私は女王として座っている、「私はやもめではないので、悲しみを見ることはありません。それゆえ、ある日、疫病が来て、死と悲しみと飢餓が起こり、彼女は火で焼かれます。彼女を裁く主なる神は強いからです。』そして、彼女と淫行を犯し、喜びに生きた地上の王たちは、彼女のために泣き、彼女を悼むだろう... 「ああ、あの偉大なバビロン、あの強い都市は悲惨だ!彼女の裁きが来たからである」と言うだろう。一時間以内に」 (黙示録 18:5-10)。

「彼女の豊かな喜びによって金持ちになった」「地上の商人たち」は、「彼女の苦痛を恐れて遠くに立って、泣き、嘆いて、「ああ、ああ、あの大都市よ！」と言うだろう。上質な紫や緋色の亜麻布を着て、金や宝石や真珠で飾られていたのです!一時間のうちに、あまりにも多くの富が無駄になったのです。」 (黙示録 18:3,15,16) 。

これが神の怒りの到来の日にバビロンに下される裁きである。
彼女は彼らの不法行為の尺度を満たした。あなたの時が来ました。破滅の機は熟している。

神の声が神の民の捕虜を逆転させるとき、人生における大きな争いですべてを失った人々の恐ろしい目覚めが起こるでしょう。保護観察が有効であった間、彼らはサタンの欺瞞に目がくらんで、自分たちの罪深い行為を正当化しました。富裕層は、恵まれていない人々よりも自分が優れていることを誇りに思っていました。しかし彼らは神の律法を犯して富を手に入れたのです。彼らは、飢えた人に食事を与え、裸の人に服を着せ、正当な扱いをし、慈悲を愛することを怠りました。彼らは自分自身を高め、仲間の敬意を得ようとしていました。今、彼らは自分たちを偉大にしてくれたすべてのものを剥奪され、貧しく無防備な状態に置かれています。彼らは、創造主の代わりに自分たちが選んだ偶像が破壊されるのを恐怖の目で見ています。彼らはこの世の富や楽しみのために自分の魂を売り、神の前で豊かになることを求めませんでした。その結果、彼の人生は完全な失敗でした。あなたの喜びは今、胆汁の苦みに変わらるでしょう。彼らの宝物は破損しました。一生分の利益が一瞬で奪われてしまいました。裕福な人々は、宮殿が破壊され、金銀が散り散りになったことを残念そうに見ています。しかし、彼らの嘆きは、偶像とともに滅びるといふ恐怖によって沈黙させられます。

悪人が悲しみで満たされているのは、彼らが神と同胞を無視しているためではなく、神が勝利したからです。彼らはその結果が今日の当たり前になっていることを残念に思っている。しかし彼らは自分たちの悪を悔い改めません。

彼らはできることなら、何らかの勝利方法を試みることを怠らないだろう。

世界は、彼らが嘲笑し嘲笑し、排除しようとした人々が疫病、嵐、地震を無傷で通過するのを見えています。

律法の違反者にとっては焼き尽くす火である者は、その民にとっては安全な楼閣である。

人々の好意を得るために真理を犠牲にした牧師は、今では自分の教えの性質と影響力を認識しています。彼が説教壇に立っているとき、街を歩いているとき、人生のさまざまな場面で人々と交わっているとき、全知の目が彼を見守ってきたことは明らかです。それぞれ

魂の感情、書かれたすべての行、話されたすべての言葉、人々を虚偽の隠れ家にリラックスさせるすべての行為は、種を蒔いているのです。そして今、彼を取り囲む惨めで破滅した魂の中に、彼は収穫を見ます。

主は言われる、「彼らは、平和がないのに、『平和、平和』と言って、わが民の娘の傷を軽く癒してくれる。」 「私が彼を悲しませなかったのに、あなたは偽りで義人の心を悲しませ、彼がその邪悪な道から離れて生きられないように悪人の手を強めました。」 (エレミヤ 8:11; エゼキエル 13:22)。

「わが牧場の羊を滅ぼし、散らす羊飼いたちよ、災いです……見よ、わたしはあなたたちの悪行をあなたたちに会いに行きます。」 「羊飼いや、吠え、叫び、灰の中に転がりなさい、群れの長よ、あなたが殺される日が来たからです...そして、羊飼いやには逃げることはなく、羊の頭には救いはありません群れ。」 (エレ 23:1 と 2; 25:34 と 35)。

牧師や人々は、自分たちが神と適切な関係を維持できていないことに気づいています。彼らは、自分たちがあらゆる権利と正義の法の創造者に反逆したことを理解しています。神の戒めに対する軽蔑は、何千もの悪、不和、憎しみ、不正の根源を生み出し、ついには地球は広大な戦場、腐敗の穴と化しました。これは、真実を拒否し、間違いを大切にすることを好む人々の前に今現れているビジョンです。

不従順で不誠実な人々が、永遠に失ったもの、つまり永遠の命に対して抱く願望を、どんな言語でも表現することはできません。その才能と雄弁さで世界から賞賛された人々は、今ではこれらのことを本当の光で見えています。彼らは罪によって自分たちが何を失ったかに気づき、その忠実さを軽蔑し嘲笑していた人々の足もとにひれ伏し、神が彼らを愛しておられると告白します。

人々は自分たちが騙されたことに気づきました。彼らは破滅に投げ込まれたとしてお互いを非難します。しかし、全員が一致団結して大臣たちに最も厳しい非難を投げかけます。不誠実な牧師たちは楽しいことを預言しました。彼らは聴衆を誘導して神の律法を無効にし、それを神聖化しようとする人々を迫害しました。

今、これらの教師たちは絶望の中で、自分たちの欺瞞的な仕事を世界の前で告白します。群衆は大いに激怒した。「私たちは道に迷ってしまった！」と彼らは叫びます。「そしてあなたたちは私たちの破滅の原因です。」そして彼らは偽羊飼いたちに敵対します。かつて彼らを大いに賞賛した人々は、彼らに最も恐ろしい呪いを宣告するでしょう。かつて彼らに栄冠をもたらしたのと同じ手が彼らを滅ぼすために立ち上がるだろう。神の民を犠牲にするはずだった剣は、今では敵を殲滅するために向けられています。どこでも紛争や流血が起きています。

「その騒音は地の果てまで来る。主は諸国民と争うからである。主はすべての肉なる者に対して裁きに入り、悪人を剣に引き渡されるであろう。」 (ジャー。 25:31) 。 6,000年間、大規模な紛争が続いた。神の御子とその天の使者たちは、人の子らに警告し、啓発し、救うために、邪悪な者の力と闘っていました。今では誰もが決断を下しました。邪悪な者たちは完全にサタンの神との戦いに加わったのです。神が軽蔑されていた律法の権威を取り戻す時が来た。さて、論争はサタンとの間だけでなく、人間との間でも起きています。「主は諸国民と論争を起こされる」。「彼は悪者を剣に引き渡すだろう。」

「犯されたすべての忌まわしい行為のためにため息をつき、うめき声を上げる者たち」に救出の印が付けられた。さて、死の天使が出てきて、エゼキエルの幻の中で破壊的な武器を持った男たちによって表現され、彼に命令が与えられます。「老人、若者、処女、少年、女性を皆殺しにするまで殺せ。しかし、しるしを持っている者は誰でも、近づいてはならず、私の聖所から始めなさい。」預言者はこう言います。「そして彼らは、家の前にいた最年長の人たちから始めた。」 (エゼキエル 9:1-6) 。破壊の働きは、人々の精神的な守護者であると主張する人々の間で始まります。偽の監視者たちが最初に

落ちること。同情したり容赦したりする人は誰もいません。男性も女性も乙女も幼い子供も共に滅びます。

「主はその咎のために地球の住民を罰するために彼の代わりに出て来るでしょう、そして地球は彼らの血を暴き、殺された人々をもはや隠すことはありません。」（イザヤ 26:21）。「そして、これが主がエルサレムと戦争をするすべての民を襲われる疫病である。彼らの肉は立っている間に焼き尽くされ、目は眼窩で腐り、舌は口の中で腐るであろう。

その日もまた、彼らの間に主からの大きな災いが起こるであろう。というのは、おのおのが自分の仲間の手を握り、おのおの自分の手を仲間の手押し当てて上げるからである。」（ゼカエル14:12,13）自分自身の激しい情熱の狂った争いの中で、そして混じりけのない神の怒りの恐ろしいほとぼしりによって、地上の邪悪な住民が祭司、総督、民衆、富める者も貧しい者も、身分の高い者も低い者も倒れる。地球から地球の反対側まで。彼らは悲しまれることも、集められることも、埋葬されることもありません」（エレミヤ25:33）。

キリストの到来により、悪人は全地から一掃され、キリストの口の霊によって焼き尽くされ、キリストの栄光の輝きによって滅ぼされます。キリストはご自分の民を神の都に導き、地球からは住民がいなくなります。「見よ、主は地を空にし、荒廃させ、その表面を覆し、その住民を散らされる。」「主がこの言葉を語られたので、地は完全に空になり、完全に略奪されるでしょう。」「彼らは律法を犯し、法令を変え、永遠の契約を破るためである。それゆえ、呪いが地を焼き尽くし、そこに住む者たちは荒廃するであろう。したがって、地の住民は焼かれるであろう。」（イザヤ 24:1,3,4,6）。

地球全体が荒れ果てた砂漠のように見えます。地震によって破壊された都市や町の廃墟、根こそぎにされた木々、海から投げ込まれた、または地球自体から投げられた荒石がその表面に点在し、広大な洞窟が山が基礎から切り離された場所を示しています。

予兆された出来事は、償いの日の最後の厳粛な儀式で起こります。至聖所での奉仕が完了し、罪のいけにえの血によってイスラエルの罪が聖所から取り除かれると、その身代わりは生きてまま主の前にささげられました。そして大祭司は会衆の前で「イスラエルの子らのすべての咎と、彼らのすべての罪に応じたすべての罪」を告白し、それをヤギの頭の上に置いた。（レフ。

16:21）。同様に、天の聖所で贖いの働きが完了すると、神、天の天使たち、そして救い出された者の軍隊の前で、神の民の罪がサタンに負わされることになる。彼は彼らに犯させたすべての悪について有罪と宣告されるだろう。そして、スケープゴートが無人地に送られたのと同じように、サタンも荒れ果てた地球に追放され、そこは人口の少ない陰惨な砂漠となります。

啓示者ヨハネは、サタンの追放と、地球が混乱と荒廃の状態に陥らなければならないことを予言します。そして、そのような状態が千年間続くと宣言します。主の再臨と悪人の滅びの場面を示した後、預言はこう続きます。「私は天使が天から降りてくるのを見た。手には深淵の鍵と大きな鎖を持っていた。彼は天使を縛りつけた。ドラゴン、古代の蛇、それは悪魔でありサタンであり、彼を千年間縛り付け、深淵に投げ込み、そこに閉じ込め、彼に封印を押し、彼がこれ以上国々を欺くことができないようにし、千年が終わるまで。そしてその後、彼が少しの間解放されることが重要だ。」（黙示録 20:1-3）。

「深淵」という表現が混乱と暗闇の状態にある地球を表していることは、他の文章からも明らかです。聖書の記録は、「初めの」地球の状態について、「形もなく空虚であり、暗闇が深淵の面を覆っていた」と述べています。

(創世記 1:2)。預言は、少なくとも部分的にはその状態に戻るだろうと教えています。

神の大いなる日を待ち望みながら、預言者エレミヤはこう宣言しています、「わたしは地を見た、見よ、そこは荒れ果てて空っぽだった。そして天には光がなかった。わたしは山々を見た、そして見よ、それらはすべて震えていた。そしてすべてが震えていた」「丘が震えました。私が見ると、人は誰もおらず、空の鳥はすべて逃げ去っていました。また、肥沃な土地が砂漠になっていて、そのすべての都市が低く置かれているのが見えました。」(23-26)。

ここは千年の間、サタンとその邪悪な天使たちの本拠地となるだろう。地球に限定され、彼は他の世界にアクセスして、一度も墮落したことがない人々を誘惑したり嫌がらせしたりすることはできません。この意味で彼は異にはまっている。彼が権力を行使できる人は誰も残っていない。彼は、何世紀にもわたって彼の唯一の楽しみであった欺瞞と破滅の仕事から完全に切り離されています。

預言者イザヤは、将来のサタンの墮落の時を熟考し、こう叫びます、「おお、明けの明星よ、朝の娘よ、なんと天から落ちたのでしょうか！諸国民を弱らせたあなたは、なんと地に投げ落とされるのです！そしてあなたは、あなたの心の中でこう言った、「私は天国に昇る、神の星々の上に私の玉座を高める…私は至高者になるだろう。それなのに、あなたは地獄、深淵の深みに連れて行かれるだろう。あなたを見た人はあなたを熟考し、彼らはあなたを考慮し、そして彼らは言うでしょう、「これは、地球を震わせ、王国を震わせた男ですか？世界を砂漠のようにし、その都市を荒廃させたのは誰ですか？誰がやったのですか？」彼の捕虜を彼らの家に自由にさせないでしょうか？」(イザヤ 14:12-17)。

6,000年にわたり、サタンの反逆の働きは「地を揺るがし」てきました。

彼は「世界を砂漠」にし、「彼らの都市」を破壊しました。そして「彼は捕虜を解放しようとはしませんでした。」6,000年間、彼の鎖は神の民を受け入れ、彼は彼らを永遠に捕らえるでしょう。しかし、キリストは彼らの束縛を打ち破り、囚人たちを解放しました。

今や邪悪な者さえもサタンの力の及ばないところに置かれており、サタンは邪悪な天使たちとともに、罪がもたらした呪いの影響を観察するためにただ残ることになる。「諸国の王たちはみな、そう、彼ら全員が、それぞれの墓に名誉をもって眠っています。しかし、あなたはろくでなしの銃撃のように墓から追い出される...

あなたは自分の土地を破壊し、自分の民を殺したので、彼らと一緒に墓に集められることはないでしょう。」(イザヤ 14:18-20)。

サタンは千年にわたり、神の律法に対する反逆の結果を熟考するため、荒れ果てた地球上をあちこち歩き回るでしょう。この間、あなたの苦しみは激しくなるでしょう。彼の墮落以来、絶え間なく活動する生活が反省を追い払った。今、彼は力を剥奪され、天の政府に対する最初の反逆以来、自分が果たしてきた役割を熟考し、自分が犯したすべての悪のために苦しむことになる恐ろしい未来を恐怖と震えとともに予感させるのみとなっている。そして犯した罪の罰を受けることになる。

神の民にとって、サタンの捕囚は満足と喜びをもたらすでしょう。預言者はこう言います。「神があなたに、労働と震えと、彼らがあなたに課せた過酷な隷属からの休息を与える日が来るでしょう。その時、あなたはバビロンの王に対してこの言葉を言うでしょう。」[ここではサタンを表しています] そうすれば、あなたはこう言うだろう、「どうして圧制者はやんだのか！...主は悪人の杖と支配者の王笏を打ち砕かれた。」

激しい怒りで民を打ち、絶え間ない疫病で民を殺し、怒りで国々を支配した者が、今迫害されており、誰も彼を止めることができません。」(イザヤ書14:3-6)

第一の復活と第二の復活の間の千年の間に、悪人の裁きが行われます。使徒パウロはこの裁きが再臨に続く出来事であると指摘しています。「主が来られるまでは、何も裁いてはなりません。主は闇の隠された事柄を明らかにし、心の思いを明らかにしてください。」(1コリント 4:5)。ダニエルは、日の古人が来たとき、「いと高き者の聖徒たちに裁きを与えられた」(ダニエル7:22)と宣言しています。その時、正義の人たちが王として君臨し、

神の祭司たち。ヨハネは黙示録でこう述べています、「わたしは玉座を見た。そして彼らはその上に座り、裁く力が彼らに与えられた。」 「彼らは神とキリストの祭司となり、千年間神とともに統治するであろう。」 (黙示録20:4および6)。パウロが予告したように、「聖徒たちが世を裁く」のはこの時です (1コリント6:2)。彼らはキリストと結びついて、悪人を裁き、その行動を聖書と照らし合わせ、体の中で行われた行動に従って各事件を決定します。そして、悪人が受けるべき罰は彼らの行いに応じて割り当てられ、死の書に彼らの名前の反対側に記録される。

サタンと邪悪な天使たちもキリストとその民によって裁かれます。パウロは「私たちが天使を裁くことを知らないのですか？」と言いました。(1コリント6:3)。そしてユダは、「自分たちの王国を守らず、自分の住まいを離れた天使たちを、その大いなる日の裁きが来るまで暗闇と永遠の牢獄に留めておいた」(ユダ6章)と宣言します。

二度目の復活は千年の終わりに起こります。そのとき、悪人たちは死からよみがえって神の前に現れ、「書かれた裁き」を執行するでしょう。したがって、啓示者ヨハネは義人の復活について説明した後、「しかし、残りの死者たちは、千年が終わるまで再び生き返ることはなかった」と述べています。(黙示録20:5)。

そしてイザヤは悪人についてこう宣言します、「彼らは囚人として地下牢に集められ、牢獄に閉じ込められ、何日も経ってから訪問されるであろう。」

(イザヤ24:22)。

第42章

紛争の終わり

千年の終わりに、キリストは地球に戻ってきます。彼は救われた者の軍勢を伴い、無数の天使の従者たちによって助けられています。彼が恐るべき威厳をもって降臨した瞬間、邪悪な死者たちに判決を受けるために立ち上がるよう命じる。これらは海の砂のように無数の強力な軍隊のように見えます。最初の復活で生き返った人々とはなんと対照的でしょう。義人たちは不滅の若さと美しさを身に着けていました。悪人は病気と死の特徴を持っています。

その膨大な群衆全員の目は神の子の栄光を見ようとします。邪悪な者の軍勢は声をそろえて「主の御名によって来る者は幸いです！」と叫びます。この言葉にインスピレーションを与えているのは、イエスへの愛ではありません。真実の力によって、彼らは思わず口を開いて告白せざるを得なくなります。彼らが墓に下りたとき、悪人たちはキリストに対して同じ敵意と反逆の精神を持って墓から出てきます。彼らには、過去世の欠陥を正すための新たな恵みの時はありません。彼らはそれから何も得られません。生涯にわたって罪を犯しても、彼らの心は和らぎませんでした。もし第二の猶予期間があったとしたら、最初の猶予期間と同様に、神の要求を回避し、神に対する反逆を扇動することに費やされることになるでしょう。

キリストはオリーブ山に降臨し、復活後にそこから昇天し、天使たちがキリストの帰還の約束を繰り返しました。預言者はこう言います、「わたしの神、主が来られ、聖徒たちもみなあなたとともに来る」。「その日、彼の足は東の方のエルサレムの前にあるオリーブ山の上に立つ。そしてオリーブ山は真ん中で裂け、……そして非常に大きな谷が生じるであろう。」「主は全地を治める王となる。その日、一人が主となり、一人が神の名となる。」（ゼカエル 14:5,4,9）。新しいエルサレムが、その魅惑的な輝きの中で、清められ、それを受け入れる準備ができた場所に安らぐとき、キリストは、その民や天使たちとともに聖都に入ります。

そしてサタンは、覇権を賭けた最後の血みどろの戦いに備える。力を奪われ、欺瞞の仕事から切り離されると、悪の王子は惨めで憂鬱な気分になった。しかし、邪悪な者たちが復活し、大勢の人々が味方しているのを見て、希望が甦り、大論争で自分自身を放棄しないことを決心しました。彼は自らの旗の下にすべての失われた軍隊を形成し、彼らを通じて計画の実行に努めるだろう。悪人はサタンの捕虜です。

彼らはキリストを拒否し、反乱軍の指導者の統治を受け入れました。彼らはあなたの提案を受け入れ、あなたの命令を実行する準備ができています。しかし、彼の原始的な狡猾さと一致して、彼は自分がサタンであることを認識していません。彼は、遺産を不法に剥奪された世界の正当な所有者である王子であると主張します。彼は惑わされた臣民たちに自らを救い主として表し、自分の力が彼らを墓場から蘇らせ、最も残酷な圧政から彼らを救おうとしていると彼らに保証する。

キリストの存在が取り除かれると、サタンは自分の主張を裏付けるために奇跡を起こします。彼は弱い人を強くし、彼自身のスピリットとエネルギーですべての人にインスピレーションを与えます。彼は彼らを率いて聖徒たちの陣営を攻撃し、神の都を占領しようと提案する。彼は悪魔のような歓喜をもって死者の中から蘇った数え切れないほどの数百万の人々を指差し、彼らの指導者として都市を転覆させ、王位と王国を取り戻す能力があると宣言した。

その膨大な群衆の中には、洪水前から存在していた長命な種族に属していた人たちがたくさんいます。高貴な身長と計り知れない知性を持ち、墮天使の支配と支配に服従し、自分の技術と知識のすべてを自分自身の高揚に捧げた人々。彼らは、その素晴らしい芸術作品によって世界がその天才性を称賛するようになりましたが、その残虐さと邪悪な発明によって地球が腐敗し、神のイメージが損なわれたため、神は彼らを創造物の表面から消し去ってしまいました。国々を征服した王や将軍、一度も戦いに負けなかった勇敢な男、誇り高く野心的な戦士がおり、そのアプローチは王国を震撼させました。死んでも彼らは何の変化も感じませんでした。彼らは墓から立ち上がると、思考の流れが止まったところから再び思考の流れを再開します。彼らは、敗北する前に彼らを支配していた同じ勝利への欲求によって動かされています。

サタンはまず天使たちに相談し、次にこれらの王、征服者、有力者たちに相談します。彼らは自分たちの側の強さと数を見て、都市内の軍隊は彼らの軍隊に比べて小さいので、その軍隊を倒すことができると宣言します。彼らは新しいエルサレムの富と栄光を手に入れる計画を立てました。全員がすぐに戦いの準備を始めます。

熟練した職人が軍用器具を作ります。成功で有名な軍事指導者は、大勢の戦士を中隊や師団に組織します。

ついに前進の命令が下され、無数の軍勢が地球上で動き始め、その軍隊は地上の征服者によって召集されたことがなく、戦争が始まって以来あらゆる時代の連合軍によって決して匹敵することができなかった。最も強力な戦士であるサタンが前衛を指揮し、彼の天使たちがこの最後の戦いのために力を合わせます。王や戦士が武者行列を構成し、群衆はそれぞれ指定された指揮官を擁する大規模な隊列を組んで続きます。軍事的正確さで、コンパクトな隊列は断片化された不規則な地球の表面を横切って、神の都市に向かって前進します。イエスの命令により、新しいエルサレムの門は閉じられ、サタンの軍隊が都市を包囲し、攻撃の準備をします。

再びキリストが敵の目の前に現れます。都市の上空、磨かれた金の基礎の上に、高く荘厳な玉座が鎮座しています。この玉座には神の子が座しており、彼の周りには神の王国の臣民がいます。キリストの力と威厳は、どんな言語でも、どんなペンでも描写することはできません。永遠の父の栄光が御子を取り囲んでいます。神の臨在の輝きは神の都市を満たし、ポータルを超えて広がり、地球全体をその明るさで満たします。

玉座に最も近いのは、かつてはサタンの大義に熱心だったが、火の中からはぎ取られた焼き印のように、深く激しい献身をもって救い主に従った人々である。次に、虚偽と不貞の中でキリスト教的な人格を完成させた人々、キリスト教世界が神の律法の廃止を宣言したときにそれを尊重した人々、そして信仰のために殉教したあらゆる年齢の何百万人もの人々です。そしてその向こうには、「あらゆる国々、部族、民族、異国語から来た、誰も数えることのできない群衆が……白い衣を着て、手にはシユロの枝を持っている」(黙示録7:9)。

彼の戦いは終わり、勝利がもたらされました。彼らはレースに出場し、賞品を受け取りました。彼らの手の中のヤシの枝は勝利の象徴であり、白いローブはキリストの汚れのない義の象徴であり、それは今や彼らのものとなっています。

救われた者たちは、「玉座に座しておられる私たちの神と小羊に救いを」という賛美の歌を天のアーチ道に響き渡らせます。

天使とセラフィムが声を合わせて礼拝します。(ブランドを削除しました)
知性のある)サタンの力と悪について熟考し、救われた者たちはこう見る。

かつてないほど、キリストの力以外に彼らを勝利者にすることはできませんでした。その輝かしい群衆の中で、あたかも自分の力と善良さによって勝利したかのように、救いを自分の功績に帰する人は一人もいません。彼らが何をしたのか、何を苦しんだのかについては何も語られていません。すべての歌のリフレイン、すべての賛美歌の主旨は「私たちの神と小羊への救い」です。

地上と天に集まった住民たちの前で、神の子の最後の戴冠式が行われます。そして今、最高の威厳と権力を注ぎ込まれた王の中の王は、政府に対する反逆者たちに判決を下し、法に違反し民を抑圧した者たちに正義を執行します。神の預言者はこう言います。「私は大きな白い玉座と、その上に座っておられる方を見た。その御前から地も天も逃げ去った。そして彼らの居場所はどこにも見つからなかった。そして私は、大小の死人がその前に立っているのを見た」王座が開かれ、本が開かれ、また別の本が開かれ、それは命の本であり、死者はその本に書かれていることとその行いによって裁かれた。」（黙示録 20:11 および 12）。

記録簿が開かれ、イエスの視線が記録に注がれるやいなや、邪悪な者は、自分が犯したあらゆる罪に気づきます。彼らは、純粋さと神聖さの道のどこで足を滑らせたのか、そして神の律法に違反して反逆と高慢がどれほど遠くまで彼らを連れて行ったかを正確に理解しています。罪の耽溺によって引き寄せられる魅惑的な誘惑、倒錯した祝福、神の使者に対する軽蔑、拒否された警告、汚れた悔い改める心によってはね返される慈悲の波は、すべて火の文字で書かれたかのように現れます。

玉座の上には十字架が現れています。そして、パノラマのビジョンと同様に、アダムの誘惑と墮落の場面、そして偉大な救いの計画における一連の段階が映し出されます。救い主の謙虚な誕生。彼の素朴さと従順さの子供時代。ヨルダン川での洗礼。砂漠での断食と誘惑。彼の公の奉仕は、人々に天の最も貴重な祝福を明らかにしました。愛と慈悲の行為に満ちた日々、孤独な山中での祈りと徹夜の夜。妬み、憎しみ、そして悪の陰謀によって彼の恩恵は報われました。全世界の罪の圧倒的な重みの中で、ゲツセマネでの恐ろしく神秘的な苦しみ。殺人暴徒の手による彼の裏切り。その恐怖の夜の恐ろしい出来事——最も愛する弟子たちに見捨てられた無抵抗の囚人が、エルサレムの通りを乱暴に引きずり回されたこと。神の御子がアンナスの前で大喜びしてさらされ、大祭司の宮殿やピラトの裁きの場で非難され、卑怯で残酷なヘロデの前で嘲笑され、侮辱され、拷問され、死刑を宣告される——すべてが生き生きと描かれている。

そして今、落ち着きのない群衆の前に、最後の場面が明らかになります。カルバリの道を歩く患者の受難者、十字架に吊るされた天の君。高慢な司祭たちと、彼の末期の苦しみ、超自然的な暗闇をあざける民衆。盛り上がる大地、砕けた石、世界の救い主が命を捨てた瞬間を示す開いた墓。

恐ろしい光景が、まさに起こった通りに現れます。サタン、その天使たち、そして彼の臣民には、自分たちが作り上げた構図から目を背ける力はありません。各俳優は自分が演じた役を思い出します。ヘロデはイスラエルの王を滅ぼすためにベツレヘムの罪のない子供たちを殺した。洗礼者ヨハネの血がその罪深い魂に宿る、極悪非道なヘロディア。弱くて日和見的なピラト。あざける兵士たち。司祭たちと王子たち、そして「彼の血が私たちと私たちの子供たちに降り注ぎますように！」と叫んだ怒った群衆。——誰もが自分の罪の大きさを熟考する。彼らは無駄に、神の顔の神聖な威厳から身を隠そうとします。

救い主の足元に王冠を投げかけ、「彼は私のために死んでくださった！」と叫ぶ一方で、救い主は太陽を見上げました。

救出された大勢の人たちの中には、キリストの使徒たち、英雄的なパウロ、熱烈なペテロ、愛するヨハネ、そして彼らの忠実な兄弟たち、そして城壁の外にいる間、卑劣なすべてのものとともに彼らとともにいた膨大な数の殉教者たちがいる。そして忌まわしいのは、彼らが迫害され、投獄され、殺された人々です。そこにそれがある

ネロ、かつて自分が拷問した人々の喜びと高揚を目の当たりにし、極度の苦痛の中に悪魔的な喜びを見いだした、あの残虐さと悪徳の怪物。彼の母親は自分の仕事の結果を目撃するためにそこにいます。邪悪な性格が息子にどのように伝わり、息子の影響力と模範によって刺激され発展した情熱が、世界を震撼させる犯罪という形で実を結んだのかを知るために。

ローマ教皇の司祭や高位聖職者たちは、自分はキリストの大使であると主張しながらも、キリストの民の良心を支配するために拷問、地下牢、火刑を利用しました。自分たちを神よりも高く評価し、至高者の法を変えようとした傲慢な教皇たちがいます。いわゆる教父たちは神に支払うべき口座を持っており、喜んで取り除きたいと考えています。

非常に遅くなって彼らは、全知の者がその律法に熱心であり、決して罪を晴らすつもりはないことを知りました。彼らは今、キリストがご自身の関心を、苦しむ人々の関心と同一視しておられることに気づきました。そして、主の言葉の力を感じてください。「あなたが私の兄弟たちの中で最も小さい者の一人にしたのと同じように、私にもしたのです。」（マタイ 25:40）。

邪悪な世界全体が、天の政府に対する大反逆罪で、神の法廷の法廷で罪状認否を受けていますが、彼には自分の大義を弁護する者が誰もいません。彼らには言い訳の余地がない。そして永遠の死の宣告が彼らに宣告される。

今や、罪の代償は高貴な独立や永遠の命ではなく、奴隷、破滅、そして死であることは誰の目にも明らかです。邪悪な者たちは、自分たちが反逆的な人生を送ったために何を失ったかを知っています。最も優れた永遠の栄光の重みは、提供されるときには軽蔑されました。しかし、今の彼はなんと魅力的に思われることでしょう！「これだけのことを」と失われた魂は叫びます、「手に入れることもできたでしょう。しかし、私はこれらのことを自分から遠ざけたほうが好きでした。ああ！奇妙な愚かさ！私は平和、幸福、名誉を不幸、悪名、絶望と交換しました。」天国から自分たちが排除されるのは公平なことだと誰もが思っている。彼らは自分たちの命にかけて、「私たちはこのイエスが私たちを統治することを望んでいません」と宣言しました。

まるで魅了されたかのように、悪人たちは神の子の戴冠式を熟考します。彼らは神の手の中で、彼らが軽蔑し、違反した神の律法の表を熟考します。彼らは救われた者たちの驚き、恍惚、そして崇拜の爆発を目撃し、そのメロディーの波が街の外の群衆に広がると、全員が心を一にして叫びます、「全能の神、主よ、あなたの御業は偉大で素晴らしいです！」

聖徒の王よ、あなたの道は正しく真実です」（黙示録15:3）そして彼らは命の君を崇拜してひれ伏します。

サタンはキリストの栄光と威厳を熟考しているときに麻痺しているように見えます。かつて身を覆う天使だった彼は、自分が落ちた場所を覚えています。輝かしいセラフィム、「朝の息子」、なんと変わってしまった、なんと墮落したことだろう！彼は栄誉を与えられた評議会から永久に排除された。さて、御父のすぐ近くに立って、御父の栄光を見守っている別の人を見てください。彼は、背が高く堂々とした存在の天使によってキリストの頭に王冠が置かれているのを見て、この天使の高い地位が自分のものであった可能性があることを知っています。

記憶は、あなたが神に対してつぶやき、キリストを妬むまで軽蔑するまであなたの無邪気さと純粋さ、平和と満足の故郷を呼び起こします。天使たちの同情と支援を得るための彼の告発、反逆、欺瞞、神が神の御前で自分自身の更生のための努力をしない頑固な執拗さ。

許しを与えただろう——すべてが彼の前に鮮明に現れる。人間の間での彼の働きとその結果、つまり同胞に対する人間の敵意、恐ろしい生命の破壊、王国の興亡、王座の破滅、長く続く騒動、紛争、革命を振り返る。彼は、キリストの働きに反対し、人類をますます滅びに深く沈めようとする絶え間ない努力を覚えている。あなた方の悪魔のような陰謀には、預金者たちを滅ぼす力が無かったことを知しましょう。

イエスを信頼してください。サタンは自分の闘争の成果である王国を見て、失敗と破滅しか見ていません。彼は群衆に、神の都は格好の餌食になるだろうと信じさせた。しかし、あなたはこれが間違いであることを知っています。大規模な紛争の過程で、彼は繰り返し敗北し、降伏を余儀なくされました。彼は永遠の力と威厳をよく知っています。

大反逆者の計画は常に自分自身を正当化し、神の政府が反乱の責任であることを証明することでした。この目的のために、彼は巨大な知性のすべての力を結集した。彼は、長い間進行してきた大論争の彼のバージョンを受け入れるよう大勢の群衆を誘導するために、意図的かつ組織的に取り組み、そして素晴らしい成功を収めました。何千年もの間、この陰謀の指導者は真実を虚偽として主張してきた。しかし、ついに反乱を滅ぼさなければならない時が来て、サタンの歴史と性格が明らかになりました。キリストを王位から退け、その民を滅ぼし、神の都を手に入れようとする彼の最後の大きな努力の中で、この最大の詐欺師は完全に正体を暴かれます。彼の支持に結集した人々は、自分たちの大義が完全に失敗したことを目の当たりにしている。キリストの追従者と忠実な天使たちは、神の政府に対する彼らの陰謀の全容を目の当たりにしています。彼は普遍的な処刑の対象です。

サタンは、彼の自発的な反逆が天国にふさわしくないと見て、神と戦うために自分の能力を訓練しました。天国の純粋さ、平和、調和は彼にとって極度の拷問となるでしょう。神の憐れみと正義に対する彼らの告発は今や沈黙している。彼がエホバに対してもたらそうと努めた不信用は、すべて彼の身に降りかかったのです。そして今、サタンは身をかがめ、自分の判決の正当性を告白します。

「主よ、あなたを恐れず、あなたの御名をあがめない人はいないでしょうか。あなただけが聖なるのです。それゆえ、すべての国々があなたの前に来てひれ伏します。あなたの裁きは明らかだからです。」（黙示録 15:4）。長年にわたる紛争の真実と誤りに関するすべての疑問が、いま明らかになりました。反乱の結果、神の法令を否定した結果は、創造されたすべての知性の目に示されました。神の支配とは対照的に、サタンの支配の結果は全宇宙に現れました。サタン自身の業が彼を非難しました。神の知恵、神の正義、そして善良さが最終的に証明されました。

この大論争における彼の取り組み全体が、彼の民と彼が創造したすべての世界の永遠の善を目指していたことは明らかです。「あなたのすべての行いはあなたを称賛するでしょう、おお

「主よ、あなたの聖徒たちがあなたを祝福してくださいますように。」（詩 145:10）罪の歴史は、神の律法が存在が神によって創造されたすべての存在の幸福にどのように結びついているかを示す証拠として、永遠に残るでしょう。大いなる紛争の事実を視野に入れ、全宇宙を、忠実な者も反逆者も、声を一つにしてこう宣言する、「聖徒の王よ、あなたの道は正しく真実である。」

人間のために父と子が払った多大な犠牲は、宇宙の前にはっきりと示されました。そして、キリストが義の地位を占め、主権や権力、そしてあらゆる名前を超えて栄光を受ける時が来ます。イエスが十字架に耐え、不名誉を軽蔑したのは、多くの子供たちに栄光をもたらすことができるという神の前に置かれた喜びのためでした。そして、悲しみと屈辱は想像を絶するほど大きいですが、喜びと栄光はさらに大きいのです。彼は救われ、ご自身の姿に新しくされた人々を見つめ、すべての心の中に神の完全な印象を持ち、すべての顔が彼らの王の面影を反映しています。

彼はそれらの中に自分の魂の働きの結果を見て満足します。それから、集まった義人も悪人もすべての群衆に届く声で、主はこう宣言される、「見よ、わたしの血の買い取りだ！彼らのためにわたしは苦しみ、彼らのために死んだ。彼らが永遠の世を通じてわたしの前に住むためだ」。そして、玉座の周りの白い服を着た人々から賛美の歌が上がります：「力と富と知恵と力と名誉と栄光と感謝の行いを受けるために屠られた小羊はふさわしいです。」

(黙示録5:12)。

サタンは神の義を認め、キリストの至高性の前にひれ伏すことを強いられていますが、その性格は変わっていません。反逆の精神が激流のように再び勃発する。熱狂に満ちた彼は、この大規模な紛争では降伏しないことを決意する。天の王との最後の絶望的な闘いの時が来た、彼は臣民の真っ只中に突入し、自らの怒りで彼らを鼓舞し、彼らを即時戦闘へと駆り立てようと努める。しかし、彼が反乱に誘惑した無数の何百万人もの人々の中で、今では彼の卓越性を認識する人は誰もいません。彼の力は終わりを迎えた。悪人はサタンを鼓舞するのと同じ神への憎しみで満たされています。しかし彼らは、自分たちの訴訟には絶望的であり、エホバに勝つことはできないと悟っている。彼らの怒りはサタンと、サタンの手先で欺瞞を働いた者たちに対して燃え上がり、悪霊の怒りをもって彼らに敵対する。

主は言われる、「あなたは自分の心を神の心とみなしているの、見よ、わたしは異邦人たち、諸国民の中で最も恐ろしい者たちをあなたたちに連れてくる。彼らはあなたの知恵の美しさに向かって剣を抜き、あなたのものを汚すだろう。穴に下ってください...そして私はあなたを滅ぼします、お守りのケルブよ、燃えるような石の間で...私はあなたを地面に投げ、王たちの前に置きました、彼らがあなたを見ることができるよう...そして私はあなたを見るすべての人の目の前で、あなたは地球上で灰になりました...非常に驚いたことに、あなたはそうになりました、そしてあなたは永遠に再び戻ることはありません。」(エゼキエル 28:6-8、16-19)。

「音を立てて戦う者たちの鎧も、血がにじむ衣服もすべて焼かれ、火の糧となるだろう。」
「主の怒りはすべての国々の上にあり、主の怒りはその軍勢すべての上にある。主は彼らを徹底的に滅ぼし、彼らを虐殺に引き渡した。」 「彼は悪しき者たちに雷、火、硫黄、そして激しい風の雨を降らせるだろう。見よ、その杯の部分を見よ。」 (イザヤ 9:5; 34:2; 詩 11:6)。火は神から天から降りてきます。地球が開きます。その奥に隠された武器が描かれています。あらゆる隙間から貪り食う炎が噴出する。岩自体が燃えています。オーブンのように燃え上がる日がある。ものすごい熱のために元素は溶け合い、地球とそこにある作品も燃えます (マタイ 4:1、IIペテロ 3:10)。地球の表面は溶けた塊、つまり広大で嵐のような火の湖のように見えます。悪人たちの裁きと滅びの時が来た——「主の復讐の日、シオンの闘争に対する報復の年」(イザヤ書34:8)。

悪人は地上で報いを受けます(箴言11:31)。「彼らはもみがらのようになる、そして来る日が彼らを焼き尽くすであろう、と万軍の主は言われる。」 (マラヤ 4:1)。
一瞬で破壊される人もいますが、何日も苦しみ続ける人もいます。誰もが自分の行いに応じて罰せられます。義人の罪はサタンに移され、サタンは自分の反逆だけでなく、神の民に犯させたすべての罪のために苦しまなければなりません。彼の罰は、彼が騙した人々の罰よりもはるかに重いに違いない。彼の欺瞞に誘惑された人々が滅びた後も、彼は生きて苦しまなければなりません。浄化の炎の中で、悪人は最終的に根も枝も滅ぼされます。サタンは根であり、その追随者は枝です。法律の完全な罰則が適用されました。正義の要求は満たされ、天と地は彼を見てエホバの正義を宣言します。

サタンの破壊的な働きは永遠に終わります。彼は六千年にわたり自らの意志を貫き、地球を不幸で満ち、宇宙全体に悲しみをもたらした。すべての被造物は同様にうめき、産みの苦しみを味わっています。

これで、神の被造物は神の臨在と誘惑から永遠に解放されます。「さあ休んでください、地球全体は今平和です！ - [義人]は喜びを叫びます。」（イザ。

14:7）。そして、忠実な宇宙全体から賞賛と勝利の叫びが上がります。「大群衆の声」、「多くの水の声、そして激しい雷鳴の声のような」声が聞こえ、「ハレルヤ！全能の神、主が統治されるからである。」と言うのです。（黙示録 19:6）。

地球が破壊の炎に覆われている間、義人たちは聖都に安全に住んでいます。最初の復活に参加した人々に対して、第二の死は何の力も持ちません。神は悪人にとっては焼き尽くす火ですが、神の民にとっては太陽であり盾でもあります（黙示録 20:6、詩篇 84:11）。

「私は新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は過ぎ去ったからである。」（黙示録 21:1）。悪を焼き尽くす火は地球を浄化します。呪いの痕跡はすべて一掃される。永遠に燃える地獄が、救出された人々の前に罪の恐ろしい結果を残すことはありません。

唯一の記憶が残っています。私たちの救い主は常に十字架のしるしを負っています。彼の傷ついた額、脇腹、手と足には、罪がもたらした残酷な業の唯一の痕跡があります。預言者は栄光のキリストを見てこう言います、「明るい光線が彼の手から出て、そこに彼の力の隠れ場所があった。」（ハブ 3:4）。主の手、そこから人間を神と和解させる深紅の流れが流れ出る傷ついた脇腹——そこには救い主の栄光があり、「主の力の隠れ場所」がある。イエスは、救いの犠牲を通して「救う力があり」、それゆえに、神の慈悲を軽蔑する人々に正義を執行する力が強かったのです。そして彼の屈辱のしるしが彼の最高の栄誉である。永遠の時代を通して、カルバリの傷は神の賛美を示し、神の力を宣言するでしょう。

「そしてあなたのもとに、おお群れの塔よ、シオンの娘の山よ、あなたのもとに来るでしょう。そうです、最初の支配権はあなたのところに来ます。」（ミカ 4:8）。燃える剣が最初の夫婦にエデンの門を閉ざして以来、聖人たちが待ち望んでいた時、つまり「神の所有物を贖う」時がやって来ました（エペソ1:14）。もともと人間に王国として与えられ、人間によってサタンの手に引き渡され、強力な敵によって長い間保持されていた地球は、偉大な救いの計画によって回復されました。罪によって失われたものはすべて回復されました。「主はこう言われる……地を造り、それを造られた方、それを確立された方、空に創造されたのではなく、人が住むために形造られた方。」（イザヤ 45:18）。地球を創造された神の本来の目的は、地球が救われた者の永遠の家として構成されるときに達成されます。「義人は地球を受け継ぎ、そこに永遠に住むでしょう。」（詩 37:29）。

将来の相続が物質的なものになりすぎることへの恐れから、多くの人が、そこを自分の家だと考えるように導く真実そのものを精神化するようになりました。キリストは弟子たちに、父の家に彼らのために住居を準備しに行ったことを保証されました。神の言葉の教えを受け入れる人は、天の住まいについてまったく無知というわけではありません。それにもかかわらず、「神を愛する者のために神が備えてくださったものを、目は見たことも、耳で聞いたことも、人の心に入ったこともありません」（コリント 2 :9）。人間の言葉では義人の報いを説明するのは不十分です。それは考えた人だけが知ることになるでしょう。有限な精神では神の楽園の栄光を理解することはできません。

聖書では、救われた者の相続財産を国と呼びます（ヘブル11:14-16）。そこでは天の羊飼いがその群れを生ける水の泉へと導きます。生命の木は毎月実を結び、その木の葉は国民の健康を支えます。水晶のように透き通った激流が絶えず流れており、その横には波打つ木々が投げ込まれています。

その影は主の贖いのために備えられた道を覆っています。そこでは広い平原が美しい丘へとそびえ立ち、神の山々がその著名な頂上をそびえ立っています。これらの平和な平原、これらの生きた小川のそばに、神の民は長い間巡礼者や旅人として家を見つけるでしょう。

「私の民は平和の住まい、安全な住居、そして静かな休息の場所に住むでしょう。」
「もはやあなたの土地での暴力や国境内の荒廃や破壊については聞かれないでしょう。しかしあなたは自分の城壁を救いと呼び、自分の門を賞賛と呼ぶでしょう。」 「彼らは家を建て、そこに住み、ぶどう畑を植え、その果実を食べる。彼らは他人が住むために建てるのではなく、他人が食べるために植えるのではない。(…)わたしの選出者は、彼らの手による作品です。」 (イザヤ 32:18; 60:18; 65:21 および 22)。

そこでは、「砂漠と乾燥した場所はこれを喜び、荒野は喜び、バラのように花を咲かせるでしょう。」 「とげの代わりにブナが育ち、茂みの代わりにギンバイカが育ちます。」 (イザヤ 35:1; 55:13)。「そして、オオカミは子羊と一緒に住み、ヒョウは子供と一緒に寝ます...そして小さな男の子が彼らを導きます。」 「わたしの聖なる山全体には、いかなる害も損害も与えられない」と主は言われます (イザヤ11:6,9)。

天国の大気中には痛みは存在しません。もう涙も、葬儀も、悲しみの表現もありません。「もはや死も悲しみも抗議もないだろう...以前のは過ぎ去ったからだ。」 (黙示録 21:4)。「そして、住民は誰も、私は病気だと言ってはならない。そこに住む人々は彼らの咎に飲み込まれるからである。」 (イザヤ 33:24)。

そこには、「主の手にある栄光の冠と、あなたの神の手の中にある王冠」のような、栄光に満ちた新しい地球の大都市、新しいエルサレムがあります (イザヤ書 4:3)。
62:3)。「彼の光は、最も貴重な石のようで、碧玉のように、輝く水晶のようでした。」 「諸国民はその光の中を歩み、地の王たちはその光の中に自分たちの栄光と名誉をもたらすだろう。」 (黙示録 21:11 および 24)。「主はこう言われます、「わたしはエルサレムで喜び、わたしの民で喜ぶ」。(イザヤ 65:19)。「見よ、神の幕屋は人々とともにある。神は彼らとともに住み、彼らは神の民となり、神ご自身が彼らとともにおられ、彼らの神となるからである。」 (黙示録21:3)。

神の都には「夜はない」。誰も休む必要も、休むことも望まないでしょう。神のご意志を行い、神の名を賛美することに疲れることはありません。私たちはいつも朝の清々しさを感じ、終わりからは遠く離れています。

「彼らにはランプや日光は必要ありません。主なる神が彼らに光を与えてくださるからです。」 (黙示録 22:5)。「太陽の光は、眩しくないほどではないものの、真昼の明るさを計り知れないほど上回る明るさになります。神と小羊の栄光が聖なる都を朽ちない光で満たします。救い出された人は、太陽の光を必要とせず、永遠の日の栄光の中を歩きます。」

「その中に神殿は見当たりませんでした。その神殿は全能の神である主と小羊だからです。」 (黙示録21:22)。「神の民は父と子との率直な交わりを維持する特権を持っています。」「今、私たちは鏡を通して謎を見つめています。」 (1コリント13:12)。

今日、私たちは自然の働きや人間との関わりの中に、あたかも鏡に映った神の姿を熟考します。しかしそのとき、私たちは間に暗いヴェールなしで、彼と顔とを合わせて見るでしょう。私たちは神の臨在の中において、神の御顔の栄光を見るでしょう。

そこでは、救われた者たちは、知られているとおりに知ることになる。神ご自身が魂に植え付けられた愛と同情は、そこで最も真実で最も穏やかな働きを見つけるでしょう。聖なる者たちとの純粹な交わり、祝福された天使たちと、小羊の血で衣を洗い白くしたあらゆる時代の信徒との調和のとれた社会生活、「全体」を結びつける神聖な絆。

天と地にある家族」(エペソ 3:15) - これらすべてが、救われた者の幸福を構成するのに役立ちます。

そこでは、不滅の精神が、飽くなき喜びとともに、創造力の驚異と愛を償う神秘について熟考することになるでしょう。そこには、私たちが神を忘れるよう誘惑する残酷で欺瞞的な敵は存在しません。あらゆる能力が発達し、あらゆる能力が向上します。知識を習得しても精神が疲れたり、エネルギーが消耗したりすることはありません。そこでは最も壮大な事業が進められ、最高の願望が実現し、最も崇高な野望が実現することができます。そして、到達すべき新たな高み、賞賛すべき新たな驚異、理解すべき新たな真実、心、魂、身体の力を刺激する新たな目標がまだ現れるでしょう。

宇宙のすべての宝は、神の救い出された人々の研究に開かれるでしょう。死すべき運命から解放された彼らは、遠い世界——人間の悲惨な光景を見て悲しみに震え、魂が救われた知らせを聞いて歓喜の歌があふれた世界——へたゆまぬ飛翔をするだろう。言葉では言い表せない喜びとともに、地球の子供たちは墮落していない存在の喜びと知恵を手に入れます。何世紀にもわたって得られた知識と知識の宝に参加してください

そして何世紀にもわたって神の御業について熟考しました。彼らは曇りのない視界で、太陽、星、星系がすべて定められた順序で神の御座の周りを巡回する創造の栄光を眺めます。最小のものから最大のものまで、あらゆるものに創造主の名前が記されており、あらゆるものに創造主の力の豊かさが現れています。

そして永遠の年月が経つにつれて、神とキリストについてのますます豊かで輝かしい啓示がもたらされるでしょう。知識が進歩するにつれて、愛、尊敬、幸福も増大します。神について学べば学ぶほど、神の人格に対する賞賛は大きくなります。イエスが救いの富とサタンとの大いなる戦いの驚くべき成果を彼らに明らかにされると、救い出された人々の心はより熱烈な献身で震え、より熱狂的な喜びで金の豎琴を弾くでしょう。そして何千、何千、何百万という声が団結して、力強い賛美の合唱団が広がります。

「そして、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもの、海にあるもの、そしてその中にあるすべてのものに聞きなさい、『玉座に座っておられる方と小羊に、こう言いなさい。』感謝と名譽と栄光と力を永遠に与えてください。」(黙示録 5:13)。

大規模な紛争は終結した。罪や罪人はもはや存在しません。宇宙全体が浄化されま。調和と幸福の単一のパルスが、広大な創造物を通して脈動します。万物を創造した神から、無限の宇宙のすべての領域に生命、光、喜びが流れ込みます。最も小さな原子から最も偉大な世界に至るまで、生物、無生物を問わず、すべてのものは、その驚くべき美しさと完璧な喜びにおいて、神は愛であると宣言します。

付録

一般的な注意事項

注1 — p. 53 - 西暦 321 年に公布されたコンスタンティノスの日曜法の本文は次のとおりです。

「すべての裁判官と市の住民、そしてすべての商業職業に従事する人々が、この尊い太陽の日に休息できますように。しかし、田舎に住んでいる人たちは、農業に取り組む完全かつ完全な自由を持っています。なぜなら、トウモロコシの種を蒔いたり、ブドウ畑を植えたりするのにこれほど適した日はないことがよくあるからです。適切な瞬間が過ぎて、人々が天から与えられた賜物を失うことのないように。」

非常に権威に満ちたこの法律に関して、ブリタニカ百科事典は簡潔に次のように述べています。ローマ帝国。彼の以前、そして彼の時代でも、彼らはユダヤ人の安息日と日曜日を守っていました。」日曜日に対する敬意の程度とその遵守方法に関して、モーシェイムは、コンスタンティヌスが定めた法律の結果、週の最初の日は「以前よりも厳粛に守られるようになった」と述べています。日曜日にはあらゆる種類の農作業が許可された。テイラー司教は、「原始キリスト教徒は主の日にあらゆる種類の仕事をする」と宣言しています²。同じ発言をモラーもしています。「また、彼ら[キリスト教徒]は、神の礼拝中ほど日常生活から離れてより多くの休息を取ることはなかった(当時の必然性であった)。」³コックスはこう言う: 彼の[コンスタンティヌス]の時代にも、その後も、この行事は、本質的にクリスマス、聖金曜日、またはその他の教会のお祭りに対応する制度と見なされていました。」

注2 — p. 54. 黙示録の第 12 章には、赤い大きな竜の象徴があります。この章の第 9 節では、この象徴は次のように説明されています。地球も、そして彼とともに、彼の天使たちも。」間違いなく、ドラゴンは主にサタンを表しています。しかし、大敵は地球上に直接現れるわけではありません。エージェントを通じて運営されます。それは、イエスが生まれるとすぐに、イエスを滅ぼそうとした邪悪な人々の姿でした。サタンが政府を完全にコントロールして自分の計画を実行できるようになると、その国はしばらくの間サタンの代表者になります。これはすべての偉大な異教国家に当てはまりました。例えば、エゼキエル書 28 章を参照してください。そこではサタンがティルス王によって代表されています。これは彼がこの政府を完全にコントロールすることに成功したために起こりました。キリスト教時代の最初の数世紀において、ローマはあらゆる異教国家の中でも福音に反対するサタンの主な代理人であったため、その代表がドラゴンで表現されています。

しかし、ローマ帝国の異教主義が正式なキリスト教に屈する時が来ました。それで、1 ページで述べたように、54、「異教は教皇制に取って代わられた。ドラゴンはその獣に「自分の力、王座、そして偉大な権威」を与えました。つまり、サタンは最初に異教を通して行ったのと同じように、教皇権を通して働き始めました。しかし、教皇権はドラゴンによって表されません。

神への対抗形態の変化を示すためには、別の象徴を導入する必要がある。教皇制が出現する前は、神の法に対するすべての反対は異教の形に集中していました。神は公然と反抗されていました。しかし、その後も、神との同盟を装って反対運動は続きましたが、教皇庁のすべての権力、王位、偉大な権威が教皇庁に与えられていたため、教皇庁は異教のローマと同じようにサタンの道具でした。ドラゴンによって。したがって、教皇はキリストの代表であると公言しているが、実際にはサタン、つまり反キリストの代表である。

教皇権を象徴する獣は黙示録 13 章に示されています。同じ預言の行に続いて、「別の獣」が「復活」するのが見られます（黙示録 13:11-14）。これは「最初の獣のすべての権威をその前で」、つまり彼の目の前で行使します。したがって、この他の獣も迫害力を持つに違いありません。そしてこれは、彼女が「ドラゴンのように話す」という事実に示されています。教皇庁はそのすべての権力をサタンから受けており、二角の獣も同じ権力を行使しています。彼女はサタンの直接の代理人にもなります。そして彼の悪魔的な性格は、偽りの奇跡によって獣の像の崇拜を強制する行為によってさらに示されます。「彼はまた、天からの火さえも人々の前で地に下るように、大きなしるしを行っています。彼は、獣の前で行うように与えられたしるしのせいで、地上に住む人々を誘惑します。」

最初の迫害力はドラゴンそのものによって表されます。異教ではサタンとの公然たる同盟と公然たる反抗があった。2番目の迫害力では、ドラゴンは仮面をかぶっていますが、その中でサタンの霊が働いており、ドラゴンが力を供給しています。3番目の力の追求では、ドラゴンの痕跡はまったくなくなり、子羊のような獣が現れます。しかし、彼女が話すとき、彼女のドラゴンの声は、外見の下に隠された悪魔の力を裏切り、2つの先代の力と同じ系統であることが証明されます。キリストとその純粋な宗教に反対するすべてにおいて、「悪魔やサタンと呼ばれる古代の蛇」、つまり「この世の神」がその動機となる力です。迫害する地上の権力者たちは、彼らの手中にある道具にすぎません。

注3 — p. 328. 読者が預言期間に関するウィリアム・ミラーの妥当な立場を理解できるように、特派員への返答として 1850 年 3 月にボストンのアドベント・ヘラルド紙に最初に掲載された次の抜粋を再掲します。

「プトレマイオスの正典によって、70週間という大いなる預言の期間が定められています。この正典では、アルタクセルクセスの7年目は紀元前457年とされています。そしてこの文書の正確さは、20回以上の日食の発生によって証明されています。この70週間は、エルサレムの回復に関する法令の発行から遡ります。アルタクセルクセスの7年目から20年目までは法令はなかった。7年目から始まる490年は、紀元前457年に始まり、西暦34年に終わります。20年目に始まる場合は、紀元前444年に始まり、西暦47年に終わる必要があります。大きな出来事は起こらなかったため、西暦47年にその閉鎖を記念したため、20年目から計算することはできません。したがって、アルタクセルクセスの7年目を考慮する必要があります。プトレマイオスの正典が不正確であることをまず証明することなく、紀元前457年の日付を変更することはできません。これを行うには、その精度が繰り返し証明されている膨大な数の日食が正しく計算されていなかったことを証明する必要があります。そして、そのような結論は年代記全体を変更し、時代の確立と時代の調整を完全に各夢想家のなすがままにし、そのため年表は古い以上の価値はなくなります。アルタクセルクセスの7年目が誤って修正されない限り、70週は西暦34年に終了しなければならぬので、その旨の証拠がなければ変更できないので、私たちは何を尋ねますか

この期間の終わりを示す証拠はあるでしょうか？使徒たちが異邦人に向かった時期は、これまで言及されてきたどの時期よりもはるかによくこの日付と一致しています。そして、西暦31年、先週半ばの磔刑は、簡単には無効にできない多くの証言によって裏付けられています。」

70 週間と 2,300 日の開始点は同じであるため、ミラーの計算は、2,300 年から紀元前の 457 年を差し引くことですぐに検証されます。このような：

$$\begin{array}{r} 2.300 \\ - 457 \\ \hline 1.843 \text{ dc} \end{array}$$

したがって、1843 年は 1844 年の春まで続くと考えられました。その理由を簡単に言うと、古代では、年は現在のように真冬の中ではなく、冬の最初の新月で始まりました。春分。そのため、2,300 日という期間は旧法で計算した1年に始まるため、終了後も同様の方法を採用する必要がありました。したがって、1843 年は冬ではなく春に終わると数えられました。

しかし、この 2,300 日を紀元前 457 年の初めから数えることはできません。出発点となるアルタクセルクセスの法令が発効したのはその年の秋だったからです。したがって、紀元前 457 年の秋から始まる 2,300 日は、西暦 1844 年の秋まで延長される必要があります。

この事実は当初、ミラー氏と彼の仲間たちには認識されていなかった。彼らはキリストの到来が1843年か1844年の春であることを期待していました。したがって、最初の失望と明らかな遅れです。他の聖書の証言と関連して、正しいタイミングが発見されたことが、1844 年の「真夜中の叫び」として知られる運動につながりました。そして今日に至るまで、預言的な計算では、2,300 日の終わりは 1844 年の秋とされています。 . は揺るぎないままです。

注 4 — p. 373 — アドベンチスト派が「空中で主に会うために」上昇するためのチュニックを作ったという話は、自分たちの主張を証明したい人々によってでっち上げられました。それは非常に巧みに宣伝されたため、多くの人々がそれを信じました。しかし、慎重な調査により、それが虚偽であることが判明しました。長年にわたり、これが起こったことを証明するために多額の報酬が提供されました。

しかし、成功せず。主の御姿を愛した人なら誰も、聖書の教えを知らず、そのために衣服を作る必要があるとは思いませんでした。使徒たちが主に会うために必要な唯一の衣服は、キリストの義の衣服です。「アポック」を参照してください。 19:8。

注5 — p. 374 — ジオ博士。ニューヨーク市立大学のヘブライ語および東洋文学の教授であるブッシュは、1844年3月にアドベント・ヘラルド紙に掲載されたウィリアム・ミラーに宛てた手紙の中で、彼の預言的時間の計算に関していくつかの重要な事実を認めました。と博士は言いました。

ブッシュ：

「また、預言的年代学の研究に多くの時間と注意を費やし、これらの偉大な時代の始まりと終わりの日付を決定するために多大な労力を費やしてきたあなたやあなたの友人たちにとっても、私の理解では、この意見に反対すべきではありません。これらが本当に預言書の中で聖霊によって与えられたものであるならば、それらは研究されるべき、そしておそらくは聖書の中で研究されるべきであるという意図で与えられたことに疑いの余地はありません。

ようやく完全に理解できました。そして、それらを敬虔に解明しようとする人は、愚かな思い込みで非難されるべきではありません... 一日を一年の預言の言葉として捉えることにおいて、私はあなたが最も健全な釈義とメディアの傑出した名前によって支持されていると信じています。アイザック・ニュートン卿、ニュートン司教、カービー、スコット、キース、その他多くの人々は、この点に関してはとっくの昔にあなたと同じ結論に達しています。彼らは皆、ダニエルとヨハネが言及した主要な期間が実際に世界のこの時期に終わることに同意しており、これらの著名な神学者の発言の中で非常に顕著に保持されているのと同じ見解を保持することで異端を納得させるのは奇妙な論理でしょう。」 「この分野の捜査におけるあなたの結果は、真実と義務という大きな利益に影響を与えるほど私には感銘を与えません。」 「私が理解しているところによると、あなたの間違いはあなたの年代ではなく別の方向にあります。」 「あなたは、これらの期間が終了したときに起こるはずの出来事の性質について完全に誤解しています。これが、彼の説明が攻撃的であると考えられる主な、そして正面の理由です...世界の前に起こる偉大な出来事は、物理的な大火災ではなく、その道徳的な再生です。キリストが語られた意味は、第四帝国の成立、オスマン帝国の権力と彼の王国の設立に関連したものであったとしても、疑いの余地はないかもしれないが、それにもかかわらず、証明されているのは、キリストの福音の力による霊的な到来であり、広範なほとぼりの中での霊的な到来である。神の御霊と、神の摂理の輝かしい統治において。」明らかに、ブッシュ博士は、世界の回心は 2,300 日の終わりを告げる出来事であると考えていました。

ミラーもブッシュも時間の問題については正しかったが、この出来事が偉大な時代の終わりに起こると誤解していた。

ミラーが教えた教義は彼が発案したものではありません。彼の預言的な説明で前進したすべての点は、個別に検討した場合、彼の反対者の一部によって認められました。その結果、彼のすべての見解を非難する人は誰もおらず、彼に反論しようとした人々は、ミラーとこれらの反論者の間にも同様に、彼ら自身の間にも大きな多様性があることに気づきました。彼らはミラーの理論に反論しなければならなかったばかりでなく、お互いの理論を正さなければならなかった。その場合、ミラーの見解を受け入れた人々にとって、彼の主張は確かにほとんど重要性を持たない可能性がある。

ミラーに対抗するために、宗教思想の指導者とみなされていた人々は、長年確立されてきたプロテスタント解釈の原則を放棄する用意があった。ポストン・レコーダー紙（正教会会衆）は、「ミラーの根拠のない理論の基礎となっている、これまで信頼していた大多数の同胞と共通する解釈に対する私たちの信仰が大きく揺らいでいるということを確認しなければならない」と述べた。

ミラーの立場に反論するという決意の中で、プロテスタント信仰の本質的な特徴である文字通りの解釈の原則を利用するのではなく、普遍主義者に加わって未定義の方法を採用し、それを精神化する準備ができていた人もいました。スチュアート教授とブッシュ教授が提示した議論に関して、ニューヨークの伝道者は次のように表現しました。「これらの見解の傾向は、本当の世界の終わり、最後の審判の日、または一般的な世界の終わりについての教義の聖書的証拠を破壊することです。」体の復活。

私たちは、この解釈のスタイルは、恐ろしいことに普遍主義に向かう傾向があると主張します。そして私たちはこの傾向を証明する準備ができています。」これは普遍主義者のハートフォード教授が教授について言ったことでもある。スチュアート：「彼はダニエルと黙示録の一般的な解釈に一切の妥協のない拒否権を置き、普遍主義者たちに加わって、それらの内容のほとんどには特別な参照があり、それらの数年後に起こった場面や出来事に特別な言及があり、またその成就もあったと主張しています。」

本が書かれています。このようにして、人気のある牧師たちは、聖書の証言を軽く観察するように何千人もの人々の心を準備させたのです。

注6 — p. 411 — 地球が聖域であるという考えは、創造主の当初の設計に従って、地球は浄化され、聖徒たちの永遠の居住地となるよう準備されると教える文書から導き出されました。アドベンチストは、ウェスリーらの教えに従ってこの問題を正確に理解しました。彼の心には、浄化が必要な他の住居やその他の事柄など考えられませんでした。私たちが知っている限り、地球や人間の居住地を聖域として支持する文書は、この立場を明らかに否定していました。私たちが見るように、それらは3つに限られています。

主よ、それはあなたの御手によって確立されました。」（出15:17）。時間や紙面を割いて本文の説明をする必要はありませんが、この本文が地球を聖域とする考えを否定していることを指摘するだけで、本目的には十分です。どのような意味を与えたいとしても、そのとき人々は聖域にではなく、地球にいたという教えです。そして、この詩は彼らが導入されようとしていた土地のその地域、すなわちパレスチナについて言及していると主張されている。このスタンスは2番目の意見では支持されません。

文章。

「ヨシュアは神の律法の書にこれらの言葉を書きました。彼は大きな石を取り、それを榿の木の下に置きました。そこは主の聖所[一部の翻訳では「聖所」と訳されています]でした。」（ヨシュア記24:26）。石と榿の木はパレスチナの、主の聖所の近くにありましたが、その中にはありませんでした。そして、もう1つのテキストはさらに限定的であり、ここで使用されている推論に対して同様に決定的です。

「彼は彼ら[彼の民]を聖地、彼の右手が獲得した山に導かれた。」（詩78:54）。この山はモリヤであり、その上にソロモンの神殿が建てられました。しかし、神のところに連れて行かれることは、「神の聖所の敷居に連れて行かれた」とみなされます。したがって、これらの文書は地球が聖域であることを証明しているのではなく、その反対です。

ヨシャファトの祈りは、この地と聖所の関係についての本当の考えを与えてくれます。アブラハムの友人よ？

彼らはそこに住み、あなたの御名のためにそこに聖所を建てました...」（II歴代誌20:7,8）。これは出エジプト記に与えられた命令に対応しています。25:8:「そして彼らはわたしを聖所として、わたしが彼らの間に住むようにするでしょう。」同じ本の中で、聖所、その建設、そして主による承認について詳しく説明されています。聖所を清めるプロセスはレビ記16章に説明されています。イスラエルの子らがカナンを占領した後、ソロモンは神殿を建てました。そこには聖なる場所と最も聖なる場所がありました。そしてシナイの荒野に建てられた移動聖所の器は神殿に移されました。その後、ここは聖域、つまり地上における神の栄光の住まいとなりました。

聖典から教会は神の神殿と呼ばれていると主張し、地上の聖域を教会の象徴であると理解する人もいました。しかし、聖書では、いくつかの関連で同じ図形が異なるオブジェクトを表すために使用されることは珍しいことではありません。聖書は、地上の聖所の聖所は「天にあるものの一種」と明確に教えています（ヘブル9:23）。「神の神殿」という表現は、天の聖所を指すこともあれば、教会を指すこともあります。その意味は、それぞれの場合において、文脈によって決定されなければなりません。

注7 — p. 429 — 1844年の失望からしばらくの間、ミラーを含むほとんどすべてのアドベンチスト派は、世界が最後の警告メッセージを受け取ったと信じていました。彼らは、自分たちが与えた「神の裁きの時が近づいている」というメッセージに対する信仰に関して、他の考えを持つことはほとんどできませんでした。

(黙示録14:6と7)。当然のことながら、彼らはこの宣言によって神権時代を終わらせるべきだと考えた。

しかし、福音の働きが終わったという考えは、助言や指導を受けたくない少数の狂信者を除いて、すぐに放棄されました。「保護観察の扉は閉ざされた」という見方を諦めていたあるクラスがこの決定に至ったのは、「神の裁きの時が近づいている」という宣言の後に他のメッセージが宣言されることを発見したためであり、最後の第三の天使は、「すべての国民、部族、言語、民族」に行くことになっていました。彼らは、裁きは主が来られる前に天国で行われることを学びました。義人の裁きは、イエスがまだ彼らの代弁者として父の御座の前に立っている間に完全に成就すること。救い主が来られると、聖徒たちには即座に永遠の命が与えられ、それは彼らが裁判を受けて無罪となったことを証明するものである。

3番目のメッセージに照らして、彼らは聖所とその浄化についての啓発も受け、それによって最も神聖な場所で達成される贖罪の日の典型的な働きが、自分たちが与えたメッセージを指し示していることを学びました。彼らは、神の神殿には2つの幕または扉があり(ヘブル9:3)、その時、そのうちの1つは閉じられ、もう1つは開いているのを見ました。彼らは熱烈な熱意と新たな希望を持ってこれらの真理を説教し、信仰によって第二の幕の内側にある最も聖なる場所への入場を求めるよう同胞に勧めた。そこには私たちの偉大な大祭司がすべての忠実な者たちの罪を消し去るために入った。現在に至るまでのアベルへの贈り物。

注8 — p. 435 — 黙示録14:6と7は、最初の天使のメッセージの宣言を予告しています。それから預言者はさらにこう続けます。「別の天使、二番目がついてきて、こう言いました。『大いなるバビロンは倒れた、倒れた…そして、もう一人の三番目の天使も彼らを追った。』」ここで「従う」と訳されている言葉は、このテキストのような構文では「一緒に行く」という意味です。リデルとスコットはこの言葉を「彼に従って、彼を追って、あるいは彼と一緒にいくために」と訳しました。

ロビンソンは「従うか、同行するか、同行するか」と言います。これはマルコ5章24節で使われているのと同じ言葉です。「イエスは彼と一緒に行かれました。大群衆がイエスに従い、押し寄せました。」この言葉はまた、請け戻された14万4,000人についても使われており、彼らについては、「彼らは小羊の行くところどこにでも従う者である」と言われています。どちらの場合も、捉えられているアイデアが、一緒に、一緒に行動するというものであることは明らかです。したがって、1 Cor.

(スマートマーク削除) 10:4では、イスラエルの子らについて、「彼らは同じ霊の泉から水を飲みました。彼らは彼らについて来た霊的な石から飲んだからです」、「従った」という言葉は同じギリシャ語から翻訳されており、欄外注記には「私は彼らと一緒に行きました」と書かれています。したがって、Apocのアイデアは次のとおりであることがわかります。14:8と9は、単に第二天使と第三天使がある時点で第一天使に従ったというだけでなく、彼らも彼と一緒にいったということです。この3つのメッセージはまさにトリプルメッセージに他なりません。登場順に3つだけあります。しかし、それが起こった後、それらは一緒に残り、分離することはできません。

注9 — p. 335年 — ローマの司教たちは非常に早くからすべての教会に服従を要求し始めた。復活祭をめぐる東と西の教会間の争いは、これを顕著に示しています。この紛争は2世紀に起こりました。モシェイムは次のように述べています。「今世紀のキリスト教徒はキリストの死と復活を記念する祭りを祝いました…この日はキリストの死の記念日として祝われました」

キリストの日は過越祭または復活祭と呼ばれていました。」ユダヤ人同様、キリスト教徒も「聖晚餐を記念して過ぎ越しの子羊を分かち合う神聖な祭り」を祝いました。小アジアのキリスト教徒は、ユダヤ人が過越祭を祝い、キリストが弟子たちとともに過越祭の子羊を食べたと伝えられるユダヤ人の最初の月の14日にこの祝日を祝いました。その3日後、復活を祝う祭りが祝われました。一方、西洋の教会は、復活祭の次の日曜日にキリストの復活を祝い、日曜日の前夜に過越の祭りを祝い、キリストの死の祝いと復活の祝いを結び付けました。

「その世紀[2世紀]の終わりに、ローマ司教ヴィクトールは、自らの法律と法令の権威と称して、アジアのキリスト教徒に、この点で西洋のキリスト教徒が守っていた規則に従うよう強制しようとした。

その結果...彼はアジアの高位聖職者に権威ある手紙を書き、復活祭の祝日を祝う時期に関して西洋のキリスト教徒の例に倣うよう命じました。アジア人はこの傲慢な要求に...意欲と決意を持って応え、祖先から受け継がれてきた習慣を決して放棄するつもりはないと述べた。その時、破門の雷鳴が鳴り響き始めた。アジアの司教たちの毅然とした対応に激怒したピクターは、彼らを同胞の名に値しないとみなし、ローマ教会とのあらゆる関係から排除して彼らとの関係を断絶した。」教皇篡奪のリハーサルだ。」

しかし、しばらくの間、ピクターの努力はほとんど役に立ちませんでした。彼の手紙には何の注意も払われず、アジア人は古代の習慣に従い続けました。しかし、教会がその目的を果たすために何世紀にもわたって支配してきた帝国権力の支持を得て、ローマは最終的に勝利した。ニカイア公会議は、「コンスタンティヌス大帝の厚意により、ローマの慣例に従い、復活祭の厳粛さをすべての場所で同じ日に行うよう命じた」2。この法令は「偉大な皇帝の権威」が決定的でした。

「時々現れる散在する少数の分裂主義者を除いて、誰もこの有名な会議の決議に敢えて反対しようとはしなかった。」

注10 — p. 565 — 今日、国政における教皇権の急速な影響ほど顕著な動きはなく、また人々と国家にとってこれほど重大な結果を伴うものはない。教皇制度は、地上の組織の中で最も影響力のある地位に急速に台頭しつつあります。ヨーロッパでは、例によって教皇に服従しているカトリック諸国は言うまでもないが、ビスマルク首相はドイツを実質的に教皇の命令に服従させた。イングランドは、アイルランドとの争いに伴う政務への教皇の介入を招いた。そしてロシア皇帝さえも教皇庁に申し入れをするつもりだった。レオ 13 世の即位の黄金聖年を記念して、イタリア王国とスウェーデンとノルウェーの連合王国を除くすべての国が、プロテスタントかカトリックかを問わず、ローマに認められた敬意を払ったという事実はよく知られています。

ローマの影響から距離を置くことが期待される国家があるとすれば、何よりもアメリカ合衆国がそうあるべきである。この国は憲法上、「宗教の自由な行使の確立または禁止」から免除されることを約束しているからである。しかし、この国もローマへの熱心な賠償金においては決して他の国に後れを取っているわけではない。教皇使節団がギボンズ枢機卿にローマの威厳を身に着けてアメリカに来たとき、政府の船がニューヨーク港から出航し、彼らを出迎え、名誉の場所にアメリカ国旗の代わりに教皇旗を掲げた。そして枢機卿の叙任式で

教皇王子の紫色のギボンズに、クリーブランド大統領は祝意の手紙を送った。改宗したカトリック教徒は、多数の上院議員や政治的代表者が子供たちをジョージタウンのイエズス会大学に通わせていると語る -

ワシントンの他の教育機関ではなく、首都の郊外の1つであり、このことは、この多数の上院議員と政治的代表者がカトリック教徒であること、またはローマが上院議員と政治的代表者に対してワシントンのすべての教育機関を合わせたよりも大きな影響力を持っていることを証明している。この事実を考慮すると、ローマが首都に国立大学を建設することを決定したのも不思議ではありません。

クリーブランド政権の内務長官LQCラマーは、同省内で他の宗派の信者よりもカトリック教徒に多くの役職を与えたとして非難された。彼の答えは、「ローマ・カトリック教徒が他の宗派の信者よりも多いことが知られているとすれば、それは彼らが他の宗派よりも多くを求めたからである」というものだった。そして同氏は、カトリック教会にはワシントンに「精力的で精力的な理事がおり、インディアンの間で宣教活動や教育奉仕活動の機会を積極的に求めている」と述べ、これを説明した。キリスト教同盟は、宗教的管理下にある政府所有の先住民学校の5分の4がローマ・カトリック教徒に与えられていると述べた。クリーブランド政権の内務省法務長官補佐、ザック氏。モンゴメリーはローマ・カトリック教徒であり、公立学校に対してローマ・カトリックの敵意を全面的に抱いており、これを実証するために自らの公式立場と影響力を利用することを躊躇しない。キャロル研究所在職中、彼は公立学校制度が異端で反親的で幸福を破壊するものであると公然と非難した。そして米国上院は、彼の司法次官補への任命が確認されたとき、公立学校に対する敵意を完全に認識した。ニューヨーカー・オブザーバー紙は、政府から援助を受けている唯一の公立病院はローマ・カトリック病院だと述べた。

1888年の共和党全国大会のニューヨーク代議員の一人であるワーナー・ミラー閣下に宛てた書簡の中で、オーストリアの新大使ジョン・ジェイ閣下は、ローマ・カトリック教徒は今でも「米国を国家権力の座に追い込む意欲について冷淡に議論している」と述べた。アイルランド人の投票を通じて、バチカンに完全に服従する国民。カナダのリンチ大司教はランドルフ・ヘンリー・スペンサー・チャーチル卿に宛てて次のように書いている（ニューヨーク州チャーチル紙、1887年4月2日）「アイルランド人の投票はアメリカにとって大きな要素だ」。「あなたの組織の力は日々増大しています。」

「彼らはすでに大統領選挙やその他の選挙で力の均衡を保っている。」

その後、**（インテリジェントマークは削除）**ジェイ氏は次のように述べた。「チェンバレン氏の漁業長官への任命発表の直後に、同氏が結んだいかなる条約も修正の対象にはならないと念を押した。駐イギリス大使のフェルプス氏が法務大臣に任命されるかもしれないという提案は、その指名が否決される可能性があるという即時の発表を引き起こした... 最近、米国上院(1888年2月16日)で次のように宣言された。「普通学校への一時的な支援を確立するための国家援助」の予算に関する討論で、上院議員がイエズス会の司祭からの手紙の原本を議長に見せたという。この書簡の中で、彼は国会議員に予算に反対し、予算を無効にするよう求め、予算を破壊するために国中であらゆるものを組織したと述べた。彼らは議会委員会でも成功しており、この予算は必然的に破棄されるだろうと。そして、この予算は上院を3回通過し、3回の異なる議会で可決され、そのたびに賛成票が増え、下院で繰り返し否決されたことも事実である。

下院で予算賛成多数であることを知っている人々による議会委員会。そして6年間、議会の立法は[こうして]妨げられた。」

カトリック教会はこの国の世俗報道を大幅に統制している。そして、ニューヨーク・エヴァンジェリスト紙、クリスチャン・アット・ワーク紙、クリスチャン・ユニオン紙、インディペンデント紙などの主要な「プロテスタント」宗教新聞はすべて、教皇制に敬意を表した。1888年3月29日の福音書記者はギボンズ枢機卿を「唯一の枢機卿」と認めている。独立派は教皇レオ13世の「統治が長くなり、そのリベラルな政策が成功することを祈っている」。職場のクリスチャンは彼を「聖なる父」と讃え、「キリスト教世界全体」の名において彼を「神への忠誠心と人類の福祉への熱意が、多くの過ちから自由であるのと同じくらい明らかな尊敬すべき人物」として称賛している。そして前任者たちの不寛容。」そして1888年1月26日のキリスト教同盟は、彼を「一時的な王子」および「最高教皇」として認めた。

注11 — p. 573 — これらの運動はさまざまな形とさまざまな方法で現れていますが、ほぼすべての形態を体現し、その目的を達成するためにあらゆる方法で活動している組織が国家改革協会です。この会議は、「連邦の7つの州からの11の異なるキリスト教宗派」を代表する会議に端を発しました。彼女は現在、「教会のすべての支部」、全米キリスト教禁酒同盟、禁酒党などの著名な男性の支持を得ている。彼女は、「キリスト教政府を樹立するため」、「全能の神を民政におけるあらゆる権威と権力の源として、主イエス・キリストを諸国民の総督として認め、その御旨を次のように明らかにする」憲法改正を提案した。地球の最高法則」。したがって、「すべてのキリスト教の法律、制度、および政府の慣習は、地球の基本法という否定できない基礎の上にある」としています。ボストンのパークストリート教会牧師デイビッド・グレッグ氏が発表したその提案の一つは、国家には「人々の良心に命令する権利」があるというものだ。キリスト教政治家が発表したもう一つの発言は、政府は「我々に属するすべての人にキリスト教道徳の法則を課さなければならない」というものだ。EB グレアム牧師が提示したもう1つの意見は、「聖書に反対する人たちが私たちの政府とそのキリスト教的特徴を理解していないのなら、悪魔の名の下に、そして悪魔のために、荒れ果てた荒れ果てた土地に行かしてください」。それを鎮圧し、無神論的で異教徒の考えに基づいた独自の政府を樹立し、その後、そこに留まることができるのであれば、死ぬまで留まらせてください。」

もう一つの説は、ジョナサン・エドワーズDDによって説明されており、7日目を守るユダヤ人とすべてのキリスト教徒は無神論者として分類されており、「この問題（国家改革）に関しては、「同じ生活をするのができない無神論者たちと、この問題（国家改革）に関して一党として扱われるべきである」というものだ。大陸」、国家キリスト教改革とともに。

国家改革統治論の確立が神権政治の制度化に他ならないことは、誰の目にも一目瞭然である。そして実際、これこそが彼らが確立しようと提案しているものなのです。彼らはこう言います、「このように統治された共和国は神のものであり、

そしてそれはイスラエル政府のような本物の神権政治なのです。」ウィラード女史が「政府における神」について書いた全国 WCTU の月評は次のように述べています。選挙権。" 1887年のWCTU全国大会での年次演説でウィラード夫人は次のように述べた：キリストの王国は「政治の入り口を通して法の王国に入らなければならない…（民主党と共和党の）両方に十分な温厚な人たちがいる」]。政府を乗っ取り、近い将来の党、それは神の党に違いないことを全国的に禁止するために...私たちは彼らに休息を与えないように天に祈ります...彼らが...休むまで...政治におけるキリストへの服従の誓い、そして

神を崇拝するために、大軍として選挙に行進してください…私は、クリスチャン女性たちの忍耐強くたゆまぬ努力が次世代の政治に反応し、神の党が最前線に立つと固く信じています。」人間が作った神権政治は、人間を神の代わりに置く政府の計画にすぎません。それはまさに教皇制度が設立された理論であり、まさに教皇制度そのものです。この政府における国家改革理論は、教皇制の生きたイメージを確立することにほかならない。これらの政党が教皇理論を擁護しているのと同様に、彼らがこの計画を成功させるために教皇庁の協力を確保しようと切望しているのは驚くべきことではない。『クリスチャン・ステイツマン』紙は国家改革協会の公式機関紙であり、同紙は1884年12月11日号の社説で次のように宣言した。ヨーロッパ諸国では、ローマ・カトリック教徒は国民的キリスト教の擁護者として認識されており、世俗主義のあらゆる提案に反対しています…彼らが政治的無神論の進歩に対する抵抗勢力と協力する気があるときはいつでも、私たちは喜んで彼らと手を組むつもりです。国民的キリスト教促進のための世界会議には、そう遠くない日中に開催が確保されなければならないが、多くの国がローマ・カトリック教徒だけで代表を務める可能性がある。」そして、同じ新聞の1881年8月31日号で、シルベスター・スコヴィル牧師は次のように述べています。

土曜日から日曜日までの宗教礼拝は、私たちの働く決意と、ローマ・カトリック国民とあらゆる面で協力する準備の両方を強化する必要があります。最初の申し出ではいくつかの拒否を受ける可能性があります、カトリック教会が他の教会と握手することに同意する時期はまだ来ていません。しかし、繰り返し前進し、彼らがどんな形であれ協力を喜んで受け入れる時が来ました。これは状況のニーズの1つです。道徳法の問題に関するキリスト教の2つの大きな部門間のつながりは、このような問題に関して私たちの最も優れた思想家と豊富な経験を持つ人々が考慮する価値のあるものです。」これと完全に一致しているのが、1885年の教皇レオ13世の回勅で、次のように命じています。「すべてのカトリック教徒は、各国の憲法とその法律が真の教会の原則に倣うよう全力を尽くすべきである。また、すべてのカトリック作家およびすべてのカトリック教徒は、ジャーナリストは、たとえ一瞬でも上記の処方箋を見失ってはなりません。」したがって、国家改革協会の目的はローマと一致しており、「喜んで手を組む」姿勢を示すことが期待される。そしてプロテスタントがローマの援助の有無に関わらず民権を掌握するたびに、教皇に対するイメージを高めることになるだろう。

注12 — p. 578年 — アビシニア[現在のエチオピア]には今でも聖書の安息日を守る人々がいる。ジョセフ・ヴォルフは、1838年付けの新聞でその国への訪問について語り、「ハマツィエン県のアビシニアンの間ではユダヤ人の安息日、つまり7日目が厳しく守られている」と述べた。

注13 — p.13 605,613 — 「封印」という言葉は聖書の中で、日常生活においてもさまざまな意味で使用されています。最も完全な辞書であるウェブスターによる定義は次のとおりです。安全、認証するもの。何を保証し、許可し、確認するのか。「印」と「しるし」という用語も彼によって提供されており、ローマ人への手紙4章11節のように、聖書の中で印章の同義語として使用されています。

ノアと結んだ契約では、それは安全または安定の証拠の意味で使用されます。雲の中の弓は、神がもはや存在しないことのしるしまたは記念として与えられました。

洪水によって地球が滅ぼされるでしょう(創世記9:13)。アブラハムとの契約では、割礼はしるしまたは記念でした。それは批准または確実なものでした。このしるしを持たなかった者は断ち切られたからである(創世記17:11、14)。この標識や記念碑は施設であり、儀式。ゲゼニウスは、原文に見られる言葉の定義として「記念」を挙げています。しかし、追悼、追悼という意味での記念碑は、目印やしるしです。

出エジプト記で。31:17 そしてエゼク語。20:12、20、主の安息日はしるしと呼ばれています。それは創造主の働きの記念であり、したがって創造主の力と神性のしるしです(ローマ2:30)。1:20)。それは割礼と同様に制度でもあります。しかし、違いがあります。割礼は肉体のしるしであるのに対し、安息日は心のしるしです。

「わたしの安息日を神聖なものとしなさい。それはわたしとあなたとの間のしるしとなり、わたしがあなたの神、主であることをあなたが知ることができるからです。」(エゼキエル書20:20)。

エゼク語で。9:4、原文で使われている言葉はマークと訳されています。ゲゼニオはそれを「マーク、サイン」だと言う。七十人訳聖書は、ローマ人への手紙4章11節の原文のギリシャ語で使用されているのと同じ言葉をこの本文に示しており、「しるし」と訳されています。したがって、サイン、マーク、シールという言葉は、聖書の中で同じものに適用されたり、同様の意味で使用されたりしています。

エゼク語。9:4と啓示。7章2節と3節には、神の僕たちの額に刻印またはしるしが置かれていると書かれています。どちらの聖句も、悪人に完全な滅びが訪れる時について言及しています。封印は差し迫った悪から神の民を守るための保護手段として彼らに課されます。しかし、「心」が性質や愛情を表すために使われるのと同様に、「額」は明らかに知性や精神を表す数字として使われます。額に印を押ししたり封印したりすることは、「心」に書き記すことと同じです(ヘブライ人への手紙10:16)。

安息日は神のしるしです。彼は神の律法の封印です(イザヤ8:16)。それは神の権威と力の象徴です。それが神からのものであることを知ることができるしるしであるため、額に付けると言われています。獣の崇拝者(黙示録13章)は、額または手に獣の刻印を受けると言われています。額が知性を表すように、手は力を表します(詩篇89:48「それとも、墓の手から自分の魂を救い出すためでしょうか?」参照)。強制的な礼拝は神には受け入れられません。彼の召使いたちは額にのみ封印されています。しかし、邪悪な勢力にはそれが受け入れられます。それはローマの階級社会によって常に望まれてきました。このマークの性質の証拠については、第25章を参照してください。神の印または印は神の安息日であり、獣の印または印はそれに真っ向から反対します。それは「太陽の日」の偽土曜日である。黙示録14:9-12によると、獣の刻印を受けない人は神の戒めを守ります。そして安息日は第四戒にあります。彼らは主の安息日を守ります。彼らには神の署名または印章が付いています。このしるしの重要性は、第四戒が律法の中で創造主と偽りの神を区別する唯一の戒めであるということからもわかります。ジャーと比較してください。10:10-12;使徒17:23と24。アポック。14:6、7などそして、それが守られれば神の民に迫害をもたらす神の律法の一部です。しかし、獣のしるしや印を押しつけようとする迫害者たちに神の怒りが下ったとき、彼らは安息日、つまり生ける神の封印の重要性を理解するでしょう。

主の聲が地を揺るがしたときに主が語られたことに背を向けた人は、主の聲が天と地を揺るがしたときに自分の致命的な間違いを告白するでしょう(ヘブル12:25、26、ヨエル3:9-16など)。ページも参照してください。この本の639と640。

伝記メモ

コロンバ福音は2世紀にイギリスに伝わりました。それ以来、4世紀にサッカット (聖パトリック) の働きにより、アイルランドに広まりました。西暦449年に異教徒のサクソン人がブリテン島に侵入したことにより、イングランドとスコットランドのキリスト教信仰はほぼ完全に根こそぎにされました。しかし、100年後、スカカットの努力のおかげで発展した教会の1つから来たアイルランド生まれのコロンバの働きによって、この教会は復活しました。コロンバは自国で福音を広めるために懸命に働いていたが、異教のピクト人 (スコットランドの古代住民) の状況に注目し、彼らの改宗を決意した。彼は何人かの仲間とともに、スコットランドの西海岸沖にある小さなアイオナ島に定住しました。そこには教会と大学が設立され、派遣された伝道者を通じてヨーロッパのかなりの地域に福音が宣べ伝えられました。

コロンバは裕福な家庭に生まれ、「高い身長と高貴な行動をしていました。彼は鋭い洞察力と素晴らしい人格の持ち主でした。他者に影響を与え、他者を形作る卓越した頭脳の一人です。」 「彼は神の言葉を熱烈に愛しており、それを読み、研究し、書き写すことに多くの時間を費やしました。彼はまた、何時間も祈りと、彼の世話を受けているコミュニティの指導に捧げ、キリスト教の知識だけでなく有益な職業を彼らに教えることに努めました。」

この男は個人的にスコットランドとイングランドで大成功を収め、アイルランドを何度も訪れました。彼の最後の日々は、彼がよく呼んでいた「心の島」であるアイオナで過ごしました。彼の人生の最後の場面はとても感動的でした。亡くなる前日、伝道所と彼の小さな農場を見下ろす丘の頂上に連れて行かれた彼は、それを注意深く調べ、両手を上げて神の祝福を祈りました。「小屋に戻った彼は、詩篇を書き写すという毎日の仕事を再開し、次のように書かれている場所に行きました。『主を求め者には、何の善にも欠けることはない』と彼は言いました」

「ここで、ページの最後でやめなければなりません。」朝の鐘が鳴ると、コロンバは教会に行きましたが、兄弟たちが楽しく過ごす前に、祭壇の前で気を失ってしまいました。彼は話すこともできず、もう一度右手を上げて彼らを祝福しようと力のない努力をし、顔から喜びがにじみ出て、永遠の休息をとりました。」

コロンバは、西暦521年にアイルランドのドニゴール州ガータンで生まれました。

西暦597年にスコットランドのアイオナで亡くなった。 W..

ワルデン人— 「ワルドー人」という名前は、西暦1150年頃にフランスのリヨンに住んでいた商人、ピーター ワルドーに由来するといわれています。聖書に導かれました。そして福音の真理を受け入れて、伝道者の働きに生涯を捧げました。彼は、自らの費用と監督のもと、新約聖書を当時南フランスの公用語であったロマンス語に翻訳することを模索し、宗教改革の大義に重要な貢献をしました。これは聖書を中世ヨーロッパの言語の一つに完全に翻訳した最初のものであり、一般に使用できる唯一のものでした。

しかし、ワルドー派またはヴォードワとして知られる初期キリスト教徒は、ワルドーの時代より前から存在していました。初期の時代から、使徒教会の信仰を支持し、ローマ主義者の圧制と腐敗に対して証言するキリスト教徒がいました。ミラノ教区 - ロンバルディア州の平原、ピエモンテのアルプス、

南フランスの諸州 - ローマ帝国の一時的な領域を超える範囲。そしてミラノが教皇の優位性を認めたのは11世紀半ばになってからであった。それでも多くの人々は高位聖職者の行動を拒否し、ピエモンテの山中でローマからの独立を維持した。南フランスでは、アルビジョア人も教皇による篡奪に対して同様の抵抗を示した。

13世紀にインノケンティウス3世のもとで始まった迫害は、アルビジョア人の絶滅をもたらした。そして何世紀にもわたってワルドー派に対する残忍な暴力が続きました。平和のために、多くの人々が最終的にはローマに対外的に従おうとしました。しかし宗教改革により、ピエモンテの渓谷の住民に新しい命が吹き込まれました。彼らは再び自分たちの信仰を証言し、迫害の火が再び燃え上がりました。多くの場合、兵士の軍隊が彼らに対して送られました。虐殺が続いた。最も恐ろしい拷問は、人間の姿をした悪魔によって、高齢者、無力な女性、幼い子供たちに対して行われました。1685年に征服は完了しました。生き残った谷の住民は全員、征服者の刑務所を満たすために引きずり込まれました。怠慢、残虐行為、疫病がその邪悪な働きを行っています。そして1年も経たないうちに、刑務所に入った1万4000人のうち、刑務所の扉が開いた時点で残っていたのはわずか3000人だった。彼らは追放を宣告され、冬の終わりに大勢が避難場所を求めてアルプスを越えました。何百人もの人々が亡くなり、ひどい苦しみの末、生き残った人々はジュネーブの門にたどり着きました。数年後、このグループの一部は山に戻り、荒れ果てた家を取り戻しました。

18世紀になると宗教迫害は沈静化しました。しかし、1799年時点でも、ワルドー派は依然として多くの民事上の制限を受けていました。彼らの子供たちはカトリック信仰の教育を受けるためにしばしば誘拐されたり、強制的に連れ去られたり、ローマの聖職者に十分の一を納めることを要求された。1848年になって初めて、彼らはピエモンテの統治者によってすべての社会的および政治的権利を享受することが認められました。しかし、教皇領では依然として教皇が最高の地位に君臨しており、その権力は信教の自由に対する恒久的な脅威であった。しかし1870年、教皇の要塞は崩壊した。新約聖書はローマのバチカンの窓の下で、ワルドー派の若者たちの手によって印刷されました。刑務所の1つは出版社に改装され、かつてイエスの殉教者の叫び声が響いていた拷問部屋には印刷機が設置され、そこから平和の福音が全地球に発信されました。

ジョン・ウィクリフ - ジョン・オブ・ウィクリフ、または「宗教改革以前の最も偉大な改革者」は、1324年頃にイギリスのヨークシャーにある同じ名前の村で生まれました。彼は1384年に亡くなりました。彼の人生の初期についてはほとんど知られていません。彼はオックスフォード大学で教育を受けましたが、この大学には当時でも約30,000人の学生が在籍していました。彼は生涯の終わり近くまでそこに住み続け、教え続けました。ウィクリフは、教皇による貢物の要求を拒否したエドワード3世の行動と、低地諸国の教皇公使に対処するよう任命された際の国民の権利を擁護することで、国王と国民の信頼と承認を得た。教皇とその協力者らの飽くなき敵意に追われ、最終的には大学から追放されたものの、国王によってラターワースの牧師館に任命され、そこで聖書を母語に翻訳することに専念した。「ウィクリフは学者、外交官、説教者として名声を博した。」「彼の素晴らしい知識と知的能力により、大学で支配的な影響力を発揮することができました。しかし、聖書はその規則であり基礎でした。彼の説教にはまさにそれが詰まっていた。彼の目的は常にキリストの真実を擁護することでした。」

ボヘミア州フシネツ出身のジョン・ハスは1378年生まれで、ウィクリフから16世紀の改革者たちに真理の灯火が渡された人々の中心人物でした。彼はプラハ大学で教育を受け、1402年に学長に就任しました。

彼はウィクリフほど明確に真理を理解していませんでした。英国の改革者が放棄した教皇の教義を維持した。しかし、彼は聖書の無謬性という偉大な基本的真理を擁護し、教会の悪徳を忠実に非難した。彼は自分の忠誠の証として自らの命を捨てました。1415年にコンスタンツで焼かれました。

「ハスは、その精神的な才能や能力の多さよりも、自分の信念を形成する率直さ、それを維持する粘り強さ、それを表現する利他的な熱意で注目に値しました。彼が世界の知的財産に何かを加えたとは言えません。しかし、彼の道徳的資本に対する彼の貢献は計り知れませんでした。」彼は当然のことながら、「誠実さと自由、光の中での進歩と成長のために命を捧げた最も勇敢な殉教者の一人」と宣言されました。

フスの献身的な友人であるプラハのジェロームは、ボヘミアの貴族の子孫でした。プラハ大学で長年過ごした後、フランス、ドイツ、イギリスの一流大学で研究を続け、それぞれの大学で神学博士の学位を取得しました。オックスフォードではウィクリフの著作に親しみ、熱心に研究しました。彼は次のように述べています。「これまで、私たちは科学の外皮しか見ていませんでした。ウィクリフは核を最初に開けたのです。」

彼はウィクリフの著作をボヘミア語に翻訳することに努め、故郷に戻るとハスとともに改革派の教義を広めた。ヘロニモは1365年頃に生まれ、1416年にコンスタンツ市で火刑に処されました。

マルティン・ルター —ザクセン州のチューリンゲンの森にある小さな町、アイスレーベンは、あらゆる改革者の中で最も偉大なルターの生誕の地です。1483年に生まれたルターは、すでに文字のルネサンスが始まり、人々の心が中世の昏迷から目覚めていたころ、神の御手のもとで人々を迷信の奴隷状態から解放した人でした。幼少期にマクデブルクとアイゼナハのマンズフェルト学校に送られたが、その時から鋭い知力を発揮した。アイゼナハでは、家々の前で歌い、キリストの大義のためにパンを求めていたところ、親切なウルスラ・コッタの注意を引き、彼女は彼を家に迎え入れ、その貧しい若い学生に献身的な母親の世話をした。1501年、ルターはエアフルト大学に入学しました。4年後、彼は学業を修道生活と引き換えにしました。彼は1507年に司祭に叙階され、翌年にはヴィッテンベルク大学の教授職に召されました。免罪符に反対する有名な論文は1517年に出版され、1521年に彼はワームの国会に出席しました。25年間にわたり、彼に対して禁制令が宣告された。しかし、ウィクリフと同じように、彼も安らかに息を引き取りました。彼の現役生活のほぼ全期間をヴィッテンベルクで過ごしたが、埋葬は故郷アイスレーベンで行われ、そこで現役の労働に疲れ果てて1546年2月18日に息を引き取った。

「ルターの肉体的な生涯は、ほとんどの場合、苦しみの連続でした。彼の体型は、若い頃はほっそりしていましたが、晩年にはいくらか太ってしまいました。しかし、その後の肖像画に見られる彼の顔の丸みは、たくましさの結果ではなく、浮腫みやすい傾向の結果であると言われています。

過去の困難による、組織内の体液の蓄積。彼の習慣は禁欲的だった。彼の声は大きくも強くもありませんでした。彼には稲妻はありましたが、雷鳴はなく、それを通して彼の言葉の強力な効果が生み出されました。」

「ルターの性格は彼の人生において非常に明白であるため、彼のセリフをたどる必要はほとんどありません。彼はとても世間知らずだったので、世界中が共謀して自分の欠点を隠蔽しようとしたら、彼自身の手でそれを暴露しただろう。彼の衝動性は、敵と真実の戦いを戦う、確固たる信念を持つ精力的な性質から生じたものでした。

容赦ない。彼は無私で、熱心で、正直で、危険に直面しても不屈で、優しさと人間性に満ちていました。ルターは人類の偉大な創造精神の一人であり、言葉と行為において力強く、人気の高い講演者として比類のない人物であり、庶民の一人でありながら、君主の中の君主、信仰の子、神の子でした。誰もが認めている。」

ルターの友人でありドイツ宗教改革の協力者であるフィリップ・メルンクトンは 1497 年に生まれました。彼はバーデン公国のブレッテンの軍師の息子であり、また、その功績で有名なロイヒリンの親戚であり弟子でもありました。ドイツではギリシャ語やヘブライ語の研究を紹介するのは難しい。メルンクトンの理解力の強さと明晰さにより、知識の習得が楽になりました。12歳でハイデルベルク大学に入学し、17歳で博士号を取得した。彼が自分の名前をシュヴァルツェルト（「黒い大地」）からギリシャ人名で同じ意味のメルンクトンに変更したのはこの頃である。当時、読み書きができる男性が自分の名前をドイツ語からラテン語やギリシャ語に翻訳することは珍しいことではありませんでした。21歳のとき、メルンクトンはヴィッテンベルク大学のギリシャ語教授に呼ばれ、その後ルターとの友情が始まり、それは偉大な改革者の死まで続くことになる。

メルンクトンはルターをエリヤと比較し、彼を「神の御霊に満ちた人」と呼んでいます。そしてルターは、自分をメルンクトンと比較して、次のように書いています。私は道路を作らなければならない荒っぽい開拓者ですが、フィリップ先生は、神が彼に賜物を与えてくださったように、そっと優しくやって来て、心を込めて種をまき、水をやりました。」アウグスブルク告白を書いたのはメルンクトンの論理的思考と絵入りのペンであり、その明快さ、力強さ、単純さ、優雅さは敵さえも認めた。メルンクトンは 1560 年にヴィッテンベルクで亡くなり、城の教会のルターの隣に埋葬されました。

ウルリッヒ・ツヴィングリオは、1484 年の元旦にスイス南西部の狭い渓谷にあるヴィルトハウスという小さな町で生まれました。彼はスイスの最初の改革者であり、彼の業績は大きな影響を与えました。チューリッヒは彼の最も重要な作品の舞台でした。彼は 1519 年にその都市に召され、1525 年に宗教改革は暴力もほとんど混乱もなくその地に定着しました。他の都市や地区は改革された信仰を受け入れたが、教皇領の州は武器をとって信教の自由の権利に反対した。その後の戦いで、改革軍の牧師として働いていたツヴィングリオは、1531年10月11日にカッペルの野原で倒れた。

「ツヴィングリオは著名な改革者であり、有能な学者であり、雄弁な説教者であり、愛国的な共和主義者であり、先見の明のある政治家でした。彼はルターやカルヴァンのような天才性や深さ、メルンクトンやオエコランパディウスのような博学には及ばなかったが、目的の誠実さと人格の誠実さ、英雄的な勇気と宗教改革の大義に対する献身という点では彼らに匹敵し、寛大さという点では彼らを上回った。」

ジョン・オエコランパディウス — オエコランパディウスは「バーゼルの改革者」と呼ばれていますが、その影響力の広さは彼をより広く称賛しています。彼の道徳的および知的特質において、彼はメルンクトンに驚くほど似ていました。「宗教改革の時代には、なすべき偉大な業があるときに、主が喜んで弟子たちを二人一組で送り出した例が数多くあります。ルターはメルンクトンと、カルヴァンはベザと、オエコランパディウスはツヴィングリオと並んで立っていた。」

オエコランパディウスは 1482 年に当時のヴュルテンベルク王国で生まれました。まず、彼はルターの著作を高く評価し、1522 年にバーゼルに招待されて、改革者としての活動を始めました。当時、この都市はスイスで最も重要な知的中心地であり、唯一の大学と最大の印刷会社の所在地でした。オエコランパディウスは間もなく議長に任命された。

大学;そして 1529 年にバーゼルで宗教改革が始まりました。オエコランパディウスは 1531 年にそこで亡くなりました。

ジャック・ルフェーブルは、傑出した学者であり、最初のフランス改革者の一人で、1450年頃に生まれ、1536年に亡くなりました。ルフェーブルは、1507年に聖書の研究を始めたとき、パリ大学の教授でした。彼は聖書のさまざまな部分についての注釈を出版し、1521年に彼の著作の1つが異端として非難されました。しかし、フランソワ1世とマーガレット王女の好意により、彼に対する訴訟は中止された。1523年、彼のフランス語版新約聖書が世に出ました。しかし、パリの戦いとマドリッドでのフランシスコの逮捕の後、教皇党は改革派に対して最も強力な措置を講じ、当時75歳だったルフェーブルはストラスブールに逃亡した。王は釈放されてすぐに連れ戻されました。そして旧約聖書の翻訳を出版した後、ナバラのマーガレットの邸宅であるネラックに隠遁し、そこで亡くなった。ルフェーブルは宗教改革の基本原則を受け入れ、著書の中でそれを維持しましたが、宗教改革が教会自体で起こることを望んでローマ教会とのつながりを維持しました。学者であり平和を愛する彼は、表立った紛争を避けました。しかし、真実を告白する勇気の欠如が、最後の数時間に激しい後悔を生んだ。彼は涙と激しい苦痛を感じながら叫んだ。私は公に宣言し証言すべき真実を隠しました。」彼は昼も夜も泣き続けましたが、最終的にはキリストに重荷を委ね、神の憐れみを信頼して亡くなりました。

スイスとフランスの宗教改革の最も著名な先駆者の一人であるギレルム・ファレルは、1489年にフランス東部のドーフィニー県で生まれました。彼は成功した献身的な学生であり、パリの大学の1つで教師になりました。改革派の信仰の原則を受け入れた彼は、その熱心な性質を全力で福音の働きに注ぎました。パリからの逃亡を余儀なくされた彼はバーゼルに居を構え、彼のエネルギーと無私無欲さに惹かれたツヴィングリやオエコランパディウスと温かい友情を築きましたが、彼らは彼の思慮深さの欠如に気づき、それが時に彼を軽率で無謀にさえ導くことになりました。しかし、保守的で博学な政治家であるエラスムスは、不屈の改革者を容認できず、その影響力によってファレルをバーゼルから退去させた。しかしながら、彼の長く実り豊かな生涯の大部分はスイスで費やされ、その仕事は大規模であると同時に危険を伴うものであり、その結果スイスのかなりの部分で改革派信仰が確立された。

1532年、ファレルはアングニャ溪谷で開催されたワルドー派教会会議で改革派の代表に任命された。彼はワルドー派の人々から高く評価され、彼らに強い影響を与えました。多くの浮き沈み、危険、苦しみを乗り越えながら、1565年にヌーシャテルで亡くなるまで宗教改革のために働き続けました。主催者というよりも宣教師に近い。神学者というよりも偶像破壊者だ。」ベザは、自分の説教において「彼はある種の崇高さにおいて優れていたため、震えずに彼の雷鳴を聞くことができた人は誰もいなかった」と述べています。

ジョン・カルバンーパリの北西約 110 km にあるピカルディのノワヨンで、カルバンは 1509 年に生まれました。彼は 1564 年にジュネーブ市で死去した。カルヴァンはすぐにローマ主義を放棄し、1534年にフランスからの逃亡を余儀なくされました。1536年に、彼は彼の著作の中で最も有名な『キリスト教宗教科書』をバーゼルで出版しました。同年、彼はジュネーブで仕事を始め、実質的に残りの人生をそこで過ごした。そこでは彼の統治と改革の手法が厳しく守られ、これが彼が残留に同意した条件であった。彼の政府の下では、あらゆる種類の不道徳が抑圧されました。

重大度。ヨーロッパ全土からジュネーブにやって来た難民に加えて、彼らとベザの演説の名声に惹かれて何千人もの学生がそこに群がった。

「カルヴィンの習慣は儉約的で質素なものでした。彼は非常に明晰な理解力、並外れた記憶力、そしていかなる反対者も打ち破ることができず、さまざまな主題に打ち負かされず、浮き沈みが揺らぐことのない目的の堅固さと柔軟性を備えていました。彼は自分の原則に対して非常に献身的で誠実でした。」いくつかの不寛容な行為が彼の公のキャリアに影を落としたが、私生活での彼の人柄には傷がなかった。説教者、作家、牧師、そしてヨーロッパ全土の宗教改革の指導者として、彼の仕事の範囲はほとんど信じられないほどです。彼の健康状態は悪かったが、亡くなる直前まで働き続けた。彼は貧しい者になることを選択し、すでにささやかな給料への追加を拒否し、貧しい人々に与える目的以外で贈り物を受け取ることを拒否しました。蓄財していると常に非難されていたが、死後、彼は200ドル強の信用を残した。彼の希望により、彼は華やかさもなく埋葬され、埋葬地を示す記念碑もありませんでした。

メンノ・シモンズ、「その使徒的精神と働きは、当然の評価には遠く及ばなかった改革者」。彼は1492年頃にオランダ北部で生まれました。彼は1559年にホルスタイン市で亡くなりました。

1536年、メノはローマ教会から脱退した。幼児洗礼に対する彼の反対は、彼をルーテル教会と改革派教会から引き離しました。狂信に断固として反対しつつ、教会に使徒時代の純粋さと素朴さを回復しようとしたのは、彼の熱心な努力でした。キリストへの個人的な信仰告白が洗礼の前提条件として要求され、生活の純粋さが教会会員の条件でした。

ハンス・タウセンは1494年にデンマークで生まれ、1561年に亡くなりました。1524年に改革派の教義を説き始めました。彼はデンマークにおける宗教改革の最初の説教者であり、ブーゲンハーゲンとともに同国における宗教改革の設立の中心人物でした。

オラフとローレンティウス・ペトリはスウェーデンのオレブロで生まれ、前者は1497年に、後者は1499年に生まれました。オラフは1552年にストックホルムで、ラウレンティウスは1573年にウプサラで亡くなりました。彼らは国王の保護の下、スウェーデンで宗教改革を確立する主要な手段でした。グスタフ・ヴァーサ。

16世紀の最も著名な英国改革者の一人であるウィリアム・ティンデルは1484年に生まれました。改革派の信仰を受け入れてすぐに、聖書を英語に翻訳したいという願望を表明し、逃れるために大陸への逃亡を余儀なくされました。迫害。新約聖書は1525年にケルンとヴォルムスで印刷されました。その後の歴史は不明瞭に包まれています。彼は旧約聖書の翻訳と印刷に携わり、宗教改革の教義を提示したいくつかの著作の出版に携わりました。国王や高位聖職者の使者を避けるために、彼は密かに仕事を進め、慎重に隠れ場所を隠したため、今日に至るまで全く知られていない。1534年、彼はアントワープに行くことを決意し、そこで逮捕されました。1536年10月6日、ブリュッセルから数キロ離れたヴィルヴォルデン城で絞殺され、火傷を負った。

ヘンリー8世が彼の処刑に直接関与したかどうかは証明されていないが、彼は改革者を救う努力をしなかった。殉教者の最後の祈りは「主よ、イングランド王の目を開いてください」でした。

聖書の翻訳者として、そしてイギリスにおける宗教改革の推進者としてのティンデルの仕事の価値は、これまで適切に評価されたことはありませんでした。地球の四方八方で英語聖書の祝福を受けている何百万人もの人々は、彼に感謝の義務を負っています。公認版はティンデル聖書に基づいています。そのとき、

彼の教えを実践し、英国宗教改革の多くの指導者の見解を形作り、彼らも自らの血で証言を封印しました。

「イングランドのジョン・ノックス」とも呼ばれるヒュー・ラティマーは、1470年に生まれました。彼の父親は王室の役人で、ラティマーがよく言っていたように、「息子たちを敬虔さと神への畏れをもって育てた」のです。ラティマーはケンブリッジで教育を受け、教皇の熱心な信奉者でしたが、殉教者ビルニーの尽力により宗教改革の教義を受け入れました。彼の親密な真実の提示はヘンリー 8 世の支持を集め、彼をウースター司教に推薦しました。しかし、他の教皇的誤りとともに、実体変化への信仰を押し付ける「六か条の血なまぐさい行為」の文章において、ラティマーは即座に自らの立場を放棄した。その後彼は逮捕され、塔に6年間拘留された。エドワード 6 世の王位継承で釈放された彼は司教職のオファーを受けたが、その榮譽を断固として辞退し、忠実に世俗の悪徳を叱責し続けた。

メアリー女王が王位に就くと、彼は再び塔に閉じ込められました。彼は80歳でしたが、高齢のため敬意が払われませんでした。ラティマーは信仰を堅持し、1555年にオックスフォードで火刑に処されました。彼は優れた学識の人ではありませんでしたが、スピーチは明晰で、勇気があり、正直で献身的で、上流階級と高位階級の両方の罪を非難していました。下層階級。

ニコラス・リドリーは、知識と敬虔さで知られるイギリスの司教であり殉教者で、1500年に生まれました。彼はケンブリッジのほか、フランスとオランダの最も著名な大学でも学びました。クランマーの好意でヘンリー王の従軍牧師に任命され、エドワードの治世にはロンドン司教となった。

メアリーの即位後、1555年にラティマーとともに火刑に処せられました。辞任しない限り発言の許可を拒否され、次のように述べました。「私の体に命の息吹がある限り、私は決して私の主イエス・キリストを否定しません。彼の真実。神は私とともにいてくださるでしょう。」

私生活では、リドリー司教は「敬虔さ、謙虚さ、節制と秩序の模範」として知られていました。フォックスは彼を「優れた資質に恵まれた男…敬虔に学び、今では間違いなく『いのちの書』に記されている人物」と呼んでいる。

スコットランドの改革者であるジョン・ノックスは1505年に生まれました。彼はグラスゴー大学で教育を受け、カトリックの司祭に叙階されました。ヒエロニムスとアウグスティヌスの著作と殉教者ウィシャートの影響により、彼はローマの束縛から解放され、福音の説教者になりました。セント・アンドリュース城がフランス軍に占領されたとき、ノックスは捕虜となりルーアンに連行され、そこでガレー船奴隷として19か月間奉仕した。釈放後、スコットランドの情勢により帰国が妨げられ、エドワード6世の従軍牧師としてイングランドでしばらく過ごした。メアリー女王が王位に就くと、フランクフルトとジュネーブに赴き、それぞれの場所で亡命英国人たちの牧師を務めた。彼はカルヴィンから高く評価され、その教義を擁護した。1559年にスコットランドに戻った彼は、ローマ主義者の影響により無法者で反逆者とみなされていたが、何も恐れることなく、1572年に亡くなるまで同国の宗教改革の確立に積極的に参加して活動を続けた。

『ピルグリム・プログレス』の世界的に有名な著者であるジョン・バニアンは、1628年にイギリスで生まれました。彼はエルストウの町のブリキ細工師の息子として生まれ、父親と同じ事業を続けるように教育を受けました。しかし、バニアンはなんとか基礎教育を取得し、宗教への傾倒はほとんどありませんでしたが、ほとんどのクラスメートより道徳的資質を備えていました。しばらくの間、彼は議会軍に勤務した。そこで彼の仲間の一人が滞在中に殺された

あなたの投稿。バニヤンは神の手が介入して自分の命を救ってくれたと感じた。したがって、彼は宗教的な事柄に注意を払うように導かれました。長く激しい葛藤の後、彼はキリストのうちに平安を見つけました。彼はバプテスト派に加わって説教者となり、しばらくしてバプテスト派の最も著名な講演者の一人となった。

1660年、王政復古を強制する圧政のもと、バニヤンはベッドフォード刑務所に投獄され、そこで12年間拘留された。家族を養うために、彼はブーツの靴ひもを作り始めましたが、信仰を犠牲にしたり、策略を講じて刑務所から逃げたりすることは断固として拒否しました。彼は説教を放棄することを条件に自由を与えられた。また、法律に違反し続けければ、英国に帰国すれば追放と死刑を宣告されるだろうとも告げられた。彼の答えは、「今日帰らせてくれたら、明日また説教するよ」でした。しかし、彼が獄中で書いた『ピルグリムズ・プログレス』は、英語が話される場所であればどこでも救いの真理を教えるため、迫害者たちは不満を抱いていた。この作品はキリスト教世界のあらゆる言語に翻訳されています。この本はお気に入りの本の一つとなり、聖書に次いで異邦人宣教師が仲間の僕たちのために翻訳しました。

釈放後、バニヤンは熱心に説教し成功を収め、「バニヤン司教」の称号を獲得しました。聖書は彼の常に相棒であり、彼の知恵の源であり、彼の天才性へのインスピレーションでした。真実のため、そして他人の利益のために自己否定することが彼の人生のルールでした。バニヤンさんは父と息子の和解を成功裏に終えて帰還する途中、嵐にさらされ、60歳で亡くなった。ジョン・バニヤンの物語で紹介されているもの以上に、知性と心の両方に対する聖書の変革力を示す教育の顕著な例はほとんどありません。

メソジズムの創始者であるジョン・ウェスレーは、1703年にイギリスのエプワースで生まれました。彼の父親は英国国教会の牧師でした。彼が最初に指導と教育を受けた彼の母親は、優れた知性と深い敬虔さを備えた女性で、規律がしっかりしていて賢明で、熟練した教師でした。彼はオックスフォードで学び、その博学さで有名な評判を得ました。有名な「クラブ・サント」がそこで結成されました。

ジョン・ウェスレーとチャールズ・ウェスレー、ウィズフィールドらは団結して献身的な実践を行い、貧しい人や病人の世話をし、刑務所を訪問した。

1725年、ウェスレーは牧師に叙階されました。インディアン人の改宗のためにジョージア州への伝道が計画され、「生活の装飾や快適さ、肉体的な苦行や瞑想的な生活を軽蔑することに慣れている聖職者たち」への呼びかけがなされたとき、ウェスレーはその呼びかけに応じた。2年間、彼は植民地に留まりましたが、任務の目的を達成する機会はありませんでした。ウェスレーは1738年にイギリスに戻りました。同年、彼は信仰義認の教義を完全に受け入れ、それを説教し始めました。彼は特に貧しい人々や無視された階級に福音を伝える活動に専念しました。教会が彼に門戸を閉ざしているのを見て、彼はついに公の場で説教することを決意した。「私は、野原でのこの奇妙な説教方法にほとんど納得できませんでした。(つい最近まで)礼儀と秩序に関するあらゆる点で非常に頑固な人生を送ってきたので、それがほとんど魂の救いだと思っていました」それが教会で行われなかったら、それは罪です。」1791年に亡くなるまで、彼はスコットランド、イングランド、アイルランドで活動を続けました。

彼は生涯を通じて40万キロ以上を旅し、4万回の説教を行ったほか、すべての教会や会衆を監督し、膨大な量の通信を処理し、膨大な著作を準備した。

現代の最も偉大な伝道者の一人であるジョージ・ウィザフィールドは、イギリスのグロスターで生まれました。オックスフォードで教育を受け、メソジストクラブの会員でもあった彼は、仲間の中で改宗を公言した最初の人物でした。ホワイトフィールドは

1736年に叙階され、特に通常の教会の礼拝では届かない多くの人々に利益をもたらすために働きました。彼は7回アメリカを訪れ、すべての主要都市で説教しました。彼はイングランド、スコットランド、アイルランドでも幅広く活動し、オランダにも旅行しました。ホイットフィールドは予定説の教義に関してウェスリーと意見が異なり、この分離によりカルビン主義者とウェスレアン・メソジストという2つの派閥が出現した。彼は1770年に56歳で亡くなった。そのとき彼は全米横断の7回目の伝道旅行の準備をしていた。

ホイットフィールドの説教の力はあらゆる階級に認められました。彼の話聞くために群衆が集まり、彼の作品に続いて大規模なリバイバルが起こりました。彼が1日に3〜4回説教することも珍しくありませんでした。死の前日、彼はマサチューセッツ州エクセターで大講堂を2時間停止させて講演した。ホワイトフィールドは翌日そこで説教するつもりでニューベリーポートに旅行した。彼が休もうと自分の部屋に行こうとしたとき、彼が滞在していたホールに群衆が集まっているのが見えました。彼は立ち止まり、シャンデリアのろうそくの火が消えるまで、階段の上から人々に話しかけました。翌朝、彼は死体となって発見された。

巡礼者の羊飼いであるジョン・ロビンソンは1575年にイギリスで生まれました。彼はケンブリッジで教育を受け、確立された教会の牧師になりました。しかし、王によって与えられた教会の優位性はキリストの教えに反していると感じ、彼は分離することを決意しました。この決断は彼にとって苦痛なものであり、その決断について彼は次のように述べた。「もし真実が『骨を焼き尽くす火のように』心の中になかったら、私は決してこの絆を断ち切ることはなかっただろう...しかし、その光が消えるのを耐えた。神は他の人々の間によって、私自身の恩知らずの心から奪われてしまったのです。」ロビンソンはオランダに避難した亡命者の一人で、ライデンのピルグリム教会の牧師となり、敬虔さと学識の両方で高く評価されました。巡礼者たちがアメリカに家を探すことを決めたとき、グループを分ける必要があると感じ、大多数が最後まで兄弟たちに従うためにライデンに残ったため、牧師に奉仕を求めました。しかし、ロビンソンは新世界への群れに同行してはなりません。彼は1625年にライデンで亡くなりました。

その後、彼の家族は亡命者に加わり、彼の子孫はニューイングランドの入植者の一人となった。

ロビンソンの人柄は、ピルグリムへの別れのスピーチに見ることができます。彼は、どの時代においても改革の希望を大切に数少ない人のうちの一人であり、信条や教会の教えに信仰を置くのではなく、神の言葉という永遠の基盤に信仰を置いた人でした。

ロジャー・ウィリアムズは、傑出した信教の自由の擁護者であり、1600年頃にウェールズで生まれました。彼は1683年にロードアイランドで亡くなりました。彼は英国国教会によって聖職者に叙階されました。しかしすぐに、彼自身が述べたように、「彼の良心が彼を国教会、その儀式、司教たちに反対させた」。彼は1631年にアメリカに行きましたが、ピューリタンの植民地に対してさえも過激で率直な発言をしたため、追放を宣告されました。これらの議員が作成した規則の1つは、次のようなものでした。「この管轄区域内で、…治安判事に対する法的権利または権限を拒否した場合…（十戒の）第1表の外部違反を罰する…。「追放または追放の刑に処せられる。」ウィリアムズは宗教問題における治安判事の管轄権を断固として否定したため、有罪となった。

彼は国家の平和と秩序にとって危険な先進的な思想を抱いているとして非難されていた。しかし、ロードアイランド州を建国した後、彼は完全な信教の自由が行き渡り、これらの教えが実践されるコミュニティを設立しました。

自由に許可されています。しかし、そこでもマサチューセッツ州と同様、生命、財産、民政が保証された。このようにして、ウィリアムズの教えは国家の平和と秩序にとって危険ではないことが証明された。彼に対する告発には根拠がなく、マサチューセッツ州からの追放は不当であると主張した。

「ウィリアムズの人格は、人間として、そしてクリスチャンとして、非の打ち所のないものでした。彼の最も頑固な敵対者でさえ、彼個人については大きな敬意を持って語った。ウィリアムズはインディアンの特別な友人でした。彼は彼らの言語を学び、彼らの土地への権利を尊重し守り、マサチューセッツ植民地や他の白人入植地が先住民の敵対行為に脅かされたとき、知識と主要な酋長たちとの友情によって差し迫った危険を回避することができた。」これがウィリアムズが受けた不当な扱いに報いる方法だった。

予言の有名な解説者であるギレルム・ミラーは、1782年にマサチューセッツ州ピッツフィールドで生まれました。しかし、生涯のほとんどを彼の自宅はニューヨーク州ローハンプトンにあり、1849年にそこで亡くなりました。革命軍の将校だったミラーは、1812年戦争に陸軍大尉として従軍しました。彼は軍隊に入る前から理神論的な感情を吸収していたが、その誠実な性格ゆえに収容所での放蕩行為が非常に不快になり、戦争が終わった後は喜んで軍人としてのキャリアを放棄した。

理神論が未来の存在を否定するという事実により、ミラーは聖書を靈感を受けたものとして受け入れなかったものの、その教義に完全に同意することができなかった。しかし、聖書が現在の神学の教えを啓示の証人として受け入れるのではなく、独自の解釈者であることを発見すると、2つの困難はすべて解消されました。キリストの個人的な到来が近いという結論に達した1818年から、彼は13年間この問題について熱心に調査を続けたが、自分の見解を表明したのは個人的にのみであった。

彼は1831年に公の場での講演を開始し、それから1844年まで、500の異なる都市で4,000回の説教を行いました。約200人の牧師がミラーの主張を受け入れ、500人の説教者が彼の宣言に参加した。ほぼ1000の地域に、約5万人からなる信者の会衆が設立された。ミラーの働きだけでも6,000人以上の魂がキリストに改宗しましたが、その数はおそらくもっと多いでしょう。改宗者のうち、約700人は彼の講義に参加する前は公に無神論者であった。

再臨の正確な時期に関しては間違っていました。主の再臨の方法と近さに関しては彼の信念は揺るぎませんでした。1845年に彼は次のように書いています。「私はこれらの見解に対する反対意見を公平に検討しましたが、私の意見では私の立場を無効にする聖書によって裏付けられた議論は存在しないことがわかりました。したがって、私は良心的に主の再臨を待たずにはいられず、機会があるうちにその偉大な出来事に備えるよう同胞に勧める。」しかし、彼は自分の使命がほぼ終わったと感じていました。「真実を求めて戦うのは若い兄弟たちに任せる」とミラー氏は語った。長年、私は一人で働いていました。神は今、私の代わりとなる人たちを立てられました。」しかし、彼は年齢の病気が許す限り、時々説教を続けました。ミラーは、自分が宣言した教義を完全に信じて亡くなりました。

有名なヘブライ語宣教師であり旅行者であるジョセフ・ヴォルフは、1795年にドイツのバイエルン州で生まれました。「言語的才能、鋭敏な知覚力、エネルギー的な気質、そして優れた思慮深さに恵まれた彼は、幼い頃からヨーロッパ数カ国の著名な男性と関係を持っていました。1812年、ヴォルフはプラハ市でベネディクト会の修道士から洗礼を受けました。ローマのあるべき場所

宣教師として教育を受けた彼は、ユダヤ人とイスラム教徒に福音を伝えることを目的として、東洋言語の研究に専念しました。彼は教皇ピウス7世の好意を享受していましたが、彼が何度か表明したリベラルな見解が異端審問の目に疑われ、ヴォルフは大学と永遠の都を去らなければなりません。イギリスでは、彼はすぐに友達を作りました。ロンドン・ユダヤ人協会の創設者らは、彼の伝道活動に対する特別な適性を認識し、ケンブリッジ大学への入学を奨励し、そこで東洋の研究を続けた。

「ヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカの一部での旅行者としての冒険的な生活の中で、ヴォルフは王や王子たち、またあらゆる教会階級の学識ある人々と知り合いました。最大の危険に直面しても、彼は不屈の勇気と素晴らしい精神力を示しました。ヴォルフはどこに行っても説教し、時には母国語で、時には異なる言語で説教し、どこに行っても、自分の使命を推進するために最も著名な男女の関心を引く方法を知っていました。」仕事と旅先の天候に疲れ果てた彼は、英国教区の牧師として晩年を過ごし、1862年に亡くなった。

ジョン アルバート ベンゲルは1687年にヴュルテンブルクで生まれ、1751年に亡くなりました。彼は鋭い洞察力、幅広い知識、そして確固たる敬虔さを持った人物として世界的に認められています。彼は、聖書に関して非常に価値のある無数の本の著者であり、批判的でも釈義的でもあり、それらは今でも聖書研究者の宝物の一部となっています。ベンゲルの解釈規則は、「聖書には何も付け加えず、聖書からすべてを抽出し、聖書に書かれていることは何も隠さない」というものでした。

ルイ・ゴーセンは1790年に生まれ、ジュネーブ出身で改革派教会の牧師でした。ガウセンは福音主義キリスト教の誠実な支持者としてスイス中に知られていました。彼はジャン・メルル・ドービニ博士やその他の人々と交流し、ジュネーブに浸透した合理主義哲学を聖書信仰に置き換えようと努めました。彼は激しい反対に遭い、最終的には組織によって出場停止処分を受けた。1834年、彼は新しく設立されたジュネーブ福音学校の神学長に就任し、聖書に関するいくつかの著作の著者となった。彼の死は1863年でした。

ピウス9世と無謬性の布告 — グラッドストンの論文「バチカン布告」から、教皇ピウス9世による無謬性の布告の公布のナレーションを要約します。バチカン公会議は、無数の鐘が鳴り響く中、厳かに開会されました。1869年12月8日、バチカン大聖堂のサンアンジェロの聖典。1870年7月18日の第4回公会議で、教皇の無謬性に関する法令が公布された。この文書は、すべての教会に対するローマ法王の権限を確認するだけでなく、ローマ教皇に「牧師も国民も含めたすべてのカトリック教徒は、信仰と道徳だけでなく規律と統治の問題においても従わなければならない即時管轄権を与える」としている。教皇は、「信仰と道徳に関する問題について、キリスト教世界に対する公式の帰属として」語る際、法王は絶対的であり、その決定は最終的であり、取り消すことはできないと宣言した。

この教皇に対する最高の冒流行為の直後、教皇のこの世の主権は崩壊した。無謬宣言が公布されてから6週間後の1870年9月後半、「教皇のこの世の権力を主に支えていたフランス帝国は、ナポレオン3世の降伏により、セダンの古いユグノー要塞で崩壊しました。プロテスタントのロシアのウィリアム王に贈りました。そして9月20日、イタリア軍はヴィクトリオ・エマヌエーレ国王の名において、将来の統一イタリアの首都となるローマを占領した。」ピウス9世がローマの人々の前に現れて、彼の宣言をしたあの日以来、

無謬性のため、彼は二度と公の場に姿を現すことはなかった。この世の権力を剥奪され、国家権力に服従することを望まなかったこの誇り高きローマ教皇は、1878年に亡くなるまでバチカン宮殿の自己囚人のままでした。